岐阜県文化財保護センター調査報告書　第78集

金ヶ崎遺跡・青木横穴墓

2003

財団法人　岐阜県文化財保護センター

かながさきいせき　あおきおうけつぼ

金ヶ崎遺跡・青木横穴墓

2003

財団法人　岐阜県文化財保護センター

金ヶ崎遺跡・青木横穴墓遠景

金ヶ崎遺跡全景

金ヶ崎遺跡５号墳出土　多孔銅鏃

金ヶ崎遺跡５号墳出土　鉢

序

西に木曽川、北・東・南を丘陵地に囲まれ、東から西に可児川が流れる御嵩町は、豊かな自然の中に多くの文化財を残す町です。

このたび、国土交通省による東海環状自動車道（八百津～笠原）建設工事に伴い、可児郡御嵩町比衣に所在する金ヶ崎遺跡の一部と青木横穴墓の発掘調査を実施しました。

金ヶ崎遺跡は、発掘調査前まで古墳時代後期の古墳群であると考えられていました。ところが今回の調査によって、弥生時代後半から古墳時代初頭にかけての住居群と方形周溝墓群・古墳時代中期の古墳・古墳時代後半の住居群を確認することができました。さらに、方形周溝墓から出土した多孔銅鏃が、東海地方を中心に全国で約30例、岐阜県では4例目となる貴重な出土遺物であることがわかりました。また南東斜面には、中近世墓が100基以上も存在することを確認し、短期間に存在した遺跡ではなく、長い間人間の生活域であった複合遺跡であることがわかりました。金ヶ崎遺跡のすぐ北に位置する青木横穴墓も、6世紀後半から7世紀前半につくられた遺跡であることがわかりました。

包含層から出土した旧石器時代の遺物も含め、本報告書が埋蔵文化財に対する認識を深めると共に、当地の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び出土品の整理・報告書作成にあたりまして、多大な御支援・御協力をいただいた関係諸機関並びに関係者各位、御嵩町教育委員会、地元地区の皆様に深く感謝申しあげます。

平成15年3月

財団法人　岐阜県文化財保護センター
理事長　服　部　卓　郎

例　　言

1　本書は、岐阜県可児郡御嵩町比依に所在する金ヶ崎遺跡（21521－09630他）・青木横穴墓（21521－07360）の発掘調査報告書である。

2　本調査は、東海環状自動車道（八百津～笠原）建設事業に伴うもので、国土交通省中部地方整備局から岐阜県が委託を受けた。発掘調査及び整理作業は財団法人岐阜県文化財保護センターが実施した。

3　発掘調査は、八賀晋三重大学名誉教授の指導のもとに、平成13年度に実施した。

4　発掘調査及び整理作業の担当などは本書第１章第２節に一括掲載した。

5　本書の執筆分担は目次に示した。また、編集は早野が行った。

6　発掘調査における作業員雇用、現場管理、掘削などの業務と、遺物の洗浄・注記は、㈱小池土木に委託して行った。

7　遺物の写真撮影は、アートフォト右文に委託して行った。

8　地形測量・空中写真測量は、㈱イビソクに委託して行った。

9　遺物の分析・保存処理については次の業者に委託して行った。その結果は第７章に掲載した。

・方形周溝墓出土多孔銅鏃の保存処理……㈶元興寺文化財研究所

・方形周溝墓出土多孔銅鏃の分析……（独立行政法人）東京文化財研究所

・方形周溝墓、竪穴住居跡、中近世墓出土金属製品の保存処理……奈良文化財技術協会

・方形周溝墓出土土器の分析……㈱パレオ・ラボ

10　発掘調査及び報告書の作成にあたって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称・肩書き略、五十音順）

赤澤徳明　赤塚次郎　安藤英男　小笠原好彦　栗谷本真　齋藤基生　鈴木昭美　鈴木元
高木宏和　高野陽子　長瀬治義　早野浩二　藤澤良祐　藤村俊　古木辰夫　広瀬和雄
吉田正人　和気清章　渡辺博人　御嵩町教育委員会　比衣地区自治会

11　本文中の方位は、国土座標第Ⅶ系の座標北を示している。

12　土層及び土器類の色調は、小川正忠・竹原秀雄1999・2001『新版　標準土色帳』（日本色研事業株式会社）による。

13　遺構の略号は、下記のものを用いた。

柵列……ＳＡ　竪穴住居跡……ＳＢ　方形周溝墓、古墳……ＳＸ　溝……ＳＤ
掘立柱建物跡……ＳＢ　土坑……ＳＫ　中近世墓……ＳＺ　柱穴、小穴……Ｐ

14　遺構番号は、原則として発掘調査時のものを用いた。遺構番号は、01番から始まり同じ番号でも複数の遺構が存在するものについては、番号の後ろに枝番をアルファベットでつけ加えた。

15　遺物番号は、遺構を優先して竪穴住居跡・掘立柱建物跡→方形周溝墓・古墳→溝→土抗→中近世墓→小穴→包含層の順に付した。土器を１番、金属製品を301番、石器・石製品を401番から付した。青木横穴墓は、すべての遺物を通して１番から付した。同一遺物については、枝番を付した。

16　調査記録及び出土品は、財団法人岐阜県文化財保護センターで保管している。

目　　次

序
例言
目次
第１章　調査の概要 ……（早野）　1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　発掘調査の経過と方法 …… 5
第２章　遺跡の立地と環境 ……（早野）　9
　第１節　遺跡周辺の立地・環境 …… 9
　第２節　周辺の遺跡 …… 9
第３章　基本層序と遺構・遺物の概要 …… 12
　第１節　基本層序 ……（早野）　12
　第２節　遺構・遺物の概要 ……（早野・鈴木）　14
第４章　金ヶ崎遺跡の遺構と遺物 ……（早野・鈴木）　26
　第１節　竪穴住居跡・掘立柱建物跡・柵列と遺物 …… 26
　第２節　方形周溝墓・古墳と遺物 …… 85
　第３節　溝・土抗と遺物 ……131
　第４節　中近世墓と遺物 ……141
　第５節　その他の遺構と遺物 ……163
第５章　金ヶ崎遺跡包含層出土遺物 ……（早野・鈴木）163
第６章　青木横穴墓と遺物 ……（成瀬）174
　第１節　位置と調査前の状況 ……174
　第２節　調査の経過と方法 ……174
　第３節　横穴墓の状況 ……174
　第４節　遺物の出土状況 ……179
　第５節　出土遺物 ……179
　第６節　まとめ ……181
第７章　自然科学分析 ……182
　第１節　金ヶ崎遺跡５号墳出土銅鏃の自然科学調査 ……（財団法人　元興寺文化財研究所）182
　　（独立行政法人　東京文化財研究所）
　第２節　金ヶ崎遺跡５号墳出土土器の赤色顔料分析 ……（パレオ・ラボ　小村美代子）187
第８章　考察 ……191
　第１節　金ヶ崎遺跡における方形周溝墓の墳丘築成について ……（早野）191
　第２節　金ヶ崎遺跡の方形周溝墓と周辺遺跡の関係について ……（早野）196
　第３節　金ヶ崎遺跡の竪穴住居跡・掘立柱建物跡について ……（早野）199
　第４節　金ヶ崎遺跡中近世墓群と出土人骨について ……（早野）201
　第５節　金ヶ崎遺跡出土石器の考察 ……（鈴木）203
遺構一覧表・遺物観察表 ……206
参考文献 ……225
図版

巻頭カラー図版目次

巻頭カラー図版１　南から金ヶ崎遺跡・青木横穴墓を望む　金ヶ崎遺跡上空
巻頭カラー図版２　金ヶ崎遺跡５号墳出土多孔銅鏃・鉢

挿　図　目　次

図１　金ヶ崎遺跡・青木横穴墓位置図 …… 1
図２　金ヶ崎遺跡試掘確認調査地点図 …… 1
図３　金ヶ崎遺跡周辺図 …… 2
図４　金ヶ崎遺跡グリッド設定図 …… 3
図５　調査前地形測量図 …… 4
図６　周辺遺跡分布図 …… 10
図７　金ヶ崎遺跡基本層序(模式図) …… 13
図８　金ヶ崎遺跡グリッド設定図(遺構) …… 17
図９　金ヶ崎遺跡遺構配置図 …… 18
図10　打製石斧の折損部位 …… 24
図11　ＳＢ01・02周辺地形図 …… 27
図12　ＳＢ01実測図 …… 28
図13　ＳＢ01出土遺物実測図 …… 29
図14　ＳＢ02実測図 …… 30
図15　ＳＢ02出土遺物実測図 …… 31
図16　ＳＢ06実測図 …… 32
図17　ＳＢ06出土遺物実測図 …… 32
図18　ＳＢ23実測図 …… 33
図19　ＳＢ23出土遺物実測図 …… 33
図20　ＳＢ28実測図 …… 34
図21　ＳＢ28出土遺物実測図 …… 35
図22　ＳＢ15・16Ａ・16Ｂ周辺地形図 …… 35
図23　ＳＢ15実測図 …… 36
図24　ＳＢ15出土遺物実測図 …… 36
図25　ＳＢ16Ａ・16Ｂ実測図 …… 38
図26　ＳＢ16Ｂ出土遺物実測図(１) …… 39
図27　ＳＢ16Ｂ出土遺物実測図(２) …… 41
図28　ＳＢ18実測図 …… 42
図29　ＳＢ18出土遺物実測図 …… 42
図30　ＳＢ07・27周辺地形図 …… 43
図31　ＳＢ07実測図 …… 44
図32　ＳＢ07出土遺物実測図 …… 44
図33　ＳＢ27実測図 …… 45
図34　ＳＢ09・10周辺地形図 …… 46
図35　ＳＢ08実測図 …… 48
図36　ＳＢ08出土遺物実測図 …… 49
図37　ＳＢ09実測図 …… 50
図38　ＳＢ10実測図　遺物出土状況 …… 51
図39　ＳＢ10出土遺物実測図(１) …… 52
図40　ＳＢ10出土遺物実測図(２) …… 53
図41　ＳＢ11実測図 …… 54
図42　ＳＢ12Ａ・12Ｂ実測図 …… 55
図43　ＳＢ12Ａ出土遺物実測図 …… 56
図44　ＳＢ12Ｂ出土遺物実測図 …… 56
図45　ＳＢ13Ａ・13Ｂ・13Ｃ実測図 …… 58
図46　ＳＢ13Ａ・13Ｂ出土遺物実測図 …… 59
図47　ＳＢ13Ｃ出土遺物実測図 …… 59
図48　ＳＢ14Ａ・14Ｂ実測図 …… 61
図49　ＳＢ14Ａ出土遺物実測図 …… 61
図50　ＳＢ22実測図 …… 62
図51　ＳＢ22出土遺物実測図 …… 63
図52　ＳＢ24・25Ａ・25Ｂ実測図 …… 65
図53　ＳＢ25Ａ出土遺物実測図 …… 65
図54　ＳＢ29実測図
　　(エレベーション模式図) …… 67
図55　ＳＢ29と須恵器集中区の位置 …… 67

図56　ＳＢ29関連遺物実測図 …… 68
図57　ＳＢ17周辺地形図 …… 70
図58　ＳＢ19実測図 …… 70
図59　ＳＢ19出土遺物実測図 …… 71
図60　ＳＢ20実測図 …… 72
図61　ＳＢ20出土遺物実測図 …… 72
図62　ＳＢ21実測図 …… 73
図63　ＳＢ21出土遺物実測図 …… 74
図64　ＳＢ17実測図（ＳＤ21Ａを伴う） …… 75
図65　ＳＢ17出土遺物実測図 …… 76
図66　ＳＢ03・04・05周辺地形図 …… 76
図67　ＳＢ03実測図 …… 77
図68　ＳＢ03出土遺物実測図 …… 78
図69　ＳＢ04実測図 …… 79
図70　ＳＢ05実測図 …… 80
図71　ＳＡ01・02実測図 …… 81
図72　ＳＢ26周辺地形図 …… 81
図73　ＳＢ26実測図 …… 83
図74　ＳＡ04実測図 …… 84
図75　方形周溝墓・古墳配置図 …… 86
図76　ＳＸ01盗掘坑断面図 …… 87・88
図77　ＳＸ01実測図 …… 89・90
図78　ＳＸ01出土遺物実測図 …… 92
図79　ＳＸ02実測図 …… 93・94
図80　ＳＸ02主体部実測図 …… 96
図81　ＳＸ02出土遺物実測図 …… 97
図82　ＳＸ03実測図（ＳＸ06を一部含む）… 99・100
図83　ＳＸ03墳丘断面図 ……101・102
図84　ＳＸ03主体部実測図 ……103
図85　ＳＸ03出土遺物実測図（１） ……104
図86　ＳＸ03出土遺物実測図（２） ……105
図87　ＳＸ03出土遺物実測図（３） ……106
図88　ＳＸ05実測図 ……109・110
図89　ＳＸ05墳丘断面図 ……111
図90　ＳＸ05主体部実測図 ……112
図91　ＳＸ05遺物出土状況 ……112
図92　ＳＸ05出土遺物実測図（１） ……113
図93　ＳＸ05出土遺物実測図（２） ……114
図94　ＳＸ09実測図 ……115・116
図95　ＳＸ09土坑墓実測図 ……118
図96　ＳＸ09出土遺物実測図 ……119
図97　ＳＸ11実測図 ……121
図98　ＳＸ12実測図 ……123
図99　ＳＸ12出土遺物実測図 ……124
図100　ＳＸ13実測図 ……125
図101　ＳＸ15実測図 ……126
図102　ＳＸ10実測図 ……127
図103　ＳＸ10出土遺物実測図 ……129
図104　ＳＤ15・16実測図 ……130
図105　ＳＤ18・ＳＫ14・16実測図 ……132
図106　ＳＤ21Ｂ・22・23・ＳＫ23・35・
36・37・40・41実測図 ……133
図107　ＳＫ06・13・17・18・44実測図 ……134
図108　ＳＫ25・28・29・30・31・32・
33・39実測図 ……136
図109　ＳＤ21Ｂ・ＳＫ17・25
出土遺物実測図 ……138
図110　中近世墓配置図 ……139・140
図111　集石墓（Ⅰ-Ａ-２）実測図（１） ……143
図112　集石墓（Ⅰ-Ａ-２）実測図（２） ……144
図113　集石墓（Ⅰ-Ａ-２）実測図（３） ……145
図114　集石墓（Ⅱ-Ａ-１）実測図（４） ……146
図115　集石墓（Ⅱ-Ａ-１）実測図（５） ……148
図116　集石墓（Ⅱ-Ａ-２）実測図（６） ……149
図117　集石墓（Ⅱ-Ａ-２）実測図（７） ……150
図118　集石墓（Ⅱ-Ａ-２）実測図（８） ……151
図119　集石墓（Ⅱ-Ａ-２）実測図（９） ……152
図120　集石墓（Ⅱ-Ａ-２）実測図(10) ……153
図121　集石墓（Ⅱ-Ａ-２）実測図(11) ……154
図122　集石墓（Ⅱ-Ａ-２）実測図(12) ……155
図123　集石墓（Ⅱ-Ａ-２）実測図(13) ……156
図124　土坑墓（Ⅰ-Ｃ・Ⅰ-Ｄ）実測図(14) ……157
図125　土坑墓（Ⅱ-Ａ-Ⅱ・Ｂ-Ⅱ）
木製の棺を伴う実測図(15) ……158

図126　五輪塔実測図……159
図127　ＳＺ出土遺物実測図（１）……160
図128　ＳＺ出土遺物実測図（２）……161
図129　ＳＺ出土遺物実測図（３）……162
図130　ＳＺ出土遺物実測図（４）……163
図131　Ｐ61出土遺物実測図……163
図132　包含層出土須恵器実測図……164
図133　包含層出土灰釉陶器実測図……164
図134　包含層出土山茶椀実測図……164
図135　包含層出土陶器実測図（１）……165
図136　包含層出土陶器実測図（２）……166
図137　包含層出土陶器実測図（３）……167
図138　包含層出土陶器実測図（４）……168
図139　包含層出土陶器実測図（５）……169
図140　包含層出土陶器実測図（６）……170
図141　包含層出土銅銭……171
図142　包含層出土石器実測図（１）……172
図143　包含層出土石器実測図（２）……173
図144　包含層出土五輪塔実測図……173
図145　青木横穴墓地形測量図……175
図146　青木横穴墓実測図（１）……176
図147　青木横穴墓実測図（２）……177
図148　青木横穴墓出土遺物実測図……180
図149　銅鏃の外観とＸＲＦスペクトル……185
図150　金ヶ崎５号墳から出土した銅鏃の
　　鉛同位体比……186
図151　試料採取部……189
図152　各試料の蛍光Ｘ線スペクトル図……190
図153　ＳＸ01墳丘起源別墳丘断面図……192
図154　ＳＸ01工程別墳丘断面図……192
図155　ＳＸ02墳丘起源別墳丘断面図……192
図156　ＳＸ02工程別墳丘断面図……192
図157　ＳＸ03墳丘起源別墳丘断面図……193
図158　ＳＸ03工程別墳丘断面図……193
図159　ＳＸ05墳丘起源別墳丘断面図……195
図160　ＳＸ05工程別墳丘断面図……195
図161　金ヶ崎遺跡周辺の主要遺跡（古墳）……197

表　目　次

表１　金ヶ崎遺跡・青木横穴墓
　　発掘調査経過表 …… 5
表２　周辺遺跡一覧表 …… 11
表３　金ヶ崎遺跡時期区分 …… 14
表４　石材別の出土剥片数……25
表５　金ヶ崎５号墳から出土した銅鏃の
　　鉛同位体比 ……183
表６　試料から検出された元素と顔料の種類 …188
表７　金ヶ崎遺跡人骨一覧表 ……202
表８　金ヶ崎遺跡方形周溝墓・古墳一覧表 ……206
表９　金ヶ崎遺跡竪穴住居一覧表 ……206
表10　金ヶ崎遺跡掘立柱建物一覧表 ……207
表11　金ヶ崎遺跡柵列一覧表 ……207
表12　金ヶ崎遺跡溝一覧表 ……207
表13　金ヶ崎遺跡土坑一覧表 ……207
表14　金ヶ崎遺跡中近世墓一覧表（１） ……208
表15　金ヶ崎遺跡中近世墓一覧表（２） ……209
表16　金ヶ崎遺跡五輪塔一覧表 ……209
表17　金ヶ崎遺跡柱穴一覧表 ……210
表18　金ヶ崎遺跡土器観察表（１） ……211
表19　金ヶ崎遺跡土器観察表（２） ……212
表20　金ヶ崎遺跡土器観察表（３） ……213
表21　金ヶ崎遺跡土器観察表（４） ……214
表22　金ヶ崎遺跡土器観察表（５） ……215
表23　金ヶ崎遺跡土器観察表（６） ……216
表24　金ヶ崎遺跡土器観察表（７） ……217

表25　金ヶ崎遺跡土器観察表(８) ……218
表26　金ヶ崎遺跡土器観察表(９) ……219
表27　金ヶ崎遺跡土器観察表(10) ……220
表28　金ヶ崎遺跡金属製品(銭貨)観察表 ……221
表29　金ヶ崎遺跡金属製品(鉄釘)観察表 ……221
表30　金ヶ崎遺跡金属製品
　　(刀子・剣)観察表 ……222
表31　金ヶ崎遺跡金属製品 ……222
　　(その他・不明)観察表 ……222
表32　金ヶ崎遺跡金属製品(銅鏃)観察表 ……222
表33　金ヶ崎遺跡石器
　　(ナイフ形石器)観察表 ……222
表34　金ヶ崎遺跡石器(石鏃)観察表 ……222
表35　金ヶ崎遺跡石器(打製石斧)観察表 ……222
表36　金ヶ崎遺跡石器(石包丁)観察表 ……222
表37　金ヶ崎遺跡石器
　　(打製穂摘具)観察表 ……223
表38　金ヶ崎遺跡石器(石核)観察表 ……223
表39　金ヶ崎遺跡石器(ＲＦ)観察表 ……223
表40　金ヶ崎遺跡石器(ＵＦ)観察表 ……223
表41　金ヶ崎遺跡石製品
　　(管玉・勾玉)観察表 ……223
表42　金ヶ崎遺跡五輪塔観察表 ……223
表43　青木横穴墓土器観察表 ……224
表44　青木横穴墓金属製品観察表 ……224

写　真　図　版

図版１　金ヶ崎遺跡遠景・青木横穴墓近景
図版２　金ヶ崎遺跡近景・作業風景・その他
図版３　ＳＢ01・02・03・04
図版４　ＳＢ05・06・07
図版５　ＳＢ08・09・10
図版６　ＳＢ10・11・12Ａ・12Ｂ・13Ａ・13Ｂ・13Ｃ
図版７　ＳＢ13Ｂ・14Ａ・14Ｂ
図版８　ＳＢ16
図版９　ＳＢ17・ＳＤ21Ａ
図版10　ＳＢ15・18・19・20・21・22
図版11　ＳＢ23・24・25・26・27・28
図版12　ＳＸ01・02・03(へりより)
図版13　ＳＸ05・09・10・11・12(へりより)
図版14　ＳＸ01・02
図版15　ＳＸ03(１)
図版16　ＳＸ03(２)
図版17　ＳＸ05(１)
図版18　ＳＸ05(２)
図版19　ＳＸ09
図版20　ＳＸ10・11
図版21　ＳＸ12・13
図版22　ＳＸ15・その他
図版23　ＳＡ01・02・ＳＤ15・16・18
図版24　ＳＫ25・28・32・36・ＳＺ11・33・34・35・41・42
図版25　ＳＺ54・55・56・57・67・76・82・88・94
図版26　ＳＢ01・02・08出土土器
図版27　ＳＢ03・06・07・08・10出土土器
図版28　ＳＢ10・12Ａ・12Ｂ出土土器
図版29　ＳＢ12Ｂ・13Ａ・13Ｂ・13Ｃ・14Ａ・15・16Ｂ出土土器
図版30　ＳＢ16Ｂ・18出土土器
図版31　ＳＢ16Ｂ・17・19・20・21・22・23出土土器
図版32　ＳＢ21・22・25・28・29出土土器
図版33　ＳＢ29出土土器

図版34　ＳＸ01・02・03出土土器
図版35　ＳＸ02・03出土土器
図版36　ＳＸ03出土土器
図版37　ＳＸ05出土土器
図版38　ＳＸ09・10出土土器
図版39　ＳＸ10・12・ＳＫ17・21・ＳＺ04・24・32・33・ＳＤ21出土土器
図版40　ＳＺ27Ａ・27Ｂ・60・62・67出土土器
図版41　ＳＺ67・110・Ｐ61出土土器
ＳＸ05出土銅鏃
図版42　包含層出土須恵器・灰釉陶器・山茶椀・古瀬戸・陶器（１）
図版43　包含層出土陶器（２）
図版44　包含層出土陶器（３）
図版45　包含層出土陶器（４）・仏像
図版46　ＳＸ05出土石製品
ＳＢ12・16・ＳＸ02・09出土石器
図版47　包含層出土石器・五輪塔
図版48　ＳＢ10・13・22・ＳＸ01・02・ＳＺ09・27・41・70・76出土鉄製品
図版49　ＳＺ10・18・33・68・包含層出土銅銭
ＳＢ03・13Ａ・包含層出土鉄滓
図版50　ＳＺ05・09・23・33・40・41・48・73・88出土人骨
図版51　青木横穴墓（１）
図版52　青木横穴墓（２）
図版53　青木横穴墓出土遺物
（須恵器・山茶椀・金属製品）

付図　金ヶ崎遺跡遺構配置図

第１章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

金ヶ崎遺跡および青木横穴墓は岐阜県可児郡御嵩町比衣に所在し、東海環状自動車道建設予定地と一部が重なる位置にある。

この東海環状自動車道建設事業に先立ち国土交通省中部地方建設局多治見工事事務所から岐阜県に工事計画が示された。自動車道建設区域が周知の埋蔵文化財包蔵地として『改訂版岐阜県遺跡地図』（岐阜県教育委員会1990）に登録されている両遺跡の範囲内を通過することから、平成11年度に同教育委員会文化課、御嵩町教育委員会と共に、当センターが分布調査を行った。その結果、金ヶ崎遺跡（当時は金ヶ崎古墳群という認識であった）には、明らかに墳丘らしきマウンドがあることが確認できた。

さらに墳丘と墳丘の周辺から表採した遺物や地形の様子から、古代集落が立地する

図１　金ヶ崎遺跡 青木横穴墓位置図

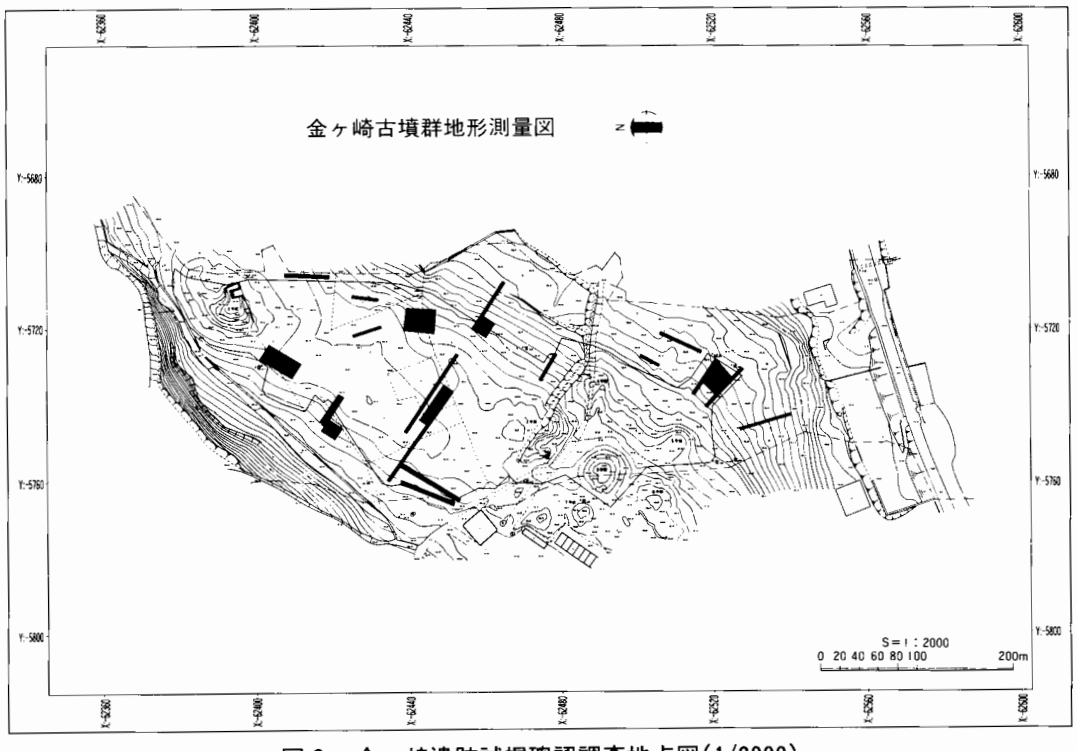


図２　金ヶ崎遺跡試掘確認調査地点図(1/2000)

可能性が極めて高いと思われた。そこで、周知の埋蔵文化財包蔵地の発掘調査に先行して周辺の状況を調べるため、集落が存在する可能性が最も高い4,600㎡のうち周知の埋蔵文化財包蔵地の調査で掘削する1,600㎡を除いた3,000㎡を対象として、その５％である150㎡で試掘・確認調査を行うこととした。

試掘・確認調査は平成12年６月１日から６日までと同月28日・29日の延べ６日間行った。試掘・確認調査の結果、金ヶ崎地区の遺跡は周知の古墳群の他に上部構造が滅失した方形周溝墓・古墳（当時は古墳という認識）が存在し、また、弥生時代から奈良時代にかけての竪穴住居跡群（集落遺跡）が存在することがわかった。

この結果を踏まえて、平成12年度岐阜県埋蔵文化財発掘調査検討委員会を開催し、当初予定していた青木横穴墓１基と金ヶ崎遺跡発掘調査の面積1,600㎡の他に、金ヶ崎地区3,300㎡の本発掘調査、合計4,900㎡必要であると判断した。

以上の結果から、財団法人岐阜県文化財保護センターが岐阜県から委託を受け、平成12年７月３日から金ヶ崎遺跡の発掘調査を開始した。

なお、青木横穴墓については、周知の埋蔵文化財包蔵地であるため平成12年５月８日から発掘調査を開始した。

注）後述するが、周知の埋蔵文化財包蔵地としての金ヶ崎遺跡の名称は、『金ヶ崎古墳群（１号古墳～８号古墳）』であったが、発掘調査によって、方形周溝墓をはじめ古墳・竪穴住居跡・中近世墓なども発見され、文化財保護法第57条の６の遺跡の発見通知に基づいて『金ヶ崎遺跡』として県の遺跡台帳に登録されている。

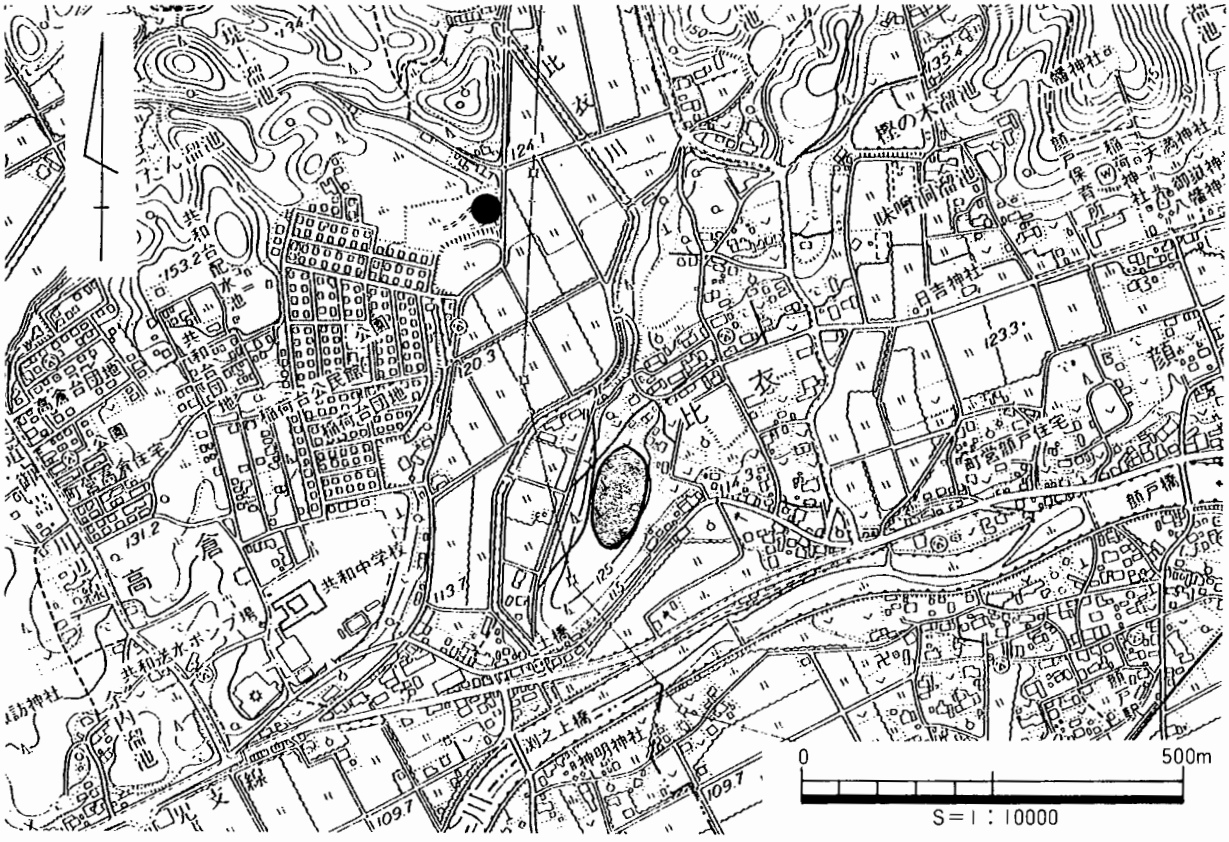


図３　金ヶ崎遺跡周辺図

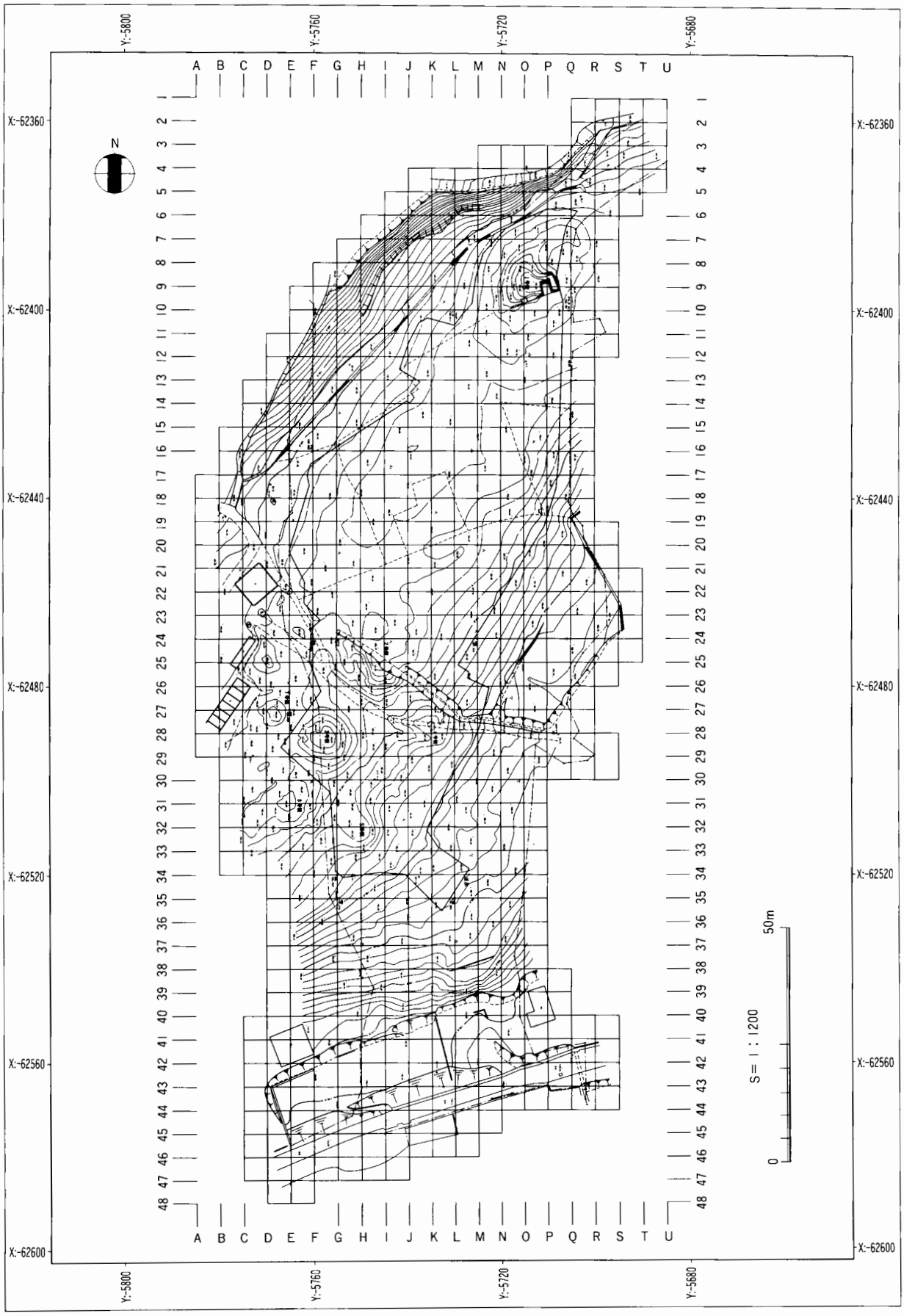


図４　金ヶ崎遺跡グリット設定図

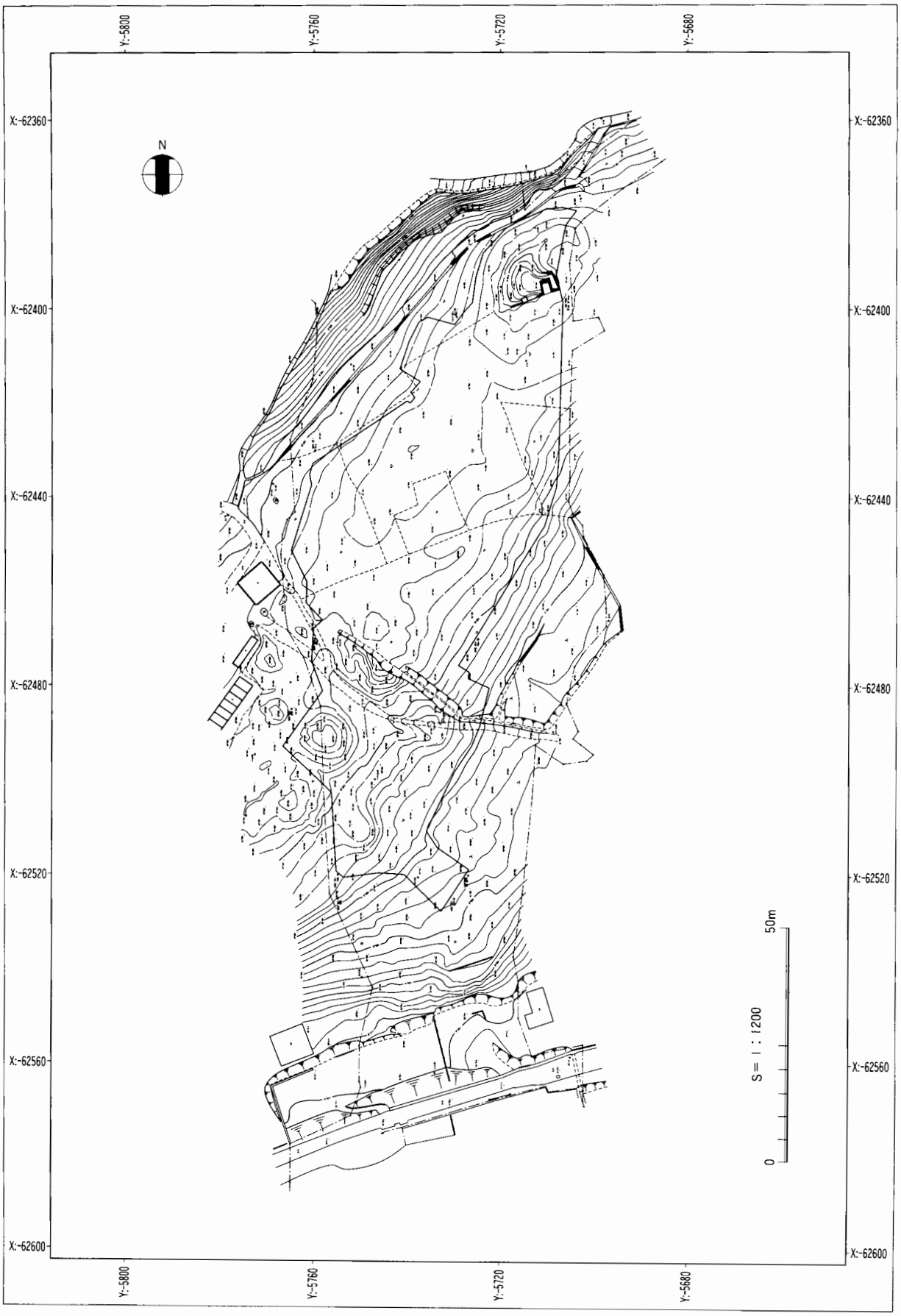

Y:-5800
Y:-5760
Y:-5720
Y:-5680
X:-62360
X:-62400
X:-62440
X:-62480
X:-62520
X:-62560
X:-62600
N
0
S=1:1200
50m

図5　調査前地形測量図

第２節　発掘調査の経過と方法

1　調査期間

平成12年４月１日～平成13年３月28日

2　グリッド設定方法……金ヶ崎遺跡について（図４）

調査開始前に行った地形測量終了後、国土座標の北を基準として５ｍ×５ｍのグリッドを設定した。グリッドの名称は、北から南に向かって１～48行、西から東に向かってＡ～Ｕとした。

3　調査対象面積（基数）（図３・５）

・金ヶ崎遺跡……4,900㎡　・青木横穴墓……１基

4　調査の経過（表１）

平成12年５月８日に、委託業者によって調査区の現況地形測量を行った。金ヶ崎遺跡は、試掘・確認調査が必要であったため、青木横穴墓から発掘作業をはじめた。人力で横穴墓内の流土を除去し、６月中頃より実測を開始し、11月中旬まで横穴墓内の実測を行った。

金ヶ崎遺跡は、７月３日から発掘作業を開始し、当初より確認していた４基の古墳（後に方形周溝墓に変更）を除く3,300㎡あまりを重機によって表土除去した。４基の古墳部分は人力で表土除去を行った。その際、墳丘および周溝部分やその周辺から多数の中近世墓を検出したので、その実測を行った後、人力で墳丘面までと周溝部分の掘削を行った。

主な遺構の調査と金ヶ崎遺跡・青木横穴墓調査の経過は、表１の通りである。多種類の遺構が検出されたため、掘削と実測は同時進行になった。また、青木横穴墓の調査については、７月３日以降雨天の日を調査日にあて実測作業を行った。

表１　金ヶ崎遺跡・青木横穴墓発掘調査経過表　　①地形測量　②空中写真測量（金ヶ崎遺跡のみ）

遺跡	年度	13年度											
	調査内容＼月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
金ヶ崎	調査準備												
	試掘・確認調査												
	包含層の掘削												
	住居の検出・実測												
	住居の掘削												
	方形周溝墓の検出・実測												
	方形周溝墓の掘削												
	中近世墓の検出・実測												
	中近世墓の掘削												
青木	横穴墓包含層の掘削												
	横穴墓の検出・実測												
	横穴墓の掘削												
共通	その他の遺構の調査												
	空中写真測量（地形測量）		①									②	

5　主要な遺構の調査経過と方法

＜金ヶ崎遺跡＞

(1)　竪穴住居跡および掘立建物跡の調査と方法

試掘・確認調査によって遺構面近くまで表土および耕作土が堆積していることが確認されたため、その部分の表土の除去は重機を用いた。また、伐採によって杉の木の根が残っているところが多数あったので、その多くは遺構を傷つけないように人力で伐根した。

住居跡の掘削は、主軸設定とともに四分割して四分法を原則とした。ただし、急斜面に立地する住居の多くは、谷側の1/2前後が崩落しており、四分法を用いないものもある。また、切り合いの関係を確認するために変則的な分割を行った。

住居跡の実測は、調査区全面を1/50の縮尺で空中写真測量を行い、加えてより詳細を期すために1/20の縮尺で平面図・断面図を手測りで作成した。

遺物は、主なものを1/20図に記録してから取り上げ、残りは分割したブロックごとに取り上げた。

掘立柱建物跡の掘削は、空中写真測量と写真撮影の効果を出すため、掘り方部分を10cm、柱穴部分をもう5cm掘り下げた。その後、断面の記録をとるために柱列の軸線を考慮して半截した。

掘立柱建物跡の実測は、全面を1/50の縮尺で空中写真測量を行い、加えてより詳細を期すために、1/20の縮尺で平面図・断面図を手測りで作成した。

遺物は、柱穴ごとに取り上げた。

(2)　方形周溝墓

・1号方形周溝墓（SX01）

墳丘の南半分が削平を受け、東半分が削平や盗掘を受けていたため、まずその断面を精査し実測を行った。また、残った墳丘部の中央から北の部分に土層観察用のアゼを2本残し、人力で墳丘面まで掘削した。土層観察用のアゼの一本を墳丘端部の確認用とし、もう一本を墳丘断面の確認用とした。墳丘端部確認用のアゼを観察しながら残った墳丘面の端部の確認と墳丘から周溝への変化点がないかを確認した。

遺構の実測は、墳丘平面を1/20の縮尺で空中写真測量を行い、墳丘断面は盗掘坑断面や後世の削平断面も含め1/20の縮尺で手測りで行った。

遺物は、グリッドごとに取り上げたが、盗掘坑とその下の掘り込み部分の土はふるいにかけて遺物の確認を行った。

・2号方形周溝墓（SX02）

墳丘の北半分と南の南西部分が削平を受けていた。墳丘面にあった木の伐根や墳丘全体の清掃をした後、削平を受けゴミ穴になっていた墳丘南西部を掘削し、中から多数の遺物を確認した。また、掘削を受けた北半分の断面をきれいにし、主体部を含む墳丘面の確認を行った。また、墳丘周辺を人力で精査し周溝を確認し、周溝部分は十字アゼを残し掘削した。

墳丘面の実測は、1/20の縮尺で空中写真測量を行い、墳丘断面・周溝断面実測については、1/20の縮尺で手測りを行った。断面で確認された主体部は、短軸方向に断面を残し掘削し、1/10の縮尺で平面・断面実測を行った。

遺物は、周溝部分については主立ったものを1/10の手測りで実測し、残りは主体部・墳丘部4ブロ

ック・周溝部4ブロックに分けて取り上げた。

・3号、5号、6号、7号、14号方形周溝墓（SX03・05・06・07・14）

墳丘面とその周辺の清掃を行い、墳丘を痛めない様に伐根を行った。表土掘削時から主体部の主軸を求めて十字にアゼを残して墳丘を分割した。その後、それぞれのブロックを順番に掘削し墳丘面と思われる部分で止めた。周溝部は、墳丘部から続くアゼを挟んで少しづつ掘削した。その結果、3号方形周溝墓は、6号・7号・14号方形周溝墓と溝が重なっていることを確認した。また、5号方形周溝墓についても6号方形周溝墓の溝と重なっていることを確認した。墳丘も当初考えていた円形ではなく方形であることを確認した。3号・5号とも墳丘面に主体部の存在を確認し、主体部用に3号は十字に、5号は主軸に直交する形でアゼを残し、主体部を掘削した。空中写真測量後、主体部のアゼと連動してアゼを残し墳丘盛土を掘削した。

遺構の実測は、1/20の縮尺で空中写真測量を行い、墳丘断面・周溝断面実測を1/20の縮尺で手測りし、主体部は、平面を1/10の縮尺で手測りで実測し、主体部断面を1/20で墳丘断面図に合成した。

遺物は、それぞれ4分割した主体部（5号方形周溝墓主体部は3分割）、墳丘部・周溝部に分けて取り上げた。

・4号古墳

4号古墳の墳丘部と考えられていた墳丘部分は、主に礫やその他の遺物を集めて積み上げられていたもので遺構ではなかった。

・9号方形周溝墓・10号古墳（SX09・10）

9号方形周溝墓・10号古墳は、試掘確認調査によって周溝部分が確認されたが、墳丘面の高まりがなかったため表土・耕作土のほとんどは、重機で除去した。その後、人力で遺構面を精査し周溝を確認すると共に、主体部の残存状況を確認したが、主体部はほとんどなかった。墳丘周溝の形を確認後、墳丘の形を参考に、墳丘端部から周溝部の堆積を確認するため十字にベルトを残して掘削を行った。

遺構の実測は、1/20の縮尺で空中写真測量を行い、墳丘断面・周溝断面実測を1/20の縮尺で手測りした。

遺物は、墳丘・周溝の各ブロックごと、層位ごとに取り上げた。

・11号、12号・13号・15号方形周溝墓（SX11・12・13・15）

11号から15号までの方形周溝墓は、周知の遺跡でもなく、試掘・確認調査でも確認されていなかったので、計画的な調査にはならなかった。墳丘部分に高まりはなく、周溝部分の検出により初めて遺構の存在を確認したので、主体部の詳しい調査はできなかった。検出後周溝を含めた墳丘部分の形状を確認した上で、十字にアゼをもうけて周溝部を掘削した。15号については方形周溝墓という認識が遅く、周溝部分に設定したアゼは遺構全体を意識したものにはなっていない。

遺構実測や遺物の取り上げについては、9号方形周溝墓・10号古墳と同じである。

・中近世墓

中近世墓は、そのほとんどが2号・3号・5号・12号方形周溝墓の周辺やその他の方形周溝墓の周溝部分で検出しているため、方形周溝墓部分を掘削する中で検出し、方形周溝墓の掘削・実測を行う前に平面・断面実測を行った。遺構の検出後、長軸方向に目印釘を打ち、それを軸に平面・断面実測

を1/20の縮尺で手測りで行った。また、空中写真測量でも方形周溝墓の測量を行う中で、1/20の実測図面ができあがったものもある。

遺物は、実測図に記録できるものは記録し、後は遺構一括で取り上げた。

遺構実測・遺物の取り上げについては、9号方形周溝墓・10号古墳と同じである。

なお、上記の主要遺構の写真の記録は、空中写真測量時にラジコンヘリによる撮影・脚立を利用した撮影・地上からの撮影によって行った。

＜青木横穴墓＞

玄室南部→入り口南部→玄室北部→入り口北部の順で掘削・検出を行い遺構内部の状況を確認した。

その後、1/10の縮尺で遺構内の土砂の堆積状況・内部平面・立面の実測を手測りで行った。

遺物は、その都度層位を確認しながら取り上げた。

6　遺跡・遺物公開

平成13年2月14日に記者発表を行い、同月18日に現地説明会を開催し418名の参加をみた。

7　遺物・調査記録の整理作業

平成12年度・13年度に出土遺物・調査記録の整理作業を行った。作業の基本的な流れは次のとおりである。

遺物の洗浄→土器の硬化剤処理→遺物の注記→土器の接合→遺物の実測・観察表の作成→
遺構・遺物実測図の製図→遺物の写真撮影→図版作成→遺物・調査記録の収納・保管

なお、本報告書の執筆は、上記の作業と並行して行った。金属製品などの保存処理・科学分析は適宜行った。

8　発掘調査及び整理作業の体制

	平成12年度		平成13年度	
理事長	服部　卓郎		服部　卓郎	
専務理事兼事務局長	原　隆男		成戸　宏二	
常務理事兼経営部長	二山　晃		福田　安昭	
経営部次長兼経営課長	坂東　隆		福田　照行	
調査部長	高橋　幸仁		武藤　貞昭	
調査次長	武藤　貞昭		片桐　隆彦	
担当調査課長	片桐　隆彦		高木　徳彦	
担当調査員	成瀬　正勝		早野　壽人	
	早野　壽人			
整理作業従事者	國井　悦子	広瀬みどり		岩田のり子
	山田　弘子	大野　里美		大塚　道子
	小木曽美智			

なお、平成12年度の発掘調査においては、作業員雇用、現場管理、掘削などの業務及び遺物の洗浄・注記を㈱小池土木に委託して行った。

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　遺跡周辺の立地・環境

御嵩町は、町の中央やや南寄りを東西に流れる可児川によって形成された平坦地と、それを取り巻く可児盆地の東部にあたる丘陵・台地に北・東・南を囲まれ、これらの丘陵・台地を可児川の支流となる小河川が浸食してできる複雑で入り組んだ小平地と谷筋とで形成されている。

町域の地質は、町内北部一帯のチャート・頁岩・粘板岩・砂岩の堆積岩からなる「中・古生層」と、東部で鬼岩を中心として露出する「花崗岩帯」の２つが基盤岩となり、その上に新生代の「第三紀・第四紀」の地層が覆っている。丘陵・台地の基盤となっている地質は、その大半が新生代第３紀中新世層「中村層」「平牧層」とよばれる凝灰質砂岩（当地域でサバとよぶ）で、この岩盤の上にその風化土、堆積土が重なっている。この基盤の「中村層」は燃料として活用された亜炭を、「平牧層」は動物化石を多く含んでいる。金ヶ崎遺跡の基盤層にも亜炭が含まれ、亜炭坑が存在した。

金ヶ崎遺跡・青木横穴墓は、御嵩町の西部比衣地区に位置している。この地区は、国道21号線の北側にあたり、入り組んだ高台が広がる。これらは、河川の浸食・堆積によって作られた河岸段丘で、金ヶ崎遺跡はその中の比衣顔戸段丘上に位置し、青木横穴墓はその西側の高倉野段丘の南東のへりにあたる。金ヶ崎遺跡の河岸段丘は南西から北東に広がり、尾根から南東に面した斜面に遺跡が展開する。南には可児川と顔戸地区・可児市柿田地区を見渡せる標高120ｍから130ｍに位置する遺跡である。

段丘の南側には段丘に沿って集落が展開し、集落の南には可児川を挟んで耕作地が展開する。段丘上は、森林部分と段丘斜面を削って住宅地になっている。段丘の北西側の平坦地は、耕作地になっており、さらに北に向かうと青木横穴墓や高倉野の段丘上に展開する住宅地に至る。

第２節　周辺の遺跡（図６・表２）

『改訂版岐阜県遺跡地図』（1990年）によると、御嵩町には、240を超える遺跡が記されている。

御嵩町では、旧石器・縄文時代の遺物が採集されているが、具体的な遺構は見つかっていない。弥生時代も中期と後期の遺物が採集されているが、具体的な遺構は見つかっていない。

古墳時代の遺跡は古墳が主で、上記の遺跡地図には190以上が記されている。町内では、可児川の北に位置する、南面した丘陵地に多く分布している。可児川の南に位置する、北面した丘陵地にもいくつか分布するが、圧倒的に川の北側の丘陵地に分布するもののほうが多い。

御嵩町内で、古墳のまとまりを見てみると、可児川と木曽川に挟まれた伏見台地上から、その東に位置する比衣地区まで分布する「伏見古墳群」と、町の中心から東方の上之郷地区までを含めた地域に分布する「中古墳群」に大別される。金ヶ崎遺跡および青木横穴墓は、「伏見古墳群」の中に位置する遺跡である。

「伏見古墳群」には、古墳時代前期の高倉山古墳（29）（前方後方墳）と東寺山１号古墳（16）（前方後方墳という説が有力）・東寺山２号古墳（17）（前方後方墳）がある。これらは、「伏見古墳群」の中核となる古墳で、古墳時代前期にこの地方を治める有力者の存在がうかがえる。御嵩町の西方の

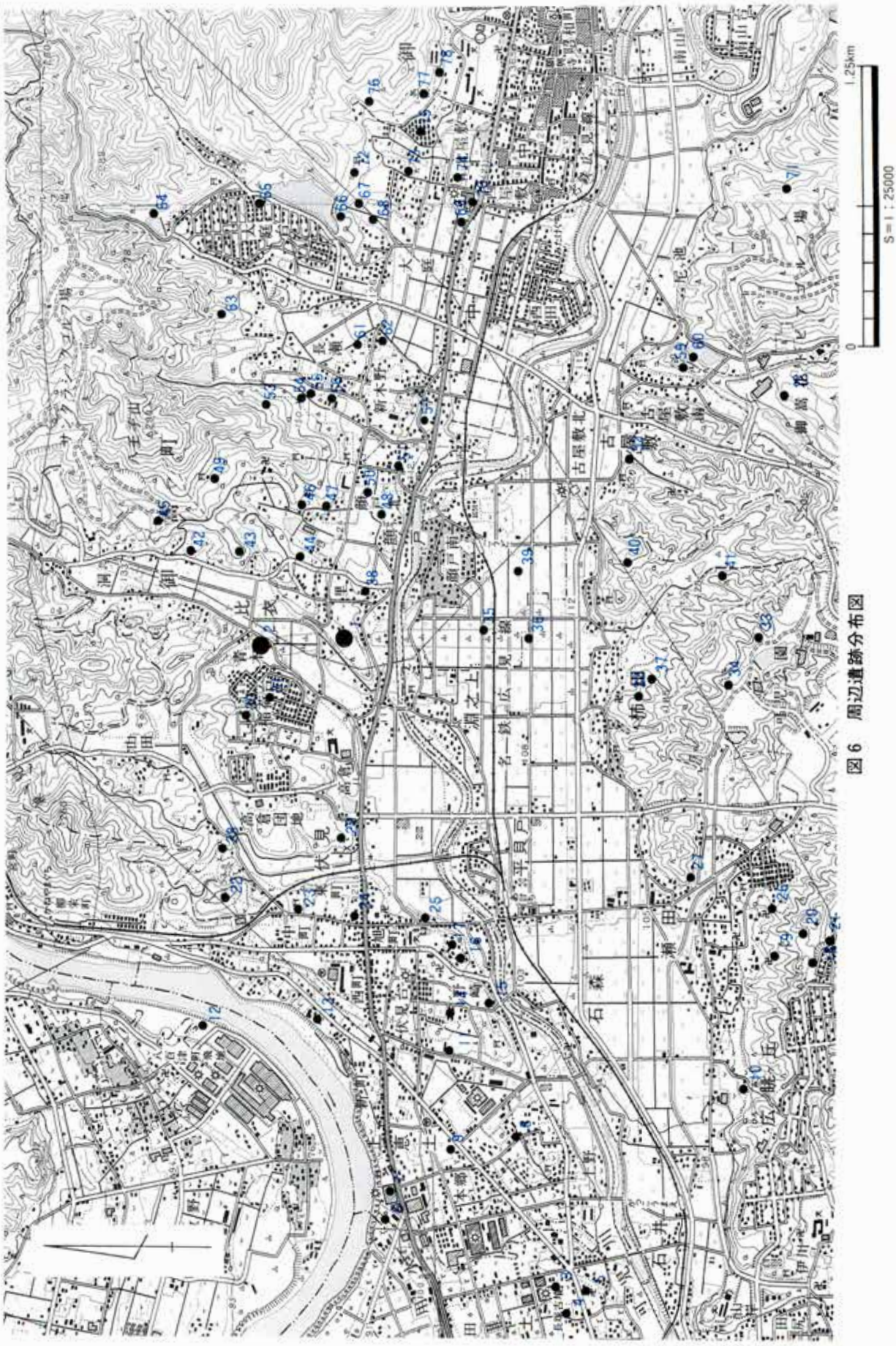


図6　周辺遺跡分布図

表２　周辺遺跡一覧表

1	金ヶ崎遺跡(弥生～近世)	27	神崎山古墳(古墳)	53	恵観寺山古墳群(古墳)
2	青木横穴墓(古墳)	28	山田横穴１号～７号古墳(古墳)	54	庚申塚古墳(古墳)
3	長塚古墳(古墳)	29	高倉山古墳(古墳)	55	大平山ノ神古墳(古墳)
4	野中古墳(古墳)	30	念事ヶ平１～２号古墳(古墳)	56	神宮古墳(古墳)
5	西寺山古墳(古墳)	31	稲荷山古墳群(古墳)	57	新木野古窯跡(平安)
6	長畑１～２号古墳(古墳)	32	柿田古墳(古墳)	58	大王寺南古墳(古墳)
7	新町墓地古墳(古墳)	33	北ヶ洞１号古墳(古墳)	59	大王寺古墳(古墳)
8	桐野１号古墳(古墳)	34	北ヶ洞２号古墳(古墳)	60	池西古墳(古墳)
9	桐野２号古墳(古墳)	35	顔戸南遺跡(弥生～中世)	61	新木野群集墳(古墳)
10	桧下古墳(古墳)	36	柿田遺跡(縄文～近世)	62	新木野古墳(古墳)
11	大塚古墳群(古墳)	37	前山古墳群(古墳)	63	長瀬山古墳(古墳)
12	小貝戸１号古墳(古墳)	38	比衣金ヶ崎古窯群跡(平安)	64	菖蒲池古墳(古墳)
13	生沢古墳(古墳)	39	顔戸山ノ神遺跡(弥生・古墳)	65	真名田古墳(古墳)
14	伏見狐塚古墳(古墳)	40	杉ヶ洞古墳群(古墳)	66	鈴ヶ森古墳(古墳)
15	堂根古墳(古墳)	41	馬乗洞古窯跡(古墳)	67	雷神山古墳(古墳)
16	東寺山１号古墳(古墳)	42	比衣丸山古墳(古墳)	68	山の神古墳(古墳)
17	東寺山２号古墳(古墳)	43	打越古墳群(古墳)	69	天神塚古墳(古墳)
18	七ツ塚古墳群(古墳)	44	坂本天神山古墳(古墳)	70	天神ヶ森古墳(古墳)
19	しゃもじ塚古墳(古墳)	45	市洞１～６号古墳(古墳)	71	キッチョ洞古墳(古墳)
20	粘り塚古墳(古墳)	46	諏訪神社古墳(古墳)	72	今井白山神社１～４号古墳(古墳)
21	大洞白山塚古墳(古墳)	47	坂本古墳群(古墳)	73	宝塚古墳(古墳)
22	新発知古墳群(古墳)	48	顔戸城跡(中世)	74	春日神社古墳(古墳)
23	伏見白山神社古墳(古墳)	49	陣ヶ峰群集墳(古墳)	75	愚溪寺天神山古墳(古墳)
24	伏見廃寺(白鳳)	50	花塚古墳(古墳)	76	禅堂平西古墳(中世)
25	伏見寺東古窯跡(奈良・平安)	51	顔戸藤塚古墳(古墳)	77	禅堂平古墳(古墳)
26	巣本古墳(古墳)	52	栢之木経塚(近世)	78	愚溪寺稲荷古墳(古墳)

可児市前波地区にも古墳時代前期の古墳が存在する。それらは、西寺山古墳（５）（前方後方墳）・野中古墳（４）（前方後円墳）・長塚古墳（３）（前方後円墳）からなる「前波古墳群」で、「伏見古墳群」の中心的な古墳に続く古墳群と考えられている。

「伏見古墳群」のその他の古墳の中には、比衣坂本にある坂本天神山古墳（44）（円墳）・比衣丸山古墳（42）などがある。天神山古墳は、南に開口した横穴式石室を有する大型円墳である。丸山古墳は、玄室と羨道部の境のない無袖式石室の基底部が残存していた。遺物には、６世紀前葉の須恵器をはじめ、土師器・玉類・鉄製品が出土している。さらに、伏見台地の西端に位置する伏見大塚古墳群（11）の１号古墳は、竪穴式石室を有する円墳と考えられていたが、地形測量図等から方墳の可能性も考えられている。

近年発掘された顔戸南遺跡（35）では、古墳時代の集落跡が見つかっており、この時代の人々の生活の様子も明らかになってきた。

古代には、寺院が建立されたのではないかと思われる３つの遺跡が確認されている。願興寺廃寺・伏見廃寺（24）・送木廃寺の３寺で、いずれも軒丸瓦・軒平瓦などが表採されている。特に、願興寺廃寺から表採された軒丸瓦から、この寺院の建立が白鳳時代にさかのぼる可能性も考えられている。

さらに、古代の官道の一つである東山道が、隣接する可児市を含めたこの地域を通っていた可能性が高いと考えられている。

中世では、金ヶ崎遺跡の東に顔戸城跡（48）が位置している。

第3章　基本層序遺構・遺物の概要

第1節　基本層序（図7）

金ヶ崎遺跡と青木横穴墓の両遺跡の基本層序があるが、ここでは金ヶ崎遺跡の基本層序のみとする。青木横穴墓については、遺構図で確認していただきたい。

金ヶ崎遺跡における層序は、試掘・確認調査の結果をもとに、基本的に以下のように区分して調査を進めた。大きく上層から下層の順番にⅠ～Ⅳの4層に分層した。

Ⅰ層：調査前の地表を覆う表土で、調査区の北半分は畑地として利用されていたので、現代の耕作土の上に堆積していた表土と考えられる。南半分は山林の部分があったので、表土として腐葉土が混じっているところがある。

Ⅱ層：調査区の北半分は畑地であったため、Ⅱ層は耕作土ということになる。耕作土は、場所によって堆積状況が異なるが、調査区内の比較的平らな所にはほぼ確認することができた。また、尾根筋から南東・南・北西・西にかけての斜面には尾根筋から流れ込んできた流土が堆積していた。耕作土は、にぶい黄橙色や褐色をしており、砂岩やチャートの亜角礫を含む場合があった。流土は、しまりがなく、礫をあまり含まない場合もある。

これらの地層からは、近現代の遺物が多数出土しており、比較的新しい時代に形成されたものと思われる。

Ⅲ層：旧地表土。金ヶ崎遺跡ではポイントとなる地層で、各方形周溝墓の墳丘部では、この地層の上に盛土をして墳丘を積み上げている。

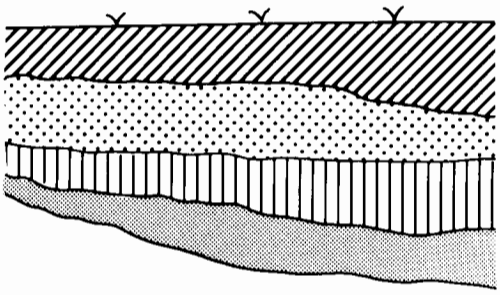
一般的にa層、b層の2種類に分かれ、上層のⅢa層が黒色土でしまりがある。下層のⅢb層は、灰褐色土で同じくしまりがある。弥生時代のものと考えられる土坑が、このⅢb層上面から掘り込んで作られていたり、弥生時代後半の竪穴住居跡をこのⅢb層上面で検出した。

Ⅲa層のやや上面から中近世墓の墓坑が掘り込まれていたり、方形周溝墓の周溝部分に堆積したⅢa層の流土上面に、7世紀後半の須恵器などが出土していることから、この旧地表面が、弥生時代後半から古代にかけて風化・堆積を繰り返しながら人々の生活面であったものと考えられる。

南東斜面の谷筋では、このⅢa層が堆積しているところもあった。

Ⅳ層：地山。調査区の北と南ではやや様相を異にする。北半分では、明褐色で粘質の土が多くその中に、直径1～3㎝ほどの亜角礫のチャートや砂岩を含む。少し掘り込むと、含まれる礫の大きさが握り拳大になり、その下に凝灰質砂岩の岩盤が見られるところがある。これは、北半分が丘陵地の尾根筋にあるためかと思われる。南半分は、南東から南に向かう斜面になり、北半分で見られた粘質の土壌ばかりではなく、チャートや砂岩の握り拳大の亜角礫を含む明赤褐色土や明褐色土が直接見られる場合が多い。谷筋には、これらの土が流土として堆積しているところもあった。1番下の凝灰質砂岩の岩盤がみられるところもあり、この岩盤を掘り抜いて竪穴住居を建てているところもあった。

(1) 基本層序

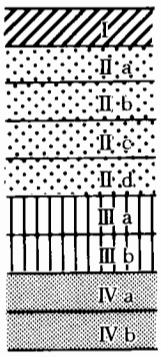


Ⅰ　表土
Ⅱ　流土、耕作土
Ⅲ　旧表土
Ⅳ　地山

(2) SX01 周辺基本層序

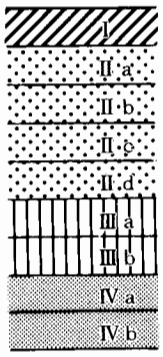
Ⅰ　表土
Ⅱ　流土、耕作土
Ⅲa　7.5YR2/1 黒色土（0.5～3cm砂岩角礫を少量含む、しまり有り、上面に炭化物を少量含む）
Ⅲb　7.5YR4/2 灰褐色（0.5～2cm砂岩角礫を少量含む、しまり有り）
Ⅳ①　7.5YR5/6 明褐色粘質土（0.5～1cm砂岩角礫、同大チャート亜角礫を少量含む、しまり強）
Ⅳ①′　7.5YR6/6 橙色粘質土（0.5～1cm砂岩角礫、チャート角礫を極少量含む、しまり強）
Ⅳ②　7.5YR5/8 明褐色（礫（0.5～10cm砂岩角礫多、1～10cmチャート角礫極少）まじり粘質土）

(3) SX03 周辺基本層序



Ⅰ　表土
Ⅱa　7.5YR5/4 にぶい褐色土（0.5～1cm砂岩角礫を含む、しまりなし）
Ⅱb　7.5YR5/2 灰褐色土（1～2cmチャート亜角礫を少量含む、しまりなし）
Ⅱc　7.5YR5/3 にぶい褐色土（0.5cm砂岩角礫を含む、しまりなし）
Ⅱd　7.5YR5/2 灰褐色土（0.5～4cm砂岩角礫を含む、しまりなし）
Ⅲa　7.5YR2/1 黒色土（上面に炭を少量、0.5～1cm砂岩角礫を少量含む、しまり有り）
Ⅲb　7.5YR4/2 灰褐色土（礫を含まず、しまり有り）
Ⅳa　7.5YR6/6 橙色粘質土（0.5～5cm砂岩角礫を多く含む、しまり強）
Ⅳb　7.5YR6/4 にぶい橙色粘質土（0.5～2cm砂岩角礫を含む、しまり強）

(4) SX05 周辺基本層序



Ⅰ　表土
Ⅱa　10YR6/4 にぶい黄橙色土（3～8cmチャート亜角礫を多く含む、しまりなし）
Ⅱb　7.5YR5/6 明褐色土（礫を含まず、しまりなし）
Ⅱc　7.5YR4/2 灰褐色土（礫を含まず、しまりなし）
Ⅱd　10YR4/2 灰黄褐色土（4～7cmチャート亜角礫を少量含む、上面ほどしまり強）
Ⅲa　10YR2/1 黒色土（0.5～1cm砂岩角礫を少量含む、しまり有り）
Ⅲb　10YR4/2 灰黄褐色土（3～20cmチャート亜角礫を少量含む、しまり有り）
Ⅳa　7.5YR5/8 明褐色土（2～5cmチャート亜角礫を少量含む、しまり強）
Ⅳb　7.5YR6/6 橙色土（5～10cmチャート亜角礫を多く含む、しまり強）

図7　金ヶ崎遺跡基本層序（模式図）

第2節　遺構・遺物の概要

1　金ヶ崎遺跡の時期区分について

検出された遺構・遺物の年代観に基づいて、Ⅰ期からⅥ期の6時期に大きく区別する。

Ⅰ期を旧石器時代・縄文時代とした。この時期は、明確な遺構は確認しておらず、遺物も石器数点のみなので、小時期区分は行わなかった。

Ⅱ期を弥生時代後期末から古墳時代前期までとした。この時期は、多数の遺構とそれに伴う遺物が見つかっており、多少時期幅はあるがまとまっている。

Ⅲ期を古墳時代中期から後期とした。この時期は遺構数は少ないが、遺構に伴う遺物が見つかっており、1時期を設定できると考えた。

Ⅳ期を古墳時代後期末から奈良時代初頭とした。この時期も遺構と遺物が出土している。

Ⅴ期を平安時代中期とした。具体的な遺構は見つかっていないが、この時期の遺物が数十点出土しているので、この時期を設定した。

Ⅵ期を平安時代後期から明治時代とした。この時期は、時間幅が大きいが、同一形態の遺構が平安時代後期から江戸時代まで同一の区域に見られるので、1時期もうけた。

表3　金ヶ崎遺跡時期区分

時期	小時期	時代区分・土器編年への対応	年代
Ⅰ期		旧石器時代後期	
Ⅱ期		弥生時代末～古墳時代前期・廻間Ⅰ式から廻間Ⅲ式	
	1期	廻間Ⅰ式3段階	3世紀中葉
	2期	廻間Ⅰ式4段階～廻間Ⅱ式前半	3世紀中葉～後葉
	3期	廻間Ⅱ式後半～廻間Ⅲ式	3世紀後葉～4世紀前半
Ⅲ期		古墳時代中期～後期・宇田式の時期	5世紀後半
Ⅳ期		古墳時代後期末から奈良時代初頭	7世紀後半～8世紀初頭
Ⅴ期		平安時代中期	10世紀
Ⅵ期	1期	平安時代後期～室町時代	12世紀～15世紀
	2期	江戸時代～明治時代	17世紀～19世紀

注）上記表中の年代は、研究者によって見解が異なる。目安として参照されたい。

2　遺構の概要（付図1・図75・図110）

(1)　Ⅰ期の主な遺構：特になし

(2)　Ⅱ期の主な遺構：竪穴住居跡11軒、方形周溝墓8基、前方後方形周溝墓1基、溝6条、土坑21基（一部検出したものを含めると11基。また周溝に土坑墓を伴うものあり。）

(3)　Ⅲ期の主な遺構：古墳1基

(4)　Ⅳ期の主な遺構：竪穴住居跡18軒、掘立柱建物跡6軒、遺物埋納柱穴1基

(5)　Ⅴ期の主な遺構：特になし

(6)　Ⅵ期の主な遺構：中近世墓113基

(1)　Ⅰ期の遺構

Ⅰ期は、ナイフ形石器1点をもって設定しているので、遺構は確認していない。

(2)　Ⅱ期の主な遺構

①　竪穴住居跡

廻間Ⅰ式3段階の竪穴住居跡11軒を検出した。遺物の出土状況がはっきりしないSB07を除いては、ほぼ同じ高さの等高線上に存在している。立地も比較的丘陵の尾根筋に近い所にあり、後述する7世紀後半の竪穴住居跡群とは異なっている。また、竪穴住居跡のうち5軒を、方形周溝墓の墳丘下から検出している。周溝に削られた状態で検出した竪穴住居跡も1軒あった。丘陵地の尾根筋に近い場所に立地していたことと、方形周溝墓の下にあったことから、7世紀後半の竪穴住居跡よりも残りがよいものもある。

②　方形周溝墓および前方後方形周溝墓

丘陵の尾根筋から南東斜面にかけて8基の方形周溝墓と1基の前方後方形周溝墓を確認した。そのうち7基は後世の土地利用のため墳丘面が削られていたが、3基は墳丘も残っており、主体部を確認することができた。残りの6基も主体部断面が確認できたり、周溝が残っているものがほとんどであった。

残っていた3基の主体部は木棺直葬で、掘方の形状から舟底状木棺や割竹形木棺を使用していた可能性が高い。主体部が残っていたSX05では、主体部の位置から多孔銅鏃が出土した。東海地方を中心に多数出土しているこの銅鏃は、岐阜県では4例目で、御嵩町周辺では美濃加茂市で1例確認されているだけである。

SX09では、周溝に土坑墓を確認した。これは、周溝部の西の端に断面半円形の土抗墓を検出したもので、人間が1人入るほどのものである。

その他の方形周溝墓でも、主体部に木棺を置くために粘土を貼り付けたような状態が残っている部分があった。

調査区内の1番北に位置するSX01は前方後方形をした墳丘墓で、前方部の一部と後方部の一部に周溝を確認している。他の方形周溝墓と比べるとやや大型で、墳丘部分も高い。

これらの墳墓群を比べてみると、大きく2時期に分けられるようである。調査区内の比較的南にあり、多孔銅鏃が出土したSX05のようにやや小型の方形周溝墓群と、SX01を中心とするやや大型な墳墓群である。ただ、出土遺物からみると、2群の間にはそれほど大きな時期差はなく、廻間Ⅰ式4段階からⅡ式後半、新しくてもⅢ式までに当てはまるのではないかと思われる。

③　溝・土抗

方形周溝墓のまわりや周溝の中に多数の溝・土坑を確認できた。出土遺物が少ないのではっきりとしたことはいえないが、方形周溝墓の周溝に切られていたり、廻間Ⅰ式段階の遺物などが出土していたことから、上の竪穴住居跡や方形周溝墓に近い時期の遺構であると思われる。

(3)　Ⅲ期の主な遺構

Ⅲ期には、古墳を1基検出している。この古墳は、当初方形周溝墓群と同じように周溝を持つ弥生時代後半から古墳時代初頭の方形周溝墓の1つかと思われていたが、周溝部から出土した遺物は、5世紀後半の須恵器が多く、その出土状況も古墳の周溝部の底に近い部分から出土しているため、5世

紀後半の円墳であると考えた。その墳丘部の形状も、方形周溝墓群と同じように周溝を持つが、方形ではなくむしろ円形に近く、他の墳墓と様相を異にしている。

(4)　Ⅳ期の主な遺構

①　竪穴住居跡

Ⅳ期は、南東斜面で18軒の竪穴住居跡を確認した。どの竪穴住居跡も、谷側が欠損しており、住居の全体を把握するには至っていない。ほとんど、斜面山側に竈を備え、住居内には土師器と須恵器が混在している。切り合い関係が激しい一群があり、住み替えが何度か行われていたようである。出土遺物から、7世紀後半のまとまった住居群かと思われる。

②　掘立柱建物跡

Ⅳ期には、6軒の掘立柱建物跡を確認している。そのうち3棟が2間×4間のもので、1棟は南に庇を持つ。また、南東斜面に建てられたものは、掘方直径60cmあまりのもので斜面に対しやや斜めに建てられている。山側に溝が切られており、流水よけかと思われる。残りの3棟のうち2棟は総柱の建物で、南に庇を伴う建物の東に隣接することから、その建物の倉庫の可能性が高い。他の1棟は1間×1間の建物で、近くに須恵器を大量に集めた場所が見つかっていることから、これらの須恵器を利用して祭祀が行われたときに使用された建物ではないかと思われる。これらの須恵器も7世紀後半から8世紀初頭のものである。

(5)　Ⅴ期の主な遺物

Ⅴ期は、包含層から平安時代中期の灰釉陶器が出土しているだけで、遺構は見つかっていない。

(6)　Ⅵ期の主な遺構

Ⅵ期の主な遺構は、中近世墓である。全部で113基検出した。ほとんど礫を伴うもので、人骨も1/3ほどの墓から確認している。木製の棺を設置したと思われる墓もある。出土遺物は、平安時代後期から室町時代・江戸時代のものがみられる。長い間継続して墓域であった可能性が高い。さらに包含層から窯道具が見つかっていることから、付近に窯があった可能性が高い。

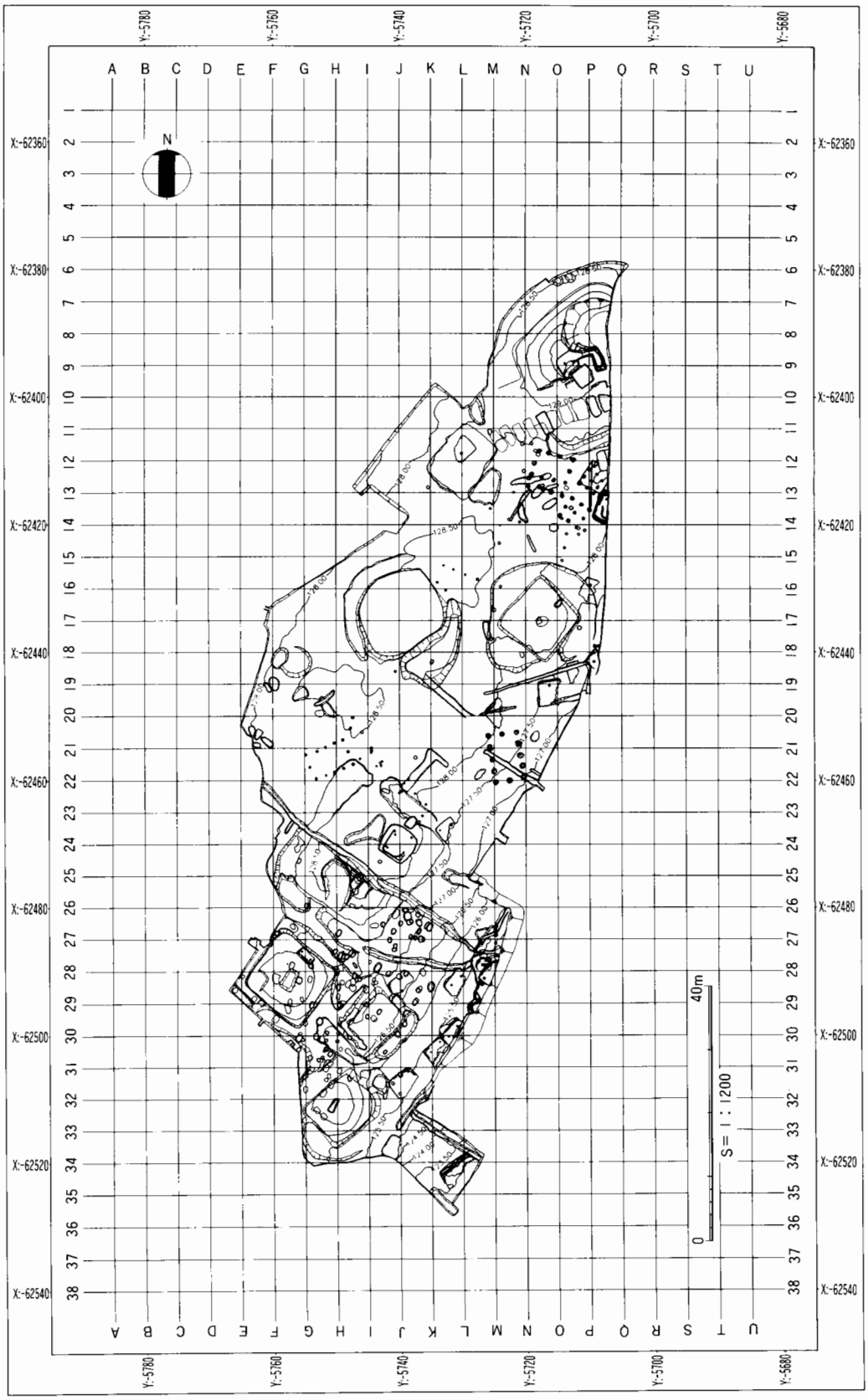


図８　金ケ崎遺跡グリット設定図（遺構）

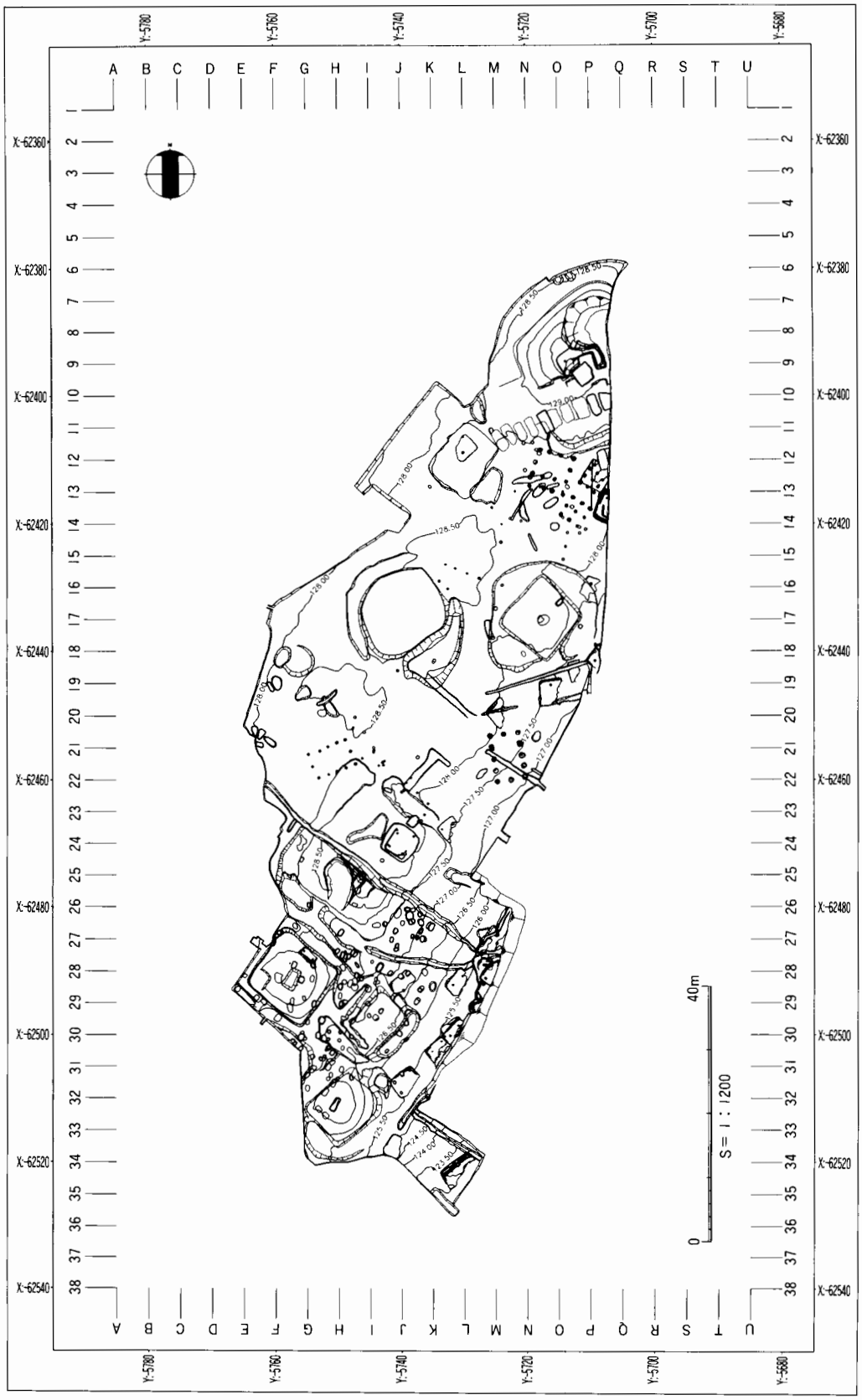


図9　金ケ崎遺跡遺構配置図（遺構番号は付図参照）

3　遺物の概要

(1)　Ⅰ期の土器

包含層からナイフ形石器が出土したが、旧石器時代なので土器は伴わない。

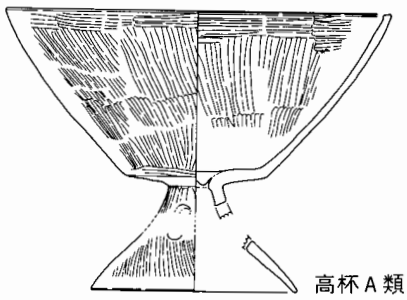
(2)　Ⅱ期・Ⅲ期の弥生土器・土師器

この時期は、明確な遺構及び、それに伴う遺物を数多く確認しており、基本的に既存の研究（廻間遺跡・松河戸遺跡）に基づいて（注１）以下のように分類した。

①　高杯

主として、杯部の形態からＡ～Ｄの４種類に分類した。

・高杯Ａ類：杯部に段を持ち、口径と稜径の差が大きく杯部が比較的深いもの。口縁部は内彎する。（廻間分類高杯A2類）

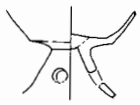


高杯Ａ類

・高杯Ｂ類：杯部が椀形の高杯を一括する。

高杯Ｂ類

・高杯Ｃ類：有稜高杯を一括する。

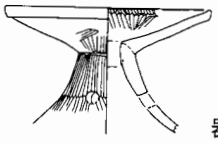


高杯Ｃ類

・高杯Ｄ類：屈折脚を伴う有段高杯（松河戸分類高杯Ｂ類）

高杯Ｄ類

②　器台：器台は出土数が少ないので１種類にとどめた。
脚基部が細く円錐状の脚部を持つもの。



器台

③　鉢

主として口縁部の形態からＡ・Ｂに分類した。

・鉢Ａ類：口縁が外傾するもの。

鉢Ａ類

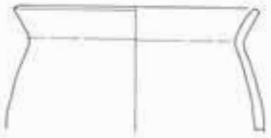
・鉢Ｂ類：口縁が外傾しないもの。

鉢Ｂ類

④　甕

主として口縁から底部にかけての形態から、Ａ～Ｃ類に分類した。

・甕Ａ類：口縁部が短く外反するもの。底部は平底である。



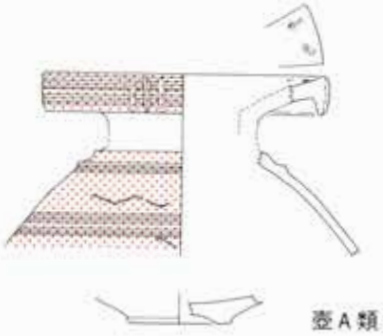
・甕Ｂ類：台付きの甕で口縁の形態がＳ字でないもの。

・甕Ｃ類：Ｓ字状口縁台付甕を一括する。

⑤　壺

主として体部と口縁部の形態・大きさからＡ～Ｅ類に分類し、Ｂ・Ｃ類は細分した。

・壺Ａ類：パレススタイル壺を一括する。

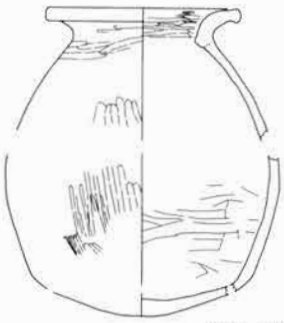


・壺Ｂ類：壺Ａ類に入らない大型の壺を４種類に分類した。

Ｂ１類：口縁部を外反させ口端部を肥厚させるもの。

Ｂ２類：口縁部をくの字に外反させるもの。

Ｂ３類：口縁部が短く外反するもの。



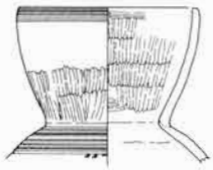
壺Ｂ３類

・壺Ｃ類：口縁部が二重口縁のもの。

壺Ｃ類

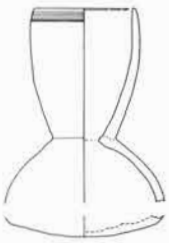
・壺Ｄ類：頸部が体部より長い中・小の長頸壺を以下の２種類に細分した。

Ｄ１類：頸部と体部の比がそれほど違わない中型の壺。



壺Ｄ１類

Ｄ２類：頸部が体部より長い小型の壺。



壺Ｄ２類

・壺Ｅ類：頸部が体部より短い壺を一括する。

壺Ｅ類

・壺Ｆ類：小型の丸底壺を一括する。

壺Ｆ類

(3)　Ⅲ期の須恵器

Ⅲ期の須恵器は、SX10の周溝部出土のものである。ほとんどが5世紀末のもので、杯蓋・杯身・甕・直口壺がある。(注2)

(4)　Ⅳ期の土師器

7世紀後半から8世紀初頭の竪穴住居跡・掘立柱建物跡出土のものを一括した。器種は、甑又は鍋・甕・椀・鉢・ミニチュア土器・壺で、細分は行わなかった。

(5)　Ⅳ期の須恵器

7世紀後半から8世紀初頭の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・包含層から出土している須恵器と、包含層から出土している8世紀後半のものを含む。器種は、杯蓋・杯身・高杯・鉢・甕・横瓶・短頸壺・長頸壺・盤があり、それ以上の細かい分類は行わなかった。

(6)　Ⅴ期の灰釉陶器

包含層出土の灰釉陶器を一括した。(注3)

(7)　Ⅵ期のかわらけ・山茶椀・陶器

Ⅵ期の土器は複数種類があるが、つぎのような出土状況である。

かわらけは、中世墓から出土したものである。

山茶椀は、中世墓および包含層出土のものである。

陶器は、中近世墓および包含層出土のものである。陶器の器種は多種類あるが、細分はしなかった。(注3)

(8)　金属製品

金属製品は、複数の時期から出土している。

Ⅱ期の金属製品は、SX05出土の多孔銅鏃、SX02出土の鉄剣、SX01出土鉄片がある。

Ⅳ期の金属製品は、竪穴住居跡・掘立柱建物跡出土の刀子・鉄釘がある。

Ⅵ期の金属製品は、中近世墓および包含層出土の銅銭と鉄釘がある。

その他、鉄製品が出土しているが、一部を除いて包含層出土のものである。遺構出土のものから考えるとⅣ期の可能性が高い。(注4)

注

1）弥生時代後期から古墳時代の土器については、赤塚次郎氏、早野浩二氏、高木宏和氏の御教示によるところが大きい。

2）須恵器については、渡辺博人氏の御教示によるところが大きい。

3）陶器類につては、藤澤良祐氏の御教示によるところが大きい。

4）金属製品の実測・トレースについては、澤村雄一郎氏（当センター職員）の協力を得た。

(9)　石器類

金ヶ崎遺跡からは合計 64点の石器類が出土した。各器種の用途、出土点数、石材、特徴などについて順に報告する。

①　ナイフ形石器(420)

切削の作業が想定される石器。1点出土。チャートを使用している。420は、縦長剥片を素材とするが、打面・打点は失われている。二側縁加工で、正面左側縁部に剥片素材の縁辺を残して刃部とし、その胴部以下ともう一方の右側側縁部には全体に刃潰しのための二次調整が加えられている。刃部の鋭い縁辺には、使用痕と思われる微細な剥離痕が認められる。刃角度は35°である。

②　石　鏃（421・422）

刺突による殺傷が想定できる石器。2点出土。素材剥片の縁辺に調整を加え、形状を整えたものである。421は下呂石を使用している。平面形の先端角は40°で、基部に茎部を有している。脚部をわずかに折損する。422は平面形の先端角が46°で、基部に「く」の字状の深い抉りが入っている。

③　打製石斧（402・403・418・428・429・430・431・432）

主に掘削などの作業が想定される石器。原礫や剥片を素材とし、縁辺から粗めの調整を施して形状を整え、長軸の一端に刃部を作出している。20点出土した。

形態的視点から類別を行うと次の3分類となる。

1類：両側縁がほぼ平行するもの。いわゆる短冊形。10点出土。（429・431）

2類：両側縁が基部に向かって収束するもので、刃部が最大幅を有するもの。5点出土。
（402・428・430）

3類：両側縁が、やや外彎するもので、胴部が最大幅を有するもの。3点出土。（403・418・432）

なお、折損により分類不明のものは2点であった。

腹面および背面に自然面を有するものは8点あり、全体の40%である。刃部に磨耗が認められるものは7点で、折損により不明の7点を除くと全体の54%になる。429・431は短冊型といわれるもので1類に属するものである。いずれも石材にホルンフェルスを用いている。全体に風化が進み、詳細は不明であるが、429の刃部には、わずかながら磨耗がみられる。402・428・430は撥形といわれるもので2類に属するものである。いずれもホルンフェルスを使用している。428は刃部を折損する。横長剥片を素材にし、裏面左側の打点付近の厚みを調整している。418・403・432は長楕円形を呈す3類に属するものである。403と418の石材は泥岩、432はホルンフェルスを使用している。粗雑なつくりで、使用痕も乏しく、詳細は不明である。403は刃部を、432は肩部を折損する。

なお、折損が認められるものは14点で、全体の70%となる。その部位によって図10のように分類した。それぞれの出土点数は次のとおりである。

a　6点　　b　1点　　c　3点　　d　2点　　e　1点　　f　1点

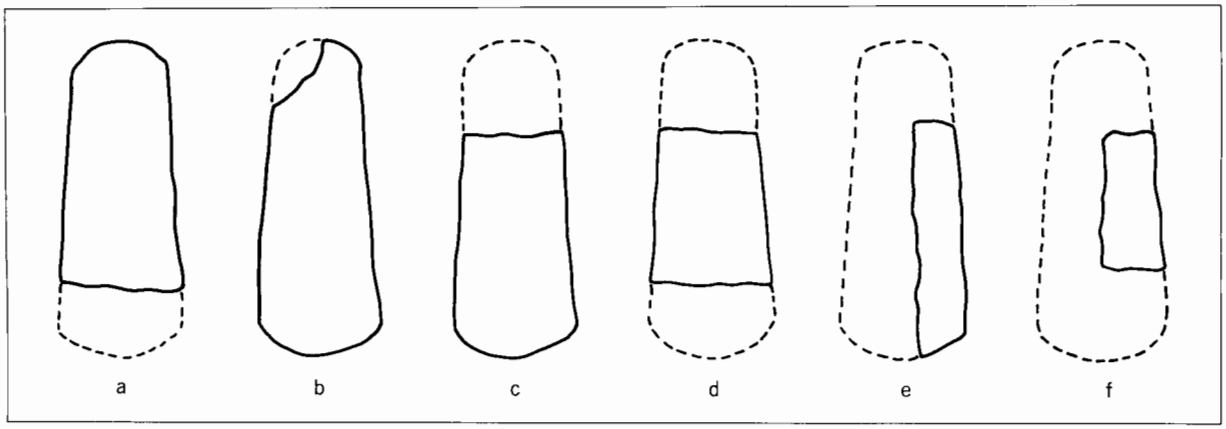


図10　打製石斧の折損部位

④　石庖丁（401・417・426）

収穫具としての使用が想定される石器。401は石材にホルンフェルスを用いている。表裏両面から研磨された直線状の刃部を一部に残すが、その多くを折損するため詳細は不明である。417は全体の1/2以上を折損するが、ほぼ全面を研磨して形を整えている。石材は泥岩を使用している。刃部は表裏両面から研磨され平面形はやや外彎している。金属顕微鏡による観察ではコーングロスが認められた。426は石材にホルンフェルスを用いている。刃部と背縁側に研磨による整形を行った痕跡がみられるのみで、多くを折損するため詳細は不明である。表裏両面から小さく穿孔された痕跡が1カ所認められる。

⑤　打製穂摘具（427）

収穫具としての使用が想定される石器。いわゆる抉り入りの打製石庖丁である。1点出土。石材は、ホルンフェルスである。折損により全体の1/2ほどを失い、刃部も明瞭ではない。正面右側の抉り部分には細かい調整が施されている。ここに紐をかけて使用したと推測される。

⑥　石　核（419）

素材剥片を剥離した残核である。石材はチャートである。厚手の原礫を素材とし、上端の剥離面を打面とした作業面が2面認められる。他に2面の作業面がみられるが打面は失われている。

⑦　剥片類

剥片剥離によって生産された素材を間接的に推定する要素となり得るものである。出土総数は17点である。その内訳は次の表のとおりである。

表４　石材別の出土剥片数

石　材	点数（個）			質量（g）		
	遺　構	包含層	計	遺　構	包含層	計
チャート	2	7	9	13.7	67.3	81.0
サヌカイト		1	1		2.3	2.3
泥　岩		2	2		20.7	20.7
下呂石		2	2		18.2	18.2
ホルンフェルス		2	2		53.9	53.9
石　英		1	1		36.3	36.3
計	2	15	17	13.7	198.7	212.4

⑧　調整剥離を施された剥片（ＲＦ）(423)

素材となる不定形な剥片の縁辺に、二次加工を施して刃部を形成するが、連続性・統一性に乏しく定形的な刃部をもたないものを総称する。２点出土し、石材はいずれもチャートである。423は表裏両面から調整を施し、刃部は直線状を呈する。刃部は１カ所で、角度は52°と削器的である。素材剥片は、縦長剥片を用いている。

⑨　微細な剥離痕を有する剥片（ＵＦ）(424・425)

素材となる剥片の鋭い縁辺を刃部に用い、その結果として、ある程度連続的に刃こぼれ状の微細剥離痕を有するものを総称する。２点出土し、石材はいずれもチャートである。424は左側縁に１カ所の不定形の刃部を有している。刃部の角度は急（29°）である。425は右側縁に１カ所の凹状の刃部を有している。刃部の角度は急（28°）である。

⑩　勾玉（415・416）

祭祀用具と想定される。２点出土。石材は２点ともヒスイである。一般的な形態とは異なり、小型で抉りが部分的に施されるなど平面形も特殊であるが、これは素材の形状に左右された結果と思われる。素材が硬質のせいか紐擦れ痕は認められない。

⑪　管玉（404～414）

細形管玉で、祭祀用具と想定される。11点出土。石材はすべて緑色凝灰岩である。

⑫　五輪塔（433・434）

組み合わせ式の五輪塔のうち火輪の部分である。石材は花崗岩を用いている。ほぞ穴が大きく、軒厚も厚く、軒先は反り上がる形態を呈している。

第４章　金ヶ崎遺跡の遺構と遺物

第１節　竪穴住居跡・掘立柱建物跡・柵列と遺物

本節では、金ヶ崎遺跡に展開する弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居跡・掘立柱建物跡・柵列について記述する。同時代の遺構である方形周溝墓・前方後方形周溝墓・古墳・溝・土坑墓・小穴については次節以降に記述する。

Ⅱ期の竪穴住居跡11軒、Ⅳ期の竪穴住居跡18軒・掘立柱建物跡６軒・柵列４軒の遺構について記述する。遺構番号は、現地調査で用いた遺構略号と番号をそのまま用いる。竪穴住居跡・掘立柱建物跡は、SBで表記し、番号は01から記した。時期別に番号を分けているわけではないし、竪穴住居跡と掘立柱建物跡の区別もない。Ⅱ期とⅣ期の遺構が混在する。また、遺構ごとのまとまりを表すために、個々の遺構実測図の前に地形図を添付した。SBに欠番はないが、竪穴住居跡の切り合いの関係で番号の後ろにアルファベットで区別をしたものがある。（例　SB13Ａ・SB13Ｂ・SB13Ｃなど）紙面では、Ⅱ期の遺構を前に、Ⅳ期の遺構を後に掲載した。柵列はSAで掲載し、欠番はない。

記述にあたっては、便宜上以下の用語を用いる。

・「谷側」「山側」：遺構からみて、立地する斜面の下側を「谷側」、上側を「山側」とする。
・竪穴住居跡の「主軸」「縦」「横」は、斜面に立地しているものは、斜面に水平方向を「主軸」とし、「縦」を主軸方向、「横」を主軸と垂直になる方向とした。これは、特にⅣ期の竪穴住居跡について、斜面山側に竈があり、竈のある辺を主軸と垂直に交わる辺としたからである。Ⅱ期の竪穴住居跡は、長い方の辺を「縦軸」、短い方の辺を「横軸」とした。また「主軸」は、長い方の辺と平行方向にした。また、地床炉の位置をもとに主軸を設定した。
・住居内の柱穴は、遺構内のみで番号を付けた。（例　SB01Ｐ５）

遺構の配置（図11）

図11の地形図には、SB01・SB02・SB06・SB23・SB28の５つの遺構がみられる。この中でSB23とSB28が墳丘の下から検出されている。また、SB06は、SX09の周溝部に切られており、方形周溝墓との前後関係がはっきりする。いずれもⅡ期の遺構と思われる。

ＳＢ01（図12、図版３）

調査区内の北東Ｐ12グリッドにあり、南東に向かって若干傾斜する場所に位置する。SB02と隣接しているが、接近しすぎているので同時期に存在していたものではないと思われる。隅を若干丸く納めた隅丸方形の竪穴住居跡である。長辺4.2m、短辺４ｍで、北東部分が後世の撹乱を受けている。また北西から南東にかけて試掘・確認調査で削られている部分がある。住居内の埋没は、断面から見て自然堆積と思われる。壁溝は見られない。遺構内柱穴Ｐ01（またはＰ02）、Ｐ03、Ｐ05が主柱穴かと思われる。径0.2m、深さ0.15ｍほどである。撹乱によって地床炉などは確認できなかった。

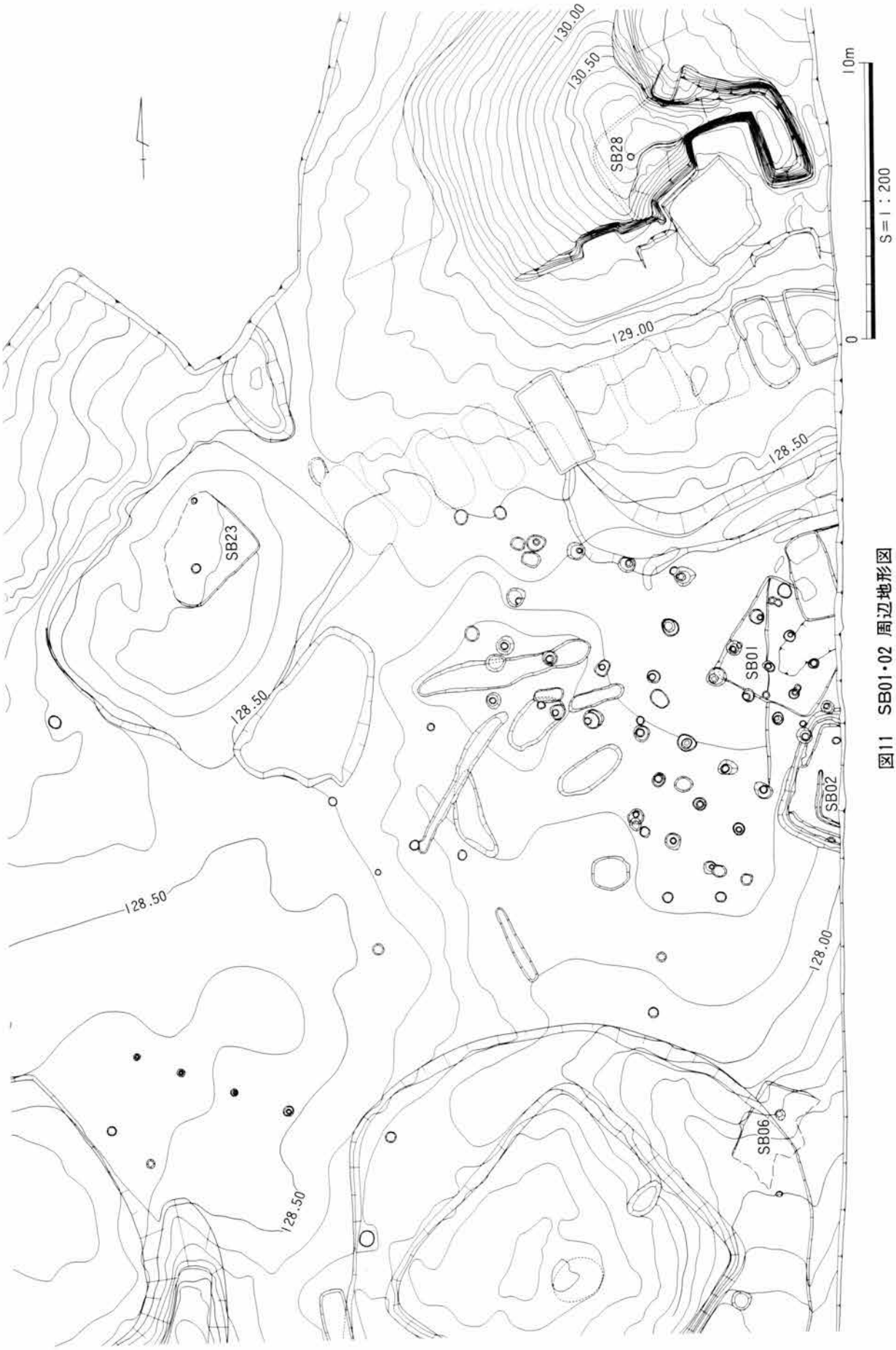


図11　SB01・02 周辺地形図

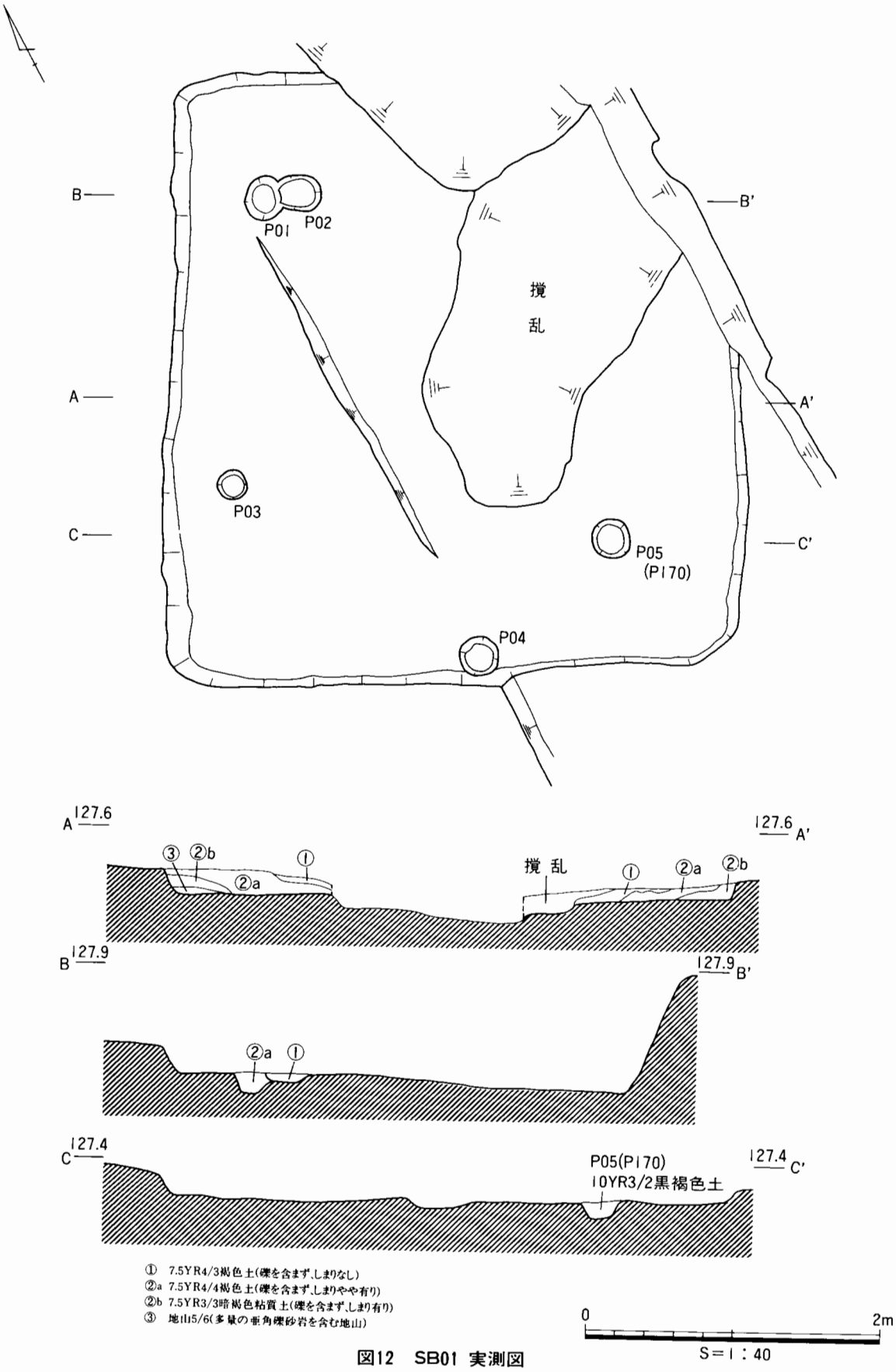

B
B'
A
A'
C
C'
P01
P02
P03
P04
P05
(P170)
撹
乱
A 127.6
127.6 A'
③ ②b
①
②a
撹 乱
①
②a
②b
B 127.9
127.9 B'
②a ①
C 127.4
127.4 C'
P05(P170)
10YR3/2黒褐色土
① 7.5YR4/3褐色土(礫を含まず,しまりなし)
②a 7.5YR4/4褐色土(礫を含まず,しまりやや有り)
②b 7.5YR3/3暗褐色粘質土(礫を含まず,しまり有り)
③ 地山5/6(多量の亜角礫砂岩を含む地山)
0
2m
S=1:40

図12　SB01 実測図

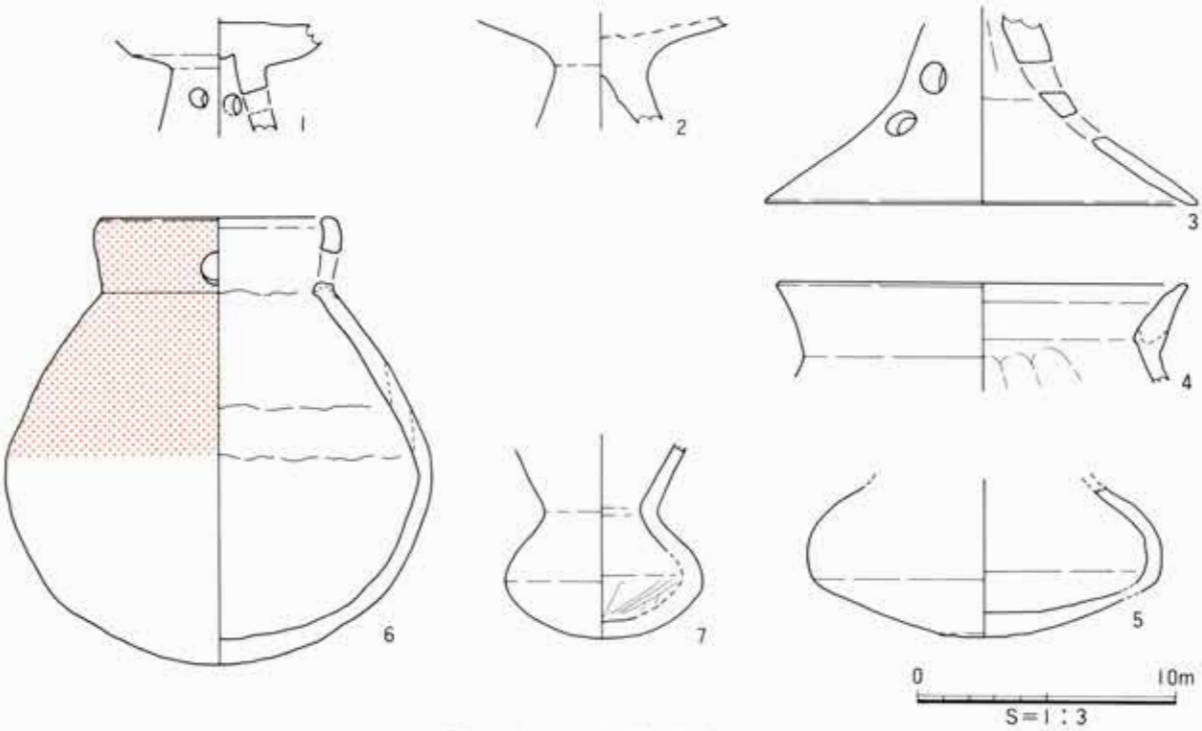


図13　SB01 出土遺物実測図

出土遺物（図13、図版26）

遺物は、高杯３点、甕１点、壺３点が実測可能であった。１と２の高杯は杯部と脚部の一部だけなので具体的な分類はできない。３は、脚部の裾の部分が開くので高杯Ｃ類と思われる。４は、口縁の短く外反する甕Ａ類と思われる。５は、口縁部が欠けているが、壺Ｄ２類の体部である。６は、口縁部から体部にかけて赤彩が施され、口縁と頸部の中間に孔が対で２個みられる。これは、近隣の美濃加茂市為岡遺跡７号方形周溝墓で出土している壺に形が類似している。壺Ｅ類である。７は小型の壺で壺Ｆ類にあたる。

所属時期

土器の種類は多いが、時期の決め手に欠ける。Ⅱ―１期又はⅡ―２期に属すると推定される。

ＳＢ02（図14、図版３）

調査区内北東Ｐ13グリッドにあり、SB01の南に隣接する。隅をやや丸くする住居であるが、調査区内に存在するのは、全体の1/3程度である。地床炉らしき焼土域がやや北に偏っていることから南側を入り口とし、南北方向に主軸を考えた。長さは、南北方向に4.9mある。東西方向は不明である。床面近くまで後世の耕作によって撹乱されているが、北西から西、南に幅約0.32m、深さ0.15mほどの壁溝が見られる。壁溝の内側はやや盛りあがっており、壁溝から水があふれないように考えたものかと思われる。また、中央近くにもＬ字状に幅0.24mほどの溝が見られるが、用途は不明である。住居北側では、壁溝の底から遺構の上端まで0.3mほどある。

床面に柱穴が１つ見られる。位置的にみても住居のものと思われる。他の柱穴は確認できなかった。中央北にやや片寄って焼土があり、断面にも焼土付近にたくさんの炭化物が見られることから、地床

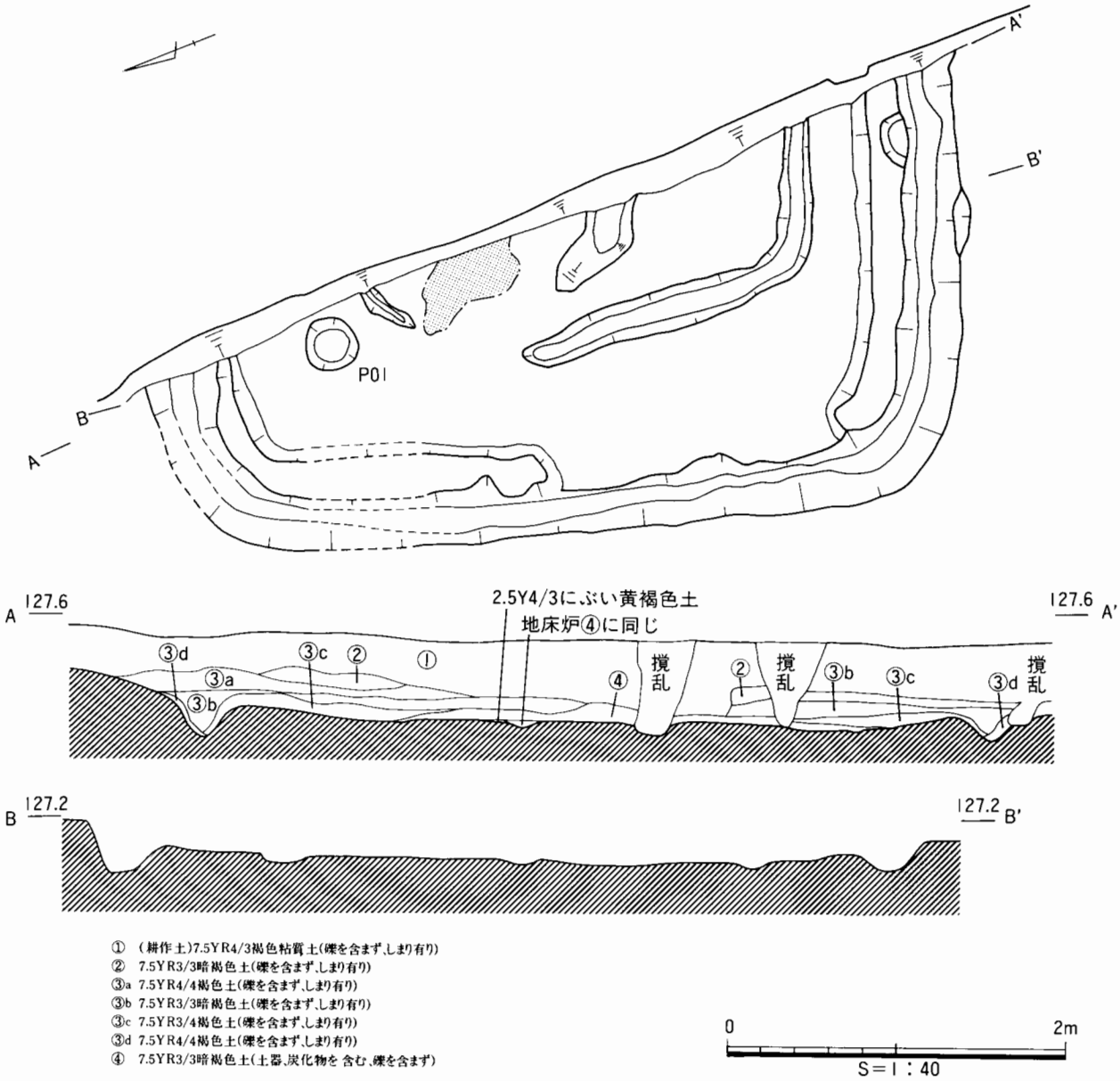


図14　SB02 実測図

炉であると思われる。

SB01との関係は、併存しないと結論づけられるが、切り合い関係があるわけではないので前後関係ははっきりしない。ただ、SB02の方が多少古い要素をもつ高杯が出土していることは間違いないと思われる。

出土遺物（図15、図版26）

遺物は、土器のみである。高杯２点、鉢１点、甕１点、壺１点が実測可能であった。

８の高杯は、杯部が内彎するＡ類のものと思われる。杯部と脚部の比が同じくらいなのでやや古いものかと思われる。９は、高杯の脚の一部で分類はできない。10は、口縁が外反する鉢Ａ類と思われる。外面には炭化物が付着していた。11は、甕Ｂ類の台付き甕の台の部分である。12は、壺Ｆ類の小型の壺である。

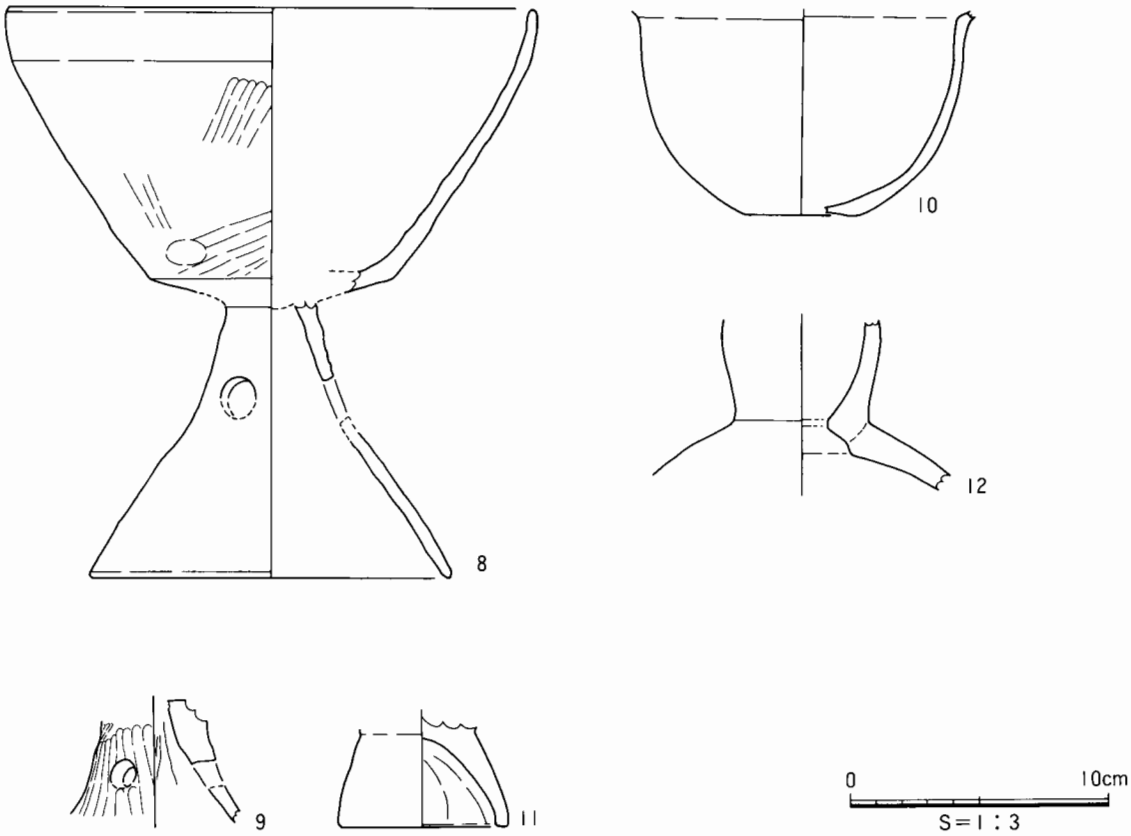


図15　SB02 出土遺物実測図

所属時期

８の高杯がＡ類にあたり、杯部と脚部の高さの比が同じなので、やや古い要素をもつものかと思われる。他の遺物には決め手がなく、高杯から考えて所属時期はⅡ－１期に属すると思われる。

ＳＢ06（図16、図版４）

調査区内東端のＰ15グリッドにある。このあたりは、SB01・02の位置より0.2ｍほど低く南東向きの傾斜もきつい。住居の南東側の床面は傾斜によって削られ不明確である。また南半分は、SX09の北周溝部分によって削られており、住居の状態が明確にわかるのは北西端だけである。四隅のうち北西端の隅しか確認できないが、隅をやや丸くした隅丸方形の竪穴住居であると思われる。山側の高さは0.2ｍほどあり、壁はやや斜めに立ち上がっている。断面の状況から、堆積は自然堆積と思われる。壁際はややへこんでいるようにも思われるが、明確な壁溝は見られない。

床面には、明確な主柱穴ではないが、径0.3ｍ、深さ0.15ｍのＰ01やＰ02の位置は住居に対して適切な位置かと思われる。全体の1/4しか残っていないため、地床炉は確認できなかった。

出土遺物（図17、図版27）

出土遺物は、高杯が２点実測可能であった。

13は、高杯Ａ類に属していると思われる。口縁部には外面に４条の沈線が見られる。また、内外面には炭化物が付着していた。15は、脚部が内彎せず広がることが予想されるので高杯Ｃ類と考えられ

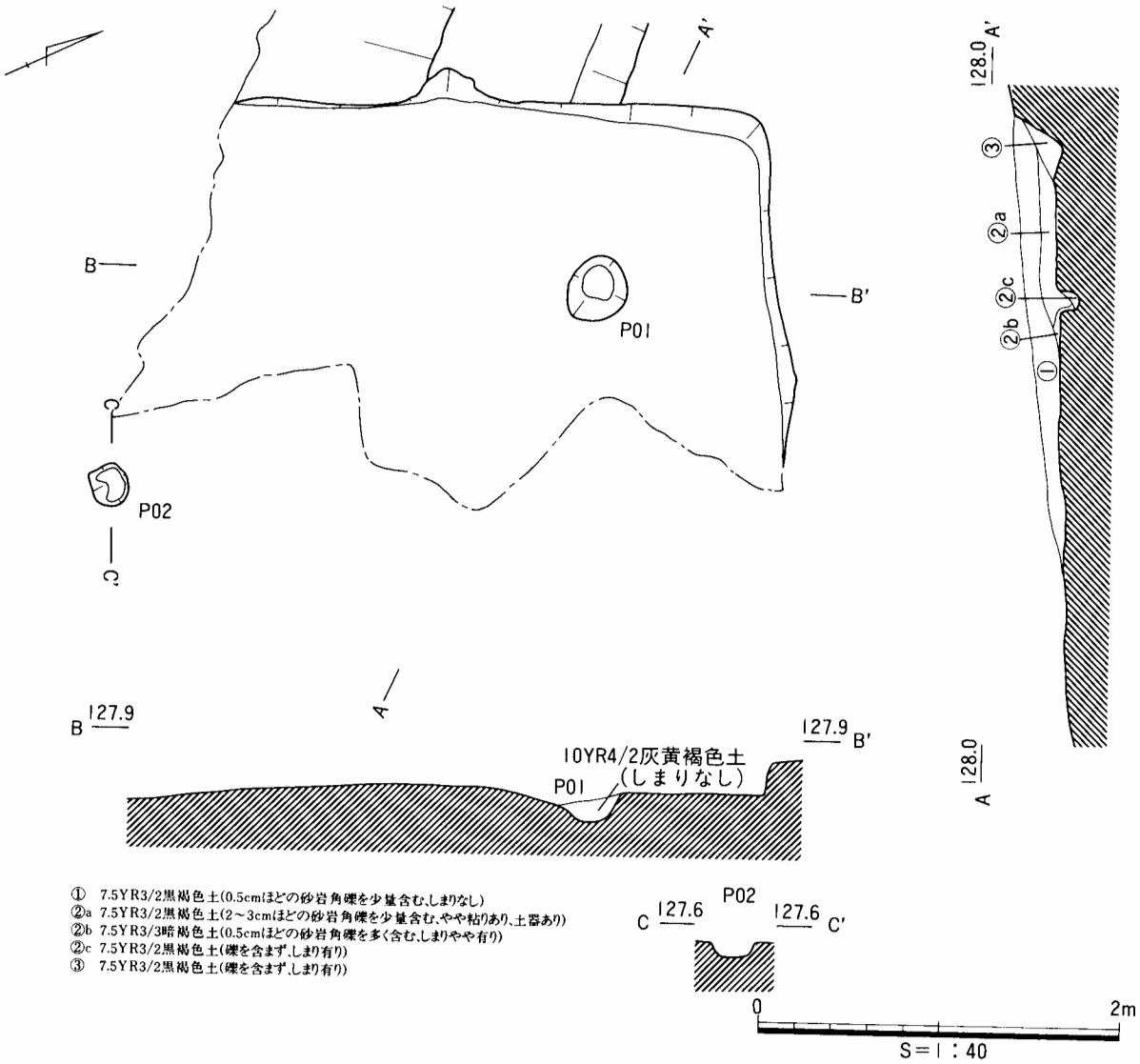


図16　SB06 実測図

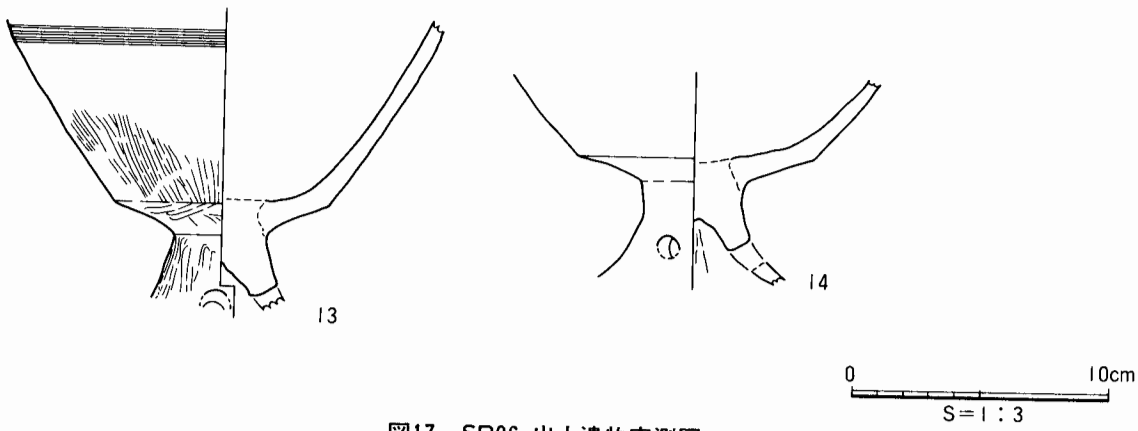


図17　SB06 出土遺物実測図

る。表面の摩耗が激しく、表面の調整などもはっきりわからなかった。

所属時期

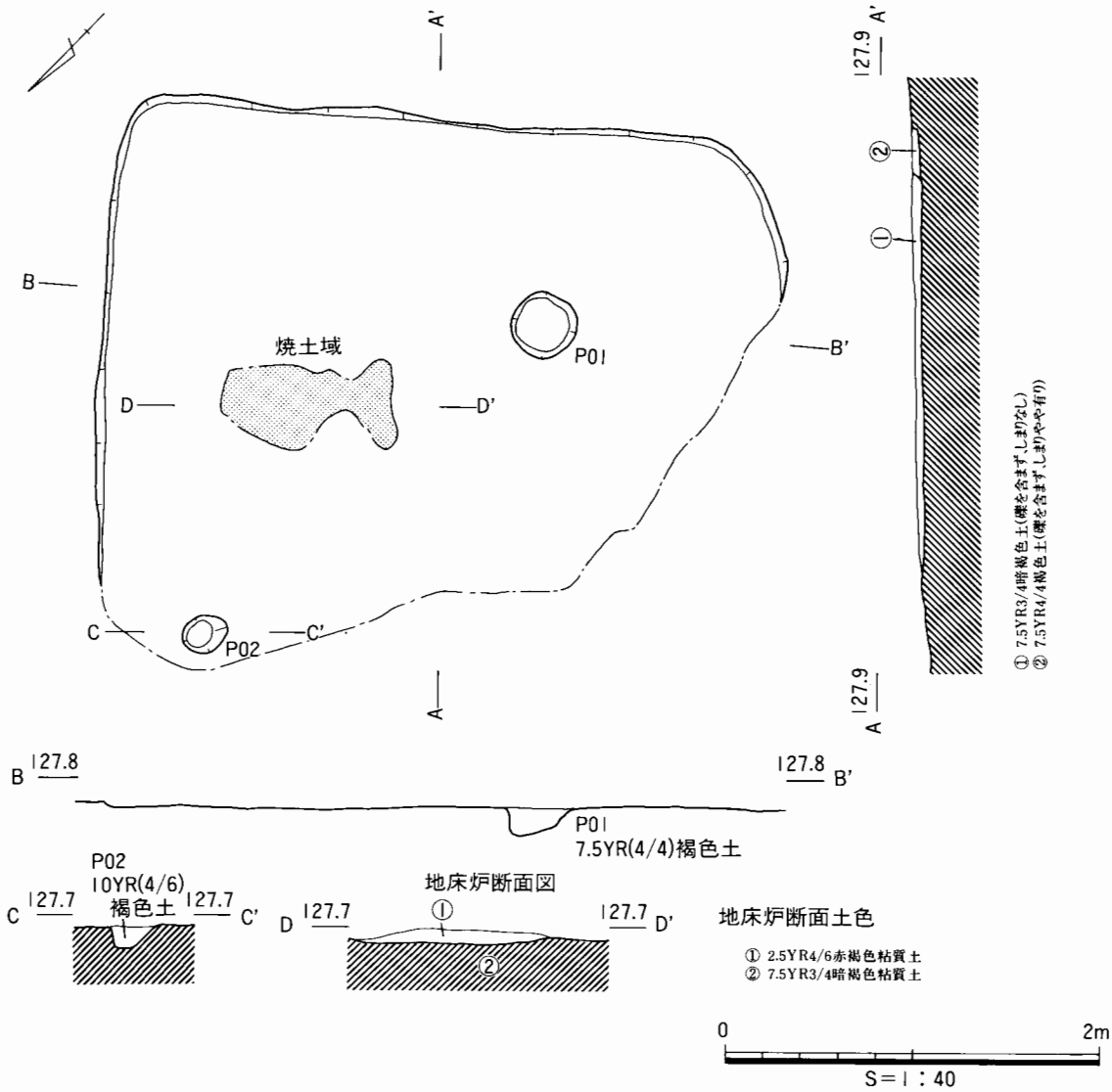


図18　SB23 実測図

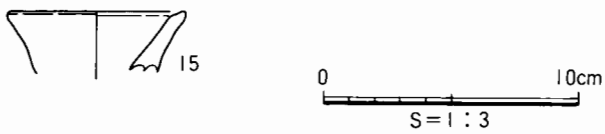


図19　SB23 出土遺物実測図

内彎する高杯Ａ類が存在し、口縁と稜径の差が大きく杯部が比較的深いので、Ⅱ－１期に属すると思われる。

ＳＢ23（図18、図版11）

調査区内北西部のＬ11グリッドにある。SX11（方形周溝墓）の下に存在する。尾根筋に近い所にあり、方形周溝墓墳丘の下で検出したため、比較的平らな面に作られている。しかし、後世の耕作等によって削平されているため、検出面はほぼ床面と同等部分であった。中央よりやや北に焼土域があるので、これを地床炉と仮定して、主軸を南北方向にとった。住居の形は、隅の部分を丸くした隅丸

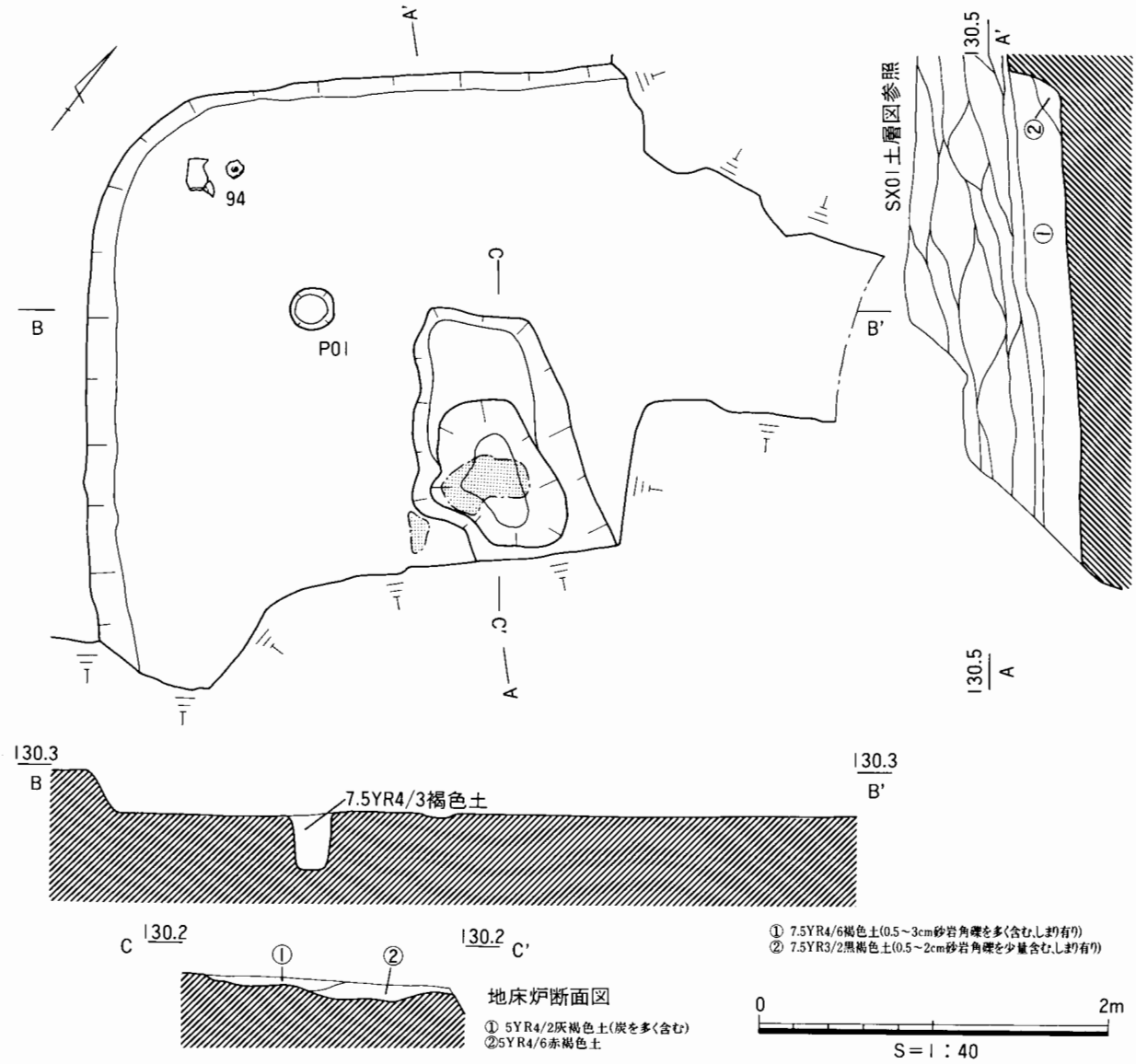


図20　SB28 実測図

方形の竪穴住居である。主軸方向の辺は3.7mあるが、もう1つの辺は住居南西部が欠けているため不明である。壁がほとんど削られているため、深さ、立ち上がりの状況は不明である。壁溝はないと思われる。

床面は削られていて主柱穴も明確ではないが、P01・P02の位置は住居のものとして適切と思われる。P01は径0.36m、P02は径0.24mである。中央部北に焼土域が見られ、これが地床炉と思われる。

出土遺物（図19、図版31）

実測できる遺物は、15の1点のみである。15は、小型の壺Fの口縁部と思われる。

所属時期

SX11の下から検出されているのでⅡ－1期又はⅡ－2期に属すると思われる。

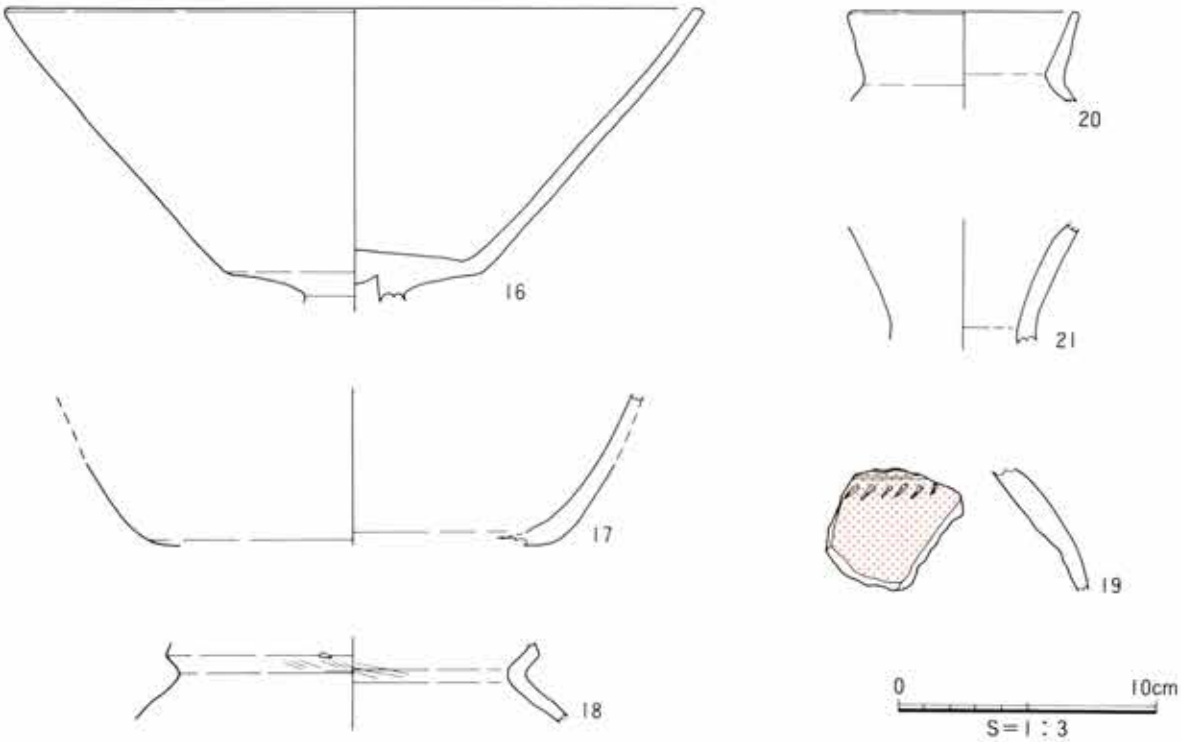


図21　SB28 出土遺物実測図

ＳＢ28（図20、図版11）

調査区内北端のＯ８グリッドに位置する。SX01の墳丘部の下で検出している。近くにはSB01・SB02があるが、0.6ｍほどの高低差が見られ、SX28の方が高い位置にある。平面形は、全体の1/3ほどしか検出していないが、南半分は後世の削平を受け、残った北半分のうち西側しか検出していない。実際には、SX01の盗掘坑断面（図76）を見ると東に向かって遺構がのびており、少なくとも東西方向7.5ｍを超え、他の竪穴住居跡と比べると、大型住居になると思われる。形は、隅を丸くする隅丸方形である。墳丘から続く住居断面図を見ると、間に１層見られるので竪穴住居跡と墳丘の間には時間差が見られる。壁溝は見られない。一辺7.5ｍとすると中央よりやや北西の位置に焼土が見られ、地床炉であると思われる。

図22　SB15・16A・16B 周辺地形図

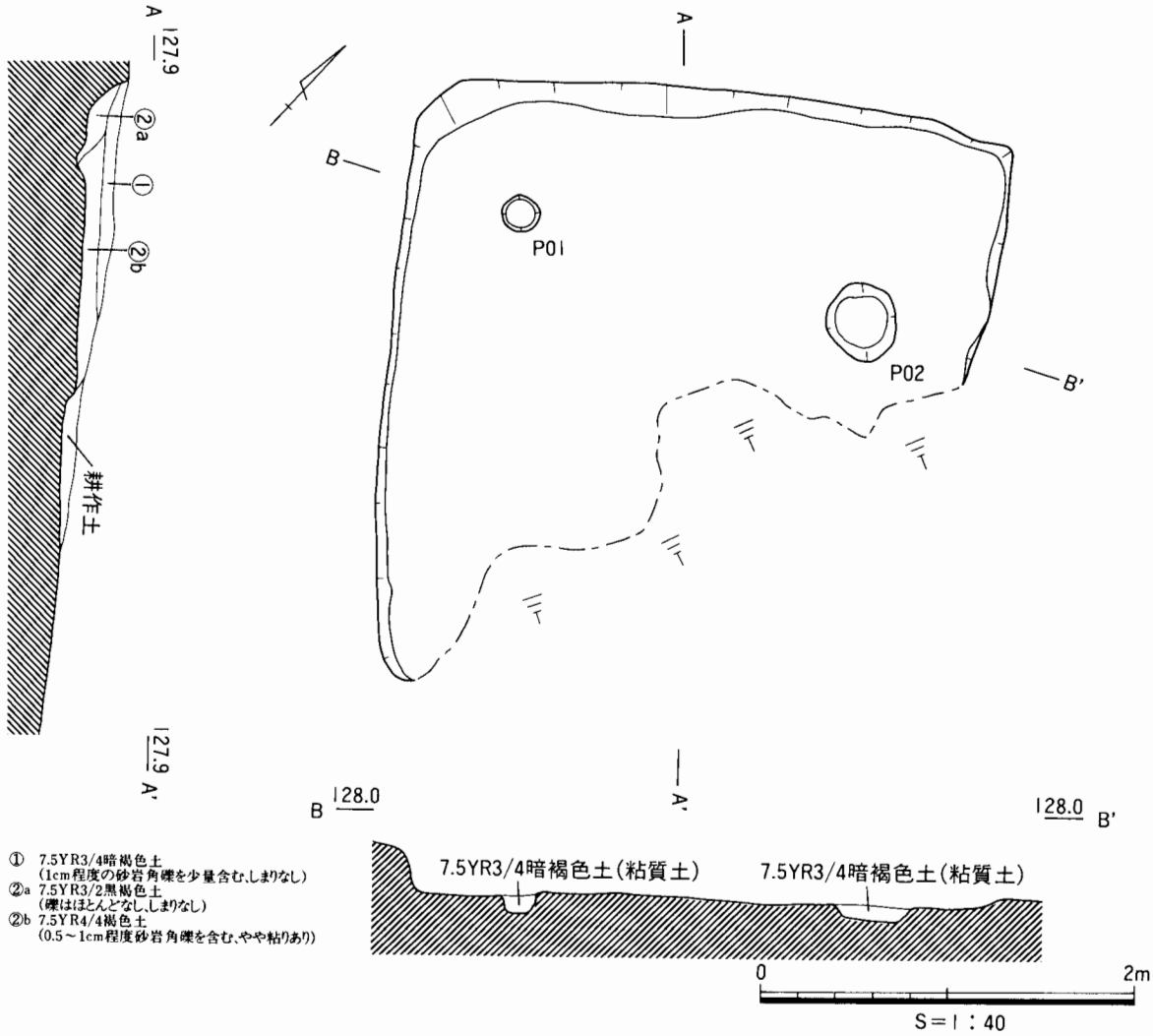


図23　SB15 実測図

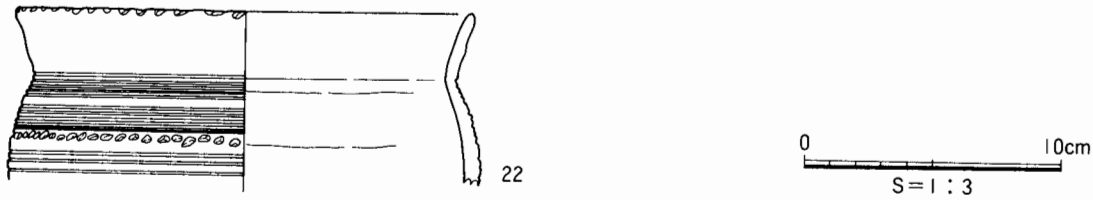


図24　SB15 出土遺物実測図

遺構面は1/3ほどしかないが、主柱穴はP01のみで径0.4m、深さ0.16mである。

出土遺物（図21、図版32）

SB28からは、6点の遺物が実測できた。高杯2点、甕2点、壺2点である。16はやや大きめの高杯で、A類に属する。口縁と稜径の差が大きいが、口縁の内彎傾向がやや弱く、杯部の深さもやや浅い。17は、杯部の破片のみで分類はできない。20は、口縁が短く外反する平底の甕で、甕A類に属する。18は、S字状口縁台付甕で、甕C類に属する。口縁部第2段外面に押し引き刺突が見られ、廻間遺跡S字甕A類に属すると思われる。19は、赤彩を施したパレススタイルの壺A類に属する。体部に

横線一条と横方向の刺突が見られる。口縁の形状ははっきりしない。21は小型の丸底壺の口縁部で、Ｆ類に属する。

所属時期

高杯Ａ類の16とＳ字状口縁台付甕から考えると、Ⅱ－１期に属すると思われる。

遺構配置（図22）

図22は、調査区内中央部の南東斜面に位置する遺構を示している。遺構は、SB15・SB16Ａ・SB16B・SB18があり、これらがほぼ同時期の遺構かと思われる。SB15・SB16Ａ・SB16Ｂは、SX02・SX13の墳丘部下および周溝部下より検出した。また、SB18は、後世の溝SD21Ａに切られている。以上の遺構はⅡ期の遺構と思われる。

ＳＢ15（図23、図版10）

この遺構は、調査区内Ｋ23グリッドにあり、南東斜面に立地しているため、東側半分が削られている。平面形は、隅の部分をやや丸く仕上げた隅丸方形で、主軸を斜面に対し水平方向とすると短軸方向は、3.2ｍある。長軸（主軸）方向は、谷側が崩れているため不明である。斜面にあるため全体の土砂の堆積状況は不明であるが、山側の堆積は、自然堆積であると思われる。山側の立ち上がりはやや斜め方向で、約0.2ｍの深さがある。断面を見る限り、壁際にくぼみがあり壁溝の可能性があるが、平面でははっきりしない。中心部に地床炉らしきものは見られない。

床面は、ほぼ半分しか残っておらず、主柱穴と思われるものは２つある。Ｐ01は、径0.2ｍ深さ0.1ｍ、Ｐ02は、径0.4ｍ、深さ0.1ｍである。

出土遺物（図24、図版29）

出土遺物は１点である。22は、口縁が外傾しているもので鉢Ａ類である。外面には炭化物が付着し、口縁端部にキザミが施されている。頸部下に横線10条と刺突列。その下に横線３条が施されている。

所属時期

遺構をSX02の下から検出しているのでⅡ－１期又はⅡ－２期の遺構と思われる。

ＳＢ16Ａ・16Ｂ（図25、図版11）

調査区内やや南よりのＩ23グリッドにある。この２つの竪穴住居跡は、SX02が耕作によって削平を受けた北半分の墳丘面の下で、遺構確認のために行った精査で検出した。この遺構が検出された背景には、先行して行ったSX02の墳丘断面図作成作業がある。SX02は、発掘調査当初から、一部削平を受けていた遺構で、まず遺構清掃の後、削平を受けた墳丘断面の精査を行った。その結果、構築された墳丘面の下に土坑断面を２つ検出した。この結果を受け、削平を受けたSX02墳丘部の北半分の精査を行った。そしてSB16Ａの輪郭を検出した。SB16Ａの発掘調査は、Ｌ字のベルトを２本設定して遺構内の掘削を４分割で行った。南西ブロック埋土から大量の土器が出土し、ベルト断面を確認し

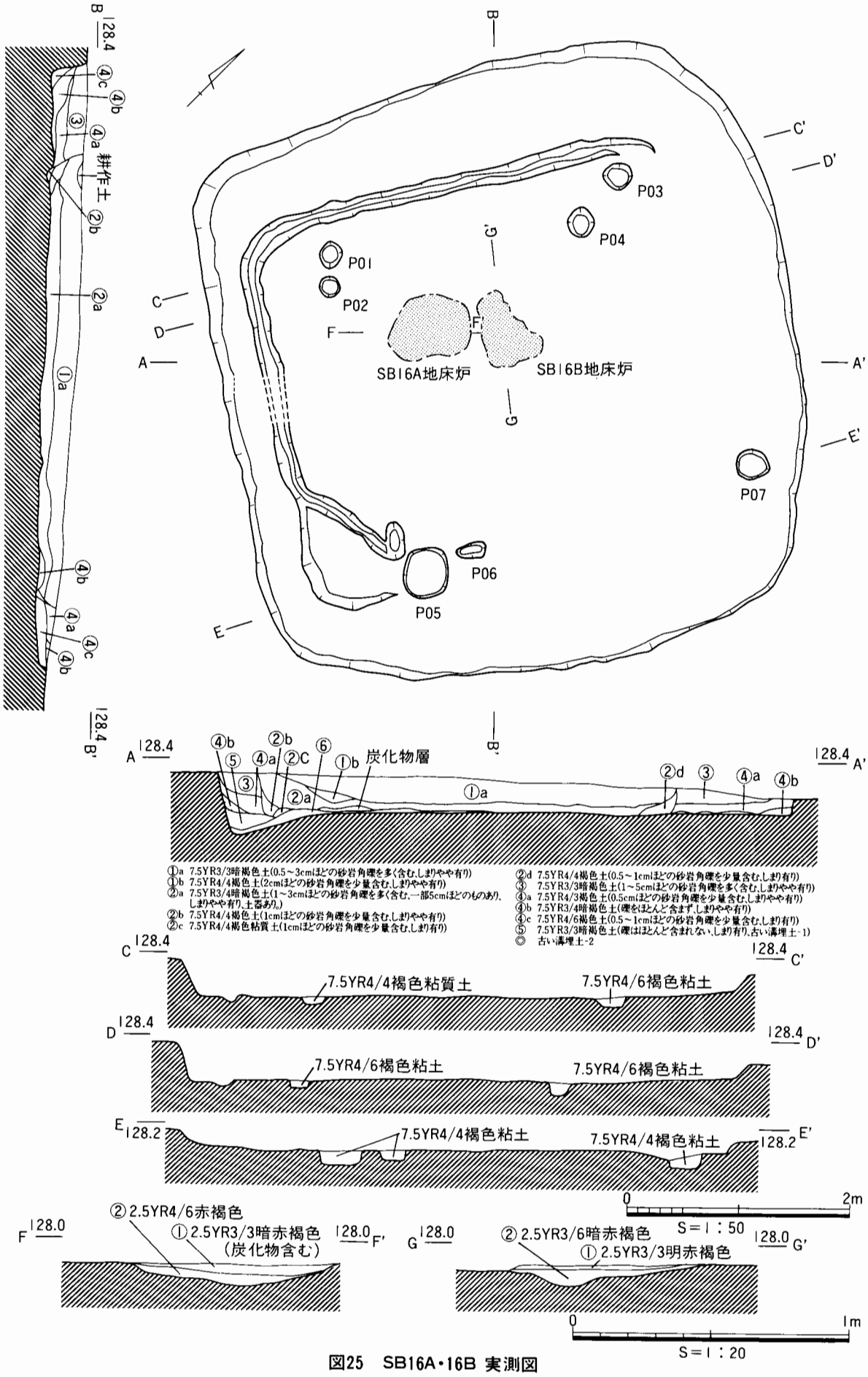


図25　SB16A・16B 実測図

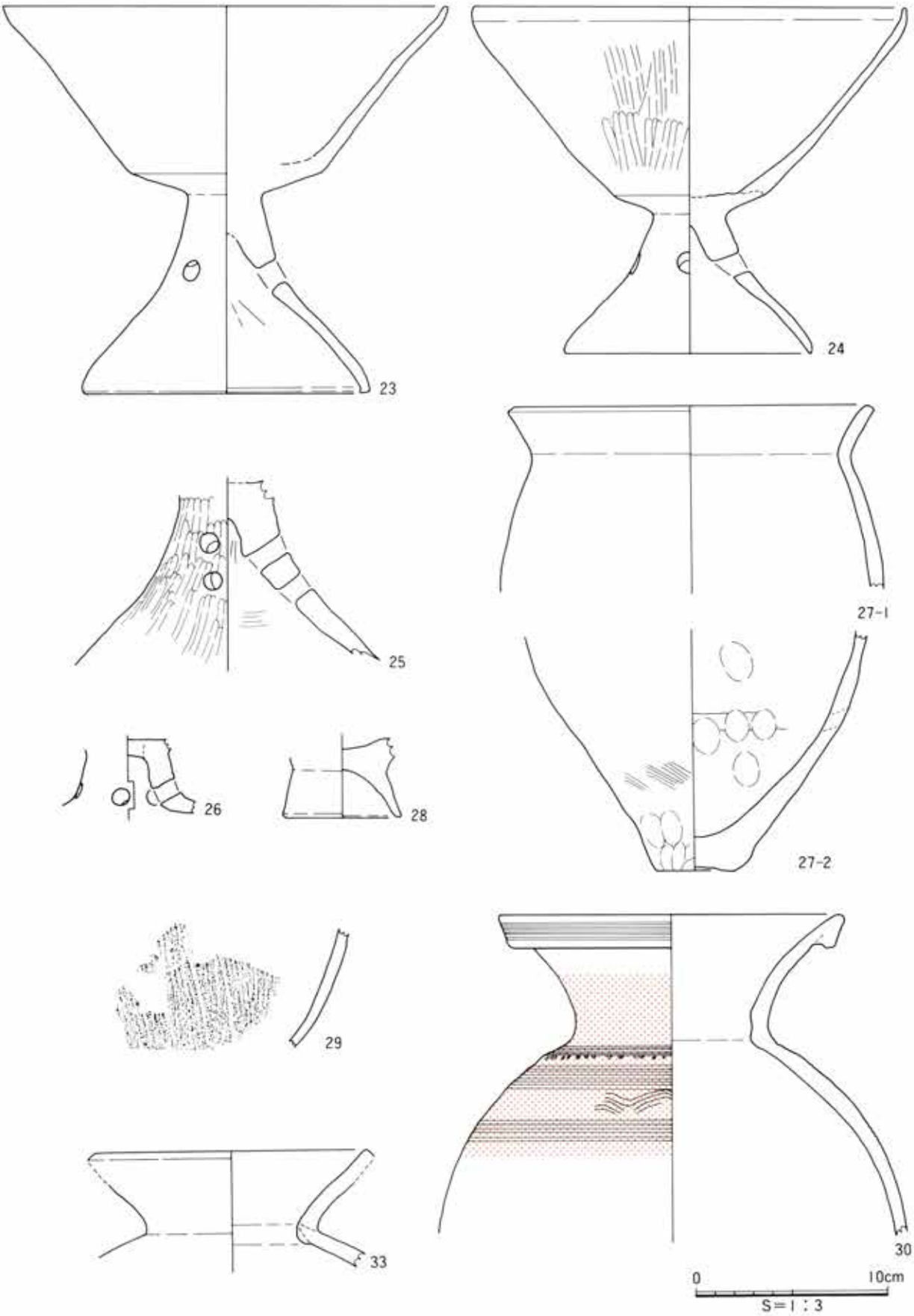


図26　SB16B 出土遺物実測図(1)

たところ、SB16A内にもう1つ住居が存在していることがわかった。これをSB16Bとした。両遺構ともSX02の下から検出したことから、平面形が残っていた。地形的に見ても、尾根筋に近いと思われ、部分的に欠けることなく検出できた。

SB16Aは、四隅を丸く仕上げた隅丸方形をしている。長軸5.9m、短軸5.4m、深さは深いところで0.5mになる。SB16Aの断面をみると、南端がやや深くなっているが、これは、住居が作られる以前の溝の埋土と思われる。その上にSB16Aの床面が作られている。堆積の状況は、隅の方から徐々に堆積しているため、自然堆積と考えられる。壁溝はなく、床面は、SB16Bの床面とほぼ同じか、若干低い程度である。それは、それぞれの地床炉のレベルをみてもほぼ同じくらいであることからわかる。遺構内には焼土域が2カ所あり、やや南に寄っている焼土域が、SB16Aの地床炉だと思われる。主柱穴と考えられるものは6つあるが、P01・P03・P07がSB16Aの主柱穴かと思われる。

SB16Bは、SB16A内でSB16Aと方向を同じにするように検出した。平面形は、検出した壁溝と考えられる溝からみて隅丸方形で、長軸3.9m、短軸3.6m、深さ0.3mぐらいになる。壁溝は、西から南東の辺の一部まで巡っている。2つある焼土域の北側のものが、SB16Bの地床炉である。

主柱穴は7つある穴のうちP02とP04である。P05については、位置から考えるとSB16Aの可能性が高いが、断言できない。

SB16AとSB16Bの前後関係は、断面から見てもSB16Aが古く、SB16Bが新しい。SB16A・BとSX02との関係は、SX02の墳丘断面図をみると、墳丘とその下の遺構の間に1層入っているのでSB16A・BとSX02は連続して存在しないと思われる。

出土遺物（図26・27、図版29・30・31）

SB16AとSB16Bの両方の遺構があるが、遺物はほぼSB16Bの住居範囲から出土しており、実測できた遺物は、SB16Bの遺物と判断した。

遺物は全部で14点実測した。そのうち高杯が4点、甕が3点、壺が6点、石器が1点である。

23は、杯部が内彎する高杯で、高杯A類に属すると考えられる。杯部と脚部の比が同じくらいで脚部の裾の部分の内彎傾向がそれほど極端ではないことから、やや古いタイプのものかと思われる。表面の調整は、器表面があれているため不明である。24は、同じく高杯A類に属するものかと思われる。23に比べ杯部が大きく、脚部が小さい。外面に縦方向のミガキが見られる。23に比べ新しいタイプものかと思われる。25は高杯の脚部であるが、脚の裾の部分がやや内彎傾向を示しているので高杯A類の脚部ではないかと思われる。26は、高杯脚部の一部であるが、脚部の裾の部分の様子から、高杯C類に入ると思われる。27は、口縁が外反する平底の甕で、甕A類になると思われる。28は、台付甕の台の部分で、甕B類のものと思われる。29は、甕の体部片であるが、縦方向の荒いハケを施してあることから、甕C類のS字状口縁台付甕の体部と思われる。30は、頸部から体部上面にかけて赤彩を施したパレススタイルの壺である。壺A類に属する。口縁部分に赤彩が施してあったかどうかは、器表面が摩耗しているためはっきりしない。口縁部は粘土を貼り付け肥厚させ、口縁外面に擬凹線4条を施してある。体部には上から横線6条・列点1列・波状文4条・横線5条の順に施文してある。体部上半分しかなく、底部にかけての形は不明である。31は、壺B1類に属する壺で、プロポーションや施文してある文様は30によく似ている。口縁は肥厚させて、口縁外面に擬凹線を4条施してい

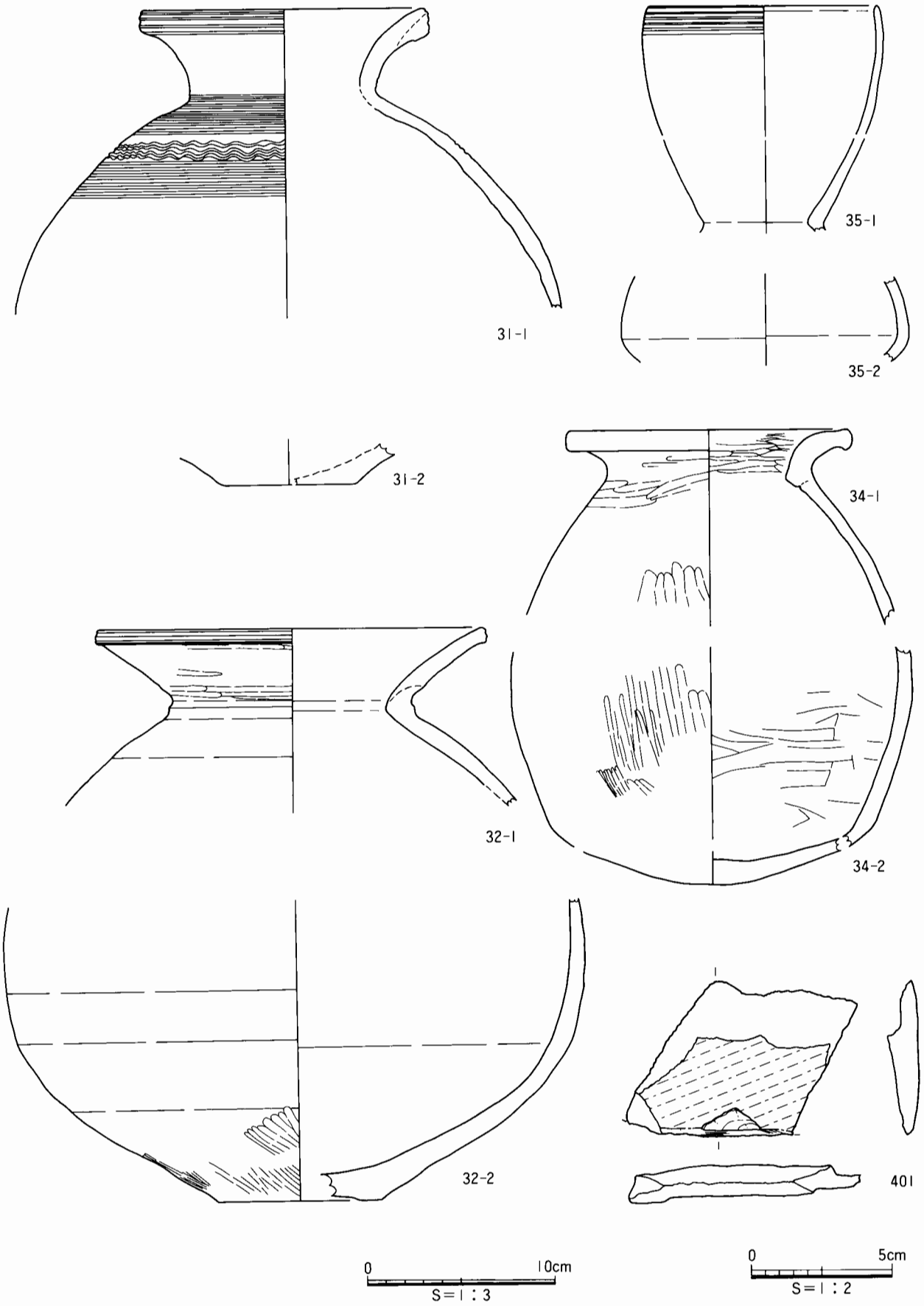


図27　SB16B 出土遺物実測図(2)

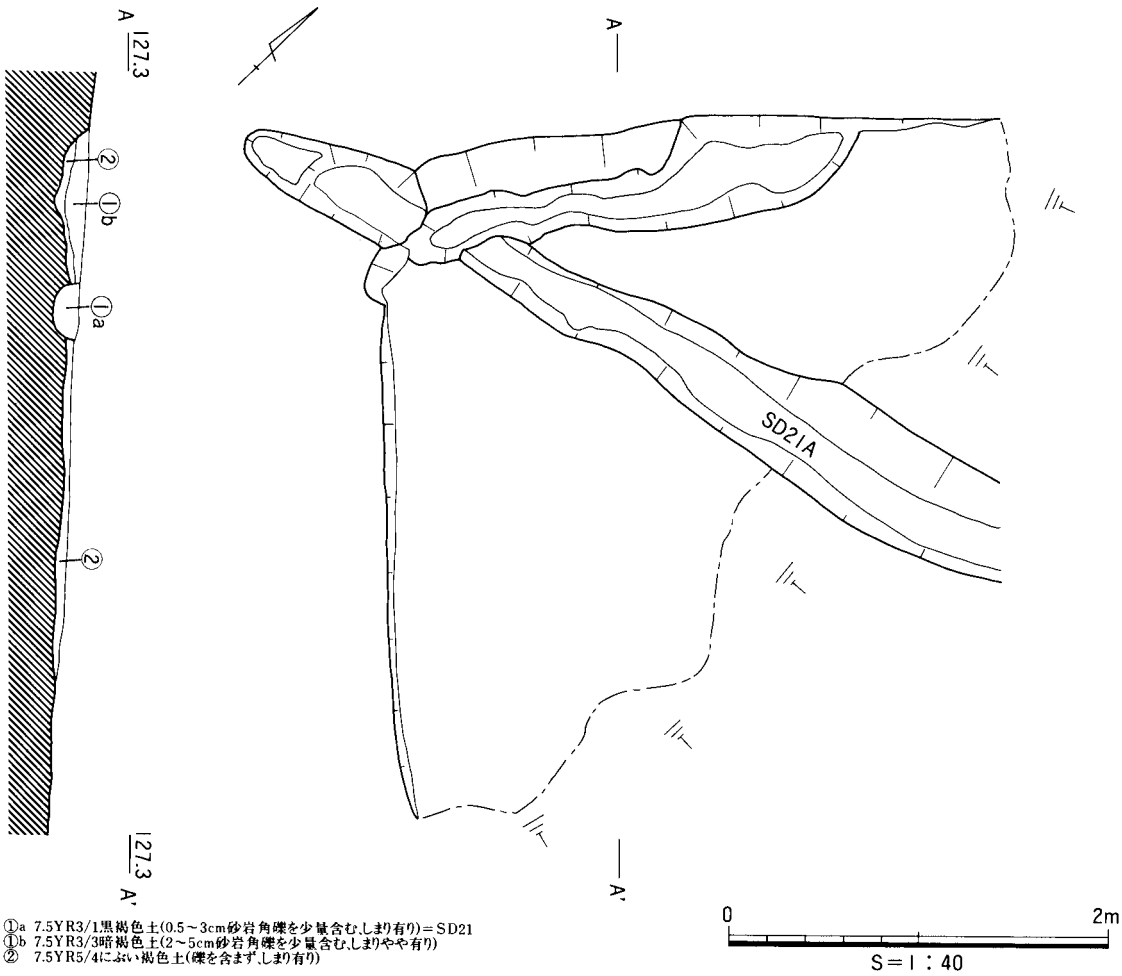


図28　SB18 実測図

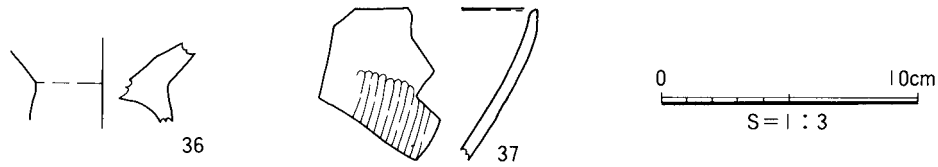


図29　SB18 出土遺物実測図

る。体部には上から横線17条波状文3条横線13条の順に施文してある。底部の一部もあるが、体部下半分の形は不明である。30・31とも器表面が荒れていて細かい調整は不明である。32は、口縁部をくの字に外反させてている広口壺で壺B2類に属する。口縁外面に擬凹線2条を施している。また、口縁下から頸部体部にかけて内外面を磨いている。33もB2類の壺であるが調整は不明である。口縁部から体部の一部までしかない。34は、口縁が短く外反する壺でB3類に属する。外面は口縁部から体部にかけてミガキによる調整が見られる。内面は、口縁部から頸部にかけてミガキ、体部にはナデ調整がみられる。35は、頸部が体部よりも長い壺でD2類に属する。口縁部はやや内彎し、沈線を4条施している。

401はホルンフェルス製の石庖丁である。その他に、泥岩製の打製石斧1点、チャート製のフレイクが2点出土している。

図30　SB07・27 周辺地形図

所属時期

SB16Aについては出土遺物を確認していないが、SB16Bより古い住居跡ということになる。SB16Bについては、23・24の高杯などからⅡ－１期に属すると考えられる。

ＳＢ18（図28、図版11）

調査区中央やや東よりの南東斜面M19グリッドにある。斜面にあるため、谷側部分の遺構の一部が欠けている。東西方向でSD21Aの溝に切られている。この溝は、SB17への流水を防ぐための溝だと

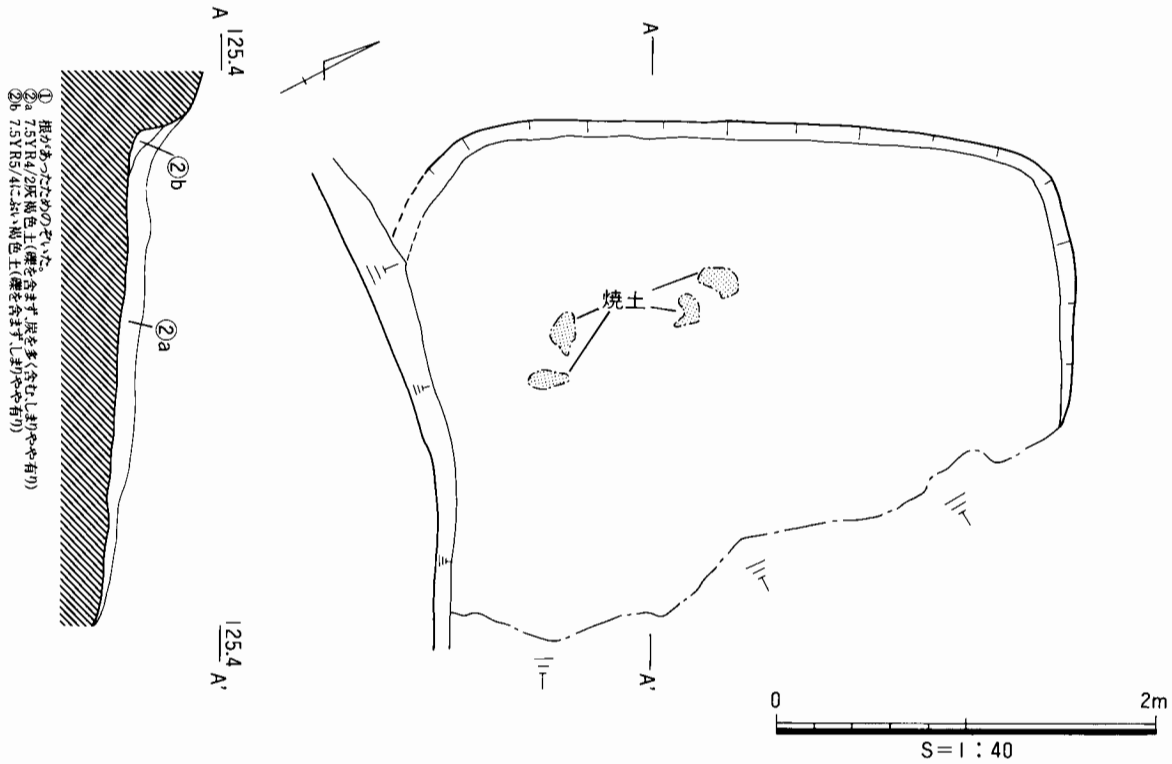


図31　SB07 実測図

図32　SB07 出土遺物実測図

考えられ、このSB17がSB18よりも新しいため、SD21Aの溝もSD18よりも新しい。遺構の残り具合から、平面形は隅丸方形と思われる。住居の規模はわからない。深さは、山側で0.2mある。山側に幅0.25mの壁溝が見られる。床面は、三角形にしか残っておらず、地床炉など付属する施設も確認できていない。また、主柱穴も確認できていない。

出土遺物（図29、図版30）

36と37の高杯2点が実測できた。36は高杯の脚部の一部で、図面の部分だけでは分類できない。37は、口縁部が内彎する高杯の杯部で、高杯A類に属するものと思われる。

所属時期

37の高杯から、細かい時期決定はできないが、Ⅱ－1期又はⅡ－2期に属するものと思われる。

遺構の配置（図30）

図30には、SB07とSB27がある。いずれも遺構の一部しか残っていないが、その原因はそれぞれことなる。SB07は、斜面に立地しているため、谷側が欠けている。SB27は、SX03の下にあり、その周溝を作る時にその北半分が削り取られている。

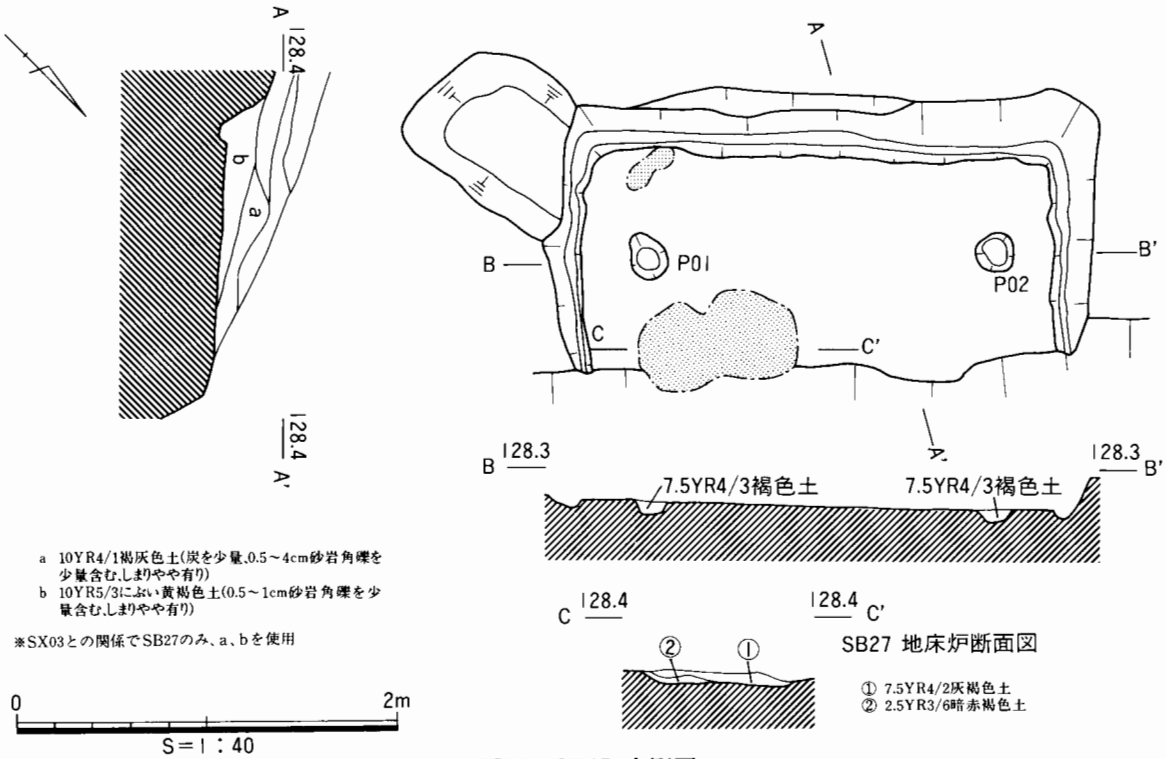


図33　SB27 実測図

ＳＢ07（図31、図版４）

調査区の南東端Ｉ33グリッドにある。南東斜面にあるため、谷側は遺構の一部が欠けている。平面形は隅丸方形である。規模はわからないが、深さは山側で0.2mある。堆積は自然堆積かと思われる。壁溝はない。住居の山側に少し寄った所に焼土域が４ヶ所ほどみられる。地床炉の可能性がある。

床面に主柱穴は確認できなかった。

SB07は、同じ時期の他の竪穴住居跡と比べると、立地している位置が低い。他の住居跡が標高130m前後に位置しているのに対し、SB07は、125m前後の位置に立地している。

出土遺物（図32、図版27）

38の１点のみ実測できた。他にも須恵器片が出土したが、他からの混ざり込みととらえた。38は、壺の底部である。外面にミガキが見られるが、分類はできない。

所属時期

38が出土していることから、Ⅱ期の遺構だと思われる。ただし、地床炉と位置づけた焼土域４ヶ所も、地床炉としての決め手に欠けるし、出土遺物も少ないので細分はできない。

ＳＢ27（図33、図版11）

調査区やや南西Ｌ26グリッドに位置する。SX03の下で検出し、遺構の北半分は、SX03の周溝で切られている。

平面形は残った辺と隅の部分から、隅丸方形だと思われる。中心より焼土が片寄って検出されてい

図34　SB09・10 周辺地形図

る方向を主軸とすると、主軸方向の辺の長さは不明だが、主軸に直行する辺の長さは2.8mで、深さは0.2mである。断面の状況から自然堆積と言えない堆積状況かもしれない。SX03の周溝に切られているので、SX03より古いと思われるが、墳丘土層図（図82）では、竪穴住居跡と墳丘の盛土の間には時期差をあらわす層は見られない。従ってSB27とSX03は連続して作られた可能性もある。

床面は半分しか残っていないが、主柱穴と考えられるものは２つある。Ｐ01は、径0.25ｍ、深さ0.1ｍ、Ｐ02は、径0.2ｍ、深さ0.1ｍほどである。

出土遺物

弥生時代から古墳時代にかけての土器片が20点あまり出土している。器種は不明である。

所属時期

SX03の下にあり、周溝に切られていることから、SX03より古い時期の遺構であると思われる。後述するが、SX03は、Ⅱ－１期の遺構と考えているので、SB27もⅡ－１期をくだらないと思われる。

遺構配置（図34）

図34に見られる遺構は、Ⅳ期の遺構である。今まで紹介してきた竪穴住居跡の位置から比べると約４ｍ～５ｍほど低い位置に集中している。（SB07を例外とする）遺構は、SB08・SB09・SB10・SB11・SB12A・SB12B・SB13A・SA13B・SB13C・SB14A・SB14B・SB22・SB24・SB25A・SB25Bで、切り合い関係にある住居も多い。

ＳＢ08（図35、図版５）

調査区南東部の斜面Ｊ31グリッドにある。北にSB09・SB10、東にSB14A・SB14Bが隣接している。南西部の端は、一部SX05の周溝の縁にかかっている。平面形は隅丸の長方形で、南北方向に長い。南北4.4ｍ、東西3.4ｍ、深さは山側で0.24ｍある。住居内の北から西の壁際に壁溝を持つ。断面から見た堆積状況は、自然堆積によると思われる。

遺構内に主柱穴と思われるものは３つある。Ｐ01は、径0.52ｍ、深さ0.12ｍ、Ｐ02は、径0.4ｍ、深さ0.2ｍで柱の部分が径0.2ｍ、深さ0.76ｍある。Ｐ03は、径0.4ｍ、深さ0.1ｍある。斜面山側やや北寄りに竈がある。竈内から39の鍋の破片が出土した。遺物を取り除くと、赤色に硬化した面を検出した。

出土遺物（図36、図版27）

土師器２点、須恵器１点の実測ができた。39は、土師器の把手付き鍋である。高さ28㎝、幅36㎝の大型のものである。内外面ともハケで調整されている。40は、くの字に開いた甕の口縁部分である。41は、須恵器で横瓶の体部である。

所属時期

出土した須恵器から見るとⅣ期の７世紀後半の遺構だと思われる。

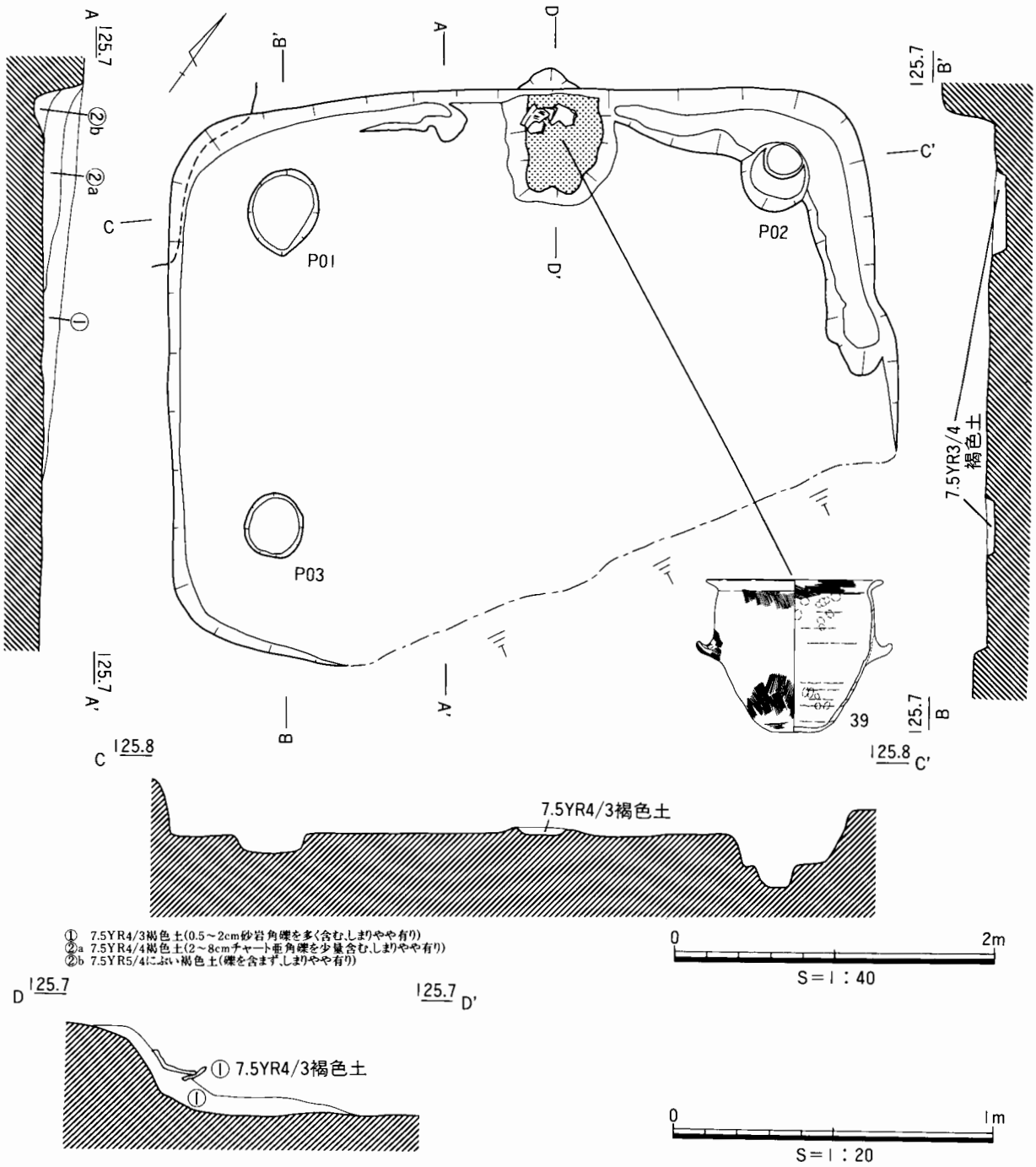


図35　SB08 実測図

ＳＢ09（図37、図版５）

調査区内南東斜面のＫ30グリッドにある。隣にSB10があり、SB10によって切られている。南東斜面にあるため、谷側部分が欠けている。平面形は、隅丸の方形であるが規模はわからない。深さは0.2ｍほどである。山側はなだらかに立ち上がっている。断面からみると堆積の状況は、自然堆積だと思われる。南西隅から南に向かって壁溝が残っている。

主柱穴と思われる穴は、２つある。Ｐ01は、径0.12ｍ、深さ0.4ｍ、Ｐ02は、径0.2ｍ、深さ0.16ｍである。Ｐ01が極端に深い。床面は谷側とSB10側が削られている。床面の山側近くに焼土が見られるが、地床炉および竈ではないと思われる。

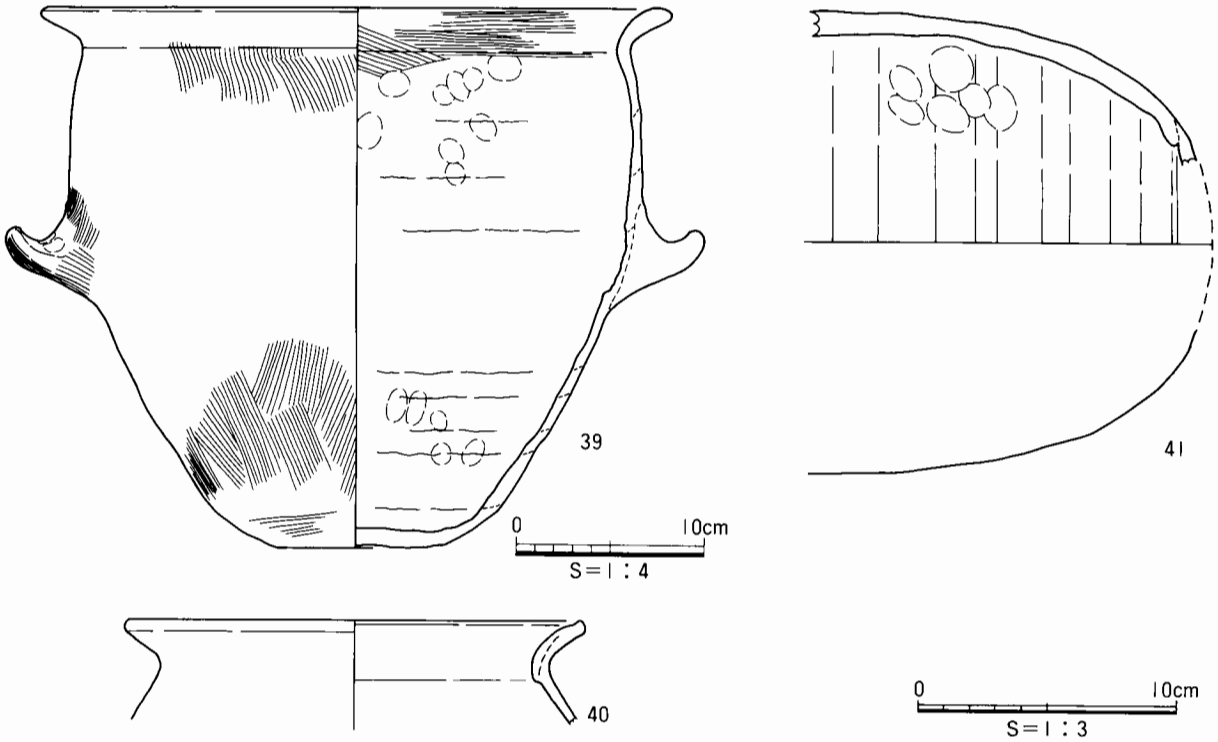


図36　SB08 出土遺物実測図

出土遺物

土師器片が９点出土している。器種は不明であるが、古墳時代の土師器と思われる。

所属時期

土師器の様子からでははっきりしないが、Ⅳ期に属するものと思われる。

ＳＢ10（図38、図版６）

調査区内南東斜面Ｋ29グリッドにある。南にSB09が隣接している。SB10が、SB09を切っている。平面形は、谷側が欠けているが隅丸の方形であると思われる。規模は、南北方向に4.2mあり、東西方向は不明であるが、深さは山側で0.2mほどある。山側の辺が削られていて、山側斜面の傾斜がなだらかになっている。壁溝は南の壁際と、西の山側にある。壁溝内に径0.08m、深さ0.08mほどの杭列が約0.5m間隔で、南北方向に４つ並んでいる。これは、山側の壁を意識して打ち込まれているように思われる。山側の傾斜がなだらかになっているが、土砂が住居内に流れ込んでこないように杭の西側に板を挟んでおいたものではないかと推測する。本来ならばこの位置に竈が作られると思われるが、そうせずに、上記のようにした意図があるはずである。遺構内床面に、多数の須恵器片が散在していた。器種も多彩で、杯身、杯蓋、捏鉢などがあった。特に、北壁近くから出土した須恵器は、大型の横瓶であり、生活用具なのか他に使用目的があるのかは、不明である。

床面は谷側で切られているが、柱穴が３つ残っている。そのうち主柱穴と思われるものは、径0.24m、深さ0.08mのＰ01と径0.32m、深さ0.04mのＰ02である。付属施設としての竈などは、確認できなかった。他の同じ時期の竪穴住居跡と比べて、遺物の出土量が多く、大型横瓶や杭列等もあり、何か特別な意味を持った住居跡の可能性もある。

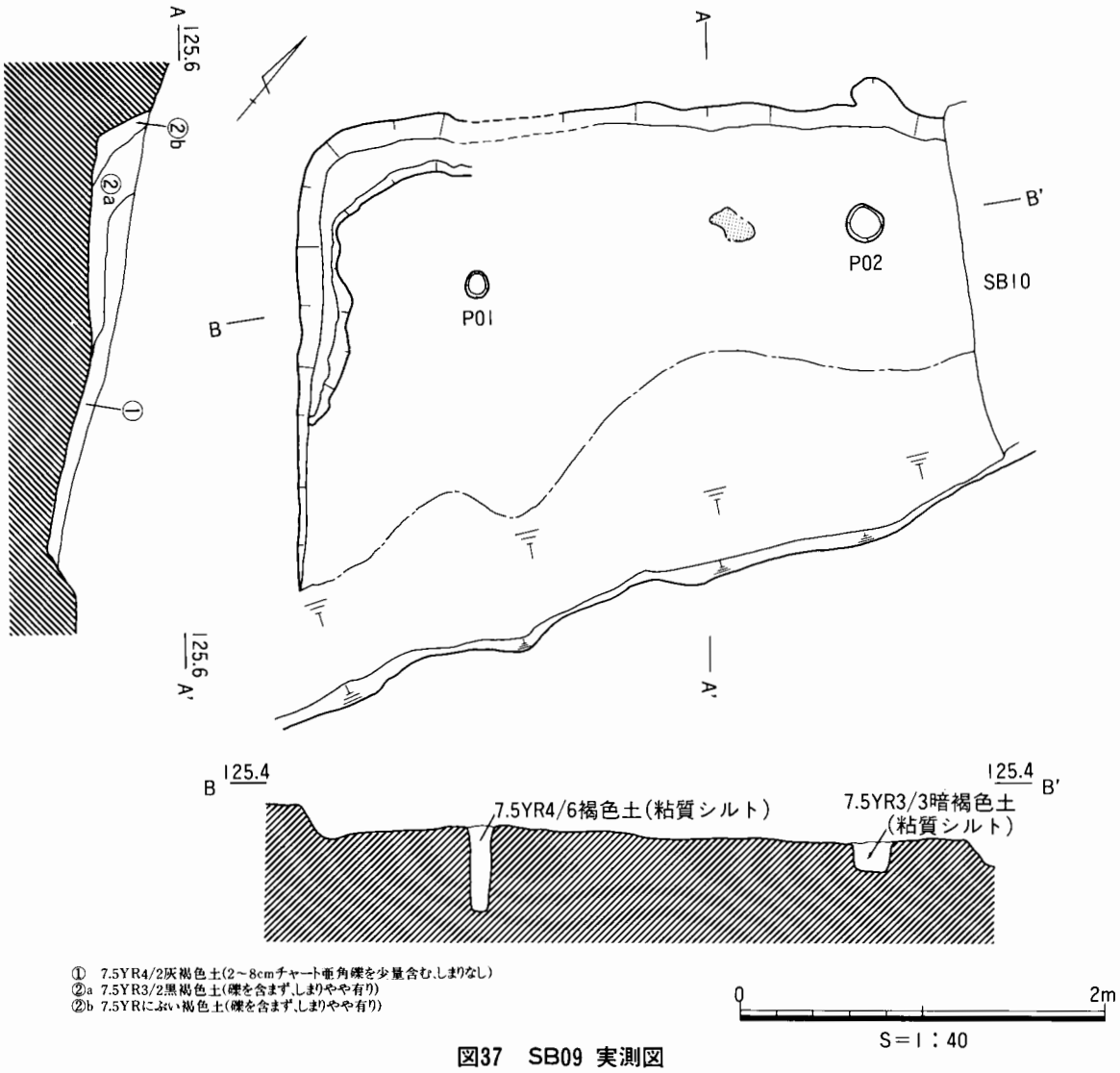


図37　SB09 実測図

出土遺物（図39・40、図版27・28）

この住居跡から出土した遺物の中で、実測できたのは次のものである。土師器の鍋または甑1点、小型の手づくね土器1点、須恵器の蓋5点、杯身2点、高杯2点、捏鉢1点、壺1点、横瓶1点、金属片1点である。

42は、土師器の鍋または甑である。把手がついているが、底の部分がないので、鍋か甑なのかは区別がつかない。外面には縦方向のハケが見られ、内面には指頭痕が見られる。43は、小型の椀である。ロクロを使用したものではなく、手づくねであろうと思われる。44から48は、須恵器の杯蓋である。44は、天井部を回転ヘラ切りしたあとナデて仕上げている。口縁部が内彎するタイプである。45は、天井部を回転ヘラケズリして口縁部分を回転ナデで仕上げている。天井部から口縁部の途中に稜線が入り、口縁部にかけてやや外反する。46は、45と同じタイプの杯蓋である。47は、やや小型で天井部から口縁部の途中に稜線が入り、そこから口縁にかけて内彎する。48は、かえりのついた杯蓋である。かえりの先端は、口縁ラインよりもやや下がる。46～48についても天井部は回転ヘラケズリを行い、口縁にかけて回転ナデを施してある。いずれも7世紀後半の須恵器であるが、47・48は7世紀後半のなかでも終わり頃のものかと思われる。産地は46のみ猿投産で、残りは美濃須衛産である。49・50は

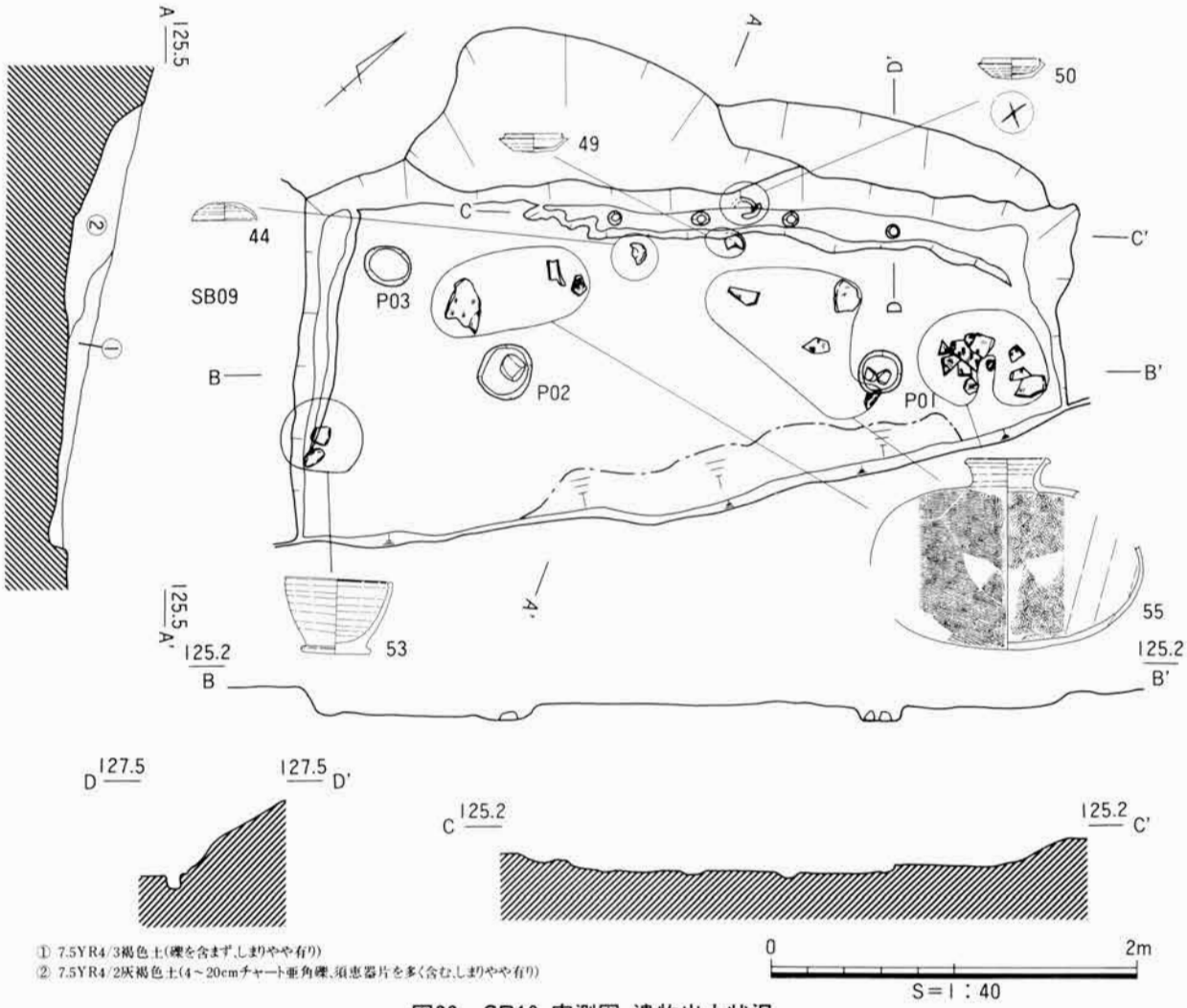


図38　SB10 実測図 遺物出土状況

杯身でどちらも７世紀後半のもので、産地は美濃須衛産である。49は、底部は回転ヘラケズリを行っている。50の底部には×印の線刻が見られる。51は、透かしのない高杯で杯部外面の下の方、脚部との境の基部まで回転ヘラケズリを施している。脚部の先端の屈曲が鋭角である。７世紀後半の尾張産の須恵器と思われる。52は、高杯の脚部であるが、透かしはなく全体にナデを施した７世紀後半の美濃須衛産と思われる。53は捏鉢である。全体に回転ナデ調整を行っている。54は、台付き長頸壺の体部である。高台の作りがシャープな感じで、内面のロクロ痕をスリ消している。７世紀後半の尾張産の須恵器である。55は大型の横瓶で、住居内で使用するものとしては大型で、７世紀後半の美濃須衛産である。

所属時期

須恵器の年代から見て、Ⅳ期の７世紀後半に属するものと思われる。

ＳＢ11（図41、図版６）

調査区内南東斜面Ｋ28グリッドにある。東にSB12A・SB12B・SB13A・SA13B、南にSB09・SB10がある。平面形は、遺構の谷側部分が欠けているので正確ではないが、隅を丸くおさめた隅丸方形をし

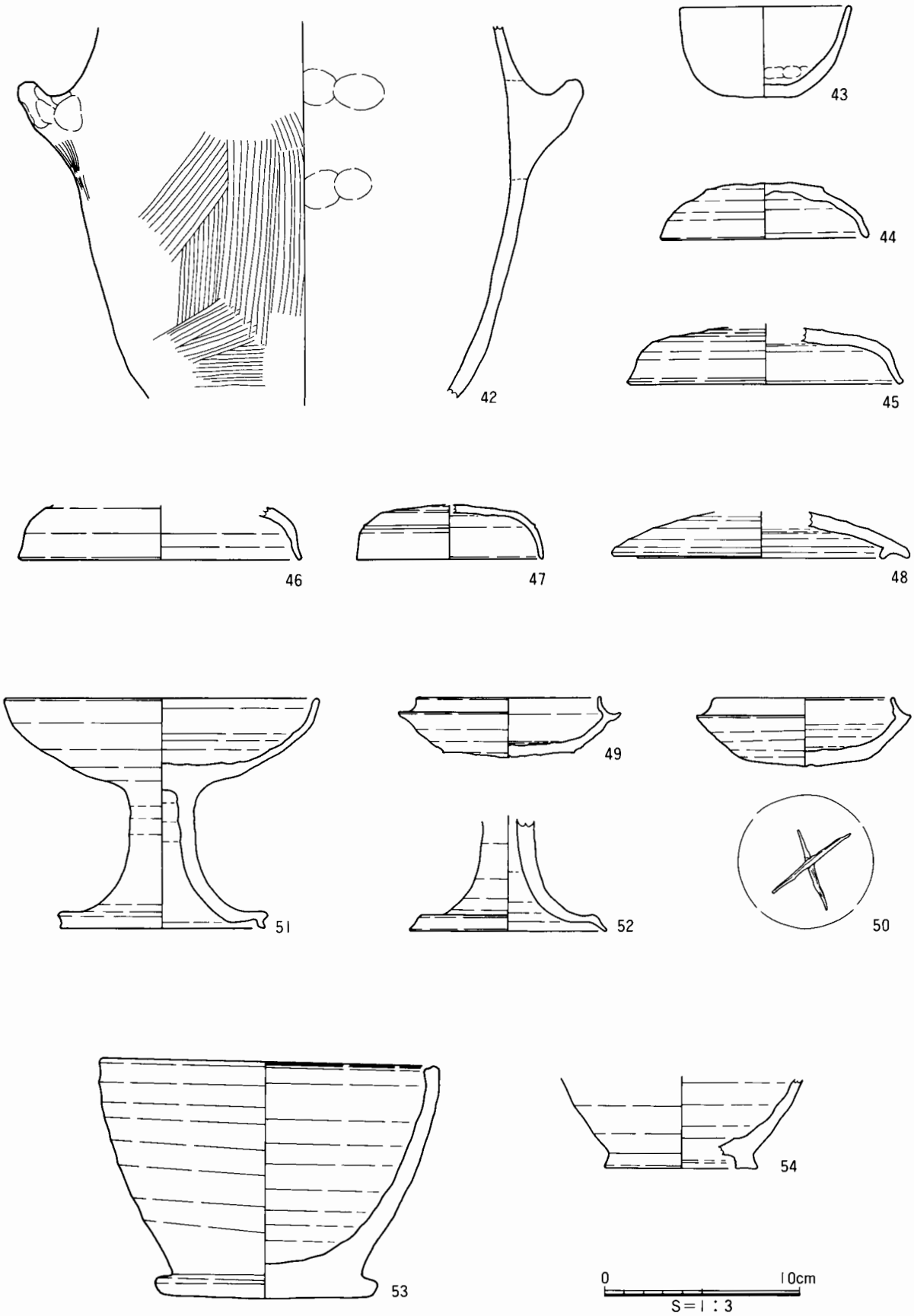


図39　SB10 出土遺物実測図(1)

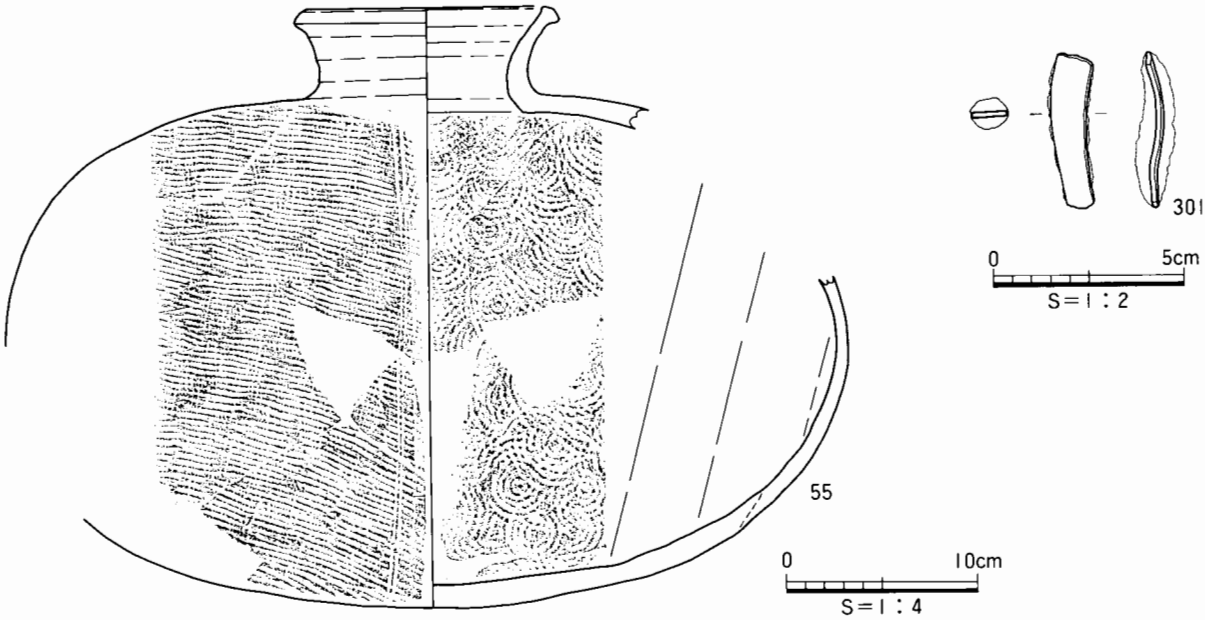


図40　SB10 出土遺物実測図(2)

ている。南北の辺が3.6mで、深さが山側で0.2mある。北側の一部分が現代溝で削られている。遺構の山側の壁の立ち上がりは垂直ではなくやや傾斜がある。断面の状況から堆積は、自然堆積かと思われる。壁溝は見られない。床面も谷側が欠損しているが、主柱穴と思われる柱穴が２つある。P01は、径0.25m、深さ0.08m、P02は、径0.24m、深さ0.12mある。付属する施設はない。

出土遺物

出土遺物は、土師器の破片が６点ほど出土している。破片なので器種等ははっきりとわからない。どちらかといえば、古墳時代後半の土器の胎土、焼成である。

所属時期

遺構の付属施設として竈や地床炉などもなく、出土遺物も限られているが、土器の焼成・胎土や地形的に見た遺構の位置などから推察すると、Ⅳ期に属する可能性が高いと思われる。

ＳＢ12Ａ・12Ｂ（図42、図版６）

調査区内南東斜面のＬ28グリッドからＬ29グリッドにかけて存在する。SB12Aと12Bの近くには、西にSB11、南にSB10、北にSB13Cがある。SB12は、SB12Aが南側でSB12Bが北側になる。切り合い関係は、断面やSB12Aの残り具合から見ると、SB12Aが、SB12Bを切っており、SB12Aの方が新しいように見える。また、SB12Bは、北隣のSB13Cにも切られている。逆にSB13Aを切っているように見える。

ＳＢ12Ａ

SB12Aは、北西隅の部分しか残っていないが、角が丸いので隅丸方形の住居ではないかと思われ

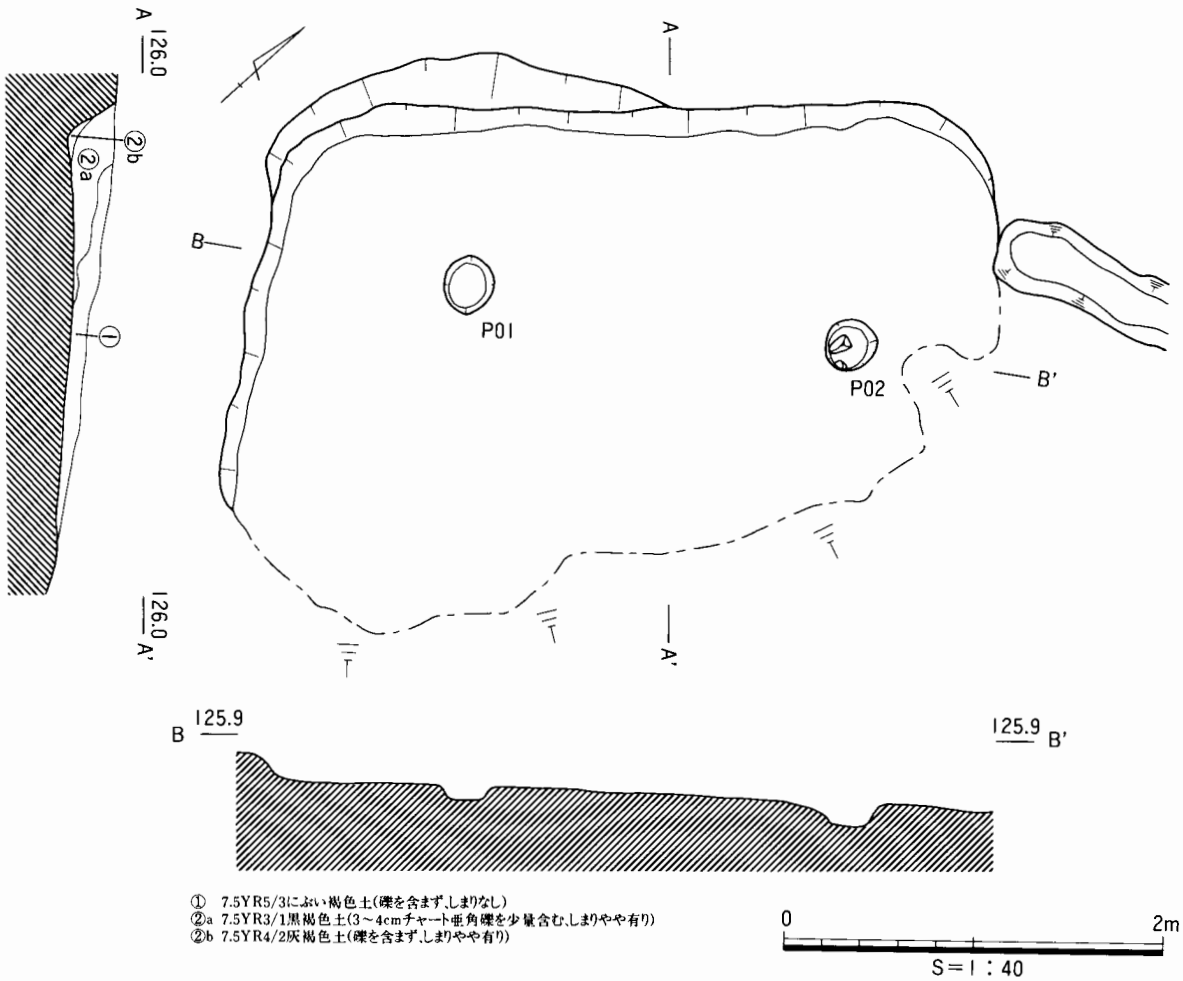


図41　SB11 実測図

る。大きさはわからない。山側の斜面が一部崩れているようで、住居の立ち上がりが2段になっているように見えるが、実際には内側の傾斜が遺構の本当の立ち上がりではないかと思われる。外側の傾斜は、後世に崩落したあとではないかと思われる。SB12Bとの境にある焼土域も、その部分がSB12Aの竈のあった所だとすると丁度よい。そうするとSB12Aの竈は北壁に接する場所にあったことになる。断面からみると、遺構は自然堆積によって埋没したと思われる。壁溝は北向きの壁および西向きの壁際にある。

残存規模も小さく、床面の残りが悪い。主柱穴は確認できない。

出土遺物（図43、図版28）

SB12Aから出土した遺物で実測できた物は2点である。1点は、56の把手付き鍋または甑である。把手部分に縦方向のハケ目がみられ、先は指によって形が整えられている。57は、須恵器の杯蓋である。かえりの部分が欠けているので細かいことはわからない。7世紀後半の猿投産のものではないかと思われる。

所属時期

須恵器の年代観から、7世紀後半のⅣ期にあたる。

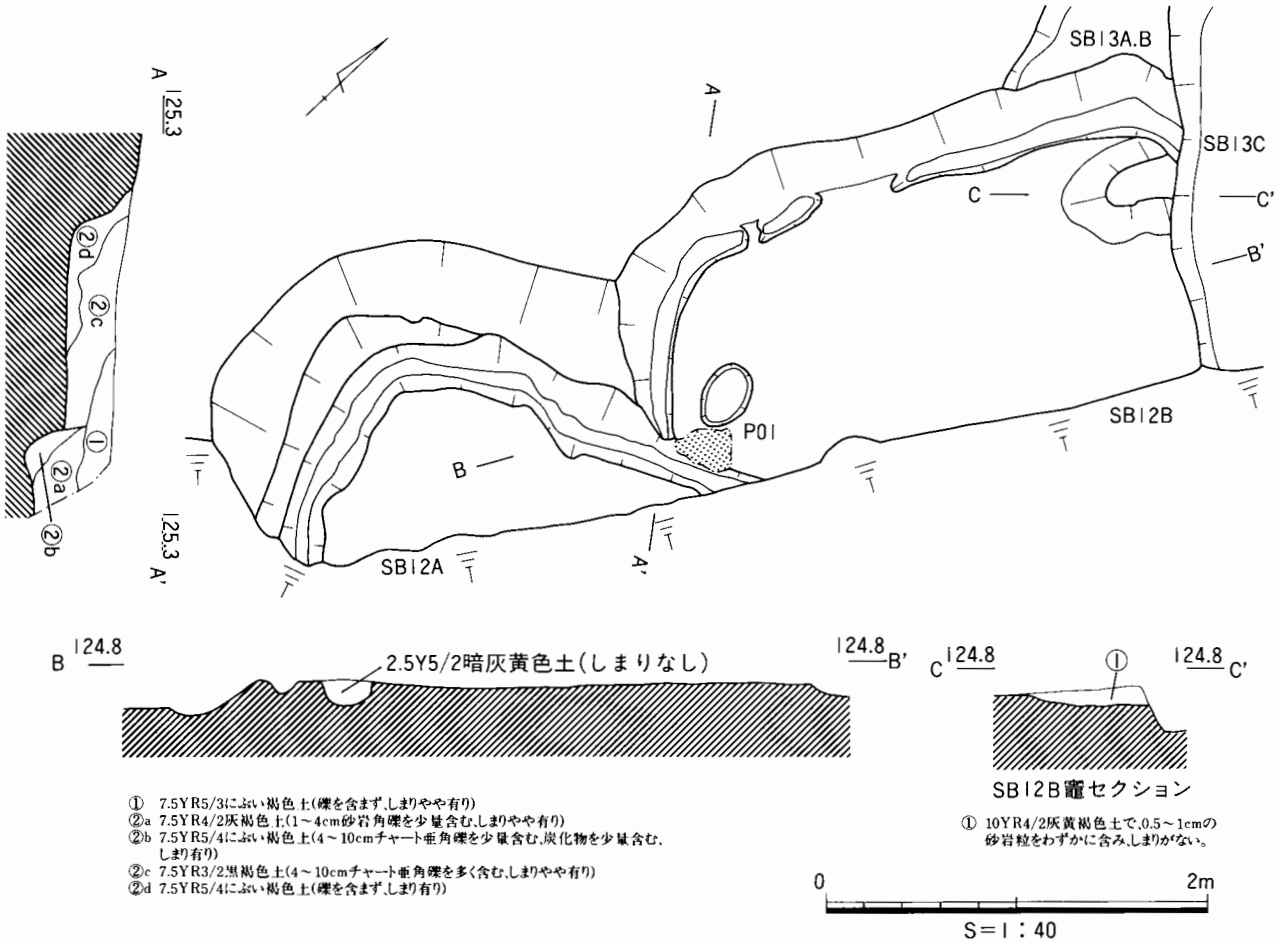


図42　SB12A・12B 実測図

ＳＢ12Ｂ

SB12Aの北側にある12Bは、隅丸の方形だと思われる。長さははっきりしないが、深さは０.３ｍほどである。山側の壁の立ち上がりは垂直ではない。埋没していく状況も自然堆積かと思われる。山側（西）の壁沿いには壁溝が見られる。

柱穴は１つしか見られないが、主柱穴にあたると思われる。Ｐ01の径は長い方が0.32ｍ、短い方が0.20ｍで、深さが0.12ｍである。他の住居では山側の辺に竈を作っていたが、この住居では、山側ではなく、住居の北の辺に対して作っている。一部はSB13Cによって削られている。

出土遺物（図44、図版28）

58は、土師器の把手である。鍋のものか、甑のものかはわからない。把手全体を指でおさえて調整してある。59・60は、土師器の鉢である。59は、内彎傾向をもち、口縁端が少し立ち上がるものである。土器全体が他の土器と比べて赤い。60は、口縁に向かって広がる鉢である。56と同じように器表面が赤い。内面の体部には、斜め方向と縦方向の暗文のようなミガキがみられる。61は、甕の口縁部分である。短く外反し、口縁部から頸部にかけて横・斜め方向のハケ調整が見られる。62は、須恵器の杯身である。７世紀後半のもので、産地は尾張のものかと思われる。

石器は402の打製石斧が１点出土している。

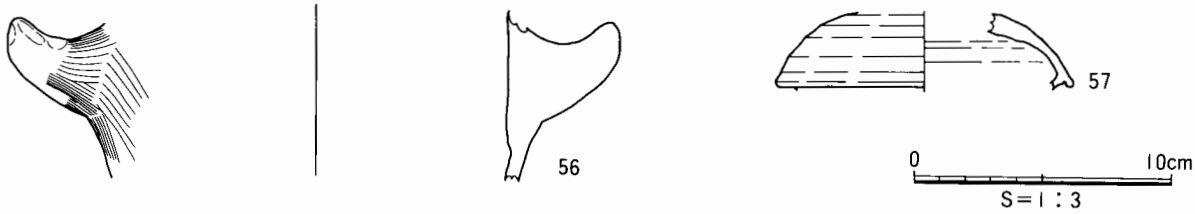
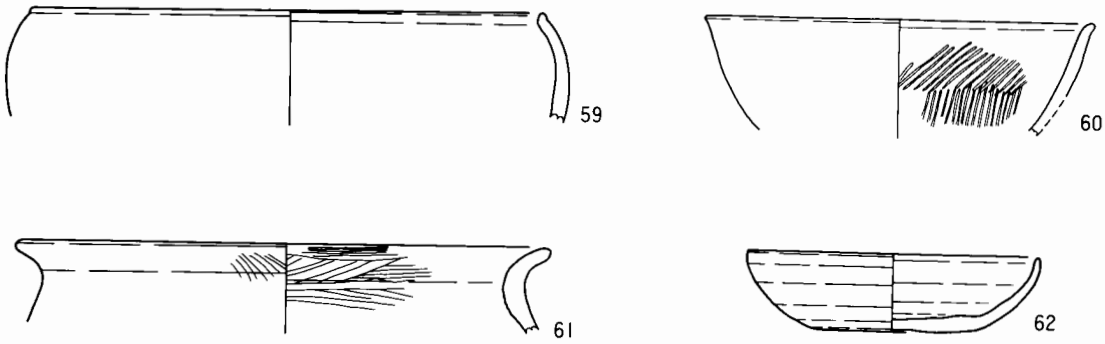


図43　SB12A 出土遺物実測図



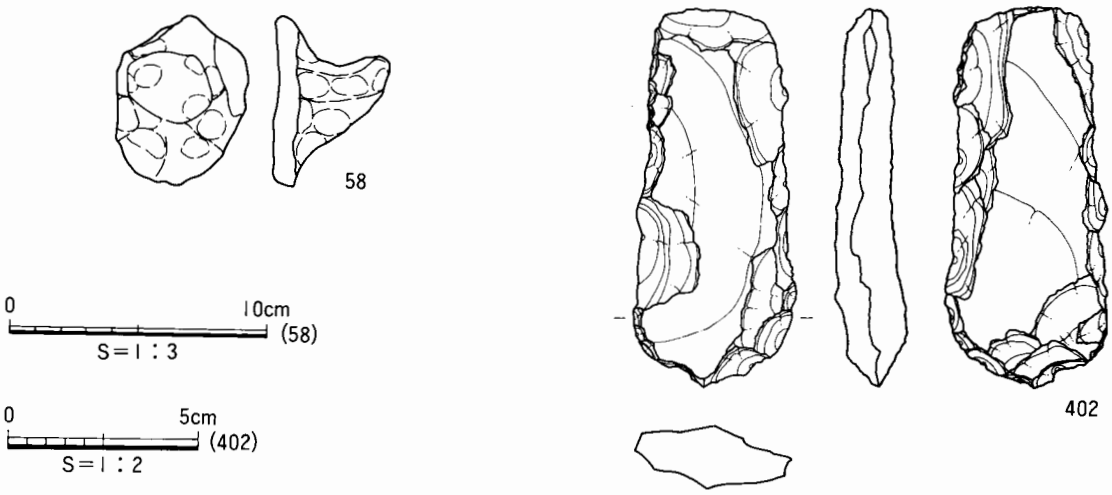


図44　SB12B 出土遺物実測図

ＳＢ13Ａ・13Ｂ・13Ｃ（図45、図版６・７）

調査区内南東斜面のＬ27～Ｌ28にかけて存在する。南にはSB12Bが隣接し、SB13Cによって切られている。13A・13B・13Cの関係は、13Cと13Ｂでは、13Bの方が古く、13Aと13Bでは、13Bの方が古い。13Aと13Cでは、13Cの方が新しいと思われる。

ＳＢ13Ａ

13の中でも斜面の一番上にある。隅丸の方形住居で大きさ、深さは不明である。土砂の堆積状況は不明である。山側の壁面下に壁溝が見られる。

谷側が削られているのではっきりしないが、主柱穴は１つである。Ｐ01は、径0.4m、深さ0.16mでSB13Bを削るように重なっている。付属施設は見られない。

出土遺物

SB13AとSB13Bの出土遺物の区別はできなかった。そこで、SB13Bの説明後に遺物の説明をする。

所属時期

これも、SB13Bのところで記述する。

ＳＢ13Ｂ

SB13Bは、３つの住居の中で１番古いと思われる。残っている部分は少なく、北西部の角のみ検出した。形は不明確だが、隅丸方形と思われる。壁際に壁溝があった。断面図をみるとSB13Cによって切られているが、それ以前は自然堆積によって埋まっている。

床面は狭く、Ｐ01は、主柱穴になりうる。径0.32ｍ、深さ 0.2ｍほどある。付属施設はない。

出土遺物（図46、図版29）

土師器１点・須恵器３点・鉄釘２点を実測し、鉄滓１点の写真をとった。

63は、土師器の甕の口縁部である。口縁が緩やかに外反する。64は、立ち上がり部分が低い杯身である。65は、無台の杯身である。66は、須恵器の盤である。64は７世紀末、65・66は７世紀後半のものである。64・65は美濃須衛産、66は尾張産のものである。

302・303 は、角形の鉄釘である。頭部と端部が欠損している。

所属時期

須恵器の年代観によるとⅣ期、７世紀後半に属する。

ＳＢ13Ｃ

SB13Cは、断面図からもわかるように、SB13Bを切っている。平面形は、遺構の谷側部分が欠けているので正確ではないが、隅を丸くおさめた隅丸方形をしている。南北の辺が4.4ｍで、深さが山側で0.6ｍある。北側の一部分が現代溝で削られている。遺構の山側の壁の立ち上がりは垂直ではなくやや傾斜がある。断面の状況から堆積は、自然堆積と思われる。壁溝は山側（西）で見られる。幅 0.2ｍほどである。

床面も谷側が欠損しているが、主柱穴と思われる柱穴が２つある。Ｐ01は、径0.36ｍ、深さ0.12ｍ、Ｐ03は、径は不明、深さ0.10ｍである。付属する施設は山側の壁際に竈が作られている。竈の右側にＰ02がある。これは、竈からでた灰などをためておく場所かと思われる。竈からは、67の土師器の甑が出土している。

出土遺物（図47、図版29）

SB13Cからは、９点遺物を実測した。

67は、土師器の甑の体部で、把手がつくようである。67・68は、土師器の甑又は鍋の把手の部分である。どちらもハケ調整をし、先端部分は指で押さえて調整されている。70・71は、土師器の甕の口

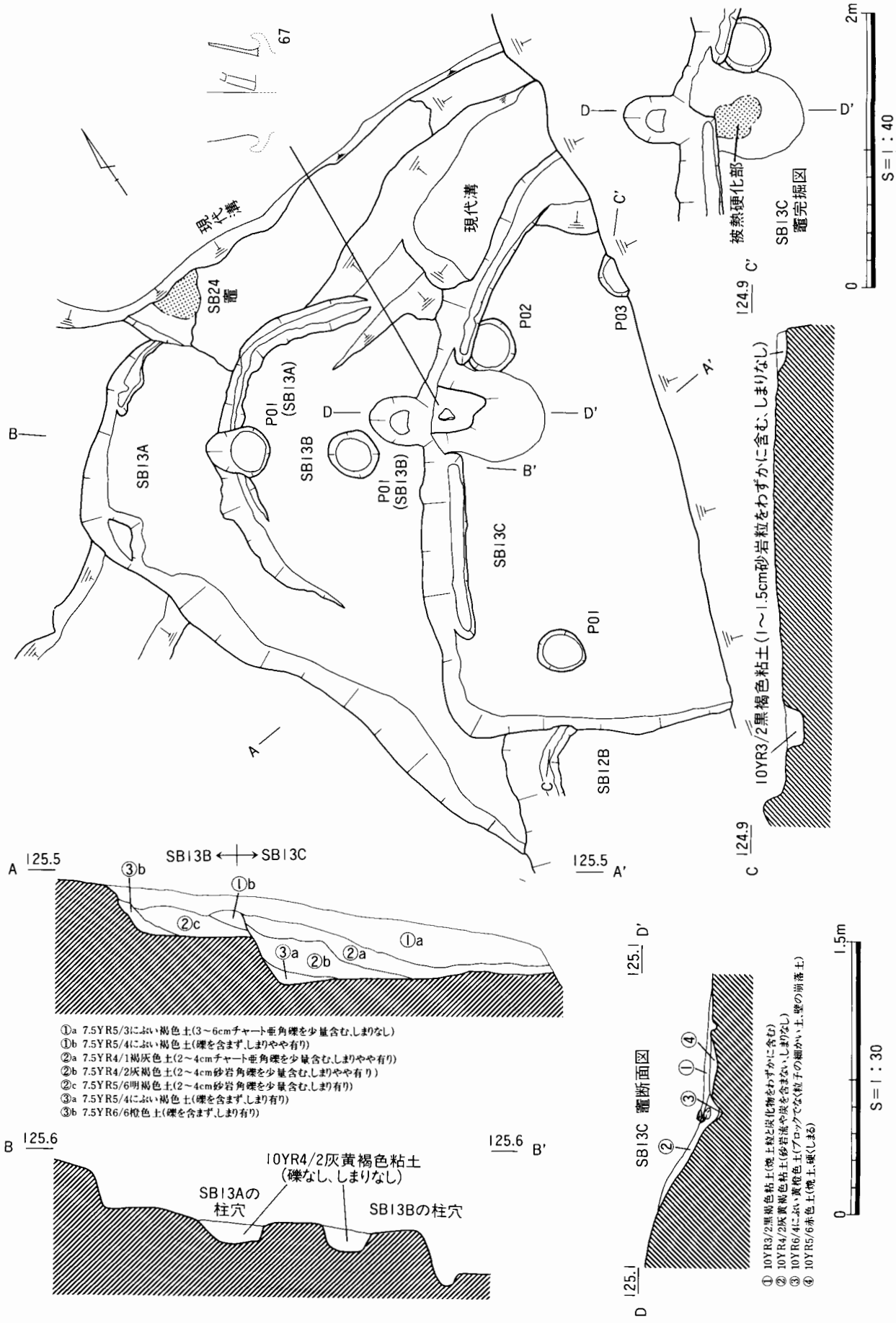


図45　SB13A・13B・13C 実測図

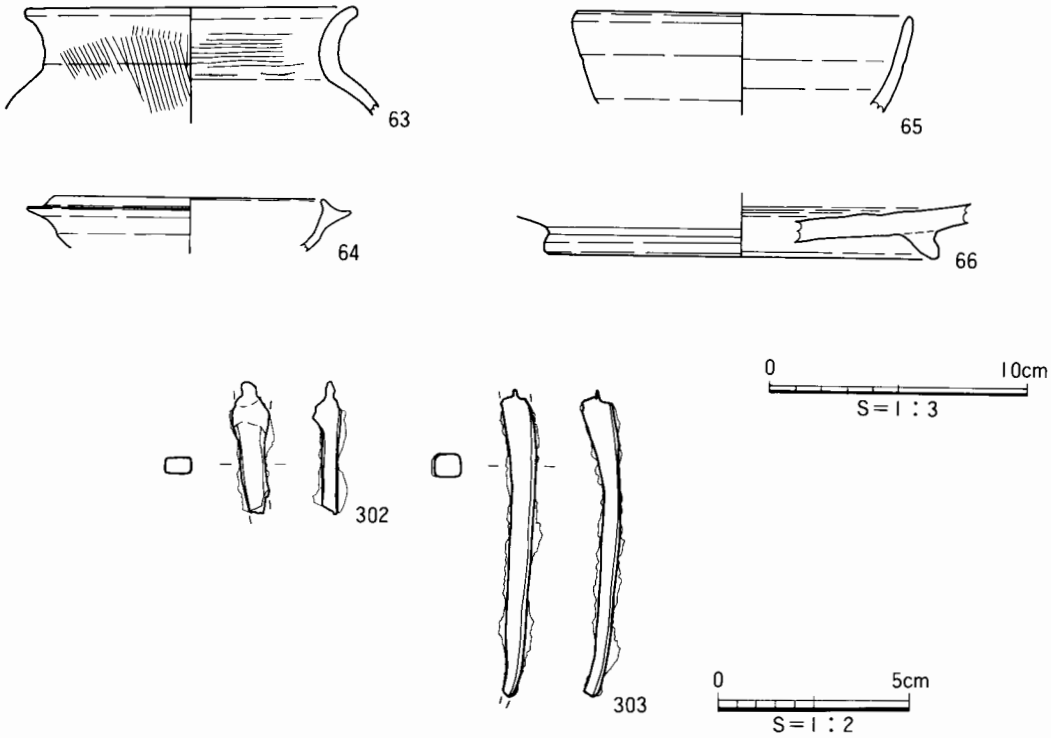


図46　SB13A・13B 出土遺物実測図

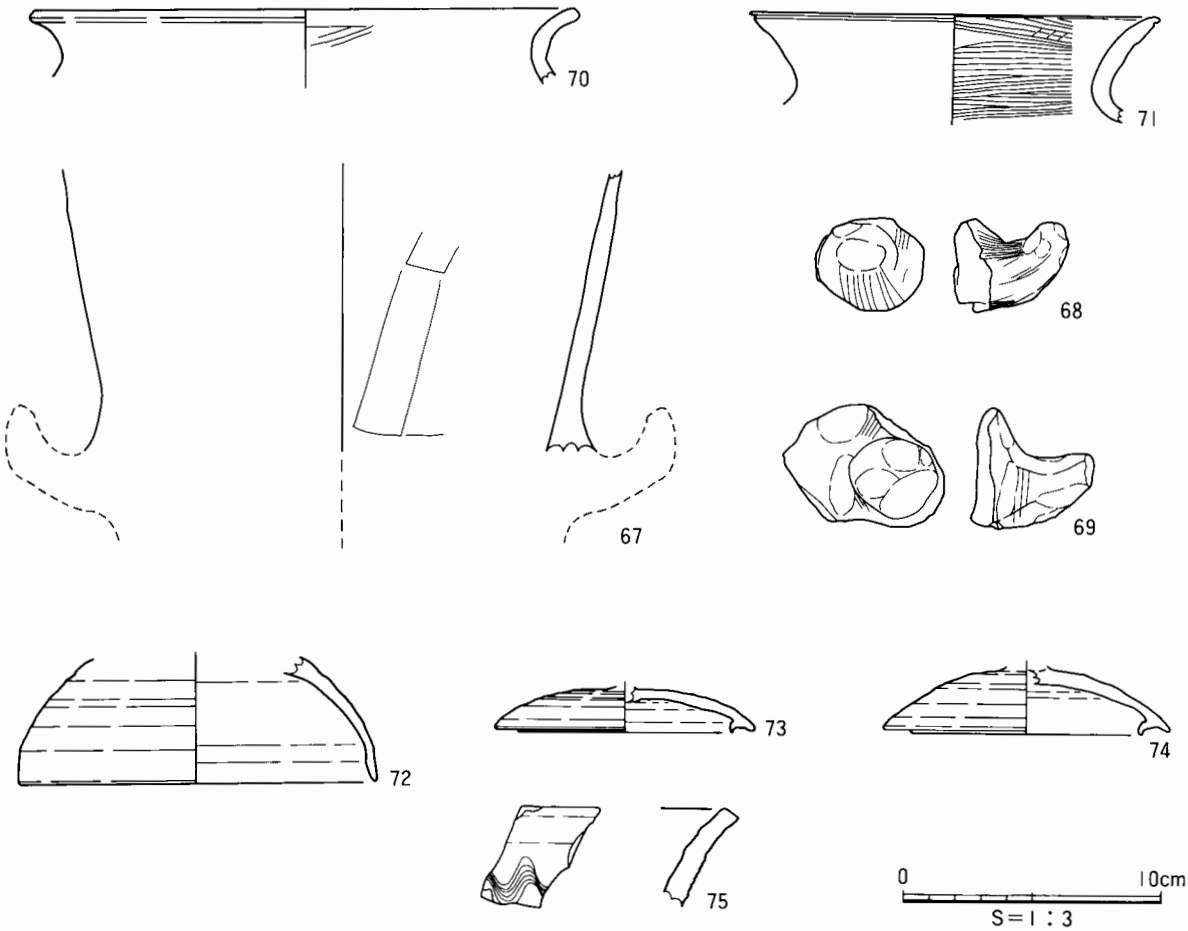


図47　SB13C 出土遺物実測図

縁部である。70と71を比べると71の口縁の方が外反部分が長い。外面はナデ調整してあるが、内面は横方向のハケ調整をしてある。72から75は、須恵器である。72・73・74は杯蓋で、73・74は、かえりを持つ物である。72は、天井部が高く丸みをもつ。72は７世紀後半、73は７世紀後半でも新しい方に入り、74は７世紀後半でも古い方に入ると思われる。72が美濃須衛産、73・74が尾張産かと思われる。75は、須恵器の甕の口縁部である。頸部には、５条の波状文を施している。７世紀後半から８世紀初頭の尾張産かと思われる。

所属時期

須恵器の年代観から、Ⅳ期で７世紀後半の古いものから８世紀初頭までの遺物が混在している。細かい時期設定はできない。

ＳＢ14Ａ・ＳＢ14Ｂ（図48、図版７）

調査区内南東斜面の南の端Ｋ34グリッドにある。調査区内では１番低い標高123.5ｍ前後に位置している。SB14AがSB14Bに切られている。

ＳＢ14Ａ

平面形は谷側が欠けているのではっきりしない。残った辺の隅がやや丸いが、方形に近い。山側の辺は5.2ｍ、深さ0.2ｍある。山側の立ち上がりは垂直ではない。山側の辺に沿って幅最大0.4ｍほどの壁溝がある。

床面の残りは、SB14Bに切られている関係でほとんどない。従って主柱穴と思われる柱穴は確認できない。ただし、北隅に幅0.6ｍほどのＰ01がある。山側の中央部に竈がある。竈からは、須恵器片が出土している。

出土遺物（図49、図版29）

遺物は、須恵器を２点実測することができた。76は、かえり付きの杯身で、つまみがつくと思われる。外面に自然釉が付着している。７世紀末ごろの尾張（猿投）産ではないかと思われる。77は、無蓋の高杯の杯の部分である。短脚で透かしの入らないものと思われる。竈から出土したものである。76と同じく７世紀末のもので美濃須衛産である。

所属時期

須恵器の年代から見るとⅣ期で、７世紀末頃になると思われる。

ＳＢ22（図50、図版10）

調査区内南東斜面Ｉ28グリッドにある。東にSB11がある。周辺の竪穴住居跡の中では一番高い標高126ｍ前後に位置している。平面形は、遺構の谷側部分が欠けているので正確ではないが、隅を丸くおさめた隅丸方形である。南北の辺が3.6ｍで、深さが山側で0.2ｍある。南側の一部分がSX12の周溝縁にかかっている。また、北側の辺をSZ91が切っている。遺構の山側の壁の立ち上がりは垂直

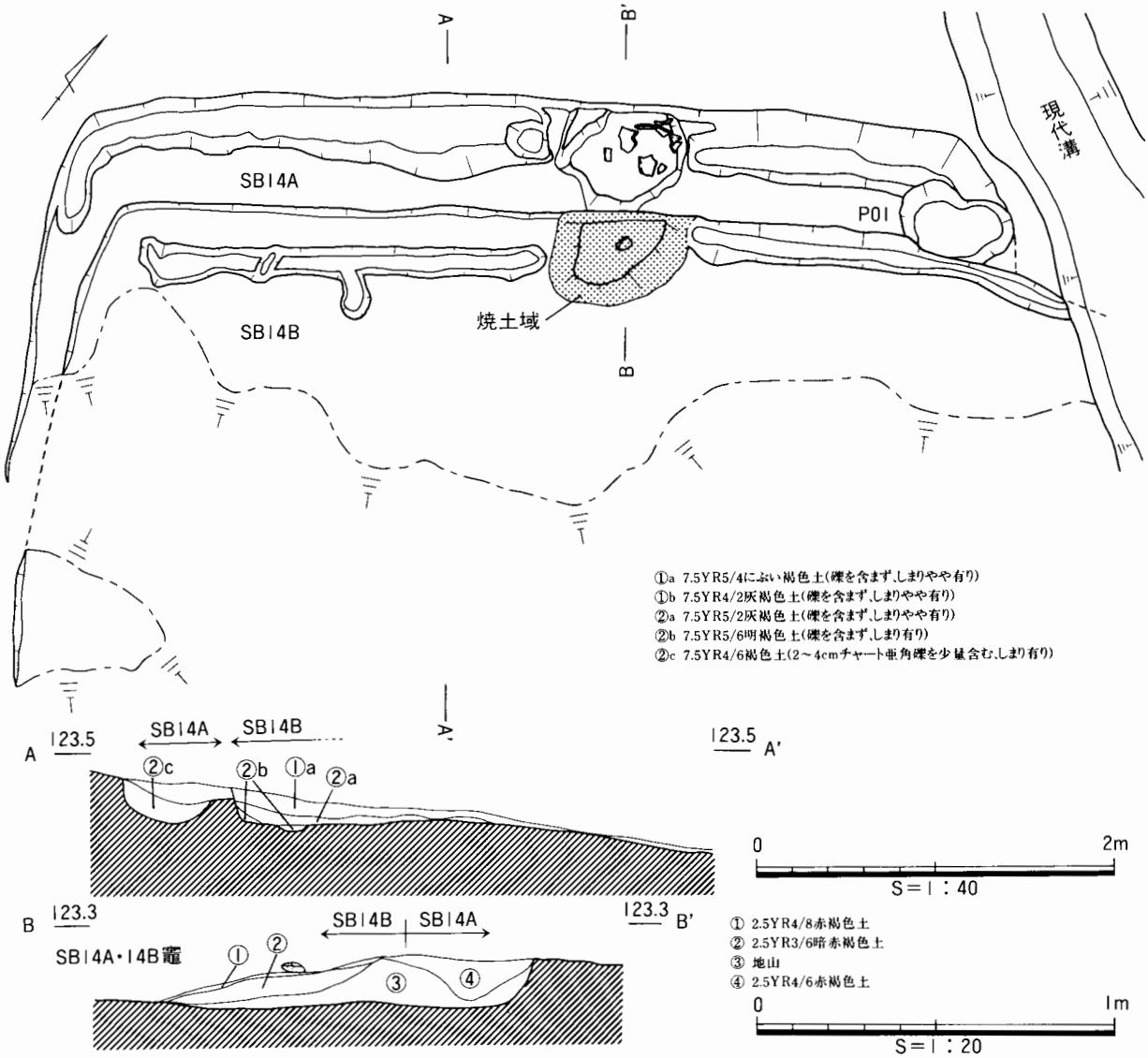


図48　SB14A・14B 実測図

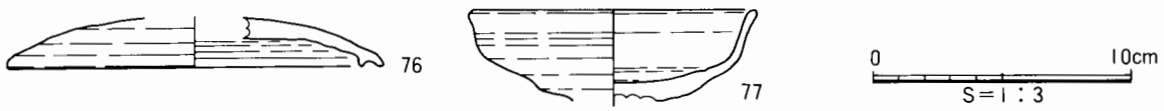


図49　SB14A 出土遺物実測図

ではなくやや傾斜している。断面の状況から、堆積は自然堆積と思われる。南側の辺に幅0.32mほどの壁溝がもうけられている。

床面も谷側が欠損しているが、主柱穴と思われる柱穴が1つある。P01は、径0.36mである。付属する施設は、山側（西）のやや北寄りに竈をもうけている。竈検出面では、砥石らしき石と支柱石が出土し、その下に須恵器の杯蓋が内面を上にして出土した。半截していくと竈の裾部の北側が半分ほど削平を受けていた。

出土遺物（図51、図版31・32）

実測できた遺物は、土師器が3点、須恵器が3点、金属製品が4点である。78から80は土師器の甕

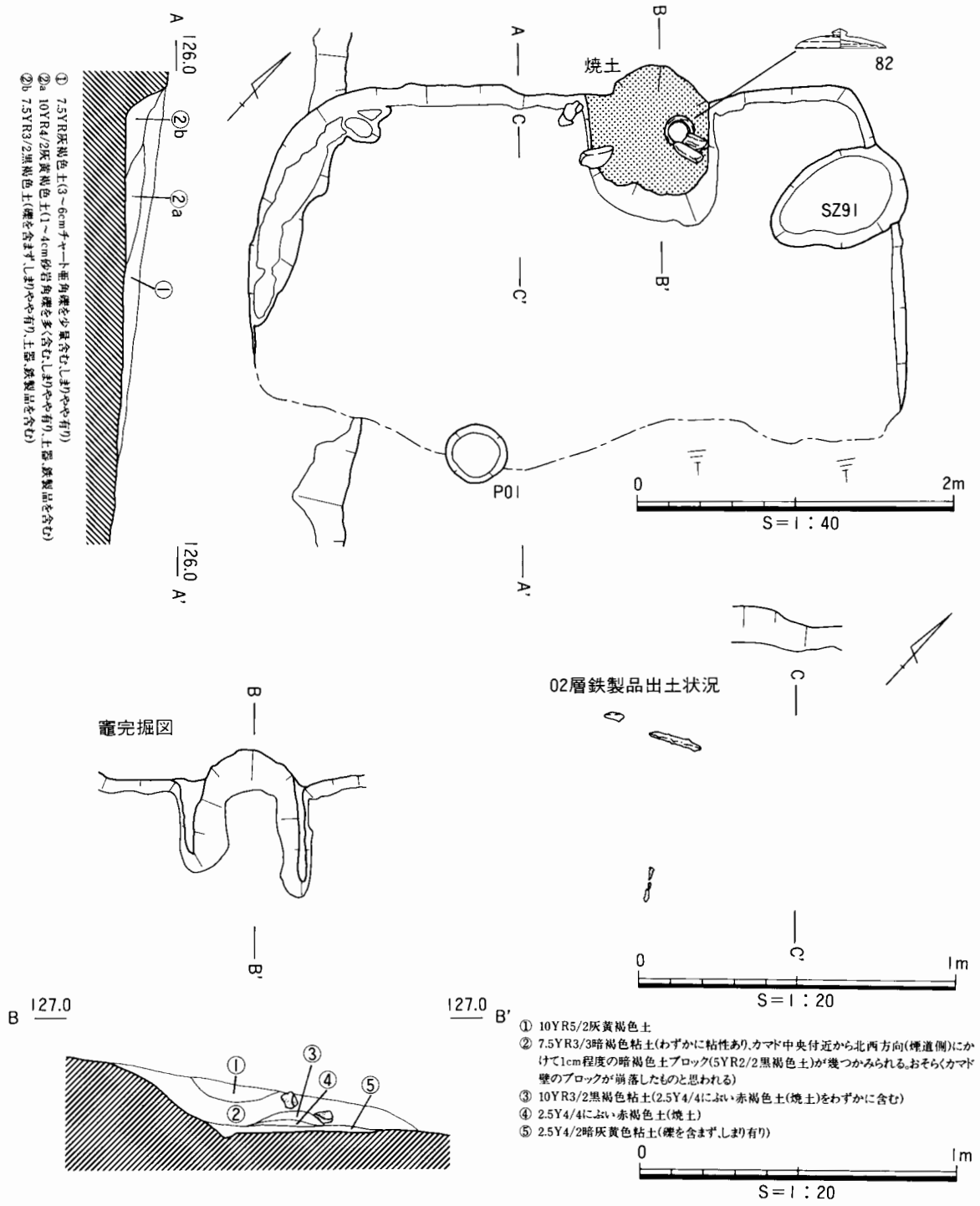


図50　SB22 実測図

である。78は、胴の長い甕の体部である。外部はハケ調整、内部は指頭痕が見られる。79は、口縁が短く外反する甕の口縁である。内外面ハケ調整をしてある。80は、口縁が短く外反する小型の甕である。口縁から頸部にかけては板ナデ調整してある。体部は外面ハケ調整、内面を板ナデ調整してある。81・82は、須恵器の杯蓋である。81は、天井部に×印の線刻が見られる。天井部は回転ヘラ切りの後ナデ調整してある。その他は回転ナデ調整してある。82は、かえりがつき、つまみを宝珠つまみにした杯蓋である。81は、7世紀後半でもやや古い時期のもので、82は7世紀末のものである。どち

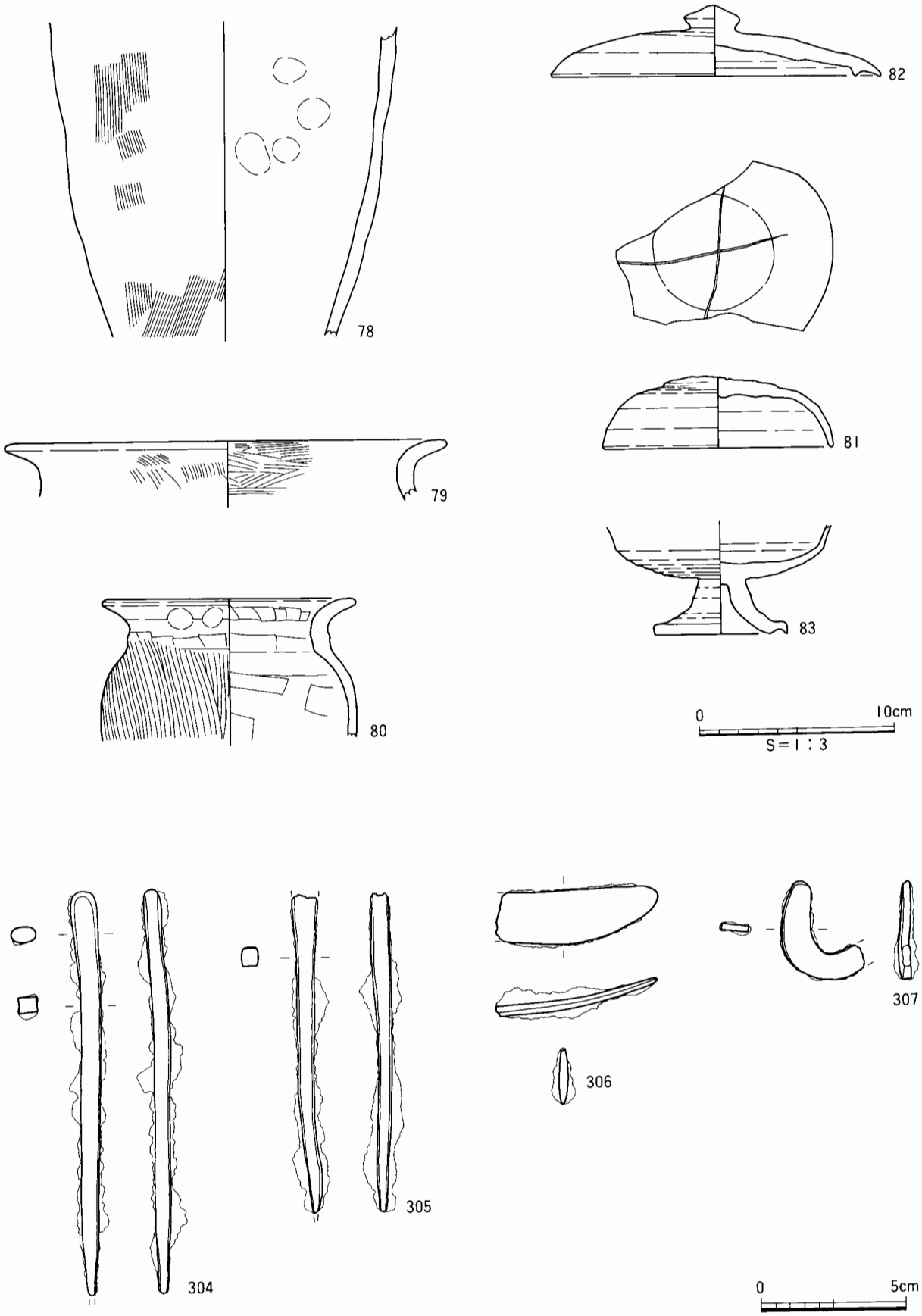


図51　SB22 出土遺物実測図

らも美濃須衛産である。83は、７世紀末の無蓋の高杯で、美濃須衛産と思われる。

鉄製品は、304・305が鉄釘である。304は端部欠損、305は、頭部・端部欠損である。306は刀子で胴部が欠損している。307の器種は不明である。

所属時期

須恵器の時期からするとⅣ期で、７世紀後半の古い時期から７世紀末のものが混在している。７世紀後半以上に細かい時期設定はできない。

ＳＢ24・ＳＢ25Ａ・ＳＢ25Ｂ（図52、図版11）

SB24A、SB25A、SB25Bの３つの遺構は、調査区内南東斜面Ｌ26・27グリッドにある。SB25AとSB25Bの切り合い関係は不明であるが、この周辺の遺構の状況から考えると、山側の遺構が谷側の遺構に切られるケースが多いので、SB25AがSB25Bに切られるのではないかと思われる。SB24は、SB25A・Ｂを切っている。したがって、SB24が一番新しく、次にSB25Bが古く、一番古いものがSB25Aではないかと思われる。またSB24は、SB13Aを切っている。

ＳＢ24

谷側が欠損しているため正確な形はわからないが、残った山側の辺の隅は丸くおさめられているので、隅丸方形と思われる。大きさはわからないが、深さは0.1ｍほどある。山側の傾斜は緩やかであるが、山側が削られているので、実際の壁の立ち上がりはもう少し急になっていると思われる。山側も壁溝はなく、柱穴も見つかっていない。竈らしき焼土痕が、南の壁際に残っている。他の住居が山側のやや北よりにあるのに対して、この住居のみ山側ではない場所につくられている。焼土の範囲が平面的なので、竈であることは決定できない。

出土遺物

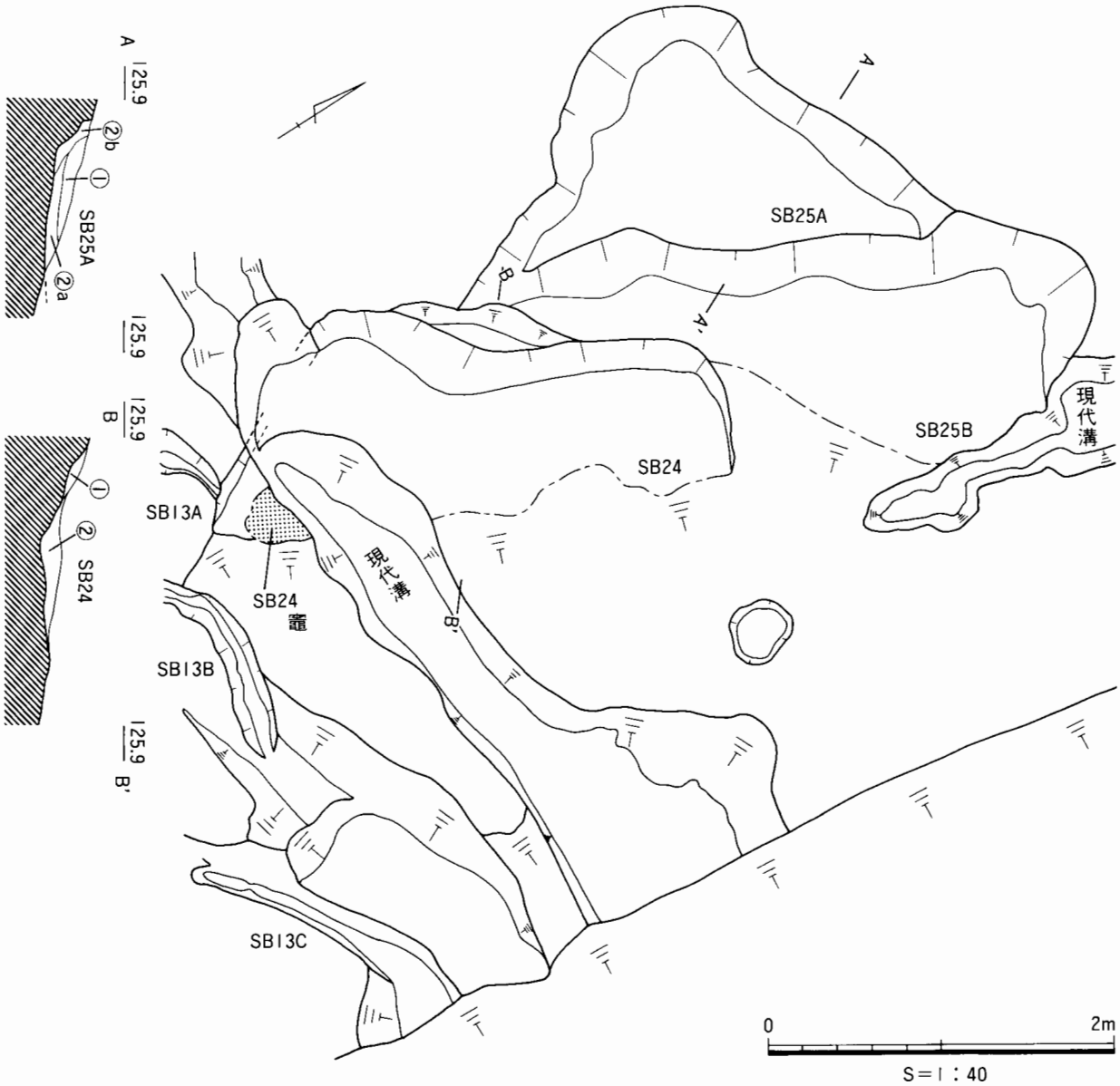
SB24の遺物は実測可能なものはない。土師器片が２点・須恵器片が３点出土している。

所属時期

時期決定できる遺物はないが、須恵器が出土していることから、他の遺構のように７世紀後半から８世紀初頭の可能性が強い。従って、Ⅳ期に属すると思われる。

ＳＢ25Ａ

４つの遺構の中で１番高い位置にある。北西隅の角部分しか残っておらず、大きさなどは不明である。主軸方向を山側だとすると、Ｎ－68°－Ｅをしめす。SB25Bは、Ｎ－32°－Ｅをとるのでかなり方向がずれてくる。SB25Bとの前後関係は、SB25Aの方が古いのではないかと思われる。堆積状況は、山側の壁際から順に堆積しているので自然堆積と思われる。壁溝、柱穴、竈などは見つかっていない。



SB25A
① 7.5YR4/2灰褐色土(2～8cmチャート亜角礫を含む、しまりなし)
②a 7.5YR3/2黒褐色土(礫を含まず、しまりやや有り)
②b 7.5YR5/4にぶい褐色土(礫を含まず、しまりやや有り)

SB24
① 7.5YR5/4にぶい褐色土(礫を含まず、しまりなし)
② 7.5YR4/2灰褐色土(礫を含まず、しまりなし)

図52　SB24・25A・25B 実測図

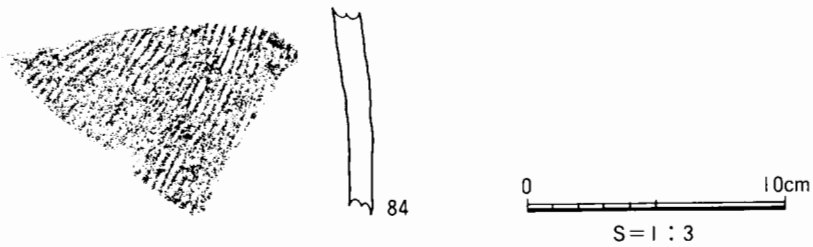


図53　SB25A 出土遺物実測図

出土遺物（図53、図版32）

84は須恵器の甕の体部片である。内外面に黄土をハケ塗りし、表面が黒または黄土色なっている。時期は不明であるが、猿投産のものかと思われる。

所属時期

周りの遺構との兼ね合いからⅣ期に属するが、詳しい時期はわからない。

ＳＢ25Ｂ

SB25Aとの切り合い関係は、SB25Bが25Aを切っているのではないかと思われる。斜面に対して、山側の辺が平行になっている。主軸は、Ｎ－32°－Ｅである。SB25Aに比べるとかなり方向が違う。周辺の竪穴住居跡から見るとSB25Bのようなパターンが多いと思われる。堆積状況もはっきりしない。

出土遺物

SB25Bにあたる遺物は見つからなかった。

所属時期

SB25AやSB24などの状況によるが、Ⅳ期の遺構と思われる。遺物が少なく細かい時期ははっきりしない。

ＳＢ29（図54・55）

調査区内南東斜面のＧ30グリッドにある。SD15の溝埋土に南北1.3ｍ×東西1.7ｍの１間×１間の柱穴を検出した。そのすぐ南のSX05の北西の周溝部分から、大量の須恵器が出土した。最初は、須恵器が出土した周辺に遺構があるのではないかと考え調査を進めたが、遺構は確認できず、須恵器を取り上げた。須恵器の出土した層は、SX05の周溝に堆積した埋土よりも上の層位で、少なくとも古墳時代前半より新しいと考えた。周辺のほぼ同じ層位かさらに上で中近世墓が検出されていたので、古墳時代後半から中世の間であろうと考えていた。須恵器集中区とするところであったが、発掘後、須恵器集中区の北にSB29を確認し、これらの須恵器群とSB29が関係があると考えた。これは、須恵器を各務原市教育委員会の渡辺氏に見ていただいた時に指摘があったことで、同じような事例は、美濃加茂市尾崎遺跡でも見つかっているとのことであった。建物は検出されていないが、同じ美濃加茂市の伊瀬粟地遺跡の墳丘墓の南側と東側にも集中して須恵器が見つかっているところがあり、これらの器種構成の特殊性から、その場で祭祀が行われていたのではないかと考えられている。このことからSB29も同じような可能性が考えられる。

SB29は、１間×１間の建物だと思われるが、柱穴の径が大きな柱で0.56ｍ、小さなもので0.48ｍで、竪穴住居跡で見つかっている柱穴の大きさと明らかに異なる。むしろ、後述するSB17の掘立柱建物跡の柱穴の大きさに近い。１間×１間なので住居跡というよりも櫓のような建物であったのではないかと思われる。SX03の周溝部にあったので、地盤が弱く建物を建てるには不向きではないかと思われる。

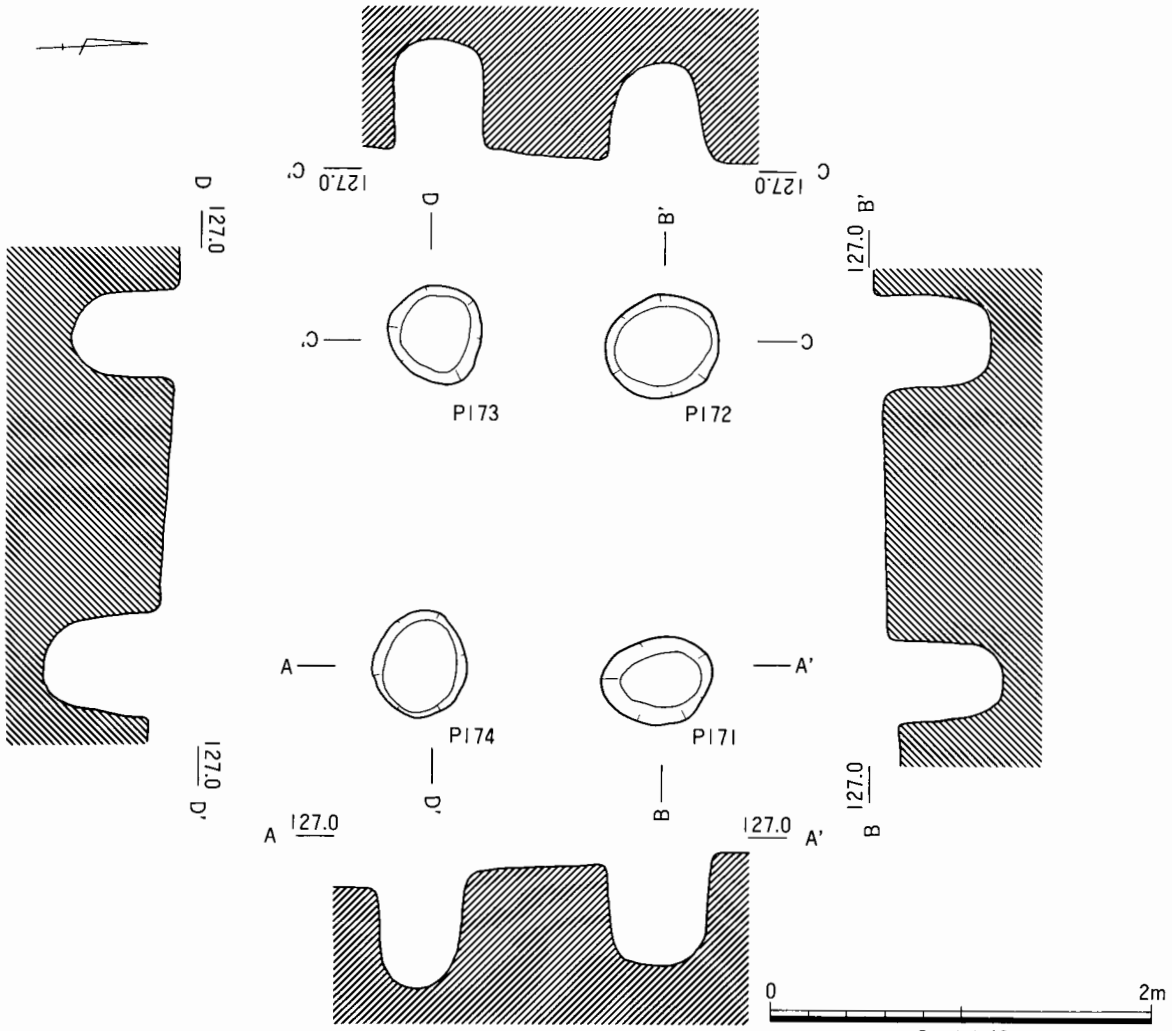


図54　SB29 実測図（エレベーション模式図）

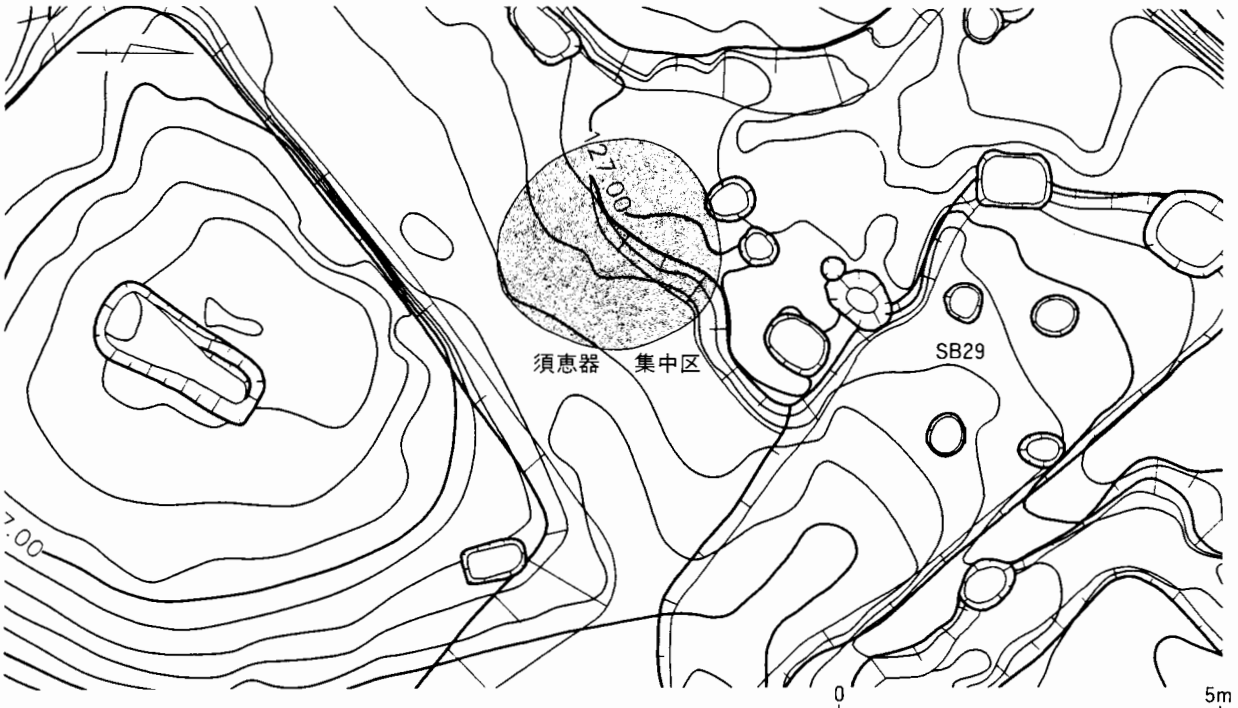


図55　SB29と須恵器集中区の位置

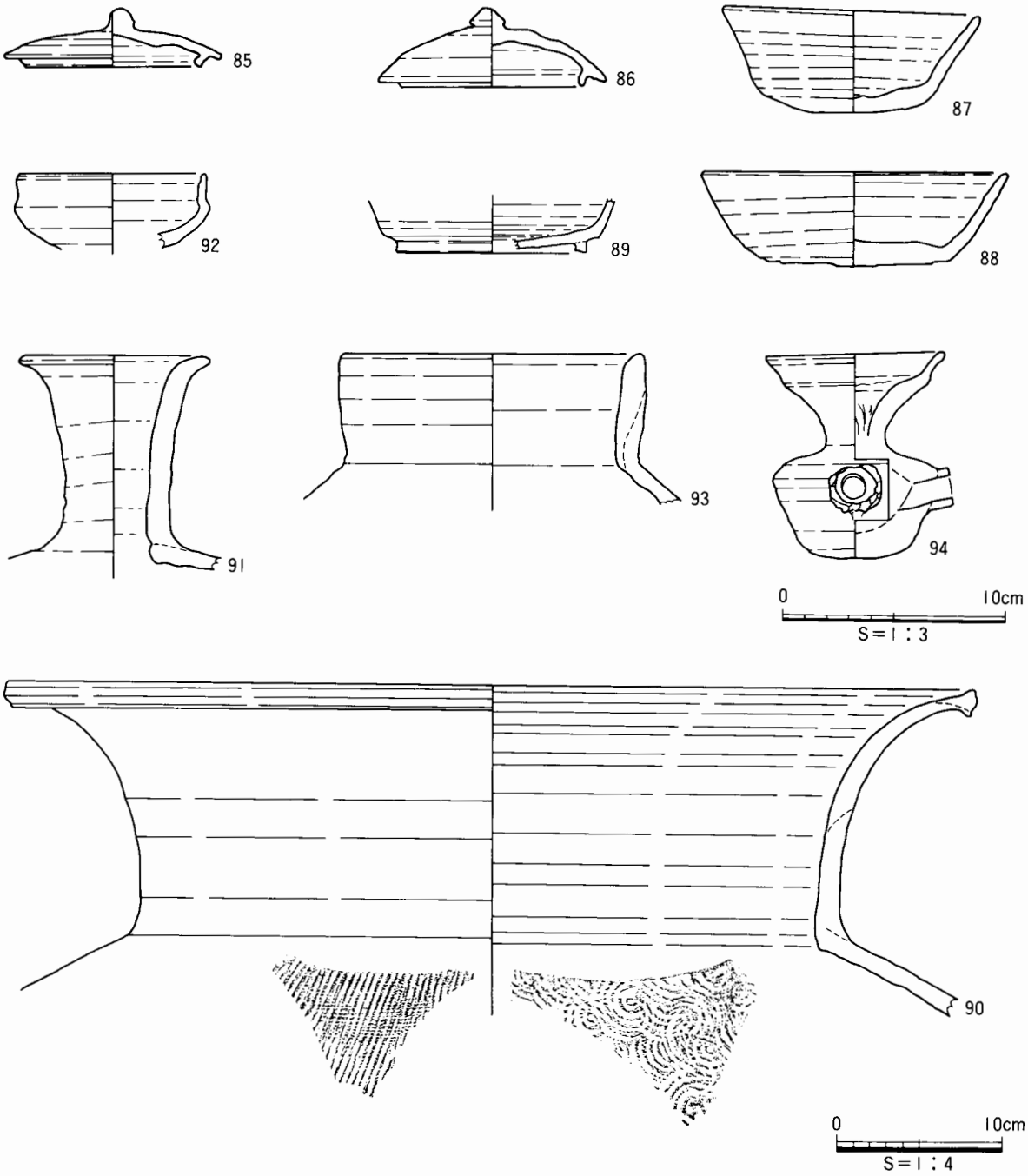


図56　SB29 関連遺物実測図

出土遺物（図56、図版32・33）

SB29そのものの柱穴からは遺物を確認していないが、南の須恵器集中区からは、大量の須恵器が出土した。そのうち実測したのは、次の10点である。

85・86は、杯蓋である。85はかえりがつき、かえりの先端が口縁ラインよりもさがるものである。乳頭状のつまみがつく。7世紀後半のなかでもやや古い、美濃須衛産である。86は、85に比べやや天井部分が高くて丸い。かえりもつくが、このラインも口縁ラインよりもさがる。つまみは、宝珠つまみになっている。7世紀後半のやや古いもので、尾張産である。87・88・89は杯身である。87・88は台が付かず、89は台が付く。87はなめらかにナデ調整してあるが、88は回転切り離しのあとナデて仕

上げられている。87・88は、７世紀後半の美濃須衛産である。89は87・88に比べシャープな印象を受ける。89は７世紀末の猿投産である。

90は大型の甕で口縁の直径は、60cm近くになる。体部外面に格子叩きを施す。７世紀後半の尾張産である。91・93は壺で、91は台付き長頸壺の口縁部から頸部、93は短頸壺の口縁部である。91は８世紀後半の美濃須衛産で、93は７世紀後半の美濃須衛産である。92は小型の鉢で、７世紀後半の尾張産である。94は瓶で７世紀後半の美濃須衛産である。その他にも多数の須恵器が出土している。器種がわかりそうなものは、大きめの甕・横瓶などである。大きさにもよるが、特に甕と横瓶が目立った。

所属時期

須恵器から年代をみると、Ⅳ期の７世紀後半で２時期あるかもしれない。１点８世紀の後半の須恵器もあり、Ⅳ期を多少はずれる可能性もある。

ＳＢ19・20・21、ＳＢ17（図57）

この地区は、大型の掘立柱建物跡のSB17や、それに付随するSD21A、その北のSB19・SB20・SB21がある。いずれも南東斜面に建てられている。SB17・SB19・SB20の軸方向と、SB21の軸方向がずれる。竈はSB21のみ作られている。

ＳＢ19（図58・図版10）

調査区内南東斜面のＮ19グリッドにある。北隣にSB20・SB21がある。南東斜面にあるため、谷側部分が欠けている。平面形は、隅丸の方形である。大きさは南北3.8m×東西3.6m深さは0.1mほどである。遺構自体はかなり削られている。山側はなだらかに立ち上がっていて、断面からみると堆積の状況は、自然堆積だと思われる。南東の端は、溝によって削られており、北側の壁際に周溝が見られる。

柱穴と思われる穴は１つであるが、主柱穴とは言い難い。床面は谷側が削られているが、他の斜面の住居に比べると残りはよいほうである。付属施設は見られない。

出土遺物（図59、図版31）

全部で８点実測できた。土師器が５点、須恵器が３点である。95から97は土師器の甕である。95は、口縁部から底部までほぼ完形に近く、やや短く外反する口縁部に、小型の体部が付随する。外面はナデ調整がしてあるが、内面は指頭で調整してあるところもある。96も95とほぼ同じようなタイプの甕である。97は95にも似ているが、内面の頸部と体部の境での屈曲がはっきりしている。また、95に比べてやや大きい。98は、土師器のミニチュア土器である。径が4.5cmほどしかない土器である。99は、土師質の土器であるが、器種は不明である。比較的赤い色をしている。100は、宝珠つまみつきの須恵器の杯蓋である。７世紀後半の尾張産ではないかと思われる。101は、須恵器の台付きの杯身である。７世紀末の尾張産ではないかと思われる。102は、口縁部分がやや立ち上がり気味の短い短頸壺である。体部中央に沈線が入るもので、７世紀後半の尾張産ではないかと思われる。

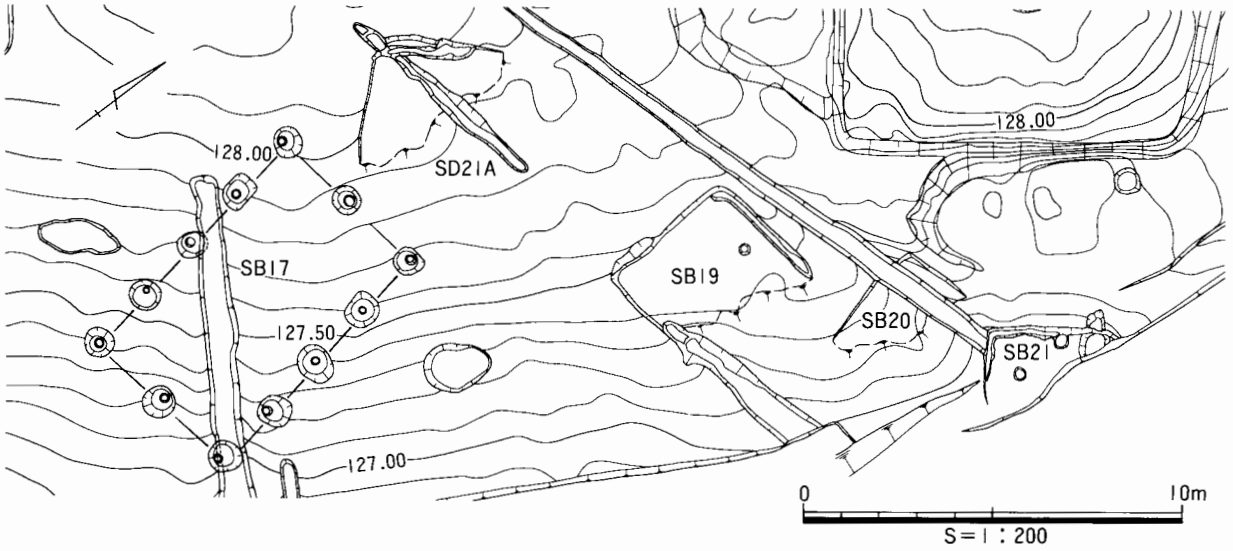
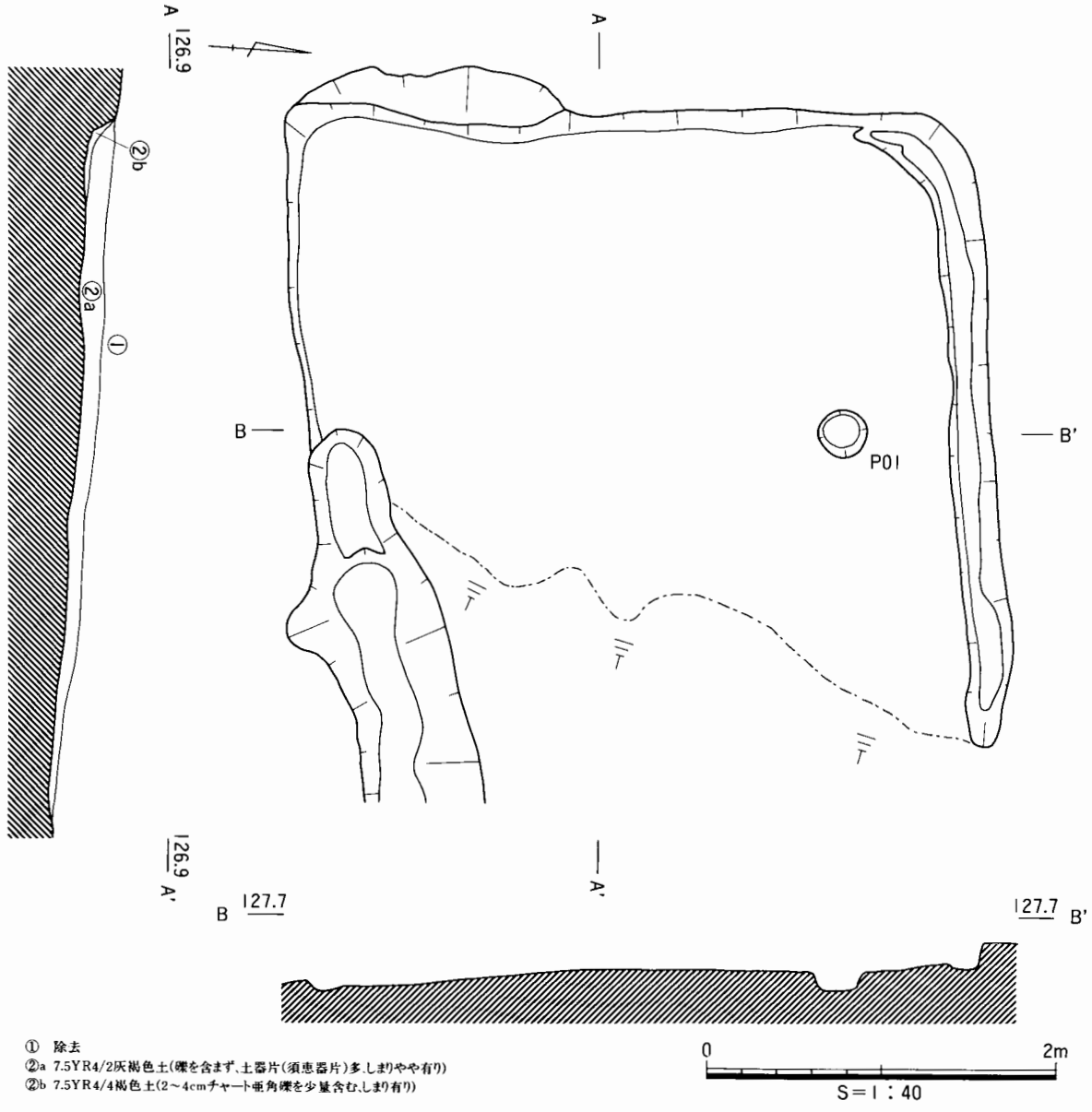


図57　SB17 周辺地形図



① 除去
②a 7.5YR4/2灰褐色土(礫を含まず、土器片(須恵器片)多、しまりやや有り)
②b 7.5YR4/4褐色土(2～4cmチャート亜角礫を少量含む、しまり有り)

図58　SB19 実測図

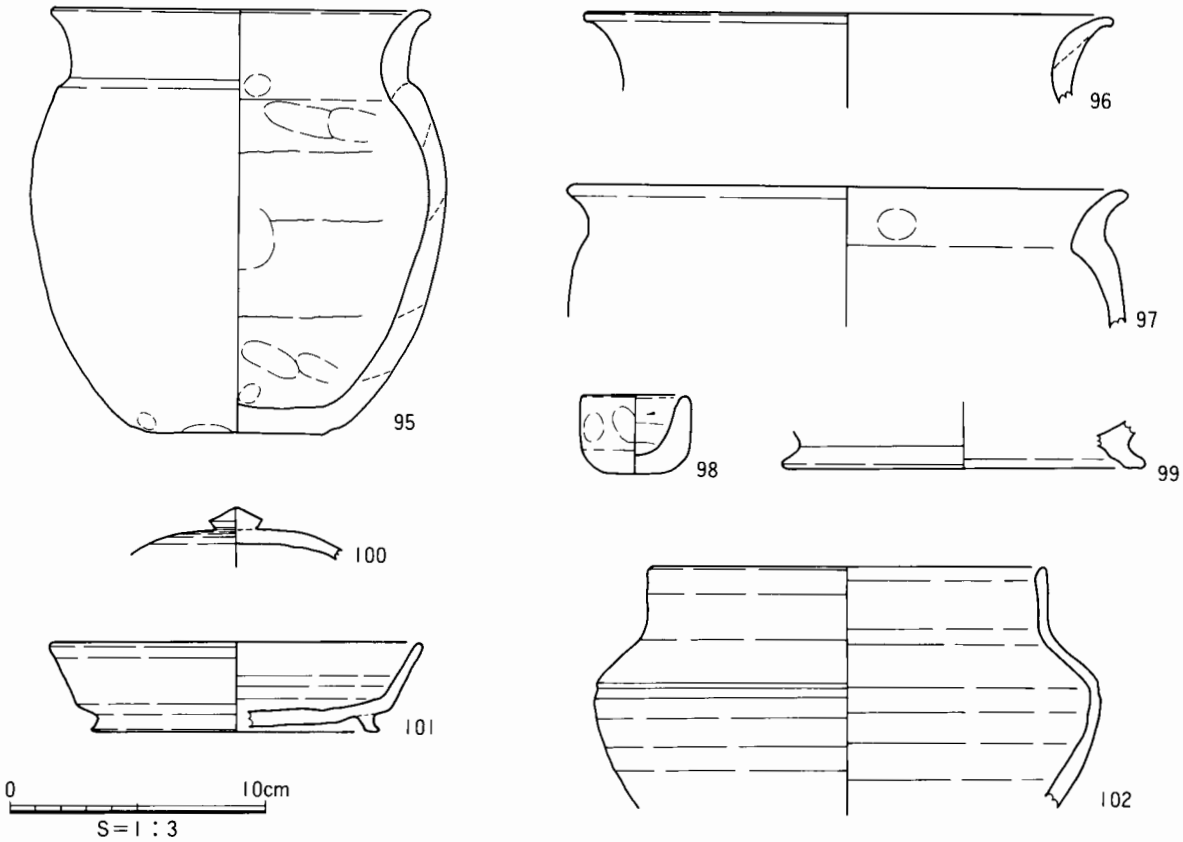


図59　SB19 出土遺物実測図

所属時期

須恵器の出土数が少ないが、７世紀後半から末にかけてのⅣ期に属する。

ＳＢ20（図60、図版10）

調査区内南東斜面のＯ18グリッドにある。南にはSB19があり、北にはSB21がある。南東斜面にあるため、谷側部分が欠けている。また、遺構のやや北寄りを東西に現代の溝が通っているため、遺構の1/3ほどしか残っていない。平面形は、残った部分からみて、比較的隅の丸くない方形であると思われる。大きさは不明であるが、残った部分の遺構の深さは0.1ｍほどである。山側はなだらかに立ち上がっていて、断面から見ると堆積の状況は、自然堆積と思われる。壁際には、壁溝がない。

残っている床面には、比較的礫がむきだしになっている。柱穴と思われる穴はなく、付属施設は見られない。

遺物の出土も少ない。竪穴住居跡であると思われるが、付属施設や柱穴がないこと、床面の状態が居住するにはあまり適さないような状態であることなどから、竪穴住居跡ではないという見方もできる。

出土遺物（図61、図版31）

実測可能な遺物は、103の須恵器１点だけである。そのほかに土師器片２点、須恵器片１点出土している。103は、横瓶の口縁部分と思われる。破片が小さいため、はっきりとはわからないが、７世

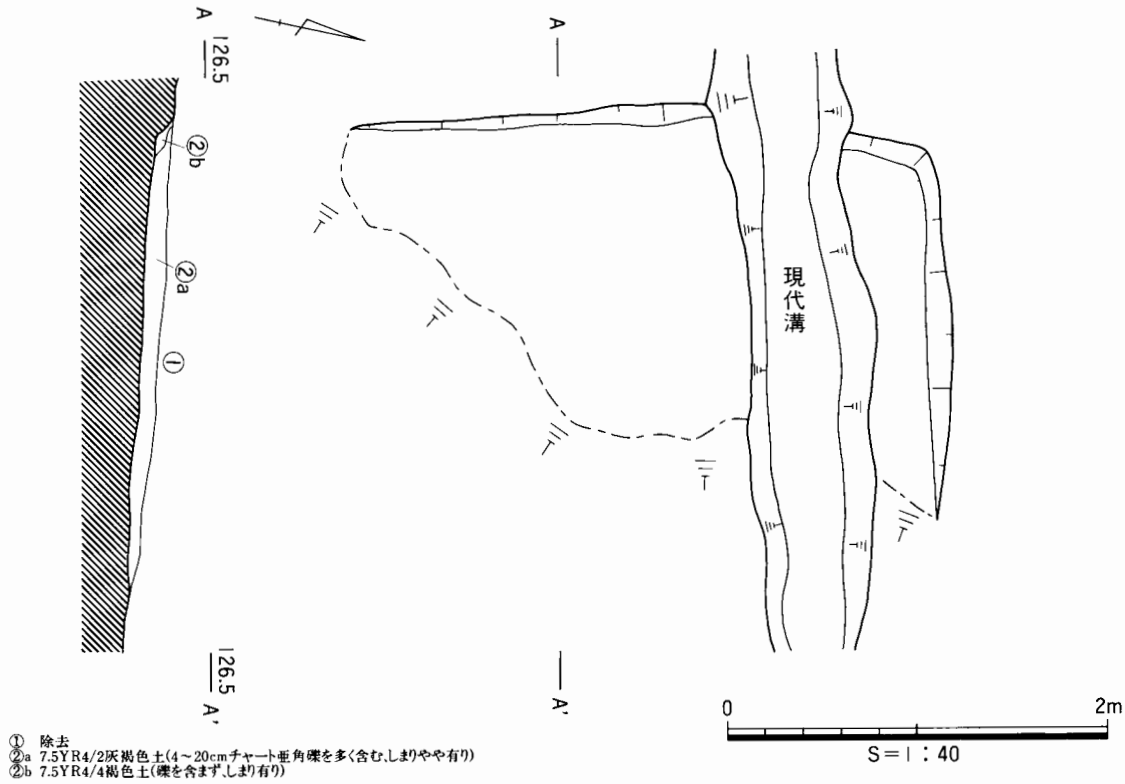


図60　SB20 実測図

図61　SB20 出土遺物実測図

紀後半の尾張産ではないかと思われる。

所属時期

Ⅳ期の７世紀後半とする。

ＳＢ21（図62、図版10）

調査区内中央の東斜面Ｐ18グリッドにある。南にSB20がある。東斜面にあるため、谷側部分が欠けている。また、南西角は、現代の溝によって一部削平を受けている。また、調査区の東端にあたり、すべて発掘できなかった。平面形は、隅丸の方形である。大きさは不明であるが、遺構の残った部分の深さは0.2mほどである。山側はやや急な立ち上がりで、断面からみると堆積の状況は自然堆積と思われる。山側（西）の壁際と、南の壁際に周溝が設けられている。

柱穴と思われる穴は２つであるが、西の壁際の柱穴Ｐ01は、壁溝にかかっており竈のすぐ南側にあたるので主柱穴とは言い難い。Ｐ02は、径0.36m、深さ0.2mあり、位置的にみても主柱穴としてもよいと思われる。付属施設は、西側の壁の一番北に竈が設けられている。竈は、袖の部分が残っており、完掘すると一番下の部分が熱を受けて硬化し赤くなっていた。硬化面は、厚さ２cmほどであった。小さな石を検出したが、支柱石の一部ではないと思われる。

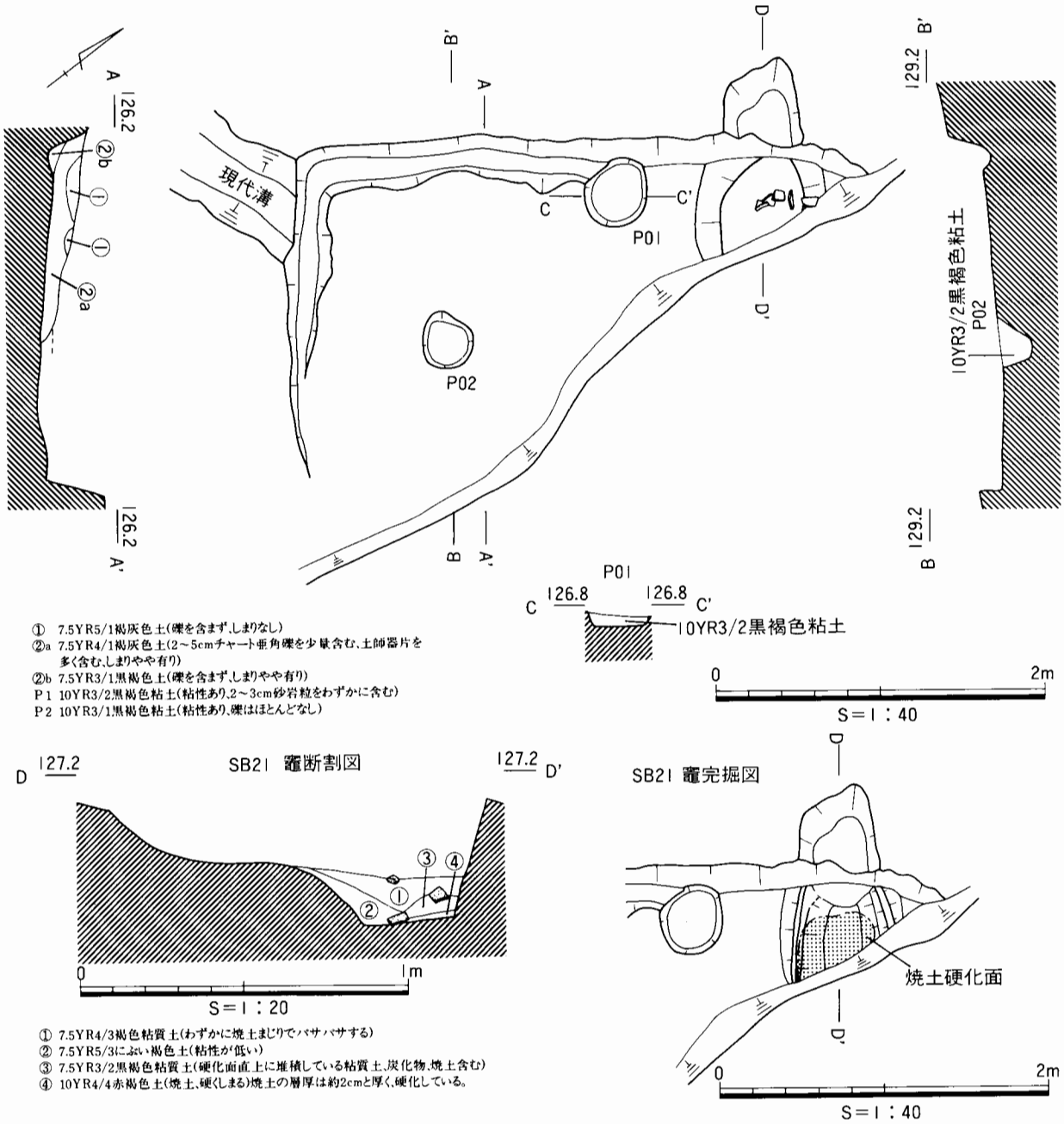


図62　SB21 実測図

出土遺物（図63、図版31）

実測可能な出土遺物は４点であった。104 は、土師器の甑の体部から底部にかけてかと思われる。底部近くで、器面の角度を変えるため、粘土を継いでいる。104 は、106 と共に竈から出土した遺物である。外面はハケ調整で、内面は指によるナデ調整が行われている。105 は、体部が長い土師器の甕の体部である。大きなものであるが、大変薄い。外面はハケで調整されている。106 も甕で、口縁部がくの字に外反する甕の口縁部から体部の上半である。外面はハケ調整で、内面は板ナデおよび指ナデを施している。107 は、短頸壺である。７世紀後半の尾張産ではないかと思われる。

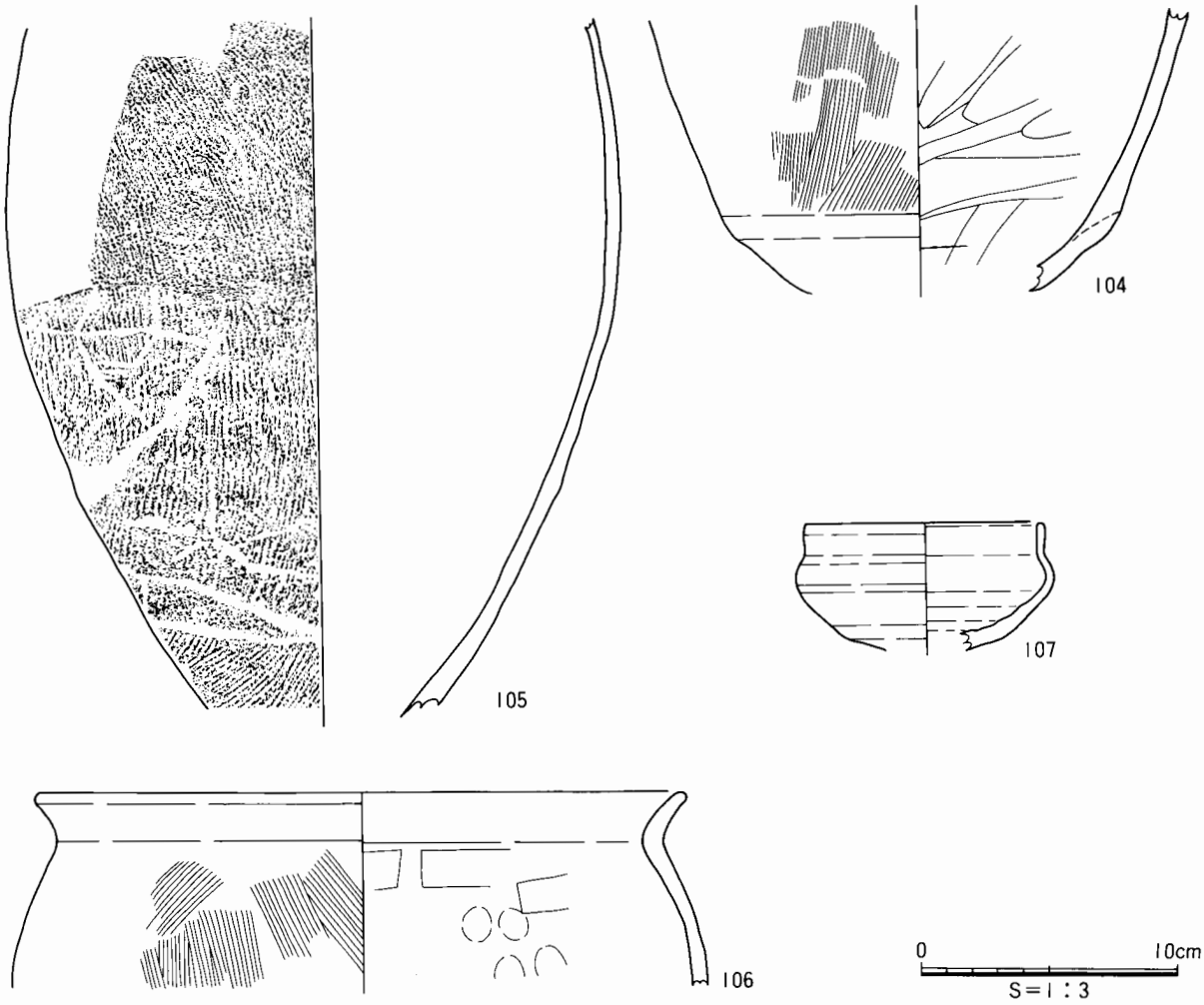


図63　SB21 出土遺物実測図

所属時期

Ⅳ期の7世紀後半に属する。

ＳＢ17（図64、図版9）

調査区内中央東よりの南東斜面M21グリッドを中心とした位置にある。中央を北西から南東にかけて現代の溝が切っている。桁行4間（7.3m）×梁行2間（4.6m）、床面積33.6㎡、主軸方向はＮ－76°－Ｅにとる掘立柱建物跡である。柱穴間の距離は桁行方向が約1.8mで梁行方向が約2.2mである。柱穴は12本で、すべての柱穴で柱の痕跡を確認した。規模は、柱の径は最大0.32m、深さ0.56m、掘方の最大は長辺0.96m×短辺0.72m、深さ0.64mになる。掘方は、円形・方形のものさまざまである。

建物は、現在の斜面に対して斜め方向に建てられている。桁行の延長上にSD21Aがある。SD21Aは、SB17に付随する溝で、流水を防ぐためのものと思われる。長さ6m、幅0.64mで断面形はかまぼこ状になっている。近隣のSB19やSB20も同じような方向に作られているので、これらの建物が建てられていた時期には、斜面の傾斜方向が現在と異なっていた可能性も考えられる。

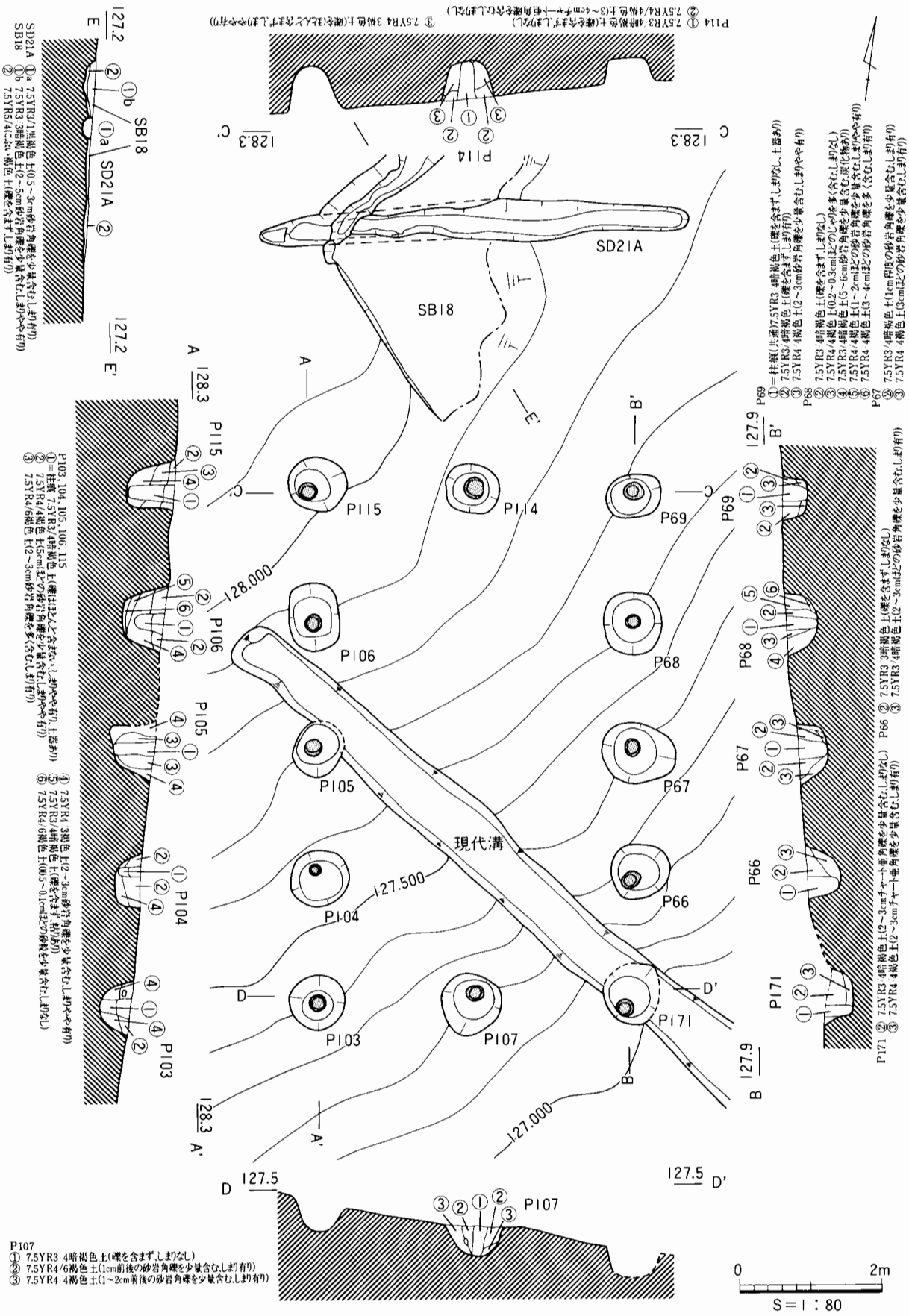


図64　SB17 実測図（SD21Aを伴う）

図65　SB17 出土遺物実測図

出土遺物（図65、図版31）

柱穴から土師器片・須恵器片が数点出土している。実測できたのは108の1点である。108は、土師器の甕の体部片である。外面はハケ調整してある。

所属時期

出土遺物からⅣ期に属すると思われるが、細かい時期区分はできない。

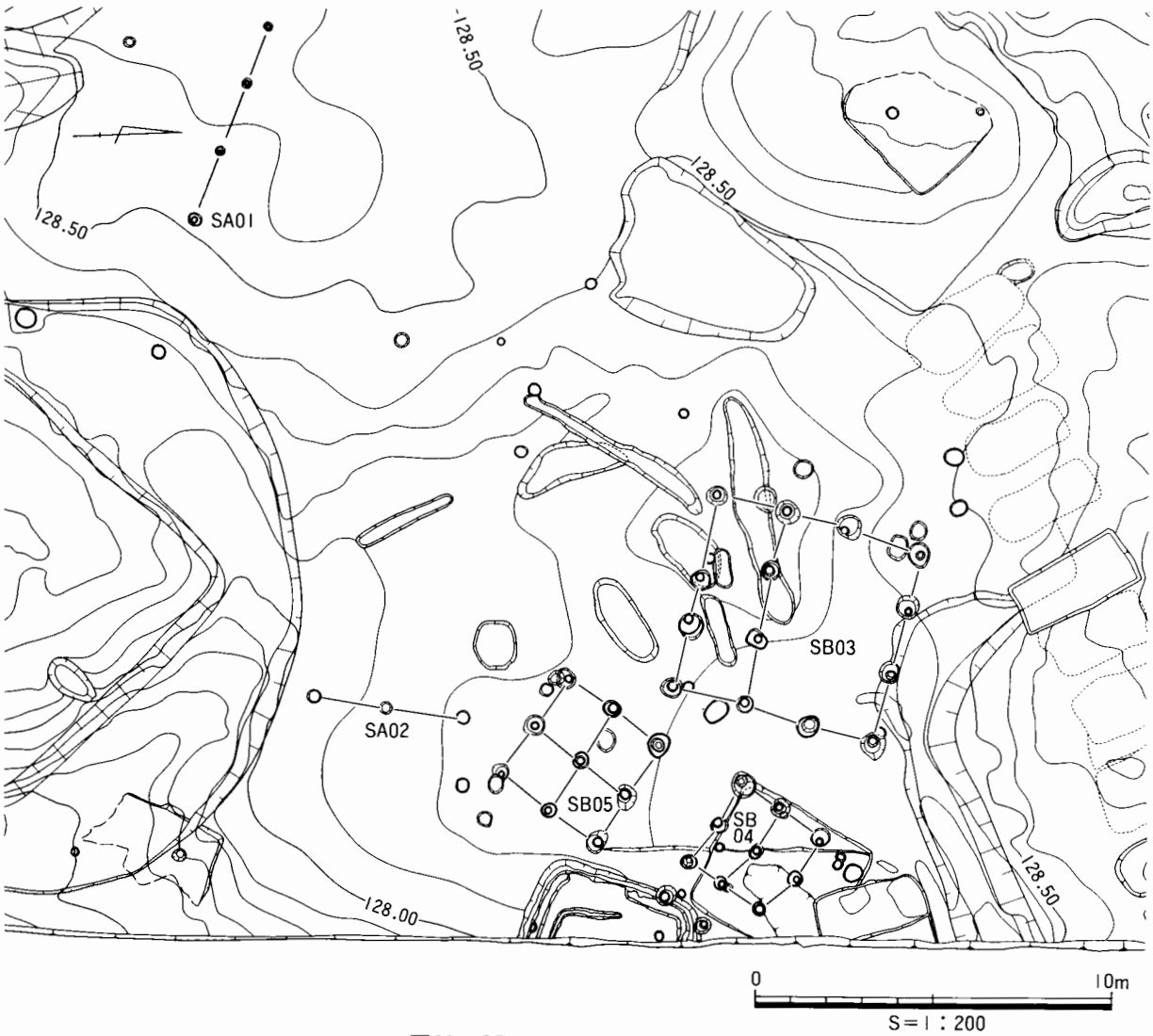


図66　SB03・04・05 周辺地形図

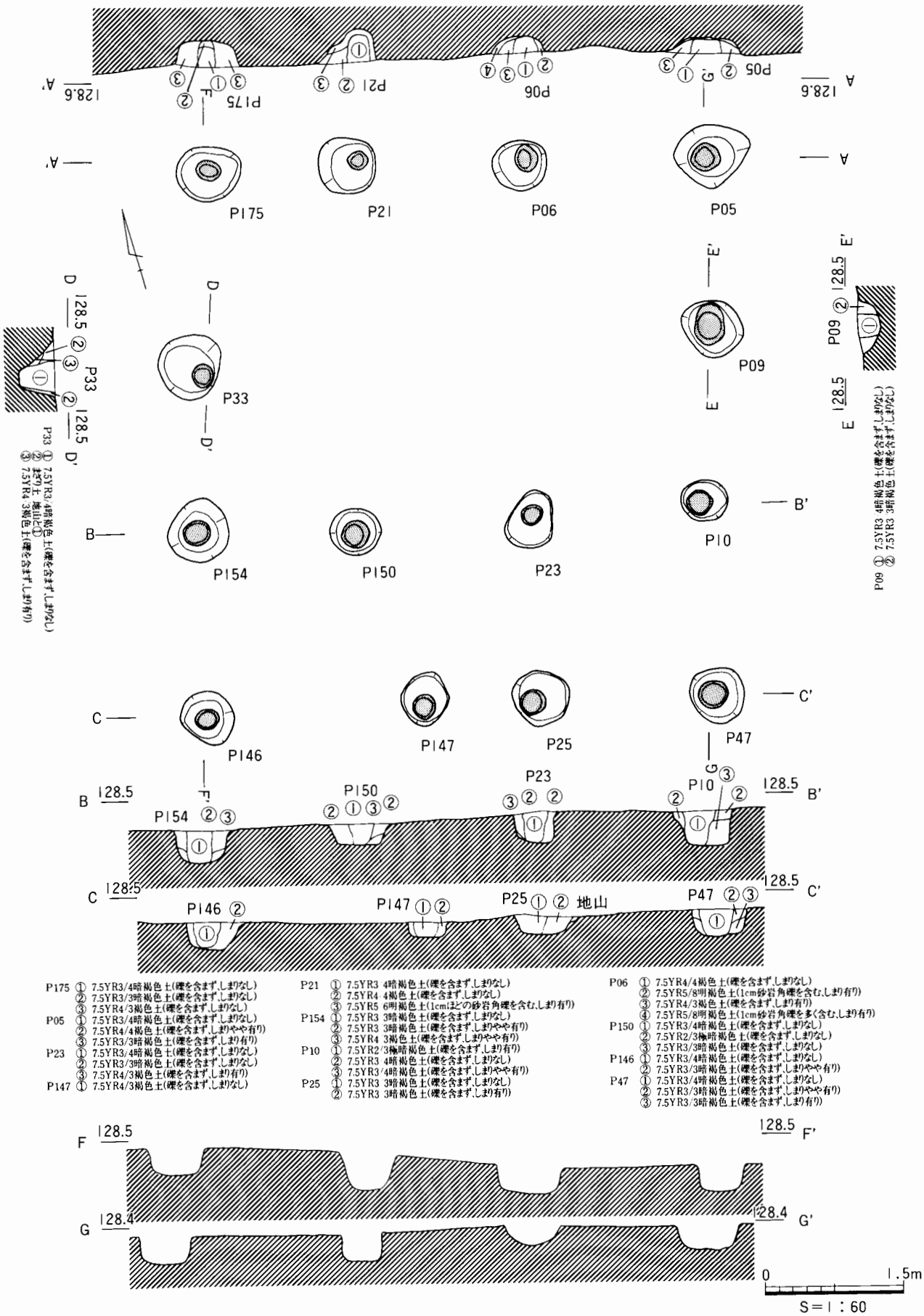

P175 ① 7.5YR3/4暗褐色土(礫を含まず,しまりなし)
② 7.5YR3/3暗褐色土(礫を含まず,しまりなし)
③ 7.5YR4/3褐色土(礫を含まず,しまりなし)
P05 ① 7.5YR3/4暗褐色土(礫を含まず,しまりなし)
② 7.5YR4/4褐色土(礫を含まず,しまりやや有り)
③ 7.5YR3/3暗褐色土(礫を含まず,しまり有り)
P23 ① 7.5YR3/4暗褐色土(礫を含まず,しまりなし)
② 7.5YR3/3暗褐色土(礫を含まず,しまりなし)
③ 7.5YR4/3褐色土(礫を含まず,しまり有り)
P147 ① 7.5YR4/3褐色土(礫を含まず,しまりなし)
P21 ① 7.5YR3 4暗褐色土(礫を含まず,しまりなし)
② 7.5YR4 4褐色土(礫を含まず,しまりなし)
③ 7.5YR5 6明褐色土(1cmほどの砂岩角礫を含む,しまり有り)
P154 ① 7.5YR3 3暗褐色土(礫を含まず,しまりなし)
② 7.5YR3 3暗褐色土(礫を含まず,しまりやや有り)
③ 7.5YR4 3褐色土(礫を含まず,しまりやや有り)
P10 ① 7.5YR2/3極暗褐色土(礫を含まず,しまり有り)
② 7.5YR3 4暗褐色土(礫を含まず,しまりなし)
③ 7.5YR3/4暗褐色土(礫を含まず,しまりやや有り)
P25 ① 7.5YR3 3暗褐色土(礫を含まず,しまりなし)
② 7.5YR3 3暗褐色土(礫を含まず,しまり有り)
P06 ① 7.5YR4/4褐色土(礫を含まず,しまりなし)
② 7.5YR5/8明褐色土(1cm砂岩角礫を含む,しまり有り)
③ 7.5YR4/3褐色土(礫を含まず,しまり有り)
④ 7.5YR5/8明褐色土(1cm砂岩角礫を多く含む,しまり有り)
P150 ① 7.5YR3/4暗褐色土(礫を含まず,しまりなし)
② 7.5YR2/3極暗褐色土(礫を含まず,しまりなし)
③ 7.5YR3/3暗褐色土(礫を含まず,しまりなし)
P146 ① 7.5YR3/4暗褐色土(礫を含まず,しまりなし)
② 7.5YR3/3暗褐色土(礫を含まず,しまりやや有り)
P47 ① 7.5YR3/4暗褐色土(礫を含まず,しまりなし)
② 7.5YR3/3暗褐色土(礫を含まず,しまりやや有り)
③ 7.5YR3/3暗褐色土(礫を含まず,しまり有り)
P33 ① 7.5YR3/4暗褐色土(礫を含まず,しまりなし)
② まぢり土 地山と①
③ 7.5YR4 3褐色土(礫を含まず,しまり有り)
P09 ① 7.5YR3 4暗褐色土(礫を含まず,しまりなし)
② 7.5YR3 3暗褐色土(礫を含まず,しまりなし)
地山
S＝1：60

図67　SB03 実測図

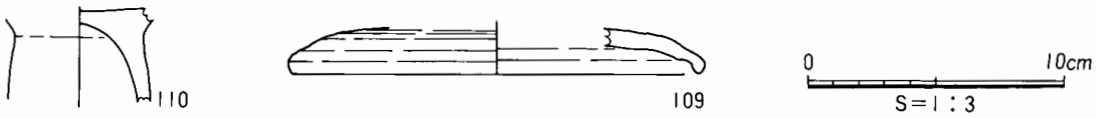


図68　SB03 出土遺物実測図

遺構配置（図66）

調査区内の北部に、掘立柱建物群が位置している。SB03・SB04・SB05の掘立柱建物跡とSA01・SA02の柵列である。

ＳＢ03（図67、図版３）

調査区内の北部の比較的平坦な南東斜面N12グリッドを中心とした位置にある。周辺には、東側にSB04・SB05が位置している。桁行３間（5.7m）×梁行２間（3.9m）、床面積22.2㎡、主軸方向はN－75°－Wにとる掘立柱建物跡である。南側に桁行方向に４間（5.5m）×梁行き１間（２m）の庇を配置している。庇までを含めた床面積は、34.2㎡になる。柱穴間の距離は、桁行方向が西から約1.7m・1.9m・1.8mで中心の間隔がやや広い。梁行方向が北から約2.2m・1.7mとやや北側の間隔が広い。庇が、桁行方向は、西から約2.3m・1.2m・２mと中央部が狭い。柱穴は14本で、すべての柱穴で柱の痕跡を確認した。規模は、柱の径は最大0.36m、深さ0.36m、掘方の最大は長辺0.72m×短辺0.66m、深さ0.36mになる。掘方は、ほぼだ円形である。

出土遺物（図68、図版27）

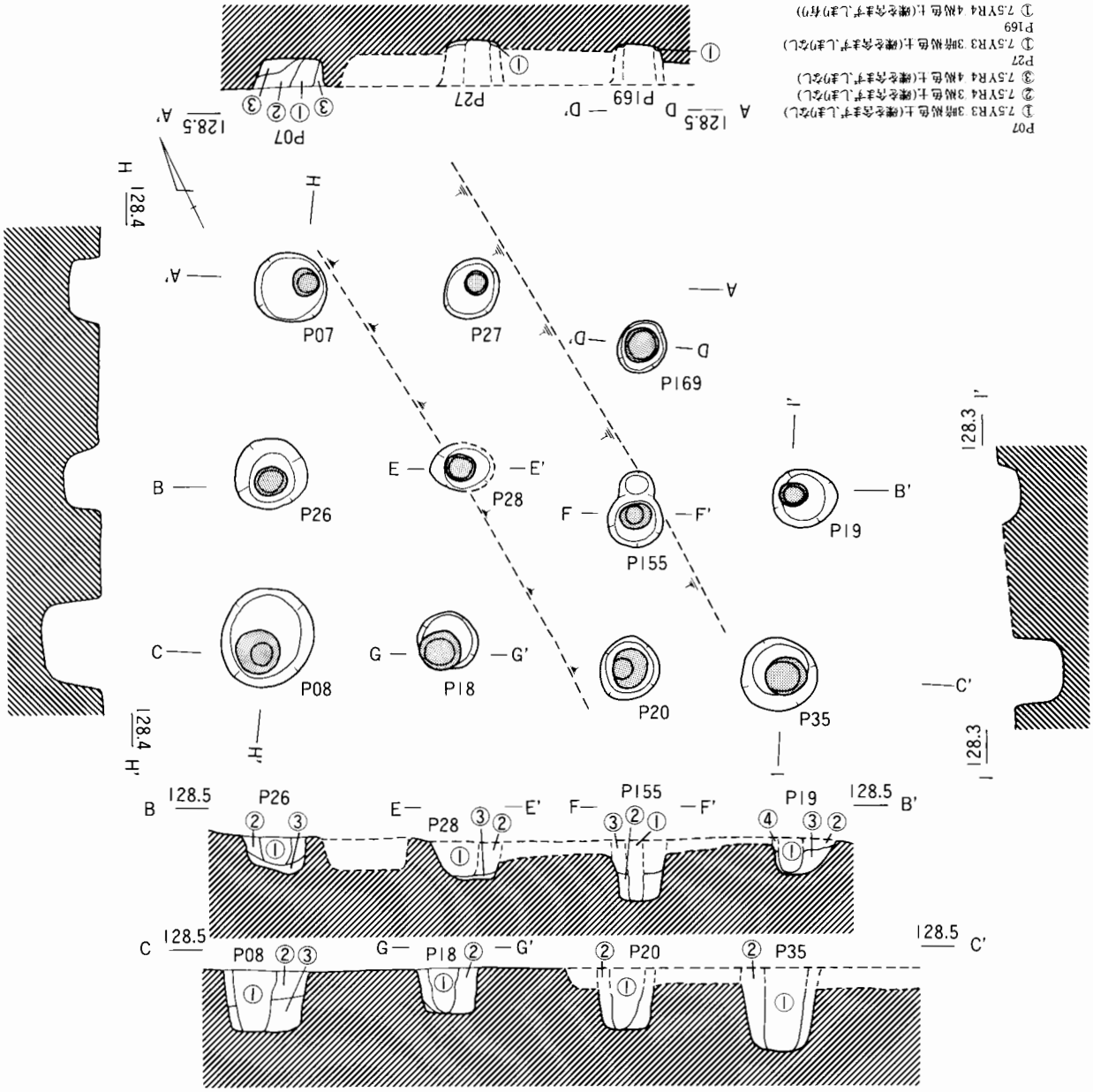
Ｐ10から109の須恵器の杯蓋が出土した。天井部から口縁にかけて丸い。７世紀末から８世紀初頭の美濃須衛産である。Ｐ21から、110の須恵器の盤が出土した。脚付きのものかと思われる。７世紀後半の美濃須衛産かと思われる。

所属時期

出土した須恵器から、Ⅳ期の７世紀後半から８世紀初頭に属すると思われる。

ＳＢ04（図69、図版３）

調査区内の北部の比較的平坦な南東斜面Ｐ12グリッドを中心とした位置にある。周辺には、西側にSB03、南にSB05が位置している。桁行３間（3.9m）×梁行２間（2.8m）、床面積10.9㎡、主軸方向はN－60°－Wにとる総柱の掘立柱建物跡である。柱穴間の距離は、桁行方向が西から約1.3m・1.4m・1.2mで中心の間隔がやや広い。梁行方向が北から約1.5m・1.3mとやや北側の間隔が広い。柱穴は11本で、北東隅の柱が欠けている。すべての柱穴で柱の痕跡を確認した。規模は、柱の径は最大0.3m深さ0.45m、掘方の最大は0.75m×短辺0.70m、深さ0.45mになる。掘方は、ほぼ円形である。



P26
① 7.5YR3/3暗褐色土(礫を含まず,しまりなし)
② 7.5YR3/2黒褐色土(礫を含まず,しまりなし)
③ 地山

P28
① 7.5YR4/4褐色土(礫を含まず,しまりなし)
② 7.5YR3/4暗褐色土(礫を含まず,しまりなし)
③ 地山

P155
① 7.5YR3/3暗褐色土(礫を含まず,しまり有り)
② 7.5YR3/4暗褐色土(礫を含まず,しまり有り)
③ 7.5YR6/6橙色土(礫を含まず,しまり有り)

P19
① 7.5YR3/2黒褐色土(礫を含まず,しまりなし)
② 7.5YR3/2黒褐色土(礫を含まず,しまりやや有り)
③ 7.5YR3/2黒褐色土と7.5YR4/4褐色土の混じり(礫を含まず,しまりなし)
④ 7.5YR5/6明褐色土(礫を含まず,しまり有り)

P08
① 7.5YR4/4褐色土(1～2cmほどの砂岩角礫を少量含む,しまりなし)
② 7.5YR3/2黒褐色土(礫を含まず,しまりなし)
③ 7.5YR3/3暗褐色土(礫を含まず,しまりなし)

P18
① 7.5YR3/3暗褐色土(礫を含まず,しまりなし)
② 7.5YR4/4褐色土(礫を含まず,しまりなし)

P20
① 7.5YR3/2黒褐色土(礫を含まず,しまりなし)
② 7.5YR3/3暗褐色土(礫を含まず,しまりなし)

P35
① 7.5YR3/2黒褐色土(礫を含まず,しまりなし)
② 7.5YR3/2黒褐色土(礫を含まず,しまりやや有り)

0　2m
S＝1：50

図69　SB04 実測図

出土遺物

P08・P18・P35から土師器片が数点出土した。

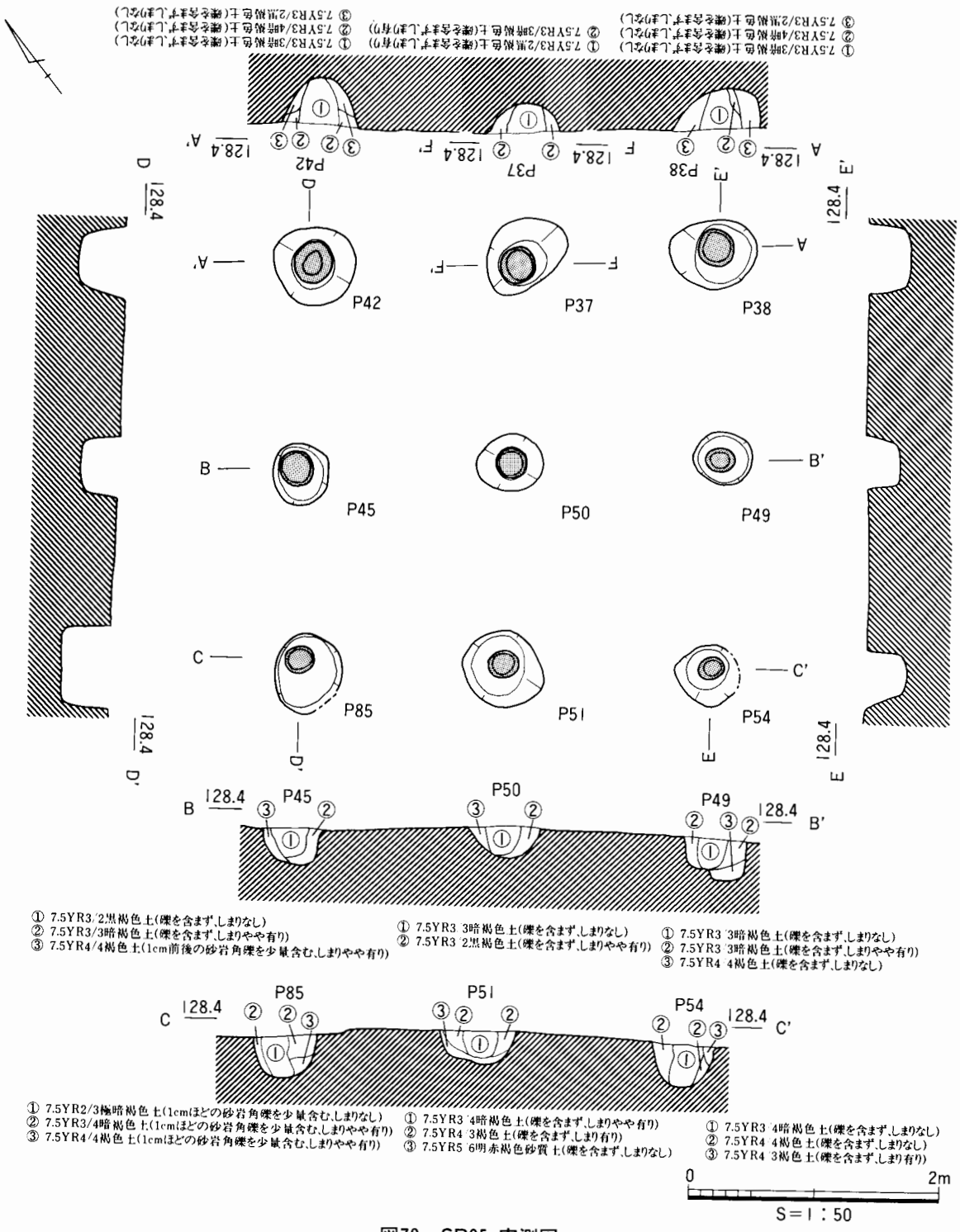


図70　SB05 実測図

所属時期

土師器片からは、はっきりとわからないが、SB03との位置関係からみてもⅣ期の７世紀後半から８世紀初頭にあたると思われる。

ＳＢ05（図70、図版４）

調査区内の北部の比較的フラットな南東斜面O13グリッドを中心とした位置にある。周辺には、北

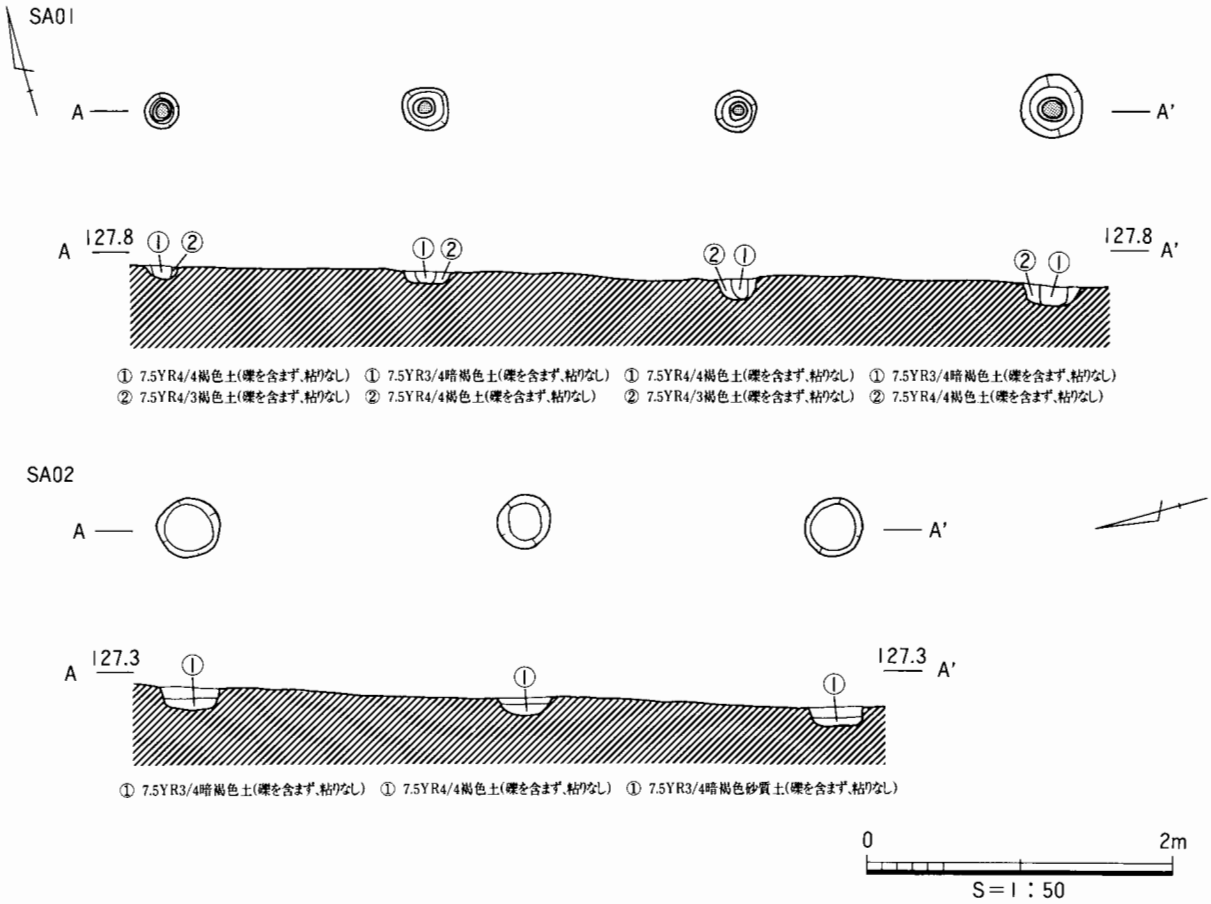


図71　SA01・02 実測図

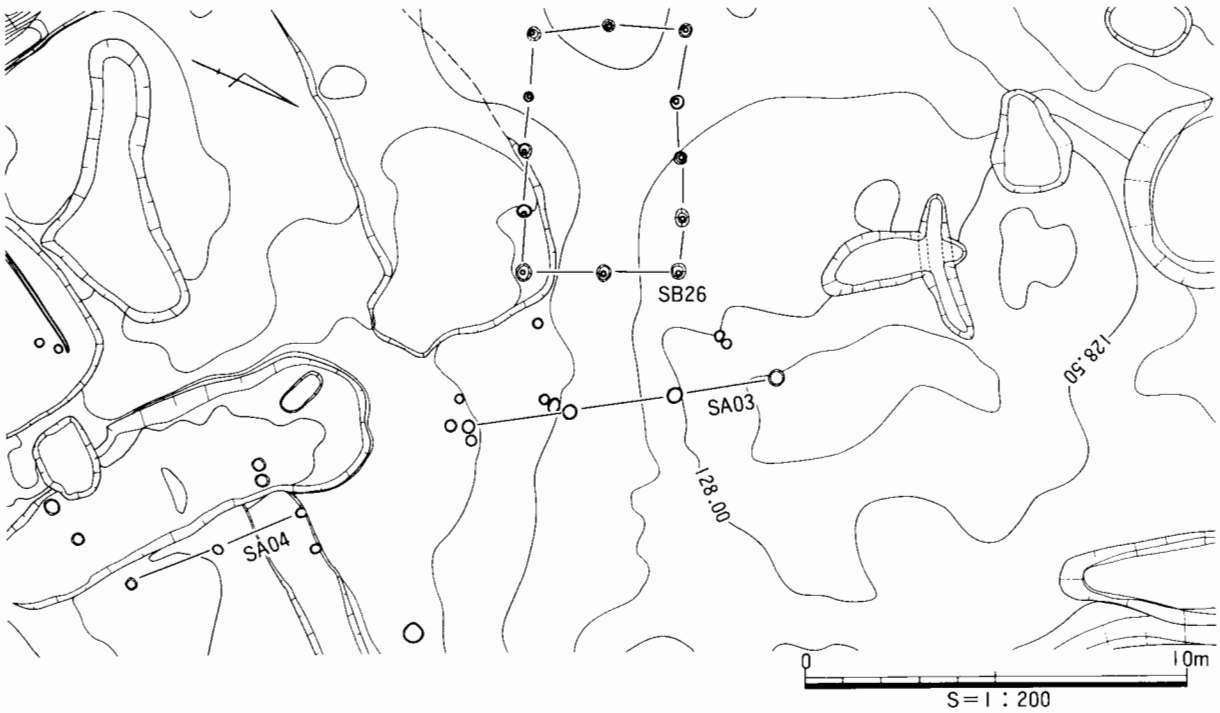


図72　SB26 周辺地形図

側にSB03、南にSB05が位置している。南北２間（3.3m）×東西２間（3.3m）、床面積10.9㎡、主軸方向はN－52°－Wにとる総柱の掘立柱建物跡である。柱穴間の距離は、南北方向が北から約1.65m・1.65m。東西方向が西から約1.65m・1.65m。柱穴は９本で、すべての柱穴で柱の痕跡を確認した。規模は、柱の径は最大0.3m、深さ0.35m、掘方の最大径は0.6m、深さ0.35mになる。掘方は、ほぼ円形である。SB03とは、方向を多少異にするが、同じ総柱のSB04とは、方向をほぼ同じにする。建物間にも適度に距離があり、同時に建っていた可能性がある。

出土遺物

Ｐ45及びＰ85より土師器片が、数点出土した。器種ははっきりしない。

所属時期

出土遺物から時期ははっきりわからないが、SB03・SB04・SB05が、同時に建っていた可能性があり、Ⅳ期の７世紀後半から８世紀初頭に属する可能性がある。

ＳＡ01（図71、図版23）

調査区内O14グリッドにある。東西方向に３間（5.6m）ある。柱間は、東から2.05m・2.05m・1.7mである。主軸方向はN－67°－Wである。柱穴は４本あり、すべての柱穴で柱の痕跡を確認した。

出土遺物

特になし。

所属時期

明確な時期は不明であるが、Ⅳ期の可能性はある。

ＳＡ02（図71、図版23）

調査区内L15グリッドにある。南北方向に２間（4.2m）ある。柱間は、北から2.1m・2.1mである。主軸方向は、N－10°－Eである。柱は３本あり、柱の痕跡は確認できなかった。

出土遺物

特になし。

所属時期

明確な時期は不明であるが、Ⅳ期の可能性はある。

遺構配置（図72）

掘立柱建物跡SB26と柵列SA03・SA04がある。SB26とSA03は、一連の建物かと思われる。

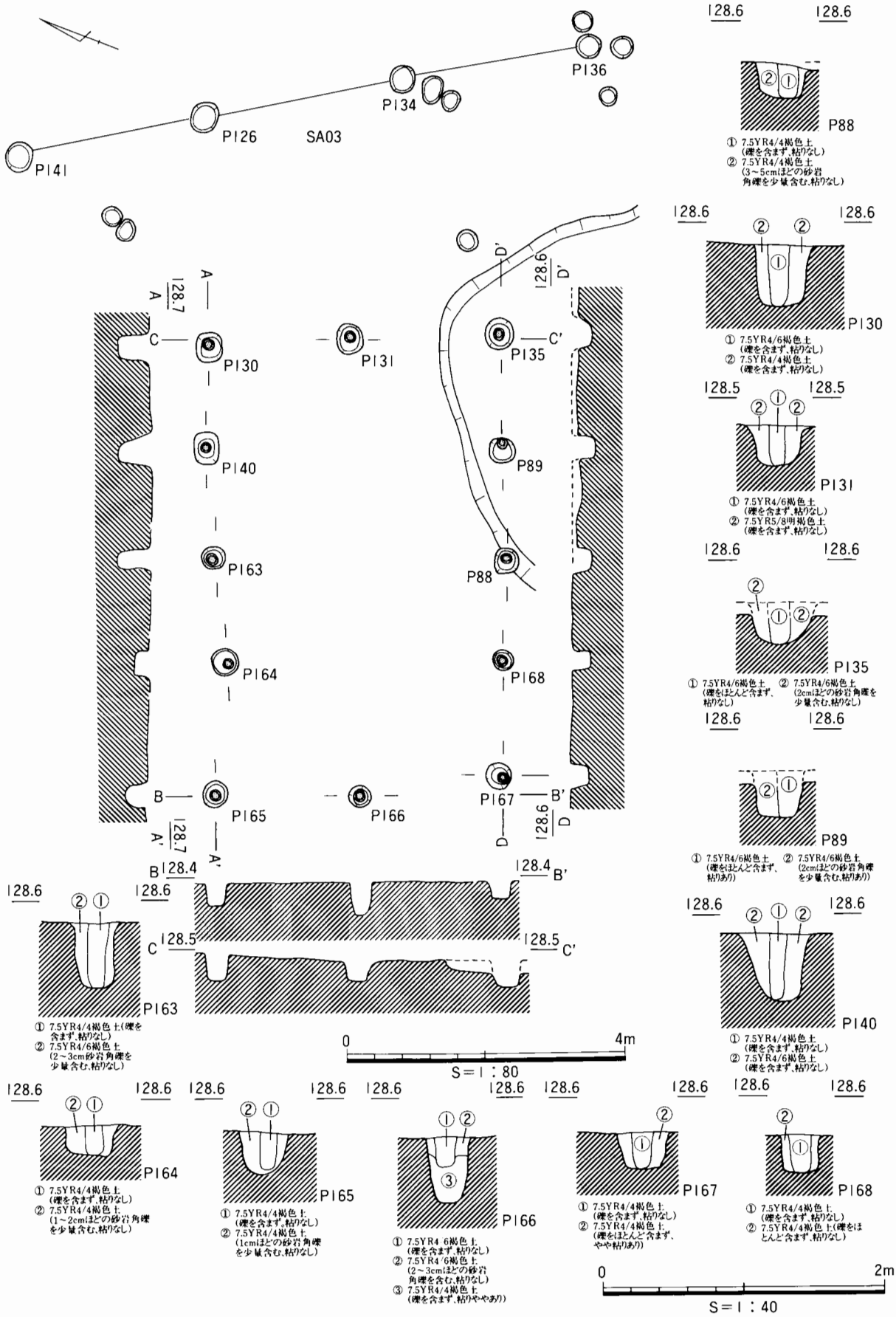

P141
P126
SA03
P134
P136
P130
P131
P135
P140
P89
P163
P88
P164
P168
P165
P166
P167
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
128.7
128.6
128.5
128.4
P88
① 7.5YR4/4褐色土（礫を含まず、粘りなし）
② 7.5YR4/4褐色土（3～5cmほどの砂岩角礫を少量含む、粘りなし）
P130
① 7.5YR4/6褐色土（礫を含まず、粘りなし）
② 7.5YR4/4褐色土（礫を含まず、粘りなし）
P131
① 7.5YR4/6褐色土（礫を含まず、粘りなし）
② 7.5YR5/8明褐色土（礫を含まず、粘りなし）
P135
① 7.5YR4/6褐色土（礫をほとんど含まず、粘りなし）
② 7.5YR4/6褐色土（2cmほどの砂岩角礫を少量含む、粘りなし）
P89
① 7.5YR4/6褐色土（礫をほとんど含まず、粘りあり）
② 7.5YR4/6褐色土（2cmほどの砂岩角礫を少量含む、粘りあり）
P140
① 7.5YR4/4褐色土（礫を含まず、粘りなし）
② 7.5YR4/6褐色土（礫を含まず、粘りなし）
P163
① 7.5YR4/4褐色土（礫を含まず、粘りなし）
② 7.5YR4/6褐色土（2～3cm砂岩角礫を少量含む、粘りなし）
0
4m
S＝1：80
P164
① 7.5YR4/4褐色土（礫を含まず、粘りなし）
② 7.5YR4/4褐色土（1～2cmほどの砂岩角礫を少量含む、粘りなし）
P165
① 7.5YR4/4褐色土（礫を含まず、粘りなし）
② 7.5YR4/4褐色土（1cmほどの砂岩角礫を少量含む、粘りなし）
P166
① 7.5YR4/6褐色土（礫を含まず、粘りなし）
② 7.5YR4/6褐色土（2～3cmほどの砂岩角礫を含む、粘りなし）
③ 7.5YR4/4褐色土（礫を含まず、粘りややあり）
P167
① 7.5YR4/4褐色土（礫を含まず、粘りなし）
② 7.5YR4/4褐色土（礫をほとんど含まず、ややあり）
P168
① 7.5YR4/4褐色土（礫を含まず、粘りなし）
② 7.5YR4/4褐色土（礫をほとんど含まず、粘りなし）
0
2m
S＝1：40

図73　SB26 実測図

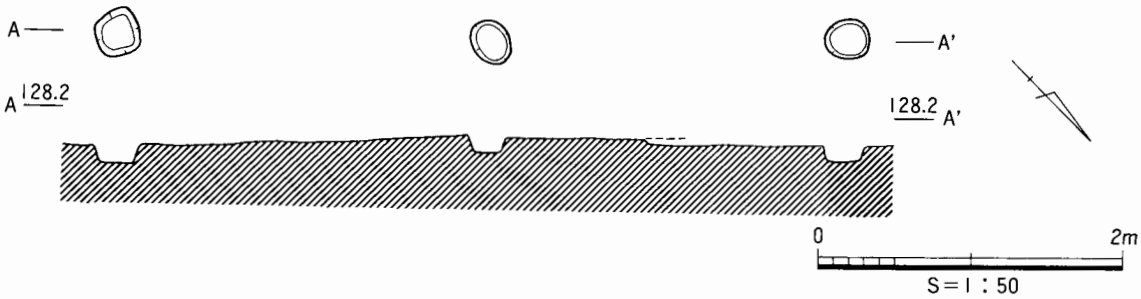


図74　SA04 実測図

ＳＢ26（図73、図版11）

調査区内の中央西Ｇ21グリッドを中心とした位置にある。周辺には、北側にSA03、北東にSA04が位置している。桁行４間（6.4m）×梁行２間（4.0m）、床面積25.6㎡、主軸方向はＮ－69°－Ｅにとる掘立柱建物跡である。柱穴間の距離は、桁行方向が西から約1.9m・1.5m・1.5m・1.5m、梁行方向が北から約2.0m・2.0m。柱穴は12本で、すべての柱穴で柱の痕跡を確認した。規模は、柱の径は最大0.16m、深さ0.4m、掘方の最大径は0.48m、深さ0.48mになる。掘方は、円形・長方形のものがある。SB26の北2.5mの位置にSA03がある。SA03の主軸方向が、SB26の梁行き方向に近いので、SA03は、SB26に付属するものではないかと思われる。

ＳＡ03（図72、73）

調査区内Ｊ22グリッドにある。南北方向に３間（8.2m）ある。柱間は、北から2.7m・2.9m・2.7mである。主軸方向はＮ－34°－Ｗである。柱穴は３本あり、柱の痕跡は確認できなかった。

出土遺物

特に、出土遺物は確認できなかった。

所属時期

出土遺物や遺構間の関係からはっきりしたことはわからない。可能性としてⅣ期に属すると考える。

ＳＡ04（図74）

調査区内Ｊ22グリッドにある。南北方向に２間（4.8m）ある。柱間は、南から2.4m・2.4mである。主軸方向はＮ－47°－Ｗである。柱穴は３本あり、柱の痕跡は確認できなかった。

出土遺物

出土遺物は確認できなかった。

所属時期

出土遺物や遺構間の関係からはっきりしたことはわからない。可能性としてⅣ期に属すると考える。

第２節　方形周溝墓（前方後方形周溝墓）・古墳と遺物

(1)　調査の経緯（図75）

金ヶ崎遺跡の墳墓群（方形周溝墓・前方後方形の方形周溝墓・古墳）は、すべてが既存の遺構ではなかった。試掘・確認調査前の段階で調査区内の既存の遺構は、SX01・SX02・SX03・SX05の４基であった。しかも、古墳時代後期の古墳と考えられていた。ところが試掘・確認調査によって新しく２基の遺構が発見された。この段階でも、依然としてこれらの遺構は後期の群集する古墳と考えられていた。

調査区内の遺構について、新たな見解が生まれたのは、10月を過ぎてからである。SX02・SX03・SX05の周溝部に弥生時代末から古墳時代初頭の土器群が出土し始め、SX05の主体部から多孔銅鏃が出土してからである。遺構も、SX03・SX05の西および南にSX06・SX07の一部を確認し、新たにSX14を発見した。前後するが、試掘・確認調査の段階で遺構としていたものも、SX09・SX10とした。そのほか、SX09の西にSX11、SX03の東にSX12、SX02の北にSX13、北西にSX15を発見した。この段階で、当初考えていた６基の遺構が、10基になっていた。（完全に調査区内に存在する遺構）

残念ながら、新たに発見された墳墓は、墳丘部分が後世の掘削によって消滅していたが、周溝部分が残っていたこともあって、その規模が確認ができた。また、残った周溝部分からも遺物が出土し、時期決定の決め手になった。

(2)　調査前の状況

金ヶ崎遺跡の墳墓群の周辺は、雑木に覆われているところと、畑地として利用されていたところがあり、墳丘が確認できる場所とまったく確認できない状況の場所があった。特に、調査区内北部は、畑地になっていたので、SX09・SX10・SX11・SX13・SX15は、試掘・確認調査においてもその半数の遺構の存在は予想できなかった。

(3)　各遺構の状況

ＳＸ01（金ヶ崎１号墳・・前方後方形の方形周溝墓）（図76・77、図版12・14）

墳丘墓の残存状態

SX01は、墳丘部の南半分が削平され、土砂が削り取られていた。建物を建てたような跡もあり、そのまわりには、石垣が積んであった。さらに南は、重機のバケットで土を掘り返し、その中にブロックやコンクリート・針金など廃棄物を投棄してあるような穴が数カ所あった。

北半分は墳丘部が残り、墳丘の裾部分にかけて土砂が堆積していた。東側は、墳丘部が一部削り取られ石垣が積んであった。

墳丘墓の立地

調査区内の北の端、北東から南西に延びる尾根上に位置する。同一尾根筋には、南西に向かってSX11・SX10・SX15などが位置している。

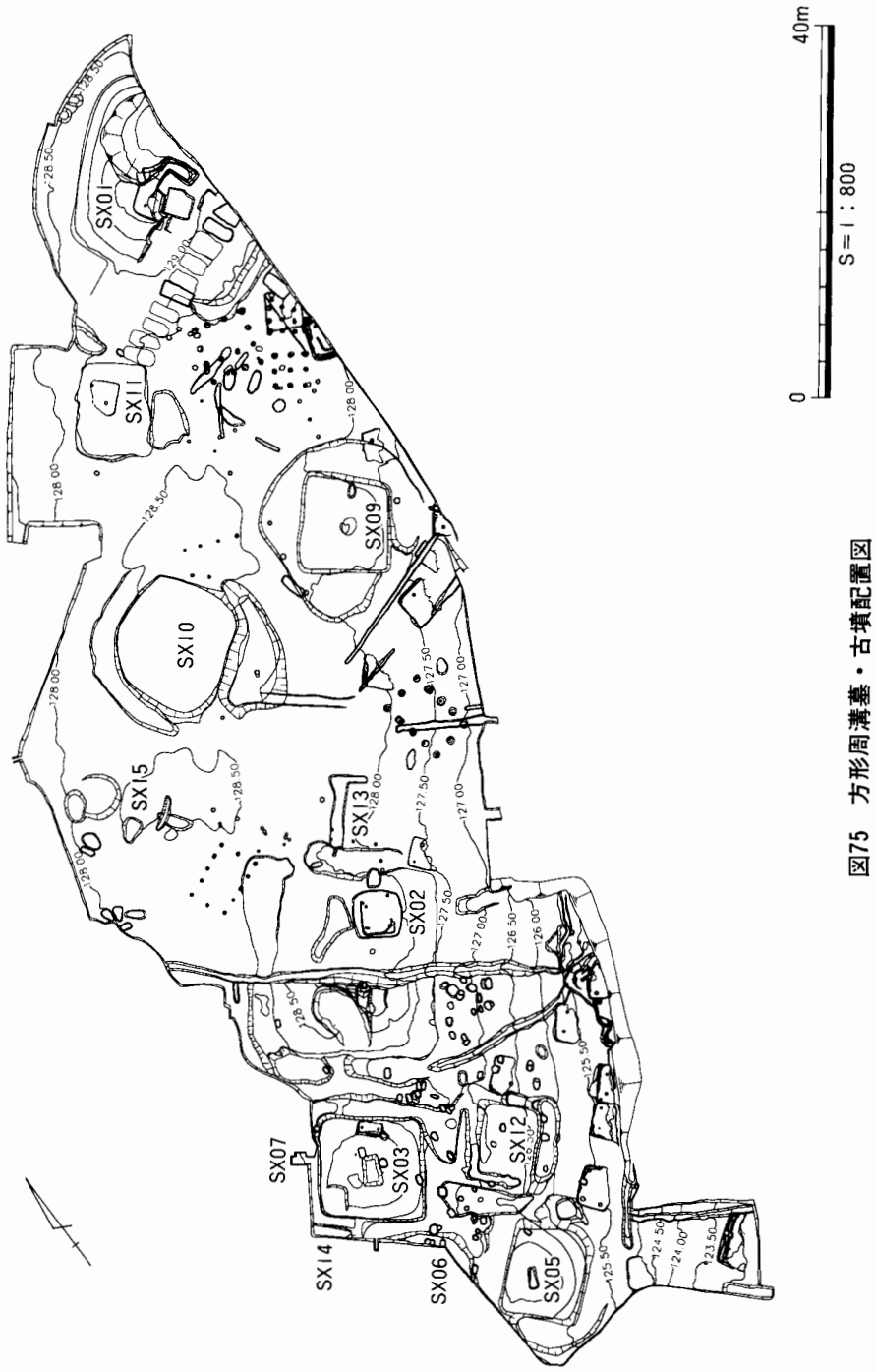


図75　方形周溝墓・古墳配置図

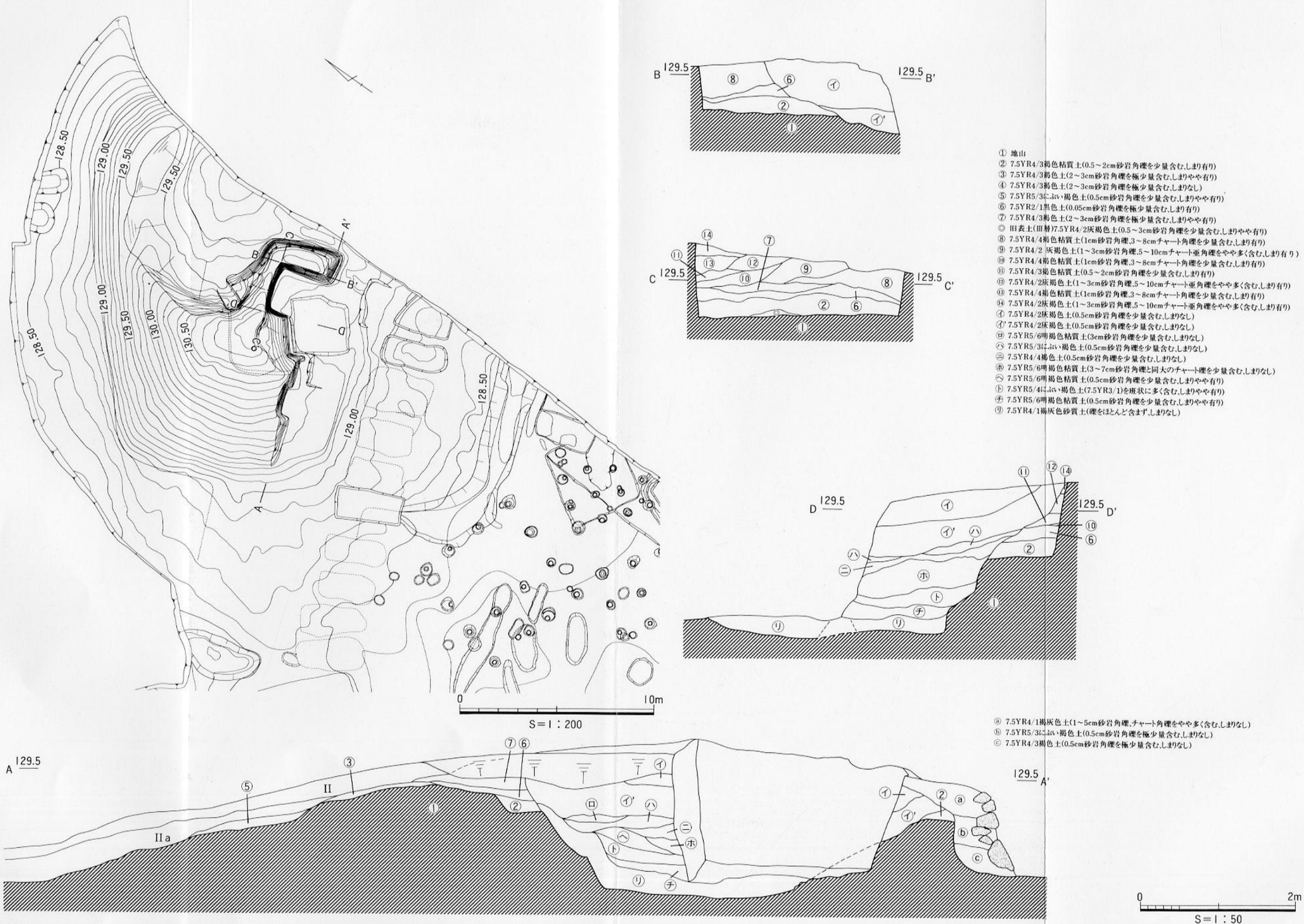
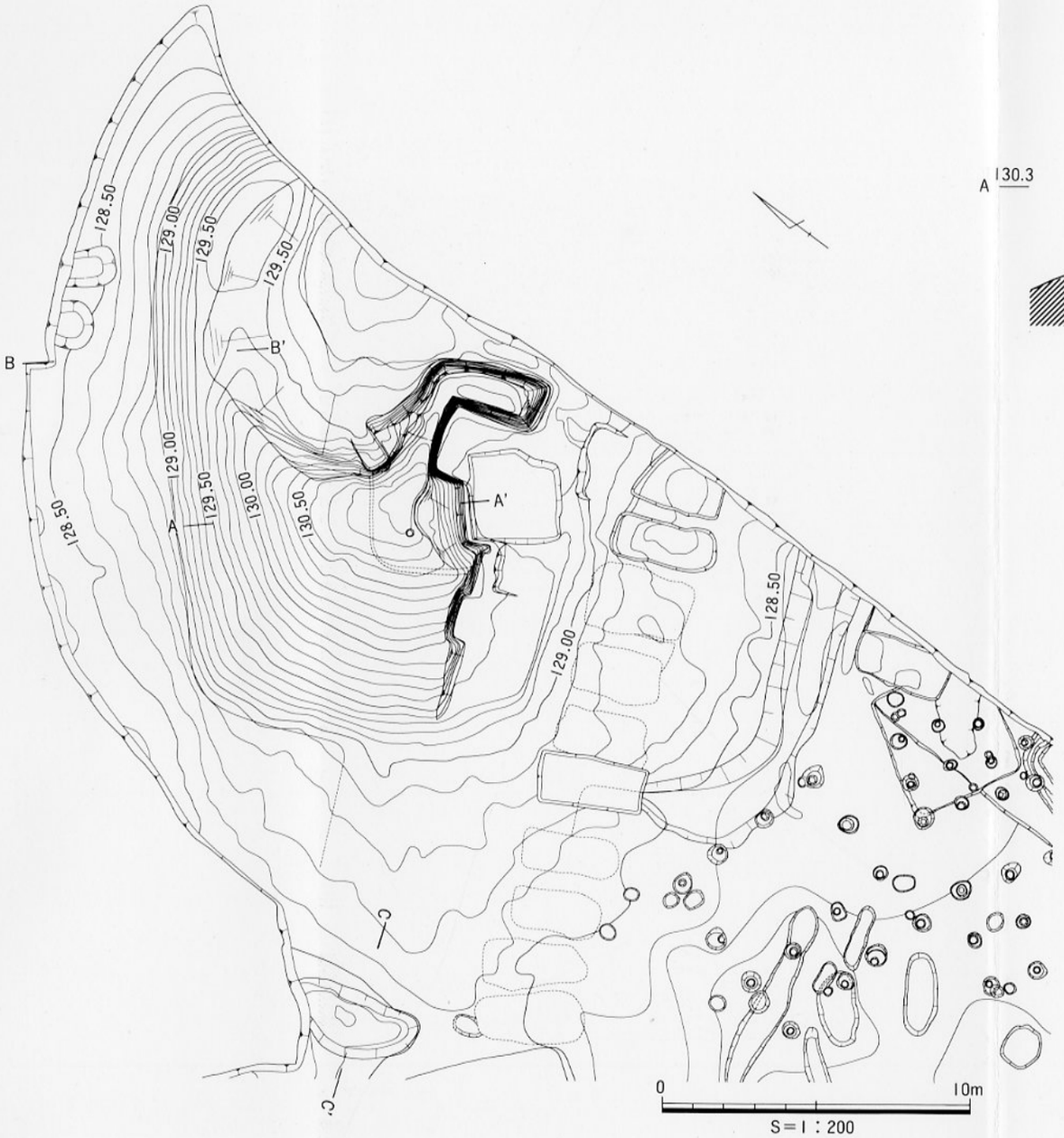
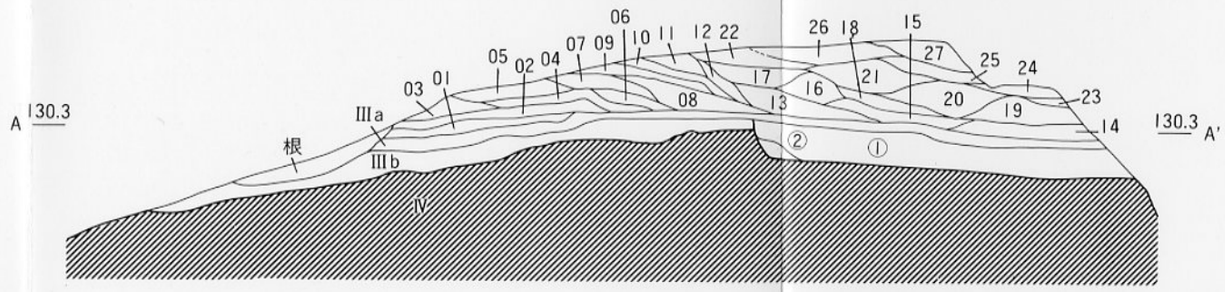


図76　SX01 盗掘坑断面図

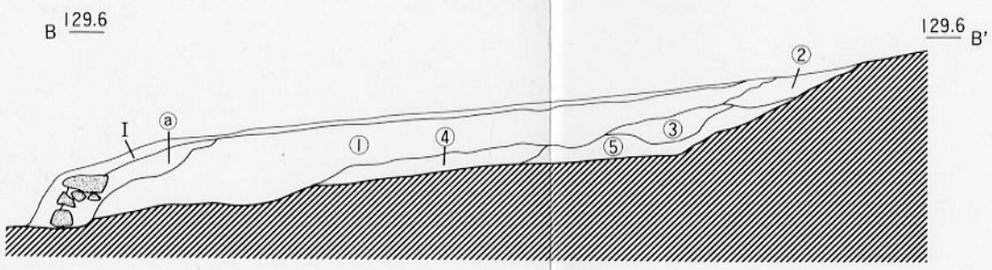




01 7.5YR4/3褐色土(0.5～2cm砂岩角礫を少量含む,しまり有り)
02 7.5YR2/1黒色土(3～6cmチャート亜角礫を少量含む,しまり有り)
03 7.5YR4/2灰褐色土(0.5～2cm砂岩角礫を少量含む,しまりやや有り)
04 7.5YR4/3褐色土(0.5～2cm砂岩角礫を少量含む,しまり有り)
05 7.5YRにぶい褐色土(0.5～2cm砂岩角礫を多く含む,しまり有り)
06 7.5YR2/1黒色土(0.5～2cm砂岩角礫を少量含む,しまり有り)
07 7.5YR5/4にぶい褐色粘質土(0.5～2cm砂岩角礫を少量含む,しまり強)
08 7.5YR4/2cm砂岩角礫を少量含む,しまり有り)
09 7.5YR5/4にぶい褐色粘質土(0.5～2cm砂岩角礫を少量含む,しまり強)
10 7.5YR4/2灰褐色土(0.5～2cm砂岩角礫を少量含む,しまり有り)
11 7.5YR5/4にぶい褐色粘質土(0.5～2cm砂岩角礫を少量含む,しまり強)
12 5YR5/6明赤褐色粘質土(0.5～2cm砂岩角礫を少量含む,しまり強)
13 7.5YR5/4にぶい褐色粘質土(0.5～2cm砂岩角礫を少量含む,しまり強)
14 7.5YR3/1黒褐色土(0.5～3cm砂岩角礫を少量含む,しまり有り)
15 7.5YR5/2灰褐色粘質土(0.5～3cm砂岩角礫を少量含む,しまり強)
16 7.5YR5/4にぶい褐色粘質土(0.5～2cm砂岩角礫を少量含む,しまり強)
17 5YR5/6明赤褐色粘質土(0.5～2cm砂岩角礫を少量含む,しまり強)
18 10YR6/6明黄褐色土(0.5～3cm砂岩角礫を多く含む,しまり有り)
19 7.5YR4/4褐色粘質土(0.5～2cm砂岩角礫を少量含む,しまり有り)
20 7.5YR4/4褐色粘質土(0.5～6cm砂岩角礫を多く含む,しまり有り)
21 7.5YR4/4褐色粘質土(0.5～2cm砂岩角礫を少量含む,しまり有り)
22 7.5YR4/1褐灰色土(0.5～2cm砂岩角礫を少量含む,しまりやや有り)
23 7.5YR4/1褐灰色土(0.5～2cm砂岩角礫を少量含む,しまりやや有り)
24 7.5YR5/4にぶい褐色粘質土(0.5～2cm砂岩角礫を少量含む,しまり強)
25 7.5YR5/4にぶい褐色粘質土(0.5～2cm砂岩角礫を少量含む,しまり強)
26 7.5YR4/4褐色粘質土(0.5～6cm砂岩角礫を多く含む,しまり有り)
27 7.5YR4/1褐灰色土(0.5～2cm砂岩角礫を少量含む,しまりやや有り)

① 7.5YR4/6褐色土(0.5～3cm砂岩角礫を多く含む,しまり有り)
② 7.5YR3/2黒褐色土(0.5～2cm砂岩角礫を少量含む,しまり有り)

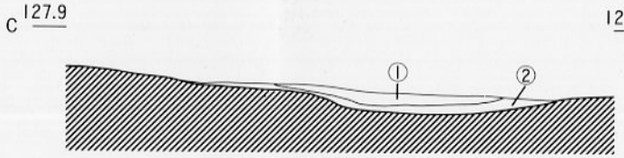
IIIa 7.5YR2/1黒色土(0.5～3cm砂岩角礫を少量含む,しまり有り,上面に炭化物を少量含む)
IIIb 7.5YR4/2灰褐色(0.5～2cm砂岩角礫を少量含む,しまり有り)
IV 5YR5/6明赤褐色粘質土(0.5～3cm砂岩角礫を多く,3～6cmチャート亜角礫を少量含む,しまり強)



I：表土　根及び腐葉土

① 7.5YR5/2灰褐色砂質土(0.5～1cm砂岩角礫を少量含む,しまりなし)
② 7.5YR5/4にぶい褐色土(1～2cm砂岩角礫を多く含む,しまりやや有り)
③ 7.5YR灰褐色砂質土(礫を含まず,しまりなし)
④ 7.5YR5/6明褐色土(0.5～1cm砂岩角礫を少量含む,しまりなし)
⑤ 7.5YR4/3褐色砂質土(0.5～1cm砂岩角礫を極少量含む,しまりなし)
石垣裏込め土ⓐ 7.5YR5/3にぶい褐色土(0.5～1cm砂岩角礫,チャート亜角礫を多く含む)

0　2m
S＝1：50



① 7.5YR3/3暗褐色土(礫を含まず,しまりなし)
② 7.5YR4/4褐色土(2～5cm砂岩角礫を含む,しまり有り)

図77　SX01 実測図

周辺には、弥生時代末から古墳時代初頭の竪穴住居跡や土坑があり、墳丘下にもSB28がある。標高は、墳丘頂部で130.9ｍを測る。墳丘の南半分は後世の削平を受けて、築造時の高さを保っていない。

周　溝

墳丘の形を前方後方形の方形周溝墓と考える理由に、周溝の存在がある。前方部前面と考える南西の端に、幅約２ｍ、長さ４ｍ、深さ0.15ｍの周溝と幅0.8ｍ、長さ0.8ｍ、深さ不明の周溝を確認した。長い方は西側の調査区端で切れ、小さい周溝は、東端が撹乱によって明確になっていない。この周溝から、高杯の杯（111）の部分と脚（112）の部分が出土している。周溝の断面はⅢ状で浅く、中央が切れているので、その部分が墳丘に続く陸橋になっているのではないかと思われる。また、後方部の南端、丁度調査区外との境にある壁で、周溝の断面を確認した。幅２ｍほど、深さ0.25ｍほどのものである。その周溝が西へ延び、８ｍ西で北へ屈曲している。その先は撹乱によって不明である。前方部の左側（北側）と後方部の左側（北側）に明確な周溝は確認できなかった。ただ、後方部北側の断面を見ると、墳丘の裾の部分が平坦に削り出され、その平坦面が北へ2.75ｍ行った所から、調査区北端に向かってくぼみがみられる。これは、周溝の残存部分ではないかと思われる。

墳　丘

平面形は、前方後方形を想定している。規模は、全長が推定で約30ｍ、前方部縦12ｍ×横７.７ｍ、後方部は推定縦20.5ｍ×横20ｍである。どちらかというと、後方部の先端部分の幅が、前方部に近い部分の幅よりも広いように思われる。残った部分の墳丘高は０.６ｍを測り、墳丘頂部と周溝底部の比高差は約3.6ｍになる。墳丘断面をみると、墳丘が構築される前の旧地表土（Ⅲａ・Ⅲｂ）の上に墳丘端部から墳丘中央部に向かって傾斜する互層状の堆積がみられる。このことから、墳丘構築に盛土が行われたと推察される。また、墳丘構築時に整地を意識した野焼きが行われていたと思われる。それは、Ⅲａ層の上面に炭化物を含むことから推察できる。盛土には周溝部の土をはじめⅢａ層黒色土・Ⅲｂ層黒褐色土およびその下の地山（Ⅳ層）明赤褐色粘質土も使用されたようである。盛土の手順などについては、第８章で述べる。

なお、墳丘墓とその下の竪穴住居跡（SB28）とは、Ⅲａ層を挟んでいるため、時期差があると思われる。

主体部

主体部は、墳丘の南半分が削平を受けたため、確認できなかった。

出土遺物（図78、図版34）

遺物は、高杯３点・鉄製品１点が実測可能であった。111・112は、前方部前面の周溝出土の土器である。111は、高杯の杯の部分で、一部分のため明確な器形復元はできないが、Ａ類の高杯ではないかと思われる。112は高杯の脚部で、脚高が非常に短い。裾の部分が一端外反したあと、端の部分で内彎している。Ｃ類の高杯ではないかと思われる。113は、墳丘盛土内から出土したものである。口縁部の破片であるが、口縁端部をやや肥厚させ、内面に多条沈線と波線文を施している。美濃地方西

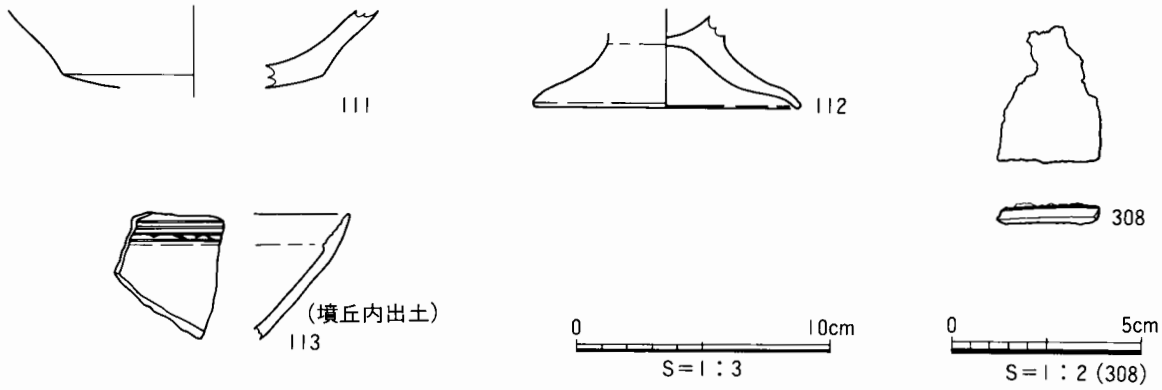


図78　SX01 出土遺物実測図

部に多く出土している一群の土器かと思われる。高杯A類に属すると思われる。鉄製品の種別は、不明である。長さ3.5cmあまりの鉄片で、生きている面が2面ある。

所属時期

Ⅱ－2期又はⅡ－3期に属すると思われる。

ＳＸ02（図79・80、図版12・14）

墳丘墓の残存状態

SX02は、墳丘部の北半分が削平され、畑地になっていた。また、南半分中央にもゴミ穴が掘られ、その中に大量の遺物がゴミや石と一緒に放り込まれていた。中央を東西に現代溝が走り、排水溝の役割を果たしていた。

墳丘の南半分は墳丘部が残り、墳丘の中央を東西に墳丘断面を見ることができた。南半分の中央はゴミ穴によって撹乱されていたが、その周辺のマウンドは残っており、墳丘の構築課程を確認することができた。墳丘の西・北・南の辺に沿うように、方形を想定させる周溝があった。ただし南東斜面に面する東側だけは、周溝を作らなかったか、流れ落ちてしまったと思われる。

墳丘墓の立地

調査区内の中央よりやや南、北東から南西に延びる尾根筋からやや東にずれる位置にある。近くには、北西にSX15、北東にSX13、南西にSX03、南にSX12などが位置している。SX13とは、北の周溝を共有している。

周辺には、弥生時代末から古墳時代初頭の竪穴住居跡や土坑があり、墳丘下にもSB16A・B、周溝部の東の端にSB15がある。南の周溝部と東側の南東向きの斜面には、たくさんの中近世墓があった。標高は、墳丘頂部で129.8mを測る。墳丘の北半分は後世の削平を受けて、築造時の高さを保っていない。

周　溝

墳丘の南西隅から北の隅までと、北東の辺と南西の辺に周溝が見られる。墳丘の南西側の辺の中央部分と、墳丘の北西隅のところが1.2mほど周溝がなく、陸橋状になっている。それぞれの陸橋の両

128.00
128.50
127.50
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
0
10m
S＝1：200
B 128.4
128.4 B'
II a
I
IV a
IV b
②a
③c
②b
③a
③b
④
I　表土
II a　7.5YR5/3にぶい褐色土(礫を含まず,しまりなし)
IV a　7.5YR5/6明褐色土(0.5～4cm砂岩角礫を多く含む,しまり強)
IV b　10YR7/4にぶい黄橙色砂質土(礫を含まず,しまり強)
②a　7.5YR5/2灰褐色土(礫を含まず,しまりなし)
②b　7.5YR3/1黒褐色土(0.5～3cm砂岩角礫を含む,しまり有り)
③a　7.5YR4/2灰褐色土(礫を含まず,しまり有り)
③b　10YR4/4褐色土(0.5cm砂岩角礫を含む,しまり有り)
③c　7.5YR5/4にぶい褐色砂質土(1～2cm砂岩角礫を少量含む,しまり有り)
④　10YR6/4にぶい黄橙色粘質土(礫を含まず,しまり強)
C 128.4
128.4 C'
①
②
① 7.5YR3/4暗褐色粘質土(1～2cm程度の砂岩角礫を少量含む,粘りあり)
② 7.5YR4/4褐色粘質土(2cmほどの砂岩角礫を少量含む,粘りあり)
D 128.5
128.5 D'
① 7.5YR3/4暗褐色土(礫を含まず,しまりなし)
② 7.5YR4/4褐色土(1cmほどの砂岩角礫を少量含む,しまりやや有り)
0
2m
S＝1：40
117
116
E
E'
遺物出土状況
0
1m
S＝1：20
① 7.5YR3/1黒褐色土(礫を含まず,しまり有り)
② 7.5YR4/2灰褐色土(1～3cm砂岩角礫を少量含む,しまり有り)
③ 7.5YR3/1黒褐色土(礫を含まず,しまり有り)
④ 7.5YR4/1黒褐色土(礫を含まず,しまり有り)
⑤ 7.5YR5/6明褐色土(0.5～3cm砂岩角礫を多く含む,しまり有り)
⑥ 7.5YR5/6明褐色土(0.5～3cm砂岩角礫を多く含む,しまり有り)
⑦ 7.5YR3/1黒褐色土(礫を含まず,しまり有り)
⑧ 7.5YR4/2灰褐色土(1～3cm砂岩角礫を少量含む,しまり有り)
⑨ 7.5YR3/1黒褐色土(礫を含まず,しまりなし)
⑩ 7.5YR4/1褐灰色土(礫を含まず,しまり強)
⑪ 7.5YR4/3褐色土(礫を含まず,しまり有り)
⑫ 7.5YR5/2灰褐色土(3～5cm砂岩角礫を多く含む,しまり有り)
⑬ 7.5YR3/1黒褐色土(礫を含まず,しまり有り)
⑭ 7.5YR5/8明褐色粘質土(3cm砂岩角礫を少量含む,しまり強)
⑮ 7.5YR5/6明褐色土(0.5～3cm砂岩角礫を多く含む,しまり有り)
⑯ 7.5YR4/3褐色土(礫を含まず,しまり有り)
⑰ 7.5YR5/4にぶい褐色土(1～3cm砂岩角礫を多く含む,しまり有り)
⑱ 7.5YR5/4にぶい褐色土(1～3cm砂岩角礫を多く含む,しまり有り)
⑲ 7.5YR4/3褐色土(礫を含まず,しまり有り)
⑳ 7.5YR5/3にぶい褐色土(1～3cm砂岩角礫を多く含む,しまり有り)
㉑ 7.5YR5/3にぶい褐色土(1～3cm砂岩角礫を多く含む,しまり有り)
㉒ 7.5YR5/6明褐色土(0.5～3cm砂岩角礫を多く含む,しまり有り)
㉓ 7.5YR5/8明褐色土(0.5～3cm砂岩角礫を多く含む,しまり有り)
㉔ 7.5YR5/8明褐色土(0.5～3cm砂岩角礫を多く含む,しまり有り)
㉕ 7.5YR4/3褐色土(礫を含まず,しまり有り)
㉖ 北西側の周溝付近の上7.5YR6/8橙色土(0.5～3cm砂岩角礫を多く含む,しまり強)
㉗ 7.5YR5/2灰褐色土(3～5cm砂岩角礫を少量含む,しまり強)
㉘ 7.5YR5/3にぶい褐色土(0.5～1cm砂岩角礫を少量含む,しまり強)
㉙ 7.5YR4/6褐色土(礫を含まず,しまり強)
㉚ 7.5YR5/8明褐色土(0.5～3cm砂岩角礫を少量含む,しまり強)
㉛ 7.5YR5/3にぶい褐色土(1～3cm砂岩角礫を少量含む,しまり有り)
㉜ 7.5YR4/3褐色土(1～3cm砂岩角礫を少量含む,しまりなし)
㉝ 7.5YR4/2灰褐色土(1～3cm砂岩角礫を少量含む,しまりなし)
㉞ 7.5YR5/3にぶい褐色土(1～3cm砂岩角礫を少量含む,しまり有り)
㉟ 7.5YR4/2灰褐色土(0.5～5cm砂岩角礫,5cmチャート角礫を含む,しまり有り)
㊱ 7.5YR4/4褐色土(0.5～1cm砂岩角礫を多く含む,しまりやや有り)
㊲ 弥生のもの 7.5YR4/2灰褐色土(礫を含まず,しまり有り)
㊳ 弥生の土坑又は溝 7.5YR4/2灰褐色土(礫を含まず,しまり有り)
I　表土
旧表土＝IIIa　7.5YR3/1黒褐色土(1～2cm砂岩角礫を少量含む,しまり有り)
IIIb　7.5YR4/2灰褐色土(3～4cm砂岩角礫を少量含む,しまり有り)
地山　IVa　7.5YR5/8明褐色粘質土(0.5～3cm砂岩角礫を多く含む,しまり強)
IVb　7.5YR6/8橙色粘質土(礫を含まず,しまり強)
A 129.0
129.0 A'
中近世墓 IIIa
撹乱 IIIb
根
IIIb
IVa
IIIa
IVb
0
4m
S＝1：80

図79　SX02 実測図

側の周溝は、丸くおさまっているので、構築時から周溝があったのではなく、意図的に陸橋状に残した可能性が高い。周溝の規模は、最大幅4.7m、最小幅1.7m、最大深さ0.3m、最小深さ0.06mある。周溝の断面はかまぼこ状になっており、周溝内側の立ち上がりに比べ、周溝外側の立ち上がりがなだらかである。北東側の周溝からSX13の北向きの周溝がのびており、両方の遺構が周溝を共有しているものと思われる。この周溝の南西隅で、柳ヶ坪型の口縁部分（117）と壺の底部（116）が出土している。

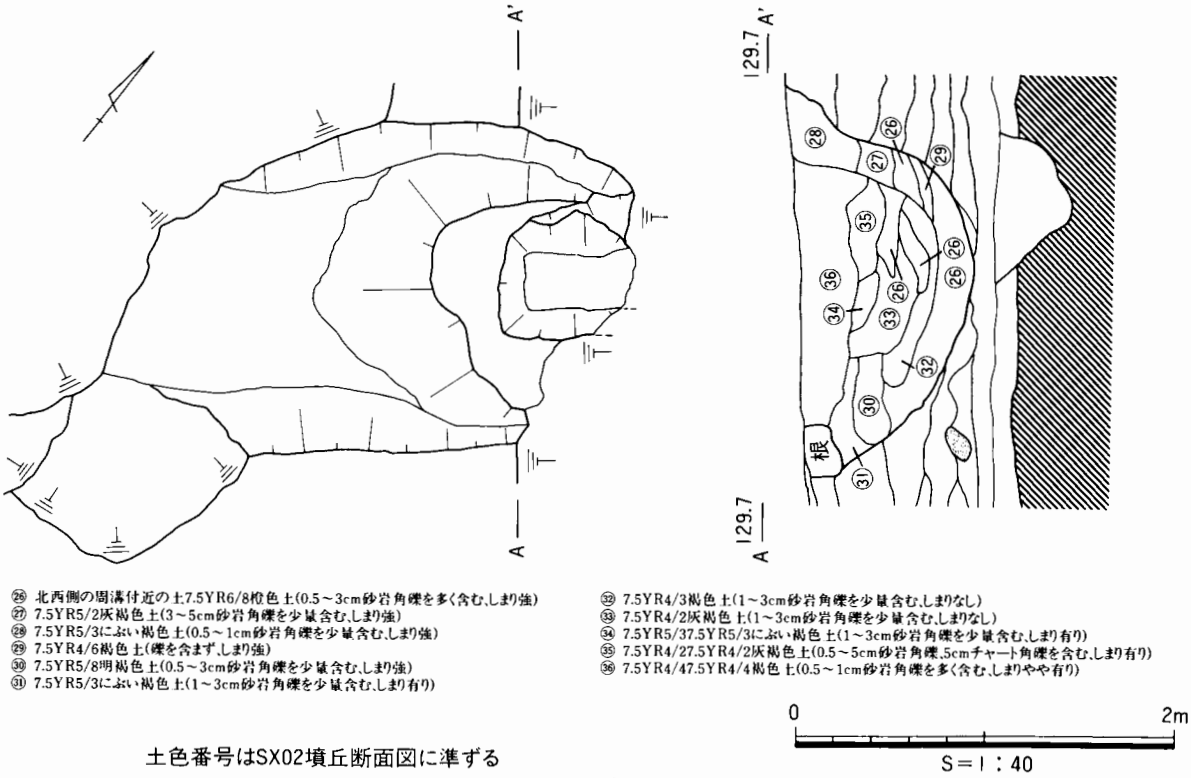
墳　丘

平面形は、周溝の輪郭に沿って方形をしている。墳丘は中央部分で東西に現代溝が走り北半分が削平を受けている。周溝の残り具合から方形であることが確認できる。規模は、北西から南東方向に17.2m、北東から南西方向に18.7mある。残った部分の墳丘高は１mを測り、残った墳丘頂部と周溝底部の比高差は約1.7mになる。墳丘が北半分削平を受けているので、墳丘の断ち割り断面がはっきりとわかる。断面を見ると、墳丘が構築される前の旧地表土（Ⅲａ・Ⅲｂ）の上に次のような墳丘構築過程が予想される。まず、旧地表面を焼き、

① 墳丘端部にドーナッツ状に土を積み上げる。
② 積み上げた中に水平に土を充填していく。
③ 木棺を設置するための穴を掘る。
④ 木棺設置のために壁に粘土を貼り付ける。
⑤ 木棺を設置する。
⑥ 木棺を埋めて墳丘を完成させる。

このように、墳丘部分は何段階もの盛土を経て構築されたと思われる。盛土に使用された土は、断面に見られる土層の土色を見ると、Ⅲａ層・Ⅲｂ層・Ⅳａ層などがみられ、基本的には周溝部分の土が使われたと思われるが、単純にみても墳丘面に盛土された土砂の量は、周溝部を掘りあげた量の何十倍にもなるので、周溝部分の土だけではないと思われる。主体部木棺を設置するために貼り付けられた粘土は、墳丘の北西端に見られるⅣｂ層橙色粘質土によく似ている。このあたりの良質の粘土を貼り付けたのではないかと思う。断面で見ると、墳丘の下のⅢｂ層の上面には、土坑が２つ見られる。これらは、Ⅲａ層を挟んで時期的な隔たりがある。墳丘の削平を受けた北半分の下にもSB16A・Bという２つの竪穴住居跡があり、北東周溝部の端にSB15がみられる。SB16A・Bは、Aが古くBが新しい。SB16A・B検出時にⅢａ層やⅢｂ層が見当らなかったので、はっきりとは言えないが、少なくともSB16Aの竪穴住居跡とSX02とは時間的な隔たりがあるのではないかと思われる。SB16Bについては、SB16Aより新しい。出土した遺物もほとんどSB16Bのものであるが、出土状況は、おもに南西部分に片寄って大量に出土した。このような状況から、SB16Bのような住居は、SX02を作るための事前の祭祀を行うための住居であるという見方もある。ただ、SB16A・Bともその地床炉は、しっかりと被熱し、硬化しているため、生活していた可能性が大きく、すぐに祭祀のための一時的な住居であるという確証はもてない。

主体部（図80、図版14）



土色番号はSX02墳丘断面図に準ずる

図80　SX02 主体部実測図

主体部は、断面から見ると墳丘の中央から1.2mほど南東寄りに位置している。平面形ははっきりしないが、断面を見る限り割竹形の木棺が設置されていたのではないかと思われる。木棺設置のための掘方は、径1.8mほどある。また、木棺本体の径は1.1mほどだったと思われる。主軸方向は、N－29°－Eを測る。木棺は、掘方に厚さ約0.15mの粘土を貼り付け、その中に割竹形の木棺を設置し、上を粘土で覆い、土をかぶせている。図80の土層26・27・28・29・30が粘土であると思われる。掘方は盛土部分に止まり、旧地表面や地山までを掘り込むには至っていない。

出土遺物（図81、図版34）

遺物は、高杯1点・甕1点・壺3点・鉄剣1点・石器1点が実測可能であった。114は、高杯の脚部である。杯部および脚部の裾の部分がないので細かい分類はできない。115は、小型の台付甕の体部から台にかけてである。甕B類に入る。116は、甕又は壺の底部かと思われる。117・118は、壺C類に属する。117は、二重口縁技法を用いた柳ヶ坪型壺である。口縁の内側には櫛状工具による刺突文がみられる。118は、二重口縁壺である。特に文様等はない。117と118の口縁部のつぎ方を比べてみると、117は、廻間遺跡で紹介されている制作技法の有段口縁の技法に近く、118は二重口縁の技法に近い。309は、鉄剣である。両端が欠損していて、長さ等は不明であるが、さやの部分の木質が残っている。309は、SX02の削平を受けた北半分の平坦な部分から見つかったものである。403は、打製石斧である。

所属時期

出土した遺物から、Ⅱ－3期に属すると思われる。

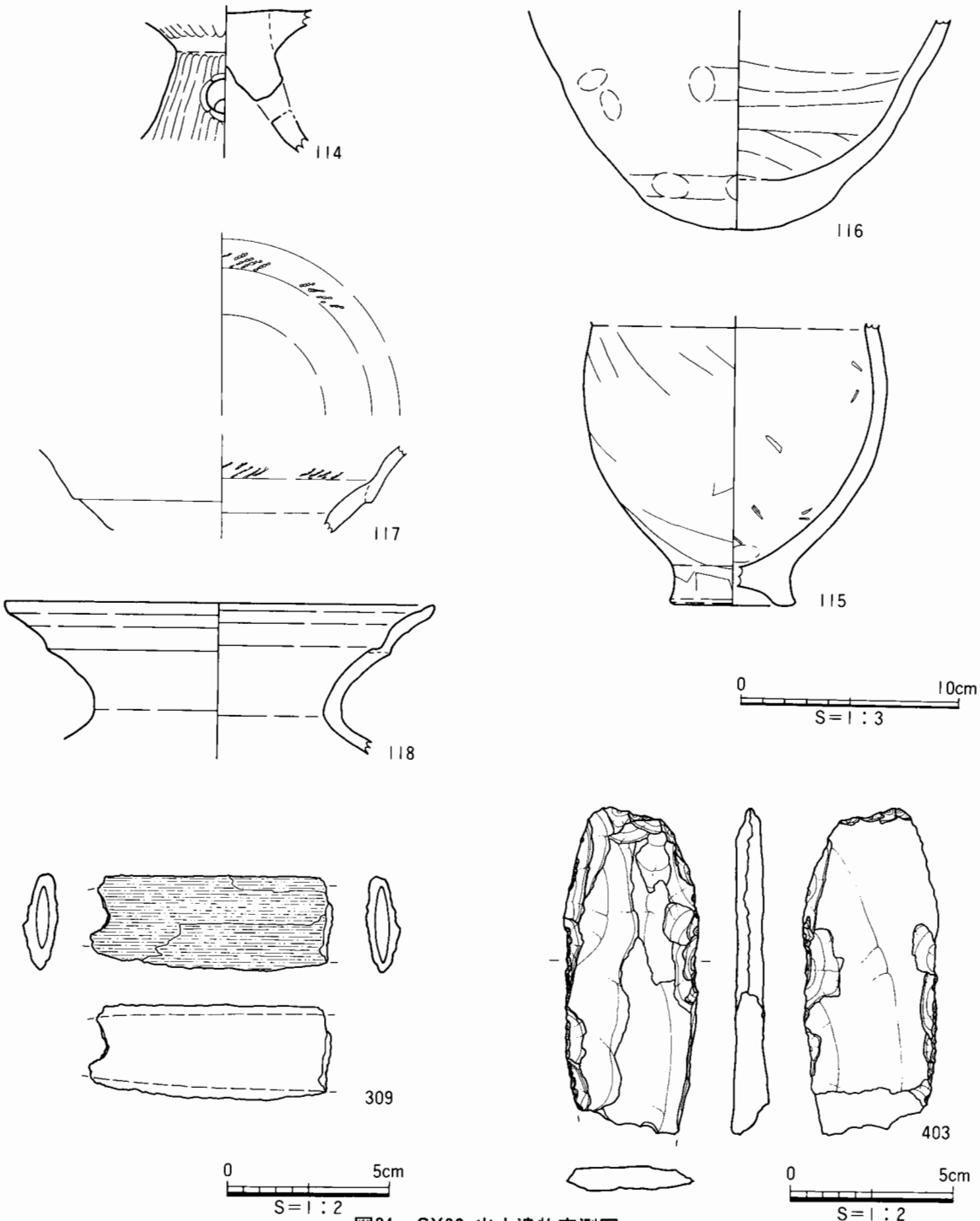


図81　SX02 出土遺物実測図

ＳＸ03（図82・83・84、図版12・15）

墳丘墓の残存状態

SX03は、周辺が森林になっていた。木の伐採によって墳丘部分がはっきりと確認できた。墳丘部分に盗掘坑のような穴は確認できなかった。当初は古墳時代後期の古墳だと考えられていたので、墳丘の下には石室があると予想されていた。実際には石室はなく、周辺のくぼみは周溝であった。表土がかぶった状態では円墳の可能性も考えられていた。

墳丘墓の立地

調査区内のやや南より、北東から南西に延びる尾根筋からやや東にはずれる位置で、平地部を臨む南東斜面にある。北にSX02、東にSX12・SD15、南東にSX05、南西にSX06・14、西にSX07などが位置している。SX06・07・14とは、周溝の位置が重なっている。

周辺には、弥生時代末から古墳時代初頭の竪穴住居跡や溝があり、墳丘下にもSB27がある。後世には墳丘及び周溝にたくさんの中近世墓が作られた。標高は、墳丘頂部で129.0mを測る。

周　溝

墳丘南東の辺の南半分を除いて、南東隅から東の隅を巡る位置まで周溝が存在する。周溝の幅は最大2.6m、最小1.4m、深さは深いところで0.7m、浅いところで0.1mあった。断面の形状は墳丘部分から掘り込まれる周溝内辺は鋭く傾斜し、周溝の外辺は緩やかに立ち上がる。南東部の周溝の南半分は周溝がなく平坦な状況になっている。そこに、SD15が東から入り込んでいる。南西部の周溝および北西部分の周溝は、SX06・SX14とSX07の周溝と重なっている。SX06については、周溝断面からSX03の周溝を切るようにしてSX06の周溝が作られているので、SX06の方が新しいことがわかる。SX14・SX07との関係については、墳丘部分がかなり接近しており具体的な新旧関係はわからなかった。南東部の周溝は、東の隅でSX12の周溝部につながっているし、墳丘南東の辺の中央あたりで終息している。ただし、この辺の周溝は大きく幅を広げて幅4mほどになっている。周溝からの出土遺物は、この幅広の南東部の周溝から大量に出土した。(墳丘の区分からするとNE・北東部になる)

墳　丘

平面形は、周溝の輪郭に沿って方形をしている。墳丘の西の隅は、中近世墓が作られていたためか、削平を受けて平坦になっていた。また、墳丘の端や主体部の近くも中近世墓によって墳丘面が削平を受けているところがあった。墳丘の規模は、北西から南東方向に11.6m、北東から南西方向に11.0mある。残った部分の墳丘高は0.45mを測り、残った墳丘頂部と周溝底部の比高差は約1.7mになる。墳丘が構築される前の旧地表土（Ⅲa・Ⅲb）の上に次のような墳丘構築過程が予想される。

① 墳丘端部に土塁状に土を積み上げる。

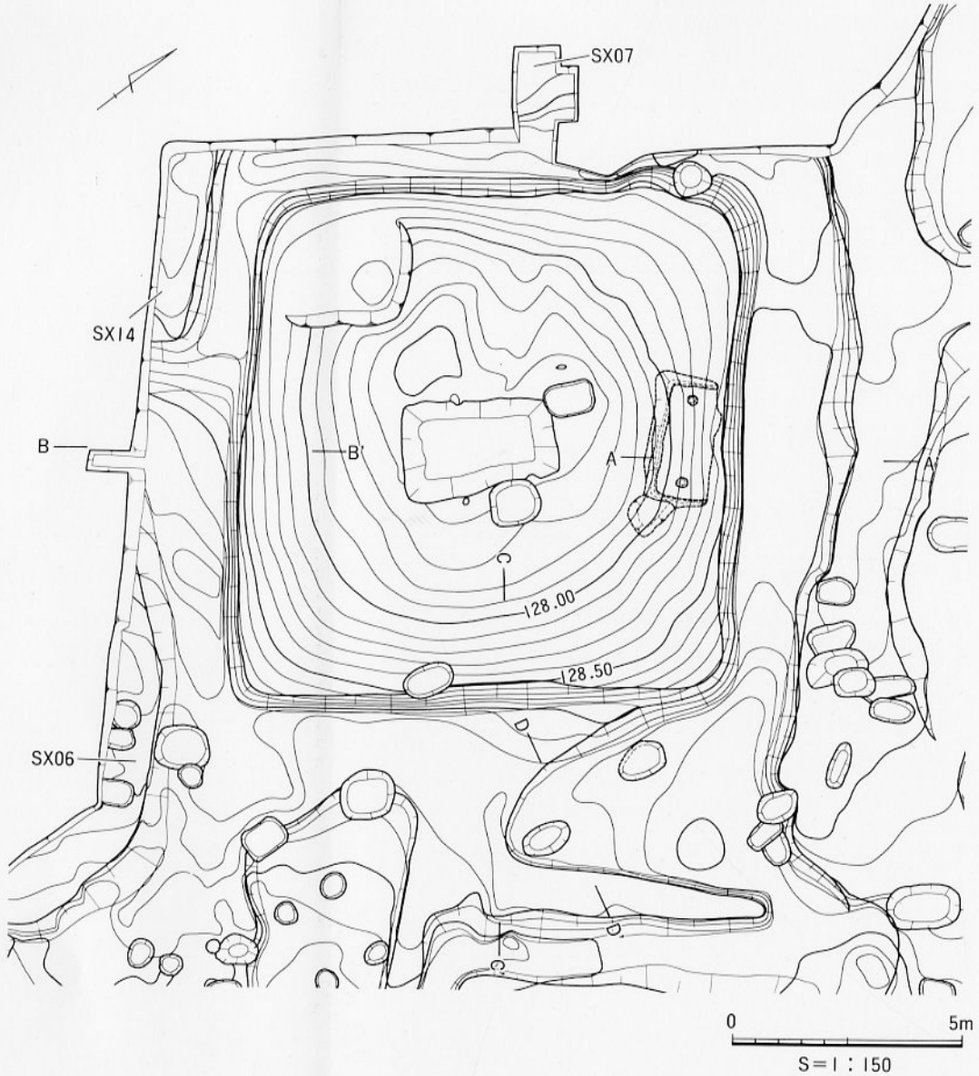
② 主体部をつくる位置（木棺設置位置）に土を水平に敷く。

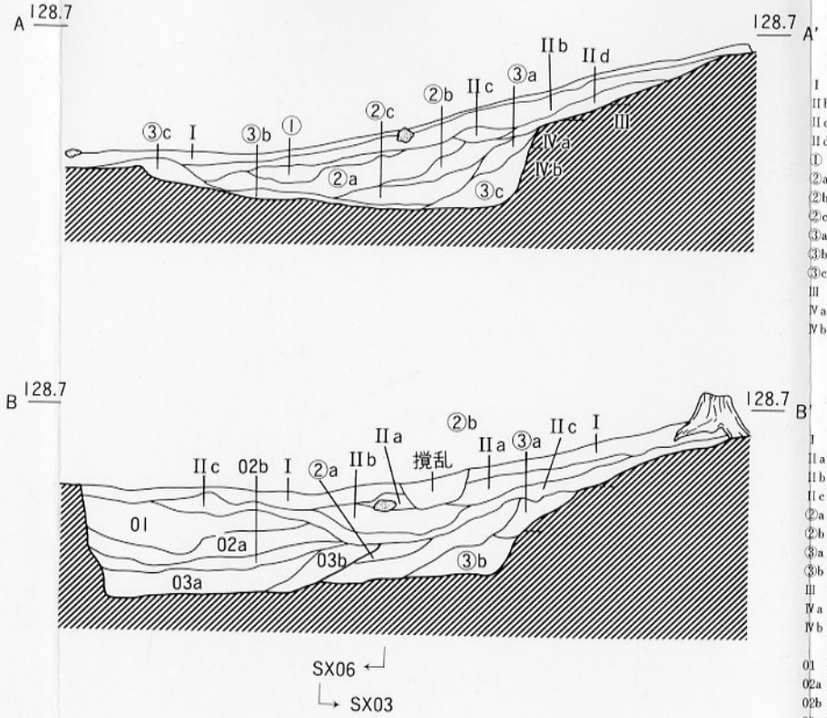
③ 木棺を設置する。

④ 土塁状の土山をこえて内側に土を充填していく。

⑤ 木棺の縁に土をつめ木棺を固定し、土を木棺の上からかぶせ墳丘を完成させる。

このように、墳丘部分は2ないし3段階の工程で盛土をし、構築されたと思われる。盛土に使用された土は、墳丘断面に見られる土層と比べると、Ⅲa層・Ⅲb層・Ⅳ層などに近い土色・土質のものも見られ、基本的には四方の周溝部分の土が使用されたと思われる。また、土塁状に盛られた土山の内側の土層は、土が外から中へ傾斜するように積み重ねられて互層状になっている。墳丘を構築する過程で、外から中へという意識があると思われる。さらに、墳丘下の土の断面を見ると、墳丘の下には旧表土として安定したⅢa層が見られるが、SB27の上の部分のみⅢa・Ⅲb層が見られない。従って、SX03を作る前にSB27で祭祀を行い、その後SX03を作りはじめたという見方もできる。ただ、



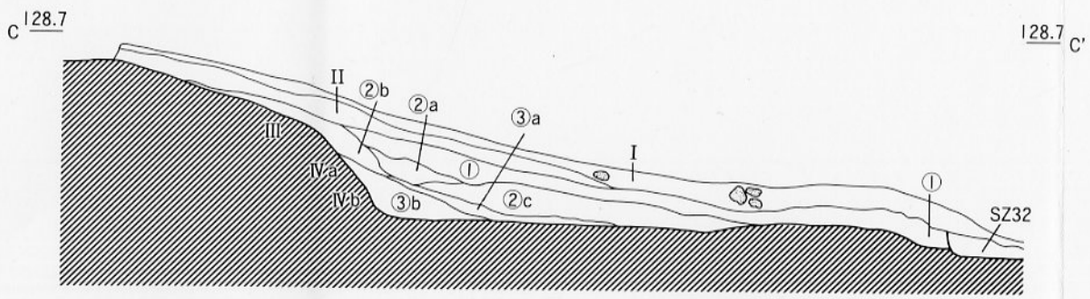


I　表土
II b　7.5YR5/4にぶい褐色土(0.5cm砂岩角礫を含む,しまりなし)
II c　7.5YR5/3にぶい褐色土(0.5cm砂岩角礫を含む,しまりなし)
II d　7.5YR5/2灰褐色土(0.5～4cm砂岩角礫を含む,しまりなし)
①　7.5YR5/2灰褐色土(5cmチャート亜角礫を少量含む,しまりやや有り)
②a　7.5YR2/1黒色土(0.5～1cm砂岩角礫を含む,しまりやや有り)
②b　7.5YR4/3褐色土(0.5～1cm砂岩角礫を少量含む,しまりやや有り)
②c　7.5YR4/1褐灰色土(0.5～1cm砂岩角礫を多く含む,しまりやや有り)
③a　7.5YR4/2灰褐色土(礫を含まず,しまりやや有り)
③b　10YR4/2灰黄褐色土(5～10cmチャート亜角礫を含む,しまり有り)
③c　10YR4/6褐色土(0.5～2cm砂岩角礫を少量含む,しまり有り)
III　7.5YR3/1黒褐色土(礫を含まず,しまり有り)
IV a　7.5YR6/6橙色粘質土(0.5～5cm砂岩角礫を多く含む,しまり強)
IV b　7.5YR6/4にぶい橙色粘質土(0.5～2cm砂岩角礫を含む,しまり強)

I　表土
II a　7.5YR5/4にぶい褐色土(0.5～1cm砂岩角礫を含む,しまりなし)
II b　7.5YR5/2灰褐色土(1～2cmチャート亜角礫を少量含む,しまりなし)
II c　7.5YR5/3にぶい褐色土(礫を含まず,しまりなし)
②a　7.5YR5/4にぶい褐色土(礫を含まず,しまりやや有り)
②b　7.5YR3/1黒褐色土(0.5～1cm砂岩角礫を少量含む,しまりやや有り)
③a　7.5YR5/6明褐色土(0.5～1cm砂岩角礫を少量含む,しまりやや有り)
③b　7.5YR5/3にぶい褐色土(0.5～1cm砂岩角礫を少量含む,しまりやや有り)
III　7.5YR3/2黒褐色土(礫を含まず,しまり有り)
IV a　7.5YR6/6橙色粘質土(0.5～5cm砂岩角礫を多く含め,しまり強)
IV b　7.5YR6/4にぶい橙色粘質土(0.5～2cm砂岩角礫を含む,しまり強)

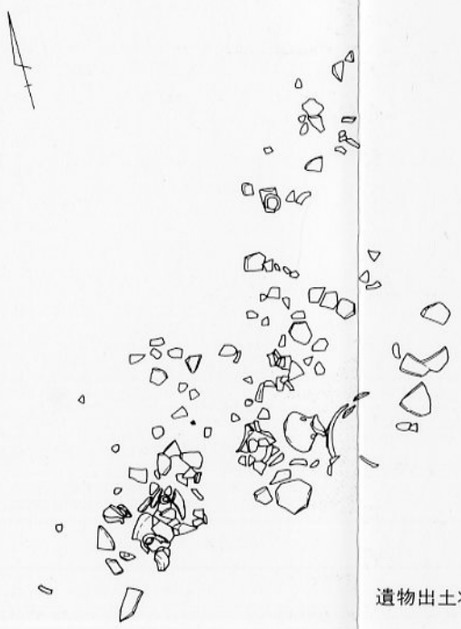
01　7.5YR5/4にぶい褐色土(礫を含まず,しまりやや有り)
02a　7.5YR4/2灰褐色土(礫を含まず,しまりやや有り)
02b　7.5YR4/1褐灰色土(礫を含まず,しまりやや有り)
03a　7.5YR2/1黒色土(礫を含まず しまりやや有り)
03b　7.5YR3/2黒褐色土(礫を含まず,しまりやや有も

0　2m
S=1：50



I　表土
II　7.5YR5/4にぶい褐色土(0.5～1cm砂岩角礫を含む,しまりなし)
III　7.5YR3/2黒褐色土(礫を含まず,しまり有り)
IV a　7.5YR6/6橙色粘質土(0.5～2cm砂岩角礫を少量含む,しまり有り)
IV b　7.5YR5/6明褐色粘質土(0.5～10cmチャート亜角礫,1～10cmチャート亜角礫を多く含む,しまり強)

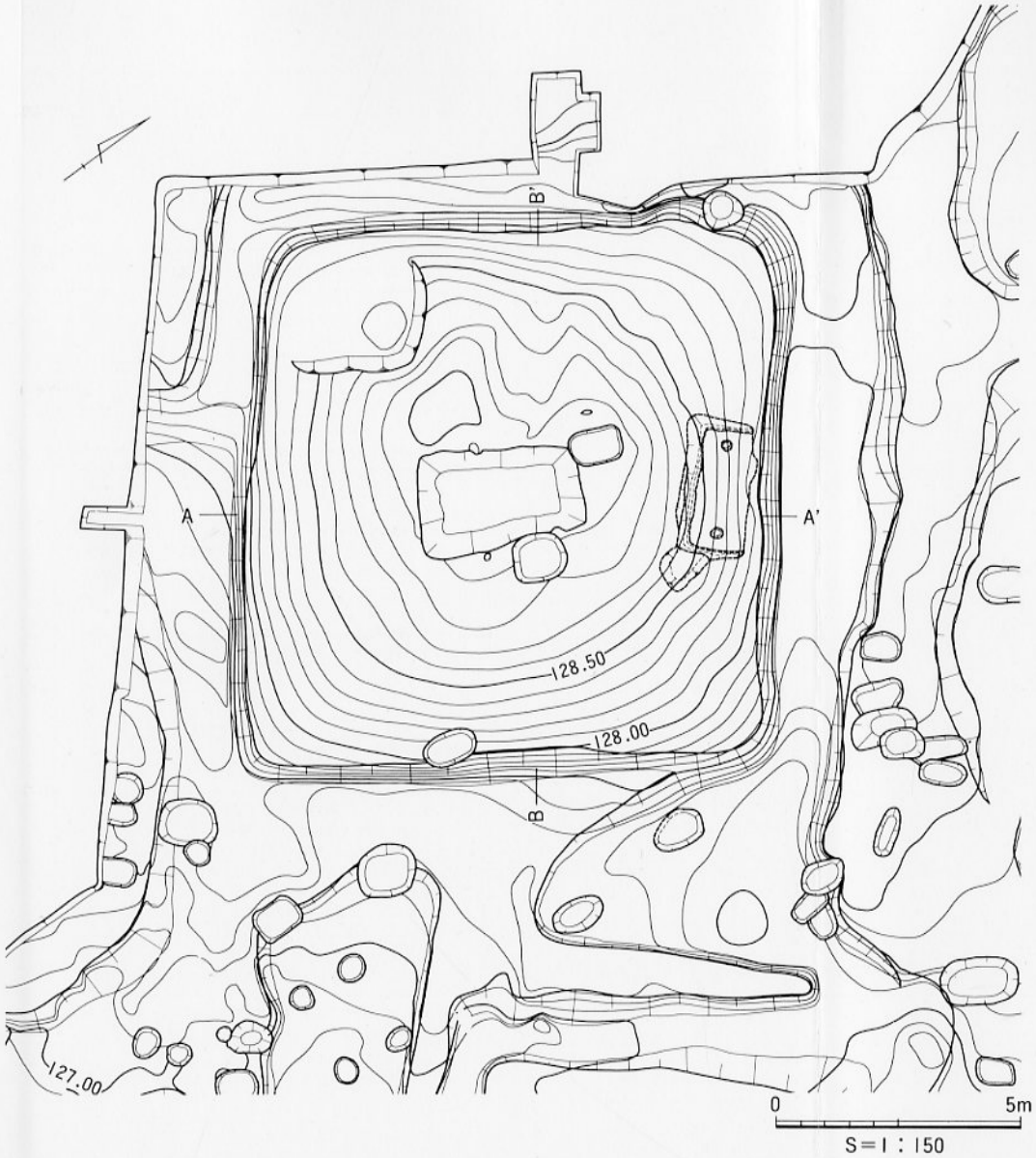
①　7.5YR5/3にぶい褐色土(0.5～1cm砂岩角礫を少量含む,しまりやや有り)
②a　7.5YR4/2灰褐色土(0.5cm砂岩角礫を少量含む,しまりやや有り)
②b　7.5YR4/4褐色土(礫を含まず,しまりやや有り)
②c　7.5YR2/1黒色土(0.5～2cm砂岩角礫を含む,1～2cmチャート亜角礫を少量含む,下半に土器を多く含む,しまりやや有り)
③a　7.5YR4/1褐灰色土(1～2cmチャート亜角礫を少量含む,しまりやや有り)
③b　7.5YR4/3褐色土(0.5～2cm砂岩角礫を含む,しまり有り)



遺物出土状況

0　1m
S=1：20

図82　SX03 実測図(SX06を一部含む)



IIIa 7.5YR2/1黒色土(上面に炭を少量,0.5～1cm砂岩角礫を少量含む,しまり有り)
IIIb 7.5YR4/2灰褐色土(礫を含まず,しまり有り)
IV 7.5YR5/6明褐色粘質土(0.5～4cmチャート亜角礫を含む,しまり強)

主体部
① 10YR5/3にぶい黄褐色土(礫を含まず,しまりなし)
② 7.5YR6/6橙色土(0.5～1cm砂岩角礫を少量含む,しまりやや有り)
③ 7.5YR5/4にぶい褐色砂質土(2～4cm砂岩角礫を少量含む,しまりやや有り)
④ 7.5YR6/4にぶい橙色砂質土(0.5～2cm砂岩角礫を多く含む,しまりやや有り)
⑤ 10YR4/2灰黄褐色砂質土(0.5～2cm砂岩角礫を少量含む,しまりやや有り)
⑥ 7.5YR6/4にぶい橙色粘質土(礫を含まず,しまり有り)
⑦ 7.5YR5/2灰褐色土(礫を含まず,しまりやや有り)

SB27
a 10YR4/1褐灰色土(炭を少量,0.5～4cm砂岩角礫を少量含む,しまりやや有り)
b 10YR5/3にぶい黄褐色土(0.5～1cm砂岩角礫を少量含む,しまりやや有り)

01 7.5YR4/1褐灰色土(0.5～1cm砂岩角礫を少量含む,しまりやや有り)
02 7.5YR5/3にぶい褐色土(1～2cm砂岩角礫を少量含む,しまり有り)
03 7.5YR5/3にぶい褐色土(1～2cm砂岩角礫を少量含む,しまり有り)
04 7.5YR6/6橙色粘質土(0.5～2cm砂岩角礫を少量含む,しまり有り)
05 7.5YR5/2灰褐色土(礫を含まず,しまり有り)
06 7.5YR6/4にぶい橙色粘質土(1～3cm砂岩角礫を多く含む,しまり有り)
07 7.5YR5/3にぶい褐色土(1～2cm砂岩角礫を少量含む,しまり有り)
08 7.5YR5/3にぶい褐色土(礫を含まず,しまりやや有り)
09 7.5YR5/2灰褐色土(1～6cmチャート亜角礫を含む,しまりやや有り)
10 7.5YR6/6橙色粘質土(0.5～2cm砂岩角礫を少量含む,しまり有り)
11 7.5YR5/2灰褐色土(1～6cmチャート亜角礫を含む,しまりやや有り)
12 7.5YR4/3褐色土(2～10cmチャート亜角礫を多く含む,しまりやや有り)
13 7.5YR5/3にぶい褐色土(2～10cmチャート亜角礫を少量含む,しまりやや有り)
14 7.5YR4/1褐灰色土(0.5～1cm砂岩角礫を少量含む,しまりやや有り)
15 7.5YR3/1黒褐色土(3～4cmチャート亜角礫を少量含む,しまりやや有り)
16 7.5YR5/3にぶい褐色土(1～2cm砂岩角礫を少量含む,しまり有り)
17 7.5YR4/3褐色土(2～10cmチャート亜角礫を多く含む,しまりやや有り)
18 7.5YR5/3にぶい褐色土(2～10cmチャート亜角礫を少量含む,しまりやや有り)
19 7.5YR5/4にぶい褐色土(礫を含まず,しまりやや有り)
20 7.5YR7/6橙色粘質土(礫を含まず,しまり強)
21 7.5YR6/3にぶい褐色粘質土(礫を含まず,しまり有り)
22 7.5YR5/2灰褐色砂質土(礫を含まず,しまり有り)
23 7.5YR7/4にぶい橙色粘質土(礫を含まず,しまり強)
24 7.5YR6/2灰褐色土(礫を含まず,しまり強)
25 7.5YR5/3にぶい褐色土(1～2cm砂岩角礫を少量含む,しまり有り)
26 7.5YR5/4にぶい褐色土(3～4cmチャート亜角礫を少量含む,しまり有り)
27 7.5YR5/3にぶい褐色土(1～2cm砂岩角礫を少量含む,しまり有り)
28 7.5YR5/4にぶい褐色土(0.5～2cm砂岩角礫を多く含む,しまり有り)
29 7.5YR7/4にぶい橙色粘質土(礫を含まず,しまり強)
30 7.5YR6/3にぶい褐色粘質土(礫を含まず,しまり有り)
31 7.5YR7/4にぶい橙色粘質土(礫を含まず,しまり強)
32 7.5YR5/3にぶい褐色土(1～2cm砂岩角礫を少量含む,しまり有り)

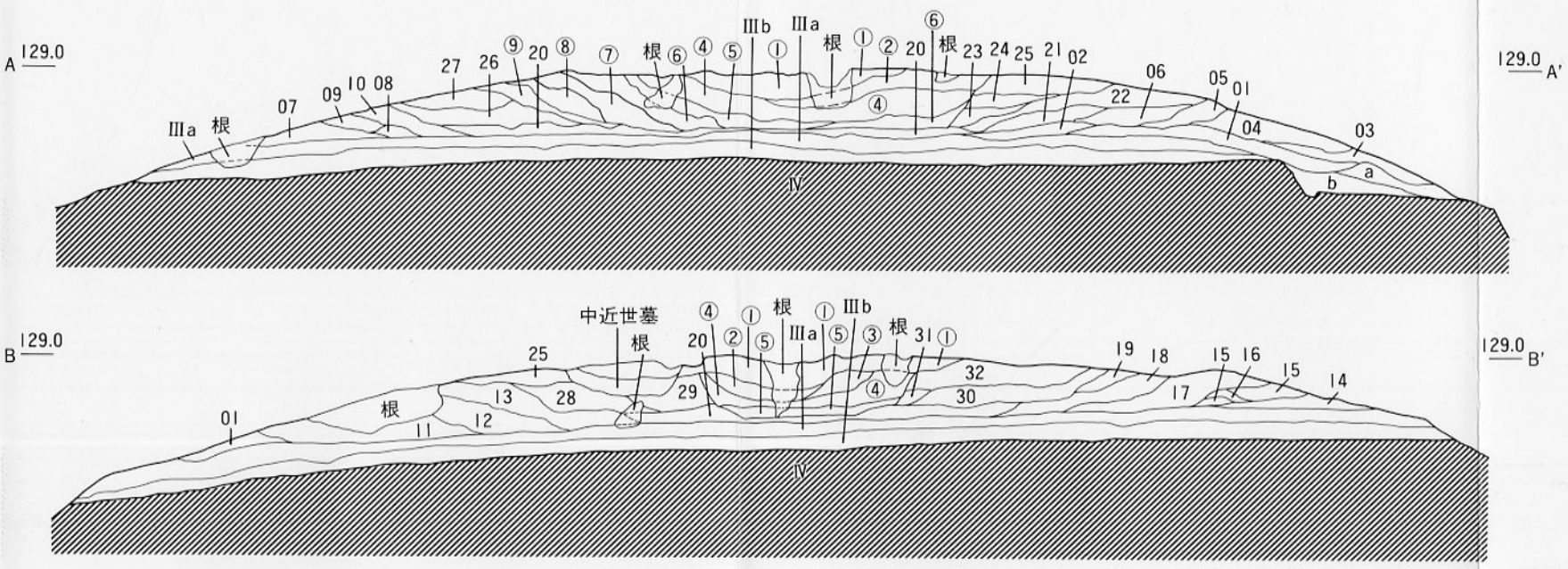


図83 SX03 墳丘断面図

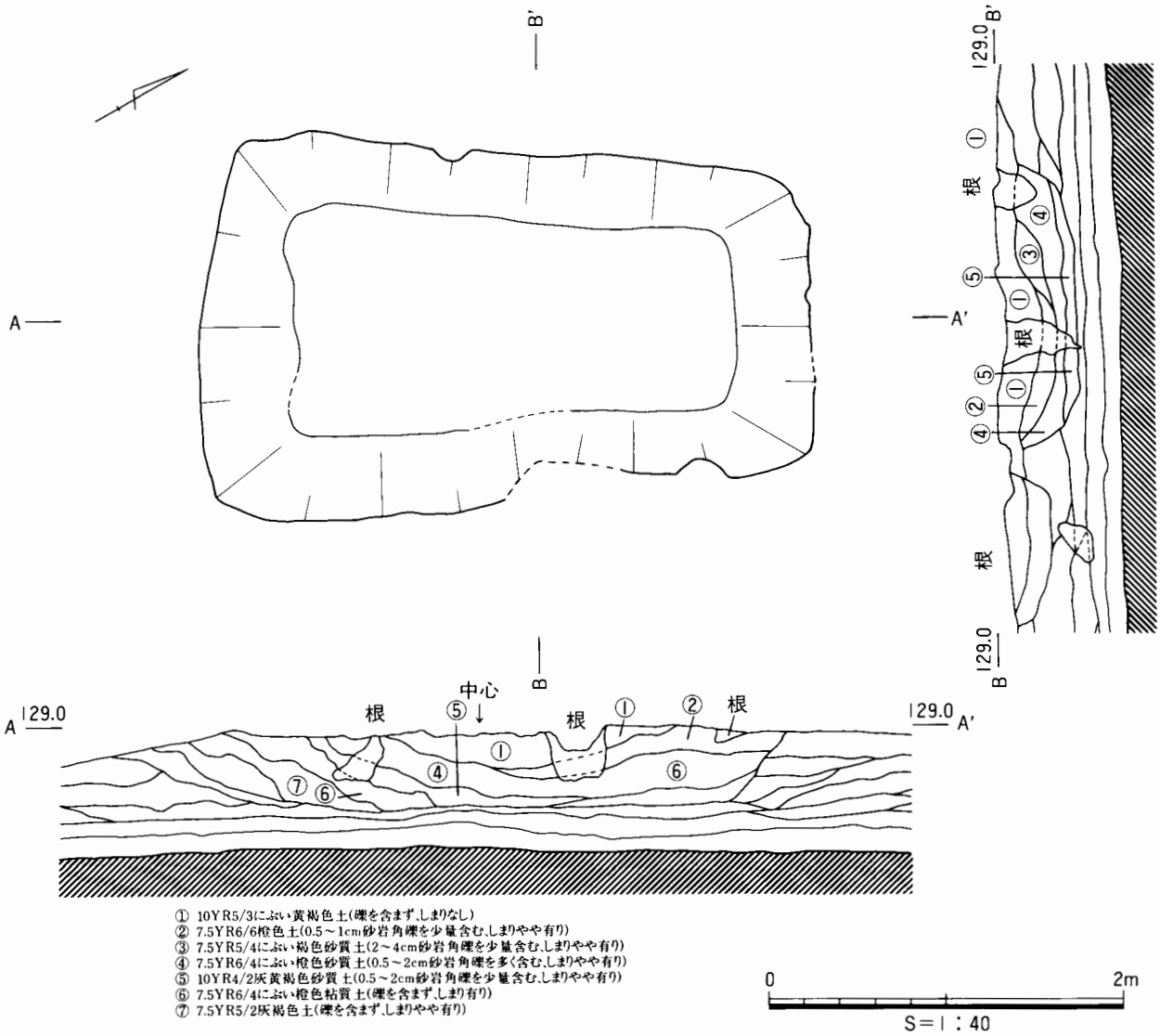


図84　SX03 主体部実測図

SX01の下層やSX02の下層で検出したSB28・SB16Bのように、墳丘内に住居がきちんと収まっておらず、周溝を掘る段階では、住居の北半分が削平を受けている。したがってSB27がSX03に関連した住居という見方は、SB28・SB16B以上に可能性が低いと思われる。

主体部（図84、図版16）

主体部は、墳丘のほぼ中央部に位置する。平面形は北東側をやや細めた長方形である。規模は、南西の幅で2.1m、北東の幅で1.7mで、長さ3.5mある。主軸はN－29°－Eをとる。棺に埋葬された遺体の頭部方向は、幅の広い南西部であると思われる。主体部の掘削は、墳丘面の掘削の際に残された東西南北十字ベルトを利用して、主体部に十字にベルトを残し掘削した。主体部南西側と北端の部分が中近世墓によって一部削平を受けていたが、平面形はほぼ完全に残った。断面は、木の根などに撹乱された部分もあったが、多くは堆積状況を確認することができた。主体部内の掘削は慎重に行ったが、遺物は確認できなかった。埋設棺の形状を確かめるために、ベルトに沿って外側にトレンチを入れた。埋設棺は、検出状況および土層の状況から舟底状木棺が用いられたと推測する。墳丘部のと

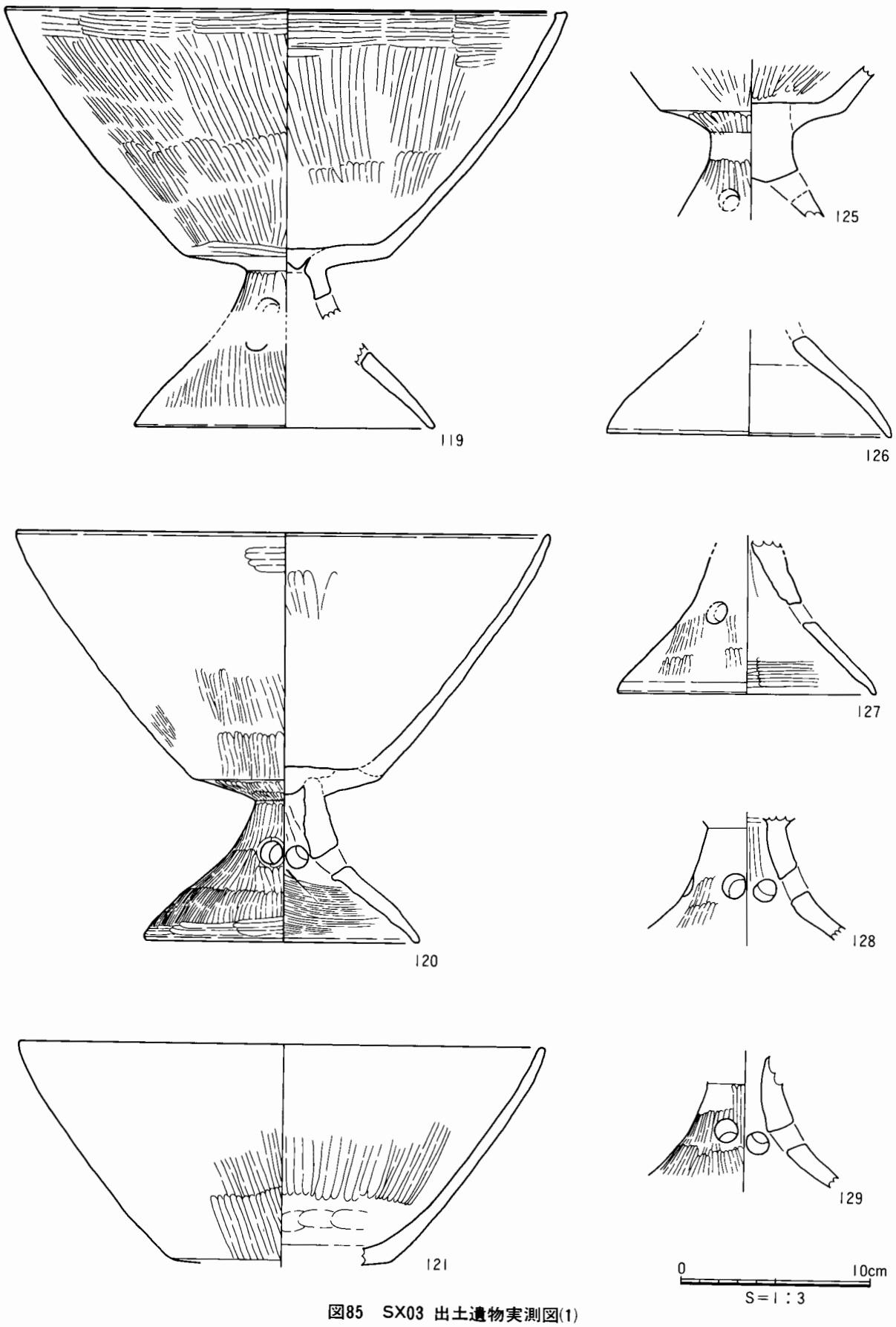


図85　SX03 出土遺物実測図(1)

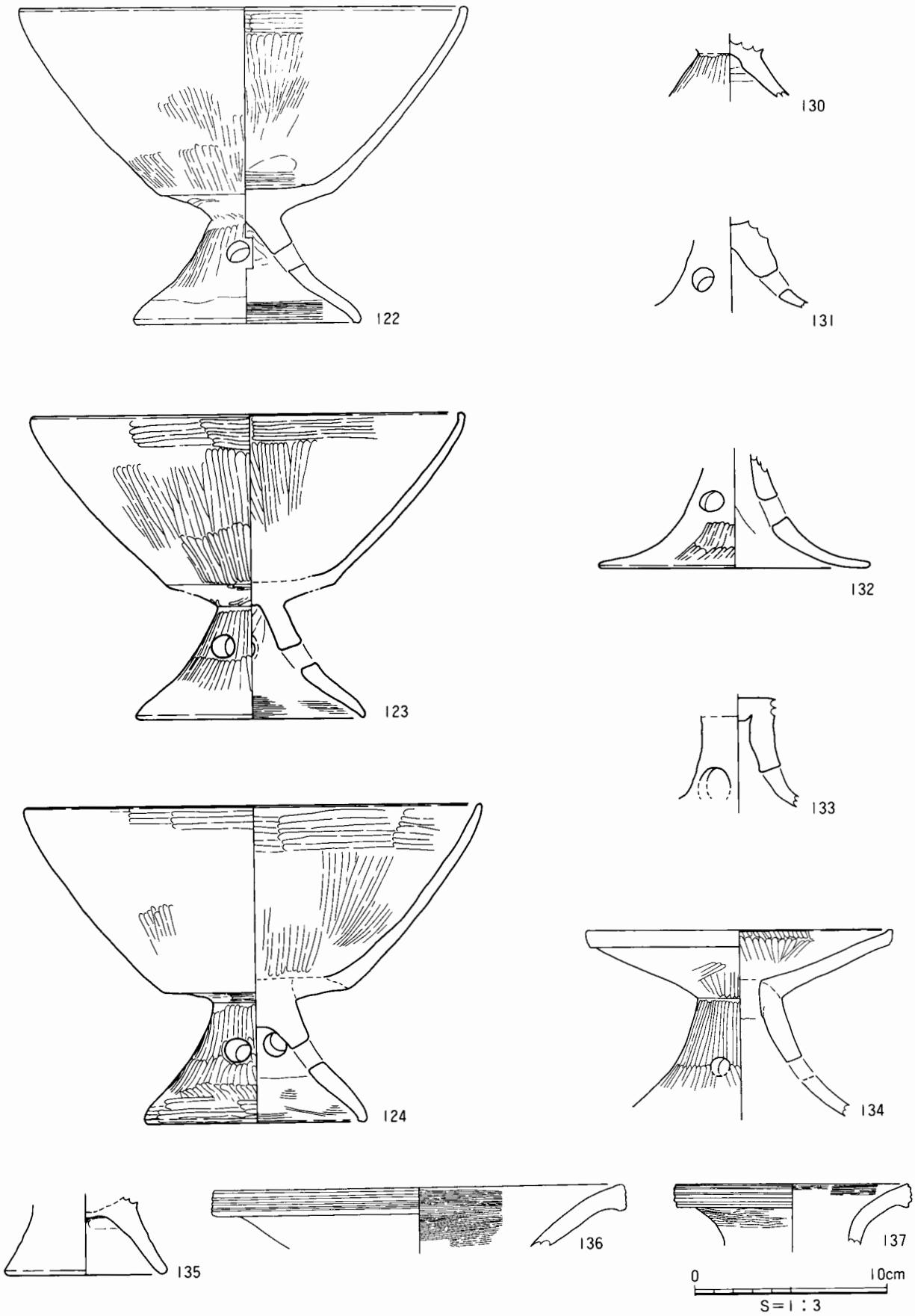


図86　SX03 出土遺物実測図(2)

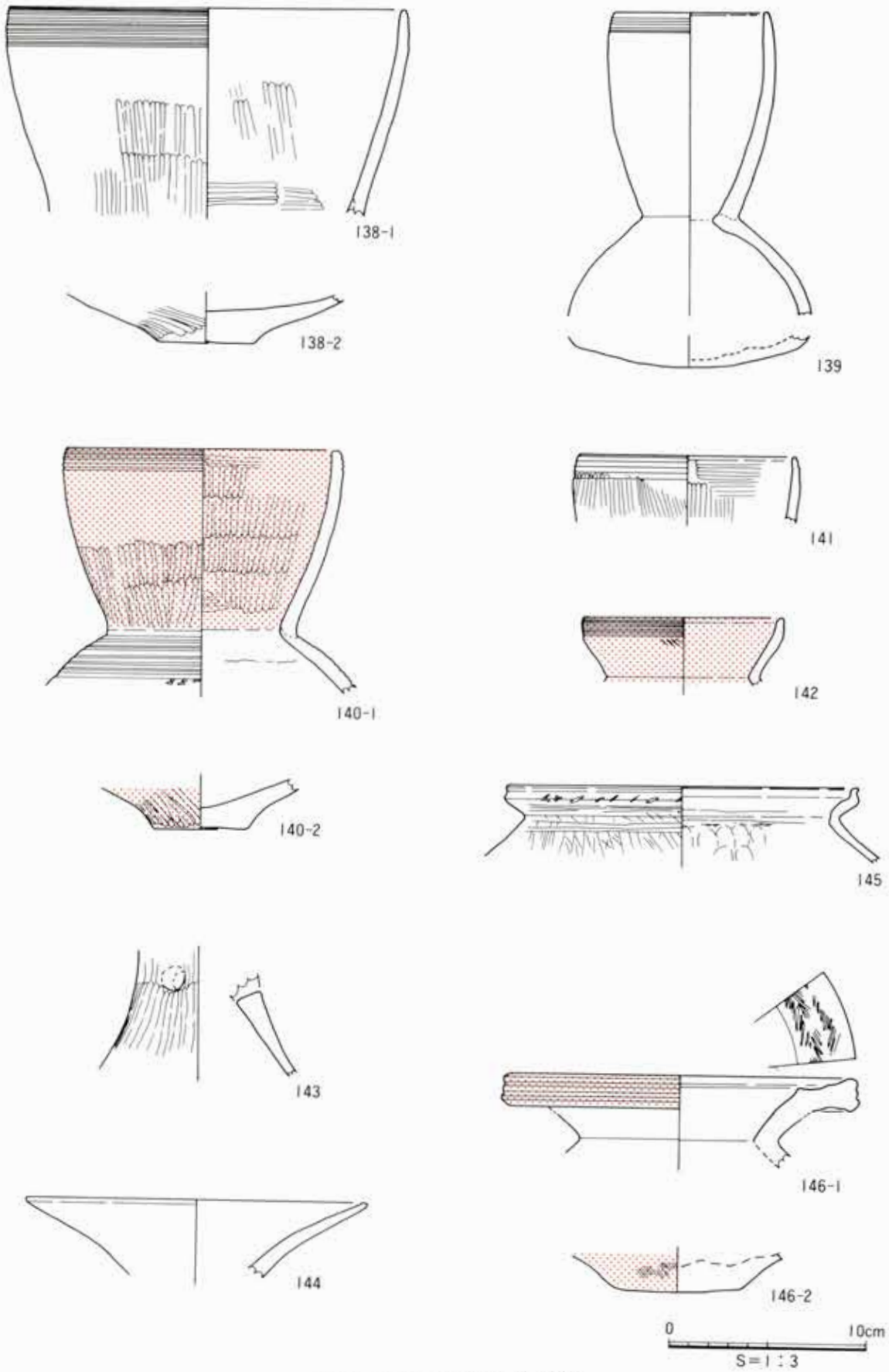


図87　SX03 出土遺物実測図(3)

ころで説明したように、棺は旧地表面を整地して、その上に置かれて、周りを土で埋める方法をとっているので、旧地表面を掘り下げることはなかったと思う。

出土遺物（図85・86・87、図版34・35・36）

遺物は、高杯16点・器台２点・甕２点・壷７点が実測できた。なお、143から146までは、墳丘の旧地表土から出土した土器である。119から124は、壷Ａ類である。119から121がほぼ同じ大きさの高杯で、黄橙色をしているのに対し、122から125は、前の３つよりやや小さく明赤褐色をしている。また、高杯の杯部と脚部の高さの比も、前者が杯対脚が1.5対１であるのに対し、後者が1.75対１になっている。明らかに後者の方が脚部に対して杯部が大きい。これは、墳丘を作ることに関する祭祀を、時期をずらして２度行ったか、１度であるが系統の違う土器を２種類使用したか、ではないかと思う。126・127は、高杯Ａ類の脚である。128・129・133は、高杯の脚の一部であるが分類は不明である。130・131・132は、高杯の脚部であるが、やや小さめであることと、脚の裾が広がりつつあるので高杯Ｃ類ではないかと思われる。134は器台である。受部の厚みが比較的ある。135は、台付甕の台の部分で甕Ｂ類に属する。136・137は、広口壷で、口縁部を肥厚させて外面に擬凹線を施している。壷Ｂ１類に属する。138・140・141は、壷Ｄ１類である。３つとも口縁部に沈線を施し、140は、赤彩を施した土器である。139は、頸部が体部より長い壷で、壷Ｄ２類に属する。Ｄ１類のものと同様口縁に沈線を施す。142は、口縁部が短く立ち上がる壷Ｅ類である。口縁に赤彩が施してある。

143から146は、墳丘下の旧表土から出土した土器である。143は高杯の脚部であるが、細分はできない。144は、器台の受部である。134に比べ受部の厚みが薄い。145は、甕Ｃ類で、廻間遺跡の土器分類のＳ字甕Ａ類に属するものと思われる。146は、赤彩を施した壷で、壷Ａ類に属する。口縁部内面に羽状文を施し、口縁外面に２条の擬凹線を施している。

所属時期

出土遺物から考えて、Ⅱ－２期に属すると思われる。

ＳＸ05（図88・89・90・91、図版13・17・18）

墳丘墓の残存状態

SX05の周辺部分は森林になっており、木の伐採によって墳丘部分が明確になってきた。墳丘部分に盗掘坑は確認できなかった。SX03と同じく、当初は古墳時代後期の古墳と考えられていたので、墳丘の下には石室があると予想していた。実際には石室はなかった。表土をかぶった状態では、周溝の存在も予想できなかった。

墳丘墓の立地

調査区内の南よりの南東斜面に面し、北東から南西に延びる尾根筋から東にはずれる位置にある。南に平地部を一望できる見晴らしのよい南東斜面にある。北にSX12、北西にSX03・SD15、西にSX06が位置しており、SX06とは、周溝を共有している可能性がある。

周辺には、弥生時代末から古墳時代初頭の竪穴住居跡や溝がある。墳丘・周溝にはたくさんの中近

世墓が作られていた。標高は、墳丘頂部で127.3mを測る。

周　溝

周溝は、墳丘南東、北西部、北東部の墳丘に沿って作られている。南東の斜面に面した辺は、周溝がないか、崩れたかはっきりしない。周溝の幅は最大3.5m、最小1.9m、深さは深いところで0.5m、浅いところで0.1mであった。周溝断面の形状は南西部の周溝は、墳丘端から急に深くなるが、その他の墳丘面に面した所は、徐々に深くなり、外に向かって徐々に浅くなるかまぼこ状になっている。北東部の周溝は、他の周溝に比べ深い部分が多い。墳丘の北の端にSD15がある。周溝断面図を見ると、SD15は、SX05の周溝を切っており、SD15の方がSX05よりも新しいことがわかる。周溝からの出土遺物は、北西部の周溝から大量に出土した。

墳　丘

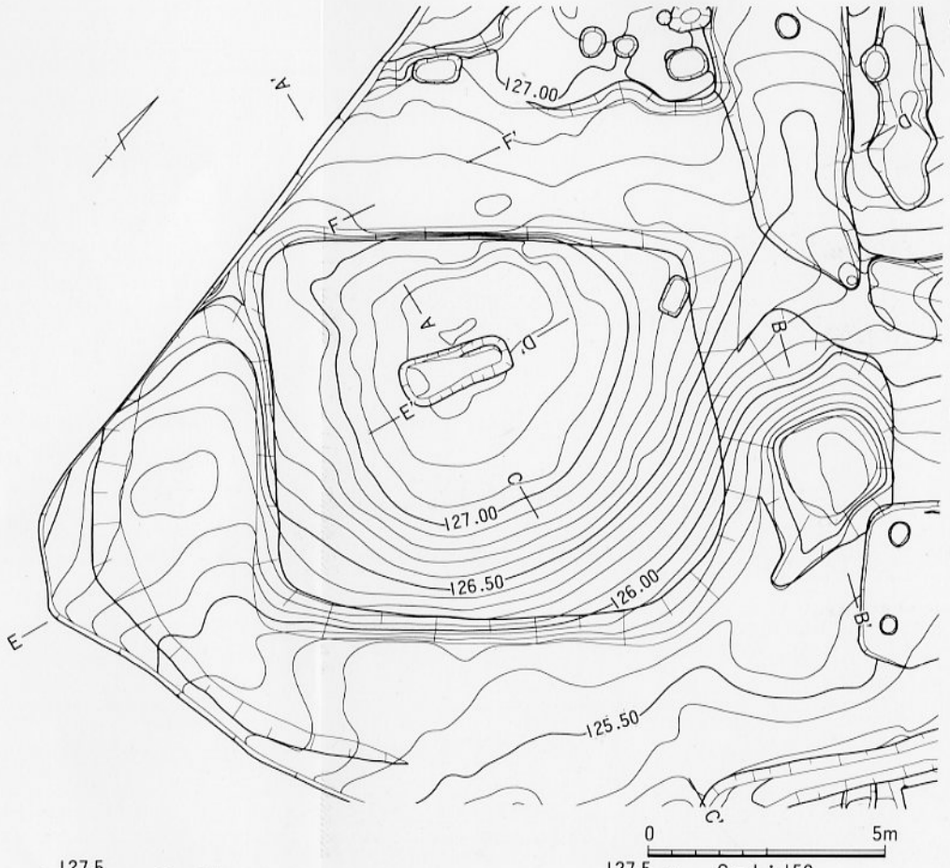
平面形は、周溝の輪郭に沿って方形をしている。墳丘の西側は、中近世墓があって削平を受けているところがある。墳丘の規模は、北西から南東方向に8.9m、北東から南西方向に9.8mある。残った部分の墳丘高は0.4mを測り、残った墳丘頂部と周溝底部の比高差は約2mになる。墳丘が構築される前の旧地表土(Ⅲa・Ⅲb)の上に次のような墳丘構築過程が予想される。まず、旧地表土を焼き、

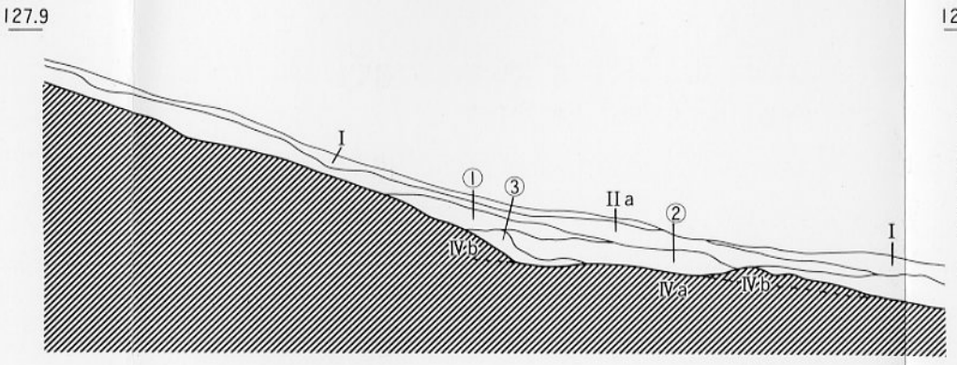
① 墳丘端部に土塁状に土を積み上げる。
② 主体部をつくる位置（木棺設置位置）に土を土山状に敷く。
③ 山の中心に木棺を設置する。
④ 土塁状の土山をこえて内側に土を充填していく。
⑤ 木棺の縁に土をつめ木棺を固定し、土を木棺の上からかぶせ墳丘を完成させる。

このように、墳丘部分は墳丘の端から作られ、木棺の設置場所を設定した後土を盛り、木棺を設置して周りを埋めるという方法がとられてられている。SX03の場合と多少違うのは、SX03では、木棺の設置場所に水平に土を盛るのに対し、SX05では、富士山のように盛っていることである。盛土に使用された土は、墳丘断面に見られる土層を見ると、Ⅲa層・Ⅲb層およびそれぞれの裾部の土などに近い土色・土質の土が見られ、基本的には四方の周溝部分の土が使用されたと思われる。また、土塁状に盛られた土山の内側の土層は、木棺を設置した土と外の土の間を埋めるように断面がかまぼこ状に土を置いている。墳丘下は、SX02やSX03のように遺構は確認できなかった。

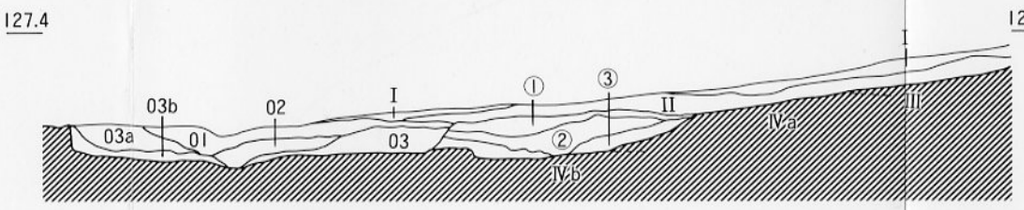
主体部（図90・91、図版18）

主体部は、墳丘の中心から1.8mほど北東に位置している。平面形は北東側をやや細めた長方形である。規模は、南西の幅で1m、北東の幅で0.9m、長さ2.4mある。主軸はN－30°－Eをとり、SX03主体部とほぼ同じで、頭部を南西に向けている。墳丘面の掘削の際に残された東西南北十字ベルトは主体部をうまく分割しなかったので、主体部用に主軸に直行する方向でベルトを残し掘削した。主体部の南東側の端に木の切り株が残っていたが、ほぼ完全な状態で、平面形は残った。主体部内の掘削はベルトを残した状態で土層を確認しながら行った。掘削が進み主体部の形状が明らかになってきた頃、主体部の南東側の端の木の根元で、まず管玉が出土し、続いてその下から勾玉・管玉・多孔銅



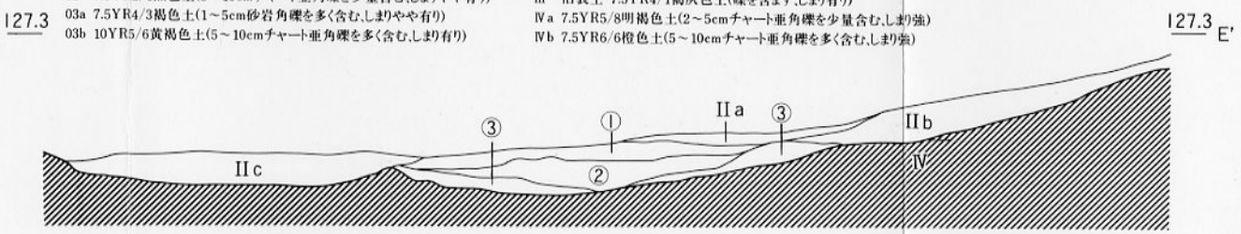


I　表土
IIa　10YR6/4にぶい黄橙色土(3～8cmチャート亜角礫を多く含む,しまりなし)流土
IIb　7.5YR4/6褐色土(礫を含まず,しまりなし)流土
①　7.5YR4/3褐色土(礫を含まず,しまりやや有り)
②　7.5YR4/2灰褐色土(礫を含まず,しまりやや有り)
③　7.5YR4/6褐色土(礫を含まず,しまり有り)
IVa　7.5YR5/6明褐色土(2～5cm砂岩角礫を多く含む,しまり強)
IVb　5YR5/6明赤褐色土(2～20cmチャート亜角礫を多く含む,しまり強)

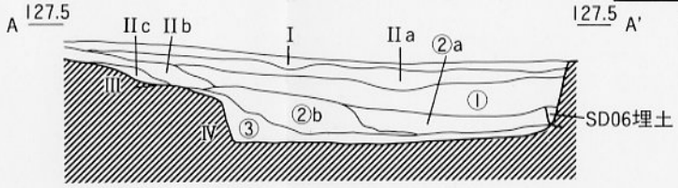


I　表土
II　7.5YR5/4にぶい褐色土(礫を含まず,しまりなし)
①　7.5YR4/2灰褐色土(礫を含まず,しまりなし)
②　7.5YR3/1黒褐色土(0.5～1cm砂岩角礫を少量含む,しまりやや有り)
③　7.5YR4/4褐色土(2～10cmチャート亜角礫を多く含む,しまり有り)

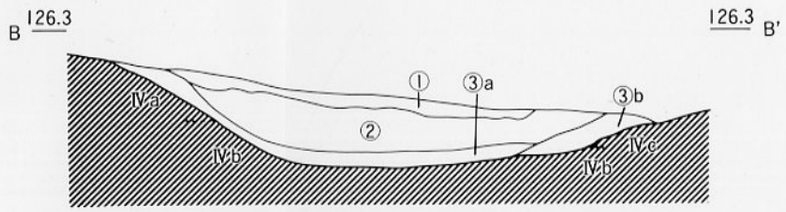
01　7.5YR4/1褐灰色土(2～5cmチャート亜角礫を少量含む,しまりなし)
02　7.5YR2/1黒色土(5～10cmチャート亜角礫を少量含む,しまりやや有り)
03a　7.5YR4/3褐色土(1～5cm砂岩角礫を多く含む,しまりやや有り)
03b　10YR5/6黄褐色土(5～10cmチャート亜角礫を多く含む,しまり有り)
II　7.5YR5/4にぶい褐色土(礫を含まず,しまりなし)
III　III表土　7.5YR4/1褐灰色土(礫を含まず,しまり有り)
IVa　7.5YR5/8明褐色土(2～5cmチャート亜角礫を少量含む,しまり強)
IVb　7.5YR6/6橙色土(5～10cmチャート亜角礫を多く含む,しまり強)



①　7.5YR5/4にぶい褐色土(2～5cmチャート亜角礫を少量含む,しまりなし)
②　7.5YR3/2黒褐色土(2～5cmチャート亜角礫を少量含む,しまりやや有り)
③　10YR4/4褐色土(2～20cmチャート亜角礫を多く含む,しまり有り)
IV　7.5YR5/8明褐色土(2～20cmチャート亜角礫を多く含む,しまり有り)
IIa　7.5YR6/6橙色土(5～10cmチャート亜角礫を含む,しまりなし)
IIb　7.5YR4/2灰褐色土(礫を含まず,しまりなし)
IIc　10YR4/2灰黄褐色土(4～7cmチャート亜角礫を少量含む,上面ほどしまり強－現代小径)



I　表土
IIa　10YR6/4にぶい黄橙色土(礫を含まず,しまりなし)
IIb　7.5YR5/6明褐色土(礫を含まず,しまりなし)
①　7.5YR5/2灰褐色土(1～2cm砂岩角礫をやや含む,須恵器片多,しまりやや有り)
②a　7.5YR2/1黒色土(1～2cm砂岩角礫をやや含む,須恵器片多,しまりやや有り)
②b　7.5YR3/3暗褐色土(1～2cm砂岩角礫をやや含む,土器片多,しまりやや有り)
③　7.5YR4/3褐色土(1～2cm砂岩角礫を多く含む,しまり有り)
IV　10YR5/8黄褐色土(1～3cm砂岩角礫を多く含む,しまり強)
SD06埋土　7.5YR5/4にぶい褐色土(礫を含まず,しまりやや有り)
IIc　7.5YR4/2灰褐色土(礫を含まず,しまりなし)
III　7.5YR3/2黒褐色土(礫を含まず,しまり有り)



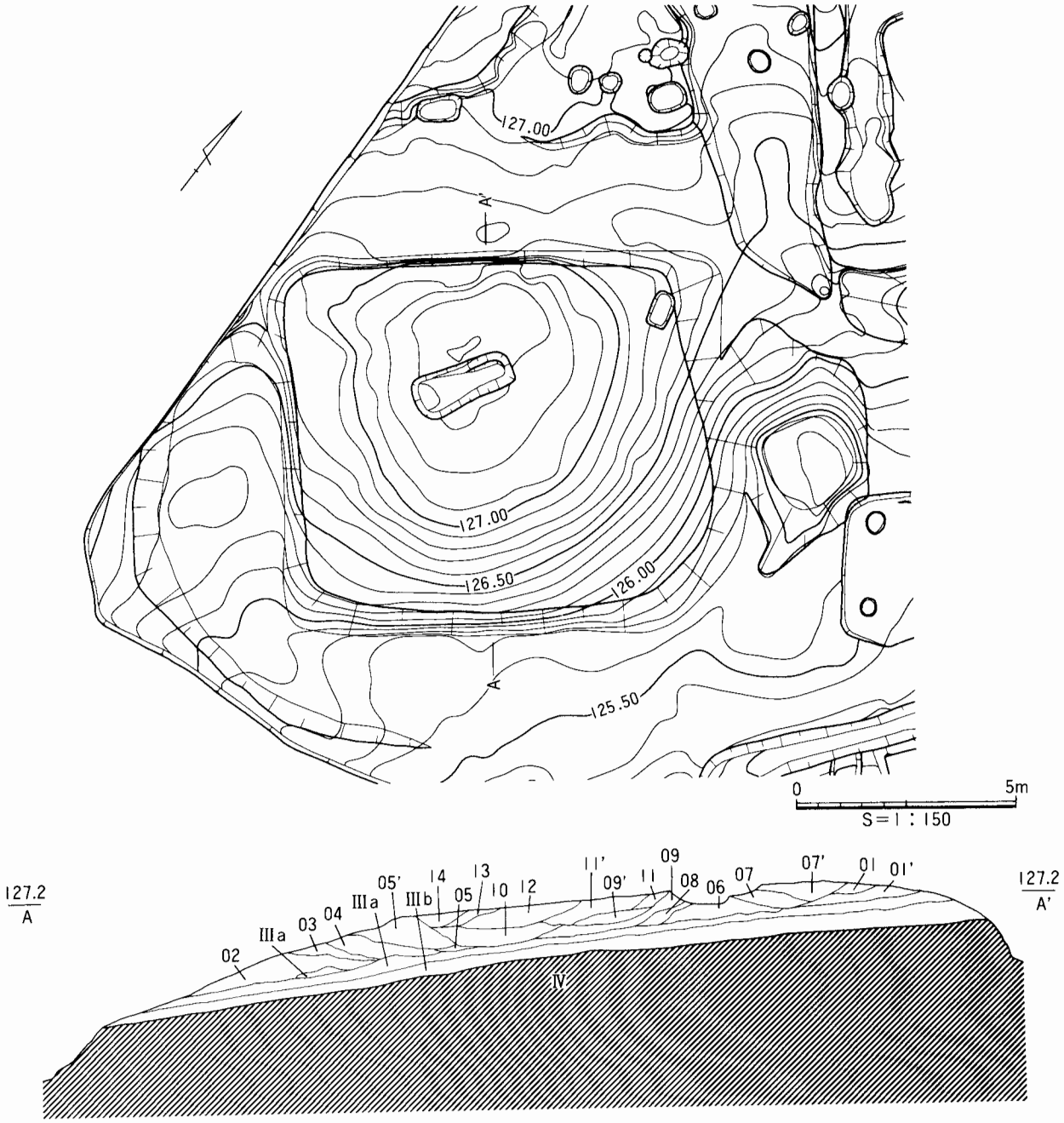
①　7.5YR5/2灰褐色土(10～20cmチャート亜角礫を含む,しまりなし)
②　7.5YR1.7/1黒色土(5～10cmチャート亜角礫を多く含む,土器片を低層に含む,しまりやや有り)
③a　7.5YR4/3褐色土(0.5～2cm砂岩角礫を含む,しまり有り)
③b　7.5YR5/4にぶい褐色土(5cmチャート亜角礫を少量含む,しまり有り)
IVa　10YR6/6明黄褐色土(2～20cmチャート亜角礫を多く含む,しまり強)
IVb　7.5YR6/6橙色砂岩岩盤
IVc　7.5YR5/6明褐色土(2～4cm砂岩角礫を多く含む,しまり強)

遺物出土状況

0　2m
S＝1：50

0　1m
S＝1：20

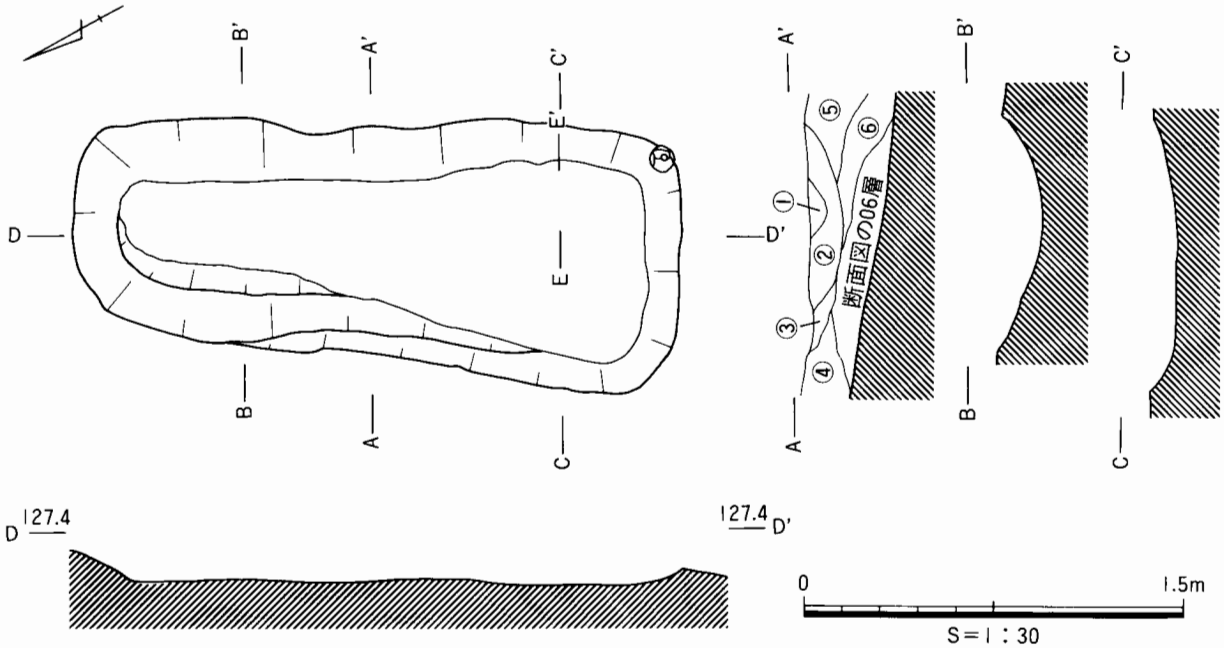
図88　SX05 実測図



01　10YR4/1褐灰色土(礫を含まず,しまりやや有り)
01'　10YR4/2灰黄褐色土(3～5cmチャート亜角礫を少量含む,しまりやや有り)
02　10YR4/2灰黄褐色土(5～20cmチャート亜角礫を多く含む,しまりやや有り)
03　10YR4/1褐灰色土(5～8cmチャート亜角礫を多く含む,しまりやや有り)
04　10YR4/4褐色土(2～6cm砂岩角礫を多く含む,しまりやや有り)
05　10YR5/6黄褐色砂質土(2～6cm砂岩角礫を少量含む,しまりやや有り)
05'　10YR4/3にぶい黄褐色土(2～6cm砂岩角礫を多く含む,しまり有り)
06　10YR5/6黄褐色粘質土(4～8cmチャート亜角礫を含む,しまり有り)
07　7.5YR5/6明褐色土(4～6cmチャート亜角礫を少量含む,しまり有り)
07'　10YR5/4にぶい黄褐色土(礫を含まず,しまりやや有り)
08　10YR4/1褐灰色土(1～2cm砂岩角礫を少量含む,しまりなし)
09　10YR5/3にぶい黄褐色土(1～2cm砂岩角礫を多く含む,しまりやや有り)
09'　10YR5/4にぶい黄褐色土(4～6cmチャート亜角礫を少量含む,しまり有り)
10　10YR5/4にぶい黄褐色土(2～6cmチャート亜角礫を多く含む,しまりやや有り)
11　10YR5/3にぶい黄褐色土(1～2cm砂岩角礫を多く含む,しまりやや有り)
11'　10YR4/2灰黄褐色土(0.5～1cm砂岩角礫を少量含む,しまりやや有り)
12　10YR3/2黒褐色土(0.5～1cm砂岩角礫を少量含む,しまりやや有り)
13　10YR5/6黄褐色土(1～2cm砂岩角礫を少量含む)
14　10YR3/2黒褐色土(0.5～1cm砂岩角礫を少量含む,しまりやや有り)
IIIa　10YR2/1黒色土(0.5～1cm砂岩角礫を少量含む,しまり有り)
IIIb　10YR4/2灰黄褐色土(3～20cmチャート亜角礫を少量含む,しまり有り)
IV　7.5YR5/8明褐色土(2～20cmチャート亜角礫を多く含む,しまり強)

0　2m
S＝1：60

図89　SX05 墳丘断面図



① 10YR5/4にぶい黄褐色土(0.5～1cm砂岩角礫を含む､しまり有り)
② 7.5YR4/3褐色土(0.5～1cm砂岩角礫､2～4cmチャート亜角礫を含む､遺物を含む､しまりなし)
③ 7.5YR5/4にぶい褐色土(礫を含まず､しまり有り)
④ 7.5YR5/6明褐色土(礫を含まず､しまり有り)
⑤ 7.5YR5/6明褐色土(1～3cm砂岩角礫を含む､しまり有り)
⑥ 7.5YR4/2灰褐色土(1～3cm砂岩角礫を含む､しまり有り)

図90　SX05 主体部実測図

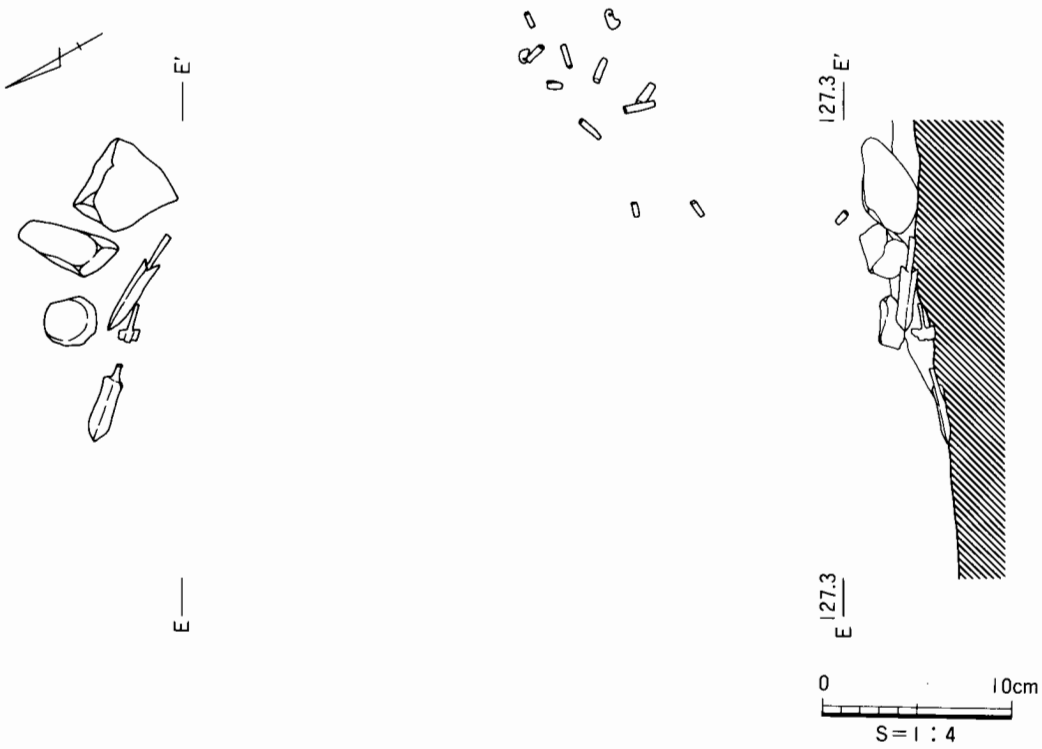


図91　SX05 遺物出土状況

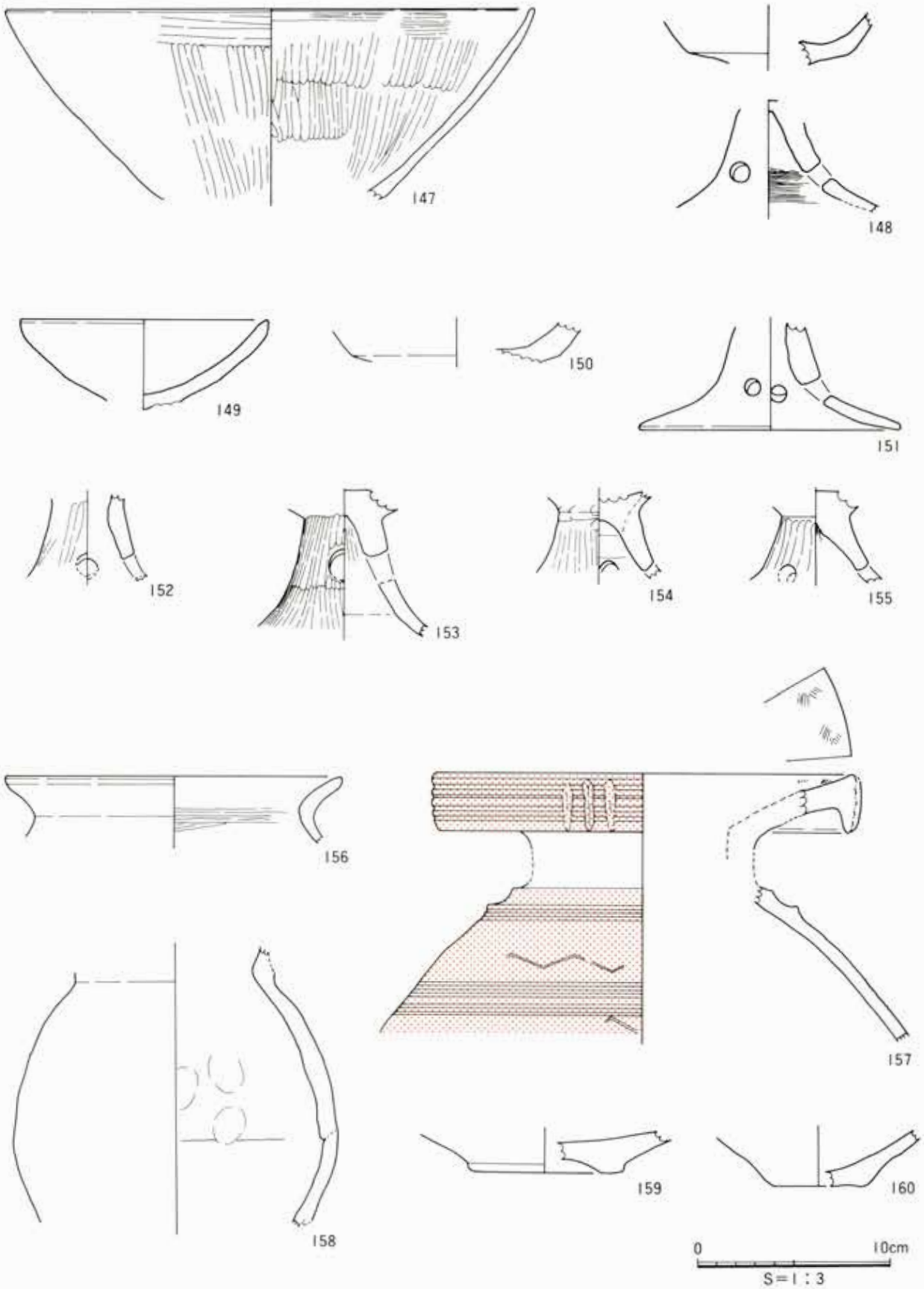


図92　SX05 出土遺物実測図(1)

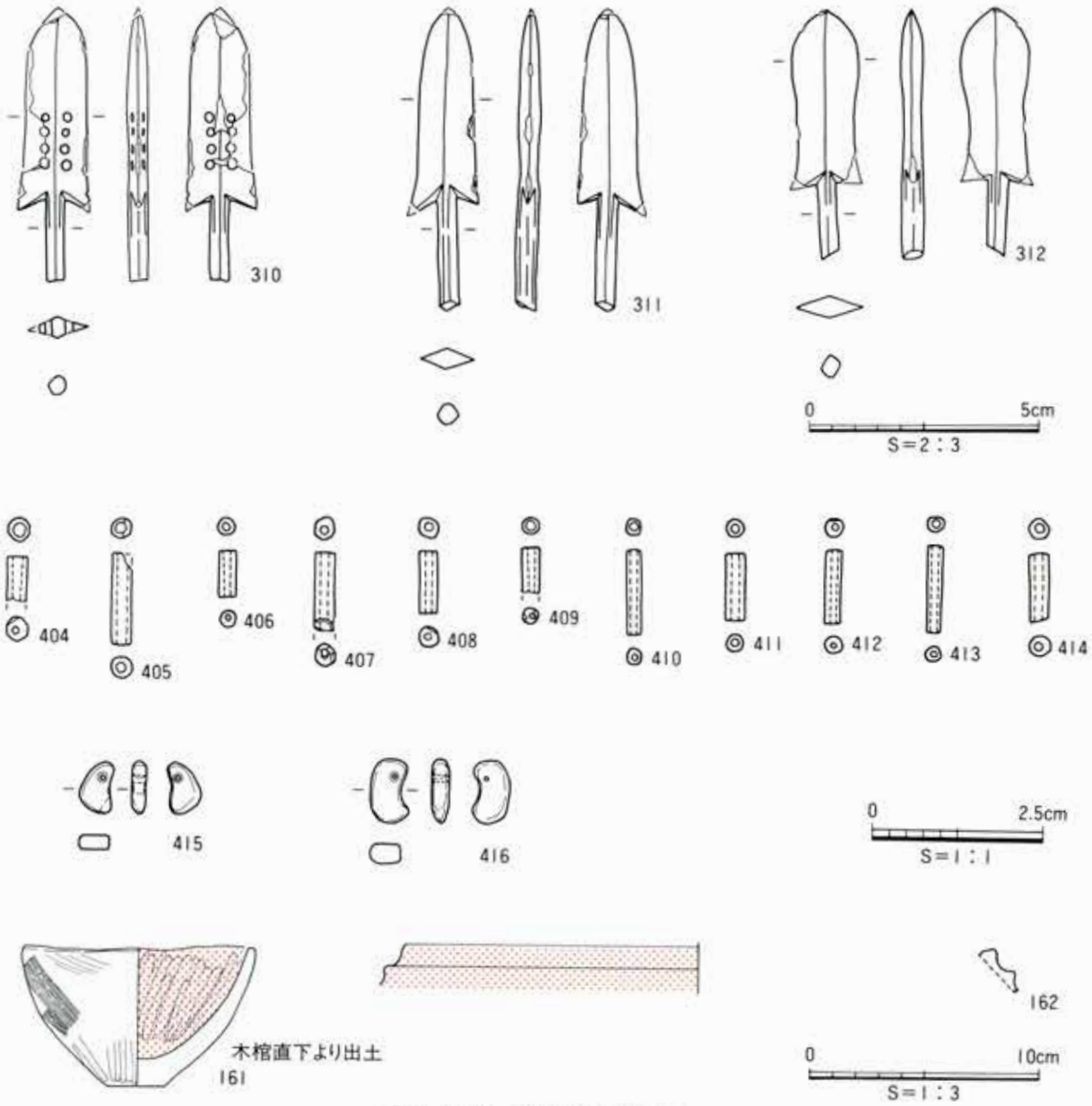
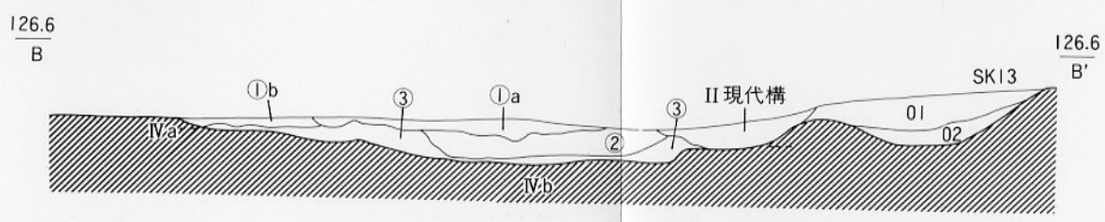


図93　SX05 出土遺物実測図(2)

鏃を含む銅鏃が3点出土した。銅鏃先の方向は、3本とも北西を向いていた。柄の部分に矢柄は見つからなかった。管玉や勾玉は、頭部の位置よりもやや外側の東よりの位置で出土したので、頭部や頸に掛かった状態ではなく、まとめて南東端に置かれていたものと思われる。勾玉は2点、管玉は11点になった。検出状況および土層の状況から主体部に設置された木棺は、舟底状木棺と推測する。墳丘部のところで説明したように、棺は旧地表面を整地して、その上に置かれて、周りを土で埋める方法をとっているので、旧地表面を掘り下げることはなかったと思う。

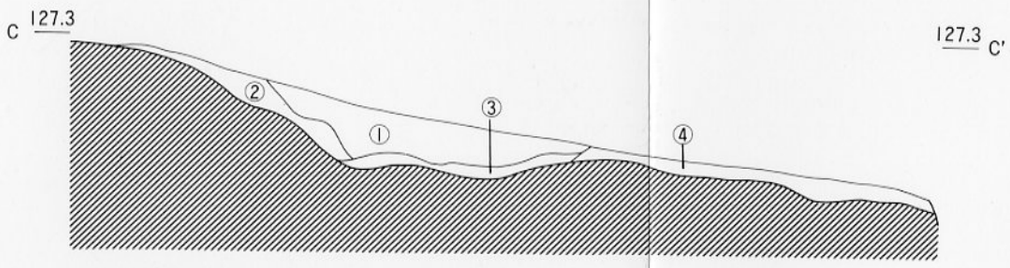
出土遺物（図92・93、図版37）

遺物は、高杯9点、甕1点、鉢1点、壷5点、銅鏃（多孔銅鏃を含む）3点、管玉11点、勾玉2点が実測できた。なお、161の鉢は、木棺の置かれた位置より少し下の位置から出土しているので、木

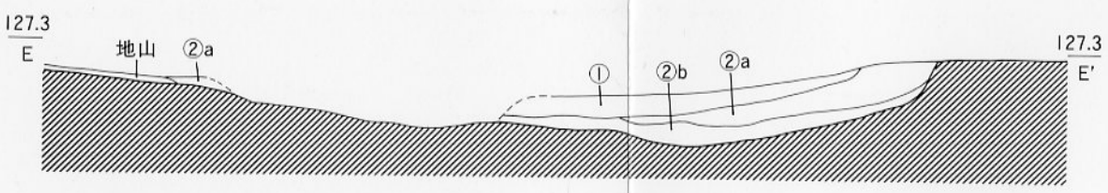


① 7.5YR4/2灰褐色土(1～4cmチャート亜角礫を少量含む,しまりやや有り)
① 10YR4/2灰黄褐色土(1～2cm砂岩角礫を多く含む,しまりやや有り)
② 7.5YR2/1黒色土(3～4cmチャート亜角礫を少量含む,しまりやや有り)
③ 7.5YR3/1黒褐色土(3～4cmチャート亜角礫を少量含む,しまりやや有り)
01 7.5YR4/3褐色土(2cm砂岩角礫を少量含む,しまり有り)
02 7.5YR3/2黒褐色土(3～4cmチャート亜角礫を少量含む,しまり有り)

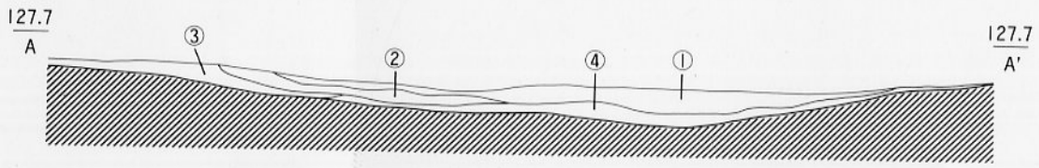
II 7.5YR4/2褐灰色土(2～4cm砂岩角礫を含む,しまりなし)－現代溝埋土
IVa 7.5YR4/6褐色土(2～4cm砂岩角礫を多く含む,しまり有り)
IVb 10YR7/6明黄褐色土(3～4cmチャート亜角礫,2～10cm砂岩角礫を多く含む,しまり強)



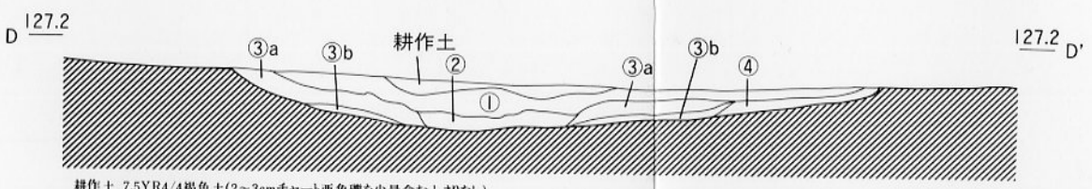
① 7.5YR3/3暗褐色土(1cmほどの砂岩角礫を少量含む,しまり有り)
② 7.5YR4/4褐色土(礫をほとんど含まず,ややしまりなし)
③ 7.5YR4/4褐色土(5～7cmほどのチャート亜角礫を多く含む,しまり有り)
④ 7.5YR4/6褐色土(2～4cmほどのチャート亜角礫を多く含む,しまり有り)



① 7.5YR3/2黒褐色土(3～5cm砂岩角礫を多く含む,しまりなし)
②a 7.5YR4/3褐色土(1～2cmほどの砂岩角礫をまばらに含む,しまりやや有り)
②b 7.5YR4/4褐色粘質土(1～5cmほどの砂岩角礫を多く含む,しまりやや有り)
地山 7.5YR5/6明褐色粘質土(礫を含まず,しまり有り)



① 7.5YR2/1黒色土(2～3cm前後の砂岩角礫を少量含む,しまりなし)
② 7.5YR3/3暗褐色土(5cm前後の砂岩角礫を少量含む,しまりやや有り)
③ 7.5YR4/4褐色粘質土(2cm前後の砂岩を少量含む,しまりやや有り)
④ 7.5YR4/6褐色粘質土(1～5cmほどの砂岩角礫を多く含む,しまり有り)



耕作土 7.5YR4/4褐色土(2～3cmチャート亜角礫を少量含む,しまりなし)
① 7.5YR3/3暗褐色土(1～5cmチャート亜角礫を含む,土器あり,しまり有り)
② 7.5YR3/4暗褐色土(0.5～1cmほどのチャート亜角礫を少量含む,しまり有り)
③a 7.5YR4/6褐色土(0.5～2cmほどのチャート亜角礫を多く含む,しまり有り)
③b 7.5YR4/6褐色粘質土(5cmほどのチャート亜角礫を多く含む,しまり有り)
④ 7.5YR6/6橙色砂質土(0.2cm程度の粗砂を多く含む,しまりやや有り)

0 2m
S＝1：50

図94 SX09 実測図

棺設置に先行して木棺の外に置かれたものかと思われる。147 は、内彎傾向を持つ高杯で高杯Ａ類の杯部と思われる。149 は、杯部の稜線がなく、なだらかに内彎しているので、高杯Ｂ類と思われる。148・150 は、高杯の杯部および脚部であるが、脚部が裾部で外に広がるので高杯Ｃかと思われる。150・152・153・154・155は、高杯の杯部の一部および脚部の一部であるが、細かい分類はできない。156 は、口縁部が短く外反する甕の口縁部で、甕Ａ類に入る。157 は、赤彩を施し、口縁部を肥厚させたパレススタイルの壷Ａ類である。口縁外面には擬凹線を４条と棒状浮文を施し、体部上面に隆帯と横線・山形文を施す。158 は、口縁が短く外反する壷Ｂ３類の胴部である。159・160 は、壷の底部であるが、分類はできない。ただ、159 の底部は上げ底になっている。310～312 は、主体部から出土した銅鏃である。310は、茎から銅鏃先端までの長さが約 5.9cm、鏃身幅が 1.6cm 、鏃身厚が 0.5cmである。先端および逆刺片方が欠損している。かえしの部分がやや外に広がる。鎬は明瞭で、両側に４対の孔があけられている。銅鏃の断面形は菱形で、茎の断面も正円ではなく何面か面を持っている。311 は、茎から銅鏃先端までの長さが約6.55cm、鏃身幅が 1.5cm、鏃身厚が0.55cmである。先端および逆刺片方が欠損している。かえしの部分は片方が特に広がっている。鎬は明瞭で、中央部分の厚みがやや薄い。銅鏃の断面形は菱形で、茎の断面も正円ではなく何面か面を持っている。312 は、茎から銅鏃先端までの長さが約 5.5cm、鏃身幅が 1.5cm、鏃身厚が 0.5cmである。先端および逆刺両方が欠損している。かえしの部分はやや外に広がると思われる。銅鏃先端がやや横に広がり、鏃身中央部がへこんでいる。鎬は明瞭である。銅鏃の断面形は菱形で、茎の断面も正円ではなく菱形である。以上の３点の銅鏃はいずれも形が異なるが、次のことが言える。310 は、全国でも東海地方に多く出土している銅鏃である。岐阜県では、北一色遺跡（１点）・伊瀬粟地遺跡（２点）に続く４例目である。美濃加茂市の伊瀬粟地遺跡出土の多孔銅鏃を見る機会があったが、金ヶ崎遺跡のものよりやや細身でかえしの張り方が強かった。伊瀬粟地遺跡の墳墓が３世紀前半（廻間Ⅰ式後半）のものと考えられていることから、310 は、３世紀中葉（廻間Ⅰ式末）に位置するのではないかと思われる。ただ、311 の銅鏃は、やや細身で先端からかえしのあたりに向かって徐々に幅広になっていくが、312 は、先端の幅が広く一度狭くなってかえしのあたりで再び広くなる銅鏃で、古墳時代の銅鏃の要素を含んでいることから、３世紀の中葉でもそれ以後の時期との境に当たるのではないかと思われる。鉛同位体の分析結果からも古墳時代によく使用される銅であることが指摘されている。404 から 414 は、管玉である。長いもので13.5mm、短いもので 6.2mm、幅は 1.7mmから 3.5mmある。すべて緑色凝灰岩である。断面は正円ではなく、面を持っている。また、孔も中心にはあいていない。415・416は、ヒスイ製の勾玉である。大きさは、長さが 7.5mmと 9.2mm、幅は 5.0mmと 5.7mmである。161 は、主体部の木棺の下の位置から出土した土器で、鉢Ｂ類にあてはまる。内側の赤彩は水銀朱であった。木棺設置前に置かれていたことと併せて考えると、木棺設置前に祭祀を行い、その中で朱を主体部周辺にまいて鉢を木棺の下に納めたのではないかと思われる。出土状況でも、伏せた状態で出土している。162 は、主体部周辺から出土しているが、赤彩が施してあり壷の体部に付ける隆帯かと思われる。壷Ａ類に入る。

所属時期

出土遺物の中で、高杯や多孔銅鏃を含めた銅鏃などから考えて、Ⅱ－２期に属すると思われる。

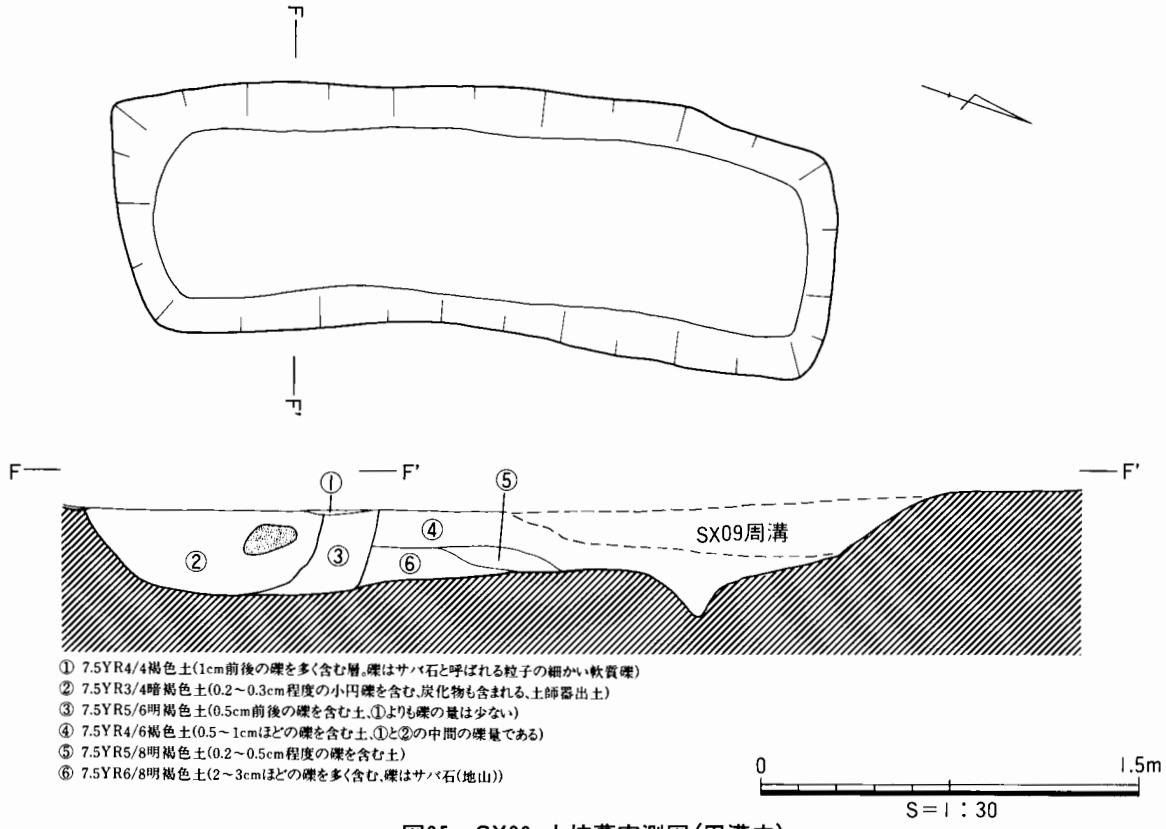


図95　SX09 土坑墓実測図(周溝内)

ＳＸ09（図94・95、図版13・19）

墳丘墓の残存状態

SX09は、周辺が発掘前に畑地になっていたので、墳丘部分は削平を受け確認できなかった。

墳丘墓の立地

調査区内の中央よりやや南東にあり、北東から南西に延びる尾根筋からやや東にはずれる位置にある。西にSX10、北にSX01・北西にSX11などが位置している。

周辺には、弥生時代末から古墳時代初頭の竪穴住居跡や掘立柱建物跡がある。墳丘及び周溝には一部中近世墓が見られるところもあった。標高は残った墳丘の一部が128.5ｍを測る。墳丘は後世の削平を受け築造時の高さを保っていない。

周　溝

平面形は、墳丘の南の隅のみ周溝がない馬蹄形をしている。墳丘の平面形が方形であるが、周溝の幅が最大の部分が墳丘の各辺の中心になっており、逆に墳丘の隅が周溝の一番狭いところになっている。周溝の北東部分がSB06の一部を切っている。また、周溝の西の隅で追葬されたと思われる土坑墓が見つかった。周溝の幅は最大4.8ｍ、最小1.4ｍ、深さは深いところで0.4ｍ、浅いところで0.05ｍあった。断面の形状は周溝の内外辺が緩やかに立ち上がるかまぼこ状になっている。周溝は墳丘の南の端のところで終息しており、そこは陸橋状になっている。周溝からの出土遺物は、一ヶ所に集中するのではなく、まばらに出土している。

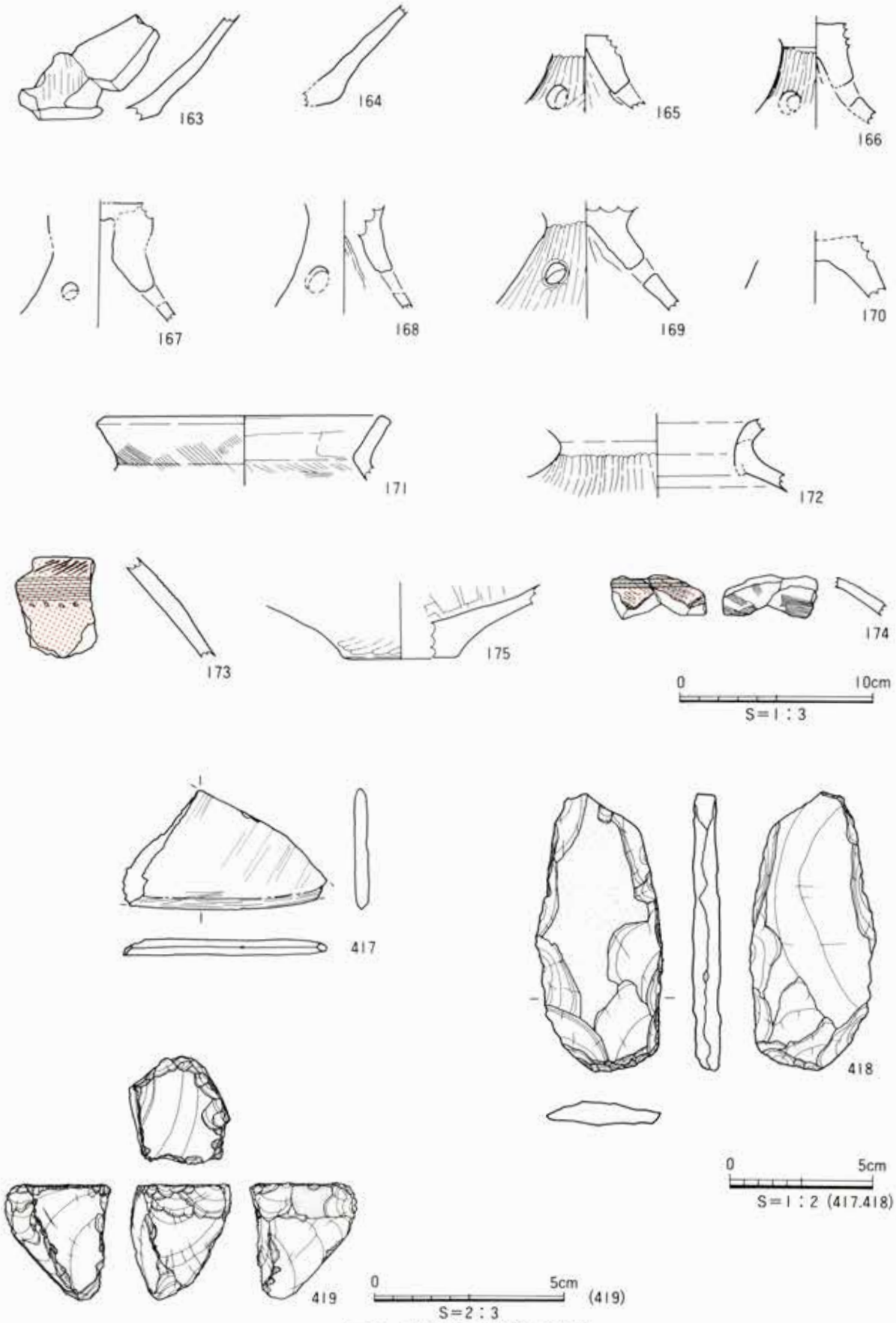


図96　SX09 出土遺物実測図

墳　丘

平面形は、周溝の輪郭と90°ずれるようなかたちで方形をしている。墳丘の北東の辺の隅にSX09よりも古い土坑SK13が見つかっている。墳丘は後世の削平を受け、墳丘そのものが構築されたときの土はほとんど残っていない。わずかに墳丘中央に、主体部を構築したときの粘土郭の残存部が幅1.8mほど残っているだけであった。墳丘の規模は、北西から南東方向に9.9m、北東から南西方向に10.4mある。残った部分の墳丘高はほぼゼロに近く、残った墳丘頂部と周溝底部の比高差は約1.5mになる。

粘土郭残存部をベルトを残して下げていくと黒色土がみられた。これは、他の方形周溝墓の断面に見られたⅢa層によく似ている。したがって他の方形周溝墓と同様に、Ⅲa層の上面に作られたものと思われる。

主体部

主体部は削平によって確認できないが、わずかに主体部下の粘土郭残存部としての粘土質の土を確認した。

周溝内土坑墓（図95、図版19）

土坑墓は、周溝の西の端に位置する。平面形は長方形である。規模は、幅1m、長さ2.9mである。主軸はN－15°－Wをとる。土坑墓は主軸に直行する方向でベルトを残し掘削した。堆積していた土は暗褐色土で礫を一部含み、炭化物・土器片も見られた。SX09に付随する遺構と思われる。

出土遺物（図96、図版38）

遺物は、高杯8点、甕2点、壷4点、石器3点が実測できた。163・164は、高杯の杯部である。高杯A類に近い。165から169は高杯の脚部である。165・166は、脚の裾部が広がる高杯C類に近い。他の高杯は細分できない。171は、口縁がくの字に外反する甕A類である。173・175は甕の胴部片で赤彩が見られる。壷A類である。172は、短く外反する壷B類である。175は壷の底部である。417は、石庖丁である。418は、打製石斧である。419は、チャートの石核である。

所属時期

出土遺物から、Ⅱ－2期に属すると思われる。

ＳＸ11（図97、図版13・20）

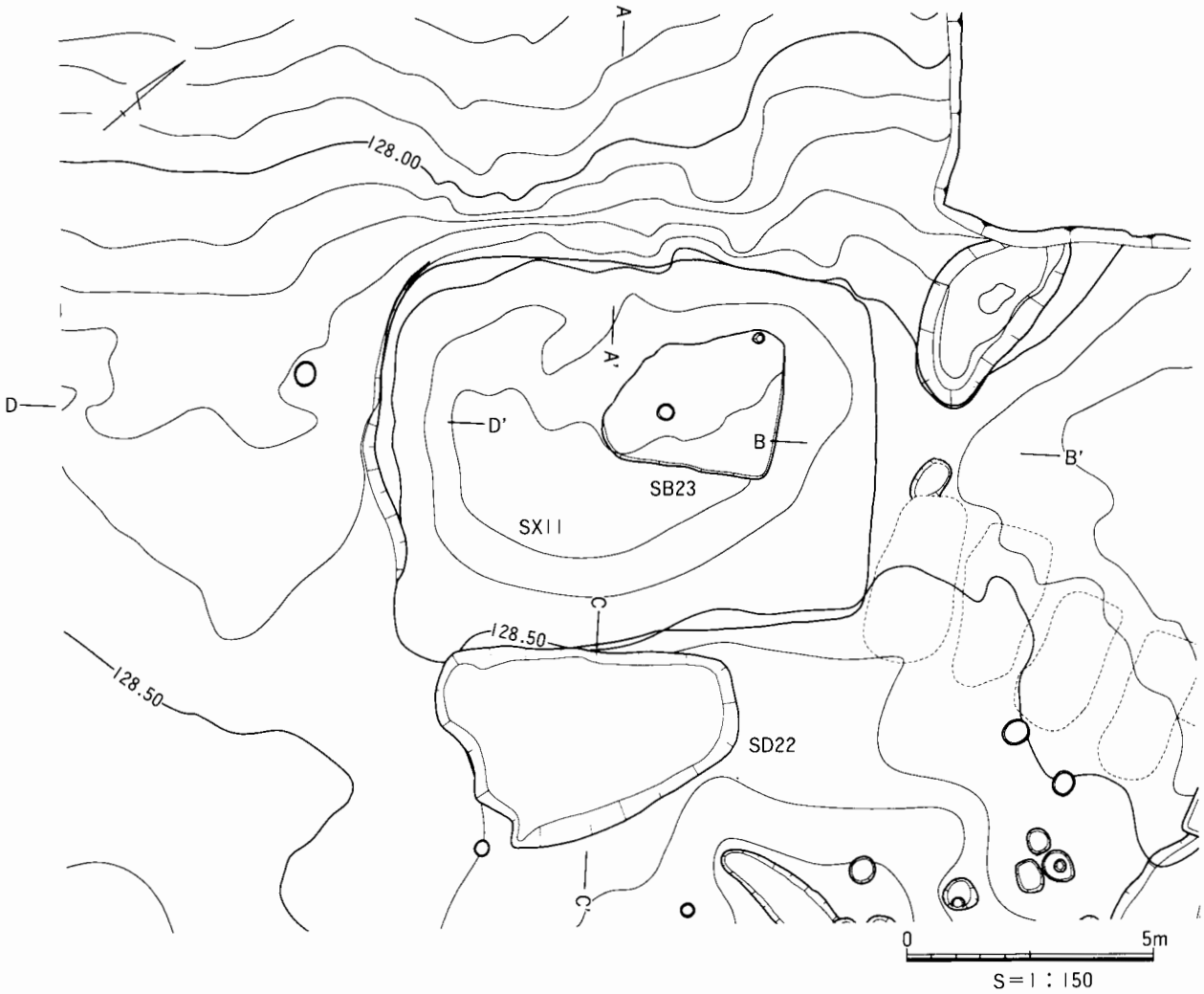
墳丘墓の残存状態

SX11は、畑地として利用していたので、墳丘部分は削平を受け確認できなかった。

墳丘墓の立地

調査区内の中央より北西にあり、北東から南西に延びる尾根筋にある。東にSX09、北東にSX01が位置している。

周辺には、弥生時代末から古墳時代初頭の竪穴住居跡や掘立柱建物跡がある。墳丘の下にもSB23


A
128.00
A'
D
D'
B
B'
SB23
SX11
128.50
128.50
SD22
0
5m
S＝1：150

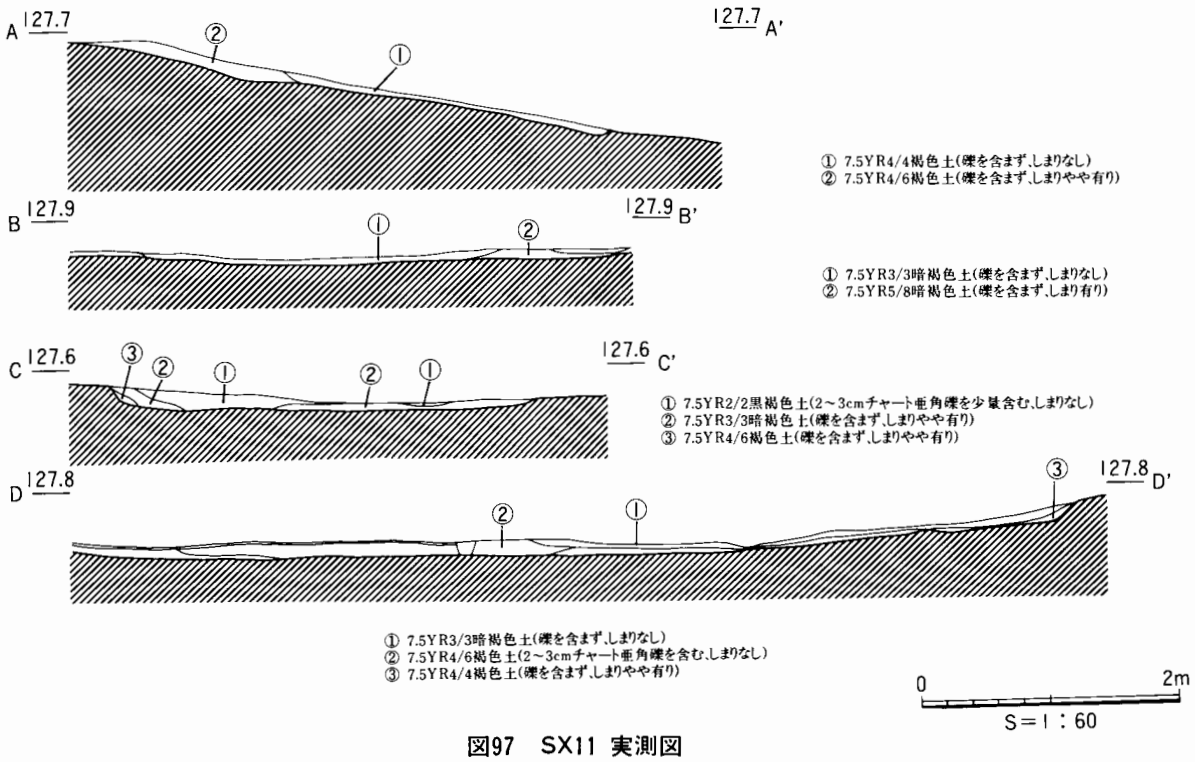

A 127.7
127.7 A'
① 7.5YR4/4褐色土(礫を含まず、しまりなし)
② 7.5YR4/6褐色土(礫を含まず、しまりやや有り)
B 127.9
127.9 B'
① 7.5YR3/3暗褐色土(礫を含まず、しまりなし)
② 7.5YR5/8暗褐色土(礫を含まず、しまり有り)
C 127.6
127.6 C'
① 7.5YR2/2黒褐色土(2～3cmチャート亜角礫を少量含む、しまりなし)
② 7.5YR3/3暗褐色土(礫を含まず、しまりやや有り)
③ 7.5YR4/6褐色土(礫を含まず、しまりやや有り)
D 127.8
127.8 D'
① 7.5YR3/3暗褐色土(礫を含まず、しまりなし)
② 7.5YR4/6褐色土(2～3cmチャート亜角礫を含む、しまりなし)
③ 7.5YR4/4褐色土(礫を含まず、しまりやや有り)
0
2m
S＝1：60

図97　SX11 実測図

があった。標高は残った墳丘の一部が128.7mを測る。墳丘は後世の削平を受け築造時の高さを保っていない。

周　溝

墳丘の南東の辺のみに周溝がある。平面形は、辺の中央が1番幅の広い三角形に近い。墳丘の他の辺の周りには周溝はない。北西の辺は斜面になっている。周溝の幅は最大4.1m、最小1.7m、深さは深いところで0.2m、浅いところで0.03mあった。断面の形状は皿状になっている。周溝からの出土遺物は、ほとんどなかった。

墳　丘

平面形は、北東から南西方向が長い長方形をしている。墳丘は削平を受け、墳丘そのものが構築されたときの土は残っていない。墳丘の規模は、北西から南東方向に7.8m、北東から南西方向に10.3mある。残った墳丘頂部と周溝底部の比高差は約1.5mになる。

主体部

主体部は削平によって確認できない。

出土遺物

土器片が複数出土した。

所属時期

土器片から詳しい時期決定はできないが、Ⅱ期に属していると思われる。

ＳＸ12（図98、図版13・21）

墳丘墓の残存状態

SX12は、周辺が森林になっており、墳丘部分は削平を受け確認できなかった。

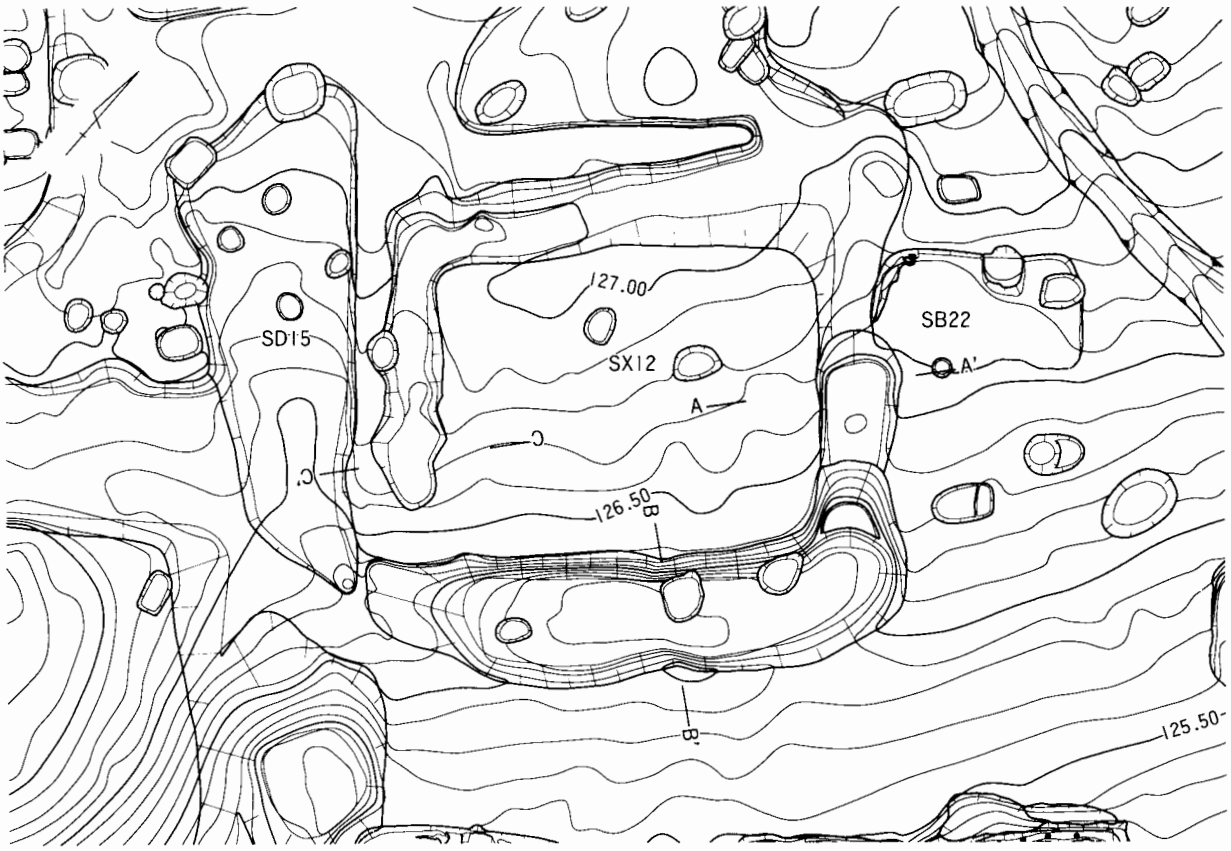
墳丘墓の立地

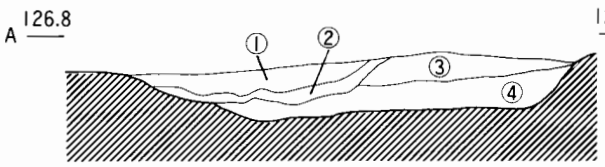
調査区内の中央より南東にあり、南東斜面に位置している。北西にSX03、北にSX02、西にSX05などが位置している。

周辺には、古墳時代後半の竪穴住居跡がある。墳丘及び周溝には中近世墓が見られる。標高は残った墳丘の一部が127mを測る。ただし、墳丘の中で1番高いのは中央部ではなく、墳丘の北西端である。墳丘は後世の削平を受け築造時の高さを保っていない。

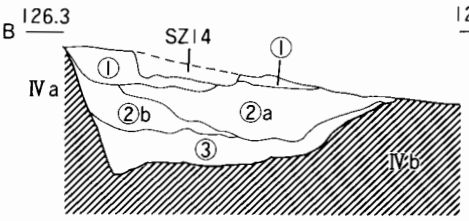
周　溝

平面形は、墳丘の南の隅のみ周溝がない。この部分は、陸橋状になっていると思われる。墳丘の平面形が方形であるが、周溝も墳丘に沿うように方形である。周溝の北の端では、SX03の周溝とつな



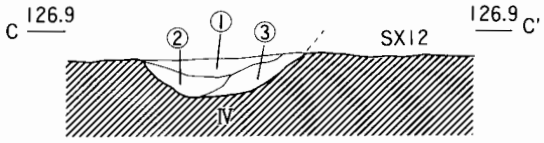


① 7.5YR3/2黒褐色土(2～10cmチャート亜角礫を多く含む,しまり有り)
② 7.5YR4/2灰褐色土(1～2cmチャート亜角礫を少量含む,しまり有り)
③ 7.5YR4/1褐灰色土(2～4cmチャート亜角礫を少量含む,しまり有り)
④ 7.5YR4/3褐色土(5～10cmチャート亜角礫を多く含む,しまり有り)



① 10YR4/2灰黄褐色土(2～4cmチャート亜角礫を含む,しまりなし)
②a 10YR2/2黒褐色土(4～6cmチャート亜角礫を含む,しまりやや有り)
②b 10YR4/6褐色土(0.5cm砂岩角礫を少量含む,しまりやや有り)
③ 10YR3/4暗褐色土(0.5～5cm砂岩角礫,2～4cmチャート亜角礫を多く含む,しまりやや有り)

Ⅳa 7.5YR5/6明褐色土(2～10cmチャート亜角礫を多く含む,しまり強)
Ⅳb 7.5YR4/6褐色土(0.5～5cm砂岩角礫を多く含む,しまり有り)



① 7.5YR5/3にぶい褐色土(礫を含まず,しまりやや有り)
② 7.5YR5/2灰褐色土(2～5cmチャート亜角礫を含む,しまり有り)
③ 7.5YR5/4にぶい褐色土(2～5cmチャート亜角礫を少量含む,しまり有り)
Ⅳ 7.5YR5/6明褐色土(5～20cmチャート亜角礫を多く含む,しまり強)

0　2m
S＝1：50

図98　SX12 実測図

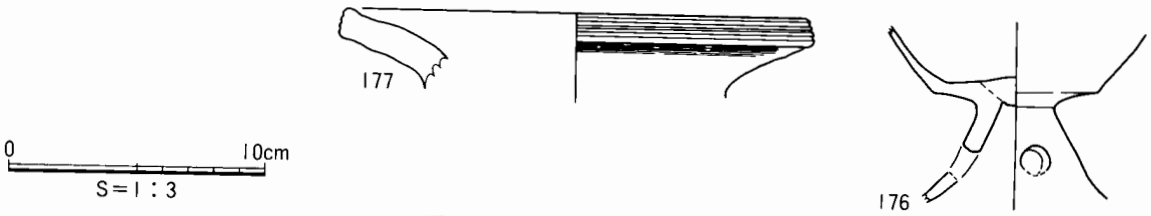


図99　SX12 出土遺物実測図

がっている。墳丘の北東辺に面した周溝は、SB22の住居に切られている。周溝の幅は最大2.6m、最小0.9m、深さは深いところで0.2m、浅いところで0.03mあった。断面の形状は、北西の周溝と南東の周溝の断面はかまぼこ状であり、南東の周溝断面は墳丘側が急に深く、周溝の外辺側は緩やかに落ち込んでいる。

墳　丘

平面形は、周溝の輪郭に沿うかたちで方形をしている。墳丘の南の隅は周溝が閉塞し、陸橋状になっている。墳丘は後世に削平され、残っていない。残った墳丘の規模は、北西から南東方向に6.4m、北東から南西方向に7.6mある。残った墳丘中心部と周溝底部の比高差は約1.3mになる。

主体部

主体部は削平によって確認できない。

出土遺物（図99）

高杯1点、壷1点が実測できた。高杯はやや小型で、脚部の裾が広がる高杯C類である。177は、口縁部がくの字に外反する壷B2類である。口縁外側に擬凹線を施している。

所属時期

出土遺物からみると、Ⅱ期に属するが、細分の決め手はない。高杯A類の出土がないが、Ⅱ－2期の可能性が高いと思われる。

SX13（図100、図版21）

墳丘墓の残存状態

SX13は、周辺が畑地になっており、墳丘部分は削平を受け確認できなかった。

墳丘墓の立地

調査区内のほぼ中央にあり、やや南東斜面側に位置している。南西にSX02、北にSX15がある。

周辺には、弥生時代後半から古墳時代初頭の竪穴住居跡・古墳時代後半の掘立柱建物跡などがある。標高は残った墳丘の一部が128.0mを測る。ただし、墳丘の中で1番高いのは中央部ではなく、墳丘の北西端である。墳丘は後世の削平を受け築造時の高さを保っていない。SX02と周溝を共有していると思われる。

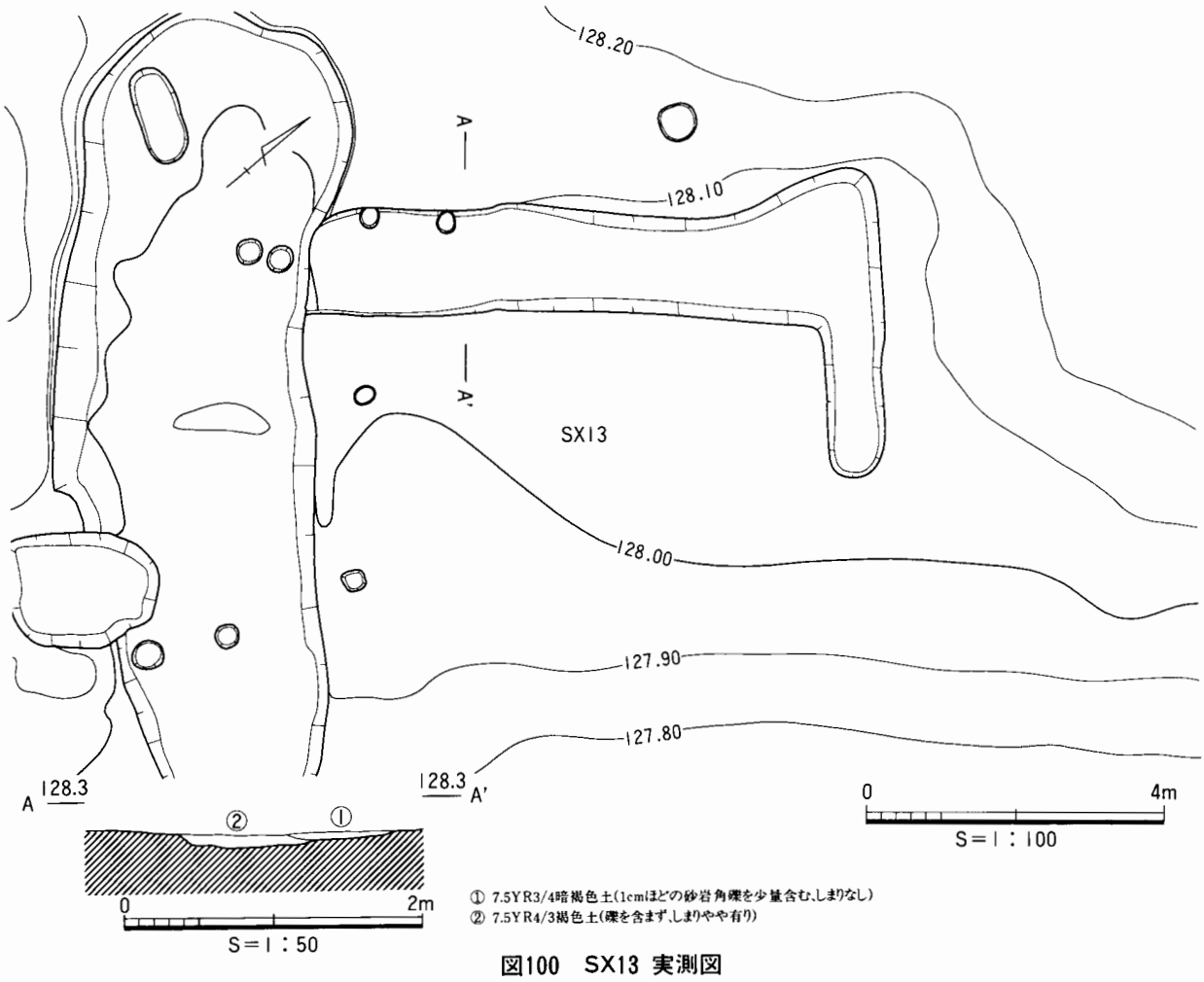


図100　SX13 実測図

周　溝

平面形は、北西側と北東側のＬ字状にある。南西側はSX02の周溝があり、南東側は斜面になり周溝は見られない。周溝の幅は最大1.5m、最小0.8m、深さは深いところで0.07m、浅いところで0.03mあった。断面の形状は、北西の周溝の断面は皿状になっており浅い。

墳　丘

平面形は、周溝の輪郭に沿うかたちで方形をしていたと予想される。ただ、南東部の辺がはっきりしない。墳丘は後世に削平され、残っていない。残った墳丘の規模は、北西から南東方向に7.1mである。主体部も削平によって確認できない。

出土遺物

出土遺物は確認できなかった。

所属時期

出土遺物がないので時期ははっきりしないが、SX02と周溝を共有しているので、Ⅱ－3期に属すると思われる。

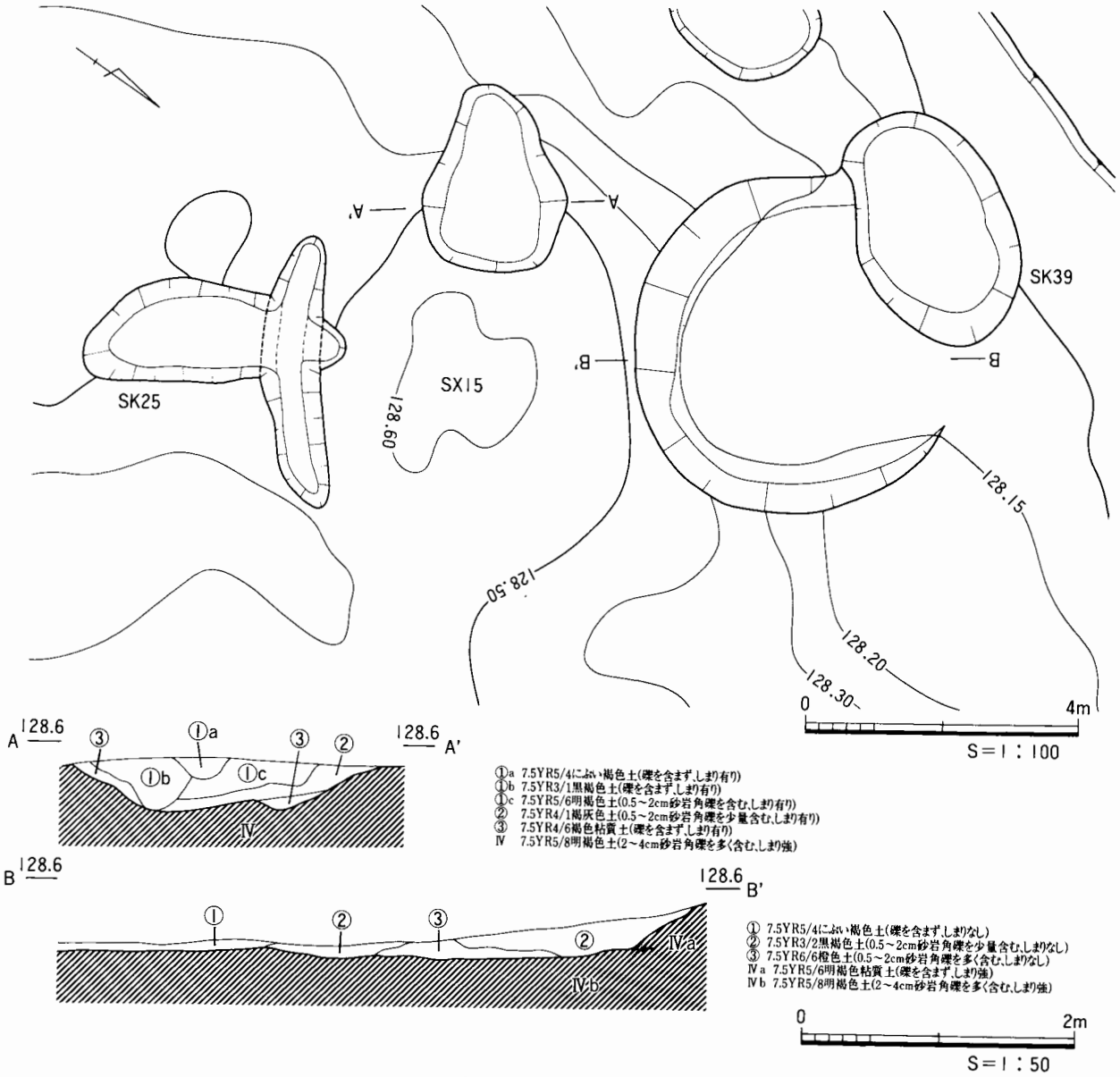


図101　SX15 実測図

ＳＸ15（図101、図版22）

墳丘墓の残存状態

SX15は、周辺が畑地になっており、墳丘部分は削平を受け確認できなかった。

墳丘墓の立地

調査区内のほぼ中央より北西にある。北にSX10、南東にSX02が位置している。

周辺には、古墳時代後半の掘立柱建物跡がある。標高は残った墳丘の一部が128.6ｍを測る。墳丘は後世の削平を受けている。

周　溝

周溝は、墳丘の南東部・南西部・北西部にあり、北東部のみ存在しない。それぞれ３つの溝に独立

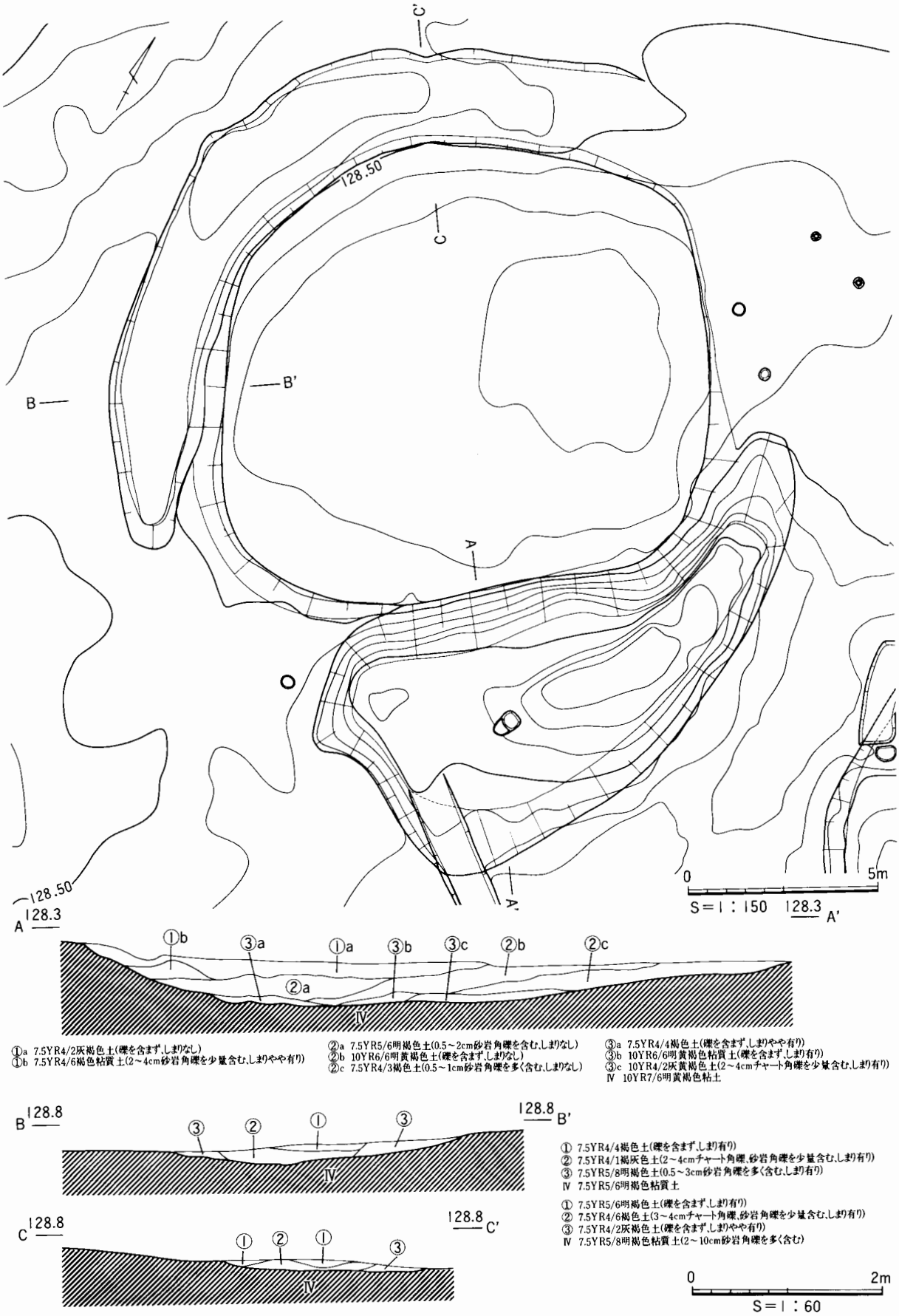


図102　SX10 実測図

している。北西の溝が馬蹄形で径4.8m、深さ0.25m、南東の溝が細長い楕円形で長辺3.8m、短辺1m、南西部が楕円形で長径2.7m、短径2.2m、深さ0.4mである。断面の形状は、北西の周溝が墳丘面から北西に向かってなだらかに傾斜し北西の端で終息している。南西の周溝の断面はかまぼこ状になっている。南東の周溝断面は不明である。なお、この周溝はSK25を切っている。

墳　丘

平面形は、周溝の輪郭に沿うかたちであり、不定形である。墳丘面は削平を受けている。残った墳丘の規模は、北西から南東方向に4.7mある。残った墳丘中心部と周溝底部の比高差は約0.5mになる。

出土遺物

遺物は確認できなかった。

所属時期

遺物は確認できなかったが、周溝の端が切れているところから、古いタイプの方形周溝墓かと思われる。Ⅱ－１期に属すると思われる。

ＳＸ10（図103、図版13・20）

墳丘墓の残存状態

SX10は、周辺が発掘前に畑地になっていたので、墳丘部分は削平を受け確認できなかった。

墳丘墓の立地

調査区内の中央よりやや北にあり、北東から南西に延びる尾根筋上に位置する。東にSX09、北東にSX01、南にSX15やSX02などが位置している。

周辺には、古墳時代後期の掘立柱建物跡がある。標高は残った墳丘の一部が128.8mを測る。墳丘は後世の削平を受け築造時の高さを保っていない。

周　溝

平面形は、南西から北西にかけてＬ字状にのびている。また、南東から北東に向かって不定形の周溝がのびている。墳丘の南の隅は、周溝がない。北の隅は、北東にかけて広く周溝がない。周溝の幅は東側の周溝の幅が広く、最大7.5m、最小３m、深さ0.5m西側のＬ字の周溝は、最大３m、最小2.4m、深さ0.15mあった。断面の形状は周溝の内外辺が緩やかに立ち上がるかまぼこ状である。周溝は墳丘の南の端のところで終息しており、そこは陸橋状になっている。墳丘の北の隅は広く、周溝がないため陸橋状とは言い難い。東側の周溝から多くの遺物が出土した。

墳　丘

平面形は、方形というよりも円形に近い。東側の周溝が深いので東を意識して作られている可能性がある。墳丘は後世の削平を受け、墳丘そのものが構築されたときの土はほとんど残っていない。墳

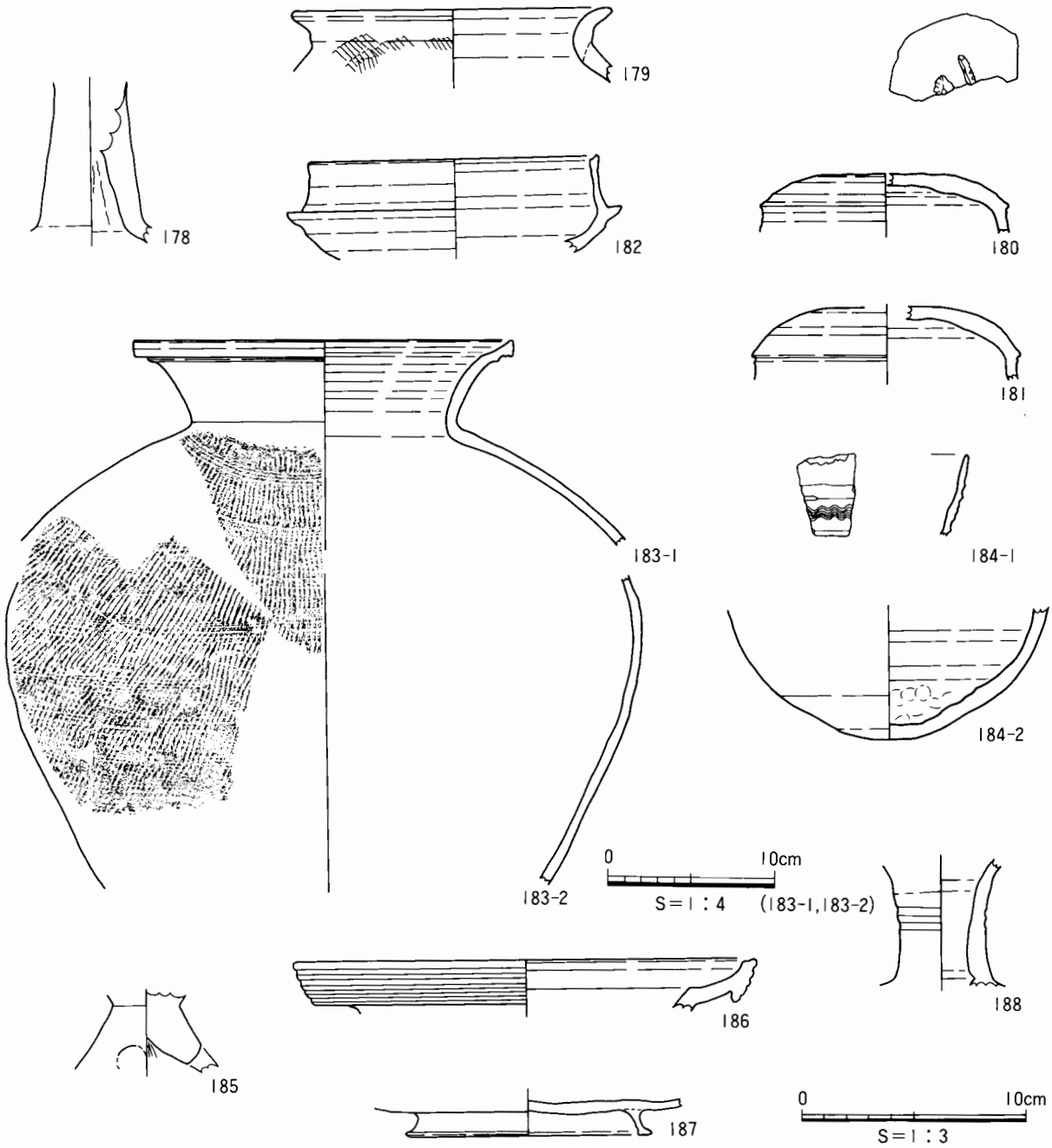


図103　SX10 出土遺物実測図

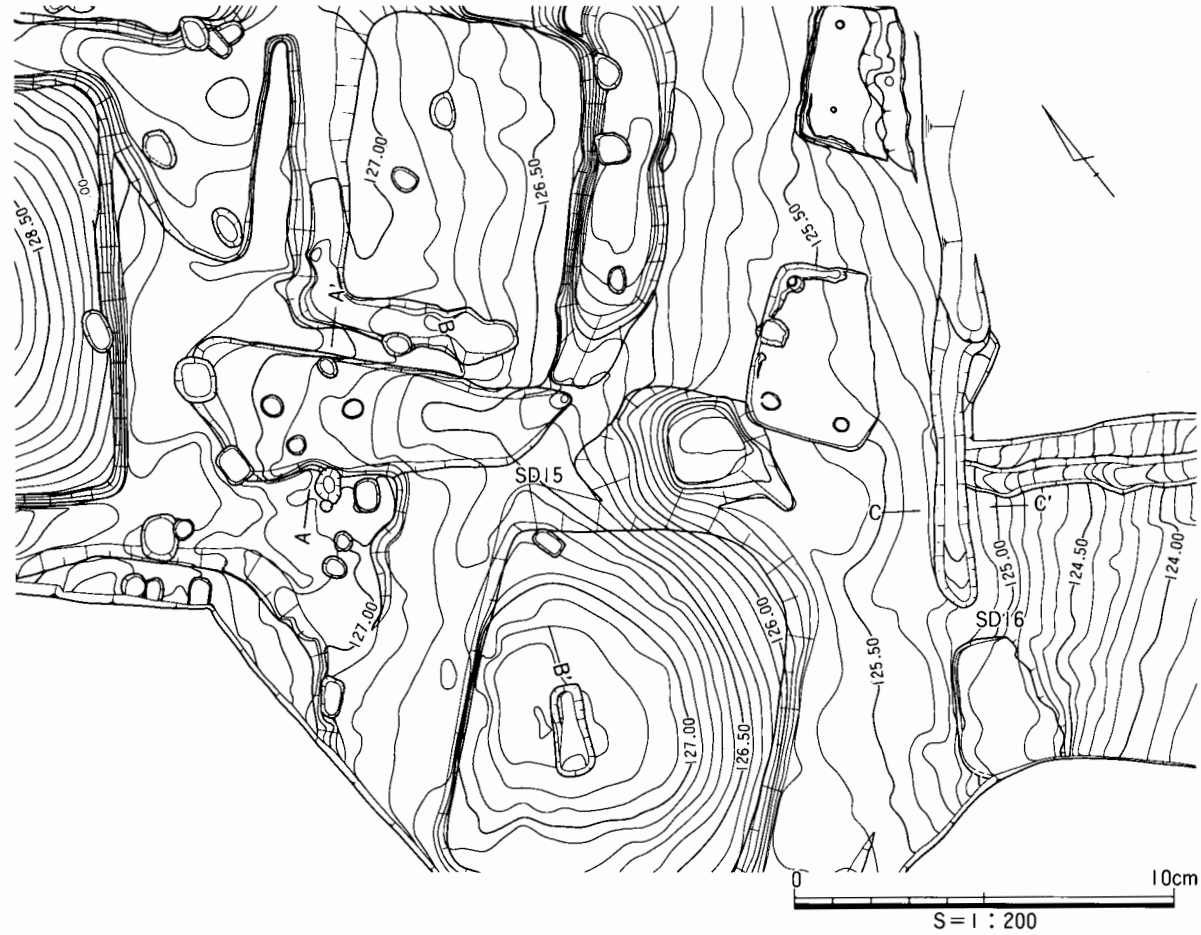
丘の規模は、径13mほどであった。残った墳丘頂部と周溝底部の比高差は約1.3mになる。

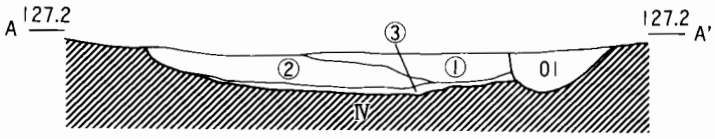
主体部

主体部は削平によって確認できない。

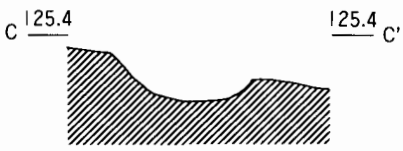
出土遺物（図103、図版38・39）

遺物は、土師器の高杯2点、甕1点、壷1点、須恵器の杯蓋2点、杯身1点、壷3点、盤1点の実測ができた。178の高杯は脚のみであるが、裾の部分が屈折している。高杯D類である。179は、短く外反する甕である。180・181は、天井部から口縁部の中間に稜線をもつ。5世紀末の猿投産の須恵

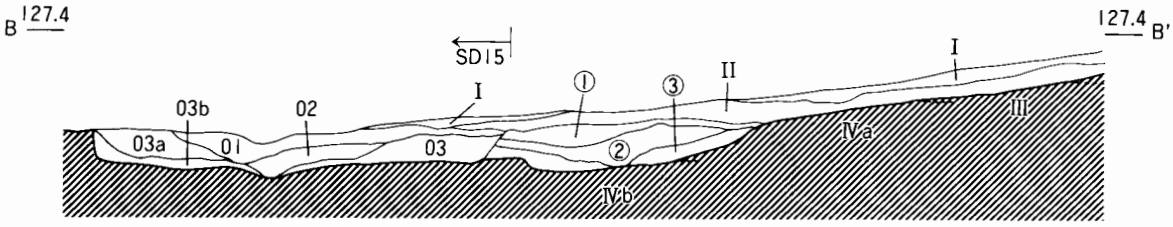




01 7.5YR5/3にぶい褐色土(礫を含まず,しまりやや有り)
① 7.5YR4/1褐灰色土(2～3cmチャート亜角礫を少量含む,しまりやや有り)
② 7.5YR2/1黒色土(礫を含まず,しまり有り)
③ 10YR5/4にぶい黄褐色土(2～10cmチャート亜角礫を多く含む,しまり有り)
Ⅳ 10YR6/6明黄褐色土(2～10cmチャート亜角礫を多く含む,しまり強)



SD16 エレベーション図



01 7.5YR4/1褐灰色土(2～5cmチャート亜角礫を少量含む,しまりなし)
02 7.5YR2/1黒色土(5～10cmチャート亜角礫を少量含む,しまりやや有り)
03a 7.5YR4/3褐色土(1～5cm砂岩角礫を多く含む,しまりやや有り)
03b 10YR5/6黄褐色土(5～10cmチャート亜角礫を多く含む,しまり有り)
Ⅲ 旧表土 7.5YR4/1褐灰色土(礫を含まず,しまり有り)
Ⅳa 7.5YR5/8明褐色土(2～5cmチャート亜角礫を少量含む,しまり強)
Ⅳb 7.5YR6/6橙色土(5～10cmチャート亜角礫を多く含む,しまり強)

図104　SD15・16 実測図

器かと思われる。180は、天井部外面に粘土紐を貼り付けている。182は、受け部が横方向にのび、かえりが長く垂直に立ち上がる5世紀末の猿投産の杯身である。183は、大型の壷で5世紀末から6世紀初頭の猿投産である。184は、口縁部に波状文を伴う直口壷である。底部内面に指頭痕がみられる。5世紀末の畿内系のものと思われる。185は、脚部の裾が広がる高杯Cである。混入した遺物かと思われる。186は、口縁を肥厚させたB1類の壷の口縁部である。口縁内面に段をもうけ、肥厚させた口縁外面に擬凹線を施す。混入品かと思われる。187は、8世紀末ごろの尾張産の盤である。188は、8世紀後半の猿投産の長頸壺の頸部である。混入品かと思われる。

所属時期

出土遺物はいくつかの時期に分かれているが、まとまった出土量から考えて、Ⅲ期の5世紀末ごろに所属すると思われる。

第3節　溝・土坑と遺物

調査区内には、多数の溝・土坑が存在している。遺構内からの出土遺物が少ないので、時期決定は難しいが、他の遺構に切られているものもあって、時期が決定できる遺構もある。なお、地区ごとの遺構のまとまりを見るために、遺構の種類（SD・SK）や遺構番号が不揃いになっている。

SD15（図104、図版23）

調査区内の南端に位置し、周辺には北東にSX12、北西にSX03、南にSX05が位置している。SX12の南西の周溝に沿うように東西にのびる溝である。長さ9.8m、幅3.6m、深さ0.3mある。主軸はN－35°－Eを示す。溝からは、弥生時代後葉から古墳時代初頭の土器片が出土している。周辺のSXの構築に伴って掘られたものかと思われる。Ⅱ－2期に属すると思われる。

SD16（図104、図版23）

調査区内の南東にある。周辺には、南西にSX05があり、竪穴住居跡もみられる。幅は1.1m、深さ0.2mある。出土遺物は確認できず、所属時期は不明である。

SD18（図105、図版23）

調査区内中央やや南SX02内、SB16西に幅3.1m、長さ7.5m、深さ0.4mの不定形の溝が見られる。出土遺物はないが、一部SB16Aに切られている。Ⅱ－1期に属すると思われる。

SK14（図105）

調査区内中央N20グリッドに位置する。SX02の北東周溝内にある。長さ1.4m、幅0.6m、深さ0.1mである。主軸はN－66°－Wを示す。出土遺物はない。Ⅱ－1期に属する。

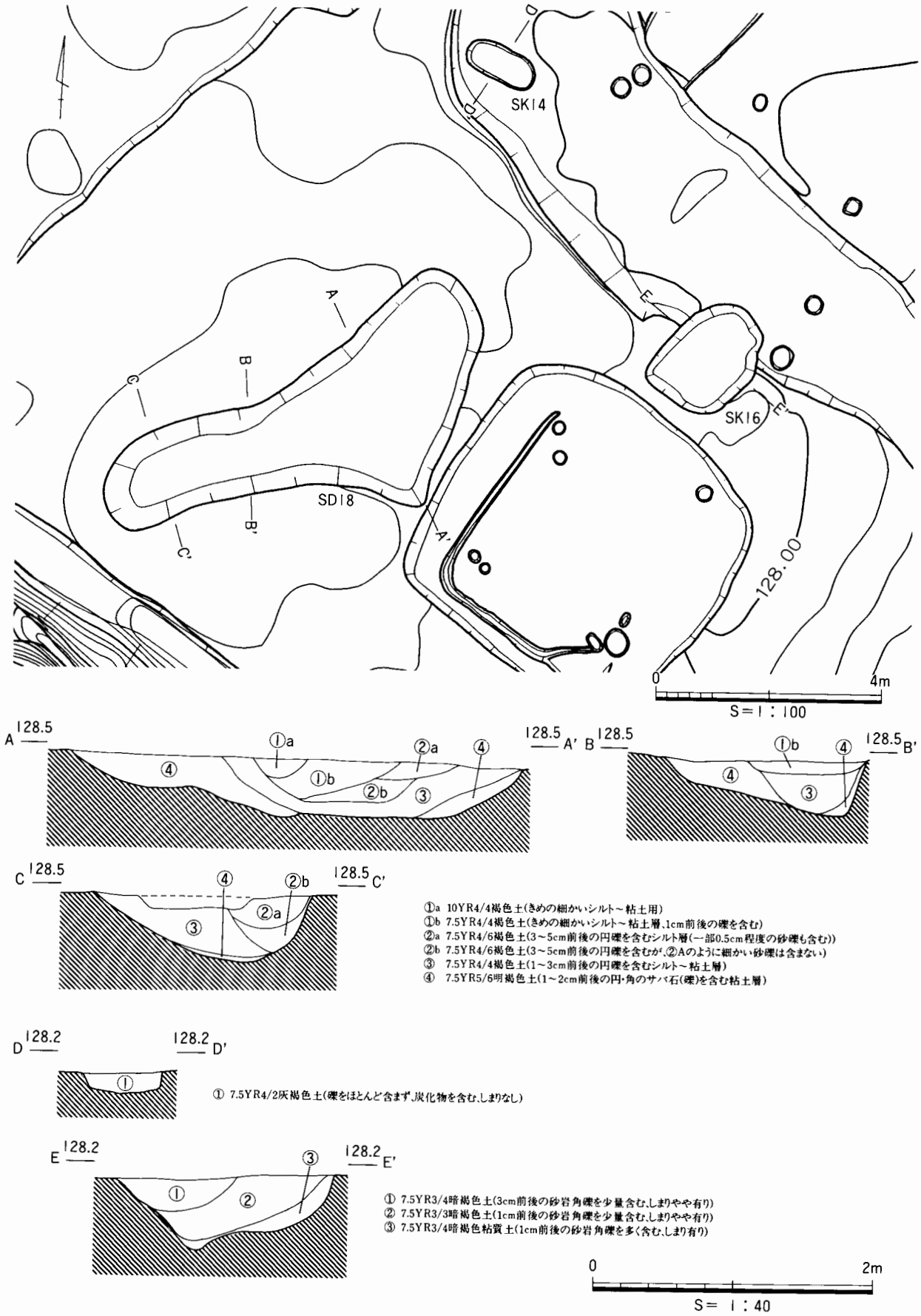


図105　SD18、SK14・16 実測図

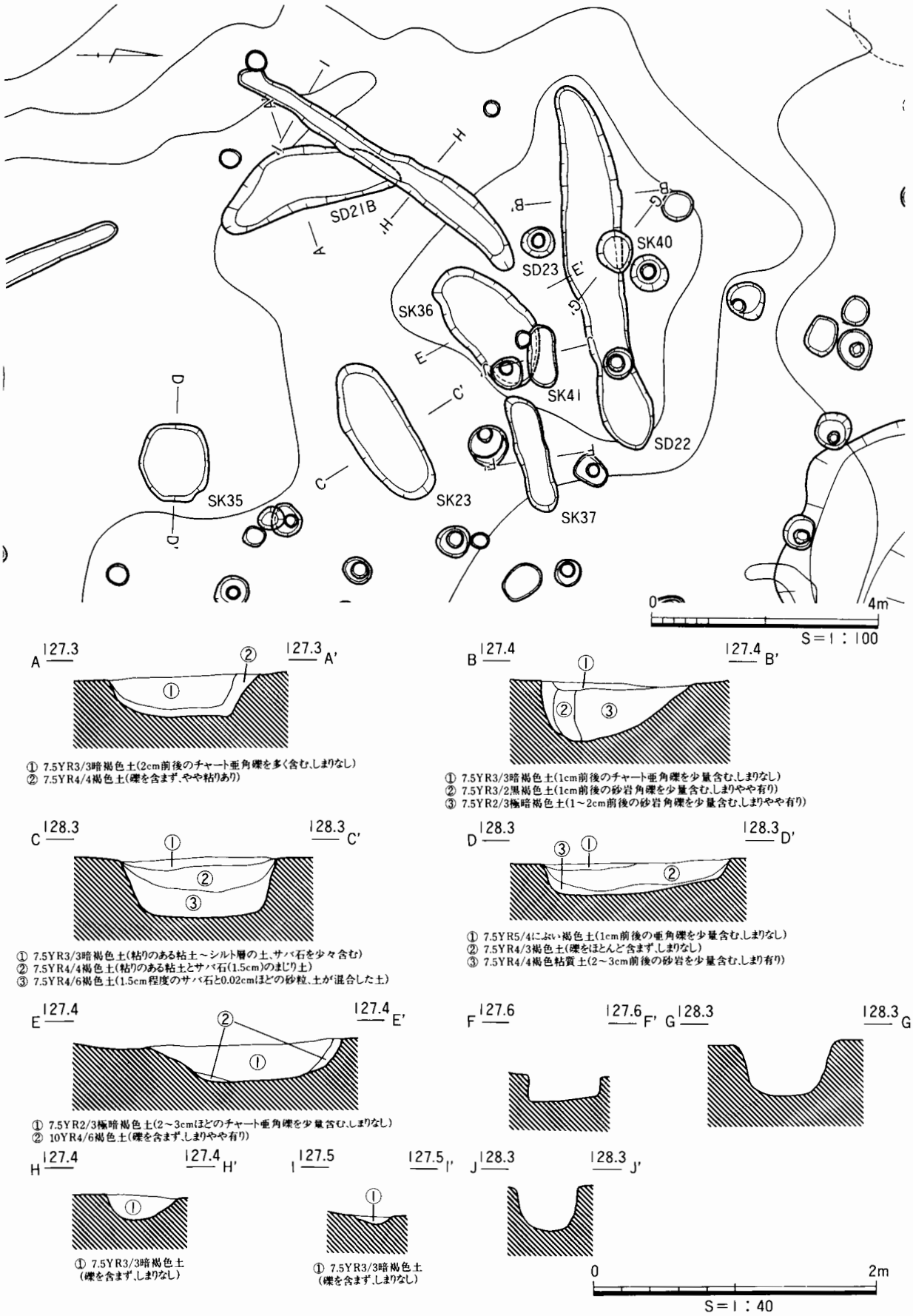


図106　SD21B・22・23、SK23・35・36・37・40・41 実測図

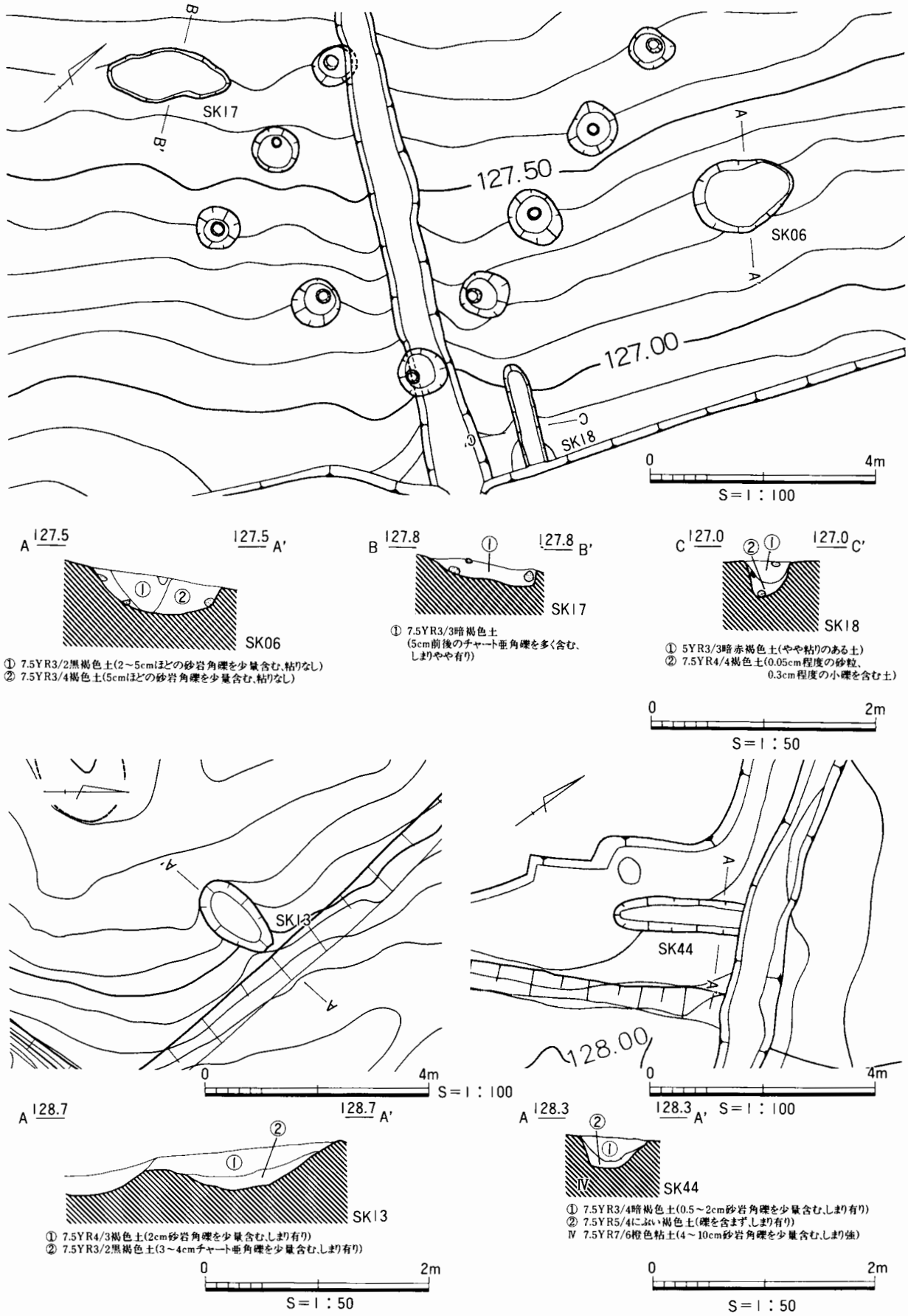


図107　SK06・13・17・18・44 実測図

ＳＫ16（図105）

調査区内中央Ｊ23グリッドに位置する。SX02内に存在する。長さ2.1m、幅1.6m、深さ0.5mである。主軸はＮ－40°－Ｅを示す。出土遺物はない。Ⅱ－１期に属する。

ＳＤ21Ｂ（図106）

調査区内M13グリッドに位置する。長さ3.2m、幅1.1m、深さ0.3mである。主軸はＮ－17°－Ｗを示す。出土遺物は189で、高杯の杯部である。SD23に切られる。Ⅱ－１期に属すると思われる。

ＳＤ22（図106）

調査区内Ｎ13グリッドに位置する。長さ6.5m、幅1.1m、深さ0.4mである。主軸はＮ－79°－Ｅを示す。出土遺物は土器片がある。ＳＫ40に切られる。Ⅱ－１期に属すると思われる。

ＳＤ23（図106）

調査区内M13グリッドに位置する。長さ5.9m、幅0.7m、深さ0.2mである。主軸はＮ－33°－Ｅを示す。出土遺物は土器片がある。SD21を切る。Ⅱ－１期に属すると思われる。

ＳＫ23（図106）

調査区内Ｎ13グリッドに位置する。長さ2.7m、幅1.1m、深さ0.4mである。主軸はＮ－55°－Ｅを示す。出土遺物は土器片がある。Ⅱ－１期に属すると思われる。

ＳＫ35（図106）

調査区内Ｎ14グリッドに位置する。長さ1.4m、幅1.3m、深さ0.2mである。主軸はＮ－89°－Ｗを示す。出土遺物は土器片がある。Ⅱ－１期に属すると思われる。

ＳＫ36（図106）

調査区内Ｎ12グリッドに位置する。長さ2.5m、幅1.3m、深さ0.2mである。主軸はＮ－53°－Ｅを示す。出土遺物は土器片がある。ＳＫ41に切られる。Ⅱ－１期に属すると思われる。

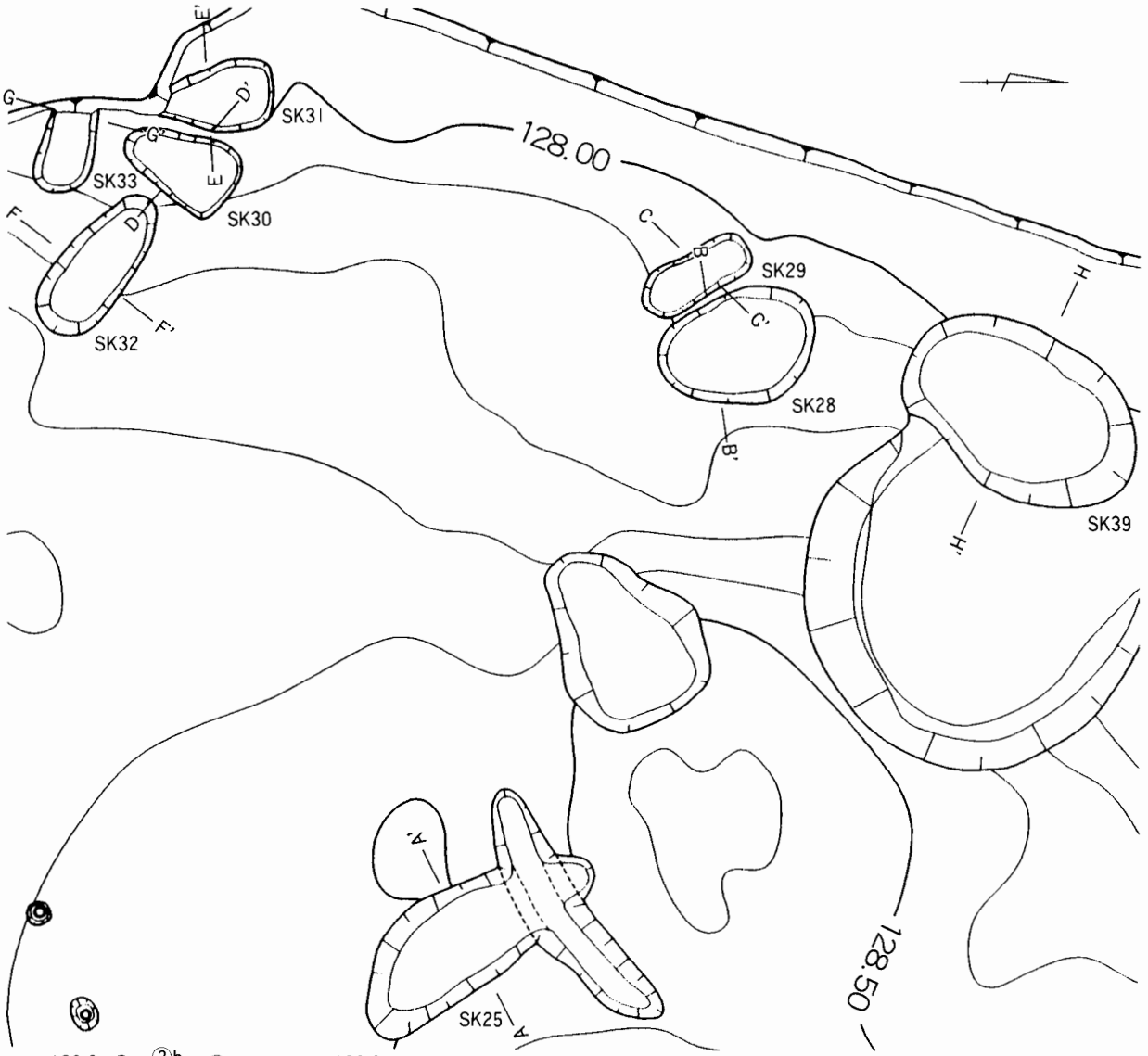
ＳＫ37（図106）

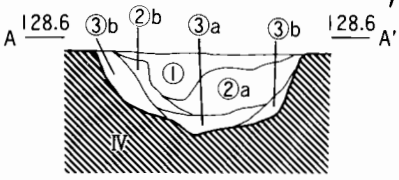
調査区内Ｎ12グリッドに位置する。長さ2.2m、幅0.6m、深さ0.2mである。主軸はＮ－68°－Ｅを示す。出土遺物は土器片がある。ＳＫ41に切られる。Ⅱ－１期に属すると思われる。

ＳＫ40（図106）

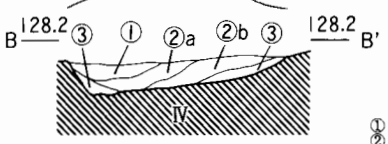
調査区内Ｎ12グリッドに位置する。長さ0.8m、幅0.7m、深さ0.4mである。主軸はＮ－75°－Ｅを示す。出土遺物は土器片がある。SD22を切る。Ⅱ－１期に属すると思われる。

ＳＫ41（図106）

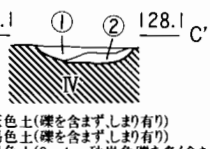




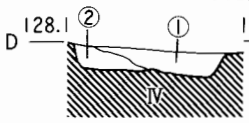
① 7.5YR5/3にぶい褐色土(礫を含まず,しまり有り)
②a 7.5YR3/2黒褐色土(礫を含まず,しまり有り)
②b 7.5YR4/4褐色粘質土(礫を含まず,しまり有り)
③a 7.5YR4/6褐色粘質土(3～4cmチャート角礫を少量含む,しまり有り)
③b 7.5YR4/1褐灰色土(0.5～2cm砂岩角礫を多く含む,しまりなし)
Ⅳ 7.5YR5/6明褐色粘質土(2～4cm砂岩角礫を含む,しまり強)



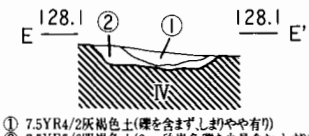
① 7.5YR5/6明褐色土(礫を含まず,しまりなし)
②a 7.5YR3/1黒褐色土(礫を含まず,しまり有り)
②b 7.5YR4/4褐色土(礫を含まず,しまり有り)
③ 7.5YR5/6明褐色土(2～3cm砂岩角礫を少量含む,しまり有り)
Ⅳ 7.5YR5/8明褐色土(2～4cm砂岩角礫を多く含む,しまり強)



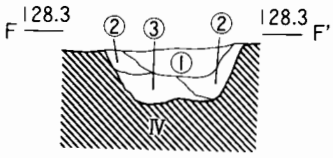
① 7.5YR4/1褐灰色土(礫を含まず,しまり有り)
② 7.5YR5/6明褐色土(礫を含まず,しまり有り)
Ⅳ 7.5YR5/8明褐色土(2～4cm砂岩角礫を多く含む,しまり強)



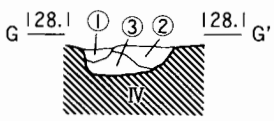
① 7.5YR5/4にぶい褐色土(0.5～3cm砂岩角礫を多く含む,しまりなし)
② 7.5YR6/6橙色土(礫を含まず,しまりやや有り)
Ⅳ 7.5YR5/8明褐色土(2～4cm砂岩角礫を多く含む,しまり強)



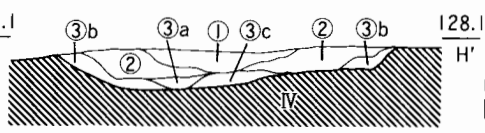
① 7.5YR4/2灰褐色土(礫を含まず,しまりやや有り)
② 7.5YR5/6明褐色土(2cm砂岩角礫を少量含む,しまり有り)
Ⅳ 7.5YR5/8明褐色土(2～4cm砂岩角礫を多く含む,しまり強)



① 7.5YR3/2黒褐色土(礫を含まず,しまりやや有り)
② 7.5YR5/4にぶい褐色土(礫を含まず,しまり有り)
③ 7.5YR7/4にぶい橙色粘土(礫を含まず,しまり有り)
Ⅳ 7.5YR7/6橙色粘土(4～10cm砂岩角礫を少量含む,しまり強)



① 7.5YR3/1黒褐色土(礫を含まず,しまりやや有り)
② 7.5YR5/3にぶい褐色土(礫を含まず,しまりやや有り)
③ 7.5YR5/4にぶい橙色土(礫を含まず,しまり有り)
Ⅳ 7.5YR7/6橙色粘土(4～10cm砂岩角礫を少量含む,しまり強)



① 7.5YR5/4にぶい褐色土(礫を含まず,しまり有り)
② 7.5YR4/2灰褐色土(礫を含まず,しまり有り)
③a 7.5YR6/6橙色粘質土(礫を含まず,しまり有り)
③b 7.5YR5/6明褐色粘質土(礫を含まず,しまり有り)
③c 7.5YR7/6橙色土(1～2cm砂岩礫を多く含む,しまり有り)
Ⅳ 7.5YR7/6橙色土(2～5cm砂岩礫を多く含む,しまり強)

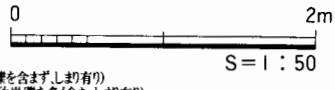


図108　SK25・28・29・30・31・32・33・39 実測図

調査区内N12グリッドに位置する。長さ1.1m、幅0.5m、深さ0.3mである。主軸はN－82°－Eを示す。出土遺物は土器片がある。ＳＫ36を切る。Ⅱ－1期に属すると思われる。

ＳＫ06（図107）

調査区内N20グリッドに位置する。長さ1.8m、幅1.3m、深さ0.3mである。主軸はN－29°－Eを示す。出土遺物は土器片がある。Ⅱ－1期に属すると思われる。

ＳＫ13（図107）

調査区内O16グリッドに位置する。長さ2.1m、幅1.6m、深さ0.5mである。主軸はN－41°－Eを示す。出土遺物は土器片がある。Ⅱ－1期に属すると思われる。

ＳＫ17（図107）

調査区内L21グリッドに位置する。長さ2.2m、幅0.9m、深さ0.2mである。主軸はN－48°－Eを示す。出土遺物は190で、高杯の脚部である。Ⅱ－1期に属すると思われる。

ＳＫ18（図107）

調査区内N21グリッドに位置する。長さ不明、幅0.5m、深さ0.3mである。出土遺物は土器片がある。Ⅱ－1期に属すると思われる。

ＳＫ44（図107）

調査区内F23グリッドに位置する。長さ不明、幅0.6m、深さ0.3mである。Ⅱ－1期に属すると思われる。

ＳＫ25（図108、図版24）

調査区内G19グリッドに位置する。長さ2.0m、幅0.8m、深さ0.5mである。N－37°－Wを示す。出土遺物は191で、赤彩を施した壷E類である。SX15の南東の周溝に切られる。Ⅱ－1期に属すると思われる。

ＳＫ28（図108、図版24）

調査区内F18グリッドに位置する。長さ1.2m、幅0.8m、深さ0.2mである。N－16°－Wを示す。出土遺物は土器片がある。SX15の南東の周溝に切られる。Ⅱ－1期に属すると思われる。

ＳＫ29（図108）

調査区内E19グリッドに位置する。長さ0.8m、幅0.4m、深さ0.1mである。N－27°－Wを示す。Ⅱ－1期に属すると思われる。

ＳＫ30（図108）

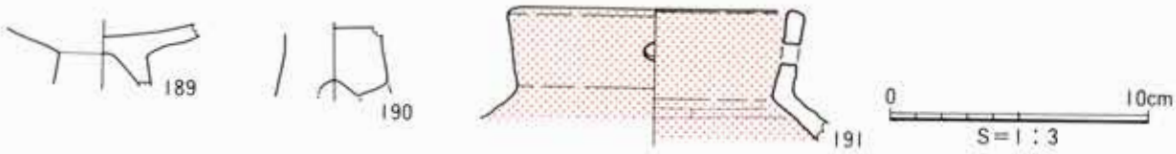


図109　SD21B、SK17・25 出土遺物実測図

調査区内E20グリッドに位置する。長さ0.8m、幅0.6m、深さ0.2mである。N－39°－Eを示す。出土遺物は土器片がある。Ⅱ－1期に属すると思われる。

SK31（図108）

調査区内E20グリッドに位置する。長さ不明、幅0.5m、深さ0.1mである。出土遺物は土器片がある。Ⅱ－1期に属すると思われる。

SK32（図108、図版24）

調査区内E20グリッドに位置する。長さ1.2m、幅0.5m、深さ0.2mである。N－52°－Eを示す。出土遺物は土器片がある。Ⅱ－1期に属すると思われる。

SK33（図108）

調査区内E20グリッドに位置する。長さ不明、幅0.4m、深さ0.2mである。出土遺物は土器片がある。Ⅱ－1期に属すると思われる。

SK39（図108）

調査区内F18グリッドに位置する。長さ1.8m、幅1.2m、深さ0.3mである。N－33°－Eを示す。出土遺物は土器片がある。SX15の南東の周溝に切られる。Ⅱ－1期に属すると思われる。

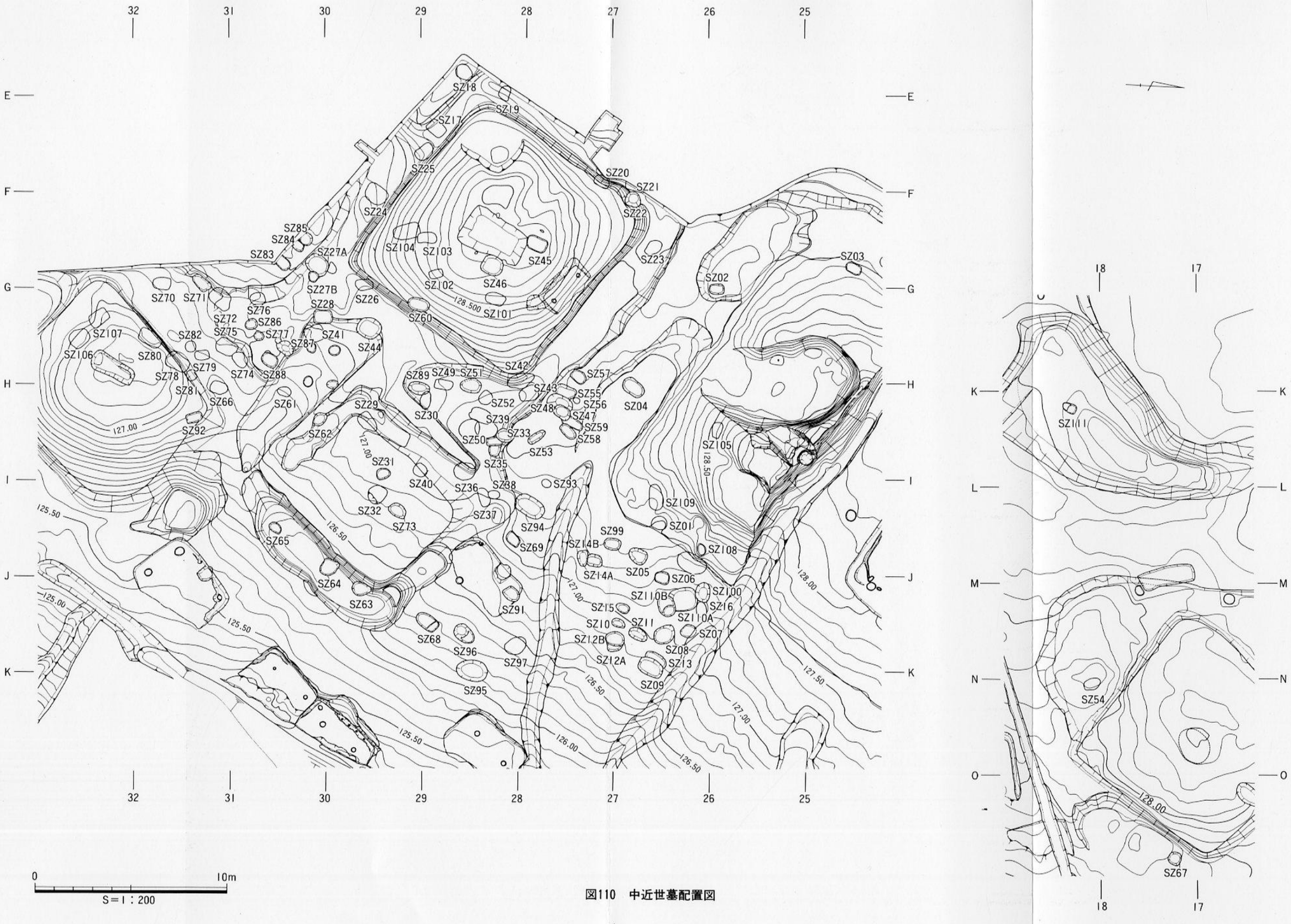


図110　中近世墓配置図

第4節　中近世墓と遺物

中近世墓は、Ⅳ期に属する遺構である。遺構数は、全部で113基ある。ほとんどが、調査区の南東斜面の方形周溝墓墳丘部および周溝部に存在する。人骨を含む遺構は、全体の1/3ほどある。その他、炭化物・遺物（土器・金属製品）を含む遺構などもある。（図110）

以下のように分類を行った。分類については、『東海の中世墓』（1994）を参考にした。

(1)　中近世墓の分類

まず、中近世墓を①集石墓と②土坑墓に分けた。それぞれについて、Ⅰ火葬墓とⅡ土葬墓に分け、それぞれを細分した。火葬墓・土葬墓についての区別は難しいが、次のようにした。

火葬墓……断面図の注記および写真に炭化物が明確に見られるもの。（炭化物が出土し、火葬されたと思われる人骨を伴う遺構も含む）

土葬墓……断面図の注記および写真に炭化物が見られないもの。人骨が出土した遺構の中で、人骨が火葬されていても炭化物を伴わなければ土葬墓とした。また、人骨の葬法が不明の遺構も含めた。

また、木製の棺を伴うものを③に、不明を④に、五輪塔を⑤とした。

①　集石墓

墓の上部施設構築に際し意識的に石を使用したもの。次の3つの基準に基づいて細分した。

1．葬法

Ⅰ類……火葬　　Ⅱ類……土葬

2．主体部の位置

A類……塚の内部　　B類……塚の下

＊　主体部の位置については、塚の下に蔵骨器を伴うものがなく、遺物や人骨がすべて土坑の中で出土しているので、主体部の位置はA類の塚の内部とした。遺構の中における石の位置が若干異なるものがあるが、すべてA類とした。上部構造としての石の位置は、掘方の上面だけに配置されているものと、上部から内部まで続くものもあったが、一括して分類した。

3．塚の区画

1類……区画石を使用

2類……区画石はないが全体的形状に明確な区画性あり

3類……区画性なく不整形

②　土坑墓

地面に土坑を掘り、遺体を埋葬するもの。土葬墓と同意に解釈される場合もあるが、今回は火葬であっても集石を持たず土坑を掘って埋納するものはこれに含めた。土坑墓は、大きく4つに分類される。なお、集石墓と同様にⅠ類を火葬、Ⅱ類を土葬とする。

Ⅱ－A類……葬法は土葬で、坑内、坑外ともに石を持たないもの。

Ⅱ－B類……坑内に石が入るもの。石の使われ方でさらに2種類に分かれる。

Ⅱ－B－1類……土坑床面および壁面に石を敷き詰めるもの。石棺的様相を呈する。

Ⅱ－Ｂ－２類……床面に石が置かれるもの。

Ⅰ－Ｃ類……火葬骨が埋納され、上部に集石が見られないもの。

Ⅰ－Ｄ類……土坑内で火葬され、そのまま埋められたもの。「火葬施設墓」と呼称されるもの。

③　木製の棺を伴うもの……鉄製の釘の出土をもって判断した。

木製の棺を伴う遺構は、遺構の平面形から方形（長方形も含む）と円形が存在する。

④　不明のもの

⑤　五輪塔を２基掲載した。いずれも包含層出土のため下部および周辺部に遺構を確認できなかった。

以上のように分類したが、金ヶ崎遺跡の中で実際に分類できたのは次の種類である。以下に代表的な図を掲載する。（①～③の代表例のみ掲載）

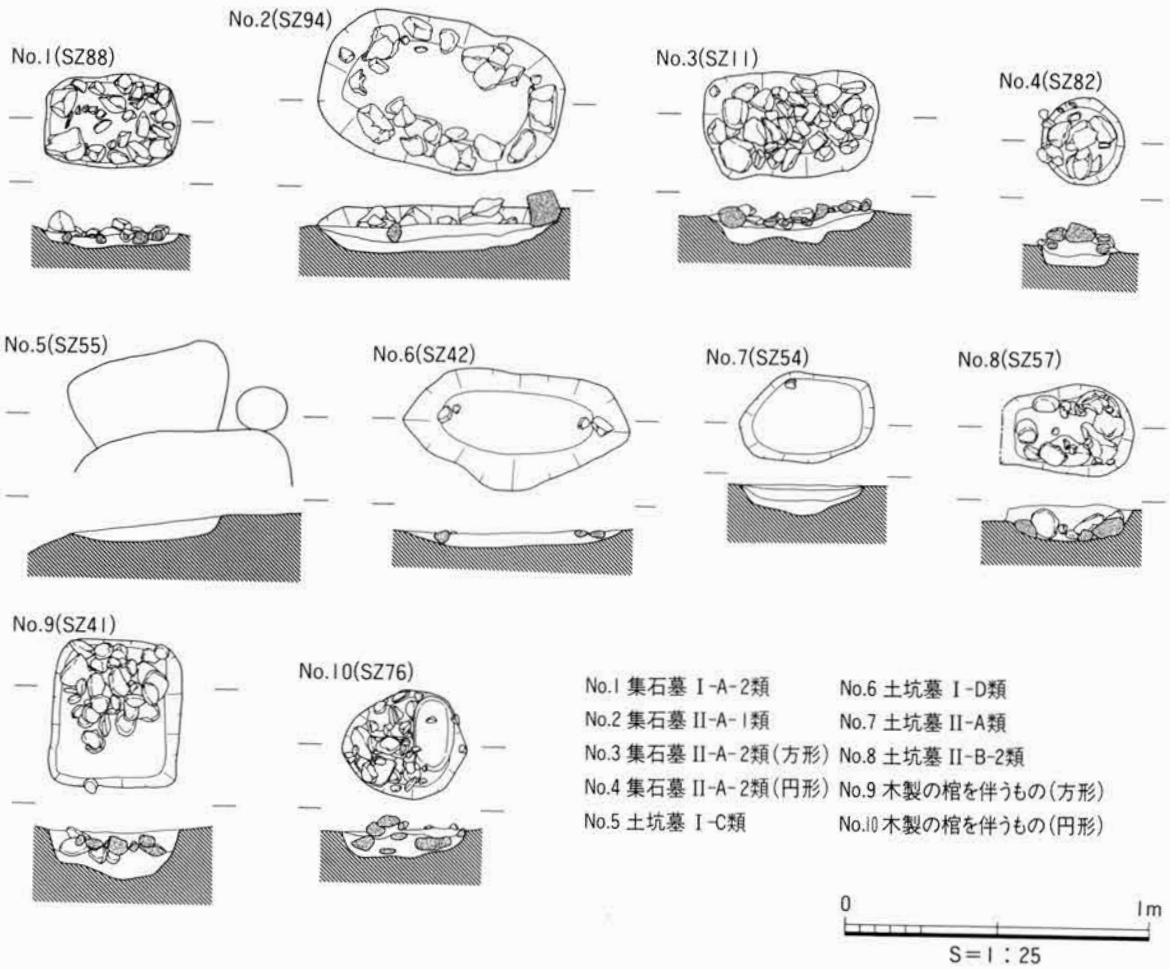
①　集石墓……Ⅰ－Ａ－２類　Ⅱ－Ａ－１類　Ⅱ－Ａ－２類

②　土坑墓……Ⅰ－Ｃ類　Ⅰ－Ｄ類　Ⅱ－Ａ類　Ⅱ－Ｂ－２類

③　木製の棺を伴うもの……方形　円形

④　不明

⑤　五輪塔



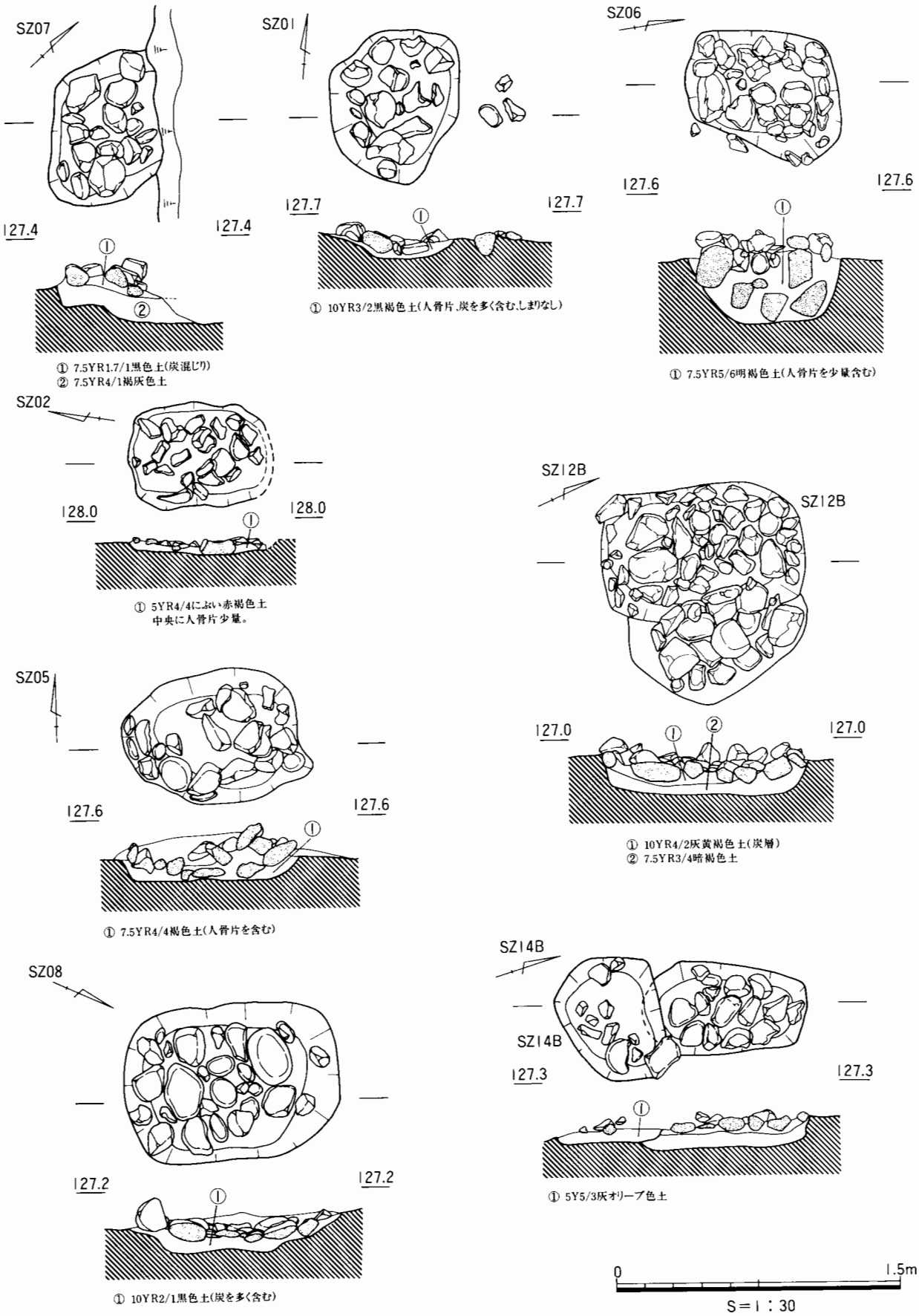


図111　集石墓(I-A-2) 実測図(1)

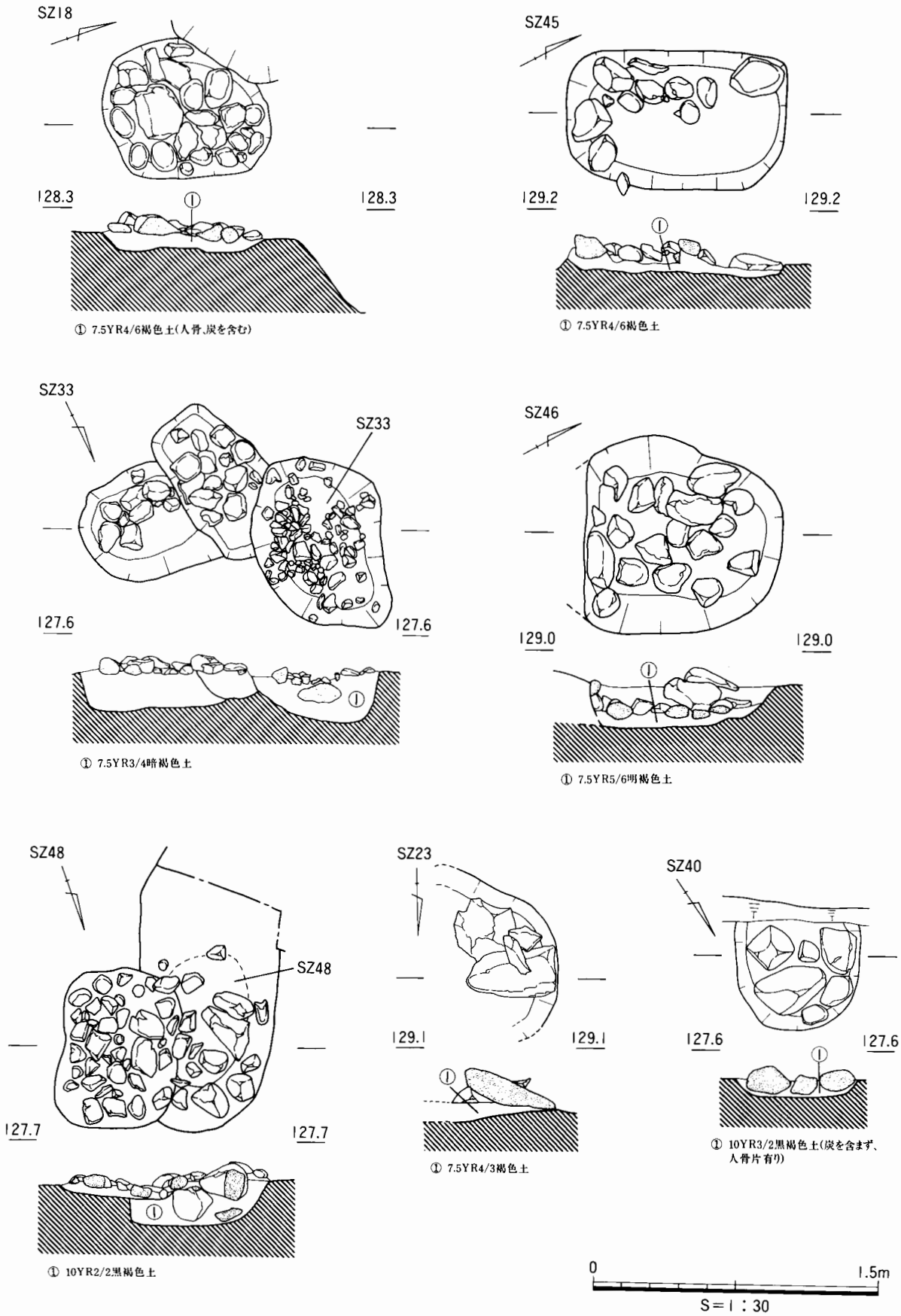


図112　集石墓(I-A-2) 実測図(2)

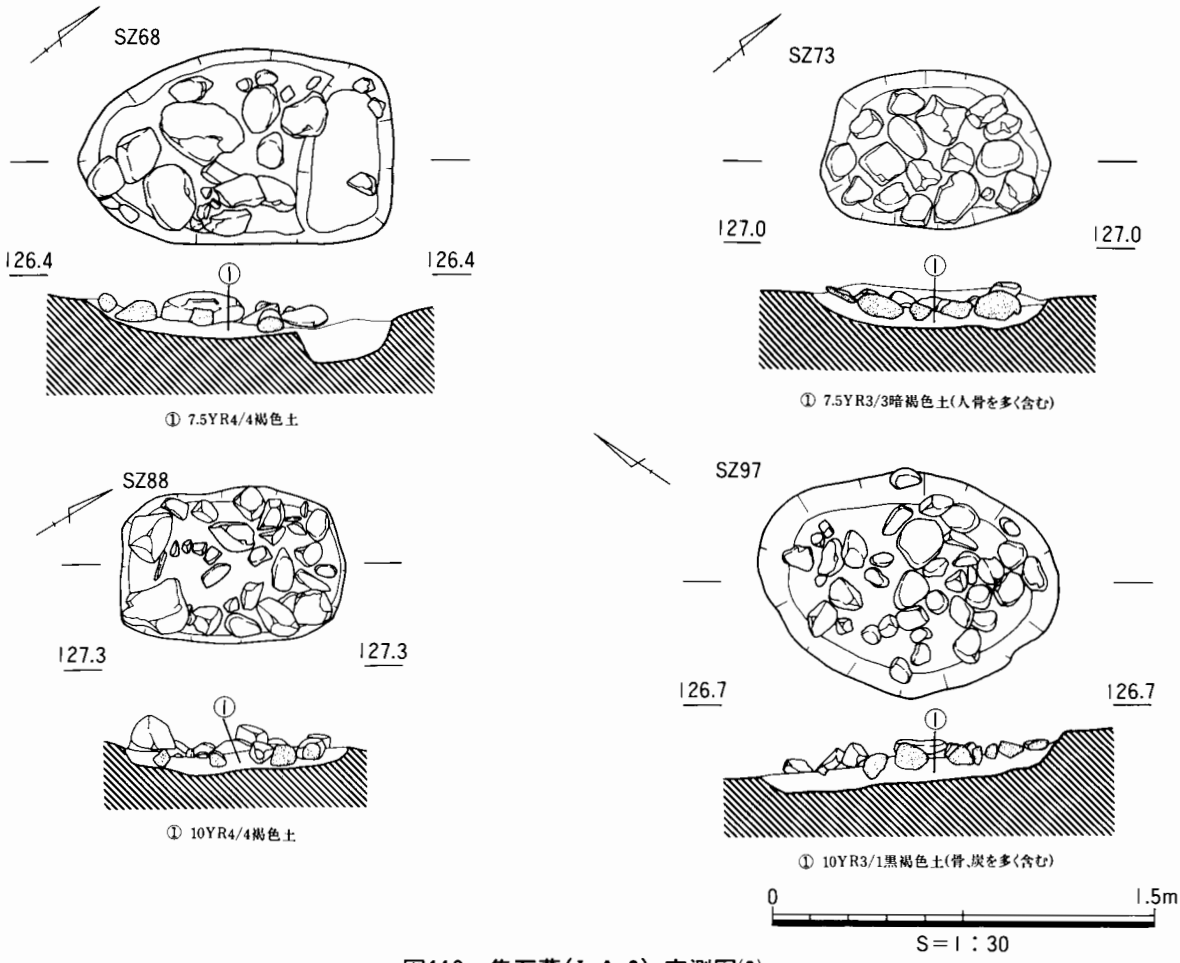


図113　集石墓(I-A-2) 実測図(3)

(2)　**集石墓Ⅰ－A－2類**（図111・112・113、図版24・25）

集石墓Ⅰ－A－2類は、火葬で、塚の内部に埋葬され、遺構全体に区画性のあるものである。次の遺構があたる。SZ01・02・05・06・07・08・12B・14B・18・23・33・40・45・48・68・73・88・97。人骨・炭化物以外の遺物を伴う遺構は、SZ18・33・68がある。SX18・68は、銅銭を2枚を伴う(323・324・341・342)。いずれも北宋銭である。SZ33は、山茶椀の皿を1枚伴う（197)。時期は不明である。(図127～129、図版・39・48・49)

所属時期

遺物を伴う遺構は、Ⅵ－1期である。

(3)　**集石墓Ⅱ－A－1類**（図114、図版24・25）

集石墓Ⅱ－A－1類は、土葬で、塚の内部に埋葬され、区画石を使用している。該当する遺構は、次のものである。SZ39・72・89・94・108・109。人骨・炭化物以外の遺物を伴う遺構はなかった。

所属時期

遺物の出土がないのでわからないが、Ⅵ期に属する。

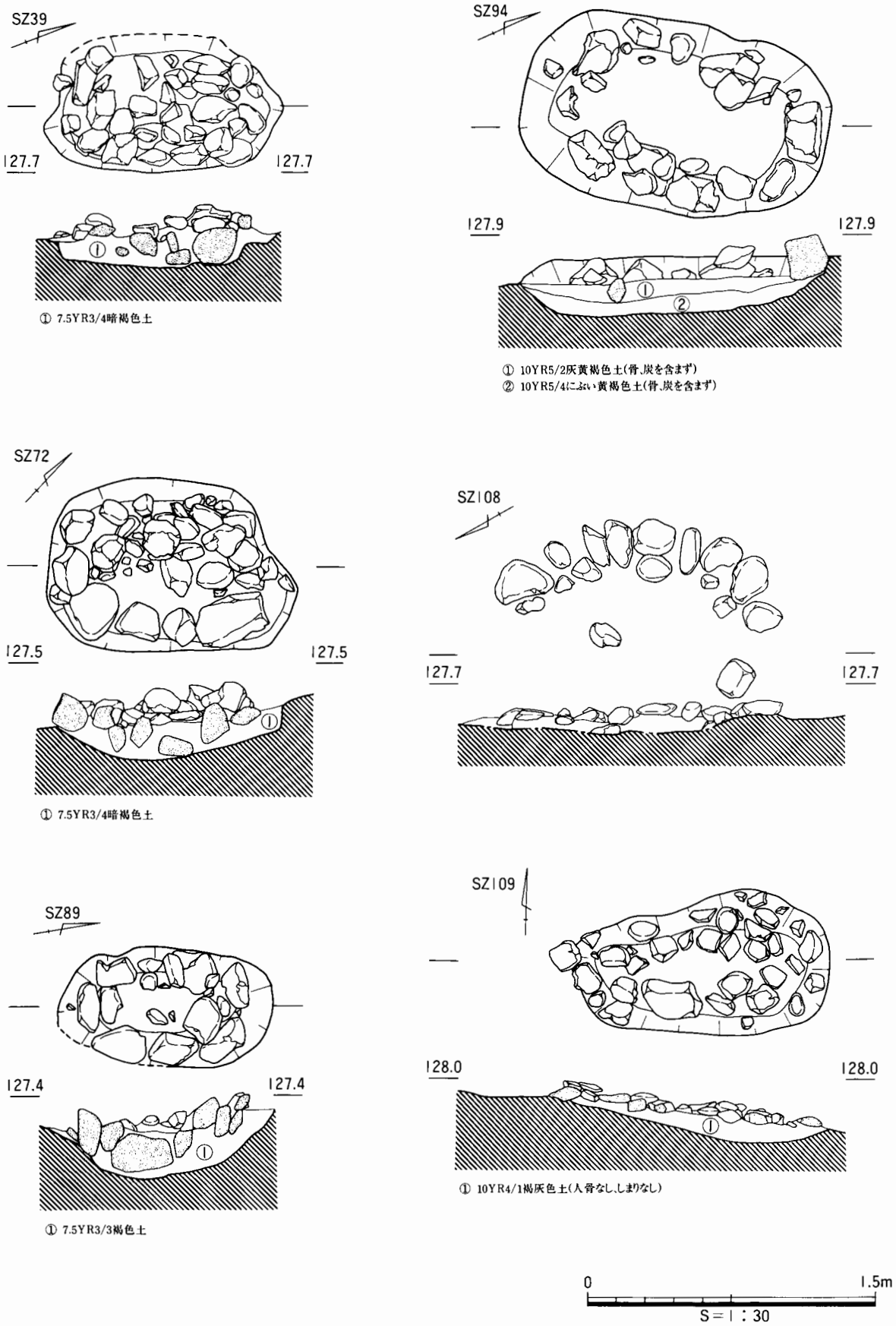


図114　集石墓(Ⅱ-A-1) 実測図(4)

(4)　**集石墓Ⅱ－A－2類**（図115～123、図版24・25）

集石墓Ⅱ－A－2類は、土葬で、塚の内部に埋葬され、遺構全体に区画性のあるものである。該当する遺構は、次のものである。なお、遺構平面形で長方形、楕円形と円形に分類した。SZ16・17・19・20・21・24・25・26・27A・28・29・30・31・34・35・37・38・43・47・49・50・51・53・58・59・60・62・63・64・65・66・69・70・71・74・75・78・79・80・83・84・87・91・92・93・95・96・100・102・104・105・106・110A・B・111（以上方形および楕円形）SZ22・27B・32・36・44・52・67・77・81・82・85・86（以上円形）。この中で人骨・炭化物以外の遺物を伴う遺構は、次のものである。SZ16・27A・B・32・60・62・67・110B。SZ16は、銅銭4枚が出土した。（319・322）そのうち2枚は寛永通宝である。SZ24は、山茶椀の椀を1点伴う。（193）生田2号窯式のものである。SZ27Aは、古瀬戸の壷の体部片を1点伴う。（194）SZ27Bは、陶器の片口を伴う。（195）SZ32は、明和1号窯式の山茶椀を1点伴う。（196）SZ60は、かわらけを3枚伴う。（198～200）『美濃の考古学』小野木編年のA2b類に属する。SZ62は、山茶椀の椀2点と皿4点を伴う。（201～206）大畑大洞4号窯式のものである。また、皿の底部外面には墨書が見られる。SZ67は、山茶椀の椀1点と皿3点を伴う。（207～210）明和1号窯式の椀である。SZ110Bは、山茶椀の椀2点を伴う。（211・212）白土原1号窯式のものである。（図127～210、図版39・40・41・48・49）

所属時期

ほとんどは、Ⅵ－1期に属するが、SZ27Bは、Ⅵ－2期に属する。

(5)　**土坑墓Ⅰ－C類**（図124、図版24・25）

土坑墓Ⅰ－C類は、火葬骨が埋納され上部に集石が見られないものである。該当する遺構は、SZ55のみである。遺物は出土していない。

所属時期

Ⅵ期に属する。

(6)　**土坑墓Ⅰ－D類**（図124、図版24・25）

土坑墓Ⅰ－D類は、土坑内で火葬され、そのまま埋められたものである。多少礫のあるものも、土坑墓とした。該当する遺構は、SZ04・42・99・101・103・107である。遺物が出土しているものは、SZ04のみである。SZ04は、山茶椀の皿を伴うが時期は不明である。（192）（図127、図版39）

所属時期

SZ04は、Ⅵ－1期に属するが、それ以外は、Ⅵ期である。

(7)　**土坑墓Ⅱ－A類**（図125、図版24・25）

土坑墓Ⅱ－A類は、土葬で坑内・外に石をもたないものである。該当遺構は、SZ54・61である。遺物は伴っていない。

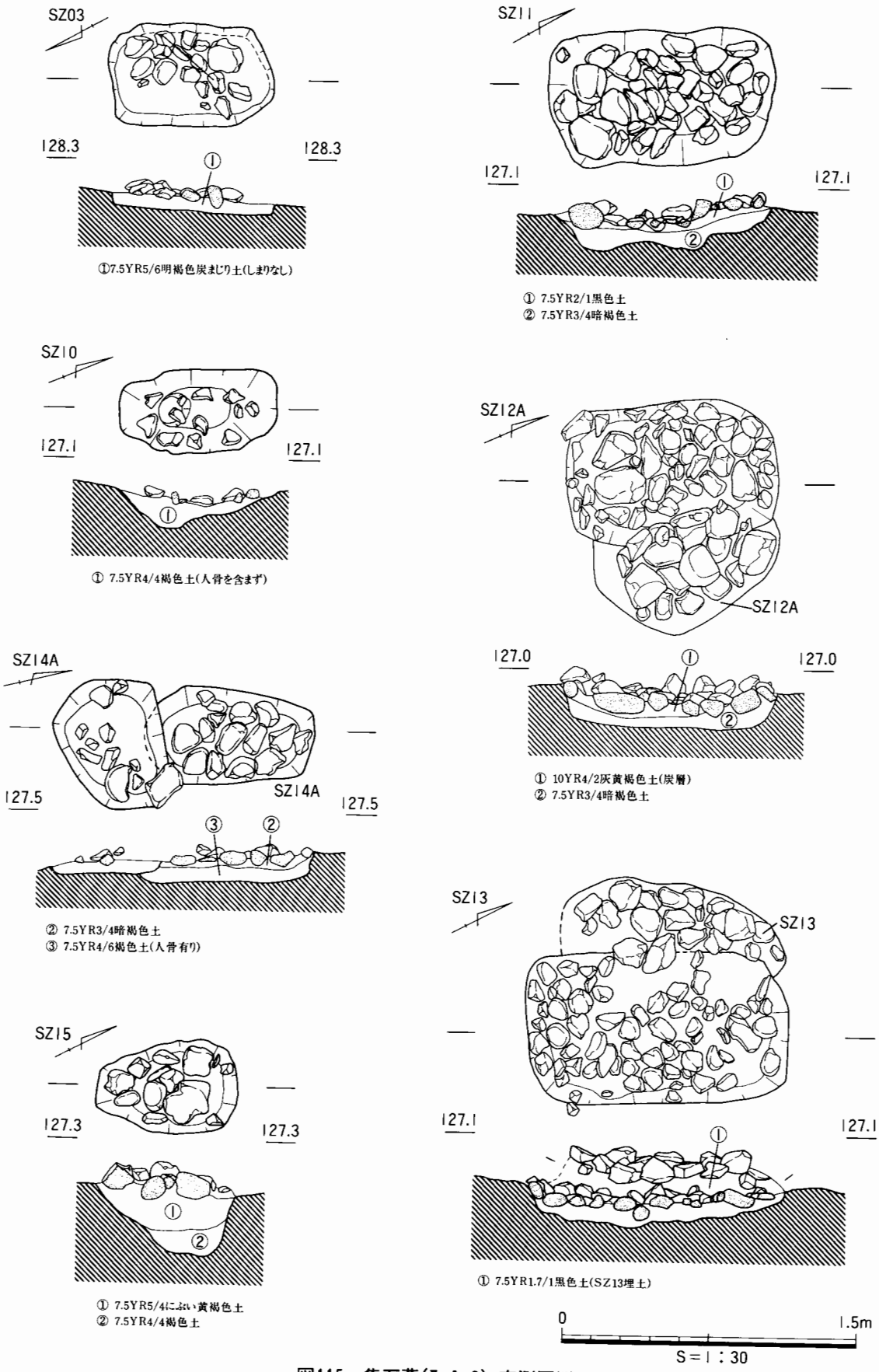


図115　集石墓(Ⅱ-A-2) 実測図(5)

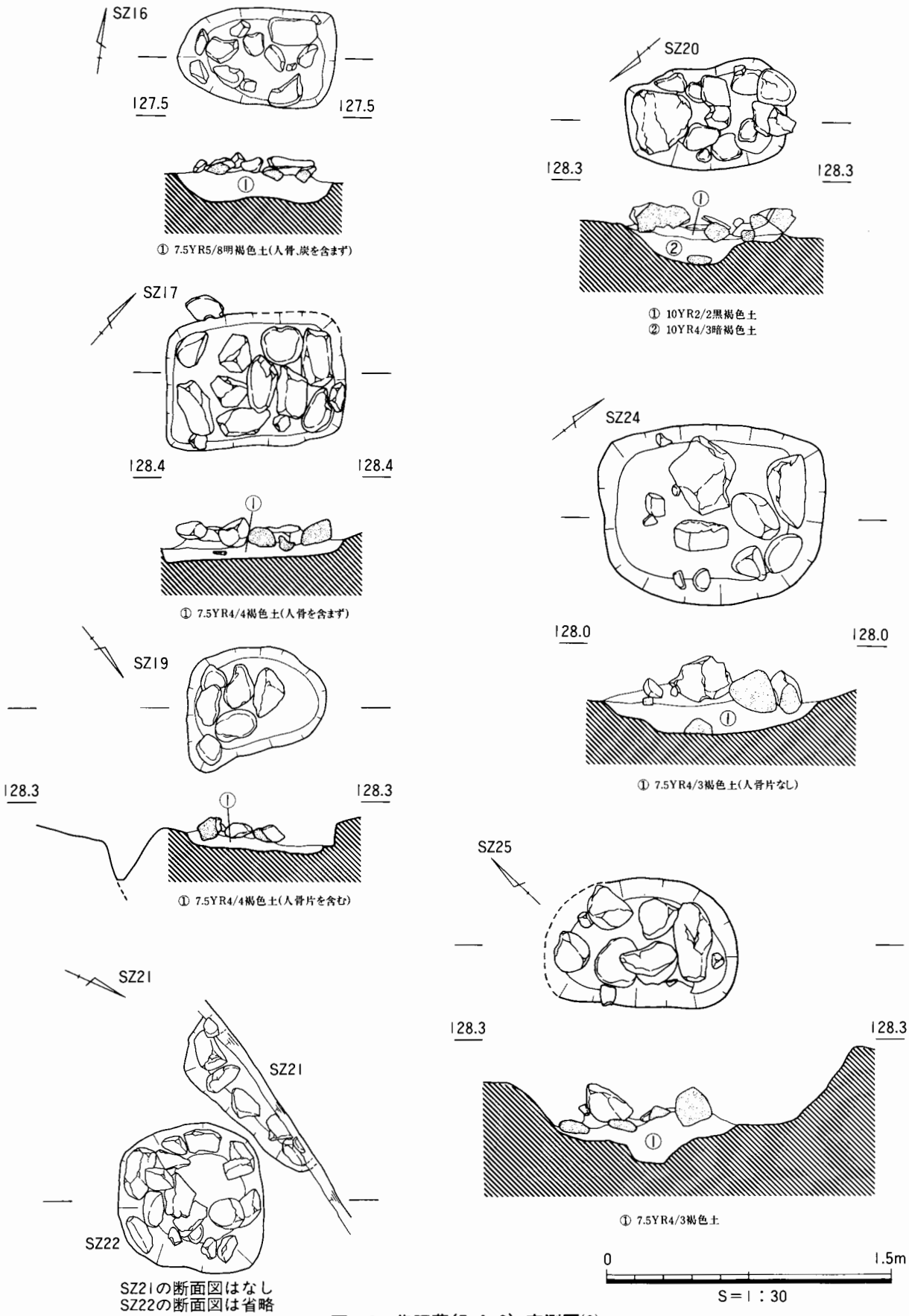


図116　集石墓(Ⅱ-A-2) 実測図(6)

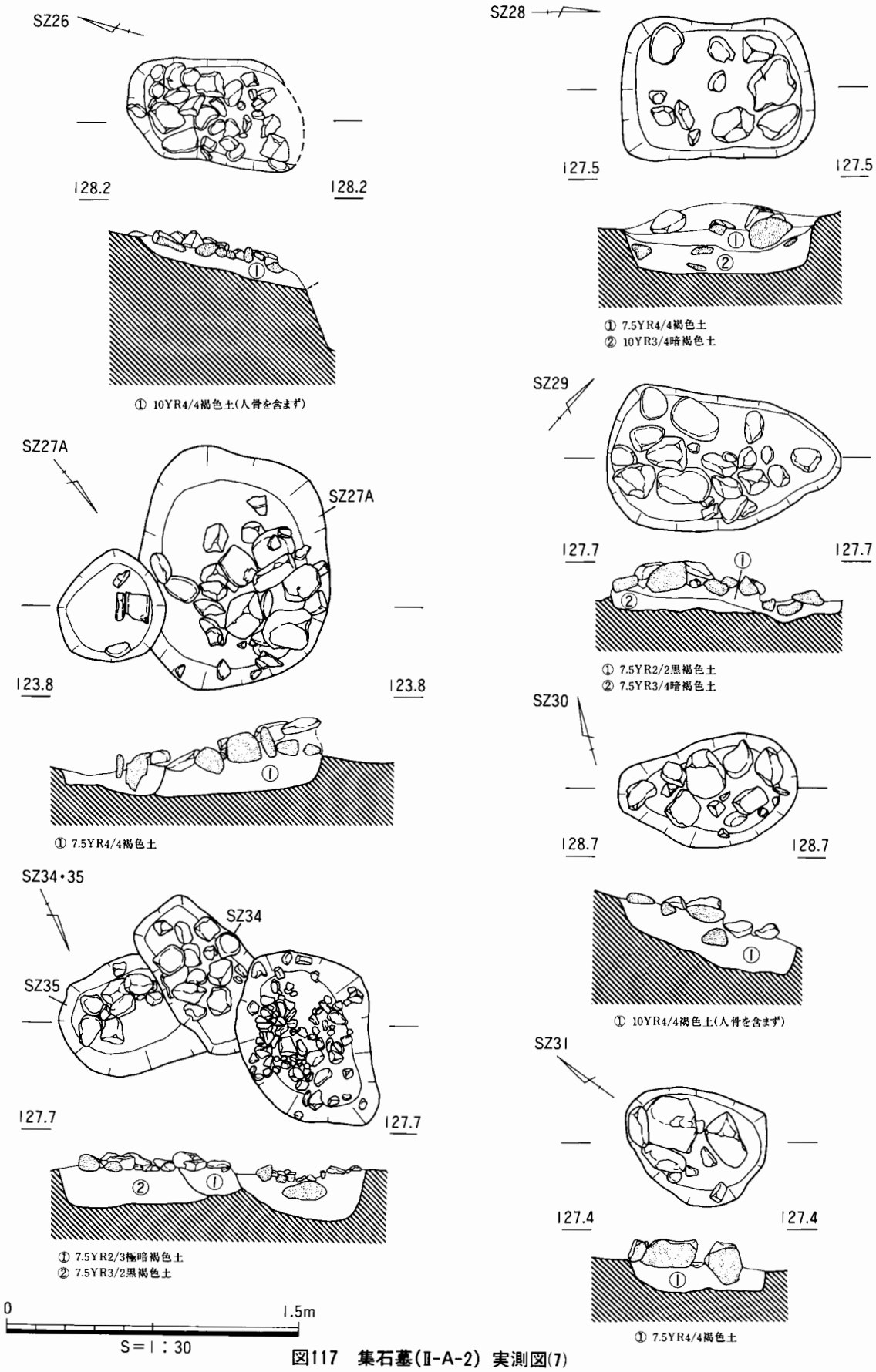


図117　集石墓(Ⅱ-A-2) 実測図(7)

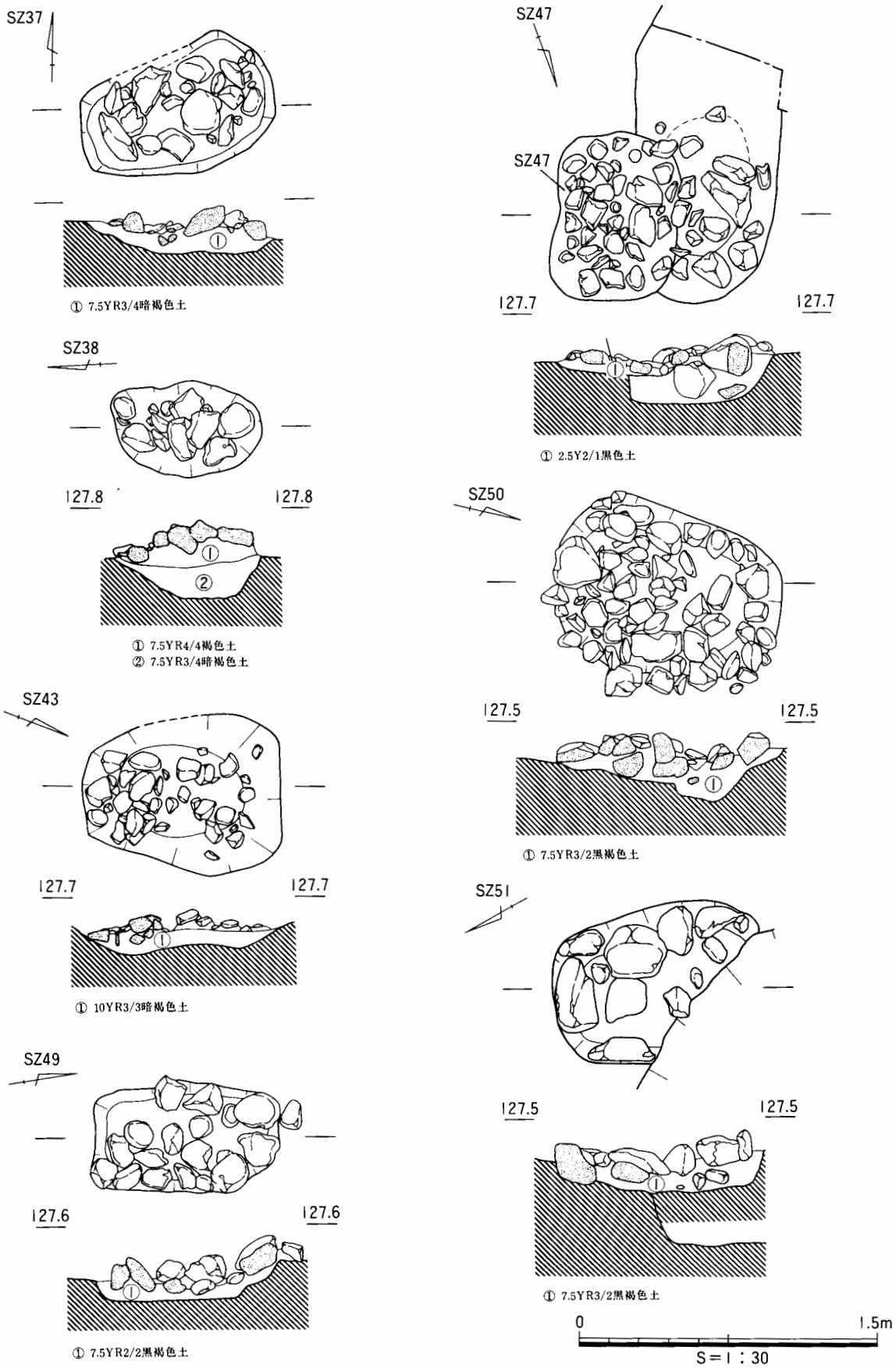


図118　集石墓(Ⅱ-A-2) 実測図(8)

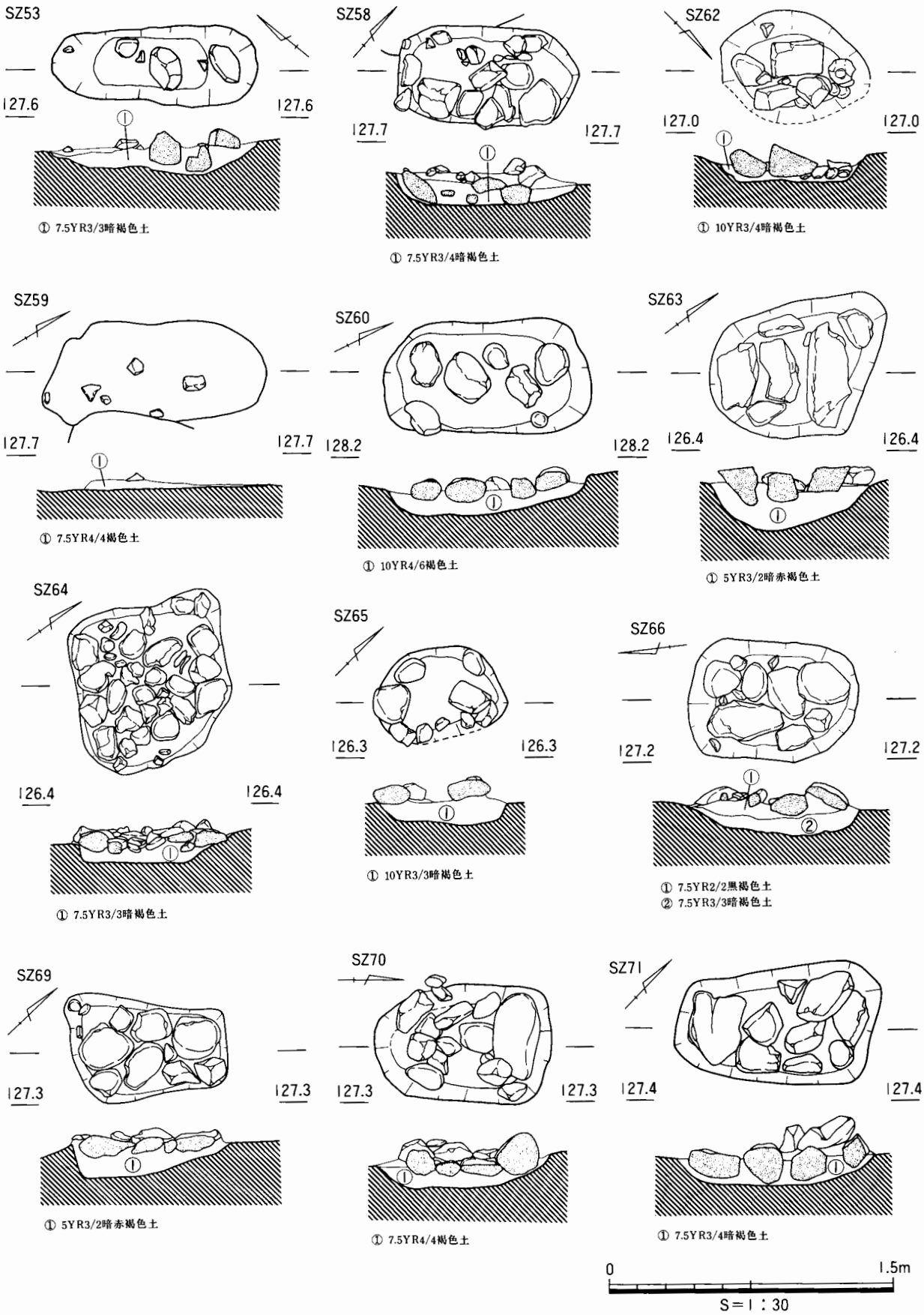


図119　集石墓(Ⅱ-A-2) 実測図(9)

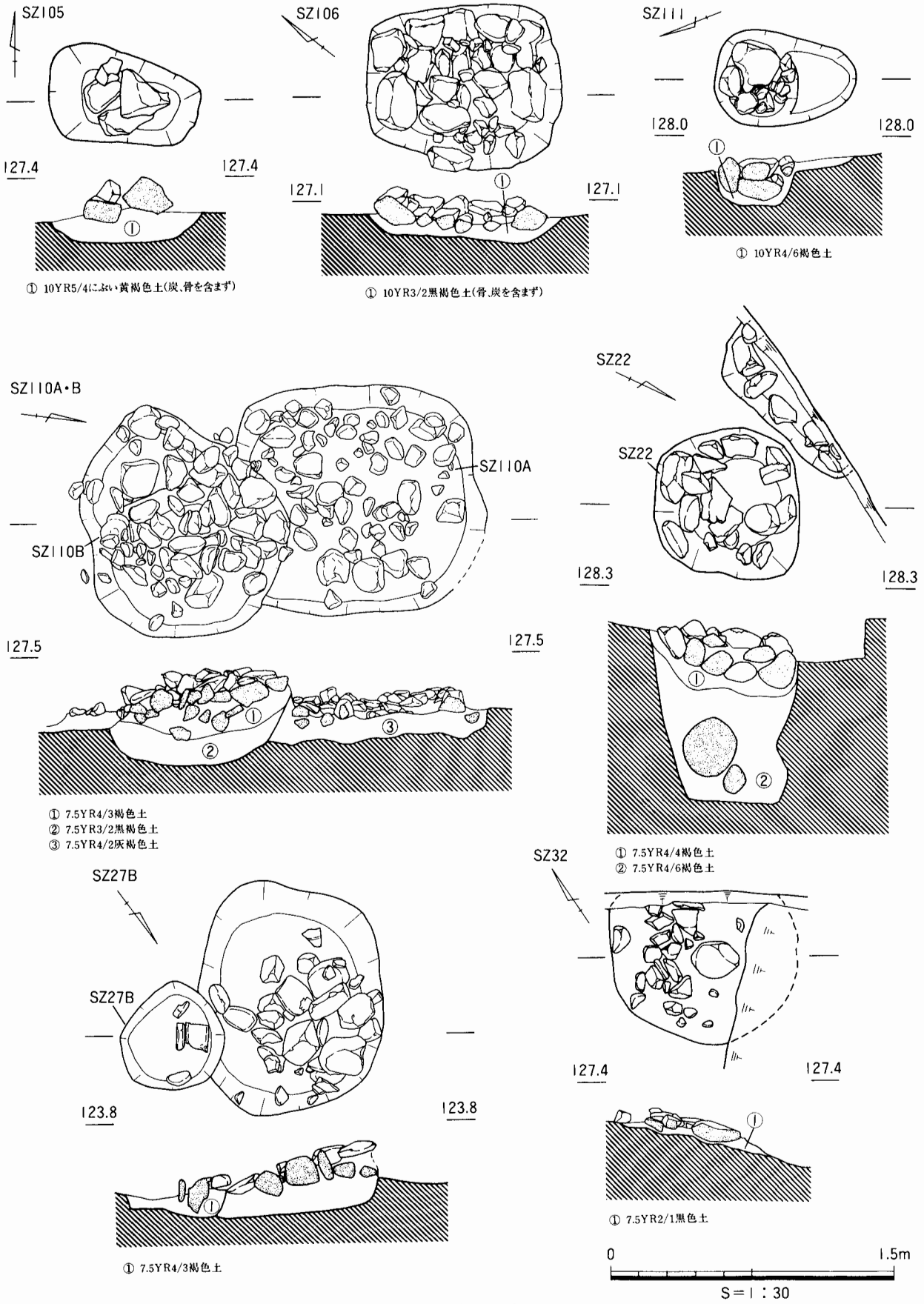


図122　集石墓(Ⅱ-A-2) 実測図(12)

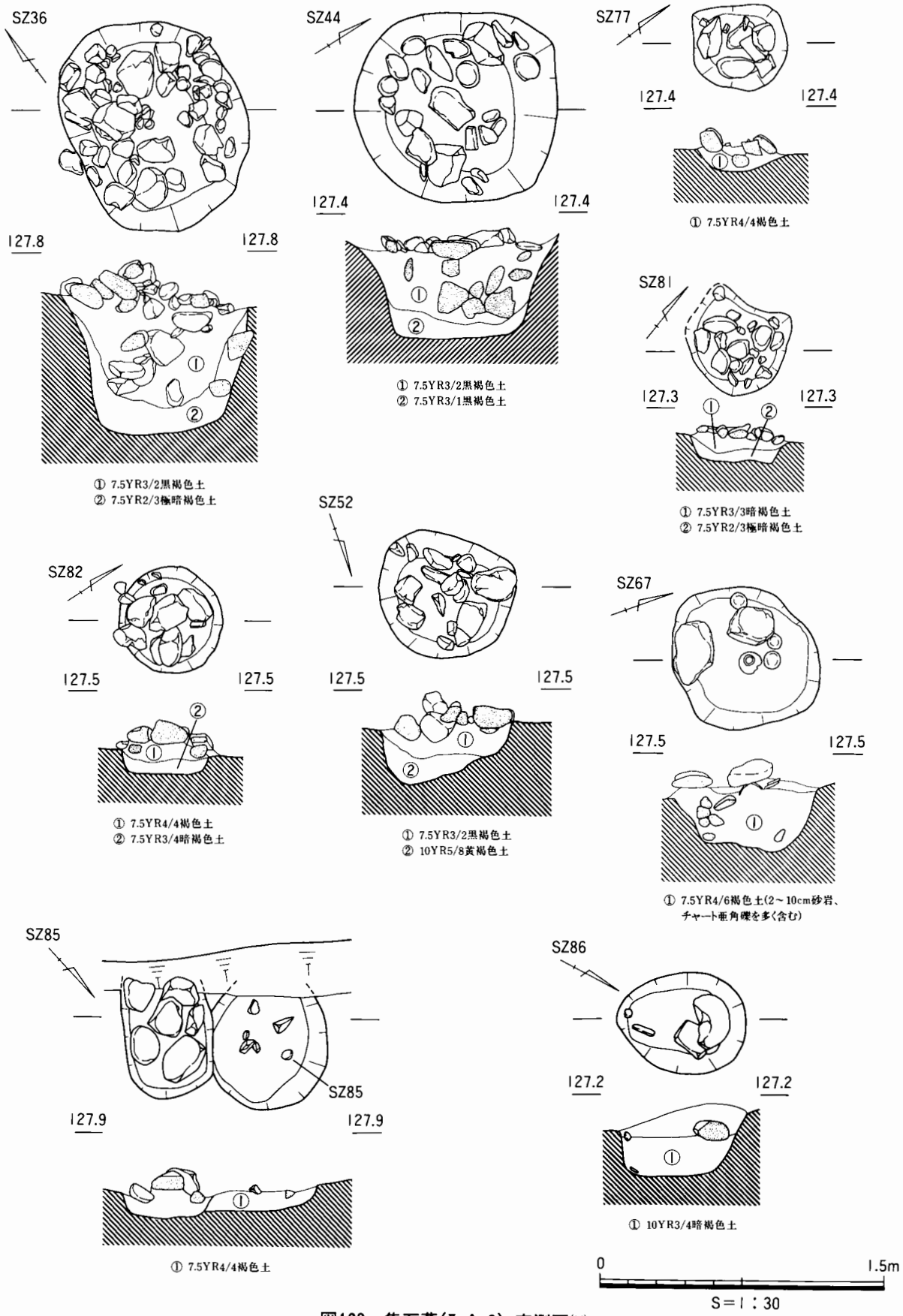


図123　集石墓(Ⅱ-A-2) 実測図(13)

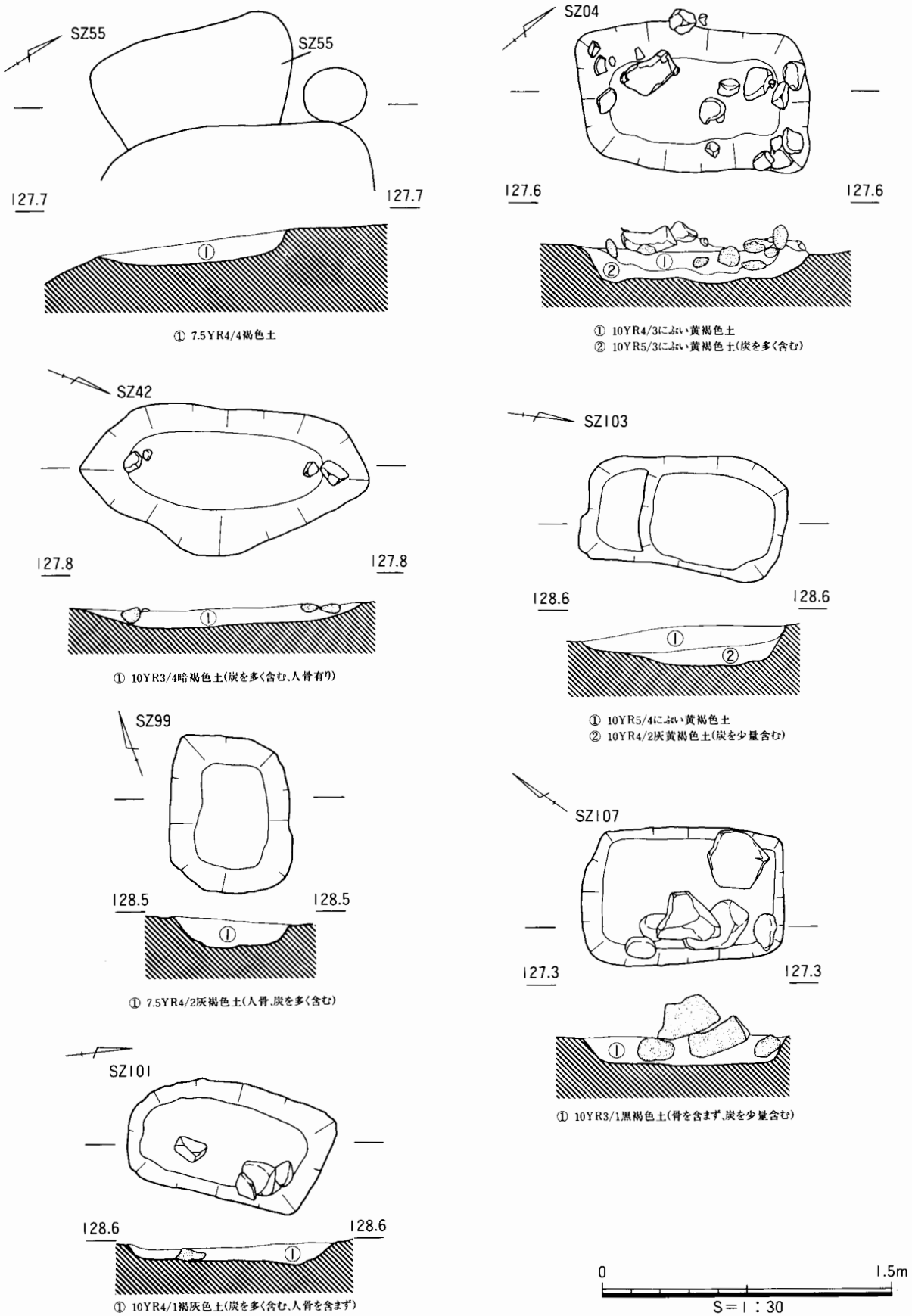


図124　土坑墓(I-C・I-D) 実測図(14)

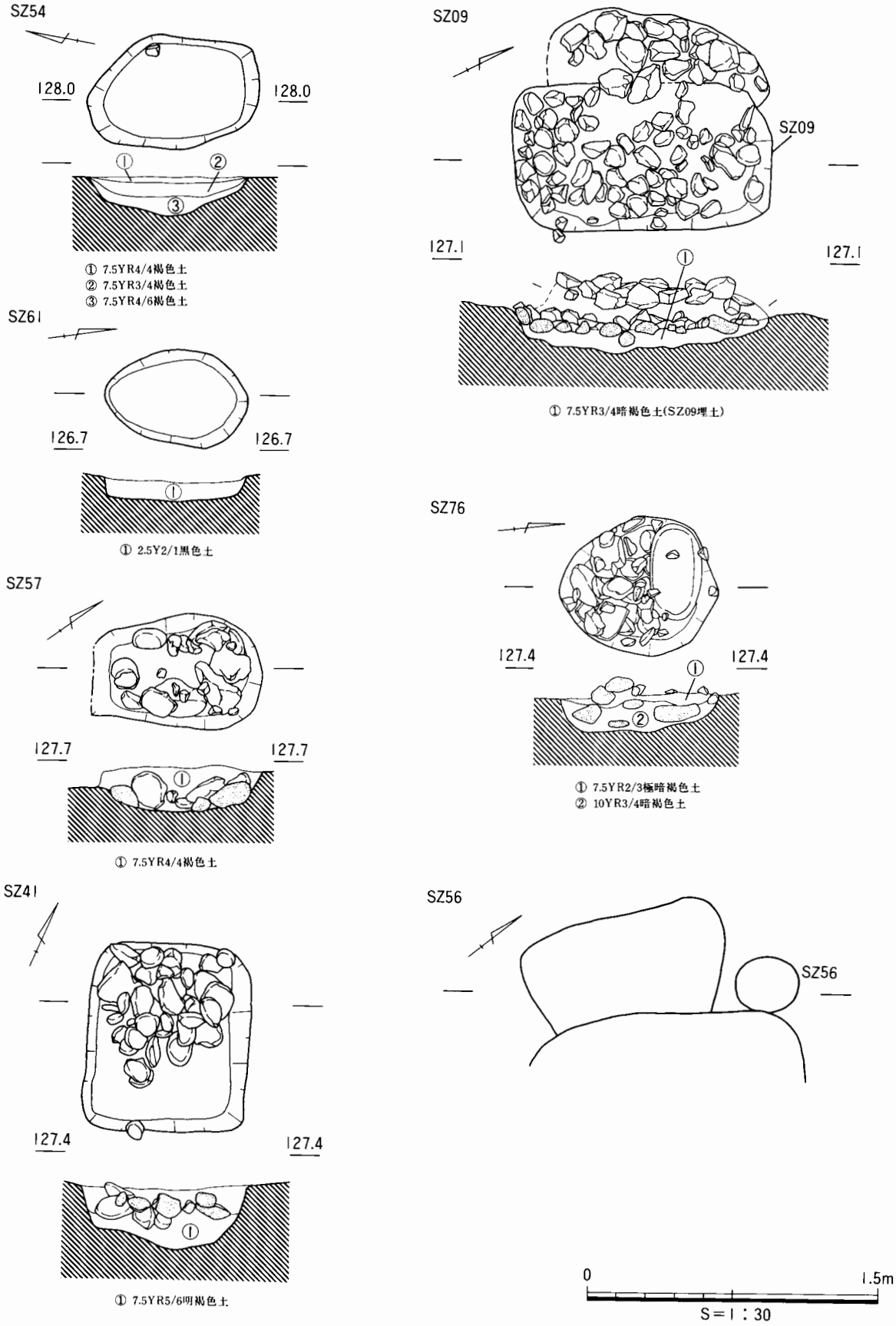


図125　土坑墓(Ⅱ-A・Ⅱ-B-2) 木製の棺を伴う実測図(15)

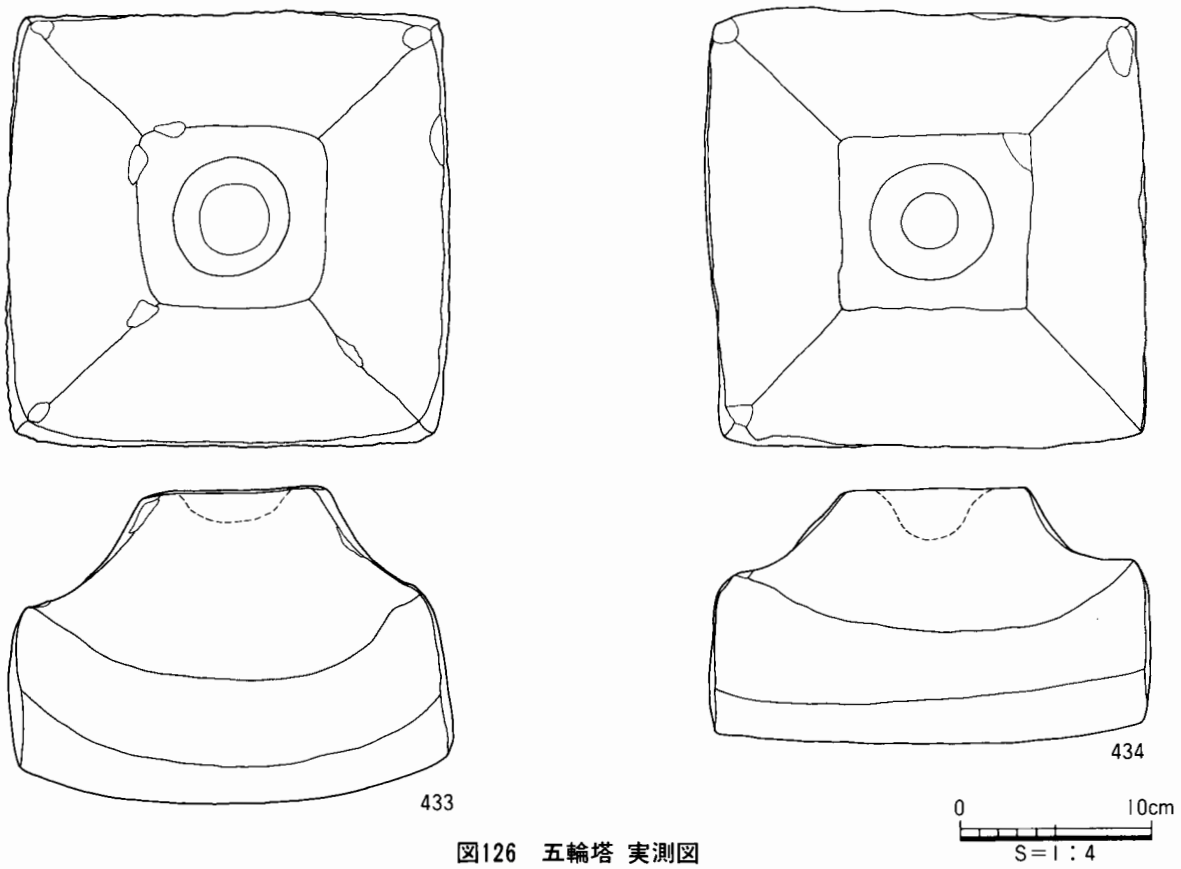


図126　五輪塔 実測図

所属時期

VI期に属する。

(8)　**土坑墓II－B－2類**（図125、図版24・25）

土坑墓II－B－2類は、土葬で、坑内に石が入り、その石が区画性を持つものである。該当遺構は、SZ57である。遺物は伴わない。

所属時期

VI期に属する。

(9)　**木製の棺を伴うもの**（図125、図版24・25）

木製の棺を伴うものは、SZ09・41・76である。いずれも木製の棺のくぎが出土している。（313～318・332～340・343～355）SZ09・41は方形、SZ76は円形である。分類では、集石墓II－A－2類に属すると思われる。（図127～129、図版48）

所属時期

VI期に属する。

(10)　**不明のもの**（図125）

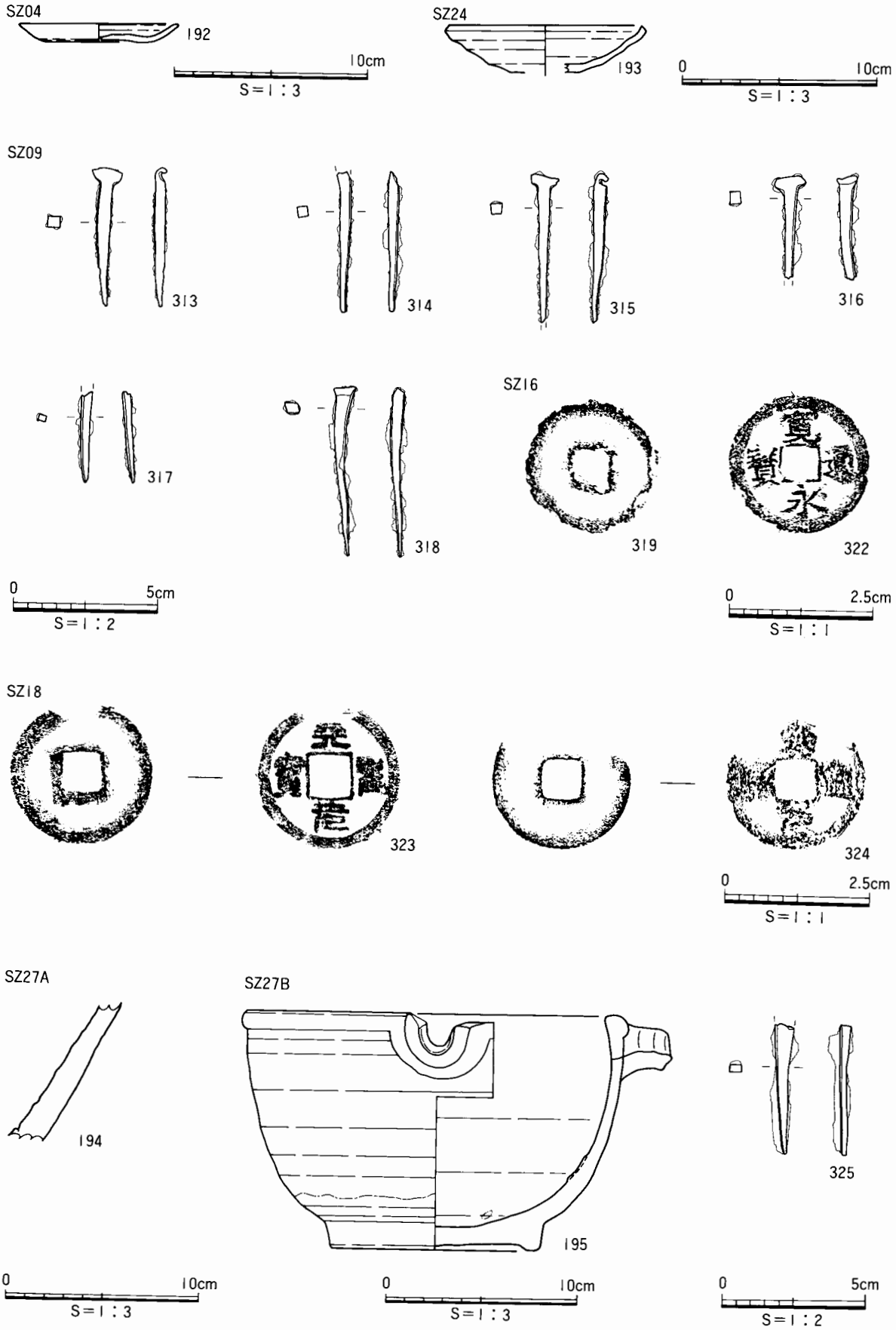


図127　SZ出土遺物実測図(1)

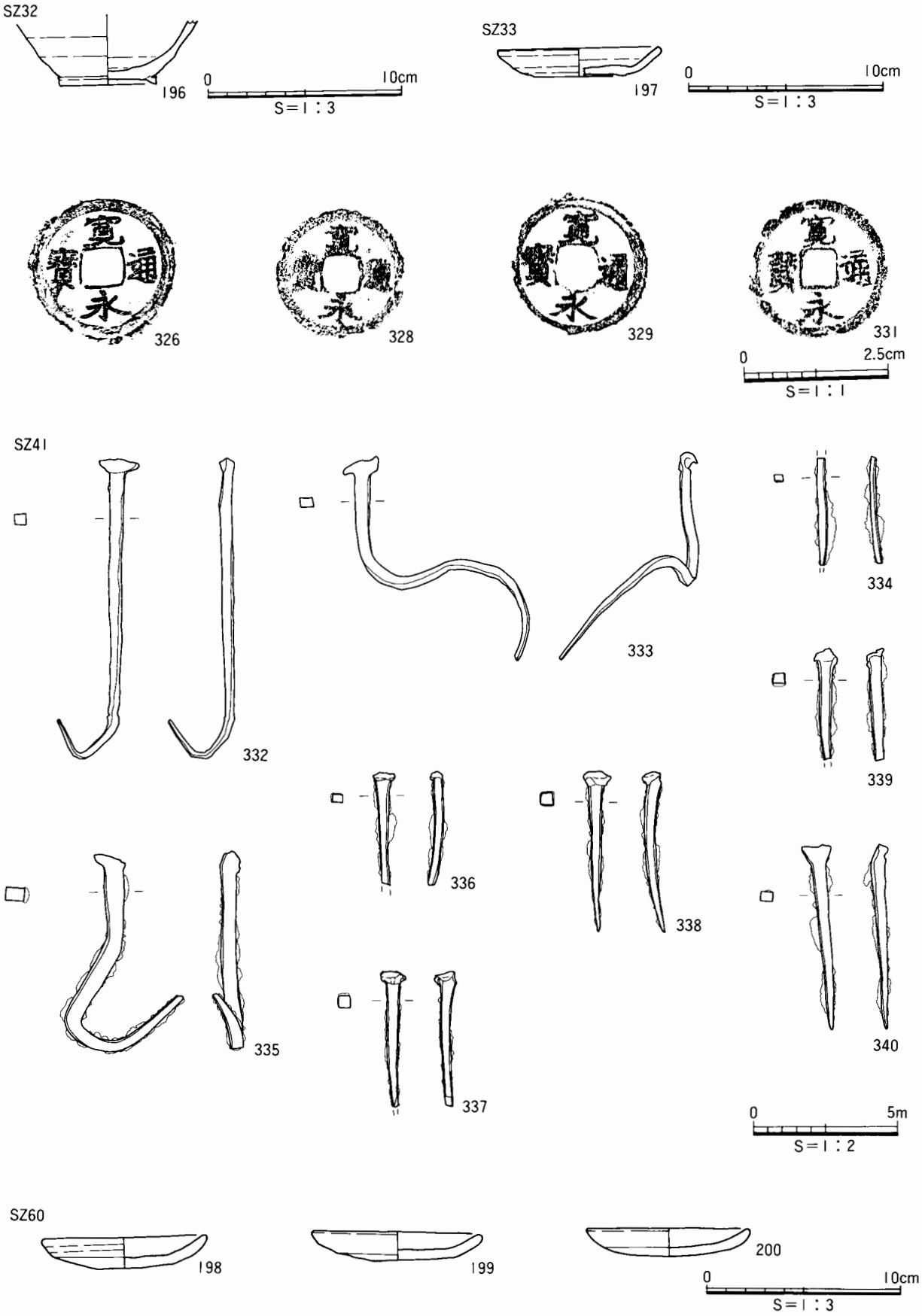


図128　SZ出土遺物実測図(2)

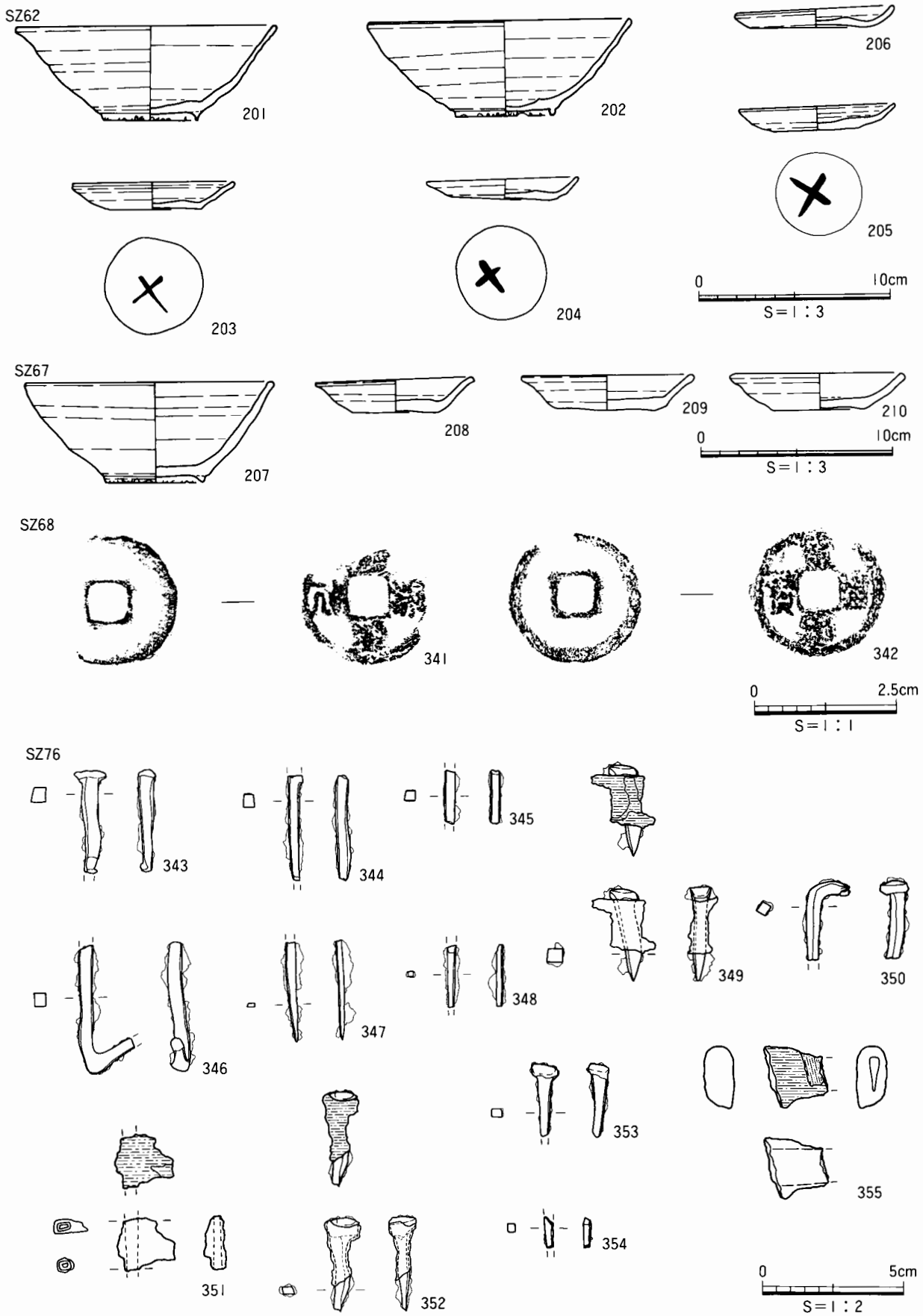


図129　SZ出土遺物実測図(3)

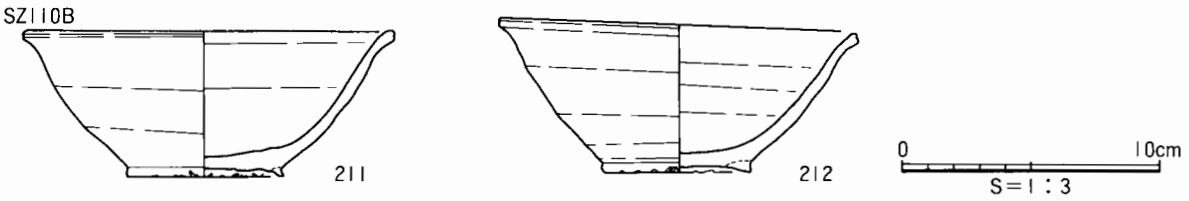


図130　SZ出土遺物実測図(4)

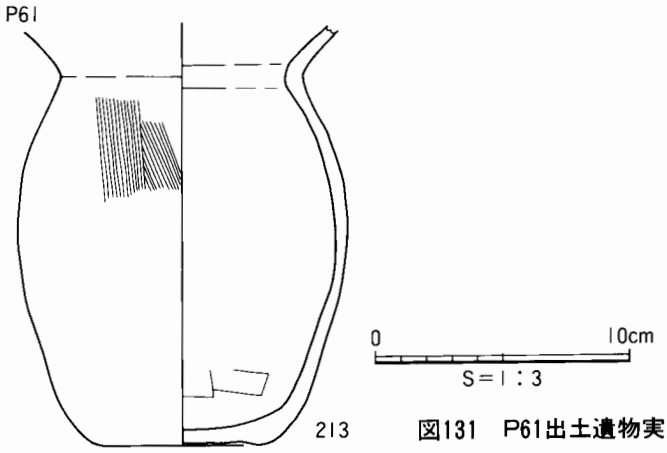


図131　P61出土遺物実測図

(11)　**五輪塔**（図126、図版47）

五輪塔が２点出土している。433・434であるが、いずれも花崗岩のもので火輪の部分である。

第５節　その他の遺構と遺物

(1)　柱穴の遺構と遺物

柱穴は、01から178まであるが、多くは掘立柱建物跡に伴うものであり、その遺物は前に紹介した。柱穴単独で遺物が出土しているものは、Ｊ21グリッドにあるＰ61のみである。その遺物は、土師器の小型の平底の甕である。（図131、図版41）

所属時期（Ｐ61）

Ⅳ期に属するものと思われる。

第５章　金ヶ崎遺跡包含層出土遺物（図134～144、図版42～45・47・49）

金ヶ崎遺跡包含層遺物は、次のような種類と時期がある。

(1)　須恵器……Ⅳ期（７世紀後半）　　(2)　灰釉陶器……Ｖ期

(3)　山茶椀……Ⅵ－１期　　(4)　陶器類その他……Ⅵ－１・２期

(5)　古銭……Ⅵ－１期　　(6)　石器……不明

詳しくは、遺物観察表を参考にされたい。

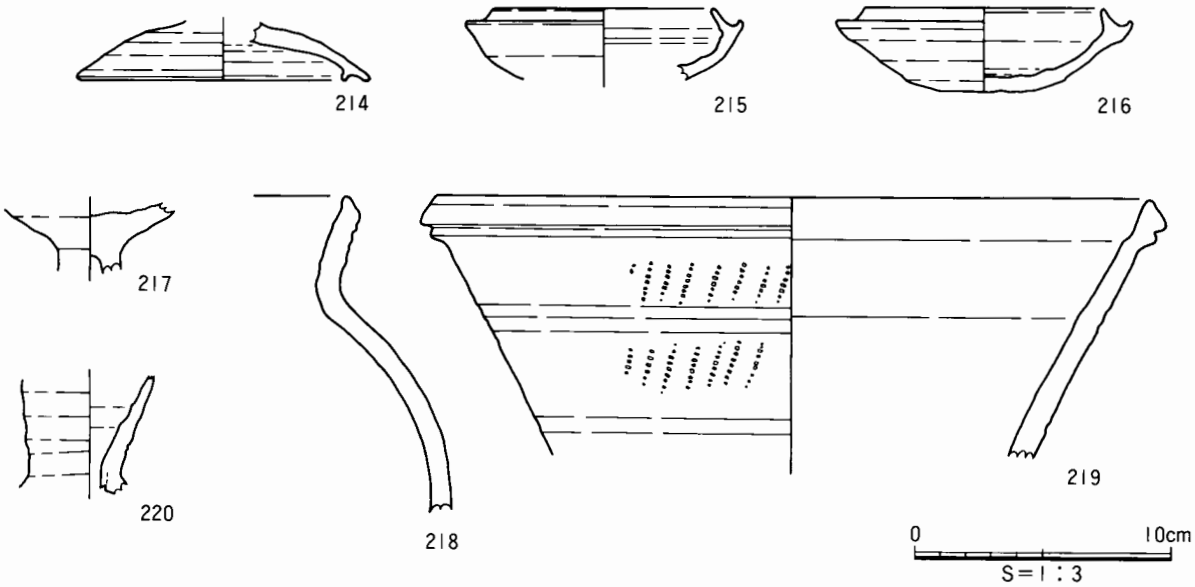


図132　包含層 出土須恵器 実測図

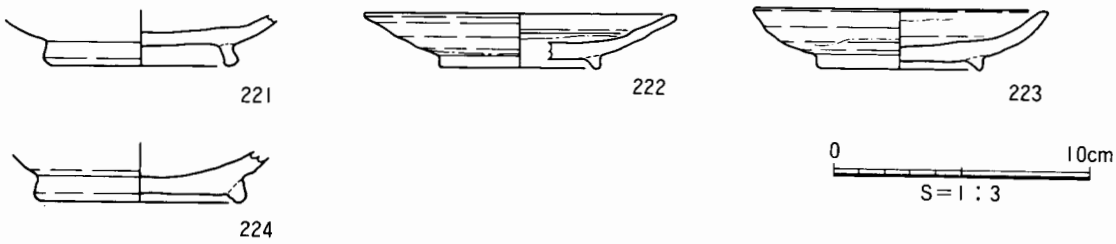


図133　包含層 出土灰釉陶器 実測図

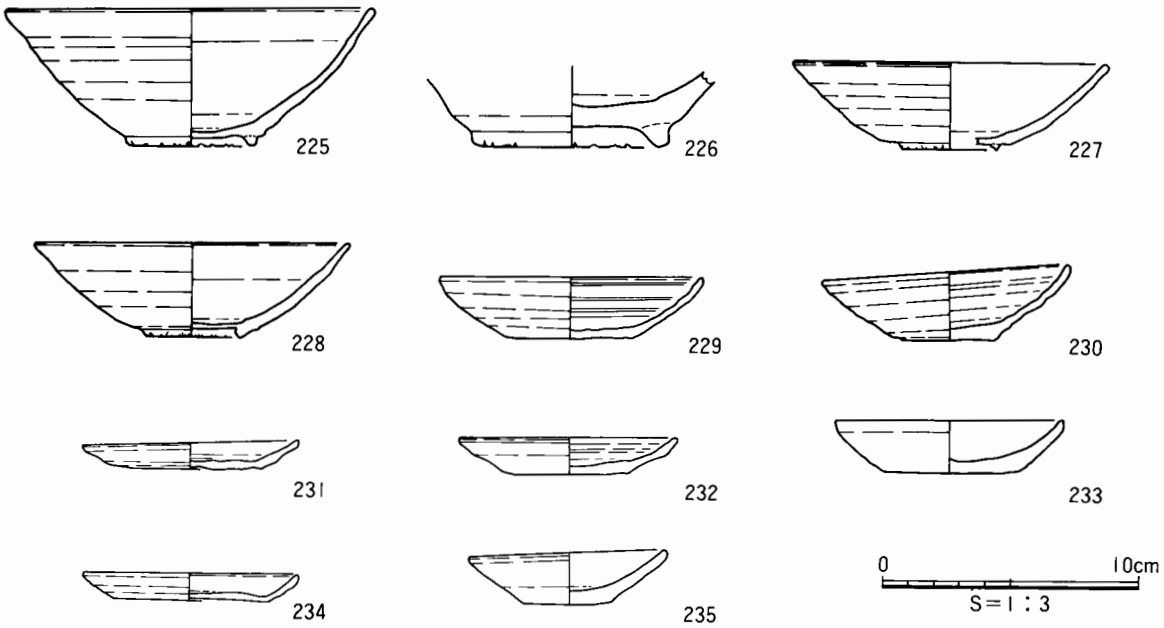


図134　包含層 出土山茶椀 実測図

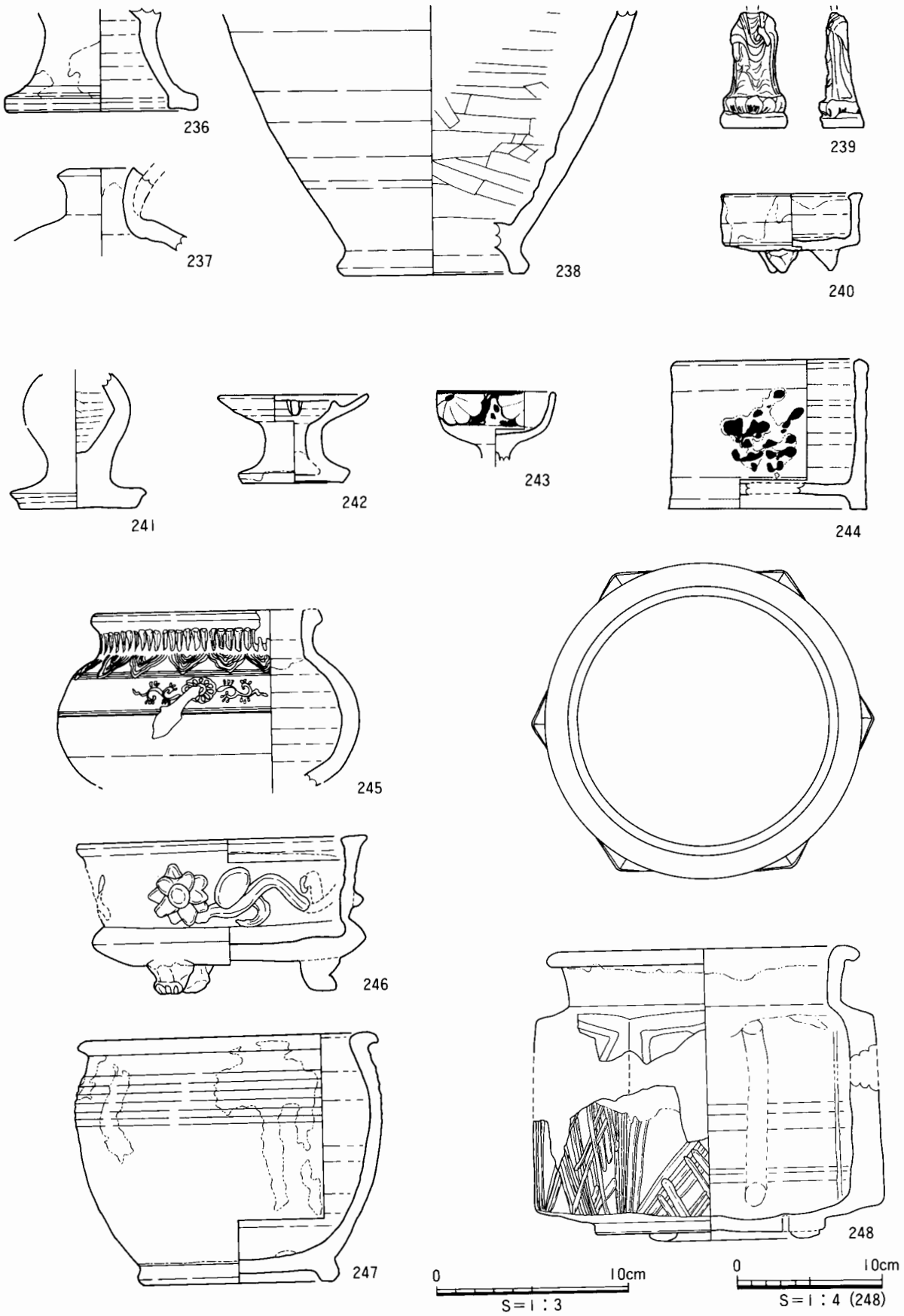


図135　包含層 出土陶器 実測図(1)

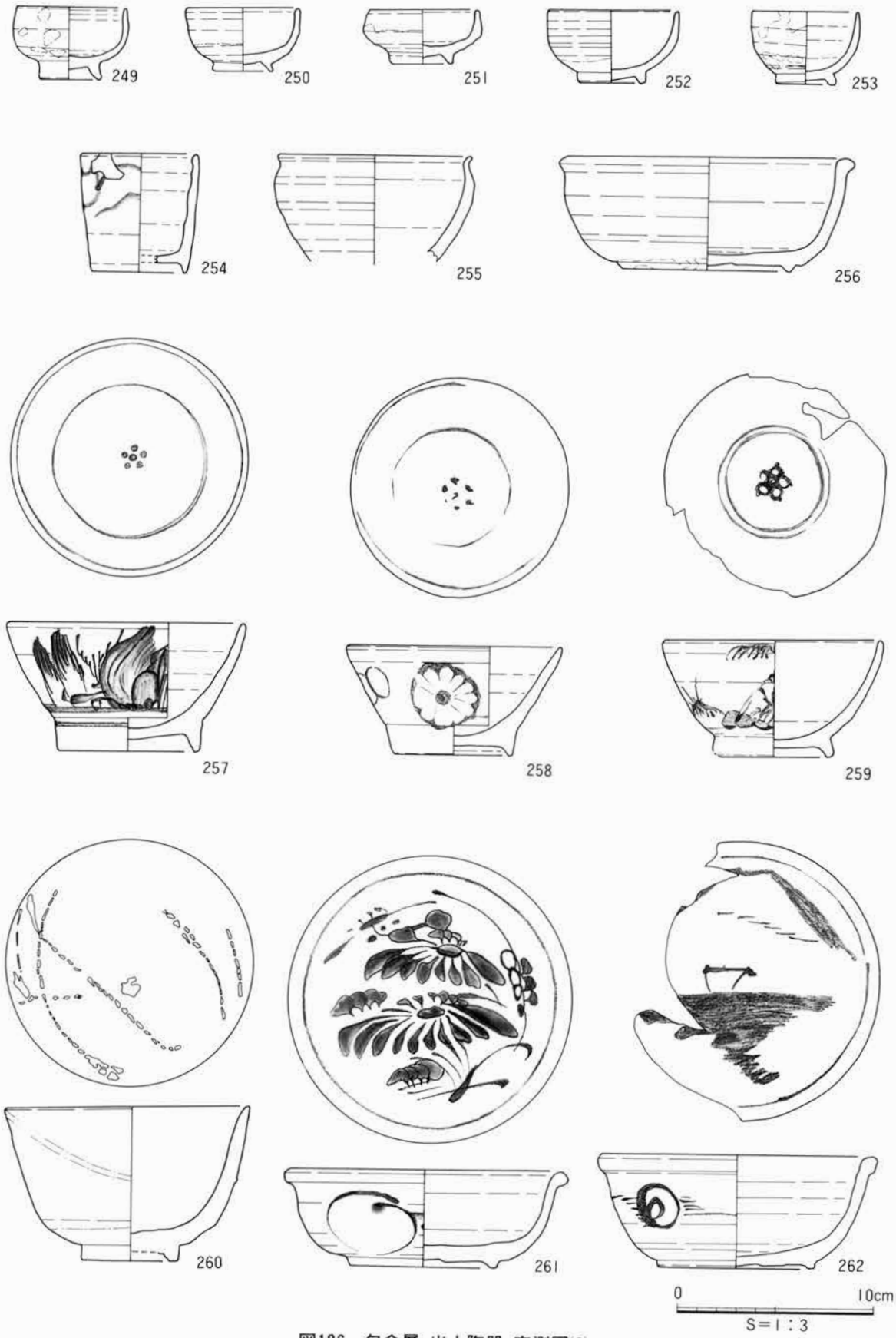


図136　包含層 出土陶器 実測図(2)

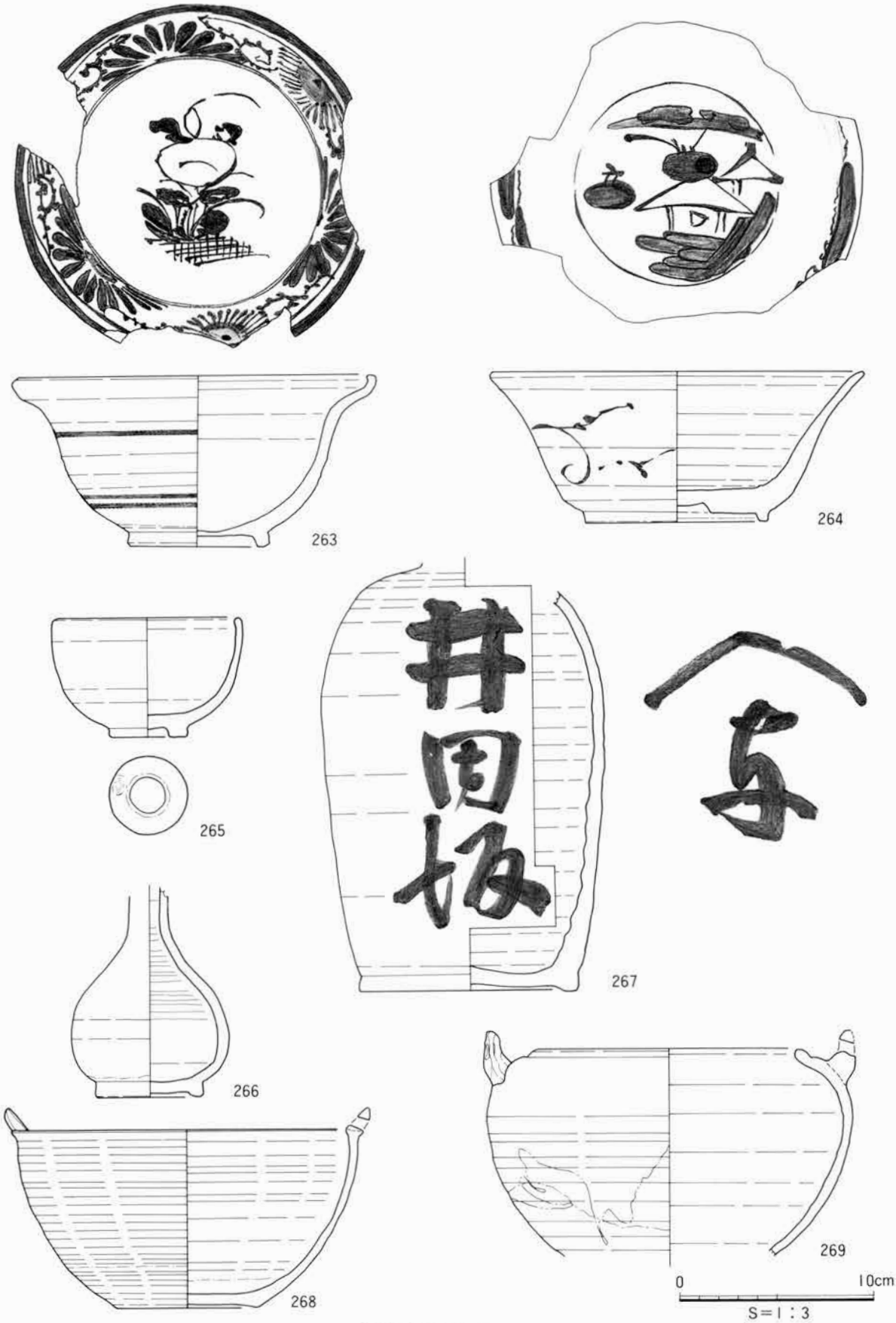


図137　包含層 出土陶器 実測図(3)

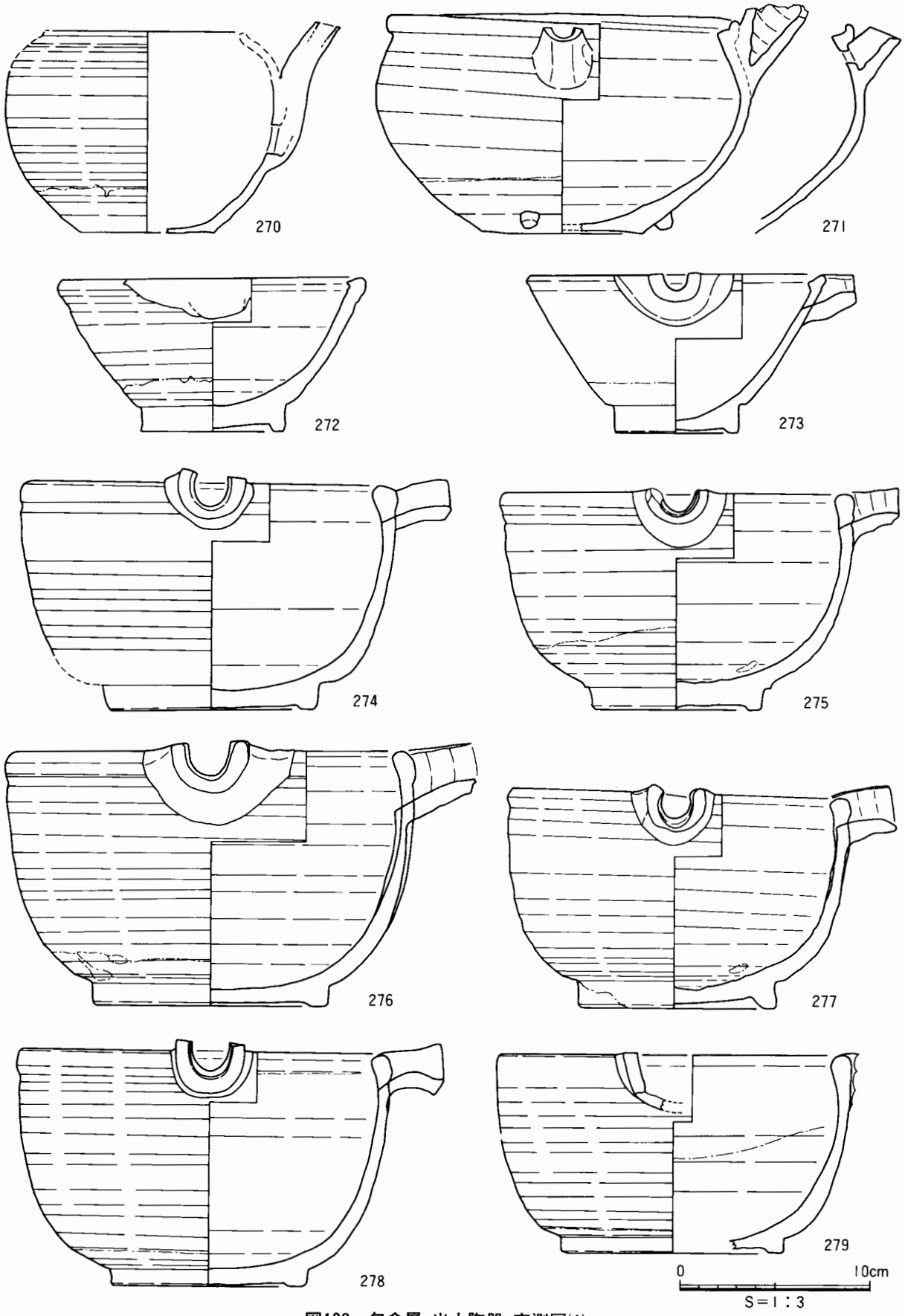


図138　包含層 出土陶器 実測図(4)

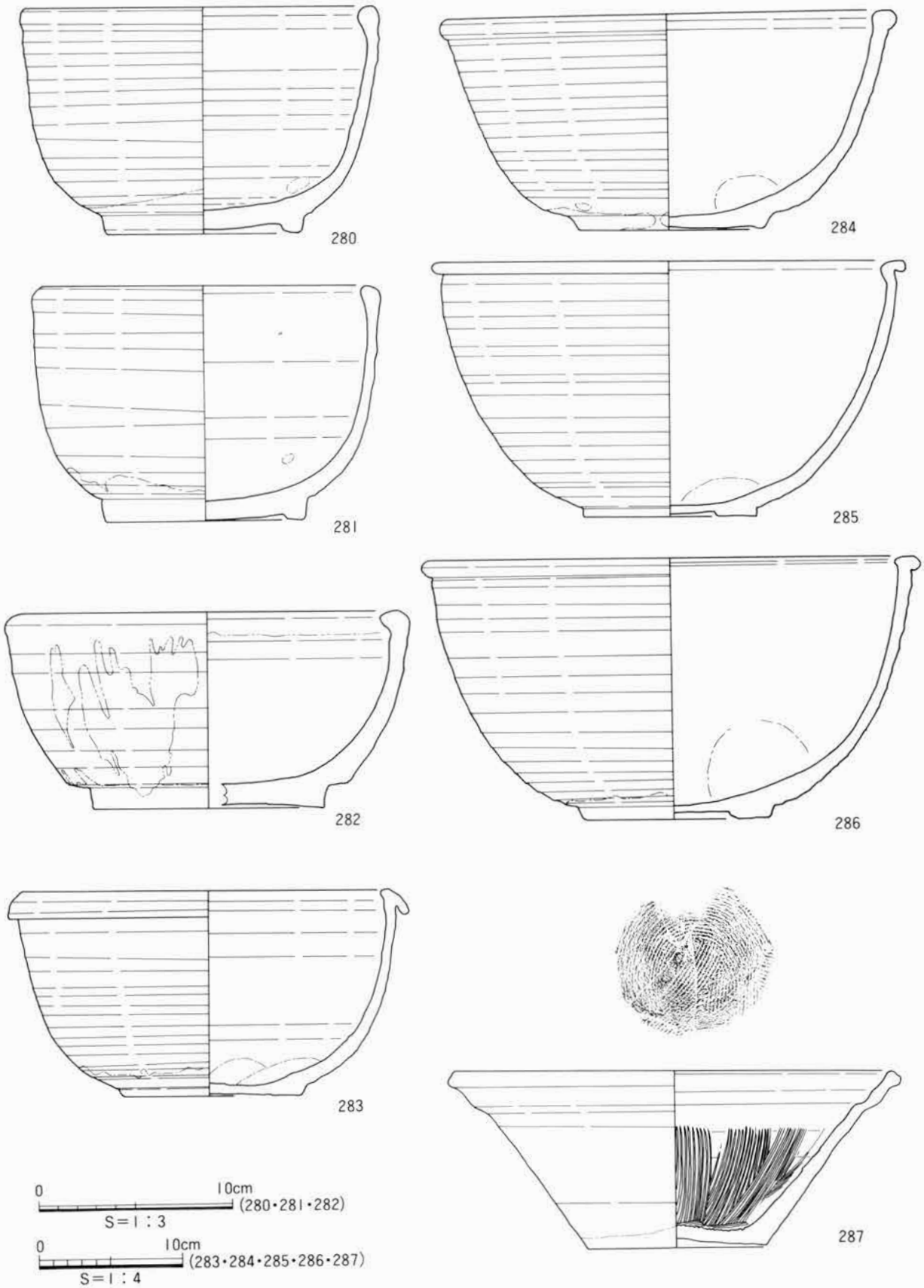


図139　包含層 出土陶器 実測図(5)

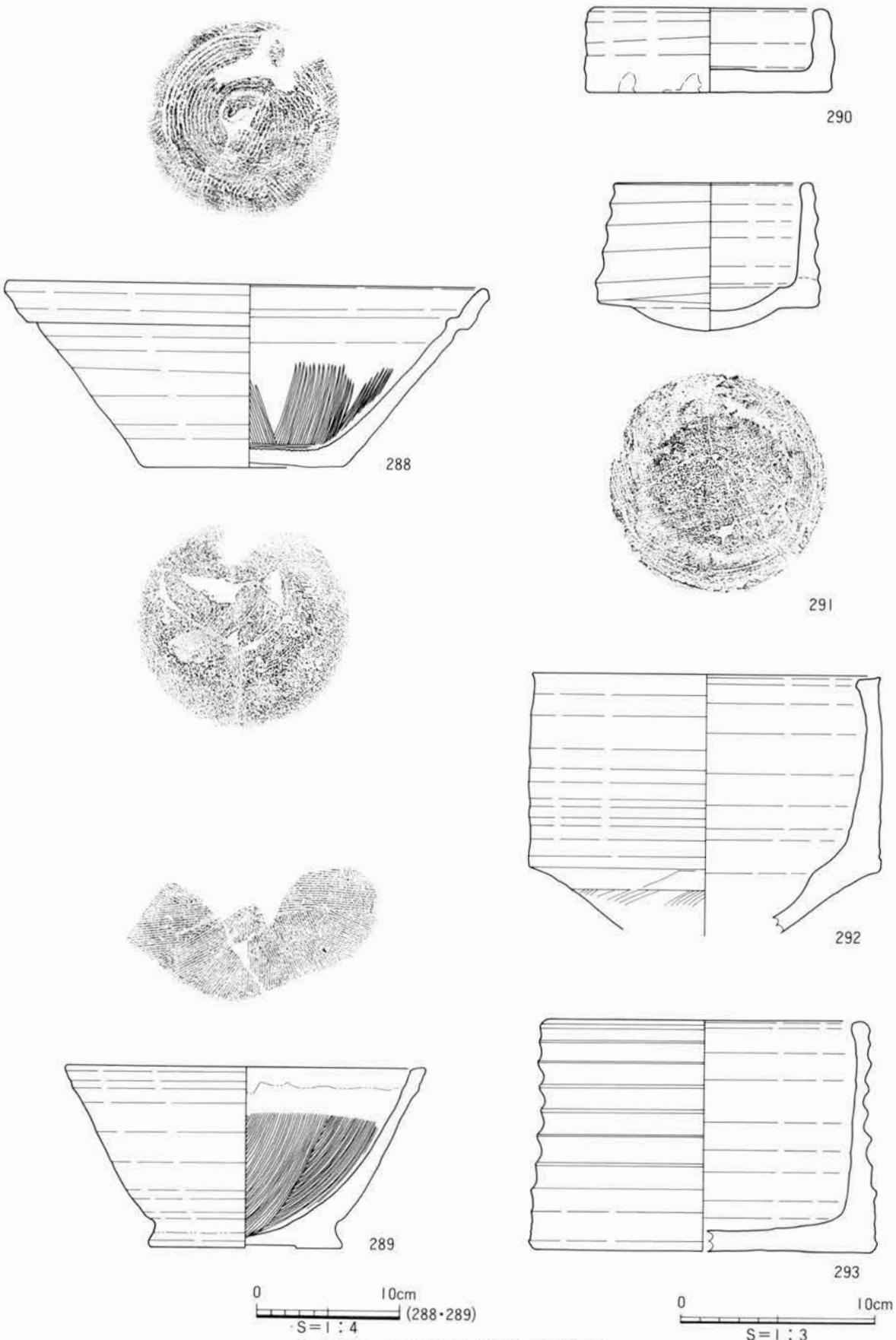


図140　包含層 出土陶器 実測図(6)

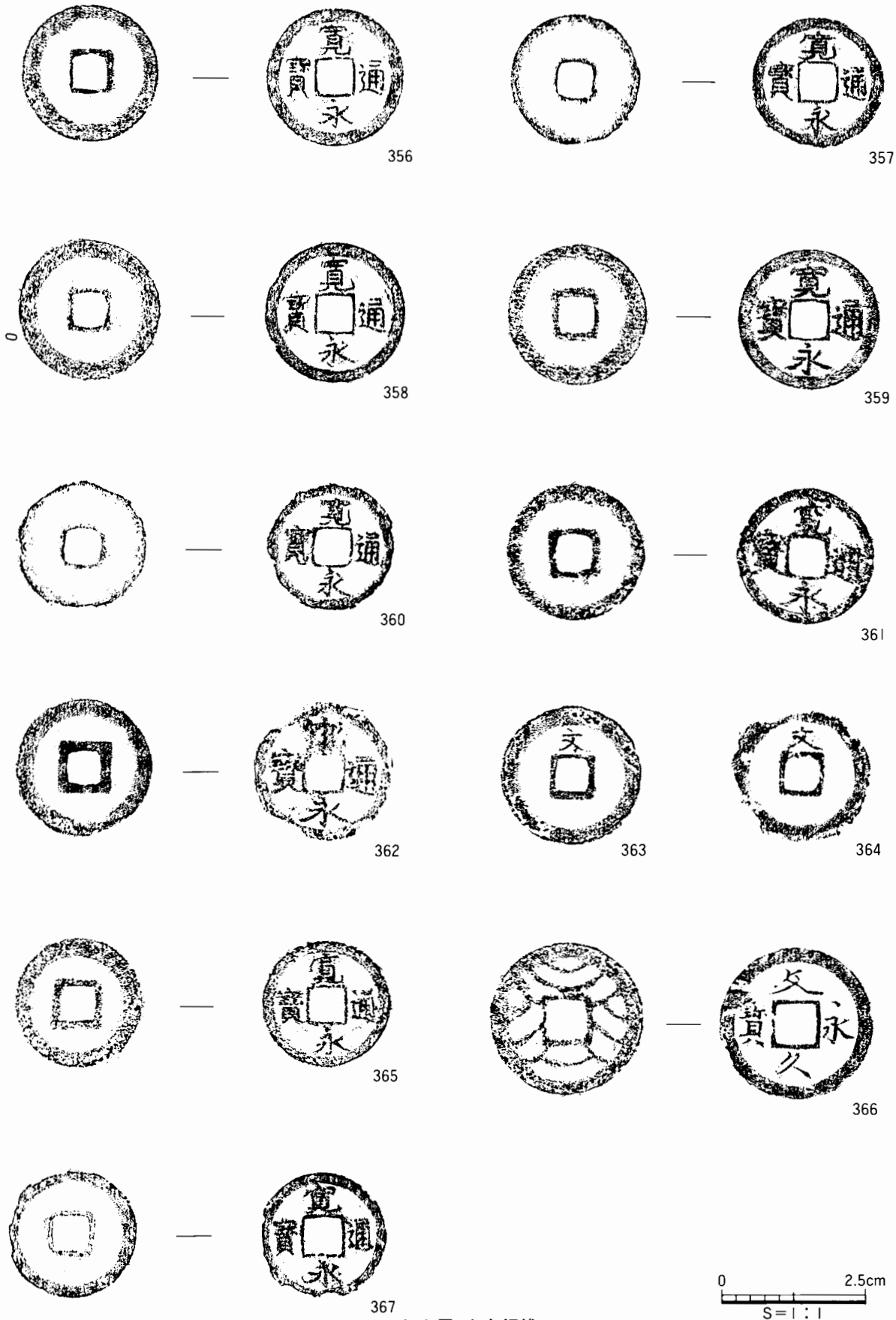


図141　包含層 出土銅銭

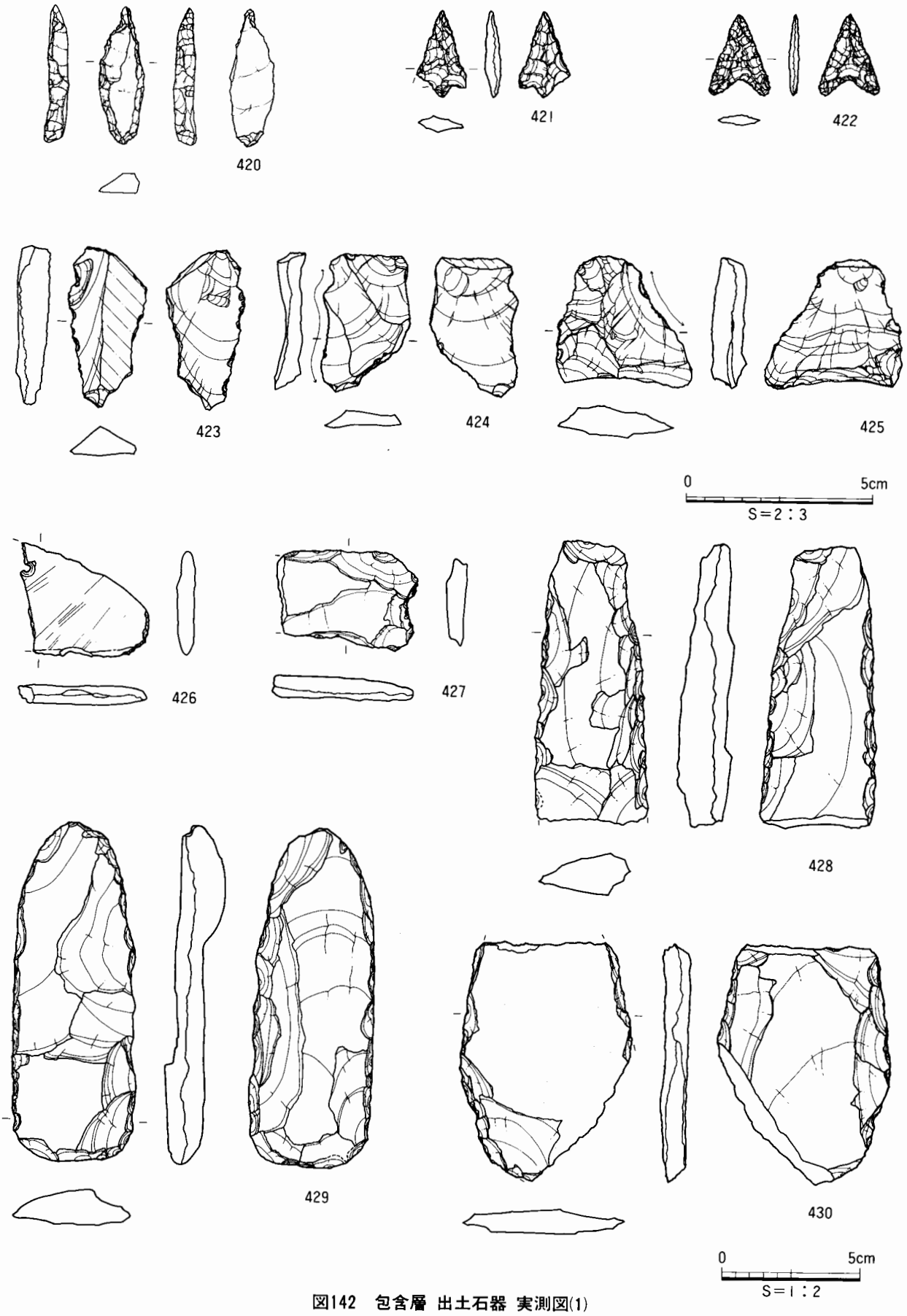


図142　包含層 出土石器 実測図(1)

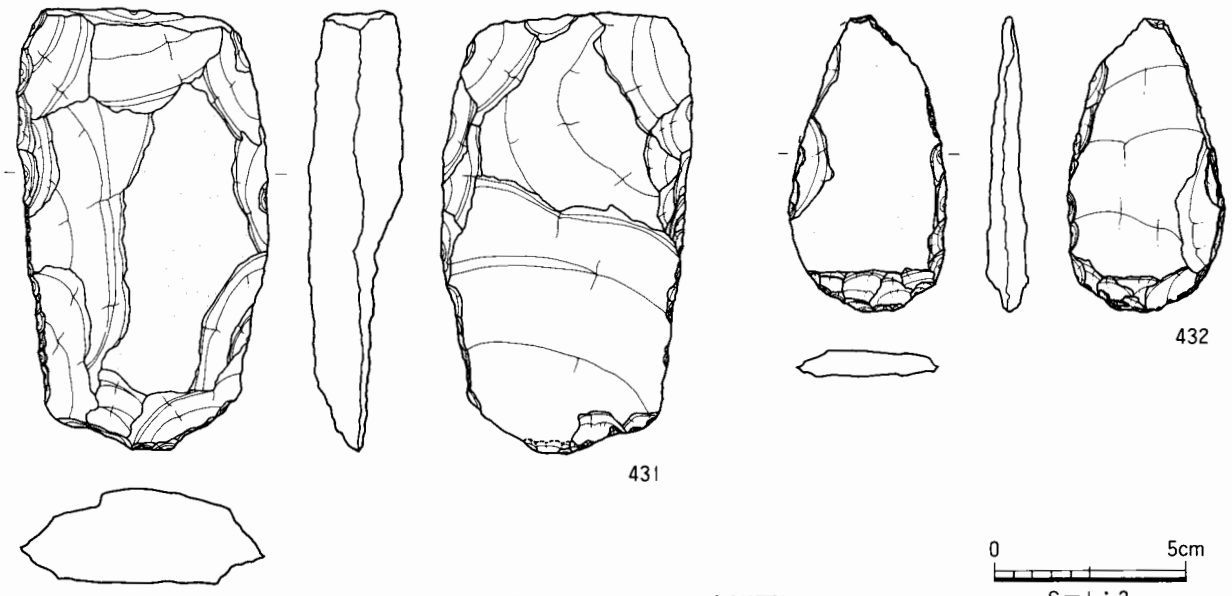


図143　包含層 出土石器 実測図(2)

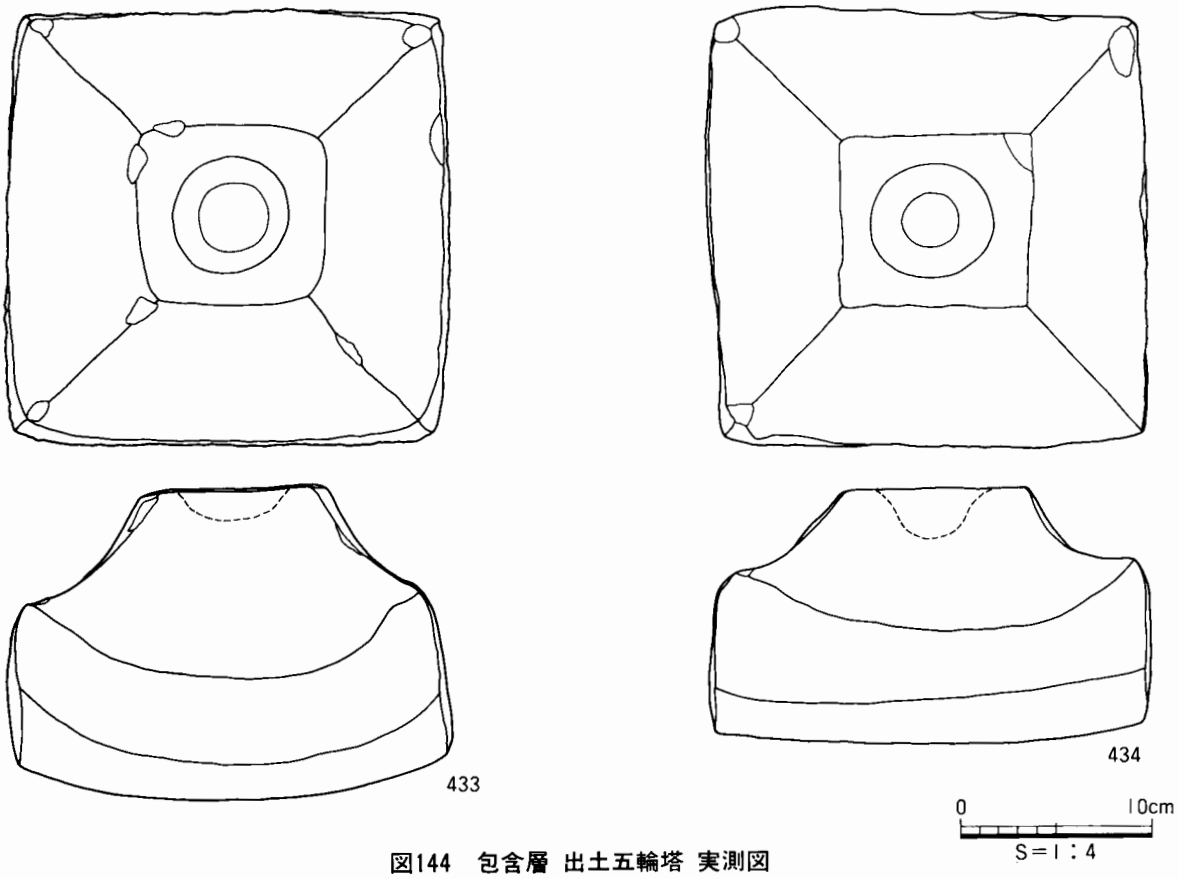


図144　包含層 出土五輪塔 実測図
(図126と同一)

第6章　青木横穴墓と遺物

第1節　位置と調査前の状況（図145）

御嵩町には3ヶ所に横穴墓群の存在が知られている。6基が残存して県の史跡に指定されている伏見地区の山田横穴墓群、6基の小型横穴墓が連続する上之郷地区の権上洞横穴墓群、そして今回本発掘調査を実施した青木横穴墓がそれで、御嵩町は美濃地域の横穴墓分布の中心の一つといえる位置にある。

青木横穴墓は、金ヶ崎遺跡の北約400mの御嵩町比衣字青木614番地の1に所在する。比衣川によって開削された南北に長い谷底平野の西側山腹に穿たれ、かつてはこの他に4～5基が群をなして存在したが、住宅団地造成のため破壊されたとのことである[1]。この横穴墓が所在する谷底平野を見下ろす尾根上には、稲荷山古墳群・比衣丸山古墳・市洞古墳群などの横穴式石室を内部主体とする後期古墳が数多く存在し、同時代に二つの形式の埋葬施設が存在する地域として注目される。

比衣地区の谷底平野は8世紀以降は条里水田となる生産力の高い地域で、おそらく7世紀以前も水田耕作が営まれ、その生産背景に支えられて数多くの古墳群や横穴墓群を造営したものと考えられる。谷底平野を間近に見る青木横穴墓は、とくにこの水田耕作と深い関わりがあったであろうと思われる。

当横穴墓は、付近の住人からの聞き取りでは、戦中戦後には亜炭坑の労働者が住み着いており、また最近まで芋穴等として利用されていたとのことで、おそらくそれ以前から開口していたものと推測される。横穴墓内は、床面に一辺5～20cmのチャートの亜角礫や凝灰質砂岩が堆積し、上面の礫は目地に空隙があって不安定な状態であった。また、礫とともに空き缶・ガラス瓶・ビニール等のゴミも各所に散乱し、それらに混じって須恵器片もみとめられた。

第2節　調査の経過と方法

金ヶ崎遺跡とあわせて報告をした。

第3節　横穴墓の状況（図146・147、図版51・52）

(1)　周辺の状況及び残存状態

当横穴墓は、東に面した凝灰質砂岩の斜度60度の切り立った岩盤に穿たれている。入口外には緩やかな墓道がわずかに接続するが、その先は町道の測溝を設ける際に垂直に切り落とされている。本来は町道を隔てた水田面の高さまで、約2～3mの落差でスロープ状の墓道が存在したものと推定される。

横穴墓が穿たれた崖面は雑木が生い茂り、厚さ約20cmの不安定な流土が覆っていた。木の根によって岩盤が若干侵食されていたが、岩盤の露出は少なく、崖面の残存状況は比較的良好である。

横穴墓内部は古くから開口していたと考えられ、後世の改変がわずかに認められるが、崖面の崩落が少なかったことから天井部の残存状態が近隣の横穴墓と比べて良好であり、入口付近は当初の状況に近いものと思われる。とりわけ玄室のみならず羨道の天井部もほぼ完全に残存する点で、横穴墓としては極めて残存状態は良好であるといえる。

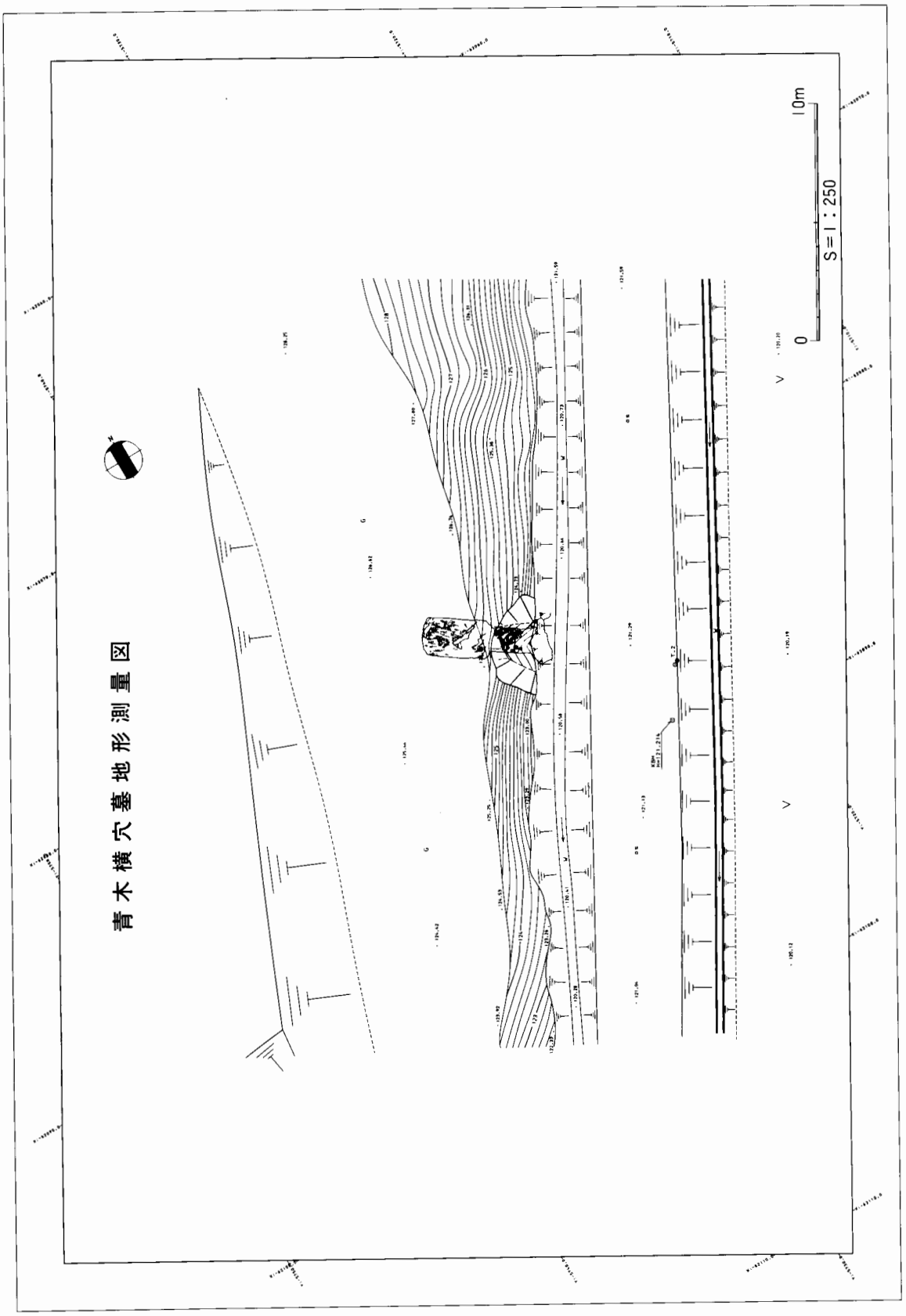


図145　青木横穴墓地形測量図

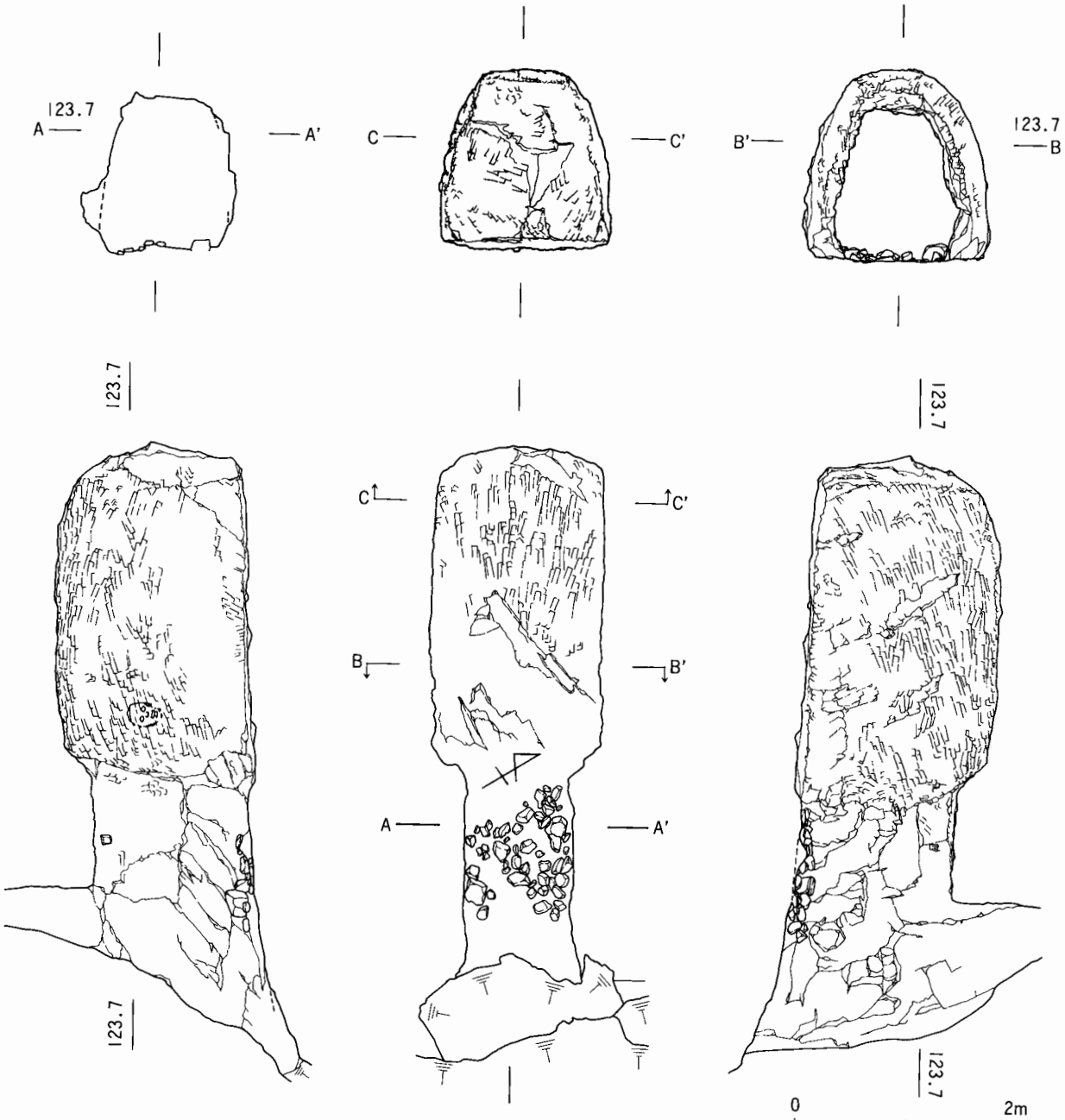


図146　青木横穴墓 実測図(1)

(2) 横穴墓内部の状況

当横穴墓は、東に開口し（主軸N－2°－E）、玄室と羨道とを明瞭に区分する両袖式の形態を採り、墓道[2]が入口側に接続する。墓道は前述したように途中で削られて消失しているが、残存する墓道を含めた横穴墓の全長は床面での計測で5.5mである。天井部が存在する玄室と羨道の全長は、床面での計測で3.90mである。

① 玄室部

玄室は長さ3.0m、幅1.55mで平面形が長方形をなし両側壁の基底部は直線的であるが、4つの隅部はやや丸みを帯び、奥壁基底部は円弧を描くように外に向かって張り出す。玄室床面は羨道に向か

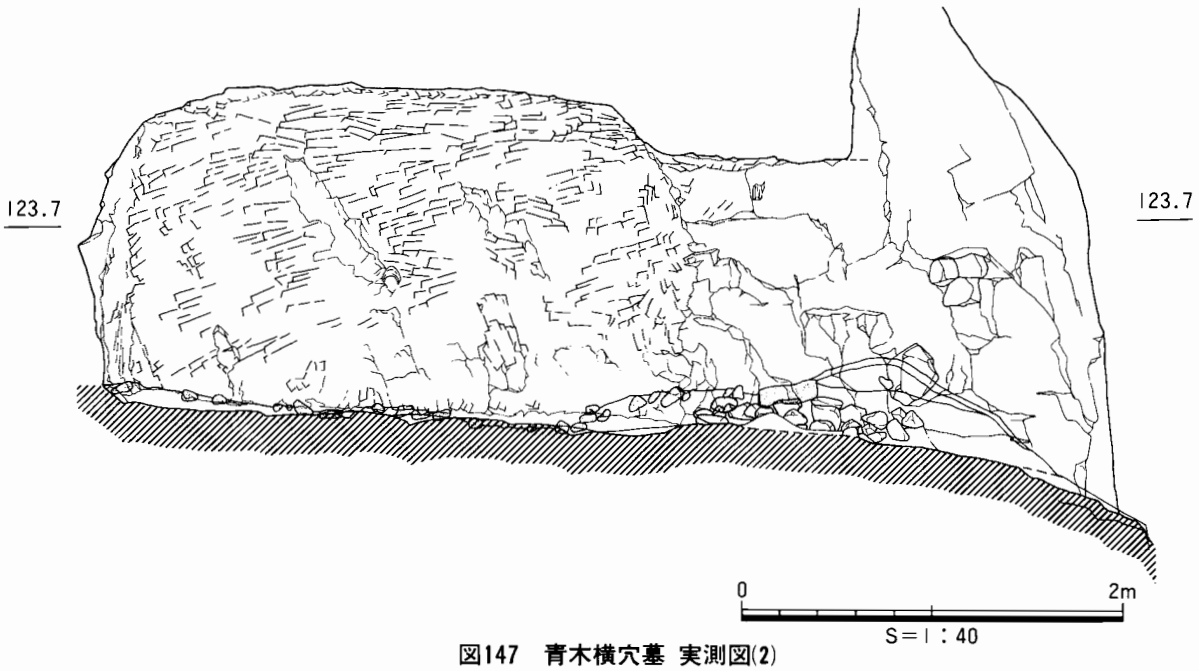


図147　青木横穴墓 実測図(2)

って緩やかに降り、奥壁付近と玄門付近とでは床面の高さ約20cm異なるが、これは湧水があることから排水を意図した結果と推測される。調査の当初、奥壁寄り１～1.5mの範囲の玄室床面からほぼ水平で目地に粘土質の土がつまってやや安定した礫敷きを検出し、礫床が敷設されているものと考えた。しかし、この礫の最下部から山茶碗の破片が出土したことから中世以降の改変によるものであることが判明した。横穴墓本来の床面は岩盤を平滑に調整したままの状態で用いられたと思われ、棺台や排水溝等の施設は存在しない。なお、後世に敷設された礫敷きは、玄室内の全面にあったものと思われるが、入口に近い部分は岩盤近くにビニール等のゴミがあり、近年の攪乱を受けていた。攪乱は入口側約２分の１の礫を奥壁側に掘りあげて岩盤を露出させたと考えられ、露出した岩盤には被熱した痕跡が３ヶ所で認められた。攪乱を受けていない奥壁寄りの床面には、主軸に平行した方向に調整した工具の痕跡（工具の動きは入口側から奥壁に向かう）が明瞭に認められる。

玄室の奥壁は、床面からほぼ垂直に１ｍほど立ち上がった後、曲線を描いて内傾し、床面からの高さ1.5mでわずかに角度を変換して天井部に至る。天井部はこの変換点からさらに緩やかに高さを増し、玄室中央部での高さは1.7mとなる。天井の高さはこのピークに至ってからほぼ水平であり、平天井を意図したものと考えられる。平天井をなす部分の主軸方向の長さは、2.0mである。

玄室の両側壁は緩やかに曲線を描きながら内傾して立ち上がり、天井との境には明瞭な屈曲をもつ。両側壁の内傾によって狭められた天井は、幅は70cm前後でほぼ平坦な面をなす。なお、南側壁の玄門近くに人面が描かれているが、最終調整を行った工具痕の後で刻まれており、風化の具合が周辺と比較して進行していないことから考えて後世の、おそらく近年に描かれたものと判断した。

②　玄門部

玄門部は玄室両側壁の幅をそれぞれ約30cm減じて、床面での幅を0.90mとする。羨道との区分は平面でも立面でも見られず、横穴式石室でこの地方に特有のいわゆる疑似両袖式の形態ではない。これは横穴墓が掘削によって空間を確保しなければならないという側面から、複雑な構造を造り出すこと

に制約があり、特に当横穴墓のように小型のものはその制約が大きかったことに起因すると思われる。

③　羨道部

羨道は、玄門部を含めて天井の存在する部分の長さは0.95mである。床面の岩盤は玄門から墓道に向かって降り、約10cmの落差があるが、これも玄室床面と同様に排水を意図したものと考えられる。羨道幅は玄門部と同じく0.90mで、この幅を保って墓道に接続する。羨道両側壁の残存状態は玄室に比べてやや不良で、特に下半部の壁面剥落が著しい。両側壁は玄室と同様に緩やかに内傾しながら立ち上がり、天井部との境を明瞭にする。天井までの高さは床面から1.40mで、天井幅は0.55mを測る。

羨道床面のほぼ全面から、床面の岩盤にほぼ接して一辺10～20cmのチャートの亜角礫を主体とした礫群を検出した。古くから開口しており後世に各所に改変が加えられてはいるが、この部分は崖面上部から流入した土砂が厚く堆積しており、床面近くはそれによって守られていたと考えられる。古くからの開口によって上部構造は消失しているが、羨道床面の礫群は閉塞の基底部分と推定される。この閉塞施設からは追葬の有無、回数を判断できる痕跡は認められなかった。

なお、羨道両側壁の天井近くには、それぞれほぼ対象の位置に一辺8cm、深さ5～8cmの正方形の掘り込みがある。明らかに人工的なもので、角材を両側壁に渡しかけた痕跡と考えられ、閉塞に関わる施設とも考えたが、掘り込み部分の風化の度合いが周辺と比べて進行していないこと、そして閉塞は前述のように礫の積み上げによるものであることから、後世のものと判断した。

④　墓道

羨道部の入口側に接続し天井部の存在しない墓道は、長さ0.8mに渡って検出したが、町道の側溝によって削り取られており、本来はさらに長かったものと思われる。墓道の幅は羨道部との接続部分で0.9m、入口に向かうに従ってやや拡がり1.15mとなる。床面は羨道床面と連続して入口に向かって降り、排水を意図したものであるとともに水田面付近の低位の場所から横穴墓へ侵入するにあたってスロープを形成したもと思われる。

⑤　壁面調整痕

横穴墓の内部には、壁面を最終調整した際に残された工具の痕跡を各所に認めることができた。工具の幅は、動作の終止部分の痕跡から判断して5.0cmと推定される。

玄室奥壁は、ほぼ垂直に立ち上がる壁面下半部分では上から下に向かっての、緩やかに内傾する上部の壁面では不定方向の痕跡が認められる。痕跡の長さは5～20cmほどで、側壁面や天井部との境は短く刻みを入れるように調整を施している。

玄室両側壁は、奥壁寄りでは入口から奥に向かう方向に、玄門寄りでは奥から入口に向かうほぼ水平方向に工具が動いた傾向が認められるが、痕跡の多くは壁面に向かって右から左へやや左下がりに動いている。痕跡の長さは、両側壁中央の平坦な部分では20～30cmと長く、奥壁や前壁との境では刻み状で短い。

玄室天井部の平坦面では側壁と同様に奥壁近くでは奥壁に向かう方向の、玄門近くでは玄門に向かう方向の痕跡がみられ、痕跡の長さの傾向も側壁と同様である。

羨道部は、玄門部付近の上部に上から下に向かう痕跡がわずかに認められたが、大半は剥落しており不明であった。

第4節　遺物の出土状況

横穴墓玄室内の床面は後世に搬入された礫によって満たされ、玄室の玄門寄り部分ではさらに近年に攪乱を受けており、出土する須恵器等の遺物は細片で元位置を保つものはなかった。近年の攪乱を受けていない玄室奥壁近くでは、後世の礫敷きの上部や目地及び礫の下部から横穴墓造営期の須恵器片が出土した。礫敷き上部や目地から出土したものは、玄門寄りの攪乱の際に掘り上げられた土砂に混入していたものと考えられる。礫敷き下部から出土する須恵器片がやや大型である傾向にはあったが、後世の改変は横穴墓造営期の床面の様子を一変させるものであったと思われる。

第5節　出土遺物

玄室床面の後世に敷設された礫敷きから、須恵器片、山茶碗片、鉄製品が出土している。横穴墓造営期のものは須恵器片のみで、山茶碗片と鉄製品は後世の改変、おそらく玄室内の礫敷きに伴う遺物と考えられる。

須恵器片は細片が多く、実測しえたのは6個体であった。2は無蓋高坏の坏部から脚部にかけての破片で、脚裾部は残存しない。坏部は底部から直線的に緩やかに立ち上がった後、段をなして内側に屈曲させて口縁部を形成する。口縁部端部は内面に段を設け、わずかに外反させて丸くおさめる。体部と口縁部との境は、外面に1条の沈線を巡らせて区分を明瞭にする。脚部は細く短い柱状の基部から裾部に向かって強く外反してくだる。透かし孔はなく、短脚である。

1は2と同様な無蓋高坏の坏部片で、体部と口縁部との境は、わずかな内側への屈曲と外面にやや鋭く突出した段を設けることで明瞭としている。口縁部端部は、内側に平坦面を形成して外反させ、端部は丸くおさめる。脚部は残存しないが、2と同様の短脚で透かし孔のないものが接続したと思われる。

3は高坏の脚部で、おそらく1・2と同様の短脚の無蓋高坏と思われる。透かし孔はなく、脚裾部は大きく開いて端部を内側に屈曲させ、接地部はやや尖らせながら丸くおさめる。

4は高坏の脚部で、上記の短脚無蓋高坏とは大きく異なり、長脚で2段透かしとなる可能性が高い。下段の透かし孔が残存し、三角形で三方に穿孔される。裾部は強く開いて外面を肥厚させ、ほぼ垂直にくだる縁帯を形成する。接地部はやや鋭く尖らせておさめる。

5は、提瓶の口縁部と考えられる破片で、体部との接続部から緩やかに外傾して立ち上がった後、外面に2段の凸帯状の段を設けて外反させ、端部は摘み上げ状に内傾する。

6は短頸壺の破片で、体部は器壁の厚い底部から外傾して立ち上がった後内彎させ、口縁部は短くほぼ垂直に立ち上げる。体部最大径付近に2条の沈線が巡る。口縁部は器壁の厚さを減じながら端部に向かって立ち上がり、端部はわずかに内傾させて丸くおさめる。

山茶碗は、2個体の底部片を実測しえた。7と8はともに南部系で、回転糸切りの後に貼り付けられた高台には籾圧痕は認められない。底部の器壁が厚く、高台径は大きい。

鉄製品は火打金1点、棒状の不明鉄器1点、器壁の薄い鉄片15点を実測した。11の火打金は翼の片方の端部を欠損するがほぼ完形で、径1㎜ほどの穿孔がある。10の棒状の不明鉄器は、断面が長方形で鉄鏃の茎部に似るが両小口を平坦におさめている。9－1～15の鉄片は厚さ0.5㎜前後の薄い鉄板

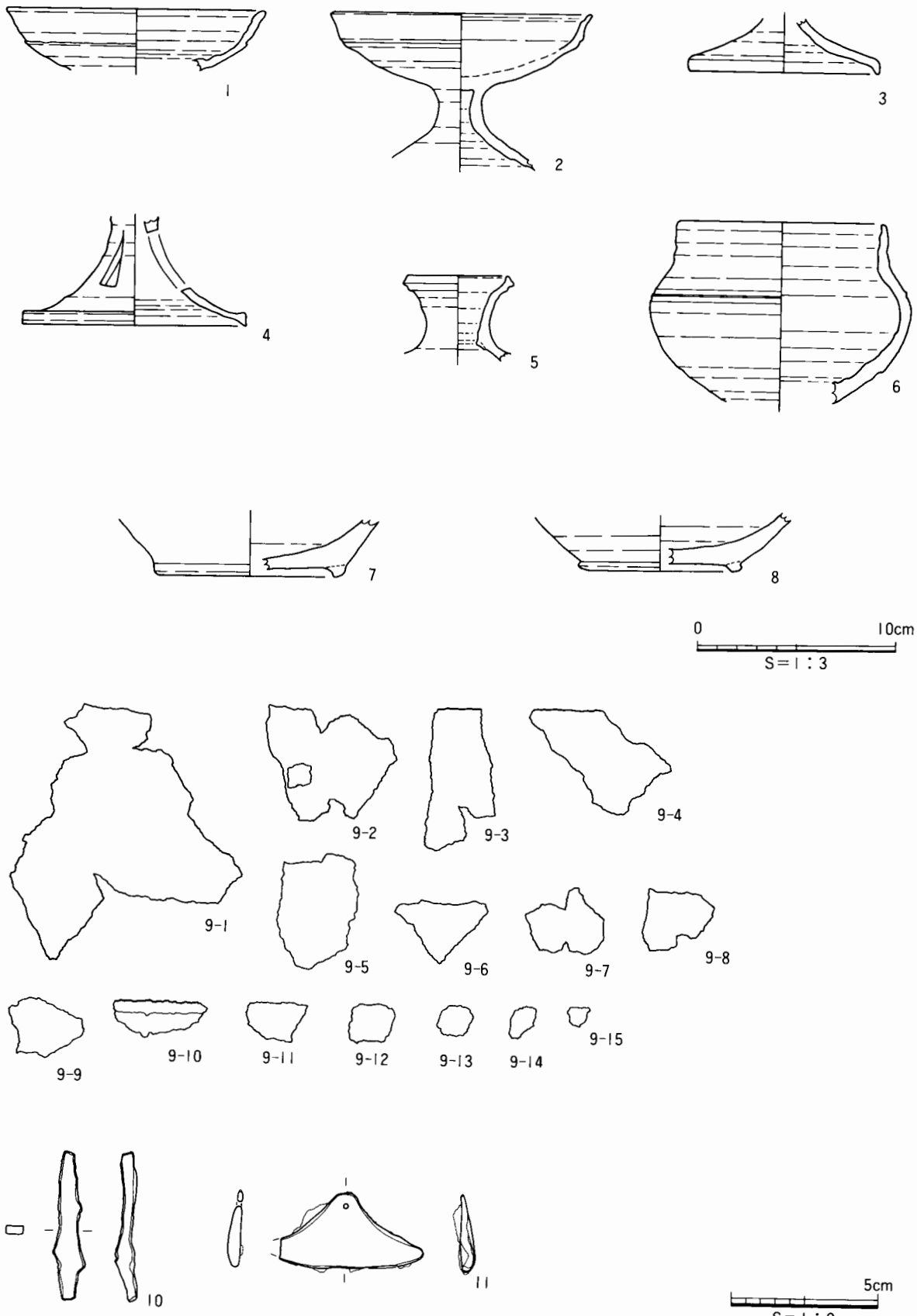


図148　青木横穴墓 出土遺物 実測図

で、9－10は4㎜ほど折り返して端部を形成している。鉄板の多くは彎曲した面をもち、おそらく筒状の容器であったと思われる。

以上の出土遺物の内、横穴墓造営期の須恵器は2時期に分けられ、5の瓶類の口縁部と6の短頸壺は6世紀末頃の、その他の高坏は7世紀中葉前後のものと考えられ、追葬が行われた可能性が高い。山茶碗はともに12世紀後半と考えられ、鉄製品は山茶碗に伴う時期のものと考えたい。

第6節　まとめ

青木横穴墓の今回の調査は、後世の改変や攪乱によって当初の様子をすべて復元することはできなかったが、天井や壁面の残存状態が良好であったこと、小破片ではあったが造営年代を推定しうる遺物が出土したことで当地方の横穴墓の様相を知る重要な資料を得ることができたと考える。

当横穴墓は、墓道まで含めた残存長が5.5mで、この地方では小規模な横穴墓である。しかし、この地方の小規模な横穴墓は無袖式の形態を採ることが多いが、当横穴墓では玄室と羨道とを明瞭に区分した両袖式の形態を採る。可児市の久々利川水系での分析[3]では、両袖式は無袖式より規模や玄室内部の諸施設で優位にある。同時代の横穴式石室も同様の傾向があり、当横穴墓は特殊であるといえる。

玄室と羨道とを区分して横穴墓を掘削するには、より多くの手間と時間を要したことは想像に難くない。当横穴墓が他の小規模横穴墓と比較して丁寧に掘削された背景には、その造営時期が大きく関わっていると考える。当地域への横穴墓の導入時期は、現在のところ可児市の羽崎中洞1号横穴墓[4]の6世紀後半頃と考えられている。羽崎中洞1号横穴墓は、全長14.1m、玄室長4.7mの巨大な横穴墓で造り付けの石棺を奥壁に接して設けた入念なつくりであり、導入期の横穴墓にふさわしいものといえる。青木横穴墓から出土した須恵器片の中には6世紀末頃のものが含まれ、これが当横穴墓の掘削時期に近い年代と判断される。これは当地方の横穴墓導入期に近い年代であり、導入当初の形態を比較的忠実に継承して丁寧なつくりを採ったと考えられ、当地方の小規模で無袖式の形態を採る7世紀中葉以降の退化した横穴墓とは一線を画した存在と思われる。青木横穴墓が崩落せずに現在まで良好に残存したことが示すように、掘削された凝灰質砂岩の岩盤は硬質であり、玄室と羨道とを区分するという複雑な掘削を成立させる条件であったと同時に、時間を要する丁寧な掘削を強いるものでもあったと考えられる。導入期の横穴墓は、複雑で丁寧な掘削を行うためにこのような硬質の岩盤を選地した可能性もある。

以上のように青木横穴墓は当地方の横穴墓が導入された時期に近い様相を示すものと考えられ、当地方への導入の系譜を考えるに当たり重要であると思われる。どのような経緯と系譜でこの地方に横穴墓による墓制が成立したのかは不明な点が多々あるが、この資料がその解決に向かっての一助となれば幸いである。

注

1）御嵩町史編さん室編1992『御嵩町史』通史編上

2）羨道と墓道の区分は、横穴式石室のそれにならって天井部の有無で行った。

3）長瀬治義2001「東濃地方の横穴墓」『東海の横穴墓』静岡考古学会2000年度シンポジウム

4）亀谷泰隆・長瀬治義1985『羽崎古墳群』可児市教育委員会

第７章　自然科学分析

第１節　金ヶ崎遺跡５号墳出土銅鏃の自然科学的調査

財 団 法 人　元興寺文化財研究所
独立行政法人　東京文化財研究所

１．はじめに

今回、金ヶ崎５号墳出土銅鏃を元興寺文化財研究所保存科学センターで保存処理委託業務としてお預かりした。その際、保存処理に先立ち自然科学的分析を実施したので、その報告を行う。

金ヶ崎５号墳は弥生時代終わりから古墳時代初め（３世紀中頃）にかけてつくられた方形周溝墓で、この木棺内から出土した銅鏃３点（図149、左）が分析対象である。

なお、銅鏃のケイ光Ｘ線分析については元興寺文化財研究所で行い、鉛同位体比測定は東京文化財研究所保存科学部　平尾良光と鈴木浩子が担当した。

２．含有元素の定性分析

鉛同位体比測定に先立ち、各銅鏃に含まれる元素及び鉛の有無の確認のため、ケイ光Ｘ線分析（ＸＲＦ）を行った。資料表面の非破壊での定性分析である。

２－１　使用機器及び測定条件

エネルギー分散型ケイ光Ｘ線分析装置（セイコーインスツルメンツ㈱　ＳＥＡ5230）を使用。試料の微小領域にＸ線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有のケイ光Ｘ線を検出することにより元素を同定する。

モリブデン管球使用、大気条件下測定、
コリメータ1.8mm、管電圧45kV

２－２　分析結果

ＸＲＦ分析で検出した元素は以下のとおりである。スペクトルは図149に示した。

№1：Cu、Sn、Pb、As、Sb、Ag、Fe
№2：Cu、Sn、Pb、As、Sb、Ag、Fe
№3：Cu、Sn、Pb、As、Sb、Ag、Fe、Mn

３つの銅鏃からは主に銅（Cu）、スズ（Sn）、鉛（Pb）を検出し、これらは鉛を含む青銅製の銅鏃であった。他には、ヒ素（As）、アンチモン（Sb）、及び銀（Ag）が確認された。

鉄（Fe）、マンガン（Mn）は土壌成分に由来する可能性が高いとみられる。

３．銅鏃の鉛同位体比測定

３－１　試料

ＸＲＦにより鉛が十分に含まれていることを確認した後、元興寺文化財研究所において試料採取を行った。採取箇所は図149に示した矢印部分である。

３－２　分析法

１）鉛同位体比法による青銅原料の産地推定

産地推定のために鉛同位体比法を利用した[*1]。一般に、鉛の同位体比は鉛鉱山の岩体が違えばそれぞれの鉱山毎に異なった値となることが知られており、産地によって特徴ある同位体比を示すことが今までの研究でわかっている。そこで、鉛の産地の違いが鉛同位体比に現れるならば、文化財資料に含まれる鉛の同位体比の違いは材料の産地を示すと推定される。古代の青銅には鉛が微量成分として0.01％程度、あるいは主成分の一つとして５～20％含まれている。鉛同位体比の測定に用いられる鉛量は測定器（質量分析計）の感度が非常に良いため、１μgの鉛があれば十分である。また試料は青銅の金属部分でも錆部分でも、同位体比は変わらないことが示されているので、資料からは錆を微少量採取するだけで十分である。そこでこの方法を本資料の材料産地の推定に利用することを試みた。資料から錆の一部を採取し、鉛を化学的に分離し、表面電離型質量分析計で同位体比を測定した[*2]。

２）鉛同位体比の測定

資料から微少量（１mg以下）の錆を採取して、鉛同位体比測定用の試料とした。錆試料を石英製のビーカーに入れ、硝酸を加えて溶解した。この溶液を白金電極を用いて直流２Ｖで電気分解し、鉛を二酸化鉛として陽極に集めた。析出した鉛を硝酸と過酸化水素水で溶解した。0.1μgの鉛をリン酸－シリカゲル法で、レニウムフィラメント上に載せ、サーモクエスト社製全自動表面電離型質量分析計MAT 262 に装着した。

分析計の諸条件を整え、フィラメント温度を1200℃に設定して鉛同位体比を測定した。同一条件で測定した標準鉛 NBS-SRM-981 で規格化し、測定値とした。

３－３　鉛同位体比の結果と考察

１）鉛同位体比測定値

測定した鉛同位体比を表５で示した。この値を今までに得られている資料と比較するために鉛同位体比の図で示した（図 150）。

表５　金ヶ崎５号墳から出土した銅鏃の鉛同位体比

資料名	$^{206}Pb/^{204}Pb$	$^{207}Pb/^{204}Pb$	$^{208}Pb/^{204}Pb$	$^{207}Pb/^{206}Pb$	$^{208}Pb/^{206}Pb$	測定番号
銅鏃　No. 1（311）	18.237	15.669	38.745	0.8592	2.1245	ＨＳ1089
銅鏃　No. 2（310）	18.341	15.685	38.839	0.8552	2.1176	ＨＳ1090
銅鏃　No. 3（312）	18.142	15.644	38.711	0.8623	2.1338	ＨＳ1091
誤差範囲	±0.010	±0.010	±0.030	±0.0003	±0.0006	

横軸が $^{207}Pb/^{206}Pb$ の値、縦軸が $^{208}Pb/^{206}Pb$ の値とした図を仮にＡ式図と呼ぶこととする。この図で鉛同位体比に関して今までに得られている結果を模式的に表わし、今回の結果をこのなかにプロットした[*3~7]。日本の弥生時代に相当する頃の東アジア地域において、Ａは中国前漢鏡が主として分布する領域で、後の結果からすると華北産の鉛と推定される。Ｂは中国後漢鏡および三国時代の銅鏡が分布する領域で、華南産の鉛と推定される。Ｃは現代の日本産の大部分の主要鉛鉱石が入る領域で、Ｄは朝鮮半島産とされる多鈕細文鏡が分布する領域の中央線として示される。またａは弥生時代後期の銅鐸が集中した領域である。

横軸が $^{206}Pb/^{204}Pb$ の値、縦軸が $^{207}Pb/^{204}Pb$ の値とした図をＢ式図と呼ぶこととする。この図の中でＡ'、Ｂ'、Ｃ'、Ｄ'は中国華北、華南、日本、朝鮮半島産の鉛領域を表わす。

これらの図の中に、測定値を●で示した。

２）考察

金ヶ崎５号墳から出土した銅鏃３点は、図150のＡ式図においてＢ領域に位置した。Ｂ式図においても同様である。このことから、この銅鏃は華南産の材料を用いていると考えられる。

これまでの研究から、弥生時代青銅器はＤ領域やＡ領域に、古墳時代青銅器はＢ領域に位置することがわかっている。Ａ領域からＢ領域への材料の推移がいつ起こったのかはわからない。今回測定した銅鏃は３世紀中頃の方形周溝墓の副葬品ということから、５号墳が作られた同時期かそれ以前に作られたものと考えられる。弥生時代から古墳時代への過渡期に作られた銅鏃と考えると、鉛同位体比に表れる材料の推移と合わせ、今後興味深い結果のひとつとなるであろう。

４．　引用文献

(1)　平尾良光：鉛同位体比を用いた産地推定；考古学と自然科学４　考古学と年代測定学・地球科学，松浦秀治・上杉陽・藁科哲男編，314-349，同成社(1999)

(2)　平尾良光，馬淵久夫：表面電離型固体質量分析計 VG-Sector の規格化について；保存科学28，17-24(1989)

(3)　馬淵久夫，平尾良光：鉛同位体比法による漢式鏡の研究；ＭＵＳＥＵＭ　No.370,4-10(1982a)

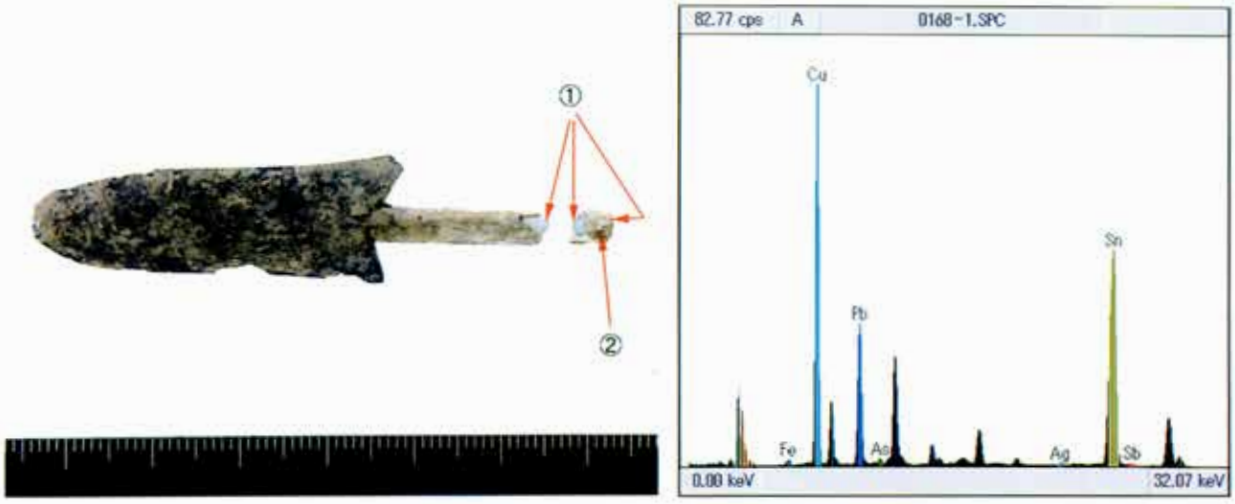
(4)　馬淵久夫，平尾良光：鉛同位体比から見た銅鐸の原料；考古学雑誌　68,42-62(1982b)

(5)　馬淵久夫，平尾良光：鉛同位体比法による漢式鏡の研究(二)；ＭＵＳＥＵＭ　No.382,16-26(1983)

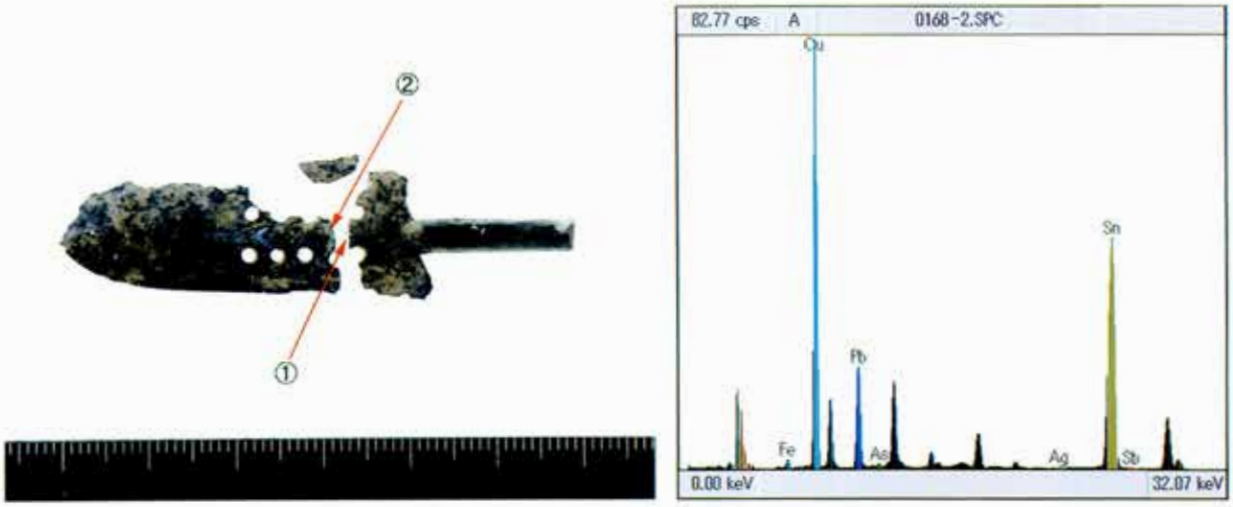
(6)　馬淵久夫，平尾良光：東アジア鉛鉱石の鉛同位体比―青銅器との関連を中心に―；考古学雑誌73,199-210(1987)

(7)　平尾良光編：古代青銅の流通と鋳造；鶴山堂(1999)

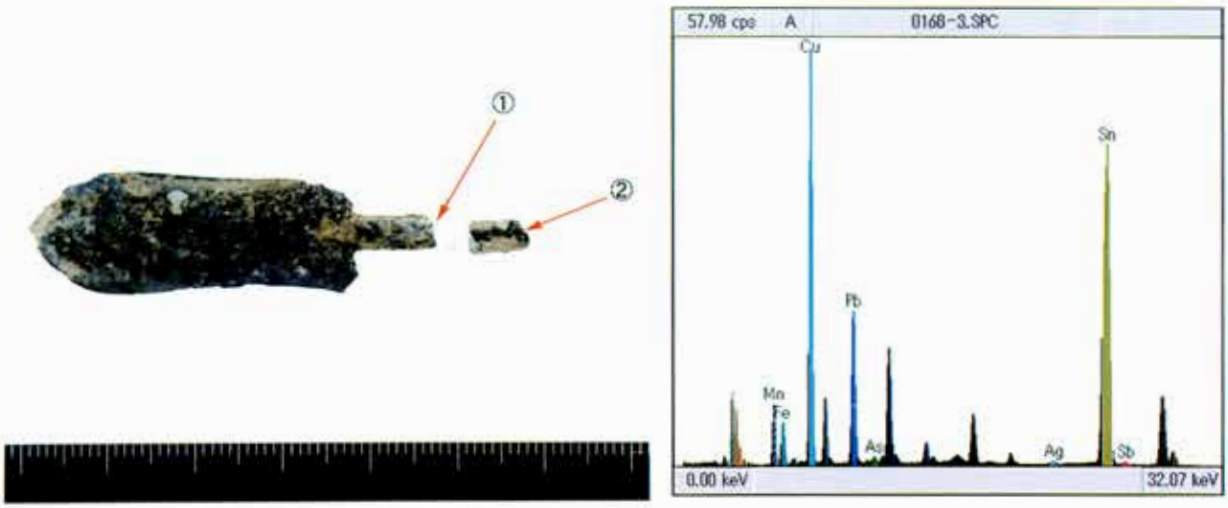
以上



No. 1



No. 2



No. 3

図149　銅鏃の外観とXRFスペクトル

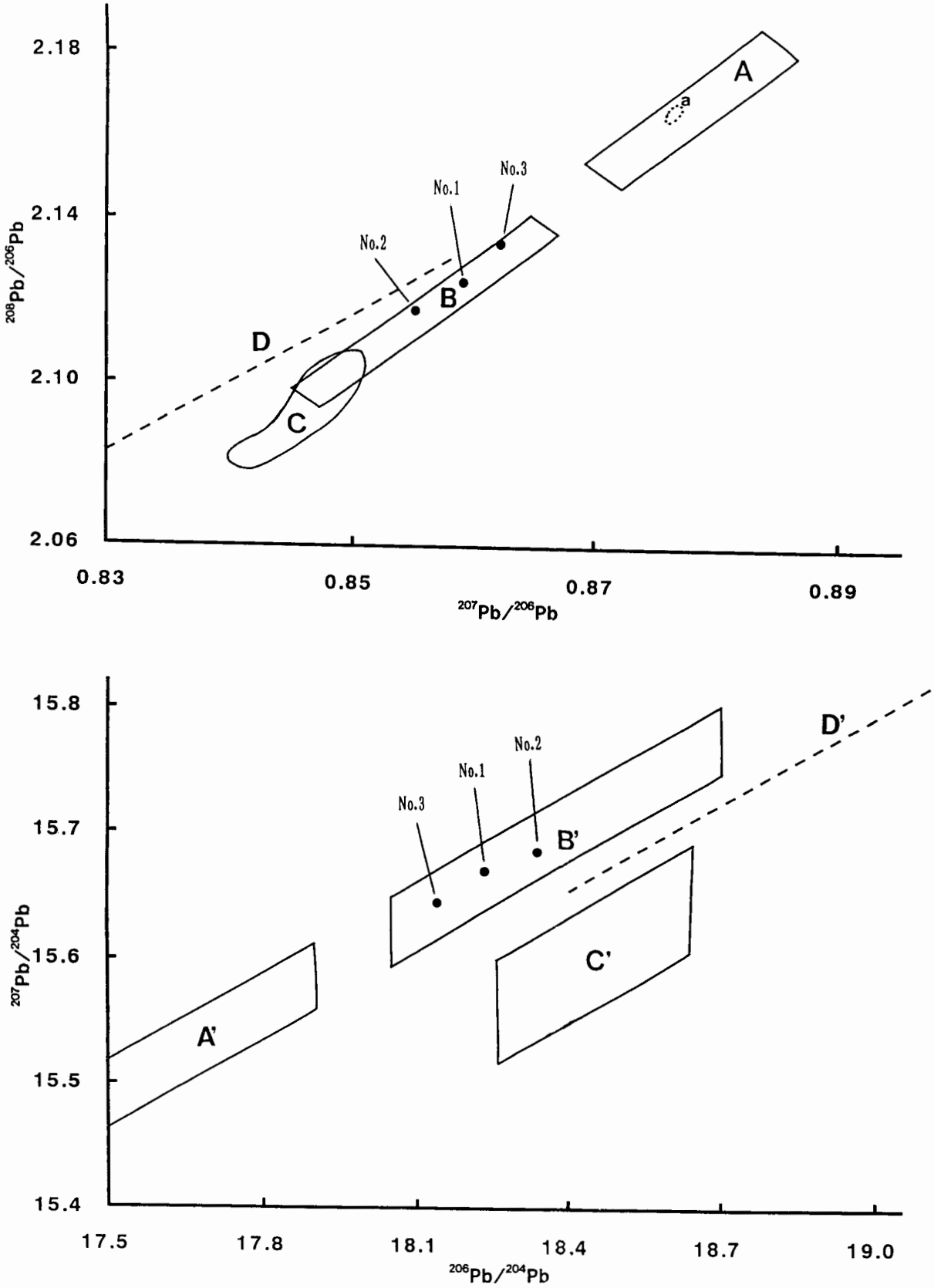


図150　金ヶ崎５号墳から出土した銅鏃の鉛同位体比

第２節　金ヶ崎５号墳出土土器の赤色顔料分析

小村美代子（パレオ・ラボ）

１．はじめに

金ヶ崎５号墳主体部より、木棺の下から鉢１点(161)が伏せた状態で出土した。この鉢に赤色部が確認されたので、この赤色がベンガラ（Fe2O3）なのか水銀朱（HgS）なのかを調べるために蛍光Ｘ線分析による顔料分析を行った。

２．試料と方法

鉢の赤色物付着状況を肉眼観察すると、鉢の内側は全体がうっすらと赤く、外側では口縁部付近２箇所で赤色部が確認された。外側でも赤色部が確認されたことから、この鉢が顔料の容器だけではなく赤彩土器である可能性も考えられた。肉眼観察では赤色物が確認できなくても、土器の隙間等に水銀朱が残存している場合、蛍光Ｘ線分析で検出できる。このため、鉢の外側の肉眼観察で赤色物が確認されない部分についても蛍光Ｘ線分析をすることにした。

試料は内側１点（赤色部有り：内側１）、外側は口縁付近から４点（赤色部有り：外側１・外側２、赤色部無し：外側３・外側４）の計５点である。採取部については図151に示す。測定試料は、各部位にセロハンテープを押し付けて採取した。ただし測定試料は、純粋に赤色物のみではなく、セロハンテープに赤色物と共に付着した鉢表面に付着する土、鉢の胎土等も含まれる。

分析はセイコー電子工業㈱製のエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析計 SEA－2001L である。装置の仕様は、Ｘ線発生部の管球のターゲットはロジウム（Rh）、ベリリウム（Be)窓、Ｘ線検出器はSi（Li）半導体検出器である。測定条件は、測定時間 300秒、照射径10㎜、電流50～63μＡ、電圧50kＶ、試料室内は真空である。

３．　分析結果

図152には蛍光Ｘ線スペクトル図、表６には、試料の詳細、蛍光Ｘ線分析による赤色顔料に関係する元素やその他検出された元素などを示す。検出された元素は、水銀（Hg)、鉄（Fe)、アルミニウム（Al)、ケイ素（Si)、イオウ（Ｓ)、カリウム（K)、カルシウム（Ca)、チタン（Ti)、マンガン（Mn)、銅（Cu)、亜鉛（Zn)がある。

鉄（Fe）は土壌や土器そのものにも含まれる元素なので全ての試料で検出される。このため水銀（Hg）と鉄（Fe）両方検出される場合は水銀（Hg）を優先して水銀朱（HgS）と判断した。

なお、ロジウム（Rh）のピークはＸ線発生部の管球（ロジウム）に由来するものであり、赤色物に含まれる元素とは関係がない。また、イオウ（Ｓ）は水銀朱（HgS）の他にセロハンテープにも含まれる元素である。

表６　試料から検出された元素と顔料の種類

［元素記号］Al:アルミニウム、Si:ケイ素、S:イオウ、K:カリウム、Ca:カルシウム、Ti:チタン、Mn:マンガン、Fe:鉄、Ni:ニッケル、Cu:銅、Zn:亜鉛、Hg:水銀

［記号］◎:顔料、○:土壌・土器胎土等の可能性有り

遺物	試料採取部	赤色部	Hg	Fe	顔料の同定	その他検出された元素
鉢（161）	内側１	有り	◎	○	水銀朱	Al、Si、S、K、Ca、Ti、Zn
	外側１	有り	◎	○	水銀朱	Al、Si、S、K、Ca、Ti、Zn
	外側２	有り	◎	○	水銀朱	Al、Si、S、K、Ca、Ti、Mn、Ni、Zn
	外側３	無し	—	○	無し	Al、Si、S、K、Ca、Ti、Zn
	外側４	無し	—	○	無し	Al、Si、S、K、Ca、Ti、Mn、Cu、Zn

４．考察

蛍光Ｘ線分析結果より、鉢内側には水銀朱が存在していたことが分かった。また、鉢外側については、口縁部の一部（外側１・外側２）にしか水銀朱が確認されなかったことから、外側の水銀朱については鉢に入れてあった水銀朱が付着したものと思われる。なお、その他検出された元素については付着する土壌や土器胎土に由来するものと思われる。この鉢は墳墓から出土したことから、葬送儀礼等の際に使用した水銀朱を入れていた容器であったことが窺える。

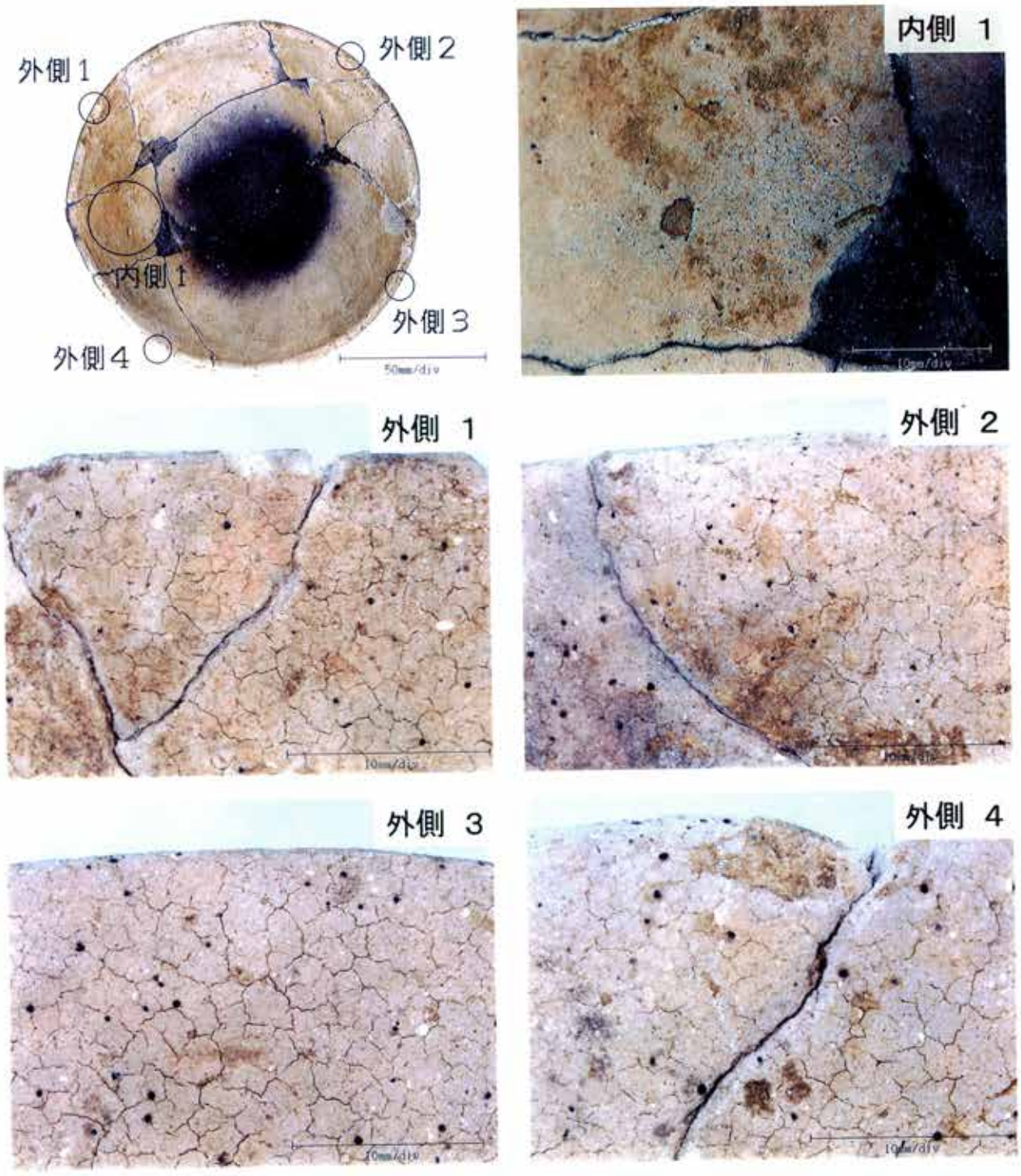
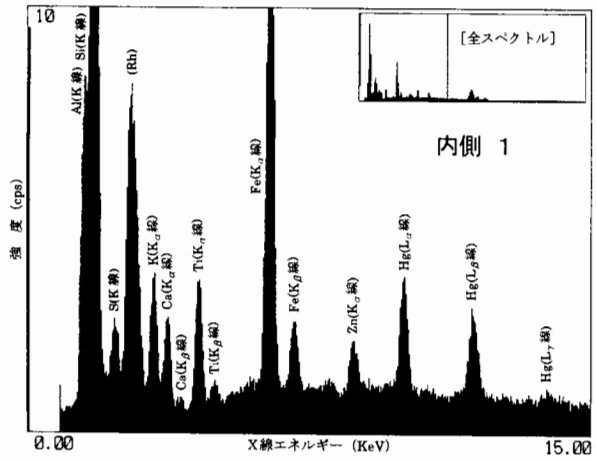
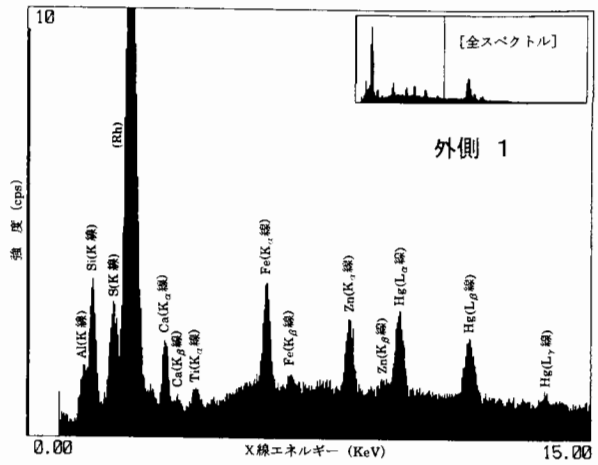
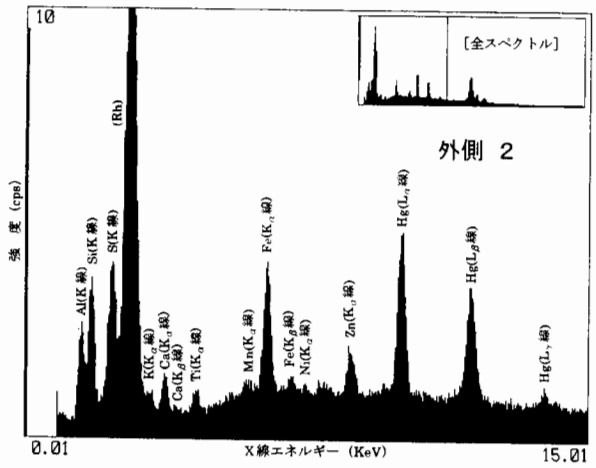


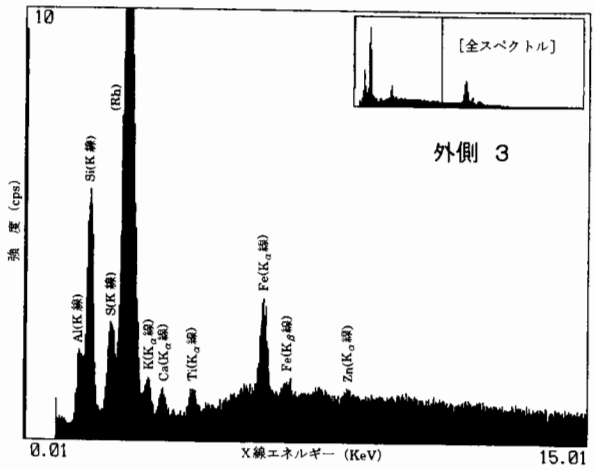
図151　試料採取部

内側1・外側1・外側2：肉眼観察で赤色部有り、外側3・外側4：肉眼観察で赤色部無し









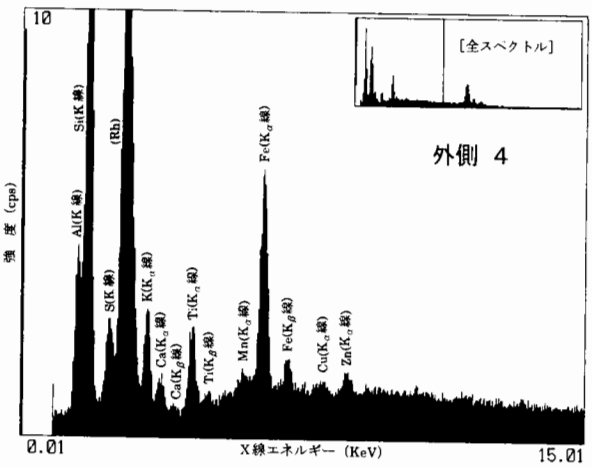


図152　各試料の蛍光X線スペクトル図

〔元素記号〕Al:アルミニウム、Si:ケイ素、S:イオウ、K:カリウム、Ca:カルシウム、Ti:チタン、Mn:マンガン、Fe:鉄、Ni:ニッケル、Cu:銅、Zn:亜鉛、Hg:水銀、Rh:ロジウム(X線管球より)

第8章　考　　察

第1節　金ヶ崎遺跡における方形周溝墓の墳丘築成について

1　4基の方形周溝墓の墳丘築成方法について

金ヶ崎遺跡の方形周溝墓の中で墳丘部が比較的よく残っていたものが4基ある。SX01・SX02・SX03・SX05の4基である。順番にその墳丘築成方法を説明し、比較してみたいと思う。

SX01は、前方後方形の方形周溝墓を想定しているが、墳丘が半分以上削り取られているので、全体の様相ははっきりしない。特に前方部は、はっきりしない。後方部も中央から南西部が残っているのみで、その断面の様子から次のような築成が想定される。墳丘は、その当時の地表面と思われるⅢa層上面に盛り土している。盛り土は後方部の中央部分を囲むように墳丘端部に盛り土をし、その後中央部に盛り土をしている。中央部の東半分がほとんど削り取られているので、主体部全体の状況は、はっきりしない。

SX02は、墳丘部分の北半分が後世の耕作によって削り取られているが、その断面から築成状況がわかる。まず、当時の地表面をならすために、表面の草等を焼いていると思われる。その後、墳丘端部に平面の形状がドーナッツ状になるように土を積み上げている。墳丘部の平面形が方形であるので方形のドーナッツというべきであるが。土の置き方は、地表面に対し水平に土をならしながら三角形の土塁状に積み上げている。次に、積み上げた土塁の内側に水平になるように土をならしながら充填している。土塁状の土は単色で混ざりの少ない土であるが、中に充填した土はⅢa層又はⅢb層とⅣ層が混ざり合った土も充填してある。土を確保するため周溝部を掘り下げた土を使用していると思われる。3段階目として主体部に木棺を設置するための穴を掘っている。掘った穴の中に木棺を安定させて置くために、掘った穴の壁に粘土を貼り付けている。その後木棺を設置し、粘土で上から覆って、最後に墳丘を完成させるため盛り土しているようである。

SX03は、次のように墳丘部を築成している。まず、築成前に比較的平らな地表面を焼いていると思われる。その後、墳丘端部を巡るようにドーナッツ状に土を積み上げている。断面の形状は三角形の土塁状である。SX02の土塁状のものと異なる点は、土塁の土の積み方が平らに積んでいるのではなく、外側から流し込むように内側に向かって積んでいることである。土塁そのものの形状も、SX02よりもSX03のほうがなだらかである。次に、主体部の位置（木棺設置位置）に水平に土を敷いている。その後、船底状の木棺を設置し、土塁と木棺の間を別の土で埋めていく。従って、土の入り方も、土塁の近くから木棺に向かって充填している。最後に、木棺を覆うように土をかぶせて墳丘を完成させると思われる。SX03は、東と南に向かって傾斜しているので、西側と北側から多く土がかぶっている。また、最初の工程から最後の工程まで盛り土はⅢ層とⅣ層の混合土がみられる。

SX05は、次のように墳丘部を築成している。基本的にはSX03とよく似た築成方法であるが、一部違うところがある。SX03の位置よりも南にあるため、南東への傾斜が大きい。従って、当時の地表面も平坦ではなく、南東側に傾斜した状態で墳丘部を築成している。まず、地表面を焼いていると思われる。次に、墳丘端部にドーナッツ状の土塁を積み上げる。土塁の断面形状は三角形である。土塁は、外側から墳丘中心部に向かって積み上げている。SX03では、このあと木棺を設置する場所に水

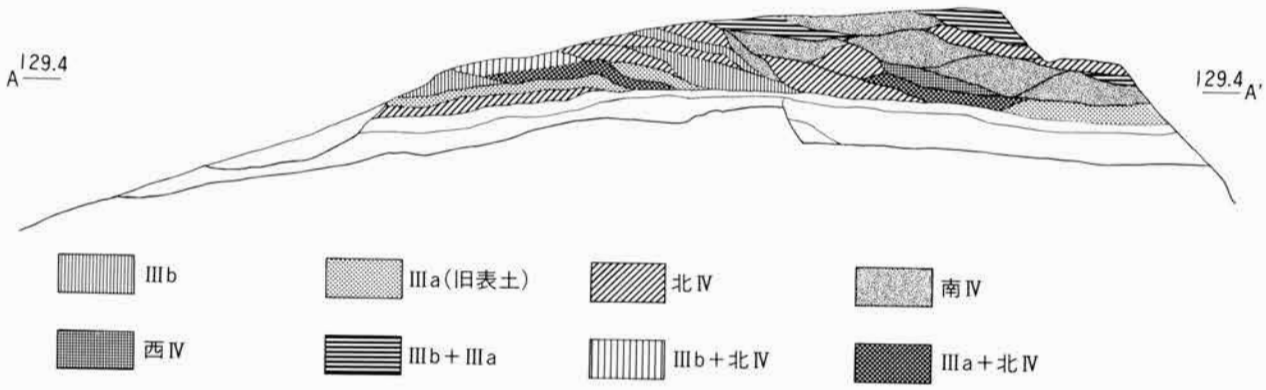


図153　SX01 墳丘起源別墳丘断面図(1/50)

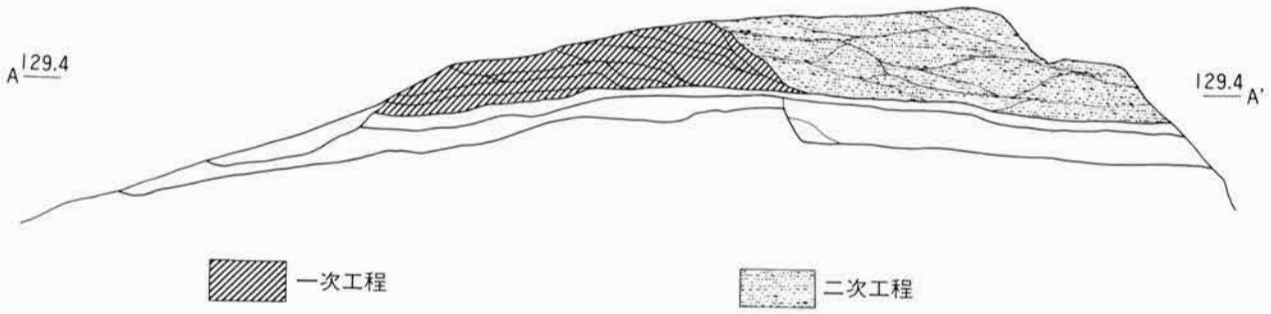


図154　SX01 工程別墳丘断面図(1/50)

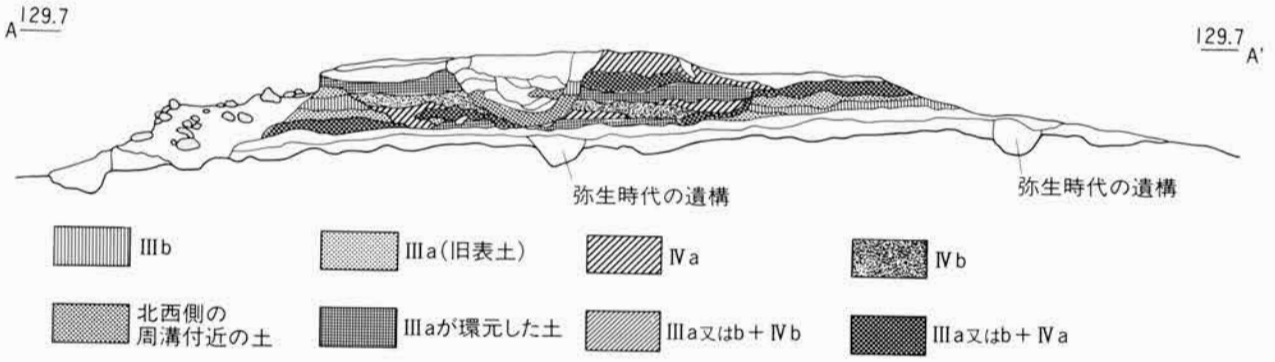


図155　SX02 墳丘起源別墳丘断面図(1/50)

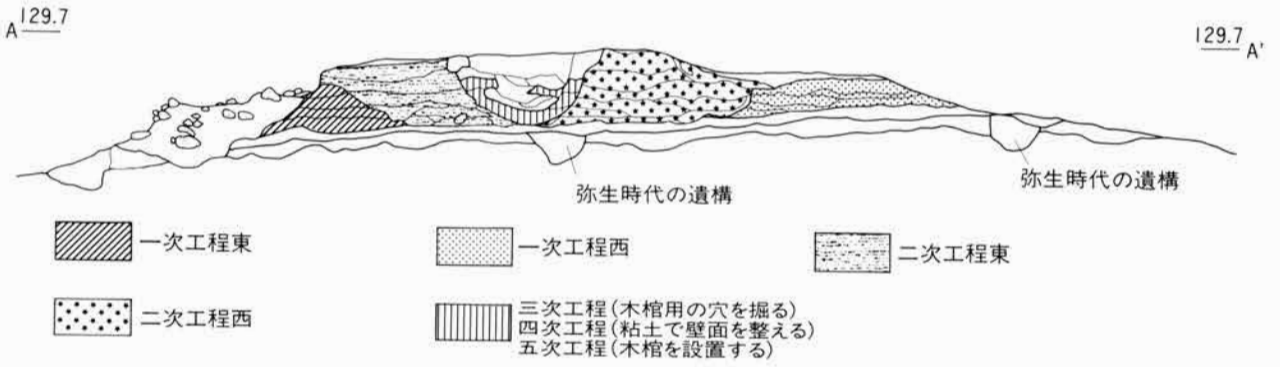


図156　SX02 工程別墳丘断面図(1/50)

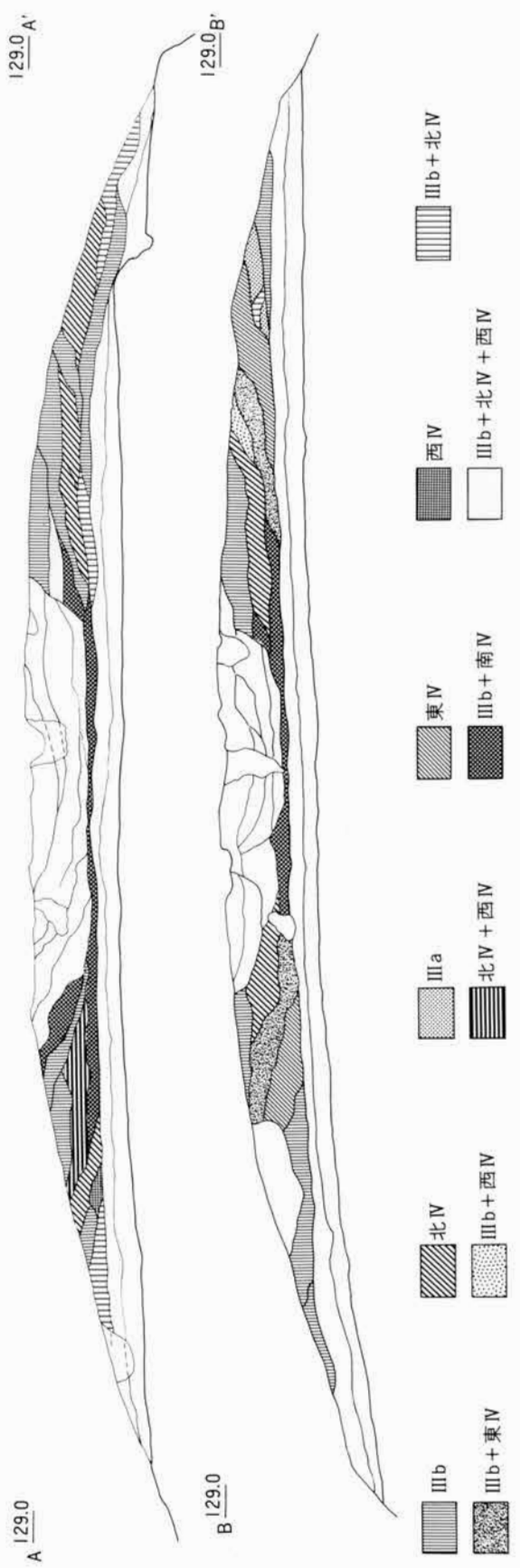


図157　SX03　墳丘起源別墳丘断面図(1/50)

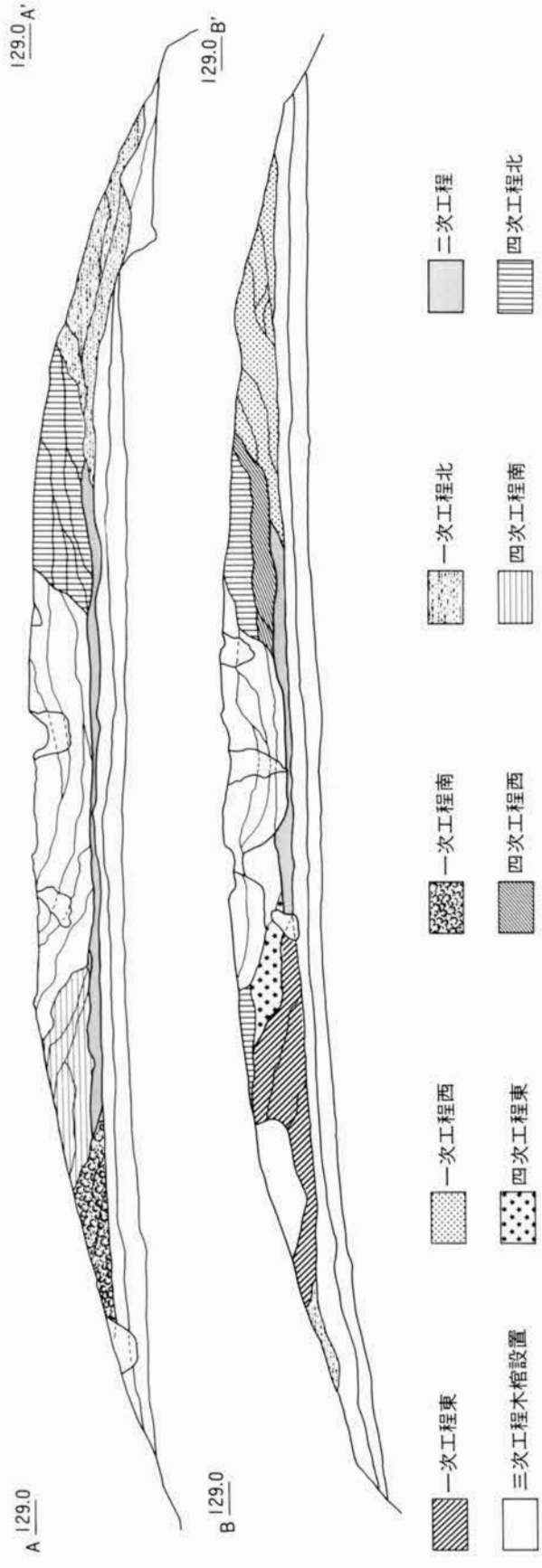


図158　SX03　工程別墳丘断面図(1/50)

平に土を敷いているが、SX05では、木棺を設置する場所に円錐状に土を盛り上げている。その後、その上に木棺を置いている。さらに、外側の土塁と木棺の間に土を充填し、最後に木棺を覆う土を上からかぶせ、墳丘を作り上げている。SX05もSX03と同様Ⅲ層とⅣ層の混合土が盛り土に使用されている。

2　4基の方形周溝墓の墳丘築成の比較

SX01・SX02・SX03・SX05の4基の墳丘築成について説明したが、それぞれに特徴がみられる。

基本的にSX03とSX05の墳丘築成の過程は同じであると思われる。築成の工程もその順番もほぼ同じであり、断面や平面から考えられる主体部（木棺）の形状もよく似ている。ただ、SX05を作った場所がSX03のある場所より旧地形の傾斜が強いので、途中の工程で2基に次のような違いがある。比較的水平を保っている地表面を利用して、土を水平に薄く盛り土した上に木棺を設置しているSX03に対し、南東に傾斜している斜面のため木棺を設置するために三角状に土盛りをし、その上に木棺を置くようにしているSX05という違いである。

盛り土の置き方から考えて類似しているものはSX03とSX05である。どちらも土を外側から内側へ向かって流し込むようにしている。水平にならしていくという感覚はない。その点では、SX01も同様なことが言えるが、その他の築成の工程では類似していない。墳丘が半分以上削られはっきりしないこともあるが。以上の3基に対し、SX02ではどの過程においても水平を意識して盛り土をした後に土を平らにならしている。

盛り土の方法を別の観点から見ると、SX02・SX03・SX05については、墳丘の端部に土塁状の土盛りをし、その内側に土を充填するパターンのみから比較すると共通しているようにみえる。さらに、主体部の木棺設置状況を併せてみると、SX03とSX05はさらに類似している。SX03とSX05は先に木棺を設置し、後から周囲の土塁状の盛り土と木棺の間を土で埋めて木棺が動かないようにしている。SX01の状況は外側の土盛りを土塁状のものと考えることもできるが、墳丘面全体の断面が残っていないので、確定できない。SX02については、墳丘端部に土塁状の土盛りをした後、その内側に先に土を充填している。その後木棺が設置できる分の穴を掘り木棺を固定している。SX03やSX05とは逆の手順である。また、木棺の周りに粘土を貼り付けて固定しているのはSX02だけである。設置される木棺の形状も、SX03・SX05のように舟底状木棺を設置してあると思われるものと、SX02のようにもう少し断面形が丸い木棺を設置しているものとの違いが見られる。

最後に、墳丘全体の状態を断面の状況からみると、SX01・SX02に対してSX03・SX05の墳丘の盛り土の方法は、それほど高く積む意識がないと思われる。墳丘端部の土塁状の土盛りもSX03・SX05のほうが高さが低く、内側に高く土を盛る意識も薄いように思われる。それに対し、SX02のように土塁状の三角形の裾の広がりが均等で、水平に盛り土する意識が感じられる。その内側に盛られる土は多く、当然墳丘自体も高くなる。逆に周溝部分の深さは、SX03・SX05の方が深く急である。これは、墳丘を南東の平地部分から見えるようにするという点もあるが、地表面に対し盛り上げてつくるか、それとも地表面を掘り込んで墳丘とするかという意識の違いがあるように思われる。この中にSX01がどう入るかはっきりしないが、どちらかというとSX02に近いと思われる。

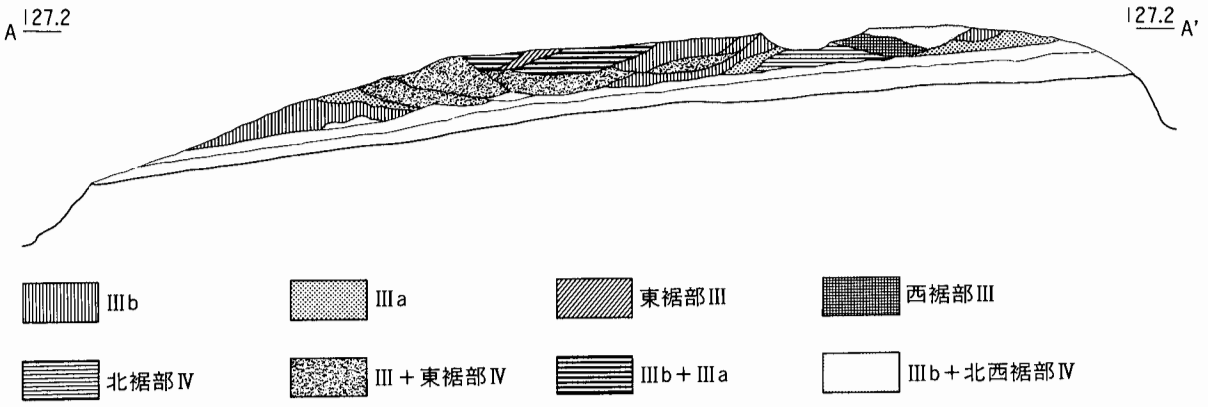


図159　SX05 墳丘起源別墳丘断面図(1/50)

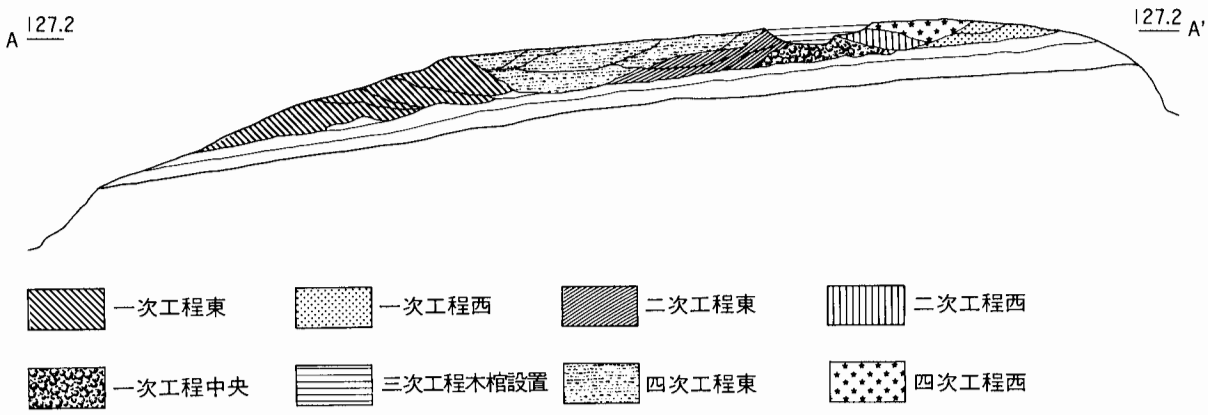


図160　SX05 工程別墳丘断面図(1/50)

3　方形周溝墓の墳丘築成と年代について

墳丘築成の状況を検討したが、次のようなことが考えられる。４つの方形周溝墓は、大きく２つのグループに分けられると思われる。１つは、①SX03・SX05のグループ。もう一つは②SX01・SX02のグループである。①グループは、墳丘面が旧地表面からあまり高くなく、土の置き方が地面に水平ではなく外から内に流し込むようになっているもの。②グループは、旧地表面から墳頂部までの高さがかなりあり、主体部の木棺は墳丘面ができあがってから埋めるか、できる途中に穴を掘って埋めている。いずれにせよ、①のグループとは異なる。ただ、SX01の盛り土の方法は、旧地表面に関係なく平行に外から内へと置いている。

４つの方形周溝墓出土の土器の年代と併せて考えてみると次のようになる。

①グループはSX03・SX05で、本報告書の時期区分のII－１～２期のもので、②グループが、SX01・SX02で、時期区分のII－２～３期のものになる。SX01とSX02の時期差を考えると、出土土器の状況と一致している。

注）参考文献については後の頁にまとめて掲載した。

第2節　金ヶ崎遺跡の方形周溝墓と周辺遺跡の関係について

1　金ヶ崎遺跡の方形周溝墓群について

金ヶ崎遺跡では方形周溝墓を12基検出したが、それらは出土遺物や墳丘の構築状況などからいくつかの時期に分けられる。ただ、調査区内で全体が発掘できたものは、SX01・SX02・SX03・SX05・SX09・SX11・SX12・SX13・SX15の9基である。この9基を中心にグループ分けをしたい。

まず、AグループはSX15である。この遺構は、他の方形周溝墓からやや西に離れ、規模的にも他の遺構と比較して小さい。周辺に同じタイプの遺構はなく西に土坑群が見られる。出土遺物はないが3世紀中葉の時期の方形周溝墓かと思われる。Bグループは、SX03・SX05・SX12である。これらは、墳丘の規模・構築状況・出土遺物などから見て同じような時期・内容の遺構である。特に、SX05は主体部より多孔銅鏃が出土し、SX03・SX05・SX12は周溝等から時期決定ができる出土遺物が見られる。また、遺構全体の発掘を行っていないので確定はできないが、SX06・SX07・SX14は、SX03・SX05と周溝が重なり同じタイプの方形周溝墓の可能性が高く同じグループに入ると思われる。Cグループは、SX09・SX11である。SX09・SX11は、Bグループから50mほど北にある。出土遺物は、SX09がBグループの遺物と近い時期の遺物が出土している。周溝の平面形がBグループのものとやや異なり、墳丘の各辺の中心位置の周溝部分の幅が広い。出土遺物から考えるとBグループに属する可能性もあるが、平面形と位置から、Cのグループとした。なお、SX09の西、SX11の南に位置するSX10は、周溝から出土した遺物から5世紀後半の古墳時代の遺構と考える。Dグループは、SX01・SX02・SX13である。SX01は、周溝等の状況から前方後方形の方形周溝墓と思われるが、SX01・SX02の出土遺物をみると、3世紀後半から4世紀前半にかけての遺構と思われる。また、SX02は、Bグループのものと類似した平面形をしているが、遺構そのものの規模がBグループのものより大きく、むしろSX01の後方部の規模に近い。墳丘の築成方法もBグループの方形周溝墓よりも旧地表面から土盛りをする高さも高く、主体部の設置状況もSX03やSX05のものと異なる。そこで、この3つの遺構をDグループとした。

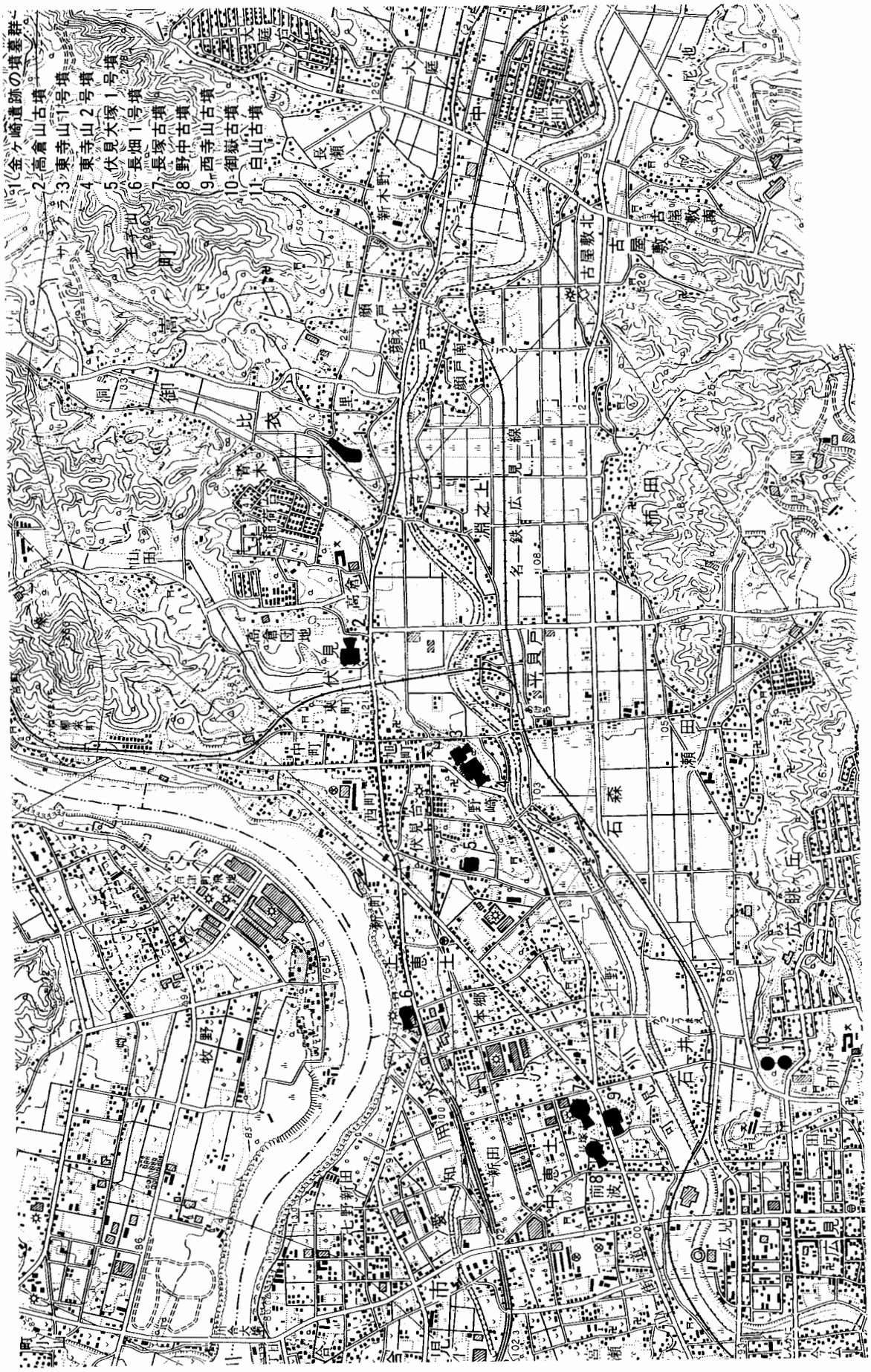
9基の周溝墓を4つのグループに分けたが、時期的な流れとしてはAからDの方向へと向かうと思われる。少なくとも、B・CグループからDグループへと移行すると思われる。また、グループ内の状況も、Bグループが群集しているのに対し、Dグループが散在していることがわかる。

金ヶ崎遺跡の方形周溝墓群に共通する内容は、遺構の南東部または南部に陸橋らしきものがつくられていることがあげられる。AからDのグループ分けをしたが、ほとんどの遺構でこの陸橋状の遺構を検出した。

2　金ヶ崎遺跡の方形周溝墓と周辺の遺跡の関係について

金ヶ崎遺跡周辺には、西に「伏見古墳群」と「前波古墳群」が展開している。これらの古墳群の中の主要古墳は次のように系統付けられている。

「伏見古墳群」の高倉山古墳、東寺山1号墳、東寺山2号墳は前方後方墳で、高倉山古墳→東寺山1号墳→東寺山2号墳の系列が考えられており、「前波古墳群」の西寺山古墳、野中古墳、長塚古墳は、前方後方墳と前方後円墳の両方があり、西寺山古墳→野中古墳→長塚古墳の系統が考えられてい


1 金ヶ崎遺跡の墳墓群
2 高倉山古墳
3 東寺山11号墳
4 東寺山2号墳
5 伏見大塚1号墳
6 長畑1号墳
7 長塚古墳
8 野中古墳
9 西寺山古墳
10 御嶽古墳
11 白山古墳
名鉄広見線
洲之上
瀬戸南
瀬戸北
新木野
長瀬
古屋敷北
古屋敷
坊田
石森
瀬田
広瞰
井ノ口
上野
中本郷
中町
西町
新町
東町
牧野
新田
知多
愛知
市役所
伊川
広見

る。基本的には、東の伏見古墳群から西の前波古墳群への首長権の移動が考えられているようであるが、高倉山古墳のさらに東に位置する金ヶ崎遺跡の方形周溝墓群について、これらの古墳群とどのように関連付けられるか考えてみたい。

金ヶ崎遺跡の方形周溝墓群は、多くが方形周溝墓であるが、SX01のみ前方後方形の方形周溝墓と考えられる。金ヶ崎遺跡の方形周溝墓の位置は、「伏見古墳群」の中で一番古いとされている高倉山古墳から東へ1㎞のところに位置している。高倉山古墳・金ヶ崎遺跡の方形周溝墓とも台地状の土地に位置し立地もよく似ている。また、SX01・高倉山古墳とも前方後方形をしている。このようなことから、金ヶ崎遺跡の方形周溝墓は「伏見古墳群」との関わりが深いと考える。SX01は、金ヶ崎遺跡の方形周溝墓群の中でDグループに位置し、最後の時期の1群として3世紀中葉から4世紀前半の年代を想定している。「伏見古墳群」の中で1番古いと考えられている高倉山古墳が、3世紀の終わりから4世紀の前半段階に位置づけられるので、金ヶ崎遺跡のSX01は高倉山古墳に先行して作られた前方後方形の方形周溝墓だと思われる。ただ、高倉山古墳は今のところ単独で存在する「古墳」であるのに対し、金ヶ崎遺跡のSX01の近くには多くの方形周溝墓が存在することから、この遺跡の方形周溝墓群のイメージは、弥生時代後半の群集する方形周溝墓のイメージを残している。特に金ヶ崎遺跡の方形周溝墓群の中で、SX01とほぼ同じ時期または多少後の時期の遺構であると思われるSX02の存在は、高倉山古墳の単独立地と異なる。ただ、御嵩町の隣りの美濃加茂市には、方形の墳丘墓を有する伊瀬粟地遺跡があり、金ヶ崎遺跡SX05主体部から出土した多孔銅鏃よりも古いと思われる多孔銅鏃が出土している。単独の墳丘墓であるが、金ヶ崎遺跡SX01よりも古い遺構であることから、この地域の同じような性質を持つ遺構は、地域によって多少の差があるとも考えられる。

最後に、金ヶ崎遺跡の方形周溝墓群を、前方後方墳を中心とする伏見古墳群から前波長塚古墳を中心とした前波古墳群への流れの先頭に位置づけた。だが、金ヶ崎遺跡の方形周溝墓群にも時期差があり、9基すべてを、古墳時代に先行する弥生時代的な一群としてとらえるのか、4つグループのなかのある時期以降を古墳時代に位置づけるか、すべて古墳時代のものとするのかは、解釈がわかれる所である。

注）参考文献については後の頁にまとめて掲載した。

第３節　金ヶ崎遺跡の竪穴住居跡・掘立柱建物跡について

１　金ヶ崎遺跡の竪穴住居跡と掘立柱建物跡の概要について

金ヶ崎遺跡では、29軒の竪穴住居跡と６軒の掘立柱建物跡を検出した。これらの住居跡及び建物跡が立てられた場所は、方形周溝墓が位置する台地の尾根筋から南東斜面にかけてである。特にSB06・SB16Ａ・SB16Ｂ・SB23・SB27・SB28については、方形周溝墓の下又は、方形周溝簿墓の周溝部分に切られた状態で検出している。また、SB17については南東斜面で検出した２間×４間の掘立柱建物である。

以上の遺構は、１時期のものではなく、大きく２時期に分かれるものものと思われる。１時期は、３世紀中葉、もう１時期は７世紀後葉から８世紀初頭にかけてと思われる。

２　３世紀中葉の竪穴住居跡について

29軒の竪穴住居跡の中で３世紀のものと思われるものは９軒ある。決め手にかけるが、３世紀のものではないかと思われるものを含めると11軒ある。その中で、明らかに方形周溝墓が作られた層位の下の層位に作られた住居跡は、SB16A・SB16B・SB23・SB27・SB28の５軒である。方形周溝墓の周溝部分に切られているものが、SB06とSB15である。その他、出土遺物から３世紀中葉と思われるものは、SB01とSB02である。以上のことから３世紀中葉、少なくとも３世紀の竪穴住居跡と思われる11軒の住居跡は、方形周溝墓が作られる以前の段階でこの地域に存在した住居跡であると思われる。SB01とSB02は位置関係から同時存在とは考えにくく、少なくとも２時期に分かれると思われる。

また、SB07・SB28を除くと、他の９軒の竪穴住居跡は標高128ｍ～128.5ｍの等高線上に展開している。金ヶ崎遺跡は、北東から南西にのびる舌状の台地に立地しているので、南西や北東の同一等高線上に竪穴住居跡が展開していた可能性もある。

竪穴住居跡の特徴は、多くの住居跡の主軸がＮ－20°～40°－Ｅの範囲に収まっていることである。また、竪穴住居内の多くに焼土域を確認し、壁溝を持っている。竪穴住居跡そのものの規模は、SB16AとSB28はやや大型の住居跡であるが、それ以外は１辺が４ｍ前後の竪穴住居跡であった。

３　７世紀後半から８世紀初頭の竪穴住居跡と掘立柱建物跡について

金ヶ崎遺跡の竪穴住居跡の中で７世紀後半から８世紀初頭のものが18軒、掘立柱建物跡は６軒ある。

３世紀中葉の時期の竪穴住居跡が標高128ｍ～128.5ｍ周辺に立地していたのに対し、７世紀後半のものは、標高の異なる３つのグループに分けられる。まず、SB03・SB04・SB05・SB17・SB26の掘立柱建物跡やSB19・SB20・SB21の竪穴住居跡を中心とする標高127ｍ～128ｍに位置するＡ群。SB29の掘立柱建物とSB08～SB13Ｃ・SB24～SB25Ｂの竪穴住居跡がまとまっている標高125.5ｍ～127ｍの範囲に位置するＢ群。最後に123ｍ～123.5ｍに位置するSB14A・SB14BのＣ群である。Ｃ群は、標高差があるだけで竪穴住居の主軸などからＢ群に含まれる可能性もある。Ａ群が展開する金ヶ崎遺跡の北東側は、良好な平地が展開しているので、Ａ群が北東方向へ展開する可能性がある。また、Ｂ群やＣ群の南東方向の斜面には畑地があり、その畑地から同時期の須恵器などが出土していることから、南東方向にＢ群およびＣ群の住居群が展開していた可能性もある。

A群の住居群は、竪穴住居跡と掘立柱建物跡の両方が存在し、SB03のように南に庇をもつ建物の東に、総柱の建物を少なくとも2棟（SB04・SB05）もつ住居群や、柱穴の直径が60cmあまりの2間×4間の掘立柱建物跡（SB17）を斜面に建てていることから、かなり大規模な集落の可能性がある。また、時期は確定していないが、2間×4間の掘立柱建物跡（SB26）が金ヶ崎遺跡のやや西よりの平坦な部分にみられる。

B群およびC群の住居群は、かなり切り合いが多く何度も建て替えを行っている。SB09・SB10やSB14A・SB14Bのように明らかに2時期確認できるものもあるが、SB12A・SB12B・SB13A・SB13B・SB13C・SB24・SB25A・SB25Bのように複雑な切り合い関係が見られるものもある。ただ、比較的等高線に対して平行に住居の輪郭が確認できるものと、等高線に対してやや傾きをもった形で住居の1辺が確認できるものがある。SB12A・SB13A・SB25Aが比較的同じ方向に軸を持ち、SB11・SB12B・SB13B・SB13C・SB24・SB25Bが比較的同じ方向を示している。

B群の中にはやや高い等高線上にあるSB29もある。SB29は、住居跡の可能性よりも櫓のような建物で、建物の南側には須恵器が多く廃棄してあり、祭祀を行った場所の可能性がある。また、SB10より出土した横瓶は胴部の長径が60cmもあり、日常生活に使用する可能性と同時に祭祀に使用された可能性もある。よってSB10は、このグループのなかで特別な位置づけをした住居かもしれない。

A群・B群とも竈をもつ住居跡と持たない住居跡がある。SB09とSB10やSB14AとSB14Bのように、竈のないものはないものに、竈のあるものはあるものに建て替えらえていたが、そのほかの住居跡については、はっきりしない。

7世紀後半から8世紀初頭の竪穴住居群については大きく2つのグループに分けたが、時期的には大きく差があるわけではなく同時展開の可能性がある。A群には掘立柱建物跡が多く、B・C群にはSB29の櫓のようなものしか見られないので、1つの集落における機能差の可能性もあると思われる。ただ、A群の竪穴住居群には、明らかな建て替えの状況が確認できず、B・C群には少なくとも2時期以上の建て替えの状況が確認できているので、B・C群のグループが時間的に長く存在していた可能性がある。

注）参考文献については後の頁にまとめて掲載した。

第４節　金ヶ崎遺跡中近世墓群と出土人骨について

金ヶ崎遺跡で検出した中近世墓は113基あり、人骨を確認したものが46基存在した。その中で、遺構と人骨が明確に一致するものは41基である。（ＳＤ03とSX05からも人骨が出土しているが、遺構として確認していない。）

全体として次のような傾向が見られる。

41基のうち、約半数の14基について火葬の可能性があった。残りは、土葬の可能性が考えられるものが３基、両方の可能性があるものが１基、状態が悪く火葬・土葬の区別がつかないものが23基ある。（表７参照）この中で、特に火葬されたと思われる人骨について述べたい。

中世の日本人一体分の火葬人骨の総重量は2000ｇ以上であるが、金ヶ崎遺跡中近世墓の人骨の残量は400ｇを超えるものはない。これは、意図的に選んで火葬したものか、偶然そうなったものかは、はっきりしない。残存する骨の部位についても、頭骨や手足の骨の先の部分が多く残り、中心の背骨や腰骨はあまり見られない。肋骨は、一部残っているものもあるが数は非常に少ない。このことから、部分的に選んで火葬したか、火葬したものから部分的に骨を取り出し、埋葬し直した可能性も考えられる。ただ、人骨が出土している遺構の多くは炭化物を含み、その場で火葬した可能性が高いと思われる。また、遺構を検出した場所が東斜面であるあることから、遺構が何かの原因で削られ人骨が流失した可能性も考えられるが、どの遺構も多くが集石の残りが良く、人骨が雨などで流出した可能性は少ないと思われる。さらに、土壌の関係で骨自体が土壌と一体化する可能性もあるが、残存部分が、特定の部位に偏っているのは不自然であると思われる。いずれにしても、１遺構に一体分の人骨量はないことは明らかで、この傾向は、『一の谷中近世墓群』出土の埋葬人骨などと同様の特徴のようである。

次に、火葬の状態について述べたい。全体的に火葬状態がよいものが多く、800℃以上又はそれに近い温度で火葬しているので、骨の変形や亀裂が見られるものがある。800℃以下で火葬すると骨が灰色に近い色を示すものがあるが、そういう人骨は少ないようであった。これらのことから、金ヶ崎遺跡の中近世墓を作った人々には、800℃以上に温度を保てる火葬技術があったものと思われる。

最後に、埋葬された人々の性別と年齢について述べる。人骨の性別については、性別の特徴を示す人骨が少なく、多くのものは識別できなかった。男性と思われるもの２遺体分、女性と思われるもの１遺体分確認した。年齢については、頭蓋骨のラムダ部の縫合線の接合状態から判断したが、35歳以下の人骨と思われるものが７遺体分、35歳以上のものと思われるものが２遺体分みられた。現代人からみて比較的若い年齢の人々が埋葬されていたことがわかる。しかし、中近世の平均寿命からみると、若いとは言い切れないかもしれない。

注）人骨の整理・観察・分析については、杉原麻記氏（当時文化財保護センター補助調査員）の協力を得た。
　　参考文献については、後の頁にまとめて掲載した。

表7　金ヶ崎遺跡人骨一覧表

遺構名	各部位重量(g)				総重量(g)	保存状態	備　考	図版
	頭部	胴部	手・足	その他				
SZ01			2.5	5.5	8.0	悪い	骨の保存状態悪く、識別出来ない。	
SZ04			5.6	9.4	15.0	良好	尺骨先端部を残す。残存径2.7cm。保存状態良好。800℃以下の火葬と考えられる。	
SZ05	30.4	19.6	103.5	134.3	287.3	良好	骨の変形なし、800℃前後の温度で火葬と考えられる。頭部内外面が完全に開いている。35歳以下。乳様突起から男性の可能性高い。上腕骨先端3.2cm。前歯1本。	50
SZ06	10.8	0.5	39.6	30.4	92.6	良好	頭骨内面、縫合線の内面の接合し始めた形跡有り。800℃以上。骨の変形有り。上腕骨先端残存径2.4cm。	
SZ08				1.1	1.1	悪い	小片のみ残す。劣化激しく、識別不可能。	
SZ09	61.6	2.5	32.9	55.2	174.7	良好	骨の変形有り。縫合線は内外面に完全に開いている。35歳以下。	50
SZ10			8.1		8.1	悪い	小片のみ残す。識別不可能。火葬か土葬か判別できない。骨の変形なし。	
SZ11			21.5	34.4	55.9	悪い	状態悪く、手・足の一部のみ確認できる。劣化激しい。	
SZ12B	4.9	1.3	21.5	26.5	54.2	良好	頭部内外面接合面残る。35歳以下。骨の変形なし。亀裂有り。800℃位前後の温度で火葬されたと考えられる。背骨・指の骨が確認出来る。	
SZ14A			0.3		0.3	良好	足か手の指1点のみ出土。判別不可能。	
SZ17				0.9	0.9	悪い	小片のみ残す。状態悪く、識別不可能。	
SZ18	13.4	0.9	30.5		44.8	良好	800℃前後の火葬と考えられる。骨の変形なし。手・足の指の骨を多く確認できる。頭部の眉頭の突起から男性の可能性高い。腰骨の一部も有り。	
SZ19				0.9	0.9	悪い	小片のみ残す。状態悪く、識別不可能。	
SZ20				0.2	0.2	悪い	小片のみ残す。状態悪く、識別不可能。	
SZ21	13.4			7.6	21.0	良好	35歳以上。縫合線の接合面に摩耗が確認できる。	
SZ23		3.5	25.6	9.8	38.9	良好	800℃前後での火葬？骨の変形なし。亀裂有り。脛骨の先端部確認。	50
SZ29				0.8	0.8	悪い	小片のみ残す。状態悪く、識別不可能。	
SZ32				7.6	7.6	悪い	小片のみ残す。状態は悪い。識別可能。手・足が多いと考えられる。	
SZ33	36.1	2.8	160.5	170.6	370.0	良好	頭部の縫合線が完全に開いている。35歳以下。800℃以上。骨の変形有り。尺骨の先端。背骨の一部確認。	50
SZ35		0.8			0.8	良好	背骨1点のみ出土。	
SZ40	8.0	4.5	21.7	23.2	57.4	良好	指の第二関節。火力弱い火葬と見られる。頭部・内面の縫合線の接合した可能性有り。頭部の劣化激しい。	50
SZ41	29.4	4.8	5.2	70.9	110.3	悪い	頭部縫合線は完全に開いている。35歳以下。橈骨先端を確認。	50
SZ42				0.1	0.1	悪い	小片のみ残す。劣化激しく、識別不可能。	
SZ44			21.7	3.2	24.9	良好	小片のみ残す。手・足の指がわずかに確認出来る。	
SZ45				10.5	10.5	良好	小片のみ残す。劣化激しいが骨の亀裂が確認出来る事から火葬温度は800℃以上であったと考えられる。	
SZ46			24.3	14.0	38.3	良好	小片のみ残す。骨の変形は見られない800℃前後と考えられる。	
SZ48	26.5		92.5	150.0	269.0	良好	800℃以上。骨の変形有り。前歯一点。	50
SZ53				0.9	0.9	悪い	小片のみ残す。状態悪く、識別不可能。	
SZ54			45.8	66.3	112.1	良好	手・足の大きな部位が確認出来る。骨の変形・亀裂が見られない事から、土葬の可能性を残す。	
SZ55	35.1	2.2	56.6	106.2	200.1	良好	頭部内外面に縫合線が開いている。35歳以下。頭部の形成具合から女性である可能性が考えられる。800℃以上。骨の変形有り。肋骨・かかとの骨確認。	
SZ57			42.0	39.3	81.3	良好	土葬の可能性が高いと考えられる。手・足のみの出土。	
SZ61				3.2	3.2	悪い	小片のみ残す。劣化激しく、識別不可能。	
SZ64				4.7	4.7	悪い	小片のみ残す。劣化激しく、識別不可能。	
SZ68			35.3	41.2	76.5	良好	小片のみ残す。骨の変形なし。800℃以下であろうと考えられる。	
SZ69				3.5	3.5	悪い	小片のみ残す。劣化激しく、識別不可能。	
SZ73	4.6		60.4	9.1	74.1	良好	800℃以上。骨の変形有り。35歳以上。腓骨先端の一部を確認。	50
SZ75	32.7	0.4	19.2	28.6	80.9	悪い	頭部縫合線は完全に開いている。35歳以下。前歯有り。	
SZ76				7.8	7.8	悪い	小片のみ残す。劣化激しく、識別不可能。	
SZ78	1.5		17.2	28.1	46.8	悪い	小片のみ残す。劣化激しく、識別不可能。前歯有り。	
SZ88	48.9	0.7	25.2	103.5	178.3	良好	頭部縫合線の内面は接合開始の兆候有り。顎のあたりの部位を多く残す。前歯有り　手・足が多い。骨の変形なし。800℃以上での火葬か？足の指先を多く残す。火葬でその部位は残るのか土葬の可能性を捨てきれない。	50
SZ91			21.4	34.7	56.1	良好	骨の状態きわめて良好。土葬の可能性が考えられる。手・足のみが確認。	
SD03				5.7	5.7	良好	小片のみ残す。亀裂有り。800℃以上と考えられる。	
SX05				2.7	2.7	悪い	小片のみ残す。手か足の指であると考えられる。800℃前後で焼かれた可能性有り。	
その他 SZ02 SZ97 SZ99				55.5	55.5	良好		

第５節　金ヶ崎遺跡出土石器の考察

製品および石核、剥片の出土総数は64点に留まり、土器に較べると断然少ないが、主な特徴として次の３点が挙げられる。

まず、第１点は、打製石斧の占める割合が多いことである。石製品とみなされる46点のうち43％の20点が打製石斧である。製作にあたっては、素材となる剥片は横長剥片や縦長剥片など様々であるが、どれもその周囲に粗い調整を施して形状を整えたに留まっている。これらの表面は風化が進行し、多くを折損するという状況の中で、刃部が残存する14点のうち、７点に使用によると思われる磨痕が認められる。この刃部使用痕や形態的に刃幅が狭い短冊型のものが半数以上を占めること、さらに遺跡が高位段丘状に立地することなどから、この地における根茎類の採集による生活をうかがうことができる。また、ホルンフェルスや泥岩などのフレイクが認められることから、打製石斧の製作もこの遺跡で行われていたと想定される。

第２点めの特徴として、石庖丁３点と打製穂摘具１点が出土していることに注目される。これらは一般に収穫具とされるが、この３点に対して顕微鏡観察を実施したところ、石庖丁の1点にコーングロスが確認され、実際にイネ科植物の収穫具として使用した可能性が大になった。

第３点めは、９種という多種の石材の性質を活用し、それらを器種によって使い分けていることである。在地色の強いチャートの石核およびフレイクの存在は剥片石器の製作を物語るものであり、実際に石鏃等の剥片石器にも用いられている。石英のフレイクも剥片石器に用いられたものであろう。また、ホルンフェルスや泥岩は、打製石斧や打製穂摘み具など比較的大型の剥片石器に限定されている。五輪塔の石材に用いられた花崗岩は、敲打による加工・整形に適し、しかも見映えするという特性を有するものである。ホルンフェルスや泥岩、花崗岩は可児川上流から運ばれたものと思われる。

これらのほかに、搬入品としてサヌカイトと下呂石のフレイクが認められ、勾玉や管玉に使用されたヒスイや緑色凝灰岩がもたらされていることから、関西地方から北陸地方にかけての広い交易をうかがうことができる。

表　覧　一　構　遺
表　察　観　物　遺

表8　金ヶ崎遺跡方形周溝墓・古墳一覧表

遺構名	グリッド	墳丘		周溝		埋葬施設					時期	備考	挿図	図版
		形状	規模(m)	幅(m)最大 最小	深さ(m)最大 最小	番号	形態	掘り方規模(m)	棺の規模(m)	主軸				
SX01	O8	前方後方形	前方 12.0×(7.7) 後方 (20.5)×20.0	2.0 1.4	0.15 0.05	—	—	—	—	—	弥生末～古墳初頭		76 77	12 14
SX02	H24	方形	18.7×17.2	4.7 1.7	0.3 0.06	1	割竹型木棺	1.8	不明×1.1	不明	弥生末～古墳初頭		79 80	12 14
SX03	F28	方形	11.0×11.6	2.6 1.4	0.7 0.1	1	舟底状木棺		3.5×1.7	N-29°-E	弥生末～古墳初頭		82 83 84	12 15
SX04	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	誤認。		
SX05	H32	方形	8.9×9.8	3.5 1.9	0.5 0.1	1	舟底状木棺		2.4×0.9	N-30°-E	弥生末～古墳初頭	SD15、SK19を伴う。	88 89 90 91	13 17 18
SX06	—	方形？	—	—	—	—	—	—	—	—	弥生末～古墳初頭	一部検出。SX03より新しい。		
SX07	—	方形？	—	—	—	—	—	—	—	—	弥生末～古墳初頭	一部検出。SX03より新しい。		
SX08	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	調査区外。		
SX09	N16	方形	9.9×10.4	4.8 1.4	0.4 0.05	2			2.9×1.0	N-15°-W	弥生末～古墳初頭	周溝内に土坑墓を伴う。追葬である。	94 95	13 19
SX10	J16	円形	径13.0	7.5 2.4	0.5 0.1						5世紀後半		103	13 20
SX11	K12	長方形	10.3×7.8	4.1 1.7	0.2 0.03						弥生末～古墳初頭		97	13 20
SX12	I29	方形	7.6×6.4	2.6 0.9	0.8 0.3						弥生末～古墳初頭		98	13 21
SX13	K22	方形	7.1×不明	1.5 0.8	0.07 0.03						弥生末～古墳初頭		100	21
SX14	—	方形？	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一部検出。		
SX15	G18	方形？	4.7×不明	4.8 0.7	0.4 0.04						弥生末～古墳初頭		100	22

表9　金ヶ崎遺跡竪穴住居跡一覧表

遺構名	グリッド	形態	長軸×短軸×深さ(m)	面積(㎡)	主軸	周溝	地床炉	時期	備考	挿図	図版
SB01	P12	隅丸方形	4.0×3.8×0.2		N-30°-E		?	弥生末～古墳初頭		12	3
SB02	P13	隅丸方形	4.2×不明×0.4		N-16°-E	○	○	弥生末～古墳初頭		14	3
SB06	P15	隅丸方形	不明×不明×0.2		N-不明		?	弥生末～古墳初頭	SX09下	16	4
SB07	I33	隅丸方形	3.3×不明×0.2		N-64°-W		△	3世紀？		31	4
SB08	J31	隅丸方形	4.3×3.1×0.3		N-35°-W	○		7世紀後半	竈	35	5
SB09	K30	隅丸方形	不明×不明×0.2		N-40°-W	○		7世紀後半	焼土	37	5
SB10	K29	隅丸方形	4.2×不明×0.2		N-47°-W	○		7世紀後半		38	6
SB11	K28	隅丸方形	3.6×不明×0.2		N-48°-W			7世紀後半		41	6
SB12A	L29	隅丸方形	不明×不明×0.4		N-26°-W	○		7世紀後半		42	6
SB12B	L28	隅丸方形	不明×不明×0.3		N-29°-E	○		7世紀後半	竈	42	6
SB13A	L27	隅丸方形	不明		N-不明	○		7世紀後半		45	6 7
SB13B	L27	隅丸方形	不明		N-不明	○		7世紀後半		45	6 7
SB13C	L28	隅丸方形	4.4×不明×0.6		N-52°-W	○		7世紀後半	竈	45	6 7
SB14A	K34	隅丸方形	5.2×不明×0.2		N-36°-W	○		7世紀後半	竈	46	7
SB14B	K34	隅丸方形	不明×不明×0.2		N-36°-W	○		7世紀後半	竈	48	7
SB15	K23	隅丸方形	3.2×3.2×0.2		N-不明			弥生末～古墳初頭		24	10
SB16A	I23	隅丸方形	4.3×4.1×0.5		N-55°-W		○	弥生末～古墳初頭	SX02下.古	25	11
SB16B	I23	隅丸方形	3.0×2.8×0.4		N-55°-W	○	○	弥生末～古墳初頭	SX02下.新	25	11
SB18	M19	隅丸方形	不明×不明×0.2		N-不明		?	弥生末～古墳初頭	SD21A下	28	11
SB19	N19	隅丸方形	3.8×3.6×0.1		N-87°-E	○		7世紀後半		58	10
SB20	O18	方形	不明×不明×0.1		N-78°-E			7世紀後半		60	10
SB21	P18	隅丸方形	不明×不明×0.2		N-52°-W	○		7世紀後半	竈	62	10
SB22	I28	隅丸方形	3.6×不明×0.2		N-43°-W	○		7世紀後半	竈	50	10
SB23	L11	隅丸方形	3.6×不明×不明		N-49°-E	○	○	弥生末～古墳初頭	SX11下	18	11
SB24	L27	隅丸方形	不明×不明×0.1		N-47°-W			7世紀後半	竈	52	11
SB25A	L26	隅丸方形	不明×不明×0.2		N-24°-W			7世紀後半		52	11
SB25B	L26	隅丸方形	不明		N-61°-W			7世紀後半		52	11
SB27	G27	隅丸方形	2.8×不明×0.5		N-44°-W	○	○	弥生末～古墳初頭	SX03下	52	11
SB28	O8	隅丸方形	不明×不明×0.2		N-39°-W	○	○	弥生末～古墳初頭	SX01下	20	11

表10　金ヶ崎遺跡掘立柱建物跡一覧表

遺構名	グリッド	柱間 (m)	軒 (m)	面積 (㎡)	主軸	時期	その他	備考	挿図	図版
SB03	N12	梁 1.9 桁 1.8	2間 3.9 3間 5.7	22.2	N-75°-W	7世紀後半～8世紀初頭	1間×3間 柱間 梁 1.2m 桁 2.3m 庇つき。	P05、P06、P09、P10、P21、P23、P25、P33、P47、P146、P147、P150、P154、P175	67	3
SB04	P12	梁 1.4 桁 1.4	2間 2.8 3間 3.9	10.9	N-60°-W	7世紀後半～8世紀初頭		P07、P08、P18、P19、P20、P26、P27、P28、P35、P155、P169	69	3
SB05	O13	南北 1.65 東西 1.65	2間 3.3 2間 3.3	10.9	N-52°-W	7世紀後半～8世紀初頭		P37、P38、P42、P45、P49、P50、P51、P54、P85	70	4
SB17	M21	梁 2.2 桁 1.9	2間 4.6 4間 7.3	33.6	N-8°-W	7世紀後半	北溝を伴う。	P66、P67、P68、P69、P103、P104、P105、P106、P107、P114、P115、P178	64	9
SB26	G21	梁 2.0 桁 1.4	2間 4.0 4間 6.4	25.6	N-69°-E	不明	北東に柵列を伴う。	P88、P89、P130、P131、P135、P140、P163、P164、P165、P166、P167、P168 SA03を伴う。	73	11
SB29	G30	南北 1.3 東西 1.7	1間 1.3 1間 1.7	2.2	N-86°-W	7世紀後半	南側に須恵器の集中区を伴う。	P171、P172、P173、P174	54 55	

表11　金ヶ崎遺跡柵列一覧表

遺構名	グリッド	主軸	柱間	時期	備考	挿図	図版
SA01	L15	N-67°-W	3間 (2.05m)		P72、P73、P109、P110	71	23
SA02	O14	N-10°-E	2間 (2.1m)		P152、P156、P157	71	23
SA03	H20	N-34°-W	3間 (2.4m)		P126、P134、P136、P141 SB26に伴う。	64	
SA04	J22	N-47°-W	2間 (2.4m)		P122、P124、P129	74	

表12　金ヶ崎遺跡溝一覧表

遺構名	グリッド	主軸	長軸×短軸×深さ(m)	出土遺物	時期	備考	挿図	図版
SD15	H30	N-35°-E	9.8×3.6×0.3		弥生末～古墳初頭		104	23
SD16	I32	不明	不明×1.1×0.2		不明		104	23
SD18	I23	N-59°-E	7.5×3.1×0.4		弥生末～古墳初頭		105	23
SD21A	M19	N-82°-E	6.0×0.6×0.2		7世紀後半	SB17に伴う。	29	10
SD21B	M13	N-17°-W	(3.2)×1.1×0.3	189	弥生末～古墳初頭	SD23に切られる。	106	
SD22	N12	N-79°-E	32.5×1.1×0.4		弥生末～古墳初頭	SK40に切られる。	106	
SD23	M13	N-33°-E	5.9×0.7×0.2		弥生末～古墳初頭		106	

表13　金ヶ崎遺跡土坑一覧表

遺構名	グリッド	主軸	長軸×短軸×深さ(m)	出土遺物	時期	備考	挿図	図版
SK06	N20	N-29°-E	1.8×1.3×0.3		弥生末～古墳初頭		107	
SK13	O16	N-41°-E	1.5×0.8×0.3		弥生末～古墳初頭	SX09同溝内にある。	107	
SK14	I22	N-66°-W	1.4×0.6×0.1		弥生末～古墳初頭	SX02内にある。	105	
SK16	J23	N-40°-E	2.1×1.6×0.5		弥生末～古墳初頭	SX02内にある。	105	
SK17	L21	N-48°-E	2.2×0.9×0.2	190	"弥生末～古墳初頭		107	
SK18	N21	不明	不明×0.5×0.3		弥生末～古墳初頭		107	
SK23	N13	N-55°-E	2.7×1.1×0.4		弥生末～古墳初頭		106	
SK25	G19	N-37°-W	2.0×0.8×0.5	191	弥生末～古墳初頭	SX15に切られる。	108	24
SK28	F18	N-16°-W	1.2×0.8×0.2		弥生末～古墳初頭		108	24
SK29	E19	N-27°-W	0.8×0.4×0.1		弥生末～古墳初頭		108	
SK30	E20	N-39°-E	0.8×0.6×0.2		弥生末～古墳初頭		108	
SK31	E20	不明	不明×0.5×0.1		弥生末～古墳初頭		108	
SK32	E20	N-52°-W	1.2×0.5×0.3		弥生末～古墳初頭		108	24
SK33	E20	不明	不明×0.4×0.2		弥生末～古墳初頭		108	
SK35	N14	N-89°-W	1.4×1.3×0.2		弥生末～古墳初頭		106	
SK36	N12	N-53°-E	2.5×1.3×0.2		弥生末～古墳初頭	SK41に切られる。	106	
SK37	N12	N-68°-E	2.2×0.6×0.2		弥生末～古墳初頭		106	
SK39	F18	N-33°-E	17.8×1.2×0.3		弥生末～古墳初頭		108	
SK40	N12	N-75°-E	0.8×0.7×0.4		弥生末～古墳初頭		106	
SK41	N12	N-82°-E	1.1×0.5×0.3		弥生末～古墳初頭		106	
SK44	F23	不明	不明×0.6×0.3		弥生末～古墳初頭		107	

表14　金ヶ崎遺跡中近世墓一覧表（1）

遺構名	グリッド	主　軸	上面規模(m) 長軸×短軸×深さ	下面規模(m) 長軸×短軸	形　式	人骨	炭化物	出土遺物	備　考	挿図	図版
SZ01	I26	N-5°-E	0.78×0.69×0.24	0.63×0.48	集I-A－2	○	○			111	
SZ02	G25	N-8°-W	0.75×0.54×0.06	0.69×0.43	集I-A－2	○	○			111	
SZ03	F24	N-29°5'-E	0.84×0.42×0.09	0.78×0.40	集II-A－2					115	
SZ04	H26	N-39°-E	1.17×0.75×0.15	0.87×0.45	土坑I-D	○	○	192		124	
SZ05	I26	N-90°-E	0.90×0.69×0.12	0.66×0.48	集I-A－2	○				111	
SZ06	J26	N-10°-E	0.81×0.60×0.33	0.27×0.45	集I-A－2	○				111	
SZ07	J26	N-46°-W	0.78×0.63×0.15	0.54×(0.36)	集I-A－2		○			111	
SZ08	J26	N-26°5'-W	1.14×0.82×0.18	0.87×0.66	集I-A－2	○	○			111	
SZ09	J26	N-22°-E	1.26×(0.75)×0.21	1.11×0.60	木棺がある土坑	○		313～318	SZ13を切る。	125	
SZ10	J26	N-23°-E	0.66×0.42×0.24	0.36×0.21	集II-A－2	○				115	
SZ11	J26	N-29°-E	1.11×0.66×0.21	0.96×0.36	集II-A－2	○				115	24
SZ12A	J27	不明			集II-A－2				SZ12Bに切られる。	115	
SZ12B	J26	N-21°-E	1.08×0.69×0.18	0.93×0.51	集I-A－2	○	○		SZ12Aを切る。	111	
SZ13	J26	N-38°-E	1.17×(0.60)×(不明)	1.05×(0.48)	集II-A－2				SZ09に切られる。	115	
SZ14A	I27	N-14°-E	(0.90)×0.48×0.15	0.69×0.36	集II-A－2	○			SZ14Bに切られる。	115	
SZ14B	I27	N-82°-E	0.66×0.51×0.06	0.51×0.36	集I-A－2		○		SZ14Aを切る。	111	
SZ15	J26	N-27°-E	0.72×0.45×0.34	0.48×0.30	集II-A－2					115	
SZ16	J26	N-82°-E	0.84×0.51×0.15	0.60×0.42	集II-A－2			319～322		116	
SZ17	E28	N-49°-E	0.93×0.88×0.09	0.84×0.60	集II-A－2	○				116	
SZ18	D28	N-20°-E	0.72×(0.75)×0.18	0.72×0.51	集I-A－2	○	○	323　324		112	
SZ19	E28	N-52°5'-W	0.72×0.57×0.18	0.63×0.45	集II-A－2	○				116	
SZ20	E27	N-43°5'-E	0.84×0.54×0.21	0.66×0.36	集II-A－2	○				116	
SZ21	E26	N-19°-E	(0.93)×(0.60)×0.21	(0.81)×(0.45)	集II-A－2	○				116	
SZ22	F26	不明			集II-A－2					122	
SZ23	F26	不明			集I-A－2	○				112	
SZ24	F29	N-40°-E	1.14×0.96×0.21	0.99×0.72	集II-A－2			193		116	
SZ25	E28	N-41°-W	1.02×0.69×0.51	0.81×0.45	集II-A－2					116	
SZ26	F29	N-15°-W	(0.87)×0.54×0.18	(0.78)×0.45	集II-A－2					117	
SZ27A	F30	N-41°-E	1.17×0.99×0.18	0.96×0.75	集II-A－2			194	SZ27Bに切られる。	117	
SZ27B	F30	不明			集II-A－2			195　325	SZ27Aを切る。	122	
SZ28	G30	N-0°	0.99×0.66×0.27	0.84×0.60	集II-A－2					117	
SZ29	H29	N-47°-E	1.20×0.69×0.12	1.14×0.57	集II-A－2	○				117	
SZ30	H28	N-85°-W	0.93×0.84×0.21	0.69×0.42	集II-A－2					117	
SZ31	H29	N-5°-W	0.72×0.57×0.15	0.63×0.45	集II-A－2					117	
SZ32	I29	不明			集II-A－2	○		196		122	
SZ33	H28	N-13°-E	1.20×0.69×0.24	0.72×0.42	集I-A－2	○		197 326～331	SZ34を切る。	112	24
SZ34	H28	N-10°-W	(0.84)×0.45×0.15	(0.72)×0.33	集II-A－2				SZ33に切られ、SZ35を切る。	117	24
SZ35	H28	N-85°-W	(0.90)×0.60×0.21	(0.60)×0.39	集II-A－2	○			SZ34に切られる。	117	24
SZ36	H28	N-19°-E	1.14×0.90×0.66	0.87×0.54	集II-A－2					123	
SZ37	I28	N-69°-E	0.99×0.63×0.15	0.90×0.48	集II-A－2					118	
SZ38	I28	N-2°-E	0.72×0.48×0.21	0.39×(0.27)	集II-A－2					118	
SZ39	H28	N-21°-E	1.17×0.72×0.18	1.08×0.57	集II-A－1					114	
SZ40	H29	不明			集I-A－2	○				112	
SZ41	G30	N-20°-W	0.97×0.82×0.30	0.84×0.69	木棺がある土坑	○		332～340		125	24
SZ42	G27	N-21°-W	1.15×0.75×0.09	1.05×0.39	土坑I-D	○	○			124	24
SZ43	H27	N-21°-W	0.99×(0.72)×0.15	0.69×0.46	集II-A－2					118	
SZ44	G29	不明			集II-A－2	○				123	
SZ45	F27	N-24°-E	1.15×0.72×0.06	0.99×0.57	集I-A－2	○				112	
SZ46	F28	N-30°-E	1.05×1.02×0.27	0.69×0.64	集I-A－2	○				112	
SZ47	H27	N-26°-E	0.87×0.60×0.07	0.60×0.51	集II-A－2				SZ48を切る。	118	
SZ48	H27	N-29°-E	(1.29)×(0.69)×0.24	(0.69)×(0.48)	集I-A－2	○			SZ47に切られ、SZ55を切る。	112	
SZ49	H28	N-8°-E	0.93×0.87×0.18	0.81×0.42	集II-A－2					118	
SZ50	H28	N-8°-E	1.17×0.81×0.24	0.90×0.51	集II-A－2					118	
SZ51	H28	N-13°-E	(1.05)×(0.90)×0.18	(0.93)×(0.54)	集II-A－2					118	
SZ52	H28	不明			集II-A－2					123	
SZ53	H27	N-41°-W	1.08×0.42×0.15	0.60×0.24	集II-A－2	○				119	
SZ54	M18	N-19°-W	0.90×0.60×0.21	0.72×0.48	土坑II-A	○				125	25
SZ55	H27	不明			土坑I-C	○			SZ48に切られる。	124	25
SZ56	H27	不明			不明					125	25
SZ57	G27	N-34°-E	0.87×0.57×0.18	0.72×0.42	土坑II-B－2	○				125	25
SZ58	H27	N-47°-E	0.96×0.51×0.15	0.84×0.39	集II-A－2					119	
SZ59	H27	N-32°-E	1.11×0.48×0		集II-A－2					119	

表15　金ヶ崎遺跡中近世墓一覧表（2）

遺構名	グリッド	主　軸	上面規模(m)長軸×短軸×深さ	下面規模(m)長軸×短軸	形　式	人骨	炭化物	出土遺物	備　考	挿図	図版
SZ60	G29	N-22°-E	1.11×0.57×0.16	0.90×0.48	集Ⅱ-A－2			198～200		119	
SZ61	H30	N-8°5'-E	0.75×0.48×0.15	0.66×0.39	土坑Ⅱ-A	○				125	
SZ62	H30	N-46°-W	0.63×0.60×0.15	(0.54)×0.36	集Ⅱ-A－2			201～206		119	
SZ63	J29	N-37°-E	0.84×0.72×0.27	0.63×0.54	集Ⅱ-A－2					119	
SZ64	I29	不明			集Ⅱ-A－2	○				119	
SZ65	I30	N-46°-E	0.69×(0.48)×0.12	0.54×0.39	集Ⅱ-A－2					119	
SZ66	H31	N-7°-E	0.90×0.60×0.15	0.75×0.51	集Ⅱ-A－2					119	
SZ67	O17	不明			集Ⅱ-A－2			207～210		123	25
SZ68	J28	N-38°-E	1.23×0.75×0.24	0.94×0.66	集Ⅱ-A－2	○		341　342	テラス 0.54×0.27	113	
SZ69	I28	N-43°-E	0.84×0.48×0.18	0.72×0.42	集Ⅱ-A－2	○				119	
SZ70	F31	N-2°-E	0.93×0.61×0.15	0.75×0.43	集Ⅱ-A－2					119	
SZ71	F31	N-54°-E	1.02×0.64×0.13	0.90×0.45	集Ⅱ-A－2					119	
SZ72	G31	N-47°-E	1.26×0.88×0.24	0.96×0.69	集Ⅱ-A－1					114	
SZ73	I29	N-41°-E	0.90×0.63×0.15	0.75×0.51	集Ⅱ-A－2	○				113	
SZ74	G30	N-56°-E	0.93×0.64×0.16	0.75×0.48	集Ⅱ-A－2				SZ75を切る。	120	
SZ75	G31	N-32°-E	(1.11)×0.75×0.15	0.90×0.63	集Ⅱ-A－2	○			SZ74に切られる。	120	
SZ76	G30	N-7°-E	0.81×0.72×0.18	0.63×0.54	木棺がある土坑	○		343～354		125	25
SZ77	G30	N-39°-E	0.48×0.42×0.12	0.33×0.30	集Ⅱ-A－2					123	
SZ78	G31	N-33°-E	1.23×0.78×0.15	0.96×0.69	集Ⅱ-A－2	○				120	
SZ79	G31	N-12°-W	0.72×0.48×0.21	0.54×0.33	集Ⅱ-A－2					120	
SZ80	G31	N-32°-E	1.26×0.69×0.24	0.99×0.51	集Ⅱ-A－2					120	
SZ81	G31	不明			集Ⅱ-A－2					123	
SZ82	G31	不明			集Ⅱ-A－2					123	25
SZ83	F30	N-74°-E	(0.81)×0.75×0.24	(0.66)×0.33	集Ⅱ-A－2					120	
SZ84	F30	N-41°-E	(0.78)×0.45×0.12	(0.63)×0.39	集Ⅱ-A－2				SZ85を切る。	120	
SZ85	F30	N-44°-E	(0.75)×(0.63)×0.15	(0.60)×(0.54)	集Ⅱ-A－2				SZ84に切られる。	123	
SZ86	G30	N-27°-W	0.69×0.54×0.30	0.54×0.33	集Ⅱ-A－2					123	
SZ87	G30	N-47°-E	(0.90)×0.66×0.30	0.57×0.39	集Ⅱ-A－2					120	
SZ88	G30	N-28°-E	0.87×0.57×0.10	0.82×0.51	集Ⅱ-A－2	○				113	25
SZ89	H29	N-9°-E	1.11×0.60×0.33	0.75×0.30	集Ⅱ-A－1				SZ30の下にあるため平面図上は見えない所がある。	114	
SZ91	J28	N-22°-E	0.87×0.45×0.21	0.75×0.45	集Ⅱ-A－2	○				121	
SZ92	H31	N-21°-W	0.84×0.51×0.15	0.72×0.36	集Ⅱ-A－2					120	
SZ93	I27	N-36°-E	0.57×0.39×0.12	0.48×0.30	集Ⅱ-A－2					121	
SZ94	I27	N-33°-E	1.59×0.96×0.30	1.20×0.57	集Ⅱ-A－1					114	25
SZ95	J28	N-9°5'-E	1.62×0.93×0.18	1.35×0.66	集Ⅱ-A－2					121	
SZ96	J28	N-50°-E	1.20×0.81×0.27	0.45×0.42	集Ⅱ-A－2				テラス	121	
SZ97	J28	N-33°-	1.15×0.90×0.10	0.93×0.66	集Ⅱ-A－2	○	○			113	
SZ99	I27	N-22°-E	0.81×0.60×0.15	0.54×0.36	土坑Ⅱ-D	○	○			124	
SZ100	J26	N-72°-W	0.84×0.36×0.12	0.66×0.42	集Ⅱ-A－2					121	
SZ101	G28	N-26°-E	1.01×0.60×0.12	0.68×0.42	土坑Ⅱ-D		○			124	
SZ102	F28	N-15°-W	0.69×0.48×0.12	0.63×0.33	集Ⅱ-A－2					121	
SZ103	F28	N-2°-E	1.02×0.57×0.18	0.63×0.45	土坑Ⅱ-D		○少量		テラス	124	
SZ104	F29	N-14°-W	(1.47)×0.75×0.12	(1.35)×0.48	集Ⅱ-A－2					121	
SZ105	H25	N-80°-W	0.66×0.45×0.12	0.36×0.27	集Ⅱ-A－2					122	
SZ106	G32	N-40°-W	1.05×0.87×0.18	0.72×0.57	集Ⅱ-A－2					122	
SZ107	G32	N-35°-W	1.05×0.72×0.15	0.87×0.57	土坑Ⅱ-D		○少量			124	
SZ108	I26	N-32°-E			集Ⅱ-A－1				SI01 石のみ。	114	
SZ109	I26	N-88°-E	1.35×0.72×0.15	1.08×0.45	集Ⅱ-A－1				SI02	114	
SZ110A	J26	N-5°-W	(1.35)×1.20×0.18	(1.14)×0.99	集Ⅱ-A－2				SI03 SZ110Bに切られる。	122	
SZ110B	J26	不明			集Ⅱ-A－2			211　212	SZ110Aを切る。	122	
SZ111	K18	N-23°-E	0.75×0.48×0.18	0.30×0.45	集Ⅱ-A－2				SI04 テラス	122	

表16　金ヶ崎遺跡五輪塔一覧表

遺物番号	出土地点（遺構）	層位	種　類	石　材	法　量									挿図	図版
					全高(mm)	全高－軒厚(中央)(mm)	軒厚(中央)(mm)	軒厚(角)(mm)	ほぞ穴深さ(mm)	笠上部幅(mm)	ほぞ上部径(mm)	軒(上)径(mm)	軒(下)径(mm)		
433	包含層		火輪	花崗岩	166.0	120.0	46.0	52.5	17.0	99.7	60.5	229.5	224.5	144	47
434	包含層		火輪	花崗岩	134.0	97.7	36.3	59.1	26.8	101.5	64.0	228.5	223.5	144	47

表17　金ヶ崎遺跡柱穴一覧表

遺構名	グリッド	出土遺物	備　　考	挿図	図版
P01	M11				
P05	O11		SB03	67	3
P06	O11		SB03	67	3
P07	P12		SB04	69	3
P08	O12		SB04	69	3
P09	O12		SB03	67	3
P10	O12		SB03	67	3
P15	O12				
P18	O12		SB04	69	3
P19	P12		SB04	69	3
P20	P13		SB04	69	3
P21	N11		SB03	67	3
P23	N12		SB03	67	3
P25	N12		SB03	67	3
P26	O12		SB04	69	3
P27	P12		SB04	69	3
P28	P12		SB04	69	3
P29	P13				
P31	P12				
P32	N11				
P33	N12		SB03	67	3
P35	P13		SB04	69	3
P37	O13		SB05	70	4
P38	P13		SB05	70	4
P42	O13		SB05	70	4
P43	O13				
P45	O13		SB05	70	4
P47	O13		SB03	67	3
P48	O13				
P49	O13		SB05	70	4
P50	O13		SB05	70	4
P51	O13		SB05	70	4
P54	O14		SB05 P55に切られる。	70	4
P55	O14		P54を切る。		
P56	M13				
P57	M14				
P58	M14				
P59	M16				
P60	M15				
P61	J21	213			
P66	M21		SB17	64	9
P67	M21		SB17	64	9
P68	M20		SB17	64	9
P69	M20		SB17	64	9
P70	L17				
P71	I18				
P72	L15		SA01	71	23
P73	K15		SA01	71	23
P74	K15				
P75	K16				
P77	L13				
P78	N11				
P81	O11				
P84	O14				
P85	O13		SB05	70	4
P86	O13				
P88	G21		SB26	73	11
P89	H21		SB26	73	11
P91	I22				
P92	J22				
P94	I21				

遺構名	グリッド	出土遺物	備　　考	挿図	図版
P95	I21				
P96	J23				
P97	J23				
P99	I24				
P103	M22		SB17	64	9
P104	M21		SB17	64	9
P105	L21		SB17	64	9
P106	L20		SB17	64	9
P107	M21		SB17	64	9
P109	L15		SA01	71	23
P110	K15		SA01	71	23
P113	J12				
P114	M20		SB17	64	9
P115	L20		SB17	64	9
P122	J22		SA04	74	
P123	J21				
P124	J22		SA04	74	
P126	H20		SA03	64	
P127	H20				
P128	H20				
P129	J22		SA04	74	
P130	H20		SB26	73	11
P131	H21		SB26	73	11
P132	H21				
P134	I20		SA03	64	
P135	H21		SB26	73	11
P136	I21		SA03	64	
P137	I21				
P138	I21				
P139	I21				
P140	G20		SB26	73	11
P141	H20		SA03	64	
P142	M12				
P144	M12				
P145	M13				
P146	N12		SB03	67	3
P147	N12		SB03	67	3
P150	N12		SB03	67	3
P151	N12				
P152	O15		SA02	71	23
P154	N12		SB03	67	3
P155	P12		SB04	69	3
P156	O14		SA02	71	23
P157	O14		SA02	71	23
P158	O14				
P163	G20		SB26	73	11
P164	G21		SB26	73	11
P165	G21		SB26	73	11
P166	G21		SB26	73	11
P167	G21		SB26	73	11
P168	G21		SB26	73	11
P169	P12		SB04	69	3
P170	P12				
P171	H29		SB29	54 55	
P172	G29		SB29	54 55	
P173	G30		SB29	54 55	
P174	G30		SB29	54 55	
P175	N11		SB03	67	3
P176	N11				
P177	O13				
P178	M21		SB17	64	9

表18　金ヶ崎遺跡土器観察表（1）

遺物番号	出土地点（遺構）	層位	器種	法量 口径(cm)	法量 器高(cm)	法量 底径(cm)	法量 最大幅(cm)	胎土	焼成	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	色調 断面	残存状態 口縁	残存状態 底部	備考（その他）	挿図	図版
1	SB01		高杯・脚部					やや粗(雑を多数含む。2㎜以下の石英、数個見られる)	普通	調整不明	調整不明	橙色(5YR6//6)	橙色(2.5YR6/8)	橙色(5YR6/6)			試掘トレンチ3-a 弥生末～古墳初頭	13	
2	SB01-S	02	高杯・脚部					粗(最大6㎜の長石、2㎜以下の長石、数個見られる)	普通	調整不明	調整不明	橙色(5YR7/8)	橙色(5YR7/8)	浅黄橙色(7.5YR8/6)			弥生末～古墳初頭	13	
3	SB01	02	高杯・脚部			(16.5)		やや粗	普通	調整不明	調整不明	浅黄橙色(7.5YR8/6)	橙色(5YR7/8)	浅黄橙色(7.5YR8/6)			2孔3組6穿孔。弥生末～古墳初頭	13	26
4	SB01-S	02	く字甕	(16.0)				やや粗(0.5～1.5㎜程のチャート、石英を多く含む)	普通	ナデ	ナデ、指頭痕	明褐色(7.5YR5/6)	明褐色(7.5YR5/6)	明褐色(7.5YR5/6)	2/12		弥生末～古墳初頭	13	
5	SB01-S	02	長頸壺				(13.8)	やや粗	普通	調整不明	調整不明	浅黄橙色(10YR8/4)	灰色(7.5Y6/1)	浅黄橙色(7.5YR8/4)		6/12以上	弥生末～古墳初頭	13	
6	SB01-S	02	壺	(9.0)	(17.5)		(16.5)	密	普通	ナデ	調整不明	橙色(7.5YR7/6)	浅黄橙色(7.5YR8/6)	浅黄橙色(7.5YR8/6)	9/12	3/12以下	赤彩有り。1孔2組2穿孔。弥生末～古墳初頭	13	26
7	SB01-S	02	壺(小)				7.8	密(0.5～1.5㎜の長石、チャート、石英を多く含む)	普通	ナデ	板ナデ	橙色(5YR7/6)	橙色(7.5YR7/6)	橙色(7.5YR7/6)		完存	弥生末～古墳初頭	13	26
8	SB02	02	高杯	(20.5)	(22.3)		(14.0)	やや粗(1㎜以下の長石、多数含む)	普通	ミガキ、ナデ	調整不明	橙色(7.5YR7/6)	橙色(7.5YR7/6)	橙色(7.5YR7/6)	2/12	3/12以上	1孔3組3穿孔。弥生末～古墳初頭	15	26
9	SB02	02	高杯・脚部					密	普通	ミガキ	ナデ、しぼり痕	にぶい橙色(5YR6/4)	橙色(5YR6/6)	橙色(5YR7/6)			弥生末～古墳初頭	15	26
10	SB02	02	鉢			(4.0)		やや粗(0.5～2㎜程のチャート、長石、石英を少量含む)	普通	ナデ	調整不明	橙色(5YR6/8)	橙色(5YR6/8)	橙色(5YR6/8)		6/12以上	外面・炭化物付着。弥生末～古墳初頭	15	26
11	SB02	02	台付甕			(6.7)		密(0.5㎜以下の長石、金雲母を少量含む)	普通	ナデ	指ナデ	明赤褐色(2.5YR5/6)	明赤褐色(2.5YR5/6)	明赤褐色(2.5YR5/6)		6/12以上	弥生末～古墳初頭	15	26
12	SB02	02	壺(小)					密(0.5㎜以下の長石、チャートを少量含む)	普通	調整不明	調整不明	橙色(5YR6/6)	橙色(5YR6/6)	灰黄褐色(10YR5/2)			外面・炭化物付着。弥生末～古墳初頭	15	
13	SB06	02	高杯					密(1.5㎜以下の長石を少量含む)	普通	ミガキ	調整不明	橙色(5YR6/6)	橙色(5YR6/8)	褐灰色(10YR4/1)			内外面・炭化物付着。口縁部・沈線。弥生末～古墳初頭	17	27
14	SB06-N	02	高杯					やや粗	普通	調整不明	調整不明	橙色(5YR6/8)	橙色(5YR6/8)	橙色(7.5YR7/6)			1孔3組3穿孔。弥生末～古墳初頭	17	27
15	SB23-N	02	壺(小)	(7.0)				密	普通	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色(10YR7/4)	にぶい黄橙色(10YR7/4)	にぶい黄橙色(10YR7/4)	3/12		弥生末～古墳初頭	19	31
16	SB28	02	高杯	(27.4)				密(1㎜以下の長石を少量含む)	普通	調整不明	調整不明	橙色(7.5YR7/6)	浅黄橙色(7.5YR8/6)	浅黄橙色(10YR8/4)	2/12		炭化物付着。弥生末～古墳初頭	21	32
17	SB28	01	高杯					密(長石、赤褐色粒を少量含む)	普通	調整不明	調整不明	橙色(5YR6/8)	黒褐色(5YR3/1)	橙色(5YR6/6)			内面・炭化物付着。弥生末～古墳初頭	21	
18	SB28	01	S字甕					やや粗(0.5～1㎜の長石、石英、チャートを多く含む)	普通	頸部ハケ	頸部ハケ	橙色(7.5YR7/6)	橙色(7.5YR7/6)	灰色(N5/0)			口縁部外面・刺突。弥生末～古墳初頭	21	32
19	SB28	01	壺					やや粗(2㎜大の長石数個見られる)	普通	調整不明	調整不明	明赤褐色(5YR5/6)	にぶい黄橙色(10YR7/4)	灰色(7.5Y4/1)			赤彩有り。横線1条。刺突列。弥生末～古墳初頭	21	32
20	SB28	02 地床炉	壺	(9.0)				密(1㎜以下の長石、石英を少量含む)	普通	ナデ	ナデ	橙色(5YR6/6)	橙色(7.5YR6/6)	橙色(5YR6/6)	1.3/12		弥生末～古墳初頭	21	
21	SB28	01	壺					密(長石、チャート、少量含む)	普通	調整不明	調整不明	橙色(5YR6/8)	橙色(7.5YR6/8)	橙色(7.5YR6/8)			弥生末～古墳初頭	21	
22	SB15-S	02	鉢	(18.0)				やや粗(2㎜大の長石数個、雑を多数含む)	普通	口縁部ナデ	ナデ	橙色(7.5YR6/6)	にぶい褐色(7.5YR5/3)	明赤褐色(5YR5/6)	2/12		外面・炭化物付着。胴部・横線10条。刺突列。口縁部・キザミ。弥生末～古墳初頭	24	29
23	SB16B-NW	02	高杯	(23.3)	(20.1)	(14.9)		密	普通	調整不明	調整不明	橙色(2.5YR7/8)	橙色(2.5YR7/8)	明黄褐色(10YR7/6)		6/12以上	1孔3組3穿孔。弥生末～古墳初頭	26	29
24	SB16B-SW	02	高杯	(22.5)	(18.2)	12.8		やや粗	普通	ミガキ	ナデ	にぶい黄橙色(10YR7/4)	浅黄橙色(7.5YR8/6)	浅黄橙色(7.5YR8/4)	3/12	完存	2孔2組4穿孔。弥生末～古墳初頭	26	29
25	SB16B-SW	02	高杯					密(細かい長石、赤褐色粒を多く含む)	普通	ミガキ	ナデ、板ナデ	明赤褐色(2.5YR5/8)	明赤褐色(2.5YR5/8)	褐色(7.5YR4/4)			2孔3組6穿孔。弥生末～古墳初頭	26	31
26	SB16B-NW	01	高杯・脚部					密	普通	調整不明	調整不明	にぶい黄橙色(10YR7/4)	橙色(7.5YR7/6)	にぶい黄橙色(10YR7/4)			2孔2組4穿孔。弥生末～古墳初頭	26	
27-1	SB16B-SE	02	く字甕	(19.0)				やや粗(3㎜以下の長石、石英、チャートを多く含む)	普通	ナデ	ナデ	橙色(5YR6/8)	明赤褐色(5YR5/6)	明赤褐色(5YR5/6)	2.1/12		外面・炭化物付着。弥生末～古墳初頭	26	30
27-2	SB16B-SE	02	く字甕			4.0		やや粗(3㎜以下の長石、石英、チャートを多く含む)	普通	ナデ、ハケ	ナデ	明赤褐色(5YR5/8)	赤褐色(5YR4/6)	明赤褐色(5YR5/6)		完存	外面・炭化物付着。弥生末～古墳初頭	26	30

表19　金ヶ崎遺跡土器観察表（2）

遺物番号	出土地点（遺構）	層位	器種	法量 口径(cm)	法量 器高(cm)	法量 底径(cm)	法量 最大幅(cm)	胎土	焼成	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	色調 断面	残存状態 口縁	残存状態 底部	備考（その他）	挿図	図版
28	SB16B-SW	02	台付甕			6.3		密(0.5～2mmの長石、石英、チャートを普通に含む)	普通	ナデ	ナデ	明赤褐色(2.5YR5/6)	明赤褐色(2.5YR5/8)	にぶい褐色(7.5YR5/3)		6/12以上	弥生末～古墳初頭	26	30
29	SB16B-NW	02	S字甕・胴部					やや粗(0.5～3mm程のチャート、石英、長石を少量含む)	普通	ハケ	ナデ	にぶい黄褐色(10YR5/3)	褐灰色(10YR6/1)	にぶい黄橙色(10YR7/3)			炭化物付着。弥生末～古墳初頭	26	
30	SB16B-SW	02	パレス壷	(17.8)				密	普通	調整不明	調整不明	橙色(5YR7/6)	橙色(5YR7/6)	浅黄橙色(10YR8/4)	3/12		赤彩有り。口縁部・擬凹線4条。横線6条、列点文1、波状文4、横線5条。弥生末～古墳初頭	26	31
31-1	SB16B-SW	02	パレス壷	14.7			(29.1)	やや粗(1mm大の長石、多数含む)	普通	調整不明	調整不明	にぶい黄橙色(10YR7/4)	橙色(5YR6/8)	灰色(7.5Y4/1)	12/12		赤彩有り？口縁部・擬凹線4条。胴部・横線17条、波状文3条、横線13条。弥生末～古墳初頭	27	30
31-2	SB16B-SW	02	パレス壷			(7.2)		やや粗(1mm大の長石、多数含む)	普通	ナデ	調整不明	にぶい黄橙色(10YR7/4)	橙色(5YR6/8)	灰色(7.5Y4/1)		3/12以上	赤彩有り。弥生末～古墳初頭	27	30
32-1	SB16B-SW	02	広口壷	(20.0)				密	普通	口縁部～胴部ミガキ	ミガキ(ミガキ調整不明)	褐色(7.5YR4/3)	灰褐色(7.5YR4/2)	褐色(7.5YR4/4)		3/12以上	口縁部・擬凹線2条。弥生末～古墳初頭	27	30
32-2	SB16B-SW	02	広口壷			(8.6)		密	普通	底部ミガキ、胴部ナデ	ナデ	橙色(7.5YR6/6)黒褐色(10YR2/2)	橙色(7.5YR6/6)黒褐色(7.5YR2/2)	暗褐色(7.5YR3/3)		3/12以上	弥生末～古墳初頭	27	30
33	SB16B-SW	02	壷(中)	(15.0)				密(0.5mm以下のチャート、長石、金雲母を少量含む)	普通	調整不明	調整不明	明褐色(7.5YR5/6)	橙色(7.5YR6/6)	灰色(7.5Y4/1)	1/12		弥生末～古墳初頭	26	
34-1	SB16B-SW	02	広口壷	(14.6)	(27.3)		(21.2)	密	普通	ミガキ	口縁部～頸部ミガキ、胴部ナデ	橙色(5YR6/6)	橙色(5YR7/8)黄灰色(2.5Y4/1)	橙色(5YR7/8)灰白色(10YR8/2)	3/12		弥生末～古墳初頭	27	30
34-2	SB16B-SW	02	広口壷			(4.4)		密	普通	ミガキ	板ナデ	橙色(5YR6/6)	橙色(5YR7/8)黄灰色(2.5Y4/1)	橙色(5YR7/8)灰白色(10YR8/2)		完存	弥生末～古墳初頭	27	30
35-1	SB16B-NW	02	長頸壷	(12.0)				密(3mm以下の長石、石英、赤褐色粒を多く含む)	普通	調整不明	ナデ	にぶい橙色(7.5YR7/4)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	褐色(7.5YR4/3)	1.5/12		口縁部・沈線4条。弥生末～古墳初頭	27	31
35-2	SB16B-SW	02	長頸壷					密(長石、石英、チャート、赤褐色粒を多く含む)	普通	調整不明	ナデ	にぶい橙色(7.5YR7/4)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	にぶい橙色(7.5YR7/4)			弥生末～古墳初頭	27	31
36	SB18-N	02	高杯・脚部					やや粗(礫、多数含む)	普通	調整不明	調整不明	明褐色(7.5YR5/6)	橙色(7.5YR7/6)	橙色(7.5YR6/6)			弥生末～古墳初頭	28	30
37	SB18-S	02	高杯					密(長石、石英を少量含む)	普通	ミガキ	調整不明	灰黄褐色(10YR4/2)	にぶい黄褐色(10YR4/3)	にぶい黄褐色(10YR5/4)			弥生末～古墳初頭	28	30
38	SB07	01	壷・底部			3.6		やや粗(0.5～1mmの長石を多く含む)	普通	ミガキ	ナデ	橙色(7.5YR6/6)	にぶい黄褐色(10YR5/4)	にぶい黄褐色(10YR5/3)		完存	弥生末～古墳初頭	32	27
39	SB08	カマド	把手付き甕	(33.2)	(28.1)	8.2	(36.6)	やや粗	普通	ハケ	ハケ、指おさえ	明褐灰色(7.5YR7/2)	灰白色(10YR8/2)	灰白色(10YR8/2)	5/12	完存		36	27
40	SB08-N	02	甕					やや粗(0.5～1mm程の石英、長石、チャートを多く含む)	普通	胴部縦方向のハケ	脚部横方向のハケ	にぶい褐色(7.5YR6/3)	浅黄橙色(10YR8/3)	浅黄橙色(10YR8/3)	3/12		内面・輪づみ痕有り。	36	27
41	SB08-N	01	須恵器横瓶					密	良好	回転ナデ	回転ナデ、指おさえ	灰白色(2.5Y7/1)	灰白色(N7/0)	灰白色(2.5Y7/1)			外面・自然釉有り。7世紀後半	36	26
42	SB10 P3		甕or瓶					密(0.5～1mmの長石、石英を少量含む)	普通	縦方向のハケ	ナデ、指頭痕	にぶい黄橙色(10YR6/4)	にぶい黄橙色(10YR7/2)	にぶい黄橙色(10YR7/2)				39	27
43	SB10	01	小型の椀(手づくね)	(8.8)	4.6	4.4		密(1mm以下の長石を少量含む)	普通	ナデ	ナデ	にぶい褐色(7.5YR5/4)	明黄褐色(10YR7/6)	にぶい褐色(7.5YR5/3)	3/12	6/12以上		39	27
44	SB10	02	杯蓋	(10.7)	2.9		(10.7)	密(1mm以下の長石、わずかに含む)	良好	天井部切り離し後ナデ、蓋部回転ナデ	回転ナデ	灰白色(7.5Y7/1)	灰白色(7.5Y7/1)	灰白色(7.5Y7/1)	6/12		7世紀後半	39	28
45	SB10	01	杯蓋	(14.2)	(2.9)	(9.2)		密	良好	天井部回転ヘラ削り、口縁部回転ナデ	回転ナデ	灰白色(2.5Y7/1)	灰黄色(2.5Y7/2)	灰白色(2.5Y7/1)	4/12	3/12以上	7世紀後半	39	28
46	SB10	01	杯蓋	(14.6)	2.7			密(0.2mm以下の長石少量含む)	良好	口縁部回転ナデ	回転ナデ	灰白色(2.5Y8/2)	灰黄色(2.5Y7/2)	灰白色(2.5Y8/2)		3/12以下	7世紀後半	39	
47	SB10	02	杯蓋	(9.8)	(2.8)			密(1～2mm以下の長石が少量みられる)	良好	天井部回転ヘラ削り、口縁部回転ナデ	回転ナデ	灰黄色(2.5Y7/2)	灰色(5Y6/1)	灰色(5Y6/1)	6/12		7世紀末	39	27
48	SB10	01	杯蓋	(15.4)				密(0.5～1mm程の長石を少量含む)	良好	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラ削り	回転ナデ	灰黄色(2.5Y7/2)	灰黄色(2.5Y7/2)	灰黄色(2.5Y7/2)	2.5/12		7世紀後半(終わり)	39	
49	SB10-N	02	杯身	(9.1)	(3.0)	(6.8)	(11.6)	密(1mm以下の長石が少量みられる)	良好	底部回転ヘラ切り	回転ナデ	灰黄色(2.5Y7/2)	灰白色(2.5Y7/1)	灰白色(2.5Y7/1)	6/12	6/12以上	7世紀後半	39	
50	SB10	02	杯身	9.2	3.5	6.9		密(1mm以下の長石を少量含む)	良好	底部回転ナデ、杯部回転ナデ	回転ナデ	灰白色(7.5Y7/1)	灰白色(5Y7/1)	灰白色(5Y7/1)	12/12	完存	線刻。7世紀後半	39	28
51	SB10	01	高杯	(16.2)	(11.8)	(10.4)		密(0.5mmほどの長石を少量含む)	良好	口縁部、脚部回転ナデ、杯部回転ヘラ削り	回転ナデ	身・灰色(5Y5/1)脚・灰白色(5Y7/1)	身・灰白色(5Y7/1)脚・灰黄色(2.5Y7/2)	灰黄色(2.5Y7/2)	3/12	3/12以上	7世紀後半	39	28
52	SB10	01	高杯・脚部			(10.3)		密(1mm程の長石、チャートを少量含む)	良好	回転ナデ	回転ナデ	灰白色(N7/0)	灰白色(N7/0)	灰白色(N7/0)		3/12以下	7世紀後半	39	28
53	SB10	02	埦鉢	(17.5)	12.5	11.6		密(1mm以下の長石を少量含む)	良好	回転ナデ	回転ナデ	灰白色(5Y8/1)	灰白色(5Y7/1)	灰白色(5Y7/1)	4/12	完存	7世紀後半	39	28

表20　金ヶ崎遺跡土器観察表（3）

遺物番号	出土地点（遺構）	層位	器種	法量 口径(cm)	法量 器高(cm)	法量 底径(cm)	法量 最大幅(cm)	胎土	焼成	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	色調 断面	残存状態 口縁	残存状態 底部	備考（その他）	挿図	図版
54	SB10	01	長頸壺			(7.9)		密（1mm以下の礫、少量含む。3mm大の長石が見える。2mm大の長石数個含む）	良好	回転ヘラ削り後、回転ナデ	回転ナデ	灰色 (10Y6/1)	灰色 (10Y6/1)	灰白色 (10Y7/1)		3/12以上	7世紀後半	39	
55	SB10-N	02	横瓶	(13.9)	31.4			密（1mm以下の長石を少量含む）	良好	口縁部回転ナデ、胴部タタキ	口縁部回転ナデ、胴部当て具痕	灰色 (5Y5/1)	灰色 (5Y5/1)	灰色 (5Y5/1)	9.5/12	完存	7世紀後半	40	28
56	SB12A	02	甕or甑					やや粗（1mm大の長石が見られる、3mm以下の石英、長石多数含む）	普通	把手部縦方向のハケ	ナデ	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	灰白色 (7.5YR8/2)				43	28
57	SB12A	02	杯蓋					密（1mm以下の長石をわずかに含む）	良好	天井部回転ヘラ削り、蓋部回転ナデ	調整不明	オリーブ灰色 (2.5GY6/1)	明オリーブ灰色 (2.5GY7/1)	明オリーブ灰色 (2.5GY7/1)			7世紀後半	43	28
58	SB12B	02	甕or甑					密	普通	把手部指頭痕	ナデ	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)				44	
59	SB12B-N	02	鉢	(20.2)				密（緻密な胎土）	普通	横方向のナデ	ナデ	橙色 (5YR6/6)	橙色 (5YR6/6)	橙色 (5YR6/6)	1.3/12			44	28
60	SB12B	02	鉢	(15.4)				密（細かい長石を普通に含む）	普通	横方向のナデ	横方向のナデ	明赤褐色 (2.5YR5/6)	明赤褐色 (2.5YR5/6)	橙色 (2.5YR6/8)	1.3/12		胴部・斜め縦方向の暗文。	44	28
61	SB12B-S	02	甕	(21.0)				密（0.5～1.5mm程のチャート、長石、石英、金雲母を少量含む）	普通	ハケ、口縁部指ナデ	ハケ	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	褐色 (7.5YR4/3)	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	1.3/12			44	28
62	SB12B-N	02	杯身	(11.2)	3.05	(5.9)	(11.2)	密（2mm大の長石、数個見られる。1mm以下の長石、少量含む）	良好	ヘラによる切り離し後、底部ナデ、杯部回転ナデ	回転ナデ	灰色 (10Y6/1)	灰色 (10Y6/1)	灰白色 (5Y7/1)	5/12	3/12以上	7世紀後半	44	29
63	SB13A-N	02	甕	(13.0)				やや粗（1mm程の長石、石英、チャートを普通に含む）	普通	口縁部ナデ、頸部～胴部ハケ	ハケ	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	1.5/12			46	29
64	SB13A-S	02	杯身	(10.4)				密	良好	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 (7.5Y7/1)	灰白色 (7.5Y7/1)	灰白色 (2.5Y7/1)	2/12		7世紀末	46	29
65	SB13A-S	02	杯身	(13.2)				密	良好	回転ナデ	回転ナデ	灰黄色 (2.5Y6/2)	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	1/12以下		7世紀後半	46	
66	SB13A-S	02	盤			(15.4)		密（1mm以下の長石を少量含む、1mm以下の黒雲母有り）	良好	高台回転ナデ、底部回転ヘラ削り	回転ナデ	灰黄色 (2.5Y6/2)	灰オリーブ色 (5Y6/2)	灰色 (5Y6/1)	2.5/12		7世紀後半	46	29
67	SB13C-S	02	甑					密（2mm以下の長石を少量含む）	普通	ナデ	板ナデ	橙色 (5YR7/8)	橙色 (5YR6/8)	浅黄橙色 (10YR8/4)			内外断面の一部分、にぶい赤橙色 (10R6/4)。	47	
68	SB13C-N	02	甕or甑					密（緻密な胎土）	普通	ハケ	ナデ	褐灰色 (10YR5/1)	灰黄色 (2.5Y7/2)					47	
69	SB13C-S	02	甕or甑					密	普通	指ナデ、指頭痕	ナデ	浅黄橙色 (10YR8/3)	浅黄橙色 (10YR8/3)	浅黄橙色 (10YR8/3)				47	
70	SB13C-S	02	甕	(21.55)				やや粗（1mm程の石英、長石を少量含む）	普通	指ナデ	頸部ハケ	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	褐色 (10YR4/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	2/12			47	29
71	SB13C-S	02	甕	(16.0)				密	普通	口縁端部つまみあげ	ハケ	にぶい褐色 (7.5YR5/3)	にぶい褐色 (7.5YR5/3)	にぶい橙色 (7.5YR6/4)				47	
72	SB13C-N	02	杯蓋	(7.0)				密（1mm以下の長石が少量みられる）	良好	回転ナデ、天井部ヘラ削り後ナデ		灰白色 (2.5Y7/1)	灰白色 (2.5Y7/1)	灰黄色 (2.5Y7/2)	3/12		7世紀後半	47	29
73	SB13C-N	02	杯蓋	(10.2)				密（2mm以下の長石をわずかに含む）	良好	天井部回転ヘラ削り、口縁部回転ナデ	回転ナデ	灰白色 (7.5Y7/1)	灰白色 (2.5Y8/2)	灰白色 (5Y7/1)	3/12		? 7世紀後半新	47	
74	SB13C-S	02	杯蓋	(11.2)				密（1.5mm以下の長石を少量含む）	良好	天井部回転ヘラ削り、口縁部ナデ	回転ナデ	灰白色 (2.5Y8/2)	灰白色 (5Y7/1)	灰白色 (2.5Y8/2)	4/12		7世紀後半古	47	29
75	SB13C-S	02	甕					密（0.1mm以下の礫を多数含む）	良好	口縁部回転ナデ	回転ナデ	灰色 (10Y5/1)	灰色 (10Y6/1)	灰白色 (2.5Y8/2)	1/12以下		頸部・波状文。7世紀後半～8世紀初頭	47	29
76	SB14A	02	杯蓋	(14.8)				密（0.5～2mm程の長石を少量含む）	良好	調整不明	回転ナデ	褐灰色 (10YR6/1)	褐灰色 (7.5YR5/1)	黄灰色 (2.5Y5/1)	9/12		外面・自然釉付着。7世紀末	49	29
77	SB14A	カマド	高杯	(11.2)	3.6	(6.4)		密	良好	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 (7.5Y8/1)	灰白色 (7.5Y7/1)	灰白色 (7.5Y7/1)	1/12	6/12以上	7世紀末	49	29
78	SB22	カマド左	長胴甕					やや粗（長石、石英、チャート、赤褐色粒を多く含む）	普通	ハケ	ナデ、指頭痕	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	灰黄褐色 (10YR6/2)	にぶい黄橙色 (10YR6/4)				51	
79	SB22 J28	㎡	甕	(22.9)				密（3mm以下の長石を少量含む）	普通	口縁部ナデ、胴部ハケ	ハケ	にぶい褐色 (7.5YR6/3)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)				51	
80	SB22	カマド内埋土	甕	(13.0)				密（0.5～1mmのチャート、長石を少量含む）	普通	口縁部ナデ、頸部ナデ、胴部ハケ	板ナデ	灰黄褐色 (10YR6/2)	黄灰色 (2.5Y4/1)	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	3/12			51	31
81	SB22-S	02	杯蓋	(12.0)	3.6		(12.0)	密（1mm以下の長石少量含む。3mm以下の長石3ヶ見える）	良好	天井部ヘラ切り後ナデ、口縁部回転ナデ	回転ナデ	灰白色 (5Y7/1)	灰白色 (5Y7/1)	灰色 (5Y8/6)	4/12	6/12以上	線刻。7世紀後半古	51	32
82	SB22	カマド内埋土	杯蓋	17.1	3.7			密（0.5～2mmの長石を少量含む）	良好	天井部回転ヘラ削り、ナデ	回転ナデ	灰黄色 (2.5Y7/2) 中心・灰白色 (2.5Y7/1)	にぶい黄橙色 (10YR7/2)		12/12	完存	外面・自然釉付着。7世紀末	51	32
83	SB22-S	02	高杯			6.9		密（1～3mmの長石を少量含む）	良好	杯部回転ヘラ削り、脚部回転ナデ	回転ナデ	灰白色 (2.5Y8/1)	灰白色 (2.5Y8/2)	灰白色 (2.5Y8/2)		6/12以上	7世紀末	51	32
84	SB25A-N	02	甕・胴部					密（1mm大の長石、少量含む）	良好	タタキ	当て具痕	灰褐色 (7.5YR4/2)	灰黄色 (2.5Y7/2)	灰黄色 (2.5Y7/2)				53	32
85	SB29	01	杯蓋	7.9	2.7		9.8	密（2mm以下の長石数個、1mm以下の長石少量含む）	良好	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 (N7/0)	灰白色 (7.5Y7/1)	浅黄色 (2.5Y7/3)	12/12		7世紀後半古	56	33

表21　金ヶ崎遺跡土器観察表（4）

遺物番号	出土地点（遺構）	層位	器種	法量 口径(cm)	法量 器高(cm)	法量 底径(cm)	法量 最大幅(cm)	胎土	焼成	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	色調 断面	残存状態 口縁	残存状態 底部	備考（その他）	挿図	図版
86	SB29	01 I	杯蓋	(10.4)	(3.4)			密（1㎜以下の長石を少量含む）	良好	回転ナデ	回転ナデ	暗オリーブ色 (5Y4/4)	黄灰色 (2.5Y5/1)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	2.8/12		外面・自然釉付着。7世紀後半古	56	32
87	SB29	II	杯身	11.6	4.75	4.2	11.6	密	不良	回転ナデ	回転ナデ、底部指ナデ	灰白色 (2.5Y8/1)	灰白色 (2.5Y8/1)	灰白色 (5Y8/1)	10/12	完存	7世紀後半	56	
88	SB29	II	杯身	13.8	4.3	6.9		密（2㎜以下の長石が少量みられる）	良好	回転ヘラ削り後、回転ナデ	回転ナデ	黄灰色 (2.5Y6/1)	灰黄色 (2.5Y7/2)	浅黄色 (2.5Y7/4)	7/12	完存	7世紀後半	56	33
89	SB29	II	杯身（有台杯）			(8.6)		密	良好	回転ナデ	回転ナデ	黄灰色 (2.5Y5/1)	黄灰色 (2.5Y5/1)	灰黄色 (2.5Y7/2)		3/12以上	？ 7世紀末	56	
90	SB29	01	甕	(49.0)				密（0.5～1㎜程の長石を少量含む）	良好	口縁部回転ナデ、胴部格子目タタキ	口縁部～頸部回転ナデ、脚部当て具痕	灰黄色 (2.5Y7/2)	灰白色 (N7/0)	灰黄色 (2.5Y7/2)	2/12		自然釉付着。7世紀	56	33
91	SB29	01	長頸壺	8.6				密（5㎜の長石が1ヶ見られる。1㎜以下の長石多数）	良好	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 (N7/0)	灰白色 (5Y7/2)	灰白色 (10Y7/1)	7/12		8世紀終わり	56	33
92	SB29	01	短頸壺	(8.4)	3.3			密（0.1㎜以下の長石、少量含む）	良好	回転ナデ	回転ナデ	緑灰色 (5G6/1)	灰白色 (5Y7/2)		5/12		7世紀後半	56	32
93	SB29	01	短頸壺	(14.0)				密	良好	口縁部回転ナデ、胴部タタキ	口縁部回転ナデ、胴部当て具痕	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	2/12		外面・自然釉付着。7世紀後半	56	33
94	SB29	01	ハソウ	(8.1)	9.15	4.5		密（0.5～1㎜程の長石、石英を少量含む）	良好	回転ナデ	口縁部～頸部回転ナデ、頸部しぼり痕	灰黄色 (2.5Y7/2)	灰黄色 (2.5Y7/2)	灰白色 (2.5Y7/1)		完存	7世紀後半	56	33
95	SB19-N	02	甕	(14.8)	(16.5)	(7.0)	(16.3)	密（2㎜大の長石、少量含む）	普通	口縁部横方向のナデ	指ナデ	黄橙色 (7.5YR8/8)	黄橙色 (7.5YR8/8)	黄橙色 (7.5YR8/8)	6/12	6/12以上		59	31
96	SB19-N	02	甕	(20.6)				やや粗（1㎜程のチャート、石英を少量含む）	普通	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	灰黄褐色 (10YR5/2)	1.3/12			59	
97	SB19-N	02	甕	(22.0)				密	普通	横方向のナデ	口縁部指頭痕	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	1/12			59	
98	SB19-N	02	ミニチュア土器	4.4	3.1	2.0	4.4	密（長石、石英を少量含む）	普通	指頭痕	指頭痕	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	浅黄橙色 (7.5YR8/6)	浅黄橙色 (7.5YR8/6)	4/12			59	31
99	SB19-N	02	甕			(13.8)		密（0.5㎜以下の長石を少量含む）	普通	ナデ	ナデ	明赤褐色 (2.5YR5/6)	明赤褐色 (2.5YR5/6)	明赤褐色 (2.5YR5/6)		3/12以下		59	
100	SB19-N	02	杯蓋					密	良好	天井部回転ヘラ削り	回転ナデ	灰白色 (2.5Y7/1)	灰白色 (10YR7/1)	灰白色 (10YR7/1)	つまみ完形		7世紀後半	59	
101	SB19-S	02	杯身（台付）	(15.4)	(3.6)	(11.9)		密	良好	回転ナデ	回転ナデ	灰色 (5Y5/1)	灰黄色 (2.5Y7/2)	灰黄色 (2.5Y7/2)	5/12	3/12以上	7世紀末	59	31
102	SB19-N	02	短頸壺	(15.6)			(19.8)	密（0.2㎜以下の礫、多数含む）	良好	回転ナデ	回転ナデ	緑灰色 (10G6/1)	青灰色 (5BG6/1)	青灰色 (5BG6/1)	1/12以下		内外・自然釉・緑黒色（10GY2/1）。7世紀後半	59	31
103	SB20	II	横瓶			(12.6)		密（1㎜程の長石を少量含む）	良好	回転ナデ	回転ナデ	灰色 (5Y4/1)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	灰黄褐色 (10YR6/2) 灰白色 (5Y7/1)		3/12以下	内面・自然釉付着。7世紀後半？	61	31
104	SB21	カマド	甑					やや粗（長石、石英を少量含む）	普通	ハケ	ナデ、指ナデ	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	にぶい黄褐色 (10YR5/3)				63	
105	SB21-N	02	長胴甕				(24.15)	密（0.5㎜以下の長石、石英、金雲母を少量含む）	普通	ハケ	ナデ	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	にぶい褐色 (7.5YR5/4) 橙色 (2.5YR6/6)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)			煤付着。	63	32
106	SB21	カマド	甕					やや粗（長石、石英を多く含む）	普通	ハケ	指ナデ、指頭痕	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	1.3/12			63	
107	SB21-N	02	短頸壺	(9.4)			(10.1)	密（0.5㎜以下の長石を少量含む）	良好	口縁部回転ナデ、胴部回転ヘラ削り	回転ナデ	灰黄色 (2.5Y6/2)	暗灰黄色 (2.5Y4/2) 灰黄色 (2.5Y6/2)	灰黄色 (2.5Y6/2)	1.5/12	3/12以上	内外面・自然釉付着。7世紀後半	63	31
108	SB17 P105	02	長胴甕・胴部					やや粗（1㎜程のチャート、石英、金雲母を多く含む）	普通	ハケ	ナデ	浅黄橙色 (10YR7/3)	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)				65	31
109	SB03 P10	02	杯蓋	(16.5)				密（2㎜以下の長石が少量みられる）	良好	回転ヘラ削り、回転ナデ	回転ナデ	灰白色 (10YR7/1)	灰白色 (10YR7/1)	灰白色 (10YR7/1)	3/12以下		7世紀末～8世紀初頭	68	27
110	SB03 P21	01	盤（脚付き）・脚部					粗	不良	調整不明	調整不明	灰白色 (2.5Y8/1)	灰白色 (2.5Y8/1)	灰白色 (2.5Y8/1)			7世紀後半	68	27
111	SX01	02	高杯					密	普通	調整不明	調整不明	黒色 (10YR2/1)	橙色 (7.5YR6/6)	橙色 (7.5YR6/6)			弥生末～古墳初頭	68	34
112	SX01	03	高杯・脚部					密	普通	調整不明	調整不明	浅黄橙色 (7.5YR8/6)	浅黄橙色 (10YR8/4)	褐灰色 (10YR5/1)			弥生末～古墳初頭	68	34
113	SX01	19 墳丘内	高杯					密（緻密な胎土）	普通	調整不明	調整不明	明赤褐色 (5YR5/8)	明赤褐色 (5YR5/8)	橙色 (7.5YR6/6)			口縁部内面・多条沈線、波線文。弥生末～古墳初頭	68	34
114	SX02-W	I	高杯・脚部					密	普通	ミガキ	ナデ	明赤褐色 (5YR5/8)	橙色 (5YR6/8)	橙色 (5YR6/8)			1孔2組2穿孔。弥生末～古墳初頭	81	35
115	SX02-E	II	小型台付甕			(5.75)	(14.0)	密（0.5㎜以下の長石、石英を少量含む）	普通	板ナデ、ナデ	板ナデ	明赤褐色 (2.5YR5/6)	褐色 (7.5YR4/3)	にぶい褐色 (7.5YR5/4)		3/12以上	胴部外面・炭化物付着。弥生末～古墳初頭	81	34
116	SX02（SD02-SW）	02	壷・底部			(2.0)		やや粗	普通	胴部指頭痕	板ナデ	浅黄橙色 (10YR8/4)	橙色 (7.5YR7/6)	浅黄橙色 (7.5YR8/6)		3/12以上	弥生末～古墳初頭	81	
117	SX02（SD02-SW）	02	柳ヶ坪型壺					密（1㎜以下の長石、石英、金雲母を普通に含む）	普通	調整不明	調整不明	橙色 (7.5YR6/6)	橙色 (7.5YR6/6)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)			口縁部内面・くし状列点。弥生末～古墳初頭	81	34
118	SX02（SD02-SW）	01	二重口縁壺	(20.0)				やや粗（1㎜程の長石、石英、チャートを多く含む）	普通	調整不明	調整不明	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	1.5/12		弥生末～古墳初頭	81	34
119	SX03（SD03-NE）	02	高杯	(29.8)		(16.0)		密（2㎜以下の長石を少量含む）	普通	口縁部横ミガキ、杯部縦ミガキ、脚部縦断	口縁部横ミガキ、杯部縦ミガキ	にぶい橙色 (7.5YR7/4) にぶい橙色 (2.5YR6/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4) にぶい橙色 (7.5YR7/4)	にぶい橙色 (5YR7/4) 灰黄褐色 (10YR6/2)	5/12	3/12以上	2孔3組6穿孔。弥生末～古墳初頭	85	34

表22　金ヶ崎遺跡土器観察表（5）

遺物番号	出土地点（遺構）	層位	器種	法量 口径(cm)	法量 器高(cm)	法量 底径(cm)	法量 最大幅(cm)	胎土	焼成	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	色調 断面	残存状態 口縁	残存状態 底部	備考（その他）	挿図	図版
120	SX03（SD03-NE）	02	高杯	(28.2)	(21.5)	14.7		密	普通	ミガキ	杯部ミガキ、脚部ナデ	浅黄橙色(7.5YR8/4)	橙色(7.5YR7/6)	浅黄橙色(7.5YR8/4)	6/12	完存	2孔2組4穿孔。弥生末～古墳初頭	85	34
121	SX03（SD03-NE）	02	高杯	(28.0)				密(細かい長石と、2mm程のチャートを少量含む)	良好	ミガキ	ミガキ	橙色(7.5YR7/6)	橙色(7.5YR7/6)	橙色(7.5YR7/6)	3.5/12		弥生末～古墳初頭	85	34
122	SX03（SD03-NE）	02	高杯	(18.4)	(17.6)	(11.3)		密(2mm以下のチャート、長石を少量含む)	普通	ミガキ	杯部ミガキ、脚部ナデ	明赤褐色(2.5YR5/8)	明赤褐色(2.5YR5/8)	橙色(5YR6/6)灰黄褐色(10YR5/2)	1/12	3/12以上	1孔3組3穿孔。弥生末～古墳初頭	86	35
123	SX03（SD03-NE）	02	高杯	(22.9)	(16.0)	11.9		密	普通	口縁部横ミガキ、杯部縦ミガキ、脚部縦ミガキ、底近くハケ	口縁部横ミガキ、杯部縦ミガキ、脚部縦ミガキ、底近くハケ	明赤褐色(5YR5/6)	明赤褐色(2.5YR5/8)	橙色(5YR7/8)	2/12	完存	1孔3組3穿孔。弥生末～古墳初頭	86	35
124	SX03（SD03-NE）	02	高杯	(24.0)	(16.6)	(11.6)		やや粗	普通	口縁部横ミガキ、杯部縦ミガキ、脚部縦ミガキ、底近くハケ	口縁部横ミガキ、杯部縦ミガキ、脚部縦ミガキ、底近くハケ	明赤褐色(5YR5/6)	赤褐色(2.5YR4/8)	明赤褐色(2.5YR5/6)	3/12	3/12以上	2孔2組4穿孔。弥生末～古墳初頭	86	35
125	SX03（SD03-NE）	02	高杯					密(1mm以下の長石を少量含む)	普通	ミガキ	杯部ミガキ、脚部ナデ	明赤褐色(2.5YR5/6)	明赤褐色(2.5YR5/6)	橙色(5YR6/6)			2孔2組4穿孔。弥生末～古墳初頭	85	
126	SX03（SD03-NE）	02	高杯・脚部					やや粗	普通	調整不明	調整不明	黄橙色(10YR8/6)	明黄褐色(10YR7/6)	明黄褐色(10YR7/6)			弥生末～古墳初頭	85	35
127	SX03-SE	01	高杯・脚部			(13.6)		密	普通	ミガキ	(横)ミガキ	橙色(7.5YR6/6)	橙色(7.5YR6/6)	にぶい橙色(7.5YR7/4)		3/12以下	1孔3組3穿孔。弥生末～古墳初頭	85	35
128	SX03（SD03-NE）	02	高杯・脚部					密	普通	ミガキ	板ナデ	にぶい黄橙色(10YR7/4)	にぶい黄橙色(10YR7/4)	にぶい黄橙色(10YR7/4)			2孔2組4穿孔。弥生末～古墳初頭	85	35
129	SX03（SD03-NE）	Ⅱ	高杯・脚部					密	普通	ミガキ	ナデ	橙色(7.5YR7/6)	橙色(7.5YR7/6)	灰色(5Y5/1)浅黄橙色(7.5YR8/6)			2孔2組4穿孔。弥生末～古墳初頭	85	
130	SX03（SD03-NW）	02	高杯・脚部					密(0.5～1mmの長石、チャート、石英、金雲母を少量含む)	普通	ミガキ	ナデ	橙色(5YR6/6)	橙色(5YR6/6)	橙色(5YR6/8)			弥生末～古墳初頭	86	
131	SX03（SD03-SW）	03	高杯・脚部					密	普通	調整不明	ナデ	橙色(7.5YR7/6)	橙色(7.5YR7/6)	橙色(7.5YR7/6)			1孔3組3穿孔。弥生末～古墳初頭	86	
132	SX03（SD03-NE）	02	高杯・脚部			(14.1)		やや粗(2mm以下のチャート、長石を少量含む)	普通	ミガキ	ナデ	橙色(7.5YR7/6)	橙色(7.5YR7/6)	橙色(7.5YR7/6)		6/12以上	1孔3組3穿孔。弥生末～古墳初頭	86	
133	SX03（SD03-S）	Ⅲ	高杯・脚部					やや粗(5mm以下の長石数個見られる)	普通	調整不明	調整不明	橙色(5YR7/8)	橙色(5YR7/8)	橙色(5YR7/8)			1孔3組3穿孔。弥生末～古墳初頭	86	35
134	SX03（SD03-NE）	02	器台	(16.0)				密(1～3mm程のチャート、長石を少量含む)	良好	杯部、脚部ミガキ	杯部ミガキ、脚部ナデ	にぶい黄橙色(10YR6/4)	にぶい黄橙色(10YR6/4)	にぶい黄橙色(10YR7/4)	9/12		1孔3組3穿孔。弥生末～古墳初頭	86	34
135	SX03（SD03-NE）	02	台付甕			(8.5)		やや粗(1mm以下の長石、多数含む)	普通	調整不明	(指)ナデ	橙色(7.5YR6/6)	橙色(7.5YR6/6)	橙色(7.5YR7/6)		3/12以上	弥生末～古墳初頭	86	35
136	SX03-NE	Ⅰ	広口壷					密	普通	ナデ	ハケ、ナデ	にぶい橙色(7.5YR6/4)	にぶい褐色(7.5YR5/3)	にぶい褐色(7.5YR5/3)			口縁部・擬凹線3条。弥生末～古墳初頭	86	
137	SX03-NE	Ⅱ	広口壷	(12.2)				やや粗(1mm以下の長石、多数含む)	普通	ハケ	ハケ	橙色(5YR6/6)	橙色(5YR6/6)	橙色(5YR7/8)	4/12		口縁部・擬凹線3条。弥生末～古墳初頭	86	35
138-1	SX03（SD03-NE）	02	壷	(20.2)				密(1mm以下の長石、チャートを少量含む)	良好	ミガキ	ミガキ	にぶい橙色(7.5YR6/4)	にぶい橙色(7.5YR6/4)	にぶい橙色(7.5YR6/4)	3/12		口縁部・多条沈線。弥生末～古墳初頭	87	36
138-2	SX03（SD03-NE）	02	壷・底部			5.0		密(1mm以下の長石、チャートを少量含む)	良好	ミガキ	ミガキ	にぶい橙色(7.5YR6/4)	にぶい橙色(7.5YR6/4)	にぶい橙色(7.5YR6/4)		完存	弥生末～古墳初頭	87	36
139	SX03（SD03）	Ⅲ	長頸壷	(7.9)	(15.5)	(1.4)	(12.3)	やや粗(礫、多数含む。3mm以下の長石少量含む)	普通	調整不明	調整不明	橙色(5YR6/8)	橙色(5YR6/8)	橙色(5YR6/6)			多条沈線？弥生末～古墳初頭	87	36
140-1	SX03（SD03-NE）	02	壷	(13.8)				密(1～3mm程のチャートを少量含む)	普通	ミガキ	ミガキ	赤色(10R4/8)	にぶい黄橙色(10YR6/4)	にぶい黄橙色(10YR6/4)	9/12		赤彩有り。口縁部・多条沈線。胴部・横線と刺突列。弥生末～古墳初頭	87	36
140-2	SX03（SD03-NE）	02	壷・底部			4.7		密(1～3mm程のチャートを少量含む)	普通	ミガキ	ナデ	赤色(10R4/8)	にぶい黄橙色(10YR6/4)	にぶい黄橙色(10YR6/4)		6/12以上	赤彩有り。弥生末～古墳初頭	87	36
141	SX03（SD03-NE）	02	長頸壷	(10.0)				密(1mm程のチャート、石英を少量含む)	良好	ミガキ	ミガキ	明黄褐色(10YR7/6)	にぶい黄橙色(10YR6/4)	にぶい黄橙色(10YR6/4)	3/12		多条沈線5条。弥生末～古墳初頭	87	
142	SX03-NE	Ⅰ	短頸壷	(12.0)				密(0.5mm以下の長石、石英を少量含む)	良好	調整不明	ナデ	暗赤色(10R3/4)	赤褐色(2.5YR4/6)	橙色(7.5YR6/6)	2/12		赤彩有り。口縁部・擬凹線5条。弥生末～古墳初頭	87	
143	SX03-SW	01旧表土	高杯・脚部					密	普通	ミガキ	調整不明	浅黄橙色(10YR8/3)	にぶい黄橙色(10YR7/4)	にぶい黄橙色(10YR7/3)			弥生末～古墳初頭	87	
144	SX03-NE	01旧表土	器台	(17.4)				密(1～3mmのチャート少量と0.5mm以下の長石を含む)	普通	調整不明	調整不明	橙色(7.5YR7/6)	橙色(7.5YR7/6)	橙色(7.5YR7/6)	5/12		弥生末～古墳初頭	87	36
145	SX03-NE	01旧表土	S字甕	(18.0)				やや粗(1mm程の長石、石英、金雲母を普通に含む)	普通	頸部ハケ、胴部ハケ	頸部横方向ハケ、胴部指頭痕	にぶい黄橙色(10YR6/4)	にぶい黄橙色(10YR7/4)	にぶい黄橙色(10YR7/4)	5/12		口縁部外面・列点文。弥生末～古墳初頭	87	36

表23　金ヶ崎遺跡土器観察表（6）

遺物番号	出土地点（遺構）	層位	器種	法量 口径(cm)	法量 器高(cm)	法量 底径(cm)	法量 最大幅(cm)	胎土	焼成	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	色調 断面	残存状態 口縁	残存状態 底部	備考（その他）	挿図	図版
146-1	SX03-NE	01 旧表土	パレス壷	(17.9)				密	普通	調整不明	口縁部ミガキ	橙色 (7.5YR7/6)	橙色 (7.5YR7/6)	にぶい黄橙色 (10YR7/4) 暗灰色 (N3/0)	1/12		赤彩有り。口縁部内面・羽状文。口縁部外面・擬凹線2条。弥生末～古墳初頭	87	36
146-2	SX03-NE	01 旧表土	パレス壷・底部			6.4		密	普通	調整不明	調整不明	橙色 (7.5YR7/6)	橙色 (7.5YR7/6)	にぶい橙色 (10YR7/4) 暗灰色 (N3/0)		6/12 以上	赤彩有り。弥生末～古墳初頭	87	36
147	SX05 (SD05-NW)	02	高杯	(30.0)				密（1㎜程のチャート、長石、石英、泥岩を多く含む）	普通	ミガキ	ミガキ	橙色 (7.5YR7/6)	橙色 (7.5YR7/6)	橙色 (7.5YR7/6)	3/12		弥生末～古墳初頭	92	37
148	SX05 (SD05-NW)	02	高杯					やや粗	普通	調整不明	調整不明	明黄褐色 (10YR7/6)	明黄褐色 (10YR7/6)	明黄褐色 (10YR7/6)			1孔3組3穿孔。弥生末～古墳初頭	92	37
149	SX05 (SD05-NW)	Ⅱ	高杯	(13.0)				密	普通	ナデ	ナデ	橙色 (7.5YR6/8)	明褐色 (7.5YR5/6)	橙色 (7.5YR6/8)	2/12		弥生末～古墳初頭	92	
150	SX05 (SD05-NW)	Ⅱ	高杯					密（1㎜以下のチャート、石英、長石を少量含む）	普通	ナデ	ナデ	橙色 (7.5YR7/6)	橙色 (7.5YR7/6)	橙色 (7.5YR7/6)			弥生末～古墳初頭	92	
151	SX05 (SD05-NW)	Ⅱ	高杯・脚部			(13.7)		やや粗（1㎜以下の長石、多数含む）	普通	調整不明	調整不明	浅黄橙色 (10YR8/4)	浅黄橙色 (10YR8/4)	浅黄橙色 (10YR8/4)		3/12 以上	1孔3組3穿孔。弥生末～古墳初頭	92	36
152	SX05 (SD05-NW)	02	高杯・脚部					やや粗	普通	ミガキ	ナデ	橙色 (7.5YR6/6)	橙色 (7.5YR6/6)	橙色 (7.5YR7/6)			弥生末～古墳初頭	92	37
153	SX05 (SD05-NW)	02	高杯・脚部					やや粗（2㎜以下の長石、数個見られる。礫を多数含む）	普通	ミガキ	ナデ	にぶい橙色 (5YR7/3)	にぶい橙色 (5YR7/3)	にぶい橙色 (7.5YR7/3)			1孔2組2穿孔。弥生末～古墳初頭	92	37
154	SX05 (SD05-NW)	Ⅱ	高杯・脚部					密（1㎜程のチャートを少量含む）	普通	ミガキ	ナデ	橙色 (7.5YR6/6)	橙色 (7.5YR6/6)	橙色 (7.5YR6/6)			2孔2組4穿孔。弥生末～古墳初頭	92	37
155	SX05 (SD05-NE)	02	高杯・脚部					密	普通	ミガキ	ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	黄灰色 (2.5Y6/1)			1孔3組3穿孔。弥生末～古墳初頭	92	37
156	SX05 (SD05-NW)	01	く字甕	(17.6)				やや粗	普通	ナデ	ハケ	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	2/12		弥生末～古墳初頭	92	
157	SX05 (SD05-NW)	02	パレス壷	(22.0)				やや粗（2㎜以下の長石を少量含む）	普通	調整不明	調整不明	橙色 (7.5YR7/6)	灰色 (5Y6/1)	浅黄橙色 (10YR8/4)	5/12		赤彩有り。口縁部外面・擬凹線4条。櫛状浮文。胴部外面・隆帯2条、横線、山形文、横線、山形文。弥生末～古墳初頭	92	37
158	SX05 (SD05-NW)	Ⅱ	壷					粗	普通	調整不明	指頭痕	浅黄橙色 (10YR8/4)	灰黄褐色 (10YR4/2)	黒色 (7.5Y2/1)			弥生末～古墳初頭	92	37
159	SX05-NW	Ⅱ	壷			(8.4)		やや粗（1㎜以下の長石を少量含む）	普通	調整不明	調整不明	橙色 (7.5YR7/6)	灰黄色 (2.5Y6/2)	灰黄色 (2.5Y6/2)		6/12 以上	上げ底。弥生末～古墳初頭	92	
160	SX05	02	壷			(4.6)		密（2㎜以下の長石を少量含む）	普通	調整不明	調整不明	橙色 (7.5YR7/6)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	褐灰色 (7.5YR4/1) 橙色 (7.5YR6/6)			弥生末～古墳初頭	92	
161	SX05	主体部下	小鉢	10.2	6.2	2.5		密（0.5～1㎜の長石、石英を多く含む）	普通	ハケ、ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	黄灰色 (2.5Y6/1)	12/12	完存	内面・水銀朱付着。弥生末～古墳初頭	93	37
162	SX05	主体部下	パレス壷					密（0.5～1㎜の長石、石英、泥岩を少量含む）	普通	ナデ	調整不明	赤色 (10R4/6) 浅黄橙色 (7.5YR8/6)	浅黄橙色 (10YR8/4)	浅黄橙色 (7.5YR8/6)			赤彩有り。（隆帯）弥生末～古墳初頭	93	
163	SX09-W	Ⅱ	高杯					密（1㎜以下の長石、石英、金雲母を少量含む）	普通	調整不明	ミガキ	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)			弥生末～古墳初頭	96	
164	SX09 (SD09-N)	01	高杯					やや粗（1～3㎜の長石、少量含む）	普通	調整不明	ミガキ	灰褐色 (7.5YR4/2)	褐灰色 (10YR4/1)	橙色 (7.5YR7/6)			弥生末～古墳初頭	96	38
165	SX09 (SD09-S)	03	高杯・脚部					密	良好	ミガキ	しぼり痕	明赤褐色 (2.5YR5/8)	橙色 (5YR7/6)	灰色 (N4/0)			2孔2組4穿孔。弥生末～古墳初頭	96	38
166	SX09 (SD09-E)	01	高杯・脚部					密	普通	ミガキ	ナデ	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	浅黄橙色 (7.5YR8/6)			1孔3組3穿孔。弥生末～古墳初頭	96	38
167	SX09 (SD09-E)	01	高杯・脚部					密	普通	調整不明	ナデ	赤褐色 (2.5YR4/8)	明赤褐色 (2.5YR5/8)	橙色 (7.5YR7/6)			弥生末～古墳初頭	96	38
168	SX09 (SD09-E)	02	高杯・脚部					密	普通	調整不明	ナデ	橙色 (7.5YR7/6)	橙色 (7.5YR7/6)	灰黄色 (2.5Y6/2)			弥生末～古墳初頭	96	
169	SX09 (SD09-N)	01	高杯・脚部					密	普通	ミガキ	ナデ	橙色 (5YR6/6)	橙色 (5YR6/6)	橙色 (5YR7/6)			1孔3組3穿孔。弥生末～古墳初頭	96	38
170	SX09 (SD09)	02	台付甕					粗	普通	調整不明	調整不明	橙色 (7.5YR6/8)	黄褐色 (10YR5/8)	明褐色 (7.5YR5/8)			弥生末～古墳初頭	96	38
171	SX09 (SD09-S)	02	く字甕	(15.5)				やや粗（2㎜以下の長石、石英、少量含む）	普通	ナデ、ハケ	ハケ	黒褐色 (7.5YR3/2)	黒褐色 (7.5YR3/2)	橙色 (5YR7/6)	2/12		弥生末～古墳初頭	96	
172	SX09 (SD09-W)	02	広口壷					密	普通	ミガキ	ナデ	橙色 (7.5YR6/6)	橙色 (7.5YR7/6)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)			弥生末～古墳初頭	96	38
173	SX09 (SD09-E)	02	パレス壷					密（緻密な胎土）	普通	調整不明	調整不明	褐色 (7.5YR4/3)	褐色 (7.5YR4/3)	黄灰色 (2.5Y4/1)			赤彩有り。胴部・斜位列点文、横線文、刺突列。弥生末～古墳初頭	96	

表24　金ヶ崎遺跡土器観察表（7）

遺物番号	出土地点（遺構）	層位	器種	法量 口径(cm)	法量 器高(cm)	法量 底径(cm)	法量 最大幅(cm)	胎土	焼成	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	色調 断面	残存状態 口縁	残存状態 底部	備考（その他）	挿図	図版
174	SX09（SD09-W）	02	パレス壷					密（2㎜の石英を1個含む）	普通	ミガキ	ハケ	明褐色（7.5YR5/6）	黒色（7.5Y2/1）	明褐色（7.5YR5/6）			赤彩有り。横線ハケ3条。弥生末～古墳初頭	96	38
175	SX09（SD09-N）	02	壷・底部			(6.1)		密（1㎜以下の長石、金雲母を少量含む）	普通	ミガキ	板ナデ	にぶい黄橙色（10YR6/4）暗灰色（N3/0）	黄灰色（2.5Y4/1）	黄灰色（2.5Y5/1）		3/12以下	弥生末～古墳初頭	96	
176	SX12（SD12-SE）	Ⅱ	高杯					やや粗（0.3㎜程の泥岩を多く含み、1㎜の長石を少量含む）	普通	調整不明	ナデ	明黄褐色（10YR6/6）	明黄褐色（10YR6/6）	明黄褐色（10YR6/6）			1孔3組3穿孔。弥生末～古墳初頭	99	39
177	SX12（SD12-SE）	Ⅲ	広口壷	(18.4)				やや粗（雑を多数含む）	普通	口縁部下ハケ	ナデ	にぶい橙色（7.5YR6/4）	にぶい黄橙色（10YR7/4）	にぶい黄橙色（10YR7/4）	2/12		口縁・擬凹線3条。弥生末～古墳初頭	99	
178	SX10（SD10-NE）	02	高杯・脚部					密	普通	ナデ	しぼり痕	橙色（7.5YR7/6）	にぶい黄橙色（10YR7/4）	橙色（5YR7/6）			屈折脚。5世紀末	104	38
179	SX10（SD10-NE）	01	甕	(14.4)				やや粗（1㎜以下の長石、石英、金雲母を少量含む）	普通	口縁部ナデ、胴部ハケ	ナデ	にぶい黄橙色（10YR7/4）	にぶい黄橙色（10YR6/4）	にぶい黄橙色（10YR6/4）	1.5/12		5世紀末	104	
180	SX10（SD10-NW）	02	杯蓋					密	良好	天井部回転ヘラ削り、口縁部回転ナデ	回転ナデ	灰色（7.5Y6/1）	灰白色（7.5Y7/1）	灰白色（7.5Y7/1）			天井部・浮文。5世紀末	104	39
181	SX10（SD10-SW）	01	杯蓋				(12.0)	密	良好	天井部回転ヘラ削り、口縁部回転ナデ	回転ナデ	灰白色（2.5Y8/1）	灰白色（2.5Y8/1）	灰白色（2.5Y8/1）			5世紀末	104	39
182	SX10（SD10-NE）	01	杯身	(13.0)				密（1㎜以下の長石を少量含む）	良好	回転ナデ	回転ナデ	灰白色（N7/0）	灰白色（N7/0）	灰白色（N7/0）	2/12		5世紀末	104	38
183-1	SX10（SD10-NW・NE）	01	甕	(23.0)				密	良好	回転ナデ	ナデ	灰白色（N7/0）	灰白色（N7/0）	灰色（N5/0）			5世紀末	104	38
183-2	SX10（SD10-NW・NE）	01	甕					密	良好	胴部格子目タタキ	ナデ	灰白色（N7/0）	灰白色（N7/0）	灰色（N5/0）			5世紀末	104	38
184-1	SX10（SD10-NE）	01	直口壷					密（2㎜以下の長石を1～2個含む）	良好	ナデ	調整不明	黒褐色（7.5YR3/1）	にぶい褐色（7.5YR6/3）	灰赤色（7.5R6/2）			波状文5条。5世紀末	104	39
184-2	SX10（SD10-NE）	01	直口壷			(4.6)		密（1㎜以下の長石を少量含む）	良好	ナデ	ナデ、指頭痕	灰色（N4/0）	灰色（N5/0）赤灰色（2.5YR5/1）	灰赤色（7.5R6/2）		6/12以上	5世紀末	104	39
185	SX10（SD10-NE）	02	高杯・脚部					密（0.5～1㎜のチャート、石英を少量含む）	普通	調整不明	しぼり痕	橙色（5YR7/6）	橙色（5YR7/6）	浅黄橙色（7.5YR8/6）			（3透孔か？）混入	104	
186	SX10（SD10-NE）	02	壷	(21.0)				密（0.5～2㎜の石英、長石を少量含む）	普通	調整不明	ナデ、ミガキ	橙色（5YR6/6）	橙色（5YR6/6）	褐灰色（10YR6/1）	1.3/12		赤彩なし。口縁部内側・横線。凹線、4孔。混入	104	38
187	SX10（SD10-SE）	01	盤			(10.6)		密	良好	底部回転ヘラ削り	底部回転ナデ	灰白色（N7/0）	灰白色（7.5Y7/1）	灰白色（7.5Y7/1）		3/12以下	混入 8世紀末の可能性	104	
188	SX10（SD10-NE）	01	長頸壷					密（1～1.5㎜の長石を少量含む）	良好	回転ナデ	ナデ	黒褐色（7.5YR3/1）	黒褐色（10YR3/1）	黄灰色（2.5Y6/1）			頸部・2条沈線。混入 7世紀後半	104	39
189	SD21B	02	高杯・脚部					密	普通	調整不明	ミガキ	明赤褐色（2.5YR5/6）	明赤褐色（5YR5/6）	橙色（7.5YR6/6）			弥生末～古墳初頭	109	39
190	SK17	01	高杯・脚部					密	普通	調整不明	調整不明	明赤褐色（5YR5/8）	明赤褐色（5YR5/8）	橙色（5YR6/6）			1孔4組4穿孔。弥生末～古墳初頭	109	39
191	SK25	01	壷	(11.8)				やや粗（1㎜以下の長石、少量含む）	普通	ナデ	板ナデ	赤色（10R4/6）	赤色（10R4/6）	橙色（5YR6/6）	2/12		赤彩有り。弥生末～古墳初頭	109	39
192	SZ04	01	山茶椀Ⅲ	(8.3)	(1.92)	(5.8)		密（2㎜以下の長石、数個見られる）	良好	回転ナデ、回転糸切り痕	回転ナデ	灰白色（5Y7/1）	灰白色（5Y7/1）	灰白色（5Y7/1）	5/12	3/12以上		127	39
193	SZ24		山茶椀	(10.5)	(2.45)	(3.6)		密	良好	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色（10YR8/3）	浅黄橙色（10YR8/4）	浅黄橙色（10YR8/4）	5/12	3/12以下	生田11型式	127	39
194	SZ27A		壷					密	良好	回転ナデ	指ナデ	淡黄色（5Y8/3）	淡黄色（2.5Y7/3）				灰釉 古瀬戸前期	127	40
195	SZ27B		瀬戸・美濃片口	(19.1)(22.0)	12.4	11.5	11.0	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	灰黄色（2.5Y7/2）	灰黄色（2.5Y7/2）		5/12	完存	灰釉	127	40
196	SZ32	01	山茶椀			(3.1)		密（1㎜以下の雑を少量含む）	良好	回転ナデ、底部回転糸切り痕	回転ナデ	灰白色（2.5Y7/1）	灰黄色（2.5Y7/2）	灰黄色（2.5Y7/2）		3/12以上	明和7型式	128	39
197	SZ33	01	山茶椀Ⅲ	(8.4)	(1.45)	(4.8)		密	良好	口縁部～体部回転ナデ、底部回転糸切り痕	回転ナデ	にぶい黄橙色（10YR7/2）	にぶい黄橙色（10YR7/2）	明紫灰色（5PB7/1）	2/12	3/12以下		128	39
198	SZ60	01	かわらけ	8.6	1.7	2.4	8.6	やや粗（1㎜以下の長石、わずかに含む）	普通	ナデ	ナデ	浅黄橙色（7.5YR8/4）	浅黄橙色（7.5YR8/4）	浅黄橙色（7.5YR8/4）	7/12	6/12以上	A2b	128	40
199	SZ60	01	かわらけ	9.0	1.7	2.4	9.0	やや粗	普通	ナデ	ナデ	浅黄橙色（10YR8/3）	浅黄橙色（10YR8/3）	浅黄橙色（10YR8/3）	12/12	完存	A2b	128	40
200	SZ60	01	かわらけ	8.5	1.5	2.0		密（0.5㎜以下の長石を少量含む）	良好	ナデ	ナデ	浅黄橙色（10YR8/3）	浅黄橙色（10YR8/3）	浅黄橙色（10YR8/3）	12/12	完存	A2b	128	40
201	SZ62	01	山茶椀	13.6	5.0	4.9		密	良好	回転ナデ、底部外面回転糸切り痕、高台端部もみから痕	回転ナデ、底部内面静止指ナデ	灰黄色（2.5Y7/2）	灰黄色（2.5Y7/2）	灰黄色（2.5Y7/2）	12/12	完存	にぶい橙色（5YR6/4）口縁部外面に少しライン状にある。大畑大洞8型式	129	40
202	SZ62	01	山茶椀	(14.0)	4.95	5.25	(14.0)	密	良好	回転ナデ、底部外面回転糸切り痕、高台端部もみから痕	回転ナデ、底部内面静止指ナデ	にぶい黄橙色（10YR7/3）	にぶい黄橙色（10YR7/3）	浅黄橙色（10YR8/3）	6/12	完存	大畑大洞8型式	129	40
203	SZ62	01	山茶椀Ⅲ	8.5	1.4	5.2		密（1㎜以下の長石が少量見られる）	良好	回転ナデ、底部外面回転糸切り痕	回転ナデ、底部内面静止指ナデ	灰黄色（2.5Y7/2）	灰黄色（2.5Y7/2）		12/12	完存	D　底部外面・墨書有。	129	40

表25　金ヶ崎遺跡土器観察表（8）

遺物番号	出土地点（遺構）	層位	器種	法量 口径(cm)	法量 器高(cm)	法量 底径(cm)	法量 最大幅(cm)	胎土	焼成	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	色調 断面	残存状態 口縁	残存状態 底部	備考（その他）	挿図	図版
204	SZ62	01	山茶椀Ⅲ	8.1	1.3	4.7		密（1㎜程の長石が少量有る）	良好	回転ナデ、底部外面回転糸切り痕、板目	回転ナデ、底部内面静止指ナデ	灰黄色(2.5Y7/2)	灰黄色(2.5Y7/2)	灰黄色(2.5Y7/2)	11/12	完存	F　内面・自然釉少量有。底部外面・墨書有。	129	40
205	SZ62	01	山茶椀Ⅲ	8.1	1.2	4.5		密	良好	回転ナデ、底部外面回転糸切り痕	回転ナデ、底部内面静止指ナデ	灰黄色(2.5Y7/2)	灰黄色(2.5Y7/2)		12/12	完存	B　底外面墨書有。	129	40
206	SZ62	01	山茶椀Ⅲ	8.8	1.15	5.8	8.8	密	良好	回転ナデ、底部外面回転糸切り痕	回転ナデ、底部内面静止指ナデ	灰白色(2.5Y8/2)	灰白色(2.5Y8/2)	灰白色(N7/0)	12/12	完存		129	40
207	SZ67		山茶椀	13.2	5.4	5.1		密	良好	回転ナデ、底部外面回転糸切り痕、高台端部もみから痕	回転ナデ、底部内面静止指ナデ	灰白色(5Y7/1)	灰白色(5Y7/2)		10/12	完存	明和7型式	129	40
208	SZ67		山茶椀Ⅲ	8.5	1.9	4.5		密（1㎜以下の長石が少量みられる）	良好	回転ナデ、底部外面回転糸切り痕	回転ナデ	灰白色(2.5Y8/2)	灰白色(2.5Y8/2)		12/12	完存	内外面・自然釉有。	129	41
209	SZ67		山茶椀Ⅲ	9.1	1.9	5.1		密（1㎜以下の長石が少量みられる）	良好	回転ナデ、底部外面回転糸切り痕	回転ナデ、底部内面指ナデ	灰白色(5Y8/1)	灰白色(5Y8/1)		12/12	完存	内外面・自然釉有。白土原～明和6～7型式	129	41
210	SZ67		山茶椀Ⅲ	9.0	2.0	5.0		密	良好	回転ナデ、底部外面回転糸切り痕	回転ナデ	灰白色(5Y7/1)	灰白色(5Y7/1)		12/12	完存	自然釉がみられる。	129	41
211	SZ110	01	山茶椀	14.4	5.8	6.1		密	良好	回転ナデ、底部回転糸切り痕、板目、高台端部もみから痕	回転ナデ、静止指ナデ	浅黄橙色(10YR8/3)	浅黄橙色(10YR8/4)	灰白色(10YR8/2)	10/12	完存	白土原6型式	130	41
212	SZ110	01	山茶椀	14.2	6.1	5.85	14.2	密（5㎜大の長石2ヶ、2㎜大の長石数個見られる）	良好	回転ナデ、底部回転糸切り痕、板目、高台端部もみから痕	回転ナデ、静止指ナデ	淡黄色(2.5Y8/3)	淡黄色(2.5Y8/3)		12/12	完存	白土原6型式	130	41
213	P61	02	甕(小)			(6.0)	(12.9)	やや粗(0.5～1.5㎜の長石、石英、チャートを多く含む)	普通	ハケ	板ナデ	にぶい褐色(7.5YR5/4)	黒褐色(2.5Y3/2)	にぶい橙色(7.5YR6/4)		6/12以上		131	41
214	包含層	Ⅱ	杯蓋	(11.4)				密（1㎜以下の長石を少量含む）	良好	天井部回転ヘラ削り、口縁部回転ナデ	回転ナデ	灰白色(2.5Y7/1)	灰白色(2.5Y7/1)	灰白色(2.5Y7/1)	5/12		7世紀後半	132	42
215	包含層	Ⅱ	杯身	(11.0)				密（0.5㎜以下の長石、多数含む）	良好	回転ナデ	回転ナデ	灰色(5Y6/1)	灰色(5Y6/1)	灰色(5Y6/1)		3/12以下	7世紀後半	132	42
216	包含層	01	杯身	(11.5)	(3.3)	(6.4)		密	良好	天井部回転ヘラ削り後、回転ナデ、口縁部回転ナデ	回転ナデ	灰白色(5Y7/1)	灰白色(5Y7/1)	灰白色(5Y8/2)	1/12	6/12以上	7世紀後半	132	42
217	包含層	01	高杯					密	良好	杯部回転ナデ	調整不明	オリーブ灰色(2.5GY6/1)	にぶい赤褐色(5YR5/3)	にぶい赤褐色(5YR5/3)				132	42
218	包含層	01	甕					密（0.5～1㎜程の長石を少量含む）	良好	口縁部～頸部回転ナデ、胴部格子目タタキ	口縁部～頸部回転ナデ、胴部当て具痕	灰色(7.5Y6/1)	灰色(10Y5/1)	灰白色(N7/0)			7世紀	132	42
219	包含層	Ⅱ	甕	(29.4)				密（1㎜程の長石を少量含む）	良好	回転ナデ	回転ナデ	灰色(5Y5/1)	灰色(5Y5/1)	灰色(5Y5/1)	0.9/12		口縁部・沈線。その下に2段の刺突列。7世紀後半	132	42
220	包含層	Ⅱ	平瓶					密（0.5㎜程の石英、長石を少量含む）	良好	回転ナデ	回転ナデ	黒色(5Y2/1)	にぶい黄橙色(10YR6/3)	にぶい黄橙色(10YR6/3)			内外面・自然釉付著。7世紀後半	132	42
221	包含層		灰釉陶器椀			6.9		密	良好	回転ナデ	回転ナデ	浅黄色(2.5Y7/3)	浅黄色(2.5Y7/4)	浅黄色(2.5Y7/4)	0/12	完存	O-53	133	42
222	包含層		灰釉陶器段Ⅲ	(12.4)	2.15	(6.4)		密（0.5㎜以下の長石を少量含む）	良好	回転ナデ	回転ナデ	灰白色(2.5Y7/1)	灰黄色(2.5Y7/2)	灰白色(2.5Y7/1)	1.5/12	3/12以上	O-53	133	42
223	包含層		灰釉陶器椀					密	良好	回転ナデ、底部回転糸切り痕	回転ナデ	淡黄色(2.5Y8/3)	淡黄色(2.5Y8/3)	淡黄色(2.5Y8/3)	1/12	6/12以上	H-72	133	42
224	包含層		灰釉陶器椀			(7.8)		密	良好	回転ナデ	回転ナデ	浅黄色(2.5Y7/3)	淡黄色(2.5Y8/3)	灰白色(5Y7/1)	0/12	6/12以上	H-72？	133	42
225	包含層		山茶椀	14.5	5.4	5.1	14.5	密	良好	底部回転糸切り痕、板目、高台もみから痕	回転ナデ、底部板ナデ	淡黄色(2.5Y8/3)	浅黄橙色(10YR8/4)	淡黄色(2.5Y8/3)	9/12	完存	明和7型式	134	42
226	包含層		山茶椀		3.0	7.6	10.4	密（5㎜大の長石をわずかに含む）	良好	回転ナデ、高台もみから痕	回転ナデ	灰白色(2.5Y7/1)	灰白色(2.5Y7/1)	灰白色(2.5Y7/1)	0/12	完存	5型式(b)	134	
227	包含層		山茶椀	(12.4)	(3.4)	(3.8)		密（1㎜以下の砂粒を少量含む）	良好	回転ナデ、高台もみから痕	回転ナデ	浅黄色(2.5Y7/3)	浅黄色(2.5Y7/3)	浅黄色(2.5Y7/3)	7/12	3/12以上	大洞東10型式	134	42
228	包含層		山茶椀	12.4	3.7	3.7		密（1.5～2㎜程の長石を少量含む）	良好	回転ナデ、底部回転糸切り痕、高台もみから痕	回転ナデ	灰白色(2.5Y8/2)	灰白色(2.5Y8/2)	灰白色(2.5Y8/2)	11/12	完存	大洞東10型式	134	42
229	包含層		山茶椀Ⅲ	10.5	2.4	5.1		密	良好	回転ナデ、底部回転糸切り痕	回転コテナデ	灰オリーブ色(5Y6/2)浅黄橙色(10YR8/4)	灰色(7.5Y6/1)黄橙色(10YR8/6)	黄橙色(10YR8/6)	8/12	完存	生田11型式	134	42
230	包含層		山茶椀	(9.8)	(3.0)	3.7		密（0.5㎜程の長石を少量含む）	良好	回転ナデ、底部回転糸切り痕	回転コテナデ	灰オリーブ色(5Y5/2)明黄褐色(10YR7/6)	灰オリーブ色(5Y5/2)明黄褐色(10YR7/6)	灰色(5Y6/1)	9.5/12	完存	生田11型式	134	
231	包含層		山茶椀Ⅲ	8.3	1.2	4.5	8.2	密	良好	回転ナデ、底部回転糸切り痕	回転ナデ、底部静止指ナデ	灰白色(5Y7/1)	灰白色(5Y7/1)	灰白色(N7/0)	9/12	完存	7～11型式	134	
232	包含層		山茶椀Ⅲ	8.7	1.5	5.0		密	良好	回転ナデ、底部回転糸切り痕	回転ナデ、底部板ナデ	灰黄色(2.5Y8/2)	灰白色(7.5Y7/1)	灰白色(7.5Y8/1)	12/12	完存	明和7型式	134	42
233	包含層		山茶椀Ⅲ	(9.0)	(2.2)	(5.3)		密（1㎜以下の長石をわずかに含む）	良好	回転ナデ、底部回転糸切り痕	回転ナデ	浅黄橙色(10YR8/4)	浅黄橙色(10YR8/4)	浅黄橙色(10YR8/4)	7.5/12	3/12以上	白土原6型式	134	42
234	包含層		山茶椀Ⅲ	8.5	1.1	6.1	8.5	密（1㎜以下の長石、わずかに含む）	良好	回転ナデ、底部回転糸切り痕	回転ナデ	灰白色(2.5Y8/1)	灰白色(2.5Y8/1)	灰白色(2.5Y8/1)	7/12	完存	7～11型式	134	42
235	包含層		山茶椀Ⅲ	7.9	2.2	3.4	7.7	密	良好	回転ナデ、底部回転糸切り痕	回転ナデ	浅黄色(2.5Y7/4)	浅黄色(2.5Y7/4)	灰白色(10YR8/2)	6/12	6/12以上	5型式併行	134	

表26　金ヶ崎遺跡土器観察表（9）

遺物番号	出土地点（遺構）	層位	器種	法量 口径(cm)	法量 器高(cm)	法量 底径(cm)	法量 最大幅(cm)	胎土	焼成	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	色調 断面	残存状態 口縁	残存状態 底部	備考（その他）	挿図	図版
236	包含層		古瀬戸根来型瓶子			(10.0)		密	良好	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄色(2.5Y6/4)	にぶい黄色(2.5Y6/3)			3/12以下	後3～4型式(15c)	135	42
237	包含層		古瀬戸水注	4.5				密	普通	回転ナデ	回転ナデ	灰オリーブ色(7.5Y5/3)	灰オリーブ色(7.5Y5/3)		12/12		灰釉	135	42
238	包含層		古瀬戸四耳壷					密(細かい石英、チャートを多く含む)	普通	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色(10YR7/4)	にぶい黄橙色(10YR7/3)			3/12以下	灰釉 前3(？)型式	135	42
239	包含層		仏像					密	良好	－	－	灰白色(10YR8/2)						135	45
240	包含層		美濃香炉	7.3	4.05			密	良好	回転ナデ	回転ナデ	灰黄色(2.5Y7/2)	灰黄褐色(10YR6/2)		9/12	完存	三足 灰釉 8小型式	135	45
241	包含層		美濃仏餉具			6.0		密(3mm以下の石英を少量含む)	普通	回転ナデ	回転ナデ	黒褐色(10YR2/2)	黒褐色(10YR2/2)			完存	鉄釉 7小型式	135	41
242	包含層		瀬戸・美濃灯明	7.8	4.6	5.1		密	普通	回転ナデ	回転ナデ	灰白色(7.5Y7/1)	灰白色(7.5Y7/1)		11/12	完存	灰釉 11小型式	135	45
243	包含層		瀬戸・美濃仏餉具	6.2				密	良好	回転ナデ	回転ナデ				12/12		染付 10～11小型式	135	43
244	包含層		瀬戸鉢(火入れ)					密	普通	回転ナデ	回転ナデ	灰白色(5Y8/2)	灰白色(10Y8/1)		10/12	完存	灰釉、鉄釉 10～11小型式	135	43
245	包含層		瀬戸瓶掛	(11.5)				密	良好	回転ナデ	回転ナデ	緑釉	浅黄色(2.5Y7/3)		1.5/12		銅緑釉 10小型式	135	42
246	包含層		美濃香炉	15.0	8.0			密	良好	回転ナデ	回転ナデ	灰白色(5Y8/2)	灰白色(5Y8/2)		12/12	完存	獣足(三足) 灰釉 5小型式	135	45
247	包含層		瀬戸半胴(中壜)	15.6	13.0	14.0		密	普通	口縁部～胴部回転ナデ、高台回転へラ削り	回転ナデ	暗褐色(7.5YR3/3)	暗褐色(7.5YR3/3)		10/12	6/12以上	鉄釉、灰釉 10、11小型式	135	43
248	包含層		七厘？	(21.7)	20.4	(15.9)		密	普通	ナデ？	ナデ？	緑灰色(5G6/1) 灰白色(5Y8/1)	緑灰色(5G6/1) 灰白色(5Y8/1) 暗赤褐色(10R3/2)		4/12	3/12以上		135	45
249	包含層		美濃小椀	5.6	3.7		高台径3.1	密(少量の長石、石英を含む)	普通	口縁部～胴部回転ナデ、胴部～底部回転へラ削り	回転ナデ	にぶい黄橙色(10YR7/4)	にぶい黄橙色(10YR7/3)		12/12	完存	灰釉 10、11小型式	136	45
250	包含層		美濃小椀	5.8	3.2		高台径3.1	密(3mm以下の石英、長石、チャートを少量含む)	普通	回転ナデ	回転ナデ	灰白色(5Y8/2)	灰白色(5Y8/2)		12/12	完存	灰釉 8、9小型式	136	45
251	包含層		美濃小椀	5.5	2.8		高台径3.2	密	良好	口縁部～胴部回転ナデ、胴部～底部回転へラ削り	回転ナデ	灰白色(5Y7/2)	灰白色(5Y7/2)		12/12	完存	灰釉 10、11小型式	136	45
252	包含層		美濃小椀	6.7	3.7	3.5	高台径3.2	密(細かい長石を少量含む)	普通	口縁部～胴部回転ナデ、胴部～底部回転へラ削り	回転ナデ	灰白色(5Y7/2)	灰白色(5Y7/2)		12/12	完存	灰釉 8小型式	136	45
253	包含層		美濃小椀	5.4	3.7	3.1		密	良好	口縁部～胴部回転ナデ、胴部～底部回転へラ削り	回転ナデ	灰白色(5Y7/1)	灰白色(2.5Y8/1)		12/12	完存	灰釉 8、9小型式	136	45
254	包含層		瀬戸猪口	6.0	6.1	5.1	高台径4.8	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	明青灰色(5B7/1)			10/12	6/12以上	染付 10～11小型式	136	43
255	包含層		瀬戸・美濃天目茶椀	(10.0)				密	良好	回転ナデ	回転ナデ	褐色(10YR4/4)	暗褐色(10YR3/3)		3.2/12		鉄釉？ 7小型式	136	45
256	包含層		美濃中鉢	15.0	5.7		高台径(8.5)	密	良好	回転ナデ、胴部～底部回転へラ削り	回転ナデ	灰色(10Y6/1)	灰色(10Y6/1)		10.5/12	6/12以上	染付 11小型式	136	45
257	包含層		瀬戸・美濃広東茶椀	12.1	6.6	7.1		密	普通	回転ナデ	回転ナデ	明オリーブ灰色(5GY7/1)	灰白色(5Y7/1)		12/12	完存	染付	136	43
258	包含層		瀬戸広東茶椀	11.1	5.6	6.0		密	良好	回転ナデ	回転ナデ	灰白色(7.5Y7/1)	灰白色(7.5Y7/1)		12/12	完存	染付 10小型式	136	43
259	包含層		瀬戸広東茶椀	(11.2)	6.0		高台径6.2	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	灰白色(5Y7/1)	灰白色(5Y7/1)		7/12	完存	染付 10型式	136	43
260	包含層		瀬戸・美濃はぶりわん(丸椀)	12.5	7.9		高台径5.0	密(細かい石英、長石が少量含まれる)	普通	回転ナデ	回転ナデ	暗赤灰色(7.5R3/1)	暗赤灰色(7.5R3/1)		7/12	6/12以上	釉薬不明 3小型式	136	43
261	包含層		美濃中鉢	13.8	5.05	9.0	高台径7.6	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	明青灰色(5B7/1)			12/12	完存	染付 11小型式	136	43
262	包含層		美濃中鉢	(14.0)	5.8		高台径8.0	密	良好	口縁部～胴部回転ナデ、胴部～高台回転へラ削り	回転ナデ				6.5/12	6/12以上	染付 11小型式	136	43
263	包含層		瀬戸鉢(中鉢)	18.9	8.8		高台径7.3	密	良好	回転ナデ、高台回転へラ削り	回転ナデ	灰白色(2.5Y8/2)	灰白色(2.5Y8/2)		7.5/12	完存	鉄釉、灰釉 11小型式、明治	137	43
264	包含層		瀬戸・美濃鉢	(19.2)	7.8		高台径8.35	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	灰白色(7.5Y8/1)	灰白色(7.5Y8/1)		2/12	完存	染付 11小型式	137	43
265	包含層		美濃丸椀	(9.7)	6.2		高台径4.0	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	黒色(7.5YR2/1)	黒色(7.5YR2/1)		5/12	完存	刻印 鉄釉 7小型式	137	43
266	包含層		美濃徳利(小瓶)			5.0		密	良好	回転ナデ、高台回転へラ削り	回転ナデ	にぶい黄褐色(10YR5/4)	にぶい黄褐色(10YR5/4)			完存	釉薬不明 8小型式～幕末	137	43
267	包含層		美濃徳利			11.4		密	良好	回転ナデ	回転ナデ	灰白色(5Y8/2)	灰白色(5Y8/2)			完存	灰釉 幕末、明治小	137	43
268	包含層		美濃行平	18.2	10.5	7.4		密(1mmの長石を少量含む)	良好	回転ナデ	回転ナデ	赤褐色(5YR4/6)	赤褐色(5YR4/6)		6/12	6/12以上	錆釉 7小型式	137	43
269	包含層		瀬戸・美濃鍋	(13.4)				密	良好	口縁部～胴部回転ナデ、胴部～底部回転へラ削り	回転ナデ	暗褐色(7.5YR3/4)	暗褐色(7.5YR3/4)		10/12		錆釉、灰釉 8小、9小型式	137	43
270	包含層		美濃土瓶	(10.6)	11.2	(7.0)		密	普通	口縁部～胴部回転ナデ、胴部～底部回転へラ削り	回転ナデ	にぶい赤褐色(2.5YR4/4)	にぶい赤褐色(5YR4/4)		2/12	6/12以上	錆釉 8小～9小型式	138	43
271	包含層		瀬戸行平	18.6 (21.0)		8.5		密	良好	回転ナデ	回転ナデ	灰白色(7.5Y8/2)	灰白色(7.5Y8/2)		12/12	完存	灰釉 11小型式、明治	138	43

表27　金ヶ崎遺跡土器観察表（10）

遺物番号	出土地点（遺構）	層位	器種	法量 口径(cm)	法量 器高(cm)	法量 底径(cm)	法量 最大幅(cm)	胎土	焼成	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	色調 断面	残存状態 口縁	残存状態 底部	備考（その他）	挿図	図版
272	包含層		美濃片口	16.2	8.1		高台径7.4	密	良好	口縁部～胴部回転ナデ、胴部～底部回転ヘラ削り	回転ナデ、トチン痕3ヶ所	灰オリーブ色(7.5Y6/2)	灰オリーブ色(7.5Y6/2)		10.5/12	完存	灰釉 10型式	138	45
273	包含層		瀬戸・美濃片口	15.7	8.3	6.5		密	良好	口縁部～胴部回転ナデ、胴部～高台回転ヘラ削り	回転ナデ	灰白色(2.5Y8/1)	灰白色(2.5Y8/1)		8/12	6/12以上	釉薬不明	138	
274	包含層		美濃片口	20.0 22.7	12.75		高台径11.3	密	良好	口縁部～胴部回転ナデ、胴部～高台回転ヘラ削り	回転ナデ	にぶい黄色(2.5Y6/4)	にぶい黄色(2.5Y6/4)				横位8条の沈線。灰釉	138	45
275	包含層		美濃片口	18.5 (21.0)	11.75	9.8	高台径8.8	密	良好	口縁部～胴部回転ナデ、胴部～高台回転ヘラ削り	回転ナデ、トチン痕3ヶ所	灰白色(7.5Y8/2)	灰白色(7.5Y8/2)		10/12	完存	灰釉 10型式	138	
276	包含層		美濃片口	21.5	13.9	12.4		密	普通	口縁部～胴部回転ナデ、胴部～高台回転ヘラ削り	回転ナデ	淡黄色(2.5Y8/3) 黄褐色(2.5Y5/4)	淡黄色(2.5Y8/3) 黄褐色(2.5Y5/4)		9/12	完存	灰釉	138	
277	包含層		美濃片口	17.6 (19.8)	11.75	11.0	高台径10.35	密	良好	口縁部～胴部回転ナデ、胴部～底部回転ヘラ削り	回転ナデ、トチン痕3ヶ所	灰白色(2.5Y7/1)			12/12	完存	ほぼ完形 灰釉 10型式	138	
278	包含層		瀬戸・美濃片口	19.8 22.3	13.1	10.3		密(チャート、長石を少量含む)	普通	口縁部～胴部回転ナデ、胴部～底部回転ヘラ削り	回転ナデ	浅黄色(2.5Y7/4)	浅黄色(2.5Y7/3)		10/12	完存	灰釉 10型式	138	45
279	包含層		美濃片口	18.2	10.7	10.8		密(細かいチャート、長石を少量含む)	良好	口縁部～胴部回転ナデ、胴部～底部回転ヘラ削り	回転ナデ	明黄褐色(2.5Y6/6)	明黄褐色(2.5Y6/6)		5/12	完存	灰釉 11型式	138	
280	包含層		美濃練鉢	18.0	11.8	11.3	高台径9.95	密	良好	口縁部～胴部回転ナデ、胴部～底部回転ヘラ削り	回転ナデ、トチン痕3ヶ所	灰白色(10Y7/2)	灰白色(10Y7/2)		12/12	完存	完形 灰釉 9型式	139	44
281	包含層		美濃練鉢	17.6	12.1	10.3		密	良好	口縁部～胴部回転ナデ、胴部～底部回転ヘラ削り	回転ナデ、トチン痕3ヶ所	灰色(7.5Y6/1) 灰オリーブ色(7.5Y6/2)	オリーブ灰色(2.5GY6/1)		12/12	完存	灰釉 9型式	139	
282	包含層		美濃鉢	(20.9)	10.1	(12.0)		密	普通	回転ナデ	回転ナデ	極暗赤褐色(2.5YR2/4) 黒色(N2/0)	浅黄色(5Y7/3)		5/12	3/12以上	鉄釉、灰釉 8小～11小型式	139	43
283	包含層		美濃捏鉢	28.0	14.25		高台径12.3	密	良好	口縁部～胴部回転ナデ、胴部～底部回転ヘラ削り	回転ナデ、トチン痕5ヶ所	灰白色(7.5Y7/1)	灰色(10Y6/1)		9.5/12	完存	灰釉 摹末	139	44
284	包含層		瀬戸捏鉢	32.1	15.3	13.0		密(細かい長石、石英を少量含む)	良好	口縁部～胴部回転ナデ、胴部～高台回転ヘラ削り	回転ナデ、トチン痕3ヶ所	灰白色(5Y7/2)	灰白色(5Y7/2)		12/12	完存	灰釉 摹末	139	44
285	包含層		瀬戸捏鉢	(33.0)	(17.8)	(12.0)		密(細かい長石を少量含む)	良好	口縁部～胴部回転ナデ、胴部～高台回転ヘラ削り	回転ナデ、トチン痕3ヶ所	灰白色(5Y8/2)	灰白色(5Y8/2)		4.5/12	6/12以上	灰釉 9小～10小型式	139	
286	包含層		瀬戸捏鉢		18.1	13.6	高台径13.0	密	普通	口縁部～胴部回転ナデ、胴部～高台回転ヘラ削り	回転ナデ、トチン痕3ヶ所	灰白色(7.5Y8/2)	灰白色(5Y7/2)		12/12	完存	灰釉 摹末	139	
287	包含層		瀬戸擂鉢	30.2	12.4	12.2		密(1㎜以下の長石、多数含む)	良好	口縁部～胴部回転ナデ、胴部～底部回転ヘラ削り	擂り目16本	にぶい赤褐色(5YR4/4)	にぶい赤褐色(5YR4/4)		9/12	6/12以上	錆釉 9型式(19c)	139	44
288	包含層		瀬戸擂鉢	33.9	12.8	14.0		やや粗(2㎜以下の長石を少量含む)	良好	口縁部～胴部回転ナデ、胴部～底部回転ヘラ削り	擂り目17本	にぶい赤褐色(5YR4/4)	にぶい赤褐色(5YR4/4)		7/12	6/12以上	錆釉 8型式(18c)	140	44
289	包含層		瀬戸・美濃擂鉢	(25.1)	12.55	(13.0)		密	良好	口縁部～胴部回転ナデ、胴部～底部回転ヘラ削り	擂り目35本	赤褐色(2.5YR4/8)	赤褐色(5YR4/8)		3/12	6/12以上	釉薬不明 明治(近現代)	140	44
290	包含層		瀬戸・美濃さや鉢					やや粗(1～6㎜程の長石、チャートを普通に含む)	普通	回転ナデ、底部回転糸切り痕	回転ナデ	にぶい褐色(7.5YR5/4)	にぶい黄橙色(10YR6/4)		12/12	完存		140	
291	包含層		瀬戸・美濃さや鉢	10.3	7.6	11.6		密(5㎜以下の長石、石英、チャートを多く含む)	良好	回転ナデ、底部回転糸切り痕	回転ナデ	赤褐色(5YR4/6)	にぶい赤褐色(5YR5/4)		12/12	完存		140	43
292	包含層		瀬戸・美濃さや鉢	(18.0)		(18.1)		密(8㎜の長石1ヶ、5㎜の長石数個見られる)	良好	口縁部～胴部回転ナデ、胴部～底部回転ヘラ削り	回転ナデ	にぶい黄橙色(10YR7/2)	にぶい黄橙色(10YR7/2)		6/12	6/12以上		140	
293	包含層		瀬戸・美濃さや鉢	(13.5)	(11.0)	(15.0)		やや粗(1～10㎜程の礫を少量含む)	良好	回転ナデ、底部回転糸切り痕	回転ナデ	暗赤褐色(5YR3/4)	明褐色(7.5YR5/6)		4.5/12	3/12以上		140	43

表28　金ヶ崎遺跡金属製品（銭貨）観察表

遺物番号	出土地点（遺構）	層位	種別	法量				材質	国名、初鋳年	備考	挿図	図版
				銭径(cm)(A/B)	内径(cm)(C/D)	銭厚(cm)	質量(g)					
319	ＳＺ16		銅銭	2.41/2.35	1.81/1.81	(0.12)	(3.0)	銅		4枚重なっている。	127	49
320	ＳＺ16		銅銭	－	－	(0.12)	(3.0)	銅		4枚重なっている。拓本無し。		49
321	ＳＺ16		銅銭	－	－	(0.12)	(3.0)	銅		4枚重なっている。拓本無し。		49
322	ＳＺ16		銅銭	2.45/2.46	1.97/1.96	(0.12)	(3.0)	銅	日本、1636年	4枚重なっている。古・寛永通寶	127	49
323	ＳＺ18		銅銭	－ /2.52	－ /2.07	0.11	(2.6)	銅	北宋、1023年	天聖元寶	127	49
324	ＳＺ18		銅銭	－ /2.47	－	0.10～0.12	(1.7)	銅	北宋、1068年	熙寧元寶	127	49
326	ＳＺ33	01	銅銭	2.48/2.54	2.00/2.05	(0.11)	(2.8)	銅	日本、1636年	3枚重なっている。古・寛永通寶	128	49
327	ＳＺ33	01	銅銭	－	－	(0.11)	(2.8)	銅		3枚重なっている。拓本無し。		49
328	ＳＺ33	01	銅銭	2.32/2.32	1.86/1.87	(0.11)	(2.8)	銅	日本、1636年	3枚重なっている。古・寛永通寶	128	49
329	ＳＺ33	01	銅銭	2.43/ －	2.05/1.99	(0.12～0.15)	(2.8)	銅	日本、1636年	3枚重なっている。古・寛永通寶	128	49
330	ＳＺ33	01	銅銭	－	－	(0.12～0.15)	(2.8)	銅		3枚重なっている。拓本無し。		49
331	ＳＺ33	01	銅銭	2.43/2.43	2.12/2.05	(0.12～0.15)	(2.8)	銅	日本、1636年	3枚重なっている。古・寛永通寶	128	49
341	ＳＺ68	01	銅銭	－	2.06/ －	0.12～0.13	(1.4)	銅	北宋、1068年	熙寧元寶	129	49
342	ＳＺ68	01	銅銭	－ /2.36	1.90/1.92	0.12～0.14	(1.9)	銅	北宋、1038年	皇宋通寶	129	49
356	包含層		銅銭	2.44/2.44	1.95/1.95	0.14	3.3	銅	日本、1668、1697年	新・寛永通寶	141	49
357	包含層		銅銭	2.30/2.31	1.87/1.87	0.09	1.8	銅	日本、1668、1697年	新・寛永通寶	141	49
358	包含層		銅銭	2.48/2.48	1.99/1.99	0.11～0.12	2.6	銅	日本、1668、1697年	新・寛永通寶	141	49
359	包含層		銅銭	2.49/2.49	2.03/2.01	0.11～0.12	3.1	銅	日本、1636年	古・寛永通寶	141	49
360	包含層		銅銭	2.29/ －	1.85/1.85	0.09	(1.8)	銅	日本、1668、1697年	新・寛永通寶	141	49
361	包含層		銅銭	2.42/2.45	2.01/2.03	0.09～0.10	2.5	銅	日本、1636年	古・寛永通寶	141	49
362	包含層		銅銭	－	2.03/2.02	0.12～0.13	(2.7)	銅	日本、1636年	古・寛永通寶	141	49
363	包含層		銅銭	－	1.81/1.81	(0.13～0.14)	(2.7)	銅	日本、1668年	2枚重なっている。新・寛永通寶　文銭	141	49
364	包含層		銅銭	2.51/2.51	1.82/1.82	(0.13～0.14)	(2.7)	銅	日本、1668年	2枚重なっている。新・寛永通寶　文銭	141	49
365	包含層		銅銭	2.28/2.28	1.85/1.84	0.12～0.13	2.4	銅	日本、1668、1697年	新・寛永通寶	141	49
366	包含層		銅銭	2.70/2.70	2.15/2.13	0.09～0.12	2.4	銅	日本、1863年	文久永寶	141	49
367	包含層		銅銭	2.31/2.32	1.89/1.89	0.09～0.10	1.7	銅	日本、1668、1697年	新・寛永通寶	141	49

表29　金ヶ崎遺跡金属製品（鉄釘）観察表

遺物番号	出土地点（遺構）	層位	種別	法量				残存状態	備考	挿図	図版
				長さ(cm)	頭部径(cm)	足部厚さ(cm)	質量(g)				
302	ＳＢ13Ａ-Ｓ	02	鉄釘	(3.40)	(1.00)	0.40	(3.4)	頭部、端部欠損		46	48
303	ＳＢ13Ａ-Ｓ	02	鉄釘	(8.10)	－	0.60	(8.9)	頭部、端部欠損		46	48
304	ＳＢ22-Ｓ	02	鉄釘	(14.00)	0.90	0.50	(19.2)	端部欠損		51	48
305	ＳＢ22-Ｓ	02	鉄釘	(11.05)	－	0.65	(14.9)	2　頭部、端部欠損		51	48
313	ＳＺ09	13	鉄釘	4.85	1.10	0.40	2.8			127	48
314	ＳＺ09		鉄釘	(4.90)	－	0.40	(1.9)	頭部欠損		127	48
315	ＳＺ09		鉄釘	(5.20)	1.00	0.40	(1.5)	端部欠損		127	48
316	ＳＺ09		鉄釘	(3.70)	1.25	0.45	(1.9)	端部欠損		127	48
317	ＳＺ09		鉄釘	(3.20)	－	0.20	(0.7)	頭部欠損		127	48
318	ＳＺ09		鉄釘	5.90	0.85	0.40	2.2			127	48
325	ＳＺ27Ｂ	01	鉄釘	(4.50)	－	0.25	(2.3)	頭部欠損		127	48
332	ＳＺ41	01	鉄釘	12.50	1.40	0.40	8.9			128	48
333	ＳＺ41	01	鉄釘	12.20	1.20	0.35	9.1			128	48
334	ＳＺ41	01	鉄釘	(3.75)	－	0.25	(1.3)	頭部、端部欠損		128	48
335	ＳＺ41	01	鉄釘	11.10	1.10	0.50	8.9			128	48
336	ＳＺ41	01	鉄釘	(3.95)	0.80	0.25	(1.7)	端部欠損		128	48
337	ＳＺ41	01	鉄釘	(4.75)	0.90	0.45	(2.5)	端部欠損		128	48
338	ＳＺ41	01	鉄釘	5.60	1.00	0.45	2.3			128	48
339	ＳＺ41	01	鉄釘	(3.90)	0.80	0.35	(1.7)	端部欠損		128	48
340	ＳＺ41	01	鉄釘	6.40	1.00	0.35	3.0			128	48
343	ＳＺ76	01	鉄釘	(3.60)	1.10	0.55	(2.0)	端部欠損		129	48
344	ＳＺ76	01	鉄釘	(3.70)	－	0.45	(2.1)	頭部、端部欠損		129	48
345	ＳＺ76	01	鉄釘	(1.90)	－	0.40	(0.7)	頭部、端部欠損		129	48
346	ＳＺ76	01	鉄釘	(6.00)	－	0.50	(4.7)	頭部、端部欠損		129	48
347	ＳＺ76	01	鉄釘	(3.60)	－	0.15	(1.0)	頭部欠損		129	48
348	ＳＺ76	01	鉄釘	(2.20)	－	0.20	(0.6)	頭部、端部欠損		129	48
349	ＳＺ76	01	鉄釘	(3.20)	1.00	0.50	(3.2)	端部欠損	木質付着	129	48
350	ＳＺ76	01	鉄釘	(3.60)	1.05	0.40	(2.1)	端部欠損		129	48
351	ＳＺ76	01	鉄釘	(1.95)	－	(0.35)	(2.1)	頭部、端部欠損	木質付着	129	48
352	ＳＺ76	01	鉄釘	(3.40)	1.05	0.25	(2.2)	端部欠損	木質付着	129	48
353	ＳＺ76	01	鉄釘	(2.55)	0.90	0.30	(1.2)	端部欠損		129	48
354	ＳＺ76	01	鉄釘	(1.10)	－	0.30	(0.1)	頭部、端部欠損		129	48

表30　金ヶ崎遺跡金属製品（刀子・剣）観察表

遺物番号	出土地点（遺構）	層位	種別	法量 刃部長(cm)	刃部幅(cm)	刃部厚さ(cm)	質量(g)	残存状態	備考	挿図	図版
306	SB22-S	02	刀子	(5.60)	(2.05)	(0.30)	(12.0)	胴部(？)欠損	1	51	48
309	SX02	Ⅱ	鉄剣	(7.50)	(2.35)	(0.45)	(28.6)	両端欠損	木質付着	81	48
355	SZ76	01	刀子	(2.20)	(1.20)	(0.35)	(3.5)	刃部先端欠損	木質付着	129	48

表31　金ヶ崎遺跡金属製品（その他・不用）観察表

遺物番号	出土地点（遺構）	層位	種別	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	質量(g)	残存状態	備考	挿図	図版
301	SB10-N	02	不明	4.05	11.50	0.10	5.8			40	48
307	SB22-S	02	不明	(5.95)	(1.10)	0.25	(5.7)	欠損あり		51	48
308	SX01-N	Ⅱ	不明	(3.55)	(2.70)	(0.50)	(6.4)	生きた辺、2辺あり		78	48
368	SB03　P05	02	鉄屑	—	—	—	100.7				49
369	SB13A-S	02	鉄屑	—	—	—	224.0				49
370	包含層		鉄屑	—	—	—	179.6				49
371	包含層		鉄屑	—	—	—	62.1				49
372	包含層		鉄屑	—	—	—	46.4				49
373	包含層		鉄屑	—	—	—	307.4				49

表32　金ヶ崎遺跡金属製品（銅鏃）観察表

遺物番号	出土地点（遺構）	層位	種別	法量 鏃身長(cm)	鏃身幅(cm)	鏃身厚(cm)	質量(g)	残存状態	備考	挿図	図版
310	SX05	主体部	銅鏃	(4.20)	(1.60)	0.50	6.2	先端及び逆刺片方欠損	有茎　有孔 全長（5.90）	93	41
311	SX05	主体部	銅鏃	(4.55)	(1.50)	0.55	7.3	先端及び逆刺片方欠損	有茎　全長（6.55）	93	41
312	SX05	主体部	銅鏃	(3.80)	(1.50)	0.50	4.9	逆刺両方欠損	有茎　全長（5.50）	93	41

表33　金ヶ崎遺跡石器（ナイフ形石器）観察表

遺物番号	出土地点（遺構）	層位	種類	石材	法量 長さ(mm)	幅(mm)	厚み(mm)	質量(g)	挿図	図版
420	包含層		ナイフ形石器	チャート	37.0	12.2	6.4	2.7	142	47

表34　金ヶ崎遺跡石器（石鏃）観察表

遺物番号	出土地点（遺構）	層位	種類	石材	法量 長さ(mm)	幅(mm)	厚み(mm)	質量(g)	抉深(mm)	先端角(°)	挿図	図版
421	包含層		石鏃	下呂石	23.0	(14.0)	4.5	(0.8)		40	142	47
422	包含層		石鏃	チャート	22.0	16.5	3.0	0.7	4.5	46	142	47

表35　金ヶ崎遺跡石器（打製石斧）観察表

遺物番号	出土地点（遺構）	層位	種類	石材	法量 長さ(mm)	幅(mm)	厚み(mm)	質量(g)	最大幅	刃部摩耗	自然面の有無	折損部位	分類	挿図	図版
402	SB12-S	02	打製石斧	ホルンフェルス	99.0	41.5	19.0	81.8	刃部		無		2	44	46
403	SX02	01	打製石斧	泥岩	(115.0)	(42.5)	(11.5)	(60.8)	胴部	不明	無	a	3	81	46
418	SD09-W	01	打製石斧	泥岩	97.5	44.5	10.0	59.3	胴部		有		3	96	46
428	包含層		打製石斧	ホルンフェルス	(115.0)	(41.5)	(20.0)	(89.9)	刃部		無	a	2	142	47
429	包含層		打製石斧	ホルンフェルス	122.0	44.5	20.5	106.8	胴部	有	有		1	142	47
430	包含層		打製石斧	ホルンフェルス	(86.0)	(61.5)	(10.5)	(74.9)	胴部		有	d	2	142	47
431	包含層		打製石斧	ホルンフェルス	115.0	66.5	24.5	228.5	胴部	有	有		1	142	47
432	包含層		打製石斧	ホルンフェルス	77.0	(41.0)	11.0	(37.2)	刃部		有	b	3	142	47
435	SB13B-S	02	打製石斧	泥岩	(67.7)	(39.7)	(9.5)	(41.1)	胴部	有	無	c	1		
436	SB16-NW	02	打製石斧	泥岩	(47.9)	(78.2)	(10.2)	(48.3)	不明	有	有	c	不明		
438	包含層		打製石斧	ホルンフェルス	102.0	35.6	19.9	57.3	胴部	有	無		1		
439	包含層		打製石斧	ホルンフェルス	(94.5)	(42.1)	(10.8)	(65.9)	胴部		無	e	1		
440	包含層		打製石斧	泥岩	(93.7)	(56.6)	(20.5)	(141.7)	刃部	不明	有	a	2		
441	包含層		打製石斧	ホルンフェルス	87.1	39.2	12.0	55.2	刃部	有	無		2		
442	包含層		打製石斧	ホルンフェルス	(69.4)	(42.3)	(8.3)	(40.1)	胴部	不明	無	a	1		
443	包含層		打製石斧	泥岩	(47.3)	(46.2)	(9.2)	(32.8)	不明	不明	無	f	不明		
444	包含層		打製石斧	ホルンフェルス	(68.4)	(47.9)	(19.8)	(80.1)	胴部	不明	無	a	1		
445	包含層		打製石斧	安山岩	(98.9)	(73.0)	(19.4)	(161.7)	胴部	不明	無	d	1		
446	包含層		打製石斧	泥岩	(76.8)	(41.6)	(9.8)	(41.6)	胴部	不明	有	a	1		
447	包含層		打製石斧	ホルンフェルス	(78.5)	(42.1)	(13.9)	(53.2)	胴部	有	無	c	1		

表36　金ヶ崎遺跡石器（石庖丁）観察表

遺物番号	出土地点（遺構）	層位	種類	石材	法量 長さ(mm)	幅(mm)	厚み(mm)	質量(g)	刃部 刃部数	平面形	調整	備考	挿図	図版
401	SB16	02	石庖丁	ホルンフェルス	(82.0)	(54.5)	(13.5)	(46.8)	1	直線	両面		27	46
417	SX09	01	石庖丁	泥岩	(71.0)	(42.0)	(55.0)	(19.1)	1	やや外彎	両面		96	46
426	包含層		石庖丁	ホルンフェルス	(46.0)	(41.0)	(7.0)	(16.7)	1	直線	両面	（孔1）	142	47

表37　金ヶ崎遺跡石器（打製穂摘具）観察表

遺物番号	出土地点(遺構)	層位	種類	石材	法量				刃部			抉深(mm)	挿図	図版
					長さ(mm)	幅(mm)	厚み(mm)	質量(g)	刃部数	平面形	調整			
427	包含層		打製穂摘具(有抉)	ホルンフェルス	(51.0)	(35.0)	(8.0)	(21.8)	不明	不明	不明	4.0	142	47

表38　金ヶ崎遺跡石器（石核）観察表

遺物番号	出土地点(遺構)	層位	種類	石材	素材	自然面	打面数	打面状態	作業面数	挿図	図版
419	ＳＤ09	01	石核	チャート	原礫	有	1	剥離面1	4	96	46

表39　金ヶ崎遺跡石器（ＲＦ）観察表

遺物番号	出土地点(遺構)	層位	種類	石材	法量				備考	挿図	図版
					長さ(mm)	幅(mm)	厚み(mm)	質量(g)			
423	包含層		ＲＦ	チャート	43.0	21.5	9.0	6.6	刃部タイプ：削器的(刃部角度が60°以下) 刃部数：1　刃部箇所の平面形と調整方法：直線状(両面)	142	47
437	ＳＫ29	01	ＲＦ	チャート	26.9	41.6	15.5	14.9	刃部タイプ：削器的(刃部角度が60°以下) 刃部数：1　刃部箇所の平面形と調整方法：直線状(両面)		

表40　金ヶ崎遺跡石器（ＵＦ）観察表

遺物番号	出土地点(遺構)	層位	種類	石材	法量				備考	挿図	図版
					長さ(mm)	幅(mm)	厚み(mm)	質量(g)			
424	包含層		ＵＦ	チャート	37.0	24.5	7.5	5.4	剥離痕の箇所：側縁部　縁辺の角度：急 剥離痕箇所の平面形：直線状	142	47
425	包含層		ＵＦ	チャート	35.0	37.0	10.0	10.0	剥離痕の箇所：側縁部　縁辺の角度：急 剥離痕箇所の平面形：凹状	142	47

表41　金ヶ崎遺跡石器（管玉・匂玉）観察表

遺物番号	出土地点(遺構)	層位	種類	石材	法量				挿図	図版
					長さ(mm)	幅(mm)	厚み(mm)	質量(g)		
404	ＳＸ05主体部		管玉	緑色凝灰岩	(6.2)	(3.0)	(3.5)	(0.1未満)	93	46
405	ＳＸ05主体部		管玉	緑色凝灰岩	(13.5)	(3.1)	(3.2)	(0.1未満)	93	46
406	ＳＸ05主体部		管玉	緑色凝灰岩	6.6	2.6	2.6	0.1未満	93	46
407	ＳＸ05主体部	1	管玉	緑色凝灰岩	(11.3)	(2.8)	(3.0)	(0.1未満)	93	46
408	ＳＸ05主体部		管玉	緑色凝灰岩	9.0	2.8	3.0	0.1	93	46
409	ＳＸ05主体部	01	管玉	緑色凝灰岩	(6.5)	(2.5)	(2.6)	(0.1未満)	93	46
410	ＳＸ05主体部	01	管玉	緑色凝灰岩	12.7	2.7	2.2	0.1未満	93	46
411	ＳＸ05主体部	01	管玉	緑色凝灰岩	9.8	2.9	2.7	0.1	93	46
412	ＳＸ05主体部	01	管玉	緑色凝灰岩	10.7	3.7	2.5	0.1未満	93	46
413	ＳＸ05主体部	01	管玉	緑色凝灰岩	12.6	2.5	2.4	0.1未満	93	46
414	ＳＸ05主体部	01	管玉	緑色凝灰岩	9.8	2.9	3.0	0.1未満	93	46
415	ＳＸ05主体部		勾玉	ヒスイ	7.5	5.0	1.7	0.1	93	46
416	ＳＸ05主体部	01	勾玉	ヒスイ	9.2	5.7	2.8	0.3	93	46

表42　金ヶ崎遺跡五輪塔観察表

遺物番号	出土地点(遺構)	層位	種類	石材	法量									挿図	図版
					全高(mm)	全高－軒厚(中央)(mm)	軒厚(中央)(mm)	軒厚(角)(mm)	ほぞ穴深さ(mm)	笠上部幅(mm)	ほぞ上部径(mm)	軒(上)径(mm)	軒(下)径(mm)		
433	包含層		火輪	花崗岩	166.0	120.0	46.0	52.5	17.0	99.7	60.5	229.5	224.5	144	47
434	包含層		火輪	花崗岩	134.0	97.7	36.3	59.1	26.8	101.5	64.0	228.5	223.5	144	47

表43　青木横穴墓土器観察表

遺物番号	出土地点（遺構）	層位	器種	法量 口径(cm)	法量 器高(cm)	法量 底径(cm)	法量 最大幅(cm)	胎土	焼成	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	色調 断面	残存状態 口縁	残存状態 底部	備考（その他）	挿図	図版
1	礫床目地南		高杯	(13.0)				密(0.5㎜以下の長石を少量含む)	良好	回転ナデ	回転ナデ	灰色(5Y6/1)	灰色(N6/0)	灰白色(N7/0)	1.5/12		7世紀中葉	148	
2	礫床目地南		高杯	(13.3)				密（緻密な胎土）	良好	口縁部～胴部回転ナデ、杯部胴部～底部回転ヘラ削り、脚部回転ナデ	回転ナデ	灰白色(N7/0)	灰色(5Y6/1)	灰白色(5Y7/1)	0.7/12		7世紀中葉	148	53
3	礫床目地南		高杯			(9.6)		密	良好	回転ナデ	回転ナデ	灰白色(7.5Y7/1)	灰白色(7.5Y7/1)	灰白色(7.5Y8/1)		3/12以上	7世紀中葉	148	53
4	礫床目地南		高杯			11.3		密（固く緻密な胎土）	良好	回転ナデ	回転ナデ	灰色(N4/0)	暗灰色(N3/0)	暗灰色(N3/0)		3/12以下	三方透孔。7世紀中葉	148	53
5	礫床目地南		壷	(5.7)				密	良好	回転ナデ	回転ナデ	灰色(N6/0)	灰色(N4/0)	灰色(N6/0)		3/12以上	口縁部下・棒状工具による沈線。6世紀末	148	
6	礫床目地南		短頸壷	(11.6)			(13.4)	密	良好	回転ナデ	回転ナデ	黒色(N1.5/0)	灰色(5Y6/1)	褐灰色(7.5YR5/1)	1/12以下		内外面・自然釉有り。6世紀末	148	53
7	礫床目地南		山茶椀			(8.8)		やや粗（2㎜以下の長石を少量含む）	良好	回転ナデ、底部回転糸切り痕、高台もみがら痕	回転ナデ	灰色(5Y6/1)	黄灰色(2.5Y6/1)	灰白色(2.5Y7/1)	0/12	完存	5型式前半	148	53
8	礫床目地南		山茶椀			(7.5)		やや粗(2.0㎜以下の長石を含む)		回転ナデ	回転ナデ	灰白色(2.5Y7/1)	灰白色(2.5Y7/1)	灰白色(2.5Y7/1)		6/12以上	5型式前半	148	53

表44　青木横穴墓金属製品観察表

遺物番号	出土地点（遺構）	層位	種別	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 質量(g)	残存状態	備考	挿図	図版
9-1	玄室南側	03	鉄片	(8.65)	(7.85)		(9.8)			148	53
9-2	玄室南側	03	鉄片	(3.95)	(4.45)		(2.8)			148	53
9-3	玄室南側	03	鉄片	(4.85)	(2.45)		(2.3)	生きた辺あり。		148	53
9-4	玄室南側	03	鉄片	(3.55)	(4.85)		(2.2)			148	53
9-5	玄室南側	03	鉄片	(3.90)	(2.80)		(1.9)			148	53
9-6	玄室南側	03	鉄片	(2.15)	(3.20)		(0.8)			148	53
9-7	玄室南側	03	鉄片	(2.25)	(2.70)		(0.9)			148	53
9-8	玄室南側	03	鉄片	(2.10)	(2.45)		(0.9)			148	53
9-9	玄室南側	03	鉄片	(2.05)	(2.55)		(0.9)			148	53
9-10	玄室南側	03	鉄片	(1.80)	(3.20)		(1.1)	生きた辺あり。		148	53
9-11	玄室南側	03	鉄片	(1.40)	(2.10)		(0.4)			148	53
9-12	玄室南側	03	鉄片	(1.35)	(1.60)		(0.4)			148	53
9-13	玄室南側	03	鉄片	(1.05)	(1.25)		(0.2)			148	53
9-14	玄室南側	03	鉄片	(1.10)	(0.95)		(0.1)			148	53
9-15	玄室南側	03	鉄片	(0.65)	(0.80)		(0.1未満)			148	53
10	玄室南側	01	不明	5.10	1.10	0.25	3.4			148	53
11	玄室南側	01	火打金	(4.95)	2.60	0.40	(6.8)	端部片方、底辺一部欠損		148	53

参考文献

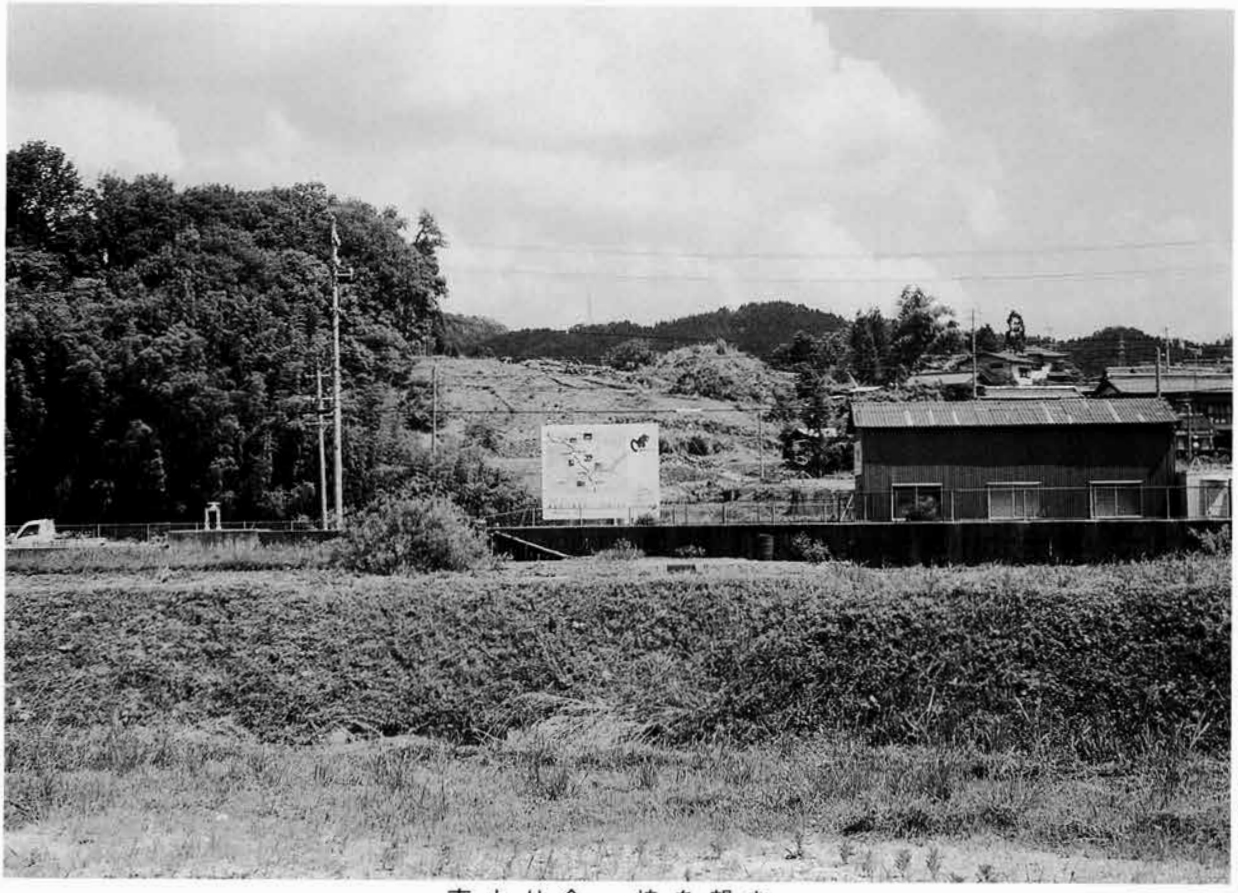
赤塚次郎　1990『廻間遺跡』　愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集（財）愛知県埋蔵文化財センター
赤塚次郎　1994『松河戸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第48集（財）愛知県埋蔵文化財センター
赤塚次郎　1997『西上免遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第78集（財）愛知県埋蔵文化財センター
赤塚次郎　2001「弘法山古墳の時代」『平出博物館ノート15』塩尻市立平出博物館
赤塚次郎他　2001「松河戸・宇田様式の再編」『研究紀要　2』（財）愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
赤塚次郎　1999「濃尾平野の墓制」『季刊　考古学　第67号』雄山閣
齊藤基生　1994『伊瀬粟地遺跡発掘調査報告書』　美濃加茂市教育委員会
渡辺博人他　1995『為岡遺跡発掘調査報告書』美濃加茂市教育委員会
佐野康雄他　1993『尾崎遺跡』（財）岐阜県文化財保護センター
小野木学　1997『堀田城之内』（財）岐阜県文化財保護センター
春日井恒　1998『今宿遺跡』（財）岐阜県文化財保護センター
千藤克彦　1998『荒尾南遺跡』（財）岐阜県文化財保護センター
佐野康雄　1998『牧野小山遺跡　C地点』（財）岐阜県文化財保護センター
小野木学　2000『顔戸南遺跡』（財）岐阜県文化財保護センター
成瀬正勝他　2000『砂行遺跡』（財）岐阜県文化財保護センター
飯沼暢康　2000『南高野古墳・二ノ井遺跡・市場遺跡』（財）岐阜県文化財保護センター
板東肇　他　2000『戸入村平遺跡Ⅱ・小谷戸遺跡』（財）岐阜県文化財保護センター
松本哲　他　2000『妻木晩田遺跡発掘調査報告書』大山村埋蔵文化財発掘調査団・鳥取県大山町教育委員会
黒坂秀樹他　2001『古保利古墳群　第１次確認調査報告書』高月町教育委員会
高橋克壽他　1999『前波の三ツ塚』可児市教育委員会
植野浩三他　1997『五村遺跡』滋賀県虎姫町教育委員会　奈良大学文学部考古学研究室
若尾要司他　1997『大王寺南古墳発掘調査報告書』　御嵩町教育委員会
吉田英敏他　1994『川合遺跡群』可児市教育委員会
内堀信雄　1999『城之内遺跡――長良公園整備事業に伴う緊急発掘調査―』岐阜市教育委員会
内堀信雄　1999『城之内遺跡―北町堀田線・宮口町高見線街路事業に伴う緊急発掘調査―』（財）岐阜市教育文化振興事業団
大熊茂弘　『宮塚遺跡Ａ地区発掘調査報告書』各務原市埋蔵文化財調査センター
藤澤良裕　1994「山茶椀研究の現状と課題」『研究紀要　第３号』三重県埋蔵文化財センター
藤澤良裕　1998『瀬戸市史　陶磁史篇一～六』瀬戸市

山崎克巳他　1993『一の谷中世墓群基』本文編　一宮教育委員会

岡本直久他　1994『(財) 瀬戸市埋蔵文化財センター企画展　東海の中世墓』(財) 瀬戸市埋蔵文化財センター
1995『前方後方墳を考える』第3回東海考古学フォーラム
1998『土器・墓が語る』第6回東海考古学フォーラム　岐阜県大会
2000『S字甕を考える』第7回東海考古学フォーラム　三重県大会
2000『須恵器生産の出現から消滅』東海土器研究会
1988『東海の前方後方墳　論集　弥生から古墳へ　古代第86号』早稲田大学考古学会
2001『第9回春日井シンポジウム　東海学を深める～弥生から伊勢平氏まで～』春日井市教育委員会
1989『断夫山とその時代』東海埋蔵文化財研究会
1996『日本出土銭総覧』兵庫埋蔵銭調査会
金関恕他　1987『弥生文化の研究　8　祭と墓と装い』雄山閣
小野木学　1997「美濃地方における中世前期の土師器皿の様相」『美濃の考古学　第2号』美濃の考古学刊行会
鈴木元　2002「美濃の弥生墓制」『美濃の考古学　第5号』美濃の考古学刊行会
鈴木元　2001「ムラ（集落）とハカ（墓）」『昼飯大塚古墳の登場とその背景を探る』大垣市教育委員会

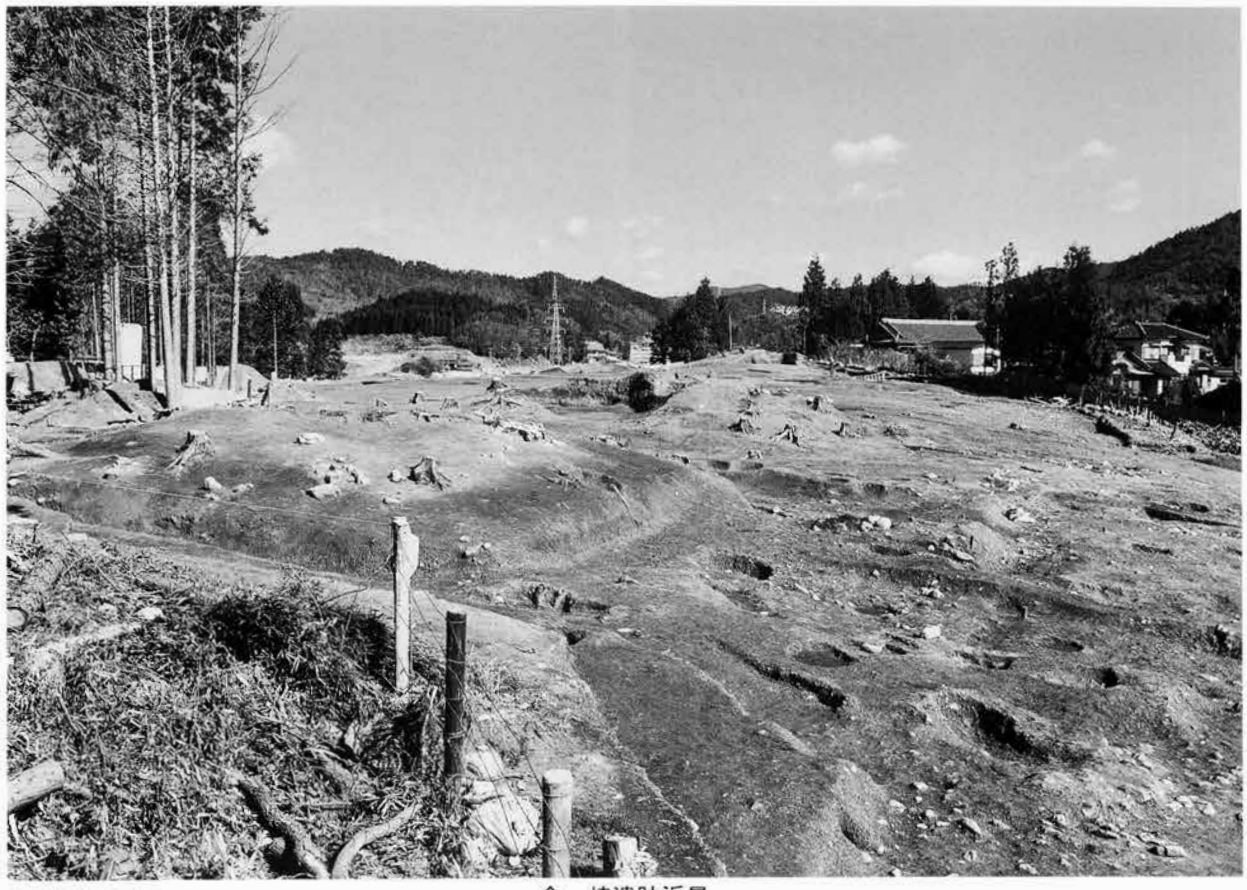
図　　版

図版 1



南より金ヶ崎を望む

青木横穴墓近景



金ヶ崎遺跡近景

作業風景

試掘トレンチ

空中写真測量

基礎講座

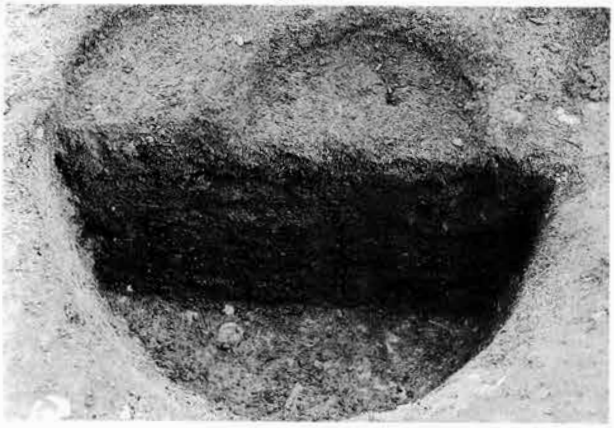
図版 3

ＳＢ01・02　検出

ＳＢ01・02　完掘

ＳＢ03

ＳＢ04



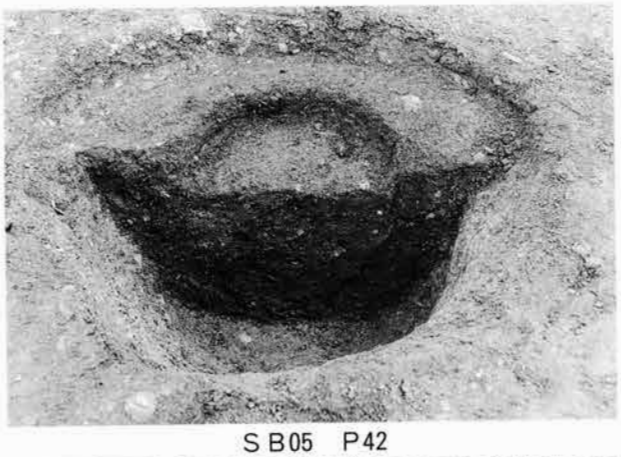
ＳＢ03　Ｐ10

ＳＢ03　Ｐ21

ＳＢ04　Ｐ08

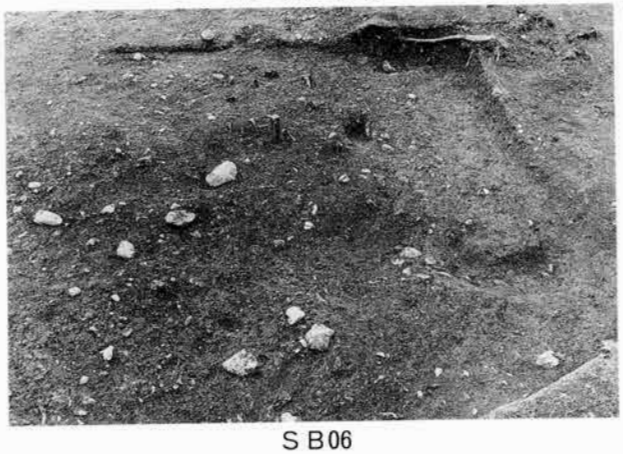
ＳＢ04　Ｐ35

S B05

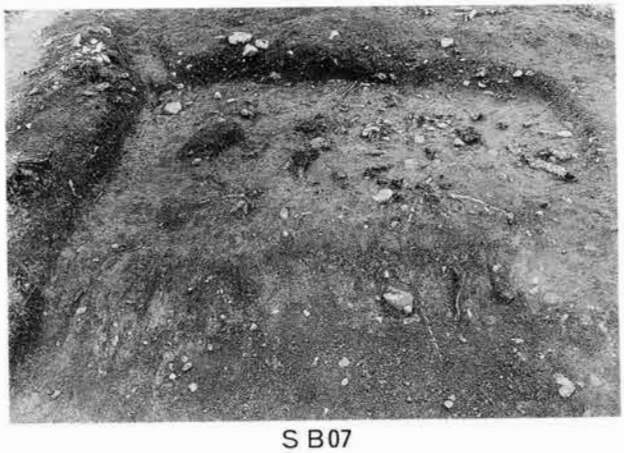


S B05　P42

S B05　P54



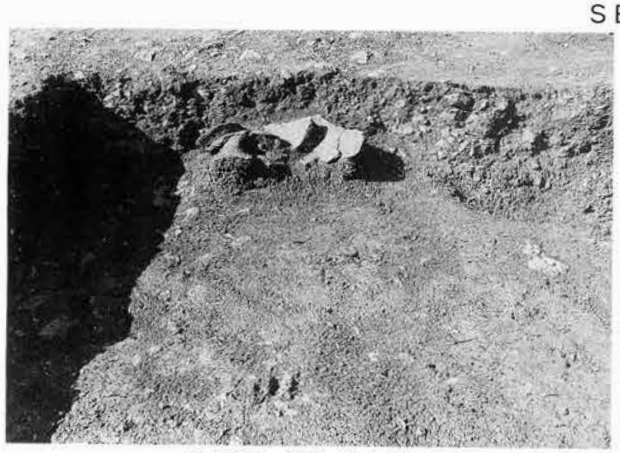
S B06



S B07

図版 5

ＳＢ08

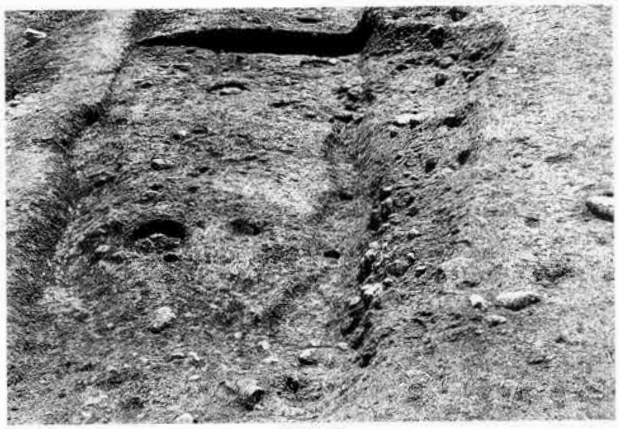


ＳＢ08　遺物出土状況

ＳＢ08　かまど断ち割り

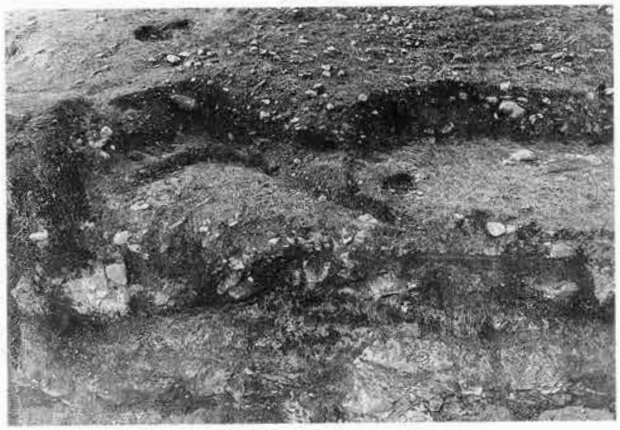
ＳＢ09

ＳＢ10　遺物出土状況



SB10

SB11



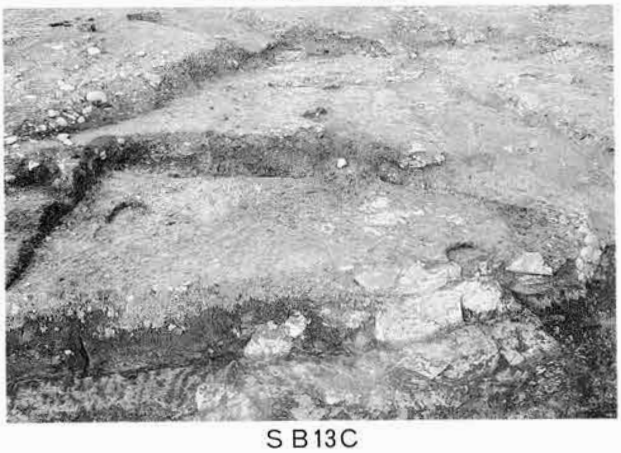
SB12A

SB12B

SB12AB　断面

SB13BC　断面

SB13AB

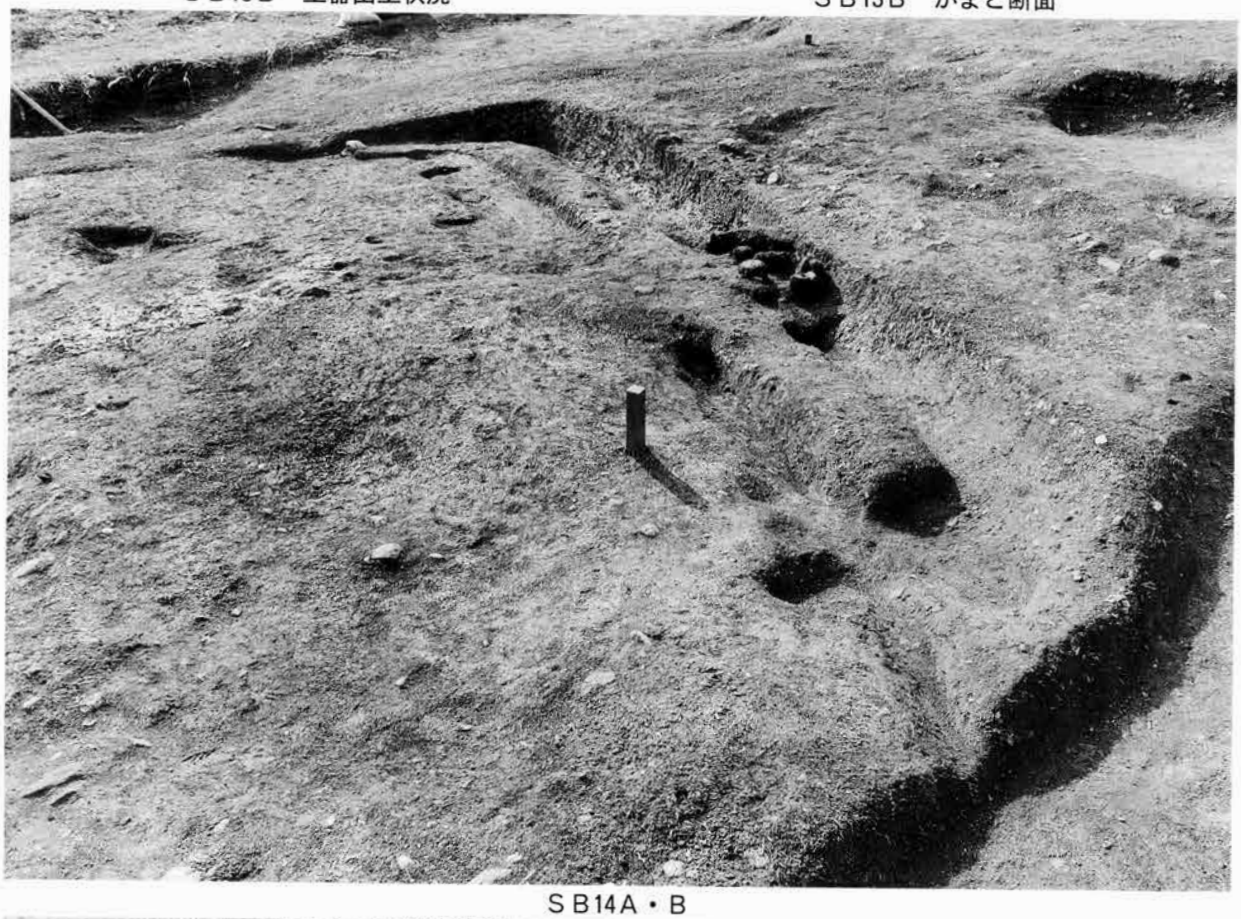


SB13C

図版 7

ＳＢ13Ｂ　土器出土状況

ＳＢ13Ｂ　かまど断面

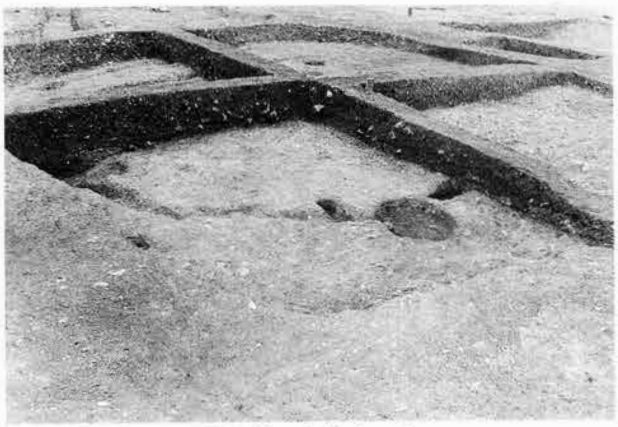


ＳＢ14Ａ・Ｂ

ＳＢ14Ａ・Ｂ　ベット

ＳＢ14Ａ・Ｂ　かまど断面

ＳＢ16Ａ・Ｂ



ＳＢ16　セクション

ＳＢ16　土器出土状況　(1)

ＳＢ16Ａ　地床炉断面

ＳＢ16　土器出土状況　(2)

図版 9

ＳＢ17

ＳＢ17　Ｐ105

ＳＢ17　Ｐ114

ＳＢ17　Ｐ115

ＳＤ21Ａ（ＳＢ17に関連）

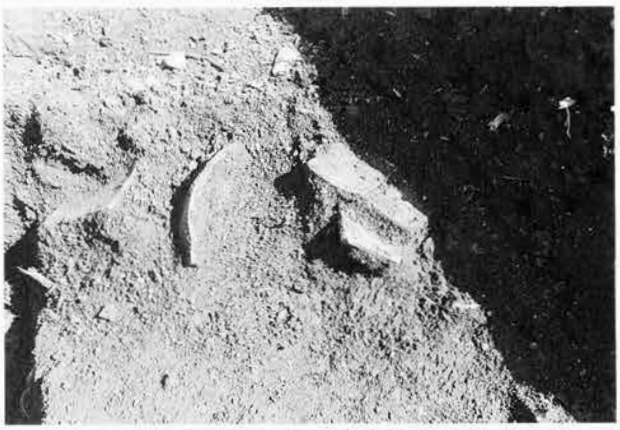
S B15

S B18

S B19

S B20

S B21



S B21　土器出土状況

S B22

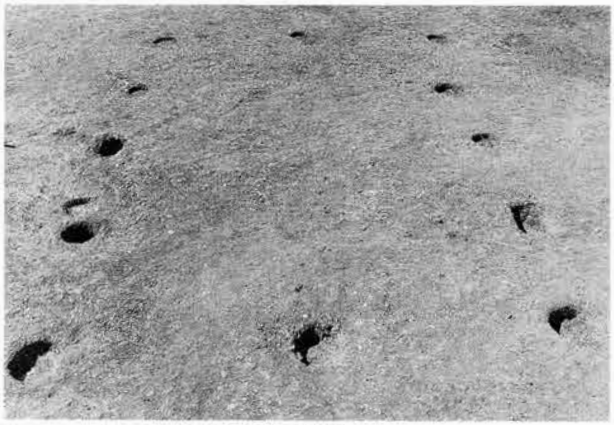
S B22　土器出土状況（かまど）

図版 11

S B23

S B24

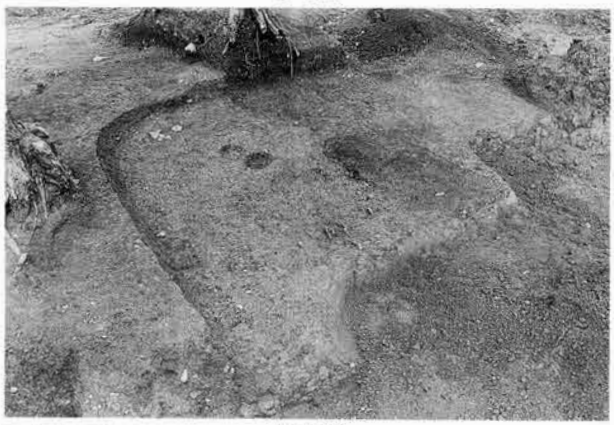
S B25A・B



S B26

S B27

S B27



S B28

S B28　地床炉

ＳＸ01　真上

ＳＸ01　西から

ＳＸ02　真上

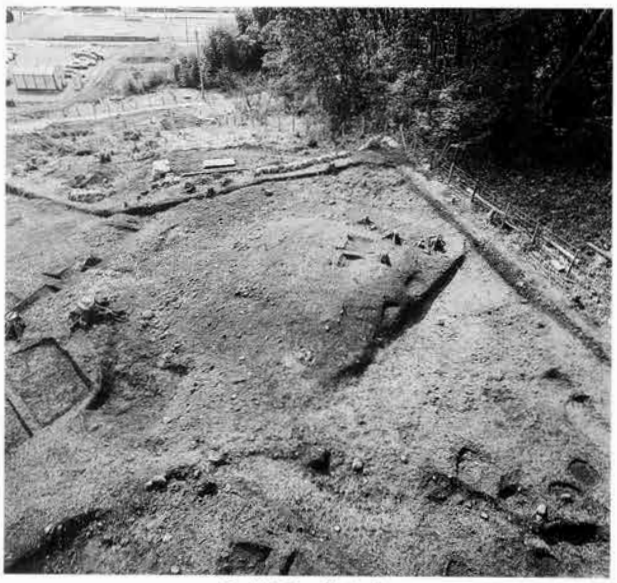
ＳＸ02　西から

ＳＸ03　真上

ＳＸ03　北から

図版 13

ＳＸ05　真上



ＳＸ05　北から

ＳＸ09　北から

ＳＸ10　北東から

ＳＸ11　北東から

ＳＸ12　東から

ＳＸ01　調査前

ＳＸ01　近　景

ＳＸ01　周溝断面

ＳＸ01　墳丘断面

ＳＸ02　墳丘断面

ＳＸ02　主体部

ＳＸ02　土器出土状況

ＳＸ02　周　構

ＳＸ03　近　景

ＳＸ03　周溝南西

ＳＸ03　周溝北西

ＳＸ03　周溝北東

ＳＸ03　周溝東より

ＳＸ03　土器出土状況

ＳＸ03　土器出土状況

ＳＸ03　主体部

ＳＸ03　主体部・断面

ＳＸ03　ベルト南

ＳＸ03　ベルト北

ＳＸ03　ベルト東

ＳＸ03　ベルト西

ＳＸ05　近　景　(1)

ＳＸ05　調査前

ＳＸ05　近　景　(2)

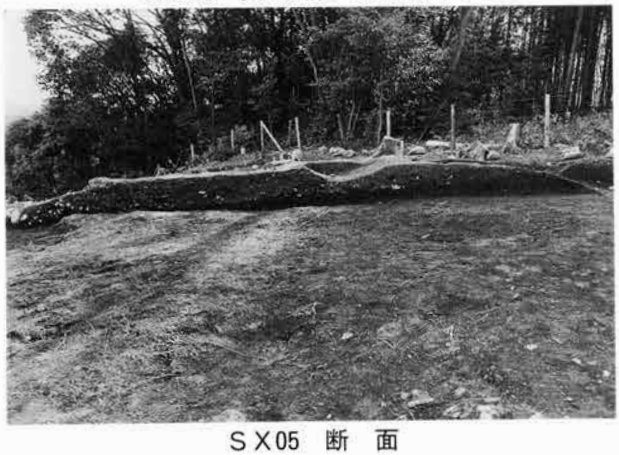
ＳＸ05　周溝　(1)

ＳＸ05　周溝　(2)

ＳＸ05　主体部

ＳＸ05　出土土器（主体部下）

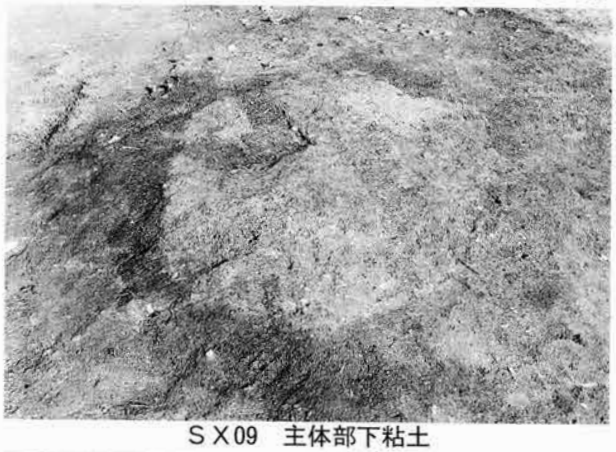
ＳＸ05　出土金属製品（主体部）



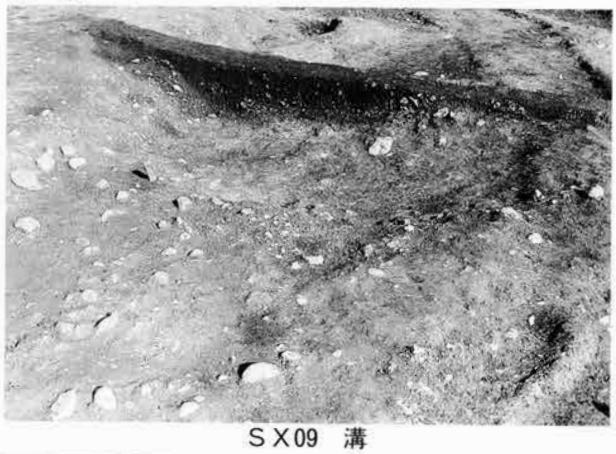
ＳＸ05　断　面

ＳＸ05　主体部断面

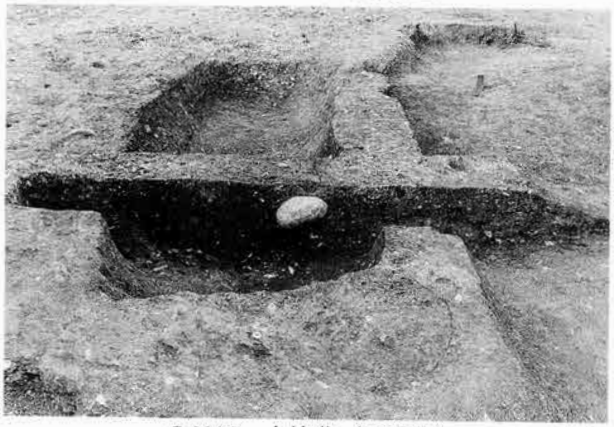
ＳＸ09　近　景



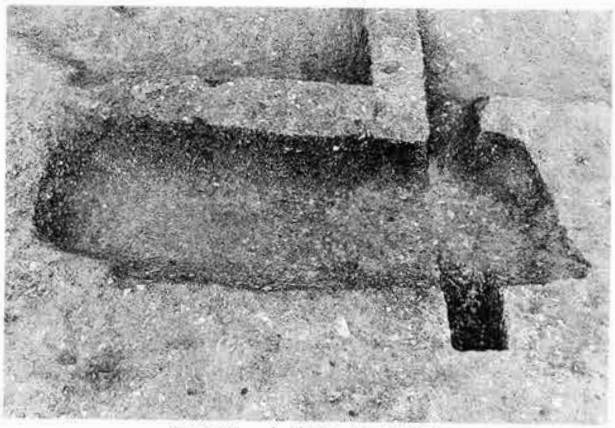
ＳＸ09　主体部下粘土



ＳＸ09　溝



ＳＸ09　土坑墓（周溝部）



ＳＸ09　土坑墓（周溝部）

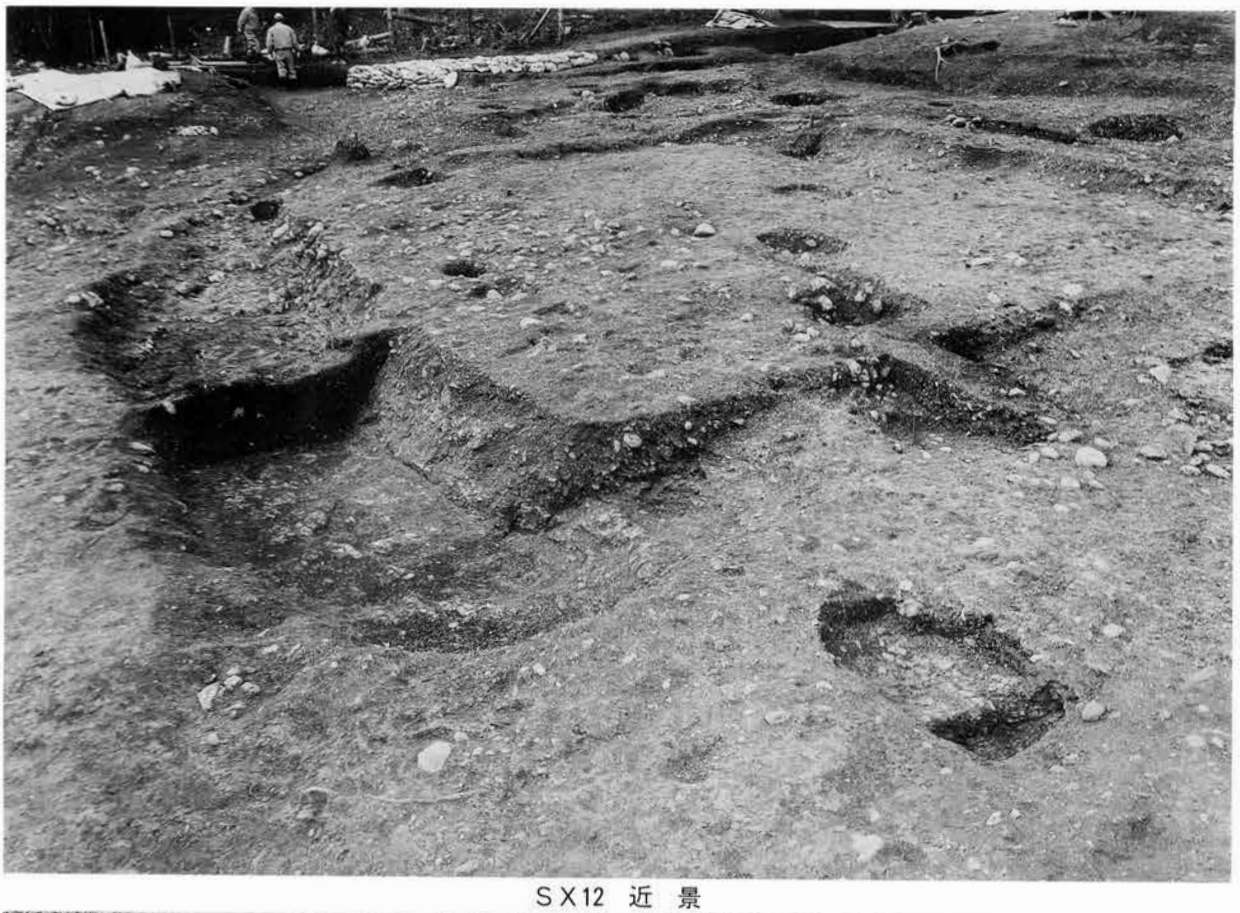
ＳＸ10

ＳＸ10

ＳＸ10　ベルト

ＳＸ11　近　景

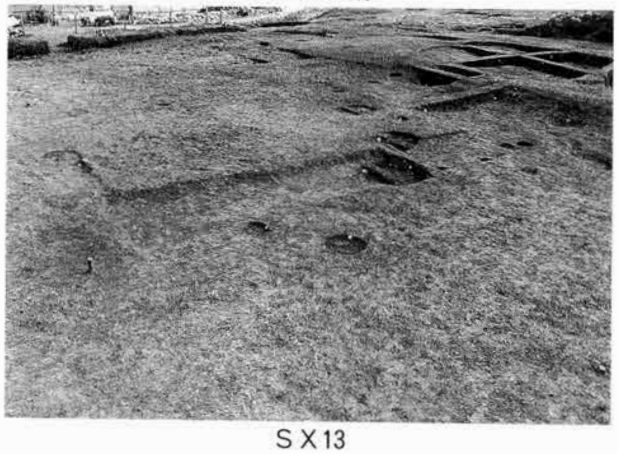
ＳＸ11　周　溝



SX12 近 景

SX12 溝

SX12 溝

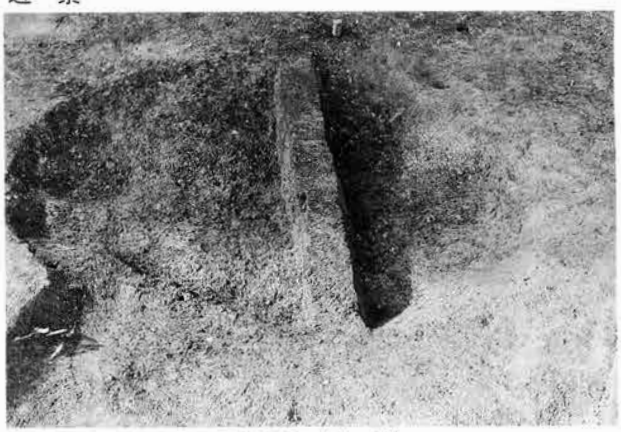


SX13

SX13 ベルト

SX15 近 景

SX15 周 溝



SX15 周 溝

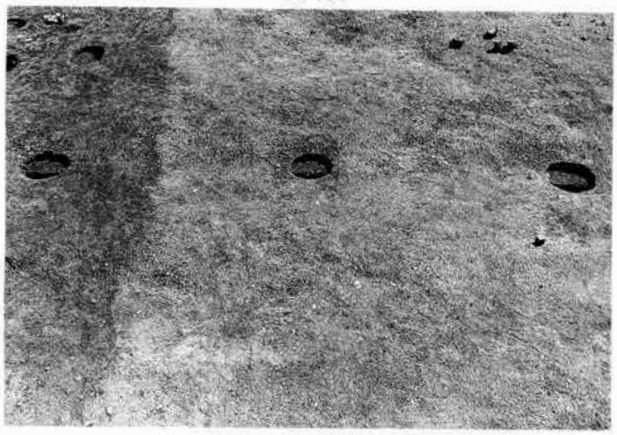
方形周溝墓群

中近世墓と方形周溝墓

図版 23

S A01

S A01

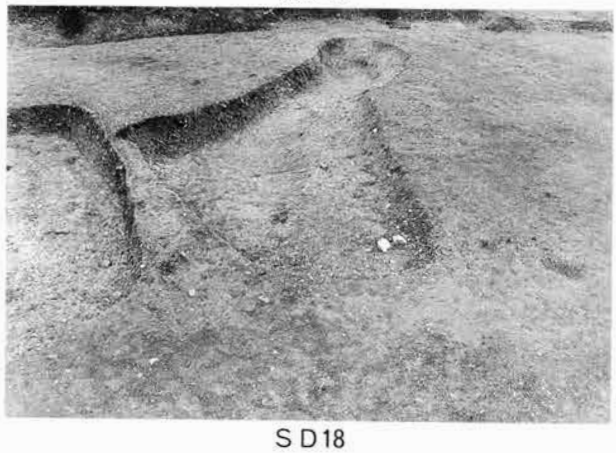


S A02

S A02

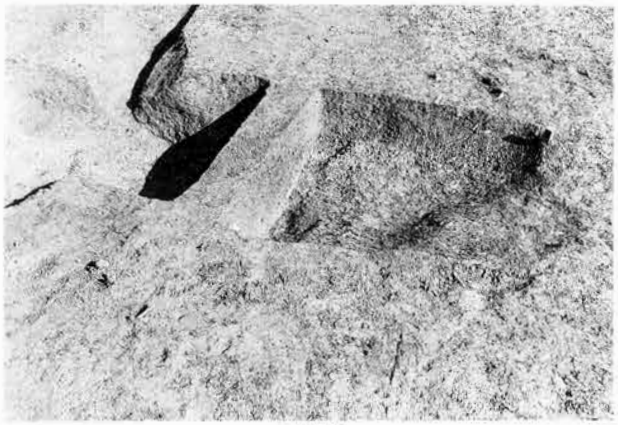
S D15

S D16

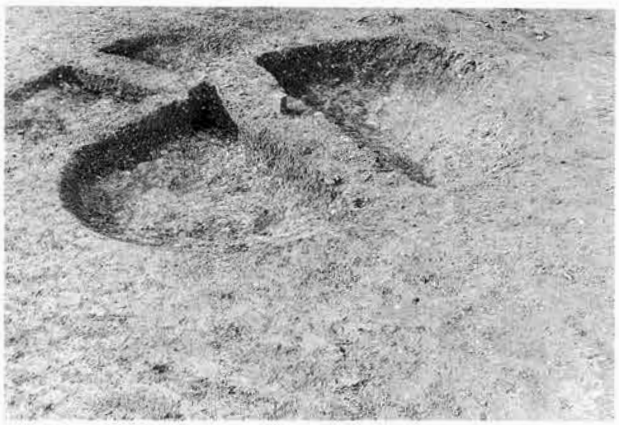


S D18

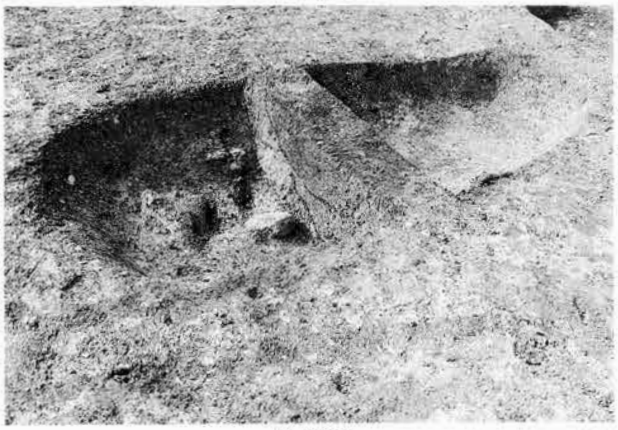
S D18 断 面



S K 25



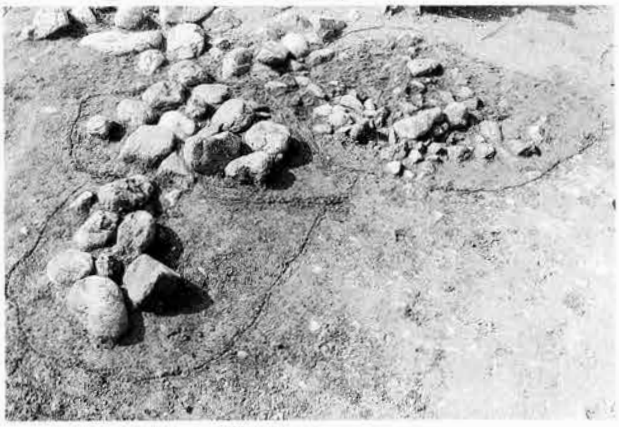
S K 28



S K 32

S K 36

S Z 11

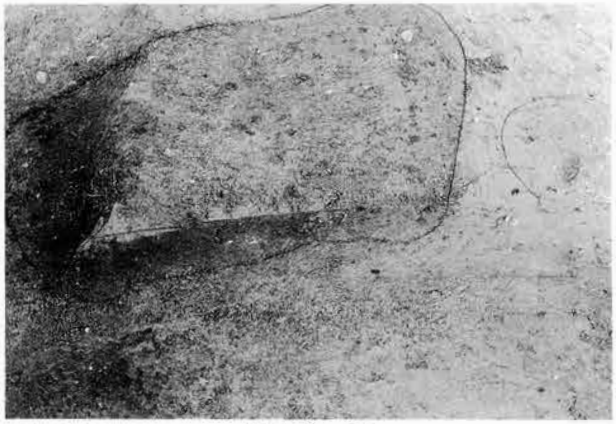


S Z 33・34・35

S Z 41

S Z 42

S Z 54



S Z 55・56

S Z 57

S Z 67

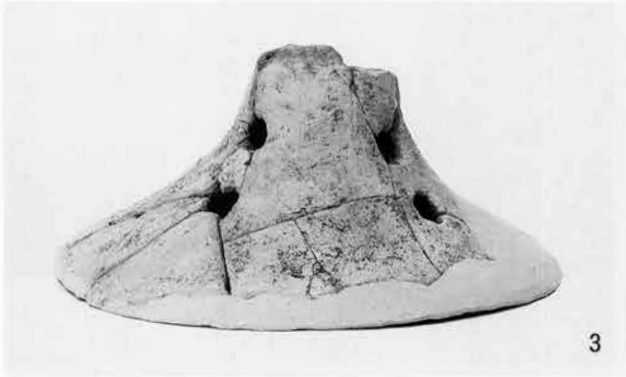
S Z 76

S Z 82

S Z 88

S Z 94

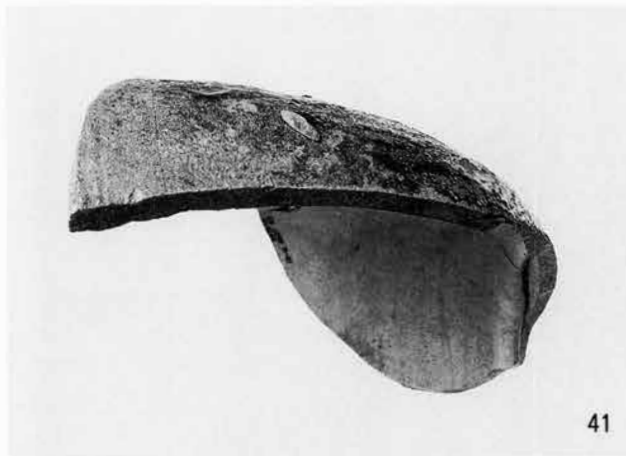
S B01



S B01

S B02

S B02

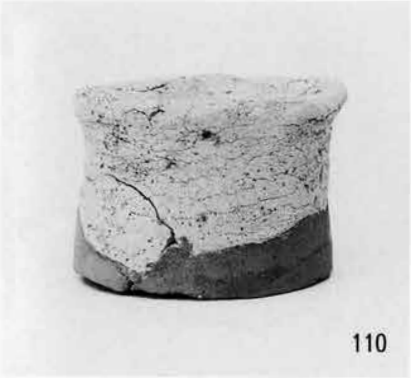


S B08

S B01

S B02

S B02



S B03

S B03

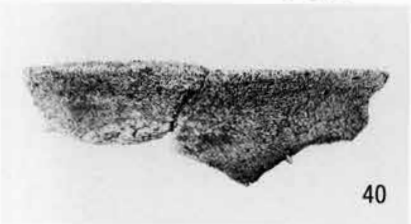
S B07

S B06

S B06

S B10

S B10



S B08

S B10

S B10

S B 10

S B 10

S B 10

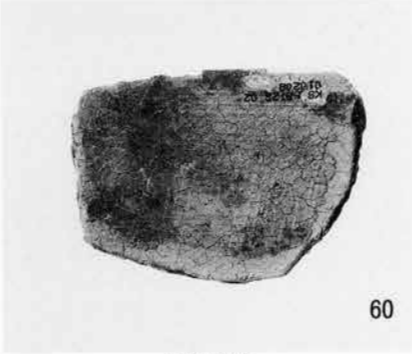
S B 10

S B 10

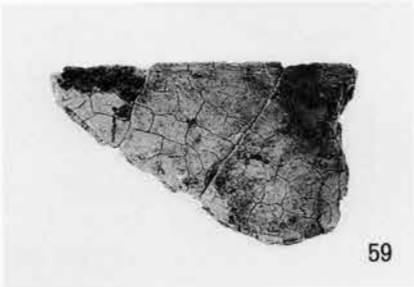
S B 10

S B 10

S B 12 A



S B 12 B



S B 12 A

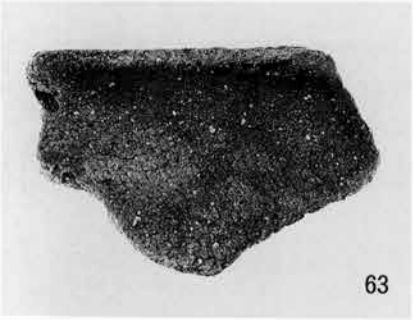
S B 12 B

S B 12 A

S B 12 B

S B 13 A

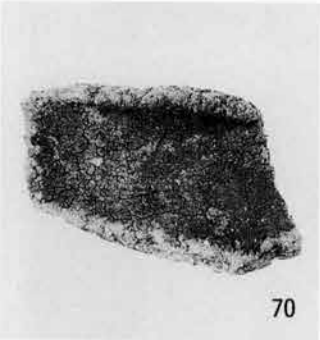
S B 13 A



S B 13 A

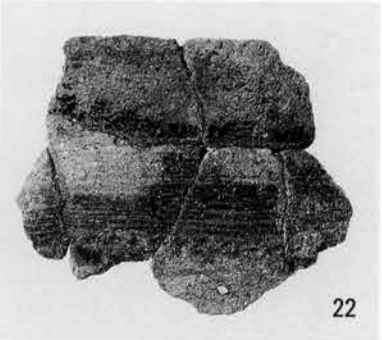
S B 13 C

S B 13 C



S B 13 C

S B 13 C



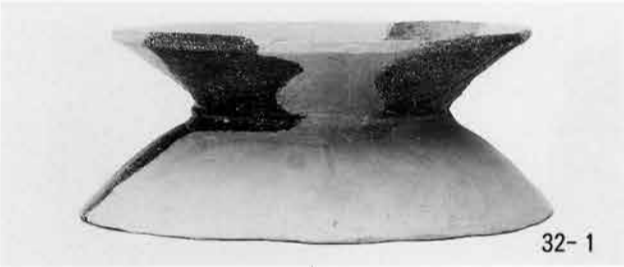
S B 15

S B 14 A

S B 14 A

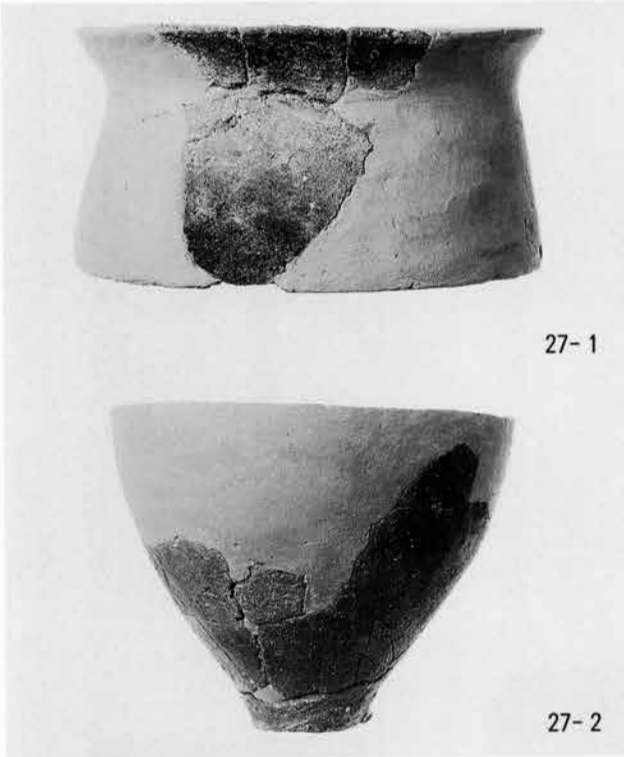
S B 16 B

S B 16 B



S B16B

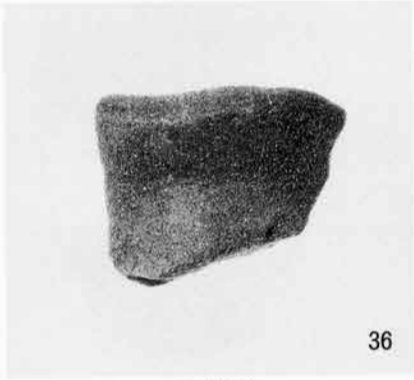
S B16B



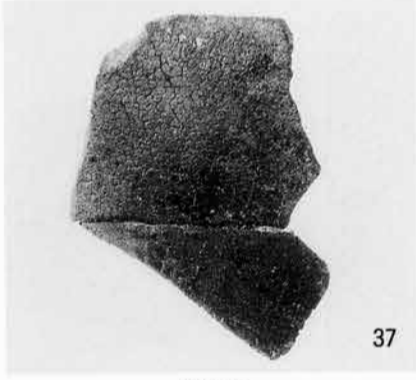
S B16B

S B16B

S B16B



S B18



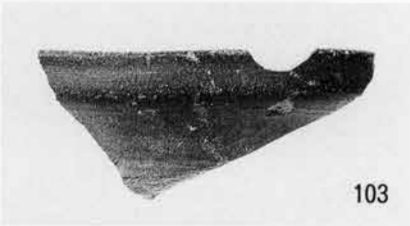
S B18

SB16B

SB19

SB16B

SB17

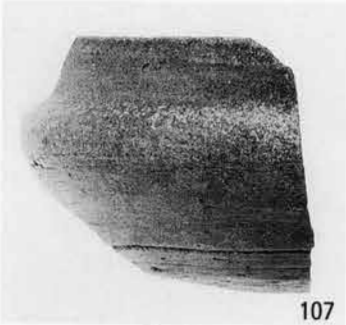


SB20

SB16B

SB19

SB19



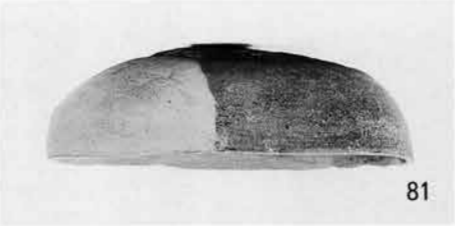
SB21

SB22

SB19

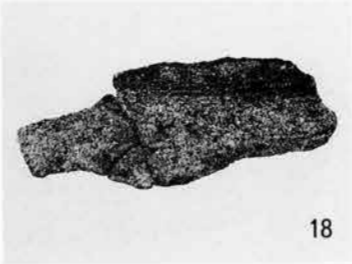
SB23

S B21

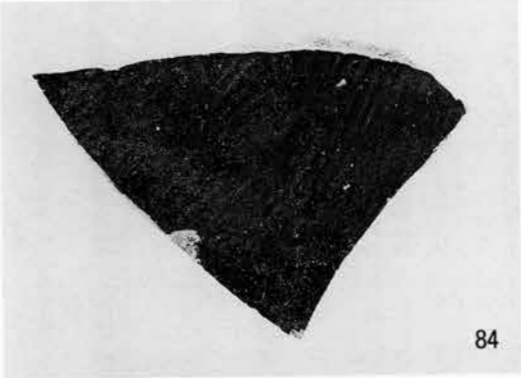


S B22

S B28



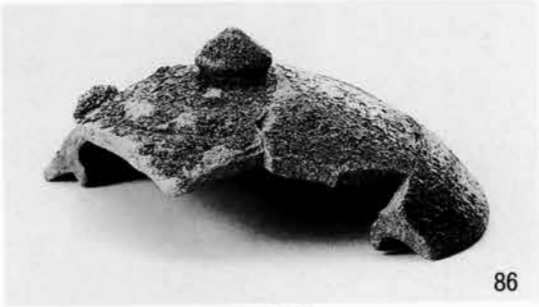
S B28



S B25

S B22

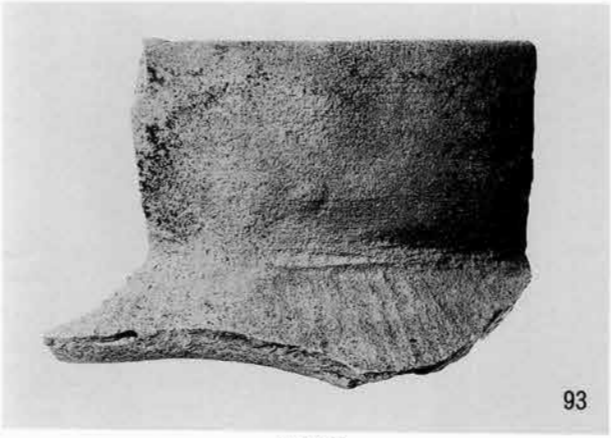
S B22



S B29

S B28

S B29



S B29

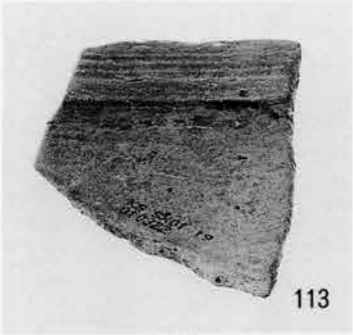
S B29

S B29

S B29

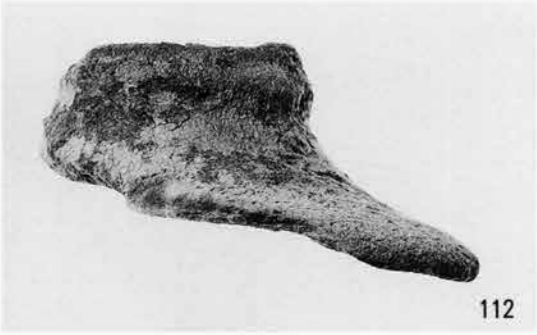
S B29

S B29



S X01

S X01



S X01

S X02

S X02

S X03

S X03

S X02

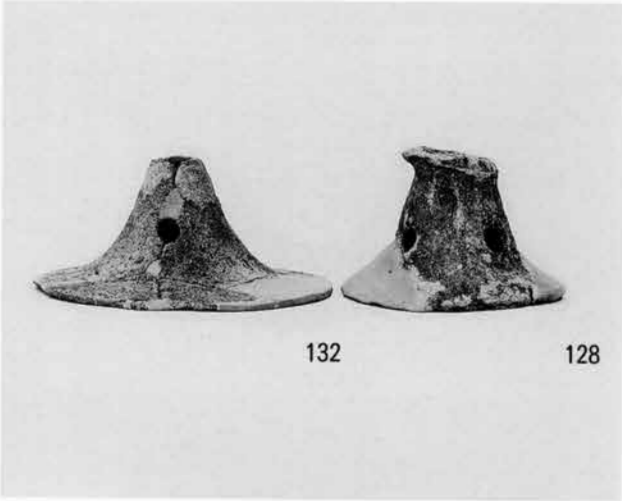
S X03

S X03

S X03

S X03

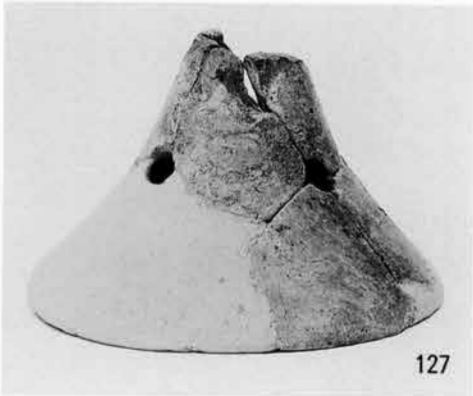
S X03



S X03

S X02

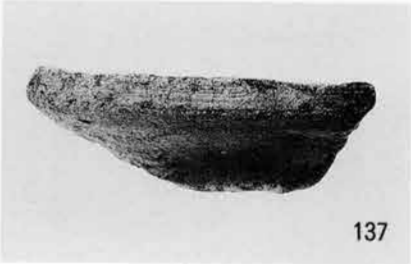
S X03



S X03

S X03

S X03



S X03

138-1

138-2

S X03

140-1

140-2

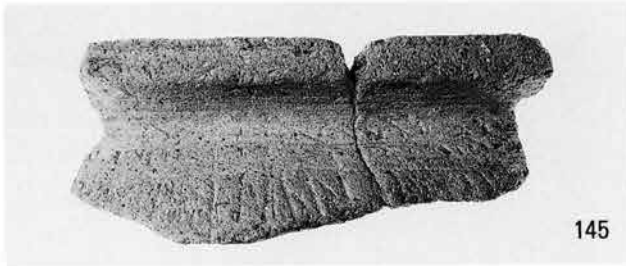
S X03

139

S X03

144

S X03


145

S X03下

151

S X03下

146-1

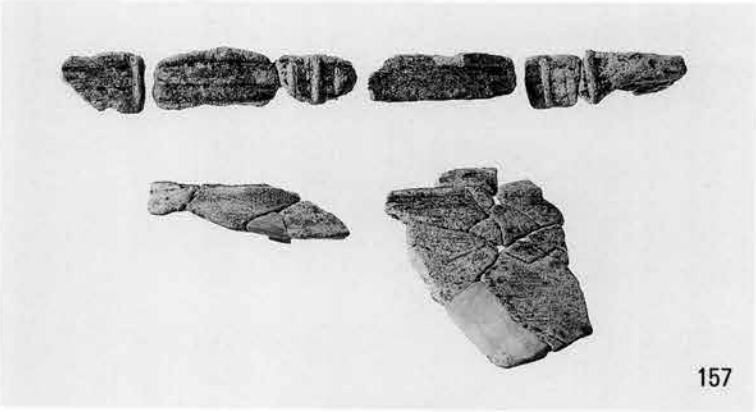
146-2

S X03下

S X05

S X05

S X05



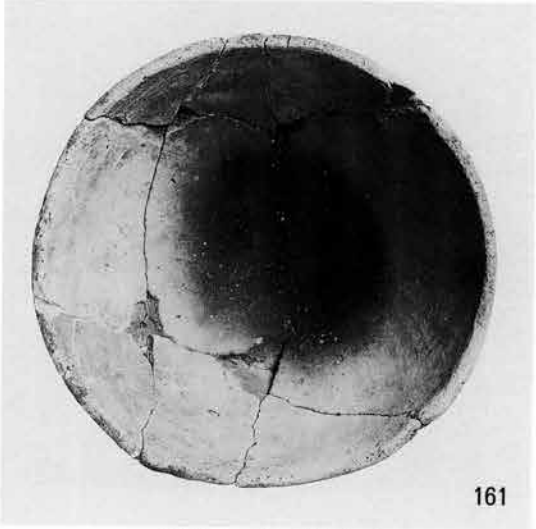
S X05

S X05

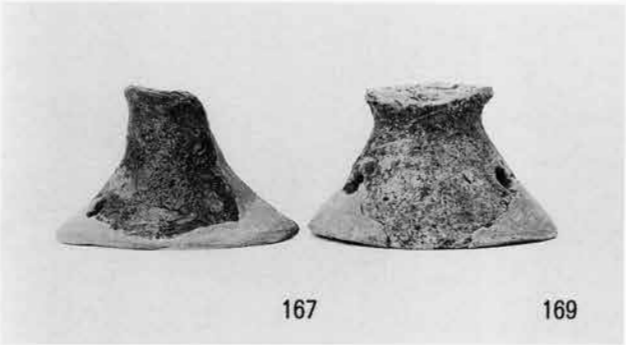
S X05 主体部 立面

S X05

S X05

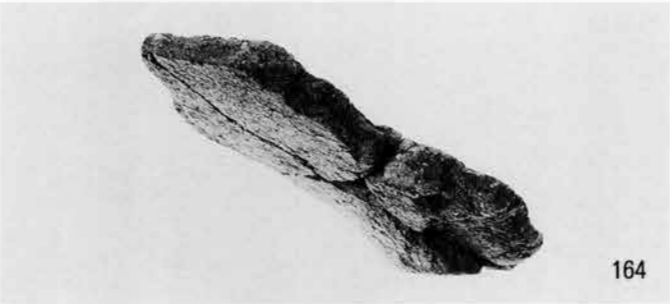


S X05 主体部 平面

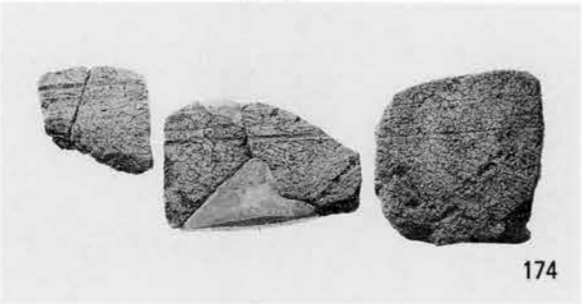


S X 09

S X 09

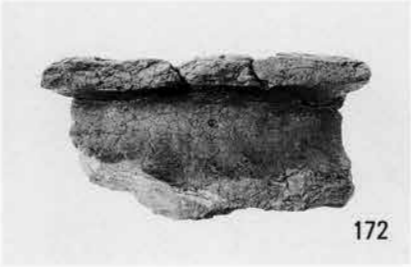


S X 09

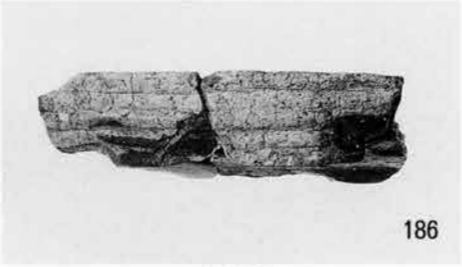


S X 09

S X 09



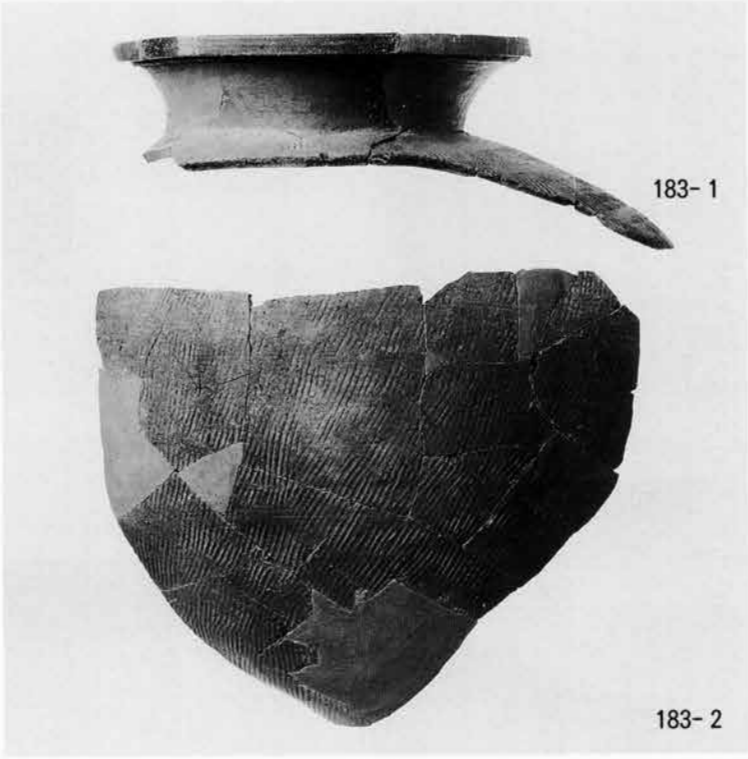
S X 09



S X 10

S X 10

S X 10



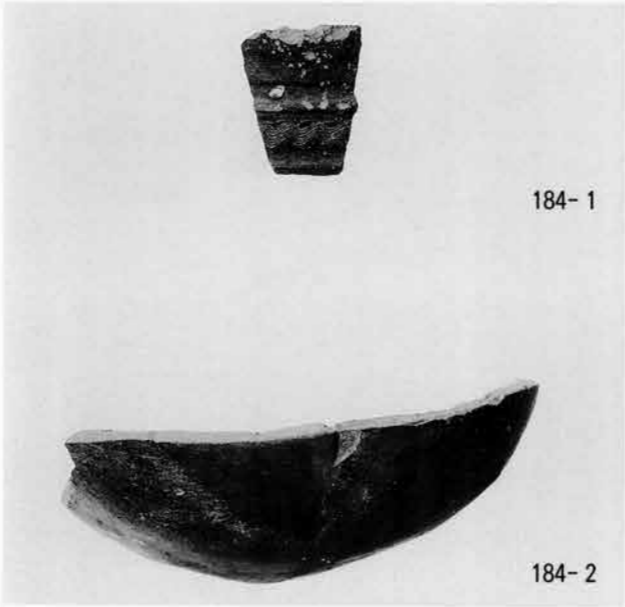
S X 10

S X 10

S X 10

S X 10

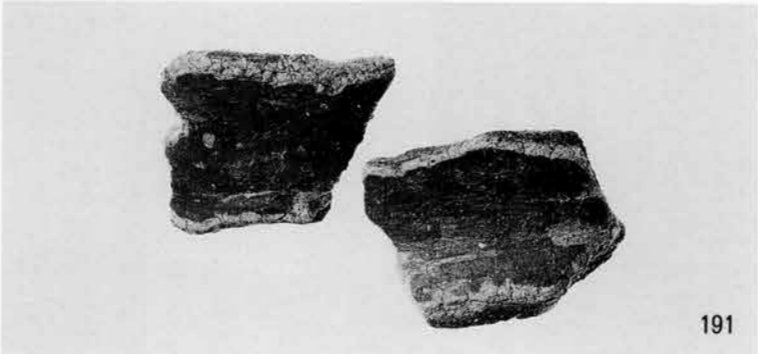
S D 21



S X 10

S X 12

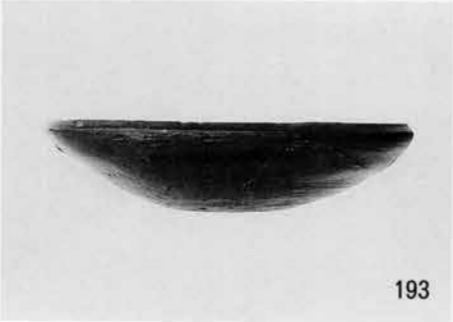
S K 17



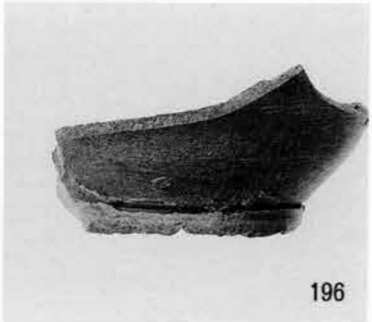
S K 21

S Z 04

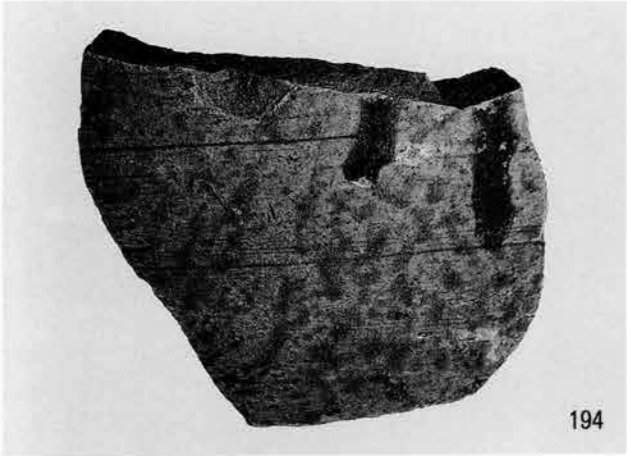
S Z 33



S Z 24



S Z 32



S Z 27 A

S Z 27 B

S Z 60

S Z 62

S Z 60

S Z 62

S Z 60

S Z 62

S Z 62

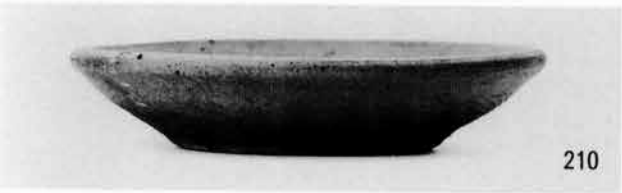
S Z 62

S Z 62

S Z 67

S Z67

S Z67

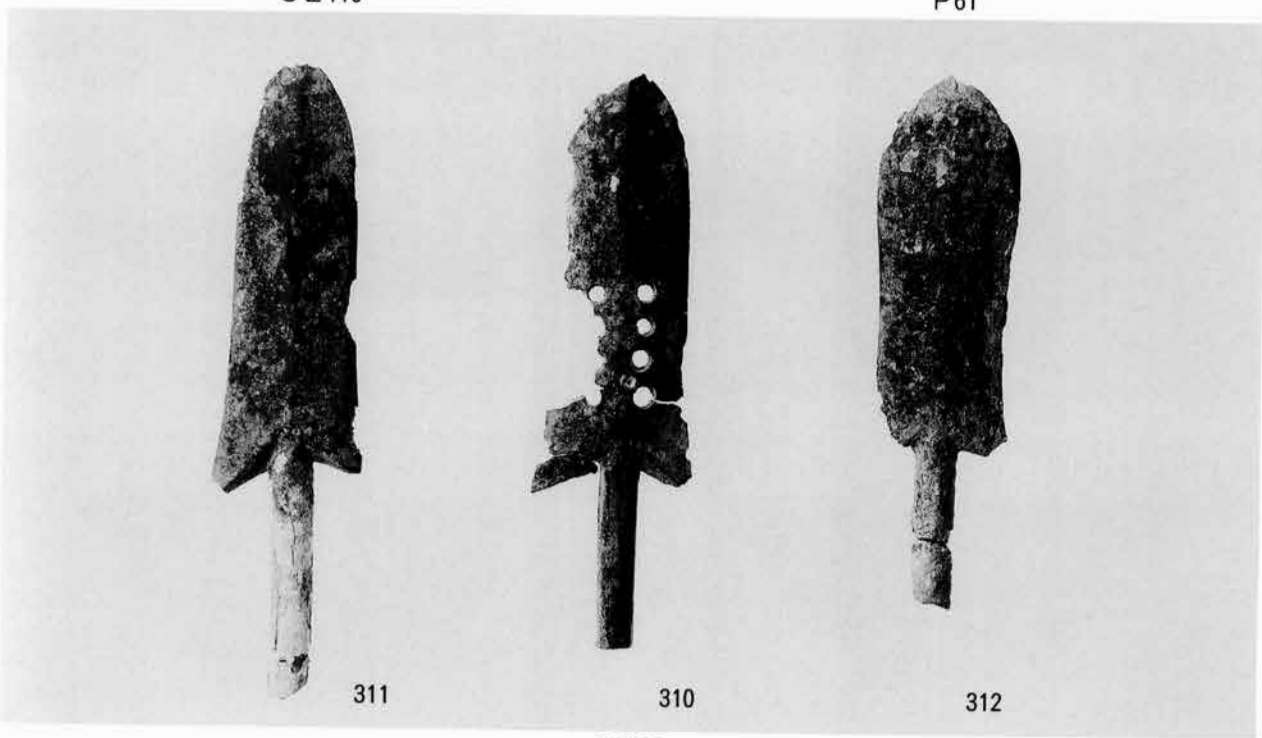


S Z67

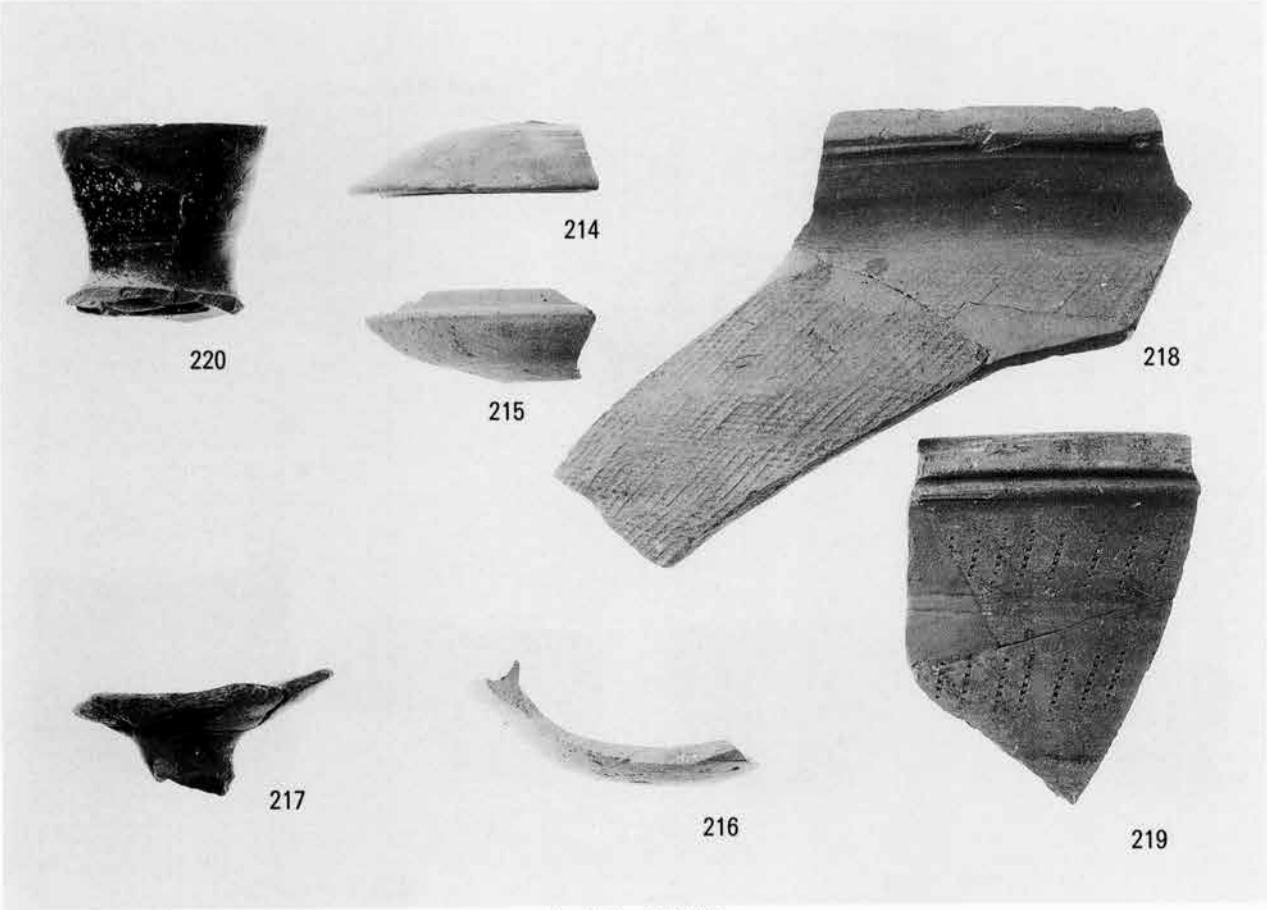
S Z110

S Z110

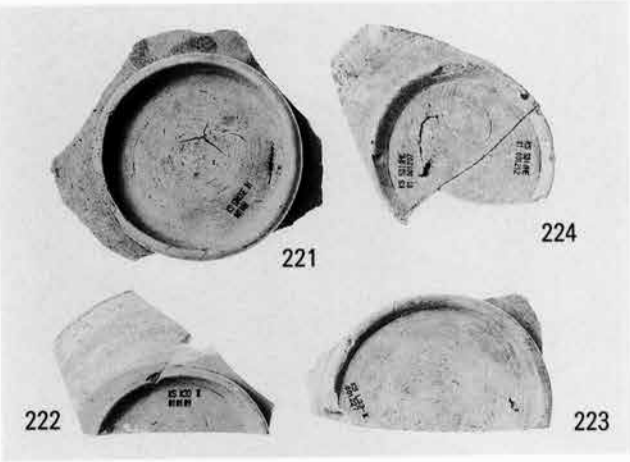
P61



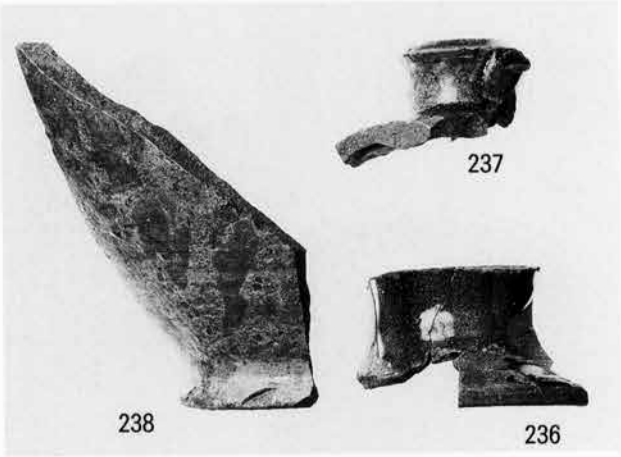
S X05



包含層　須恵器



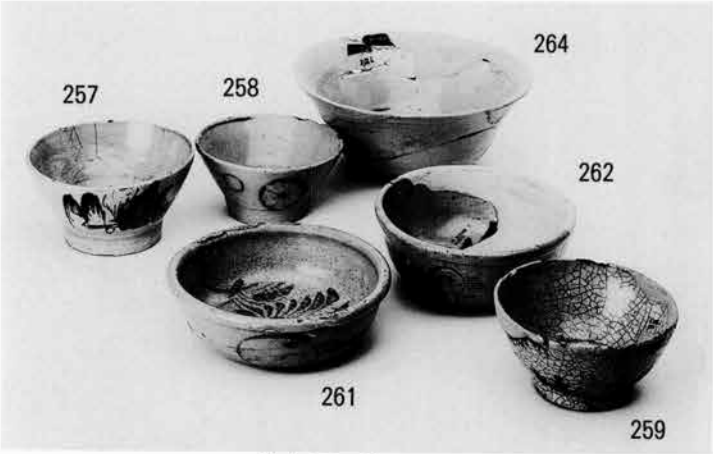
包含層　灰釉陶器



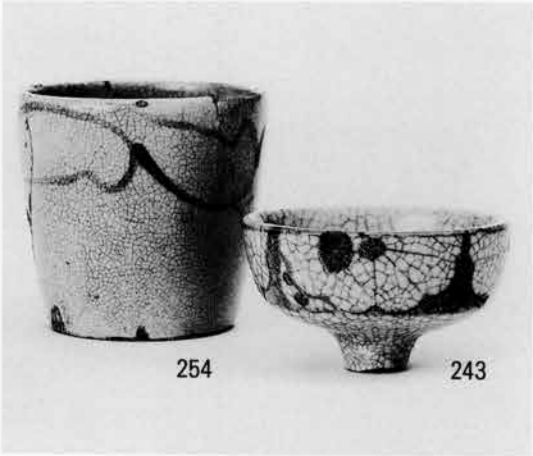
包含層　古瀬戸

包含層　山茶椀

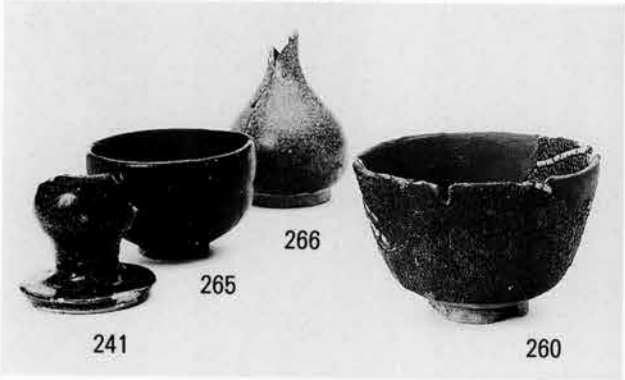
包含層　陶器



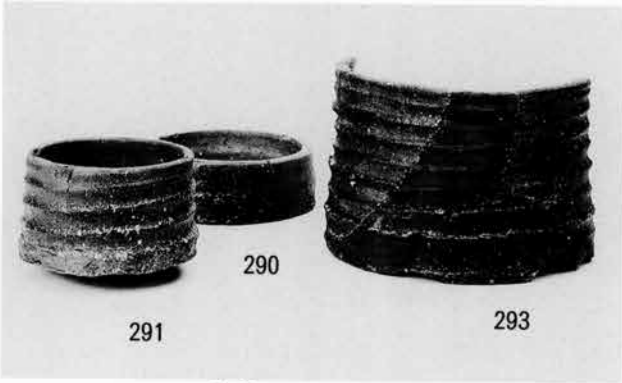
包含層　染めつけ



包含層　染めつけ



包含層　陶器



窯道具（エンゴロ）

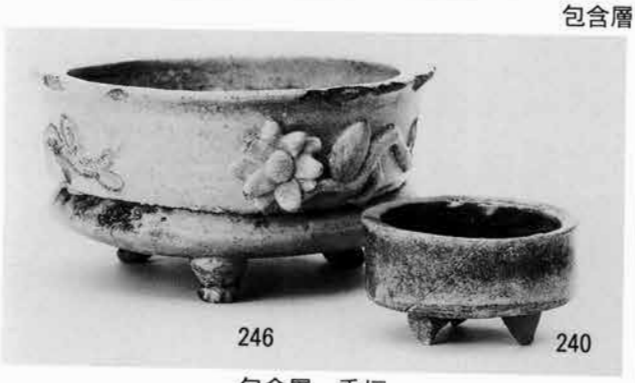
包含層　陶器

包含層　陶器

包含層　すり鉢

包含層　こね鉢・練鉢

包含層　片口



包含層　香炉

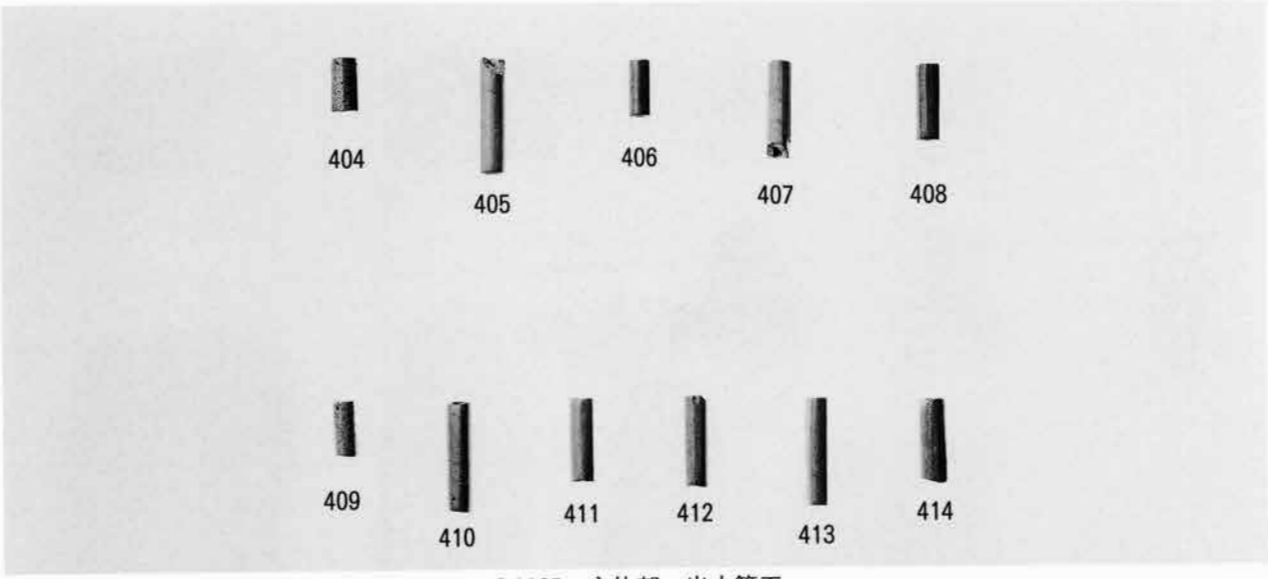
包含層　天目

包含層　仏像

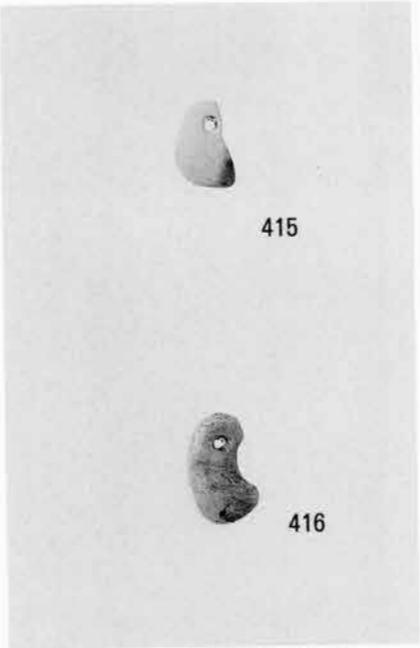
包含層　鉢・灯明

包含層　猪口

包含層　陶器



ＳＸ05　主体部　出土管玉

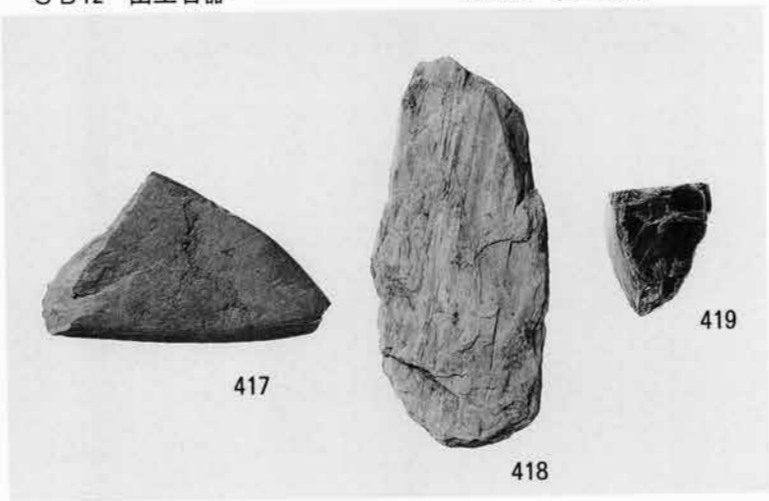


ＳＸ05　主体部出土勾玉

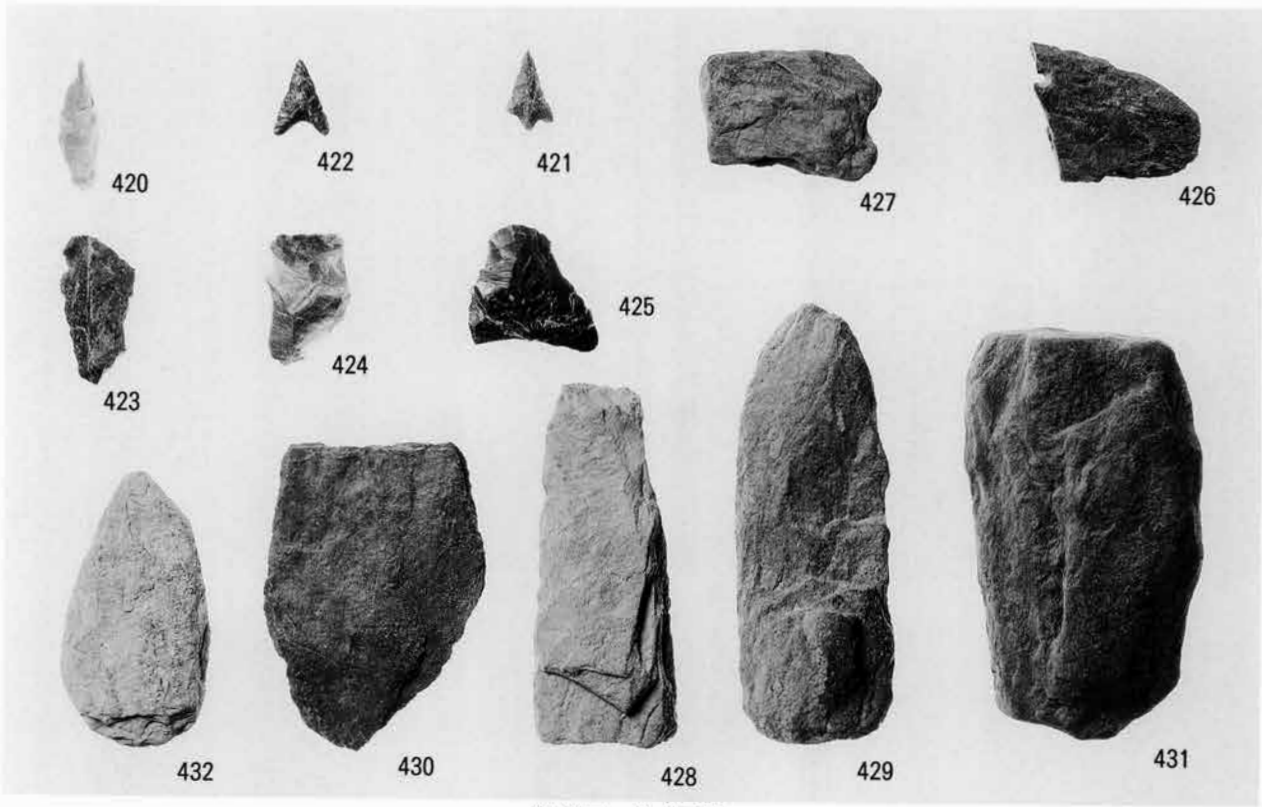
ＳＢ12　出土石器

ＳＸ02　出土石器

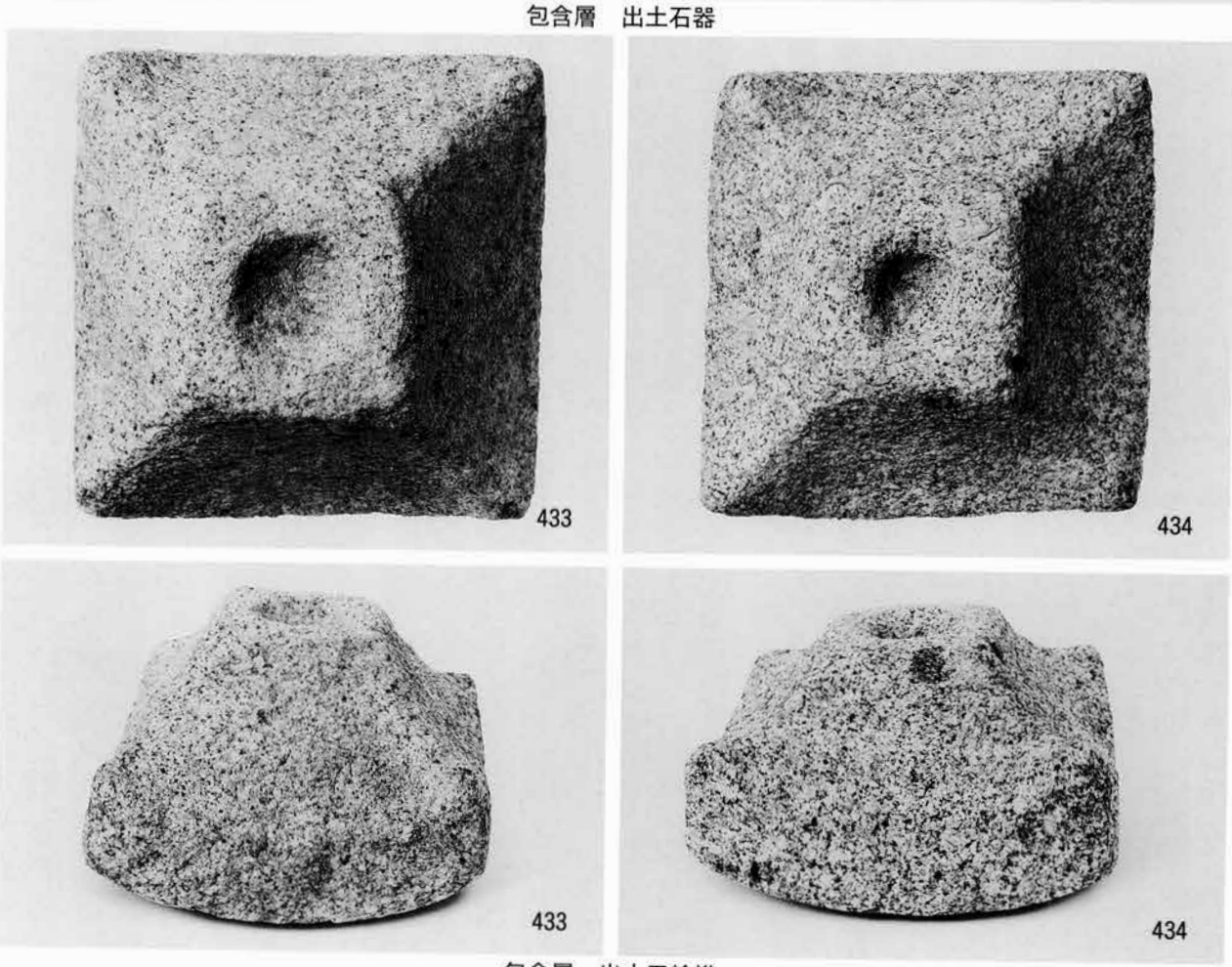
ＳＢ16　出土石器



ＳＸ09　出土石器



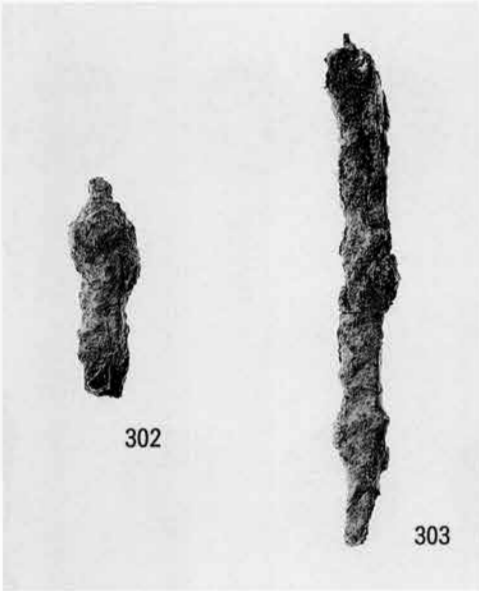
包含層　出土石器



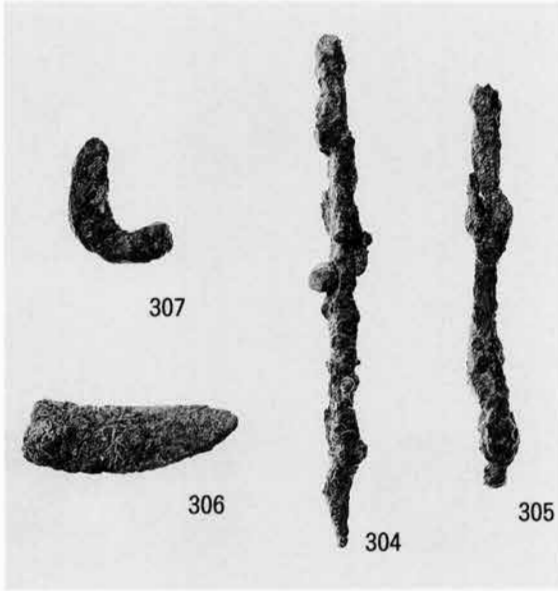
包含層　出土五輪塔

S B 10

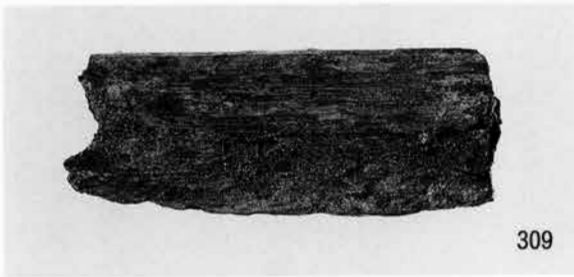
S X 01



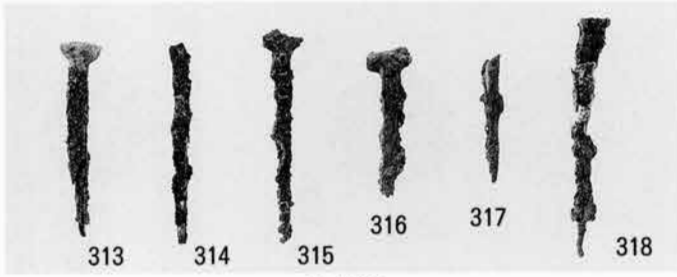
S B 13



S B 22

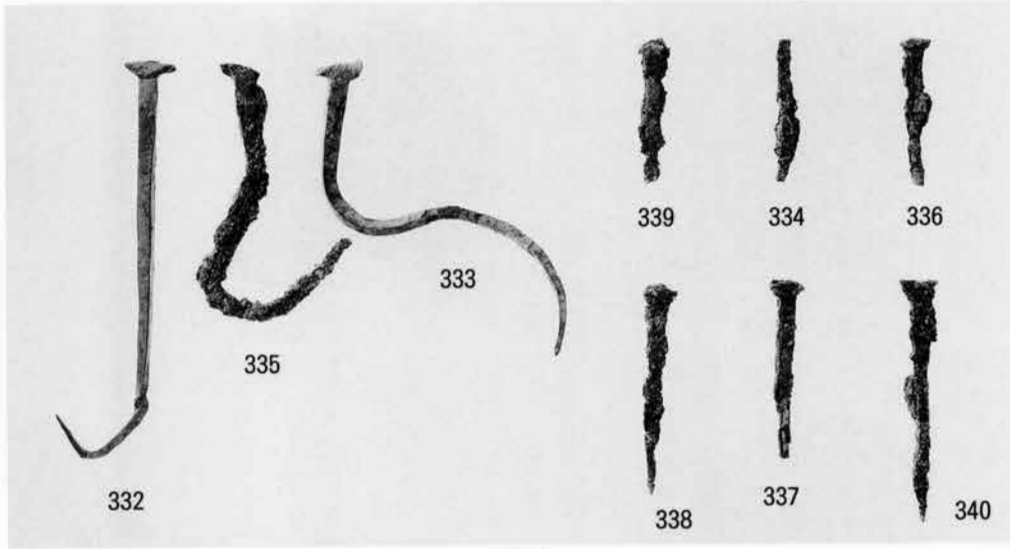


S X 02

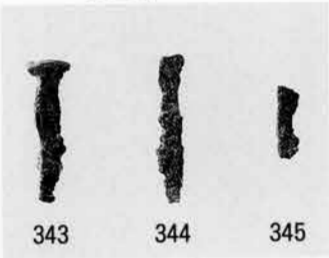


S Z 09

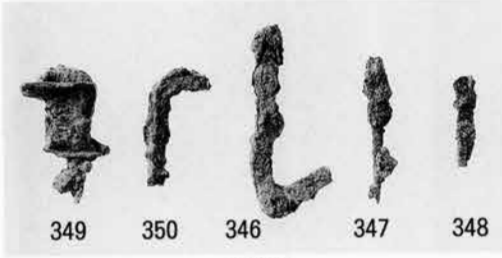
S Z 27



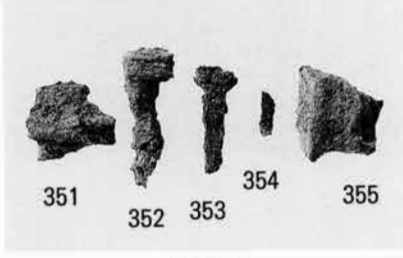
S Z 41



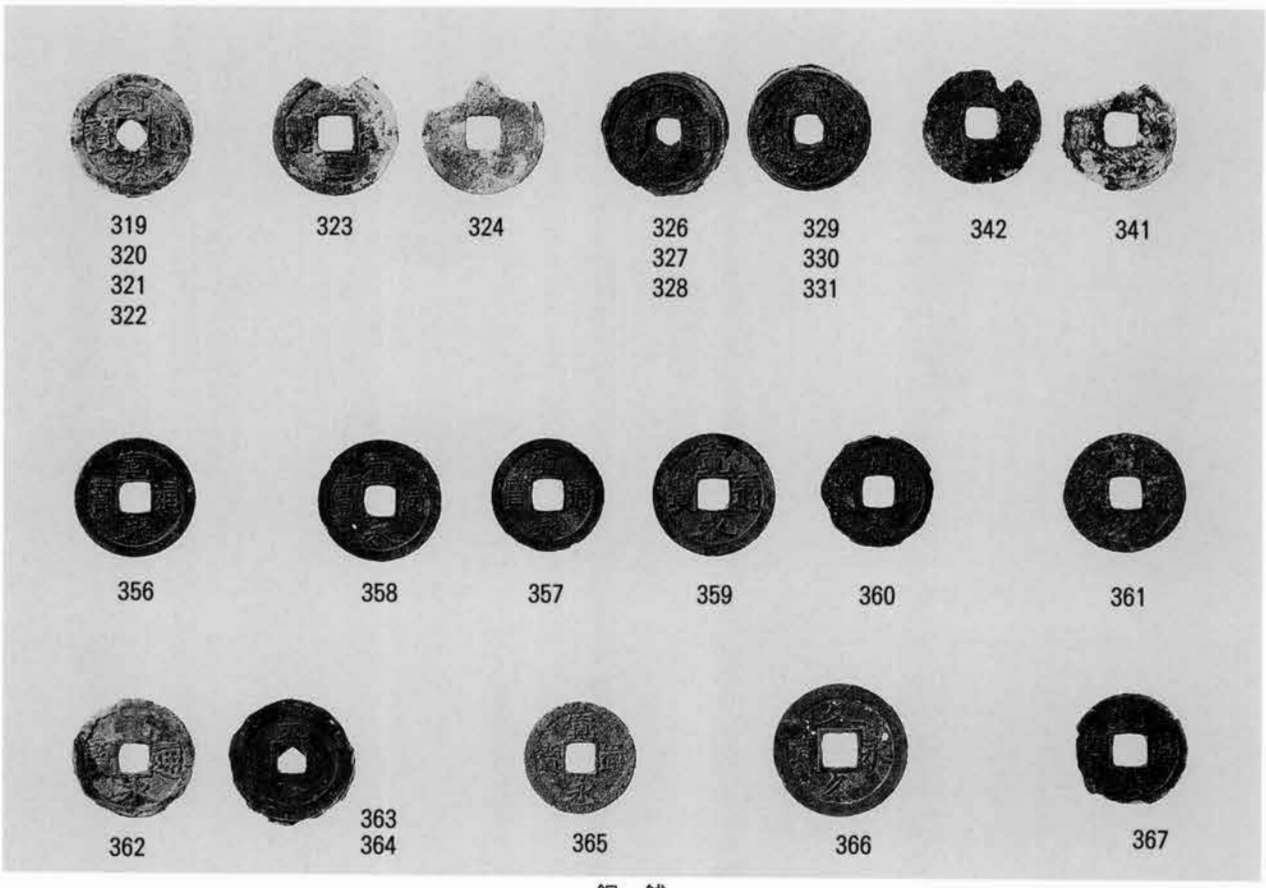
S Z 76



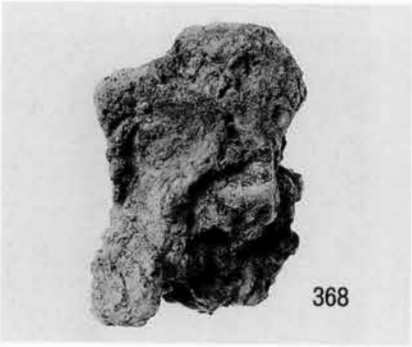
S Z 70



S Z 70

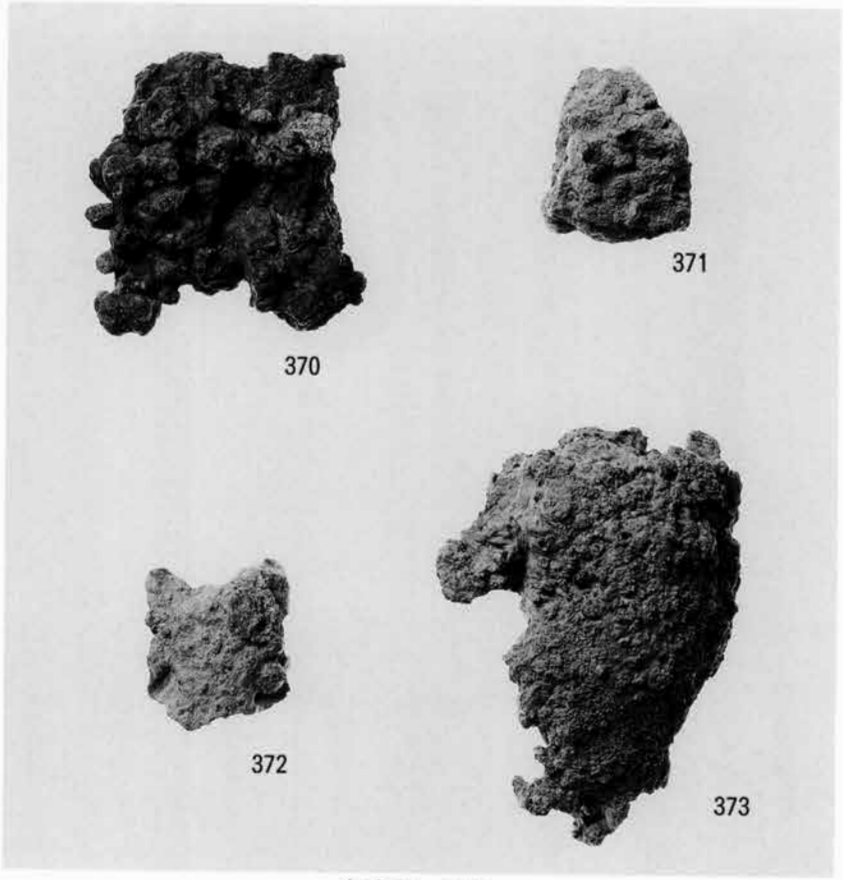


銅　銭



ＳＢ03　鉄滓

ＳＢ13Ａ　鉄滓



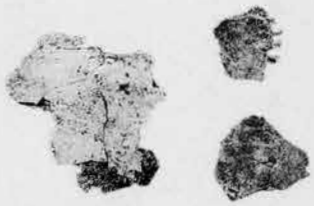
包含層　鉄滓

SZ05 頭 部

SZ05 胴 部

SZ05 手・足

SZ09 頭 部



SZ33 頭 部

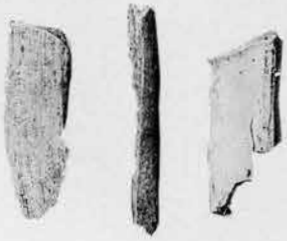
SZ88 頭 部

SZ23 胴 部

SZ40 胴 部

SZ41 胴 部

SZ33 手・足



SZ48 手・足

SZ73 手・足

SZ 出土人骨

青木横穴墓調査前の状況（玄室）

青木横穴墓調査前の状況（玄門部付近）

青木横穴墓入口付近の土砂堆積状況

青木横穴墓入口付近崖面の状況

青木横穴墓羨道部

青木横穴墓羨道部

青木横穴墓玄室奥壁

青木横穴墓玄室内礫敷き

青木横穴墓玄室床面

青木横穴墓北側壁

青木横穴墓南側壁

青木横穴墓玄門部天井

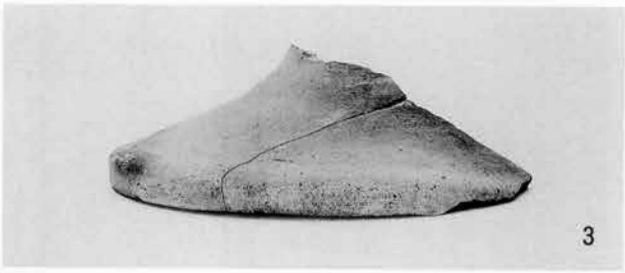
青木横穴墓玄室天井

青木横穴墓工具痕跡（玄室天井）

青木横穴墓羨道部閉塞石

青木横穴墓羨道部閉塞石

青木横穴墓出土　須恵器



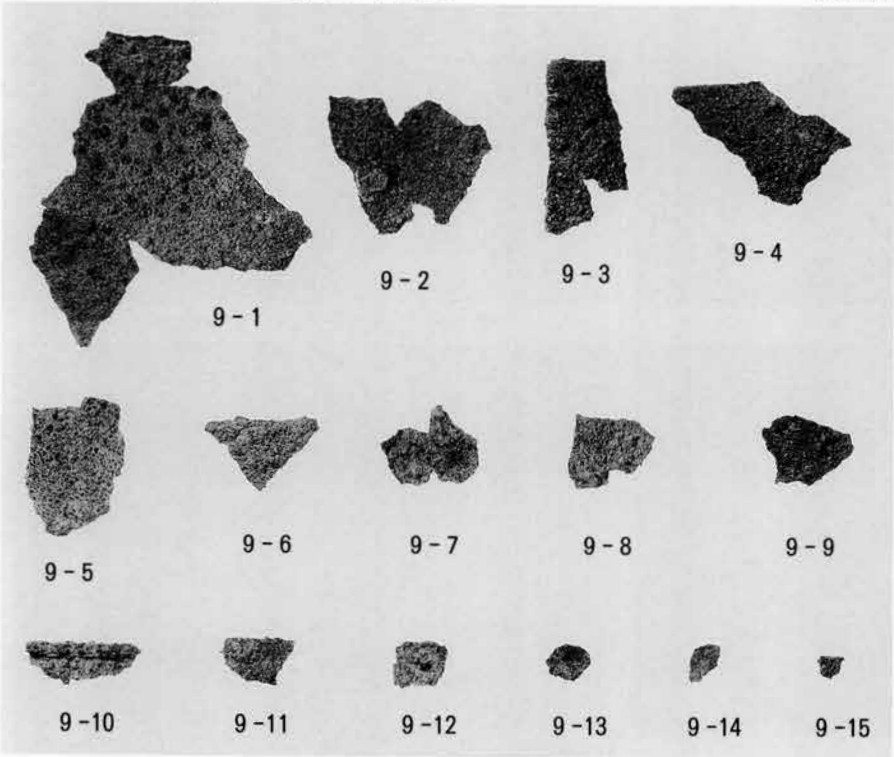
青木横穴墓出土　須恵器

青木横穴墓出土　須恵器

青木横穴墓出土　須恵器

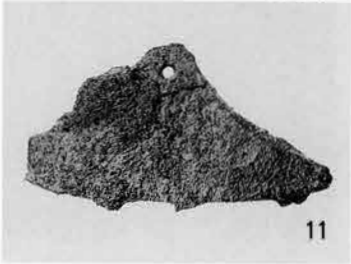
青木横穴墓出土　山茶碗

青木横穴墓出土　山茶碗



青木横穴墓出土　金属製品

青木横穴墓出土　金属製品



青木横穴墓出土　火打金

報告書抄録

ふりがな	かながさきいせき・あおきおうけつぼ
書名	**金ケ崎遺跡・青木横穴墓**
副書名	
巻次	
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター　調査報告書
シリーズ番号	第78集
編著者名	早野壽人　成瀬正勝　鈴木隆雄
編集機関	財団法人　岐阜県文化財保護センター
所在地	〒502-0003　岐阜県岐阜市三田洞東1―26－1　Tel 058（237）8550
発行年月日	西暦2003年3月20日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間 調査面積	調査原因
かながさきいせき 金ヶ崎遺跡	ぎふけんかにぐん 岐阜県可児郡 みたけちょうひえ 御嵩町比依	21521	09630	35° 26′ 30″	137° 06′ 10″	20010401～ 20020328 4,900㎡	東海環状自動車道建設事業に伴う
あおきおうけつぼ 青木横穴墓	ぎふけんかにぐん 岐阜県可児郡 みたけちょうひえ 御嵩町比依	21521	07360	35° 26′ 40″	137° 06′ 00″	20010401～ 20020328 1基	東海環状自動車道建設事業に伴う

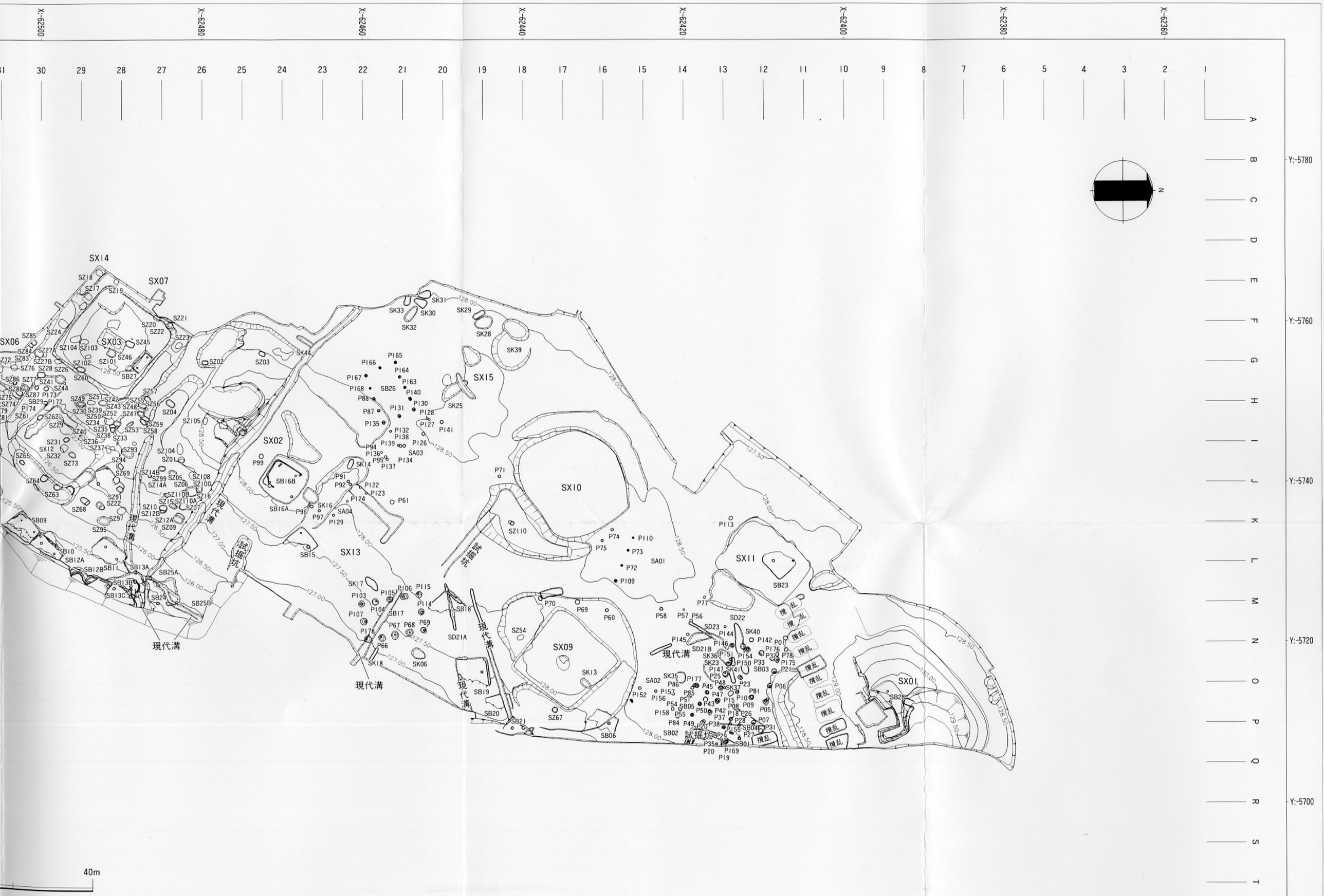
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
金ヶ崎遺跡	集落跡 方形周溝墓 古墳 中近世墓	弥生 ～近世	竪穴住居跡　29軒 掘立柱建物跡 6軒 柵列　4軒 方形周溝墓　11基 古墳　1基 溝　7条 土坑　21基 中近世墓　113基 小穴　122基	弥生土器 土師器 須恵器 灰釉陶器 山茶碗 陶器 石器 石製品 銅鏃 鉄製品	丘陵地に展開する弥生時代から古墳時代初頭の方形周溝墓群とその中から出土した多孔銅鏃 古墳時代後期末の集落 100基を越える中近世墓群
青木横穴墓	横穴墓	古墳	横穴墓　1基	須恵器 山茶碗 鉄製品	6世紀末の横穴墓

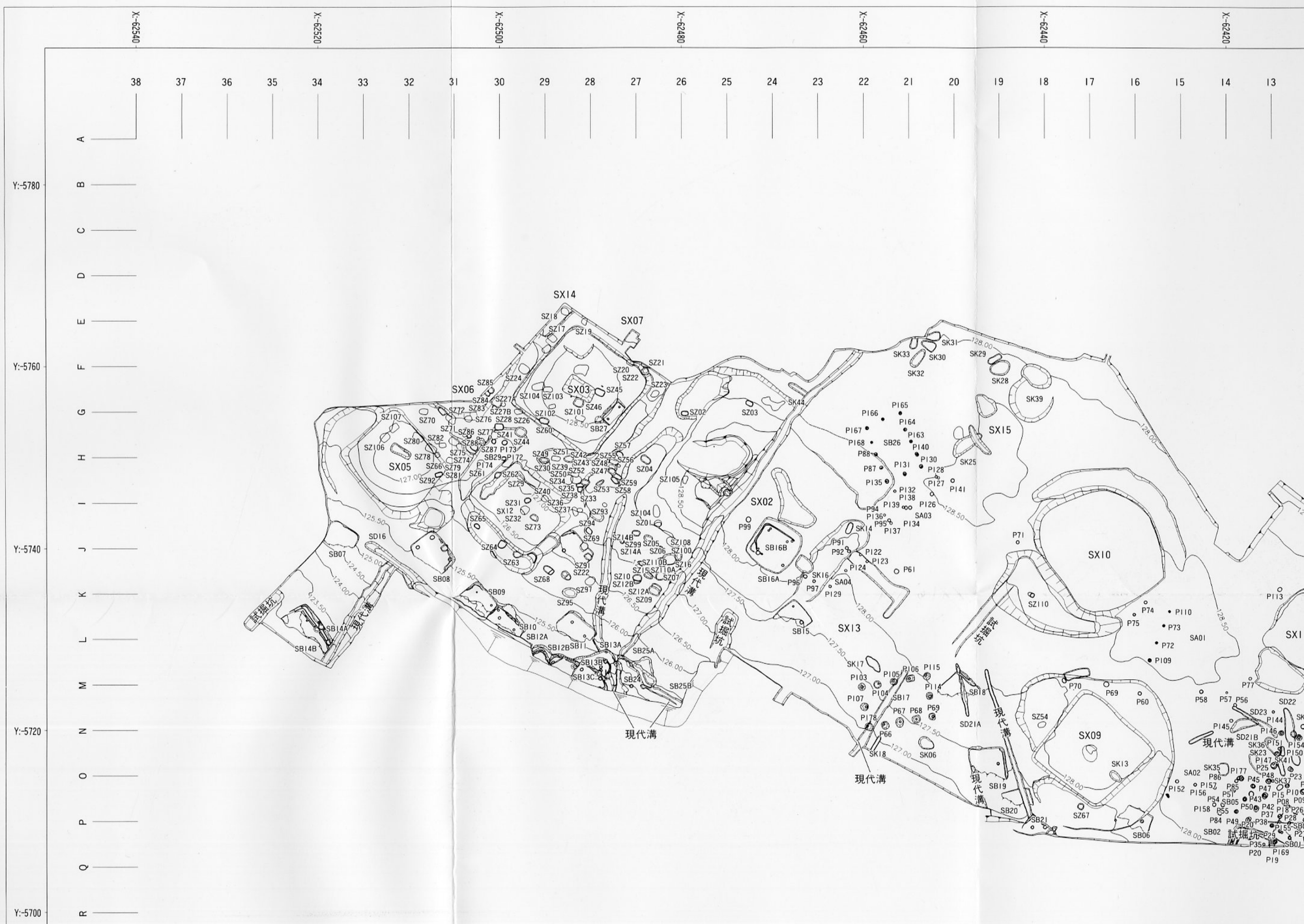
岐阜県文化財保護センター調査報告書　第78集

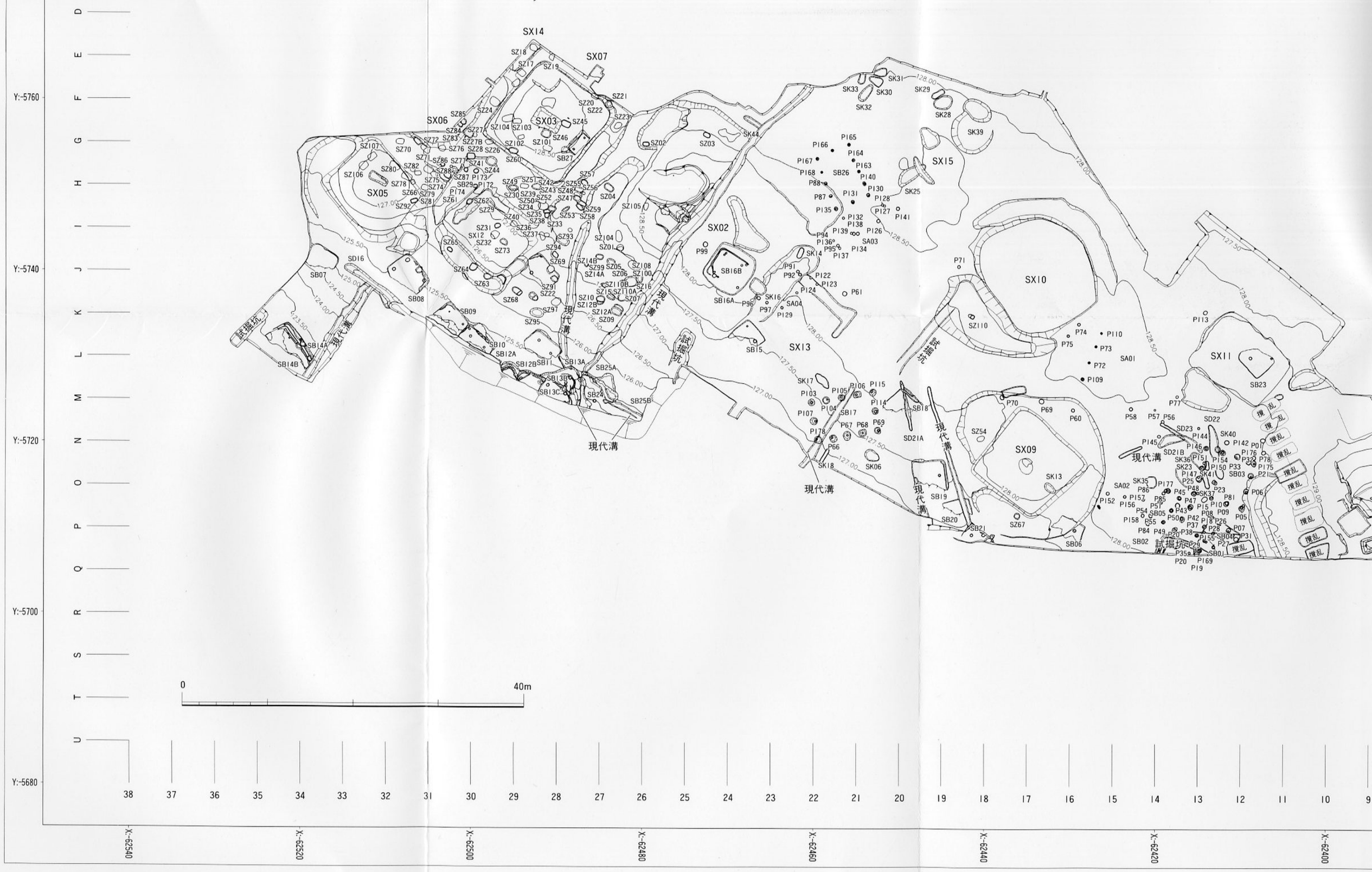
金ヶ崎遺跡・青木横穴墓

2003年３月20日

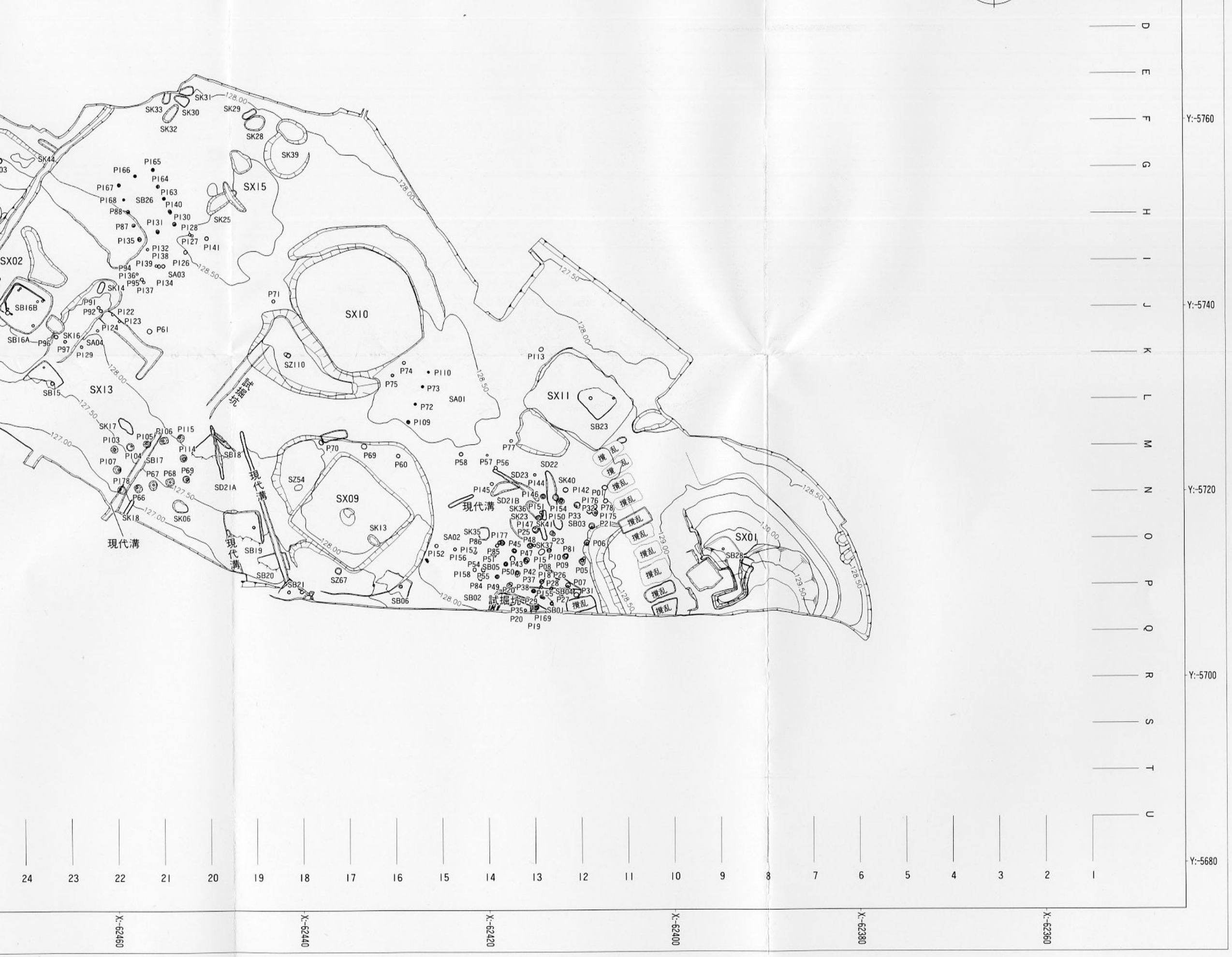
編集・発行　財団法人　岐阜県文化財保護センター
岐阜県岐阜市三田洞東１－26－１
印　　刷　舟　橋　印　刷　株　式　会　社


X:-62500
X:-62480
X:-62460
X:-62440
X:-62420
X:-62400
X:-62380
X:-62360
Y:-5780
Y:-5760
Y:-5740
Y:-5720
Y:-5700
N
SX01
SX02
SX03
SX06
SX07
SX09
SX10
SX11
SX13
SX14
SX15
現代溝
試掘坑
撹乱
40m


X:-62540
X:-62520
X:-62500
X:-62480
X:-62460
X:-62440
X:-62420
Y:-5780
Y:-5760
Y:-5740
Y:-5720
Y:-5700
SX14
SX07
SX06
SX03
SX05
SX02
SX13
SX10
SX09
SX15
現代溝
試掘坑



付図一　金ヶ崎遺跡遺構配置



付図　金ヶ崎遺跡遺構配置